

自由と白式

黒牙雷真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある少年は思った。インフィニット・ストラトスの世界にガンダムの機体を持って、異世界転生を試みたいと……。そこで、少年は願掛けのように神社に行き、神様に願う。神様に願ったあと、運が悪いくことに事故に合ってしまう。しかし、次に目を覚ますと白い場所におり、神様と出会い願いがかなう。そんな、誰しもが願う異世界転生の話しである。

目次

第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	設定
264	254	244	232	218	207	188	176	159	151	144	131	117	109	94	83	74	60	50	43	36	23	4	1

第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話	
				武装設定有り	人物設定有り		武装設定有り																		
540	529	520	510	498	489	480	467	458	447	435	425	413	403	392	383	374	364	354	340	329	317	303	286	274	

第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話 第49話

機体設定有り

機体設定有り

機体設定有り

801 789 779 768 759 749 739 728 719 709 690 679 667 656 646 636 625 614 605 593 581 571 560 549

自由と白式	78
自由と白式	77
第76話	828
第75話	819
第74話	810

設定

自由と白式

名前【黒牙 雷真】

15歳（実際は18歳）

作者より。

名前が同じなのは名前が思いつかないからです。

ごめんなさい m () m

経歴

雷真は転生者であり。また過去に2年間、行方不明になっている。だが実際はあり得ないことにC・E・に來てしまい。70年〜74年まで、約4年間の間、キラ、アスランたちとモビルスーツに乗り戦うことになった。そして、元の世界に戻ると幼馴染の更識の屋敷に倒れていた。

その時に雷真の体には『IS』となった「ストライク」があったことにより、世界で二番目の男性操縦者に抜擢される

専用機【GAT-X 105 ストライク】

待機状態 羽の首飾り

【特典能力】

スーパーコーディネーター

SEED覚醒

ガンダムの復元（どんな機体も作ることができる）

【趣味】

機械弄り : VRゲームを簡単に作れるほど

(キラとアスランの影響)

海と青空の観察 (キラの影響)

データのハッキング (キラの影響)

ピアノ (ラクスの影響)

【ヒロイン】

更識刀奈 (婚約者)

更識簪

シャルロット・デュノア

専用機

【GAT-X 105 ストライク】

装備は原作通り

【バックパック】

エール、ソード、ランチャー、マルチプル、I W S P、オオトリ

【性能】

フェイズシフト装甲

~~~~~

更識刀奈

15歳 (簪とは双子の姉)

雷真とは幼馴染で、過去に簪と誘拐された時に雷真の手によって救出される。それにより刀奈は雷真にベタ惚れ。自ら、両親に雷真と結



婚すると告げ、雷真と婚約関係になる。だがある日、雷真が行方不明になるとシヨックにより部屋に引きこもってしまう。簪によりなんとか改善する。

それから二年後、雷真が屋敷に倒れており、泣きながら帰ってきたことを喜んだ。

そして、雷真がISを持っていることを知ったことにより、雷真もIS学園に連れていくことにする

また、まだ『楯無』を襲名していない

~~~~~

更識簪

15歳（刀奈とは双子の妹）

過去に刀奈と共に誘拐されてしまう。しかし、雷真によって救出される。それにより、簪は雷真に惚れるが、内気な生活なため雷真に告白できずに姉が雷真と婚約関係になってしまう。けれど姉の刀奈は簪と二人で雷真に奥さんに成る気満々だということを知らない。

~~~~~

シャルロット・デュノア

15歳

フランス代表候補生として日本のIS学園に編入、そして男性操縦者である、一夏と雷真のデータを入手しようとするが雷真にバレてしまい、自分のことを全て話す。

フランスのやり方に激怒した雷真はフランスのネットにハッキングをし、シャルロットを救う

これにより、シャルロットも雷真に惚れてしまう。

## 第1話

誰か声が聞こえる、辺りは真っ暗なのに……。

『卑怯だ、あなたたちは！　そして、この艦にはMSモビルスーツはあれしもなく  
て、今扱えるのは僕と彼だけだって言うんでしょ!!』

『気持ちだけで……　いったい何が守れるっていうんだっ!!』

『僕は……僕は……！　殺したくなんかないのにイイイ!』

『力だけが僕の全てじゃない!』

今度は違う声が聞こえる。

『言ったはずだぞ！　戦争に明確な終わりのルールなどないと!!』

『戦うしかなかるう！　お互いに敵である限り！　どちらが滅びるまで  
なア!!』

まただ、今度違う人の声だ……。

『なんでこんなことを……。　また戦争がしたいのか、あんた達は!?!』

『どうしてこんな事を……。　そんなに殺したいのか!?!』

『アンタは俺が撃つ、今日……。　ここで!!』

雷真「ん、ん。　今の夢の声は確か……」

俺は今さつき見ていた夢の声が昔の戦友たちの声に似ていたこと  
で考えていた。　すると……。

??? 「雷真、起きてる？　入るわよ？」

雷真「おい、刀奈。俺が返事をする前に部屋に入ってくるな」

刀奈「今さら何を言ってるのよ。それに簪ちゃんの美味しい朝ごはんが待ってるわよ」

雷真「今日は簪の当番か……」

刀奈「そうよ。だから早く制服に着替えて朝ごはんを食べるわよ」

雷真「へーい」

そう返事をするとう刀奈は部屋を出ていき下に降りる。

雷真「もう、あれから半年か……」

そう、俺は過去に行方不明と言うより異世界転移をしたらしく、こつちでは俺は二年間も行方不明になっていたらしい。実際のところ俺は、戦争のある世界でデカイロボットに乗って四年間も戦っていたのだ。

雷真「よし、行きますか」

俺はとある学園の制服に着替えて刀奈とその双子の妹の簪がいるリビングに向かう。

「いただきます！」

三人でごはん前の挨拶をして、簪特製の朝食を食べる。

刀奈「ああ、そうそう。雷真」

雷真「ん、なんだ刀奈？」

刀奈「アナタのIS学園への入学はイレギュラーだから、最初に職員室に来てほしいって担当の人から通知が来てるわよ？」

雷真「はあ？俺、それ知らないんだけど？」

簪「だって雷真……部屋に籠って機械を弄ってたじゃん」

雷真「いや簪、あれはパソコンの調子が悪くてだな……」

刀奈「そんなことは、どうでもいいから。私はちゃんと伝えたわよ」

雷真「わかったよ……」

刀奈「それと、綺麗な先生に手を出したらわかってるわよね？」ク  
ロイエガオ

雷真「わ、わかってるから。そんな目をしないでくれよ刀奈……」ダ  
ラダラ

「ご馳走さまでした！」

俺たちは朝食を食べ終わったあと、それぞれの食器を流しに持っていき洗ってから、最後の準備をして、玄関に向かう。

更識父「ああ、雷真君。ちょっと待ってくれ」

雷真「なんですかお義父さん」

俺は刀奈と婚約しているので現当主の楯無さんは、俺の義理の父親になる。

更識父「何、刀奈と簪のことを頼んだよ、と言いたかっただけだよ」

雷真「わかってます」

「それじゃあ、行ってきます！」

更識父「気をつけて行ってくるんだよ」

俺たちはお義父さんに見送られ、玄関を出るとすぐにあるバトルが勃発した。

刀奈「さあ、簪ちゃん。今回もやるわよ」

簪「うん。今回は負けないよ、お姉ちゃん」

「最初は、グー、ジャンケン、ポン！」

刀奈「やったー、またお姉ちゃんの勝ち！」  
簪「また負けた……」

二人は俺のバイクの後部座席をかけた勝負をしていたみたいだ。

雷真「ドンマイ、簪。また今度、乗つけてやるから、な？」

簪「うん……」

刀奈「あつ、ズルい！私も私もー!!」

雷真「わかったから、わかったから、それよかホレ！」

俺は刀奈にバイクのヘルメットを投げ渡した。

刀奈「ありがとう、雷真」

それを受け取った刀奈はヘルメットをかぶり、バイクの後部座席に座る。

雷真「それじゃ、簪。先に行ってるからな？」

簪「うん、私もすぐに行くから」

雷真「了解。刀奈、しっかりと掴まってるよ？」

刀奈「わかったわ」

俺は自分のバイクである。【ビートチェイサー2000】のエンジンを入れて、IS学園に向かう。それと俺のバイクが何故、ビートチェイサーなのかは、子供のころに借りて見た、仮面ライダーのアニメのバイクで一番こいつがカッコいいからである、また子供のころにお義父さんにねだったらそれを複製させるのと改造で約三年かけて作ってくれたらしい。マジで感謝しても仕切れないぜ……。

雷真「着いたぞ、刀奈」

刀奈「ありがとう、雷真。私は先に行ってるから、また後でね」

雷真「ああ、また後でな。(早く、俺も職員室に行こう。周りの女子から見られてるし)」

俺は刀奈をバイクから降ろして、とつと職員室に向かうことにした。

雷真「失礼します。今回、二人目の男性IS操縦者になった。黒牙雷真です。担当の方はいらっしゃいますか？」

俺が職員室の中でそう尋ねると一人の女性が俺の前にきた。

???「その担当者は私だ。名前は織斑千冬。お前の担任だ」

へえ、織斑先生ね。……って、ええええ!!

あの最強のブリュンヒルデ!?それにこの人の立ち位置は……

雷真「織斑先生。失礼ですが、過去に軍か何かにいましたか？」

千冬「ああ、一年ほどドイツにな。それにしても、よくわかったな」

雷真「いえ、ただ軍人独特の立ち位置と立ち方をしていたので」

千冬「ほう、黒牙の両親は軍人なのか？」

雷真「いえ、自分の両親は、自分が3歳のころに自分を捨てて消息を断ったので……」

千冬「すまない。辛い話をさせた」

雷真「大丈夫です。今は新しい家族と婚約者もいますから」

千冬「そうか。それと私も弟とともに実の両親に捨てられた人間だ」

雷真「そうですか……」

千冬「それでは、教室に向かうぞ」

雷真「は、はい!」

それからは、織斑先生に付いていき教室前になると。

千冬「お前は少しここで待っている、私が呼んだら入ってこい」  
雷真「わかりました」

俺の返事を聞いた織斑先生は教室に入っていくと

もう一人の男性IS操縦者が自己紹介をしている最中らしい。それとここからでも聞こえるが多分、黒板の近くにいる女性が副担任の先生だ。

??? 「織斑一夏です。よろしくお願いします。以上です」

すると女子たちは何かを期待してたのかズツコける音がこちらまで聞こえた。

一夏「えっ？駄目でした？」

織斑とか言う男子が残念な自己紹介をしたら織斑先生がそいつに拳骨をおとした。

一夏「痛ってえええ、げっ！千冬姉！」

織斑が先生をそう呼ぶとまた拳骨が降りおりた。

千冬「学校では織斑先生だ」

山田「先生、もう会議は終わられたんですか？」

千冬「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて悪かったな」

千冬「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ」

織斑先生がクラスの中で、そう自己紹介をすると

女子たちの黄色い歓声が響く。

女子「「キヤアアアア!!」」

女子「千冬様、本物の千冬様よ!!」

女子「私、お姉様に憧れて、この学園に来たんです。北九州から」

俺は教室の外から、こう思った。

雷真「……。(おい、マジか……。こいつらはISが兵器だと言うことを理解しているのか?)」

千冬「はあく、よくもまあ毎年、これだけバカどもが集まることだ。私のところだけに集まるようにしているのか?」

女子「千冬様、私をもっと叱って罵って!」

女子「時には優しくして!」

最後の女子の話を聞いて……………。

雷真「変態しか、ここにはいないのかよ?」

千冬「で、まともに挨拶も満足に出来んのか、お前は?」

一夏「いや、千冬姉、俺は……」

織斑が先生のことを千冬姉と呼ぶと、また凄い音が聞こえてきた。

雷真「やはり、姉弟か」

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「はい、織斑先生……」

千冬「あつ、それともう一人、このクラスに男子が入る」

みんな「えええええ!!」

千冬「入ってこい!」

俺は呼ばれたので教室に入り自己紹介をする、



雷真「え、黒牙雷真です。趣味は機械弄りと青空と海の観察、他には多少ですがピアノができます。それと、その更識刀奈さんと自分は婚約しています。三年間、よろしく」

千冬「多少いらない部分もあつたが自己紹介とは、ああやってするものだ。わかつたな、織斑」

一夏「は、はい」

千冬「それでは、これから授業を始めます」

それから山田先生が主体の授業が始まった。

山田「皆さんも知っている通り、ISの正式名称は『インフィニット・ストラトス』、日本で開発されたマルチフォームスーツです。10年前に開発された。当初は宇宙空間での活動が想定されていましたが、現在は停滞中です。アラスカ条約によって軍事利用は禁止されているので、今ではもっぱら競技種目、スポーツとして利用されていますね。そして、このIS学園は世界で唯一のIS操縦者育成を目的とした教育機関です。」

山田「世界中から大勢の生徒が集まって操縦者になるために日々努力しています。様々な国の若者たちが自分たちの技術向上をさせようとしているんです。では、今日から三年間、しっかりと勉強をしましょうね」

「「「はい」」」

雷真「俺はただ、のんびりとした戦争の無い世界であれば構わないよ」ボソッ

休み時間になると、やはりと言うべきか周りが五月蠅いのである。なので、俺はスマホでメモテフをやっていた。すると織斑がこちらにやってきた。

一夏「なあ、黒牙。お互いにこの学園で数少ない男子同士だから仲

良くしてくれないか？」

雷真「いいいぜ。それと俺は雷真で構わない。代わりに一夏と呼ばせてもらう」

一夏「ああ。よろしくな雷真」

雷真「ああ、よろしくな一夏」

俺と一夏は互いに握手をした。それを見ていたのか一人の女子がこちらに寄ってきた。

???「すまない、一夏を借りていいか？」

雷真「えっ？一夏、こちらさんは？」

一夏「ああ、俺の幼馴染で篠ノ之箒だ」

雷真「そうか、俺は黒牙雷真だ。よろしくな篠ノ之」

箒「箒でいい。名字で呼ばれるのは、あまり好かないんだ」

雷真「そうだな、姉がISの産みの親でも、妹のお前さんには関係ないもんな。よし、わかった箒。俺も雷真で構わないぜ」

箒「そうか、ならそう呼ばせてもらう」

雷真「ああ、よろしくな箒」

俺は箒と握手する。

雷真「それと一夏に用があるんだろ？」

箒「ああ、一夏、付いてきてくれ」

一夏「わかった。雷真、また後でな」

雷真「おう、また後でな」

俺は一夏に手を振り見送る。

???「ライライは相変わらず、すぐに友達をつくるね。それも男女構わず」

???「本当にね」

雷真「そうか？俺はそんなこと考えたこともないぞ？本音、刀奈」  
刀奈「そうよ。行方不明からたつた半年で足らずで友達とか普通は  
できないわよ」

本音「まあ、ライライだからね」

雷真「おい、本音。それは褒め言葉なのか？」

本音「誉めてるよ」

本音「一応は」ボソツ

雷真「本音、最後の言葉は聞こえてるからな。お前のお菓子を簪に  
頼んで没収してもいいし。俺の手作りお菓子を無くしてもいいんだ  
ぞ？」

本音「そんな殺生なく！」

雷真「そろそろ次の授業が始まるぞ、戻れ」

二限の授業が始まると一夏は、なんか頭を抱えていた。

山田「では、ここまでで質問がある人？」

一夏「……………」

雷真「大丈夫か？一夏の奴」

山田「織斑君、何かありますか？」

一夏「グアツ!!え、えつと……………」

山田「質問があつたら聞いてくださいね、何せ私先生ですから」ニ  
コ

すると一夏は手をあげた。

一夏「先生……………」

山田「はい、織斑君」

一夏「ほとんど全部わかりません」

山田「えっ、全部ですか……………」

山田先生は一夏の言葉を聞いて困惑していた。

山田「今の段階でわからないっていう人はどのくらい居ますか？」

俺も含めて誰も手をあげない。

千冬「黒牙、お前は理解しているのか？」

黒牙「多少はわかりませんが、今のところは配布された参考本に載っていたので理解できています。また刀奈さんに手伝ってもらい。

3日で半分暗記しました」

千冬「そうか、わかった。織斑、入学前の参考書は読んだか？」

一夏「え、あつ！あの分厚いやつですか？」

千冬「そうだ。必読と書いてあつたはずだが」

一夏「あ……間違えて捨てました」

一夏がそう答えると織斑先生は手に持っていた。

出席簿で顔面をぶつ叩いた。

千冬「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ」

雷真「一週間も猶予を与えるなんて、織斑先生は優しいな」

雷真の考えはコーディネイターたちによって変化しているため異常である。

一夏「いや、一週間であの厚さはちよつと……」

千冬「やれと言っている。それと黒牙、貴様の中では私は何日間猶予を与えると思っていた」

雷真「はい、最低でも1日、長くても4日です」

千冬「貴様はそれができるのか？」

雷真「暗記をするに関しては1日あれば」

千冬「更識、こいつが言っているのは本当か？」

刀奈「それが事実なので、私も困っています」

千冬「そうか」

それなら滞りなく授業は進み休み時間になる。

雷真「一夏、大丈夫か？特に頭」

一夏「大丈夫じゃ……ない」

雷真「だろうな」

???「ちよつとよろしくて？」

一夏「あ？」

雷真「ん？」

???「まー！何ですの、そのお返事！私に話かけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

一夏「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

雷真「同じく、なんせ行方不明からまだ半年しか経ってないんでね」

一夏「えつ、雷真、お前、行方不明になってたのか!？」

雷真「ああ、約二年ほどな。気づいたら刀奈の家の庭に倒れてたらしいしな」

???「そちらの方は仕方ないですが。貴方はこの私セシリア・オルコットを知らない？イギリス代表候補生で、入試主席のこの私を!？」

一夏「あつ、質問いいか？」

セシリア「フンツ、下々者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。

よろしくてよ」

一夏「代表候補生ってなに？」

それを聞いた俺を含めた生徒はギャグマンガのようにズッコけた。

一夏「あ？」

セシリア「信じられませんか！日本の男性というのはこれほど知識が乏しい者なのかしら、常識ですわよ、常識」

雷真「すまない、オルコット。多分、こいつだけだと思う。それに

さつき一限の時に織斑先生から参考書を捨てて鉄拳をくらうほどだ」  
セシリア「そうでしたわね。はあ……」

一夏「で、代表候補生って?」

雷真「一夏。代表候補生とは字の如くだ。簡単に言えばオリンピック選手のIS版でエリートってことだよ」

セシリア「そう、エリートなのですわ!本来なら私のような選ばれた人間とクラスを同じくするといっただけでも奇跡、幸運なのよ。その現実をもっと理解していただける?」

一夏「そうか、それはラッキーだ」

セシリア「バカにしていますの?」

一夏「お前が幸運だって言っただんじやないか」

セシリア「それに何も知らない癖によくこの学園に入れましたわね。ただ男性でISを操縦できると聞いていましたが期待外れですわね」

一夏「俺に何か期待されても困るんだが」

セシリア「まー、でも、私は優秀ですから貴殿方のような人間にも優しくしてあげますわよ?わからないことがあれば……。まあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げててもよくなってよ?何せ、私は入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートですから!」

一夏「あれ?俺も倒したぞ教官」

セシリア「はあああ!」

一夏「倒したっていうか……。いきなり突っ込んで来たのを躲かわしたら、壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけだ」

セシリア「私だけと聞きましたわ」

一夏「女子ではってオチじやないのか?」

セシリア「貴方!貴方も教官を倒したって言うの!!」

オルコットはあまりのことに勢いよく一夏に詰め寄る

一夏「えっと……落ち着けよ、なあ?」

セシリア「こ、これが落ち着いてなんていられま……」

オルコットが言い切る前にチャイムが鳴った。

セシリア「話しの続きは、また改めて。よろしいですね」

とオルコットは一夏に指差しをしてから自分の席に戻っていった。

雷真「途中から空気になってたな……俺」

それから授業は終わり、俺はこの学園でどこか落ち着ける場所を探していると屋上にきていた。

雷真「これくらいなら登れそうだな」

俺はすこし助走をつけて屋上への入り口の上に登り寝転がる。

雷真「風が気持ちいいなあ」

俺はその気持ち良さに、うつらうつらしているとケータイが震えたためケータイを確認すると刀奈からメールだ。

『雷真へ』

今どこにいるの？山田先生から雷真の部屋のこと説明を代わりに受けたから、○○○○室に来なさい。そこで簡単に説明するから。

刀奈より』

雷真「なんか呼ばれたし行くか」

すぐに屋上の入り口から飛び降りて刀奈のいる学生寮の指定された部屋に向かう。

雷真「おっ、刀奈。着いたから開けてくれ」

俺が部屋の前でそう叫ぶがドアが開く気配がない。

雷真「はあ……、またあれをやる気が……。仕方がない。刀奈、勝手にはいるぞ！」

俺は部屋のドアを開け中に入ると……。

刀奈「わたしにします？わたしにします？それともわ・た・し？」

雷真「いいから服を着ろい!!」

俺は部屋の前で上着を脱いでから部屋に入ったので裸エプロンならぬ下着エプロンをしているであろうバカに上着を投げ付ける。

刀奈「きゃっ?!いきなり何をするのよ!」

雷真「アホか!お前は、そんな格好で何をしてんだよ!!」

刀奈「ナニなんて、雷真のエッチ♥?」

雷真「あゝあゝあゝあゝ!!そうじゃなくて、そんな格好を一夏に見られたらどうすんだよ!!」

刀奈「ああ、それなら大丈夫よ。なんせ彼の部屋は私と貴方の相部屋から離れているもの」

雷真「そうか……。ん?今、聞き捨てならないことを聞いたが?」

刀奈「あつ、そうそう山田先生から私と雷真でこの部屋を使うようにだって」

雷真「普通は俺と一夏が相部屋じゃないのか?」

刀奈「元々、二人ともイレギュラーだから部屋割りが決まっていなかった雷真は生徒会長権限で私のルームメイトにしたのよ」

雷真「話は理解した。それと、早々に生徒会長になったのかよ」

刀奈「えっへん!」

刀奈は扇子を出して口元を隠しながら、バツと開くと扇子には『強



「鞆！無敵！最強！」と書かれていた。

おい。お前はどこぞの社長か？刀奈よ……。

雷真「とりあえずは服を着ろ、それから簪に本音、あと虚を呼んで飯にしようぜ」

刀奈「そうね、入学祝いだからパーティーでもしましょうか」

雷真「そうだな」

それから俺たちは簪、本音、虚と合流して夕食を食べて各自の部屋に戻ったのだが、なにやら一夏と箒の様子が険悪ムードであった。



翌日の授業になると……。

千冬「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、まあクラス主と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

それを聞いた女子たちは……。

女子1「はい、織斑君を推薦します」

女子2「私もそれがいいと思います」

一夏「え!!」

女子3「なら私は黒牙君を推薦します」

女子4「私も」

雷真「はあく、また厄介なことに巻き込まれた」

千冬「他にはいないのか？ いないなら織斑と黒牙の内の一人に絞るが？」

一夏「ちよ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやら「納得がいきませんわ！」……」

セシリア「そのような選出に認められません！ 男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！ この、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間も味わえと、そうおっしゃるのですか？ だいたい、文化として後進的な国で暮らさなければならぬことじたい、私にとつては耐え難い苦痛で」

一夏「イギリスだつてたいしたお国自慢ないだろ！ 世界一不味い料理で何年覇者だよ！」

セシリア「フンツ、美味しい料理は沢山ありますわ！ 貴方、私の祖国を侮辱しますの！」

雷真「お前等、すこし落ち着けよ」

一夏「雷真……」

セシリア「貴方……」

雷真「今回は互いに悪い。こんな子供みたいなケンカをして、二人は高校生になつても恥ずかしくないのかよ？」

一夏「くっ！」

セシリア「五月蠅いですわ！ 貴方のようにその女とヘラヘラとこの学園にいることすら腹立たしいのに！」

オルコットは刀奈を指で示しながら言い切った。

その時、俺の頭の中でスイッチが入った気がした

雷真「ふざけるのもいい加減にしやがれ小娘が。お前はイギリス代表候補だったな」

セシリア「それがなんですか？」

雷真「さっきの発言を全てボイスレコーダーに録音してある。それをイギリス政府と日本政府に渡したらどうなるんだらうな？」

セシリア「貴方、何を……」

雷真「まあ、100%代表候補からの除名だな。それと悪く行けば、イギリスと日本の戦争だな、こりゃ」

それを聞いたオルコットは顔が青ざめる。

雷真「さあ、どうする？セシリア・オルコット」

それを聞いたオルコットは頭にきたのか、こう発言した。

セシリア「決闘ですわ!」

一夏「ああ、いいぜ四の五の言うよりはいいぜ!」

雷真「いいだろ。オルコット、お前に戦争の恐怖を教えてやるよ」

セシリア「わざと負けたりしたら私の小間使い。いえ、奴隷にしますわよ」

一夏「ハンデはどのくらいつける?」

セシリア「は?あら、さっそくお願いかしら?」

一夏「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかな」と

それを聞いた、刀奈と本音と箒以外の女子が笑いはじめる。

女子「男が女より強かったのはISができる前の話だよ」

雷真「そんなにおかしいか?」

女子「え?」

雷真「だってそうだろ、今はもう女子だけじゃない。現に俺と一夏がISを使えるのがいい例だ。それにISの絶対防衛は、あれは完全に全てを防げる訳じゃないぞ。対物ライフルや核なんかだったら数発撃ってシールドエネルギーを完全に削り切れば操縦者は確実に死ぬぞ?他にはISが起動する前に操縦者を殺せばいいだけの話だ?間違っていないだろ?」

女子「それは……」

女子はそれを聞いて何も言えなくなった。そんな中、オルコットが口を開く。

セシリア「むしろ、私がハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ？」

雷真「俺はいらない。なんせ戦争で敵に情けをかければ、こちらが命取りだ」

一夏「俺もなくていい」

千冬「話は纏まったな。それでは、勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑、黒牙、オルコットはそれぞれ準備をしておくように」

こうして、俺のこっちでの初戦闘が決まった。

## 第2話

オルコットの決闘宣言から数日が経ち、決闘当日になった。現在、俺たちはオルコットと決闘するため第三アリーナに来ている。

一夏「なあ箒」

箒「なんだ？」

一夏「ISのことを教えてくれる……って話しだったよな？」

箒「プイツ

一夏「なっ！目を逸らすな！一週間、剣道の稽古しかなかったじゃないか」

一夏は箒にISのことを教えてもらうつもりだったのだが結局、剣道の鍛練しかしていなかったようだ。

箒「し、仕方がないだろう！お前のISはまだ届いていないのだから」

一夏「ISの知識とか基本的なことかあるだろう」

雷真「なあ、一夏。箒だけに頼ったお前も悪いだろう」

一夏「なんで？」

雷真「休み時間とか箒以外に聞くとかしろよ」

一夏「言われてみれば……。クソオオオ！過去の俺を殴ってやりた  
い」

一夏が自分の不甲斐なさを叫ぶとモニターに映像が映し出される。

一夏「あれがアイツの専用機か？」

と呑気に言っている。

真耶『織斑くん、織斑くん、織斑くん！』

山田先生から三回も名前を呼ばれる。

一夏「ッ!?!」

真耶『来ました！織斑くんの専用IS』

千冬『織斑、直ぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番で物にしろ』

織斑先生からの通信が切れると待機所にあるシャツターの一つが開く。そこから銀色のワードスーツのような物が現れた。

真耶『これが織斑くんの専用IS、白式です!』

千冬『直ぐに装着しろ、時間がない。そして、黒牙は第三待機所に行け、そこには更識姉妹がいるはずだ』

雷真「刀奈たちが？わかりました」

俺は第一待機所を出る前に一夏に一声かける。

雷真「一夏」

一夏「なんだ、雷真?」

雷真「必ず勝てよ」

一夏「ああ!」

一夏の返事を聞いて俺は第三者待機所に向かう。すると、道中で虚さんと本音に出会う。

虚「雷真くん、こっちです」

本音「ライライ、こっちだよ」

雷真「虚さんに本音、道案内サンキュー」

虚「中でお嬢様方がお待ちです」

雷真「わかりました」

俺は二人と共に第三者待機所に入ると中には刀奈と簪がテーブルの前で待つていた。

雷真「悪い、待たせた」

刀奈「いいわよ。男の子の友情ってやつでしょ?」

雷真「ああ。それで、俺の機体なんだが……」

刀奈「それについてはここにあるわ」

刀奈は右手をテーブルの上にあるアタッシュケースの上に置いた。だが、そのアタッシュケースは普通のとは違い、横にアタッシュケースを開ける留め金のようなものがない。

雷真「そのアタッシュケースの中に俺の機体があるのか?」

刀奈「ええ。ただし、このISは私たち更識の力を持っても解析が出来なかったの」

雷真「それはどういう意味だ?」

刀奈「とりあえず今は時間が無いからケースを開けるわ、簪ちゃん」

簪「うん、お姉ちゃん」

二人は首から掛けていた鍵のようなもの取り出す。その二本の鍵は金銀に別れていた。

雷真「何処かで似たような光景を見たような……」

刀奈「簪ちゃん、準備はいい?」

簪「いいよ」

鍵を挿して互いに息を合わせる。

刀奈「それじゃ、3、2、1、今！」

そして、刀奈の合図で鍵を回す。するとアタツシユケースはカシユツという音をたてながらケースを開き始め中から白い煙が床に溢れていく。

煙が止むとそこには白い翼を型通った首飾りがあった。

くBGM：翔べ！フリーダムく

刀奈「これがアナタのISよ、雷真」

雷真「これが俺の……」

刀奈「これはアナタが行方不明から帰って来た時にアナタの側にあったの」

雷真「えっ!？」

刀奈「そして、この首飾りからIS反応があつて調べただけど、ロックが掛かかっていて全然情報が得られなかったの」

雷真「そうか……。取り敢えず、触れてみるわ」

刀奈「ええ」

俺は首飾りに近づいて首飾りに触れると……。

雷真「まぶっ!？」

簪「きやつ!!」

刀奈「何よ!？」

虚「お嬢様方!？」

本音「前が見えないよく」



眩い光が視界を埋めつくし、光が止むとそこには……。……。……。コスミックラ・イラでキラと交代で乗った、GAT-X105ストライクが存在していた。

雷真「す、ストライク!?なんで、こいつが……」

ストライクが何故、こちら側の世界にあるのかを疑問に思っていると……。

『音声認識システム起動。クロキバ・ライシンの音声をキャッチ。録音テープ1を再生します』

雷真「録音テープって……」

俺はストライクがあることに困惑している中、勝手に録音テープが流れるシステムが言った。

???『よう、坊主。これが流れてるってことは無事に元の世界に帰れたようだな』

雷真「この声は……。……。フラガ、一佐!?!」

ムウ『お前は何故、ストライクがそこにあるのか疑問に思ってるだろう?その答えは神様からの予言だ』

雷真「はああああ!?!」

ムウ『何でもお前さん、また戦いの道を進むらしいな?だから、俺たち、アークエンジェルのクルーからの餞別だ。上手く使えよな?つつてもお前は俺よりもそいつを上手く動かせるもんな』

雷真「色々とありすぎて何がなにやら」

ムウ『最後にもう一人、お前に激励してくれる奴がいるからな。それじゃあな、死ぬなよ、クロキバ・ライシン中尉』

システム『音声テープ1を終了。続いて、音声テープ2を再生します』

雷真「次は誰だ？」

???『やあ、ライシン。元気かい？』

雷真「この声は間違いない、キラ！」

キラ『このテープが流れてるってことは、やっぱり君の世界でも争いは絶えないんだね』

雷真「そうだな……」

キラ『けれど、争いは他の花まで散らしてしまう。だから、それを防ぐために、君にこの機体を送るよ。そして、この言葉も……【思いだけでも、力だけでも】とね』

雷真「思いだけでも、力だけでも……」

キラ『本当はもっと話していたいけど、時間がないから、これが最後だ。君に会えて、僕は本当に嬉しかったよ、親友』

雷真「そんなの俺だって同じに決まってるだろう、親友」ポロポロ

システム『音声テープ全ての再生が終了しました』

戦友たちの声を久しぶりに聞いて感動のあまり涙が流れていることを気づいていない俺は刀奈に心配を掛けていたようだ。

刀奈「雷真……………大丈夫？」

雷真「ああ、久しぶりに戦友と話しができたからな。それに一層、負けられない理由ができた」

そうして、俺は新たな闘志を燃やし、ストライクに乗り、システムを起動させると…………。

W e l c o m e t o M , O , S  
G e n e r a l  
U n i l a t e r a l  
N e u r o | L i n k  
D i s p e r s i v e  
A u t o n o m i c  
M a n e u v e r

と表示された。

雷真「OSは……………。(確か、キラは初めてストライクに乗った時、OSが無茶苦茶で死ぬ思いをしたって言ってたな)」

システムを起動し、OSを調べて行く。

雷真「おいおい、何だよこの出鱈目なOSの作りは!?!こりゃ、キラだって戦闘時にOSを書き換えてれば死ぬ思いをするはずだ」

雷真「時間がない！」

俺はホロウウィンドウを出現させて、高速でタイプして行く。

雷真「キャリブレーション取りつつゼロ・モーメント・ポイントおよびCPGを再設定。クソッ！なら擬似皮質の分子イオンポンプに制御モジュール直結、ニューラルリング・ゲージ・ネットワーク再構築。てかマジで、キラはこんなOSを戦闘時に書き換えたのか？本当、恐れいるぜ！ったく」

雷真「次、メタ運動野パラメータ更新、フィードフォワード制御再起動、伝達関数コリオリ偏差修正。運動ルーチン接続、システムオンライン、ブートストラップ起動!!」

雷真「これで、終わり！」

最後のタイプを終えて、念のために再度システムの設定を確認する。



私たちは雷真にアタッチケースの中身を渡すと突然光りだし、待機所にはなかったはずの見たこともないISがそこにはあった。

雷真「す、ストライク!?なんで、こいつが……」

雷真は見たこともないISについて知っているようだけれど、次の瞬間。機械音声がなり、雷真の音声をキャッチしたことにより録音音

声テープが再生されていく。

それを聞いた雷真は目から涙を流していた。

刀奈「雷真……大丈夫？」

雷真「ああ、久しぶりに戦友と話ができたらな」

それから雷真はストライクというISに乗り込み高速でホロウウインドウをタイプしていく。

簪「は、早い……」

そう雷真のタイピングは約一秒間に20文字はタイプしているのではないかとこの速度でタイプしている。

また、私たちが聞いたこともない用語を口にしながらタイプしているのだ。

刀奈「簪ちゃん、雷真が口にしてる用語分かる？」

簪「流石の私でも分からない」

刀奈「雷真、アナタはあの二年間で何があったの……」

私は雷真が行方不明になった二年間のことを聞かされていない。私が聞いても、まだ決心がついていないから待っていてくれと言われるだけ……。

私に本当のことを言ってくれないことが悲しい。



雷真「ふうく、一通り確認は終わったな」

30分ほど、ストライクのOSやらを調べて行くと、なんとOS設定以外は第二次ヤキンドウエ攻防戦までの戦闘データとセカンドステージまでのザフト、連合、オーブの三軍のMSモビルスーツならびにMAモビルアーマーの情報も入っていた。

雷真「OS以外はまんま、あの時のストライクかよ」

刀奈「雷真、調子はどう？」

雷真「問題ない。セッティングも終わったから一度解除するわ」

ストライクに『解除』と念じ、ストライクを待機状態に戻す。

雷真「よし。ところで一夏の方は？」

本音「おりむく、苦戦してるみたい」

雷真「そうか……」

モニターを見ていると一夏の機体がさつき見た時と少し違う姿に変わっていた。

雷真「あれは白式なのか？」

簪「多分、フィッティング初期化からフアー・スト・シフト一次移行したんだと思う」

雷真「へえく」

簪から一夏が乗る機体の変化の説明を受けてから少し経つと………一夏は刀の刀身からビームのようなものを出し、オルコットに切りかかるが……。

『白式、シールドエネルギー empty。勝者、セシリア・オルコット』

雷真「あのバカ、武装の特性を理解しないで使いやがって」

本音「ライライ、なんで、おりむくは負けたの?」

雷真「あれは、一夏の機体にある単一仕様能力である零落白夜の所為だろうな。それを発動するとSEを犠牲に相手のSEを無効化するんだよ」

簪「なんで、雷真は知ってるの?」

雷真「それは前に織斑先生がモンド・グロツソに出ていた頃の記事を読み漁ったからな」

刀奈「へえく、そんなこともしてたんだ」

雷真「まあな」

三人に一夏の敗因を説明した後、織斑先生から通信が来る。

千冬『黒牙、約15分後にオルコツトとの試合だ。準備はいいな?』

雷真「もちろんです」

千冬『わかった。それとそこに居る四人、その内の誰かが黒牙の出撃準備のアナウンスをしてやれ』

刀奈「雷真、誰にするの?」

雷真「そうだな……。簪、頼めるか?」

簪「えっ、私!?!」

雷真「そう。簪に頼みたい」

簪「お姉ちゃんじゃなくて私に……。わかった、やってみる!」

雷真「頼んだぜ」

簪「うん!」

簪がアナウンスを務めることになり、オルコツトの準備ができるまで虚が淹れるお茶を飲みながら待つ。

千冬『黒牙、オルコットの準備が出来た、お前も準備をしろ』

雷真「了解」

俺は首に掛けている白い羽の首飾りに『起動』と念じる。すると首飾りが光りだし、俺の体にストライクを装着する。

刀奈「やっぱり、全身装甲なのね」

雷真「ああ」

簪『雷真、カタパルトに乗って』

管制棟から簪の指示が飛んでくる。

雷真「了解だ」

簪『カタパルト接続、進路クリア、システム・オールグリーン、発進タイミングを雷真に譲渡するよ』

雷真「了解」

カタパルトにストライクの足に乗つけて接続、そして頭の中であるイメージをする。それはストライクの装備である、エールストライカーを背負うイメージだ。すると、背中に確かな重み加わり……。

雷真「黒牙雷真、ストライク。行きます！」

エールストライカーのスラスタと脚部のバーニアを吹かし、カタパルトから飛び出し空を飛ぶ。

その際、ストライクの装甲である。フェイズシフトと起動させると



灰色の装甲がトリコロールカラーに染まる。

### 第3話

雷真「黒牙雷真、ストライク。行きます！」

真耶「綺麗な飛び方ですね。それに全身装甲の機体だなんて私、初めて見ました」

千冬「それだけじゃない。黒牙の奴、かなり場馴れしているな」

真耶「え？」

千冬「黒牙、お前は何者なんだ？」

千冬は雷真のバレルロールを観て、初心者ではないと本能で確信した。



カタパルトから出撃した俺は空を飛ぶこと、ストライクに乗っていることを懐かしく感じていた。

セシリア「お待ちしておりましたわ」

オルコットからプライベートチャンネルで通信が来たので俺はそれに応じた。

雷真「すまない、待たせたな」

セシリア「いえ。それから先日のことを深くお詫び申し上げます

わ

雷真「どういった心境の変化だ？」

セシリア「ただ、先日の私は浅はかであったと感じただけです」

雷真「その心境の変化は恋でもしたか？」

セシリア「ッ!？」

雷真「凶星か。まあ、人それぞれ色々な感情がある。俺はお前のその気持ちを応援するよ」

セシリア「黒牙さん」

雷真「今のお前なら、雷真で構わない」

セシリア「なら、私のことも気軽にセシリアと」

雷真「了解した、セシリア。だが、この戦いは真剣勝負だ。殺す気で来いよ」

俺はコズミック・イラでM<sup>モビルスーツ</sup>Sに乗っていた頃の感覚を脳から思い出し意識を研ぎ澄ます。

セシリア「ッ!？」

セシリア「雷真さん、あなた……」

セシリアは俺の気配が一気に変わったことに驚いているようだが織斑先生から試合開始の合図が来る。

千冬『それでは、両者。共に準備はいいな?』

「はい!」

千冬『それでは、試合開始!』

織斑先生の合図で両者互いにスラスターを噴かせる。

セシリア「まずは私の舞踊曲ワルツを受けていただきますわ!」

セシリアはブルー・ティアーズについている4つのビット兵器を使用して四方八方から狙ってくる。それを的確に観ながら俺は最低限の動きで回避する。

セシリア「なぜ、当たりませんか!?!」

雷真「それは、狙いが単調なんだよ」

セシリア「くっ!」

雷真「次は後ろから。その次は左後ろ、右前、後ろ、下」

雷真「やっぱり、プロヴィデンスやレジエンドと比べると操作が甘いな」

雷真はセシリアのビット兵器の攻撃を先読みしながら回避する。雷真にとってはこんなお粗末なビット操作など取るに足らないものである。それもそのはず、コズミック・イラではこんな生易しい攻撃ではなく、集中力を少しでも落とせば即、死が迫ってくる。そんな命のやり取りをしたことがある彼からしたら、こんなのは遊びとなんら変わらない。

雷真「そろそろ、こっちからも行くぞ!」

雷真はスラスターを一気に噴かせながら、エールストライカーからビームサーベルを引き抜き、セシリアに突撃する。

セシリア「あまいですわ!」

突撃する雷真に対し、セシリアはビット兵器で雷真を牽制するが……。

雷真「そんなのは効かない」

某小説の黒い英雄がやったのと同じように雷真もビームサーベルでビット兵器のレーザーを切り裂いた。

これもまた、雷真はコスミック・イラでスペックが桁違いに差があるM1アストレイのカスタム機でプロヴィデンス相手にドラグーンの攻撃をビームサーベルで弾き切った経験がある雷真からしては当たり前のようにできてしまう。

セシリア「レーザーを切った!?」

雷真「そろそろ、邪魔になってきたから撃ち落とす」

雷真はビームサーベルを背中のエールストライカーに戻し、ストレージから高エネルギービームライフルを取り出して右手に持ち、ラスターのエネルギーを一度貯めてから二度噴かせ、一気に真上に向かって上昇する。

セシリア「まさか瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速!?ですが逃がしませんわよ!」

セシリアは雷真を追いかけないようにビットを操作する。しかし、セシリアは知らない、この行動が雷真の罠だということ。

雷真「いや、逃げてない。撃ち落としやすくしたんだ」

雷真は最高点に達した時、体を反転させて、真下に突撃する体制になるが、そのまま右手にあるビームライフルで四回、トリガーを引き、ビームライフルから放たれるビーム全てがビット兵器に命中し爆散、そして爆煙が巻き起こる。

セシリア「そんな、一撃で全て落とされるなんて……………」

セシリアはモニターで自分の兵器が破壊されたことを確認する。そして、直ぐに後ろからロックオンされている警告の警報が鳴る。

セシリア「うしろ!？」

雷真「チエツクメイトだ」

雷真は爆煙で姿を消し、高速でセシリアの後ろに回り、エールストライカーからランチャーastroライカーに換装して、ランチャーastroライカーの主力武装であるアグニをセシリアに向けている。

セシリア「チエツクメイト?それはどういう……」

雷真「まあ、見てろよ」

雷真はアグニをセシリアから外し、地面に向かって五割の威力で放つ。その時、アグニからは赤と白のビームが放たれる。ビームが放たれた地面は約5mくらいのクレーターができおり、またクレーターの中は黒く焦げていた。

セシリア「……………」

雷真「それでも、続ける?」

セシリア「いえ、降参ですわ……」

『セシリア・オルコットの降参により。勝者、黒牙雷真』

とアナウンスが流れる。

雷真「セシリア、お前はもっと伸びるから頑張れよ」

セシリア「はい!」

雷真「それからビット兵器を全て使うんじゃないくて二、三機で誘導しながらお前が止めを刺したほうが効率は上がるぞ」

俺はその言葉を残して待機所に戻る。



雷真がカタパルトから出てセシリアと戦う姿を観ている刀奈たちは……。

刀奈「何……あの動き」

簪「レーザーを切り裂いた……」

本音「ライライ、って本当にISを動かすの初めて？」

虚「私には、到底思えないのですが……」

刀奈たちは雷真がISの初心者だと思っているが雷真のストライクは第三世代型よりも高性能であり、また第三世代型と同じくイメージ・インターフェースが搭載されているため。コズミック・イラで培った経験はそのまま再現できるのである。

虚「あれは瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速!？」

虚は雷真がIS技術の瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速をやったことに驚いた。

簪「お姉ちゃん、雷真にあの技術を教えたの？」

刀奈「いえ、全く何にも教えてないわ。雷真に教えてあげようか尋ねたら、『実戦で覚えるからいらない』と言われたの」

本音「つて、ことは……」

虚「あれが雷真くんの才能」

簪「凄いな、雷真は」

刀奈「本当ね……」

それから、瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で最高点に達した時、雷真は体を反転させ、ビームライフルでセシリアのビット兵器を的確に破壊した時の彼女らからは声が出なかった。

刀奈「……………」

簪「……………」

本音「……………」

虚「……………」

そして、ビット兵器を破壊した雷真は爆煙で身を隠し高速でセシリアの背後を取った後に緑色のランチャーを構えてセシリアに降伏するよう促したとことに彼女らは疑問に思った。

本音「何で、ライライはセツシーに降伏するよう言ったんだろ？」

刀奈「それは直ぐに分かると思うわ」

刀奈の言葉通り、雷真はセシリアからアグニを外し地面に向かってアグニからビームを放った。ビームを放たれた地面を見て、セシリアと同様に彼女らも驚く。

刀奈「何よ、あれ」

簪「あんなの受けたら」

虚「間違いなく、SEエネルギーが全損しますね」

本音「ライライ、怖い」

ビームを見たセシリアは降伏宣言をして、雷真vsセシリアの戦いは雷真の勝利で終わった。その後、雷真はセシリアと数回会話を交わし、こちらの待機所に戻ってくる。



## 第4話

セシリアと試合で無傷のまま雷真は待機所に帰ってくるがSEの補給は必要である。なぜなら、イグニッション・ブースト瞬時加速で多少SEを使用したからだ。

刀奈「お疲れ様」

雷真「ああ、サンキュー」

刀奈は待機所に戻ってきた雷真にタオルとスポーツドリンクを渡す。

刀奈「それにしても驚いたわよ。いつ、イグニッション・ブースト瞬時加速なんて覚えたの？」

雷真「織斑先生の過去の戦闘動画を見て、さっきの試合で見よう見真似でやったらできた」

刀奈「できた、って貴方ね……」

簪「本当に雷真は昔から出鱈目だよな」

本音「そうだね、ライライはいつも人の技を見て直ぐに真似できるもんね」

刀奈「それで次は織斑くんだけど、どっちの武装で行くの？」

雷真「どっち？ああ、刀奈たちはエールとランチャーしか見たことがないのか」

簪「エール？ランチャー？」

雷真「補給しながら説明するよ」

待機状態にしたストライクをSE補給機にセットして刀奈たちにストライクの武装について説明する。

雷真「まず、最初のジェット機みたいのがエール、これは高機動型のバックパックだ。次に緑色の奴はランチャー、こいつは砲撃戦に特

化したバックパック。他にはソードがあるが、これは名前でどんなバックパックなのかは理解できるな。本当は他にもまだあるがお楽しみだ」

刀奈「3つも武装があるなんて凄いわね」

簪「アニメみたいでカッコいい！」キラキラ

刀奈は観賞深くストライカーパックのことを考えている、簪の方は……まあ、アニオタだから換装システムに目を輝かせている。

刀奈「それで次はエール、ソード、ランチャーのどれで行くの？ 織斑くんの戦いを観るからに近接のみみたいだけど」

雷真「なら、こつちも近接で行くさ。セシリアとの試合はストライクのテストを兼ねてたしな」

簪「なら、ソードで行くんだね」

雷真「ああ」

ストライクのSE補給が終わり、ストライクを起動させて、セシリアの試合前と同じようにソードのイメージを頭に浮かばせる。すると左腕と右の背中に重み加わる感触を感じ、カタパルトに足を着ける。

雷真「よし、簪。頼む」

簪『カタパルト接続、進路クリア、システム・オールグリーン、発進タイミングを雷真に譲渡するよ』

雷真「了解。黒牙雷真、ストライク。行きます！」



雷真『黒牙雷真、ストライク。行きます！』

雷真は一夏との試合をするために待機所からソードストライクで  
発進した。

真耶「黒牙くん、さっきとは別の武装ですね」

千冬「今回は近接型のようだな。オルコットの試合で最初に見せ  
たのが高機動型、また最後に見せた『緑』のやつが遠距離型と観て間  
違いないだろう」

真耶「今度は織斑くんが勝てると思いますか？」

千冬「無理だな。オルコットならまだしも、黒牙はそんな容易い奴  
じゃない。なんせ、奴は少しだけだが本気でオルコットを殺す気で  
戦っていたからな」

真耶「えっ!？」

千冬「あの『緑』の武装を出したのがいい証拠だ。あんな地面が焦  
げて燻るほどの威力だ。それをゼロ距離で撃たれたらSEなどあつ  
てないようなものだろ」

真耶「……………」

真耶は千冬からの説明で、もし本気で雷真がセシリアに向かってラ  
ンチャーのアグニを撃っていたらと想像すると顔が青くなり背中が  
凍りつくのが自分でも分かった。

千冬「一夏、お前はどうか黒牙と戦う？」



アリーナの中央で白い機体を纏う一夏とトリコロールカラーの機体を纏う雷真が対峙していた。

一夏「セシリアに負けたが雷真、お前には絶対に勝つ！」

雷真「ああ。俺も……一夏、お前と全力で戦いたい。だから、フェアナ真剣勝負をするためにお前に俺の武装を説明する」

一夏「なんでそんなことするんだ？」

雷真「だって俺はお前の武装がその手に持っている刀だけだって分かっているからだ」

一夏「そ、そうか」

雷真「いいか。まず、背中にある対艦刀のシユベルトゲベル、これは一夏の武器とあまり変わらないが単一仕様能力はない。ワンオフ・アビリティ次に左肩にビームブーメランのマイダスメツサー。他にはシールドとアンカーが複合武装になっている。セシリアの試合では使わなかったが頭部には多銃身対空機関砲もついている」

一夏「なんだよ、その武装の数!?!」

雷真「言わなかったら、一夏も不完全燃焼だろ?」

一夏「そうだな。教えてくれサンキューな、雷真」

雷真「ああ、こつからは真剣勝負だ」

一夏「おう！」

試合開始の合図が鳴る前に雷真は背中からシユベルトゲベルを抜き、ビームを出さずに一夏に近づく。一夏は雷真がやろうとしてい

ることに気が付き一夏も雷真に近づき、シユベルトゲベルと雪片式型の剣先を合わせる。そのやり取りは剣道の試合前の構えである。

千冬『両者、準備はいいな？』

「はい！」

千冬『試合開始！』

千冬の合図で両者は互いに剣を弾き、後方へステップを踏んでからスラスターを噴かせ突撃する。

雷真「ハアアアッ！」

一夏「ウオオオオッ！」

雷真はビーム刃を出さずにただの対艦刀として、一夏もワンオフ・アビリティ単一仕様能力を使わずただの刀として互いに得物をぶつけ合う。

少し鏢迫り合いになるが雷真がスラスターを噴かせて後退する。それに合わせ一夏もスラスターを噴かせ、雷真を追いかけようとするがストライクの頭部に備え付けられている、多銃身対空機関砲イーゲルシユテルンにより、妨げられてしまう。

一夏「クソッ！」

一夏は正面から突撃するのは良くないと考え、回り込むように飛行する。

雷真「流石に考えるな。なら、これだ！」

雷真はシユベルトゲベルを左手で持ち、右手で左肩にある、マイダスメツサーを引き抜き、一夏に向けて投げる。

マイダスメツサーは一夏の背中に着実に近づく。一夏はハイパーセンサーにより背後からビームブーメランが迫っていることに気が付く。

一夏「ブーメランかよ!?!」

マイダスメツサーの刀身はビーム刃が発生しており、絶対防御で受けた場合、かなりのSEが削られることは素人である一夏でも理解できた。

一夏「迫ってくるなら、落とすだけだ!」

一夏は単一仕様能力である零落白夜でマイダスメツサーを弾き、そのままスラスターを一気に噴かせて雷真に突撃する。

一夏「ウオオオオオッ!」

雷真「デヤアアッ!」

零落白夜を発動したままの一夏に対し雷真もシュベルトゲベルのビーム刃を出し、零落白夜と一騎討ちをする。

しかし、雷真はシュベルトゲベルのビーム刃を出してもSEは削られないが一夏は違う。試合が長引けば長引くほど不利になる。

一夏「チッ!(きつきのバルカンみたいなのを数発受けたからSEが……どうする!?)」

雷真「戦いの最中で考え事とはいい度胸だな」

雷真は考えことをしている一夏から少し距離を置いて。シールドと複合武器になっている、パンツァーアイゼンを白式の足に巻き付け、一夏を投げ返し、その勢いを利用して上空へと投げ飛ばす。

一夏「うわああああ!!」  
雷真「これで終わりだ」

投げ飛ばされた一夏に雷真は瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で近づき、シユベルトゲ  
ベールで切り裂く。これにより一夏のSEがゼロになる。

『試合終了。白式、シールドエネルギー empty。勝者、黒牙雷真』

とアナウンサーが流れた。

一夏「クツソオオオオ!!また、負けた」

雷真「素人にしてはいい動きだったんじゃないか？一夏」

一夏「素人にしてはって、雷真だってISを操縦するのは初めてだ  
ろ？」

雷真「ISはな。だが、ISに似たやつなら動かしたことがある」

一夏「なんだよそれ……」

雷真「それよか、戻るぞ」

一夏「はあく、一度でもいいから勝ちたかったぜ」

雷真「精進したまえ」

一夏「むむ、なんかムカつく」

雷真「なら、早いうちに俺に一泡吹かせるんだな」

一夏「今に見てるよ。必ず、お前に一泡吹かせてやるからな!!」

雷真「楽しみにしてるよ」

それを最後に互いに待機所に戻る。

しかし、マイダスメツサーを弾き飛ばされたの驚いたな。今後の一  
夏に期待だな。

となれば、セシリアと手を組んで一夏にクラス代表を押し付ける  
か。よし、決まりだ!

## 第5話

一夏との試合が終わり。待機所に戻り、刀奈たちに労ってもらったあと、更衣室でISスーツから制服に着替え、通路に出ると……。

千冬「黒牙、話がある」

雷真「分かりました」

織斑先生と自販機がある場所で話しをする。

千冬「ほれ」

雷真「ありがとうございます」

織斑先生から今さっき自販機で買った。スポーツドリンクを投げ渡される。

千冬「黒牙。お前、さっきの二人の試合をどう思う？」

雷真「そうですね。正直に言うのと死にます」

千冬「ほう」

雷真「あんな動きじゃ、何も守れはしない。あんなんじゃ、却って仲間を死なせかねない」

千冬「やはり、お前は……。本物の戦争というものを知っているようだな」

雷真「ええ、まあ」

千冬「お前が何を思っているかは私には分からない。けれど、あまり考え込むなよ」

雷真「はい」

千冬「それとお前のISを少し預りたい」

雷真「分かっています。流石に全身装甲の機体で、尚且つ、ビーム兵器に換装システムが搭載されているISは俺が使っているストライ



クだけですから」

千冬「性能を調べたら直ぐに返却する」

雷真「わかりました」

その後、約30分くらいだろうか。織斑先生に呼び出しを受けストライクを受け取る時、織斑先生の顔が寝れているようにみえた。その後、直ぐに真剣な目が変わった。

千冬「黒牙、お前はこの【GAT-X105 ストライク】を前から知っているようなことを更識から聞いたが本当か？」

雷真「ええ、本当です。ですが、この先を説明するは、少し待ってもらえませんか？この先の話しは婚約者である、刀奈にさえ話していませんから。決意が固まったら、その時に必ず話します」

その時の千冬は雷真の瞳から深い哀しみの色を見た。

千冬「わかった。だが、できるだけ早く、話してくれ」

雷真「わかりました」

クラス代表の決闘から翌日、ISを使用した授業を受けている。

千冬「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらおう。

織斑、オルコット、黒牙それと更識、試しに飛んでみる」

一夏「……」

セシリア「分かりましたわ」

刀奈「行くわよ、雷真」

雷真「ああ」

試合と同じくように首に掛けてある羽の首飾りに意識を集中させてストライクを起動させる。今回は直ぐに飛行できるようにエール

ストライクの状態で起動させる。

刀奈も自前の扇子に着いているアクセサリーに意識を集中させて、外装が少ない刀奈の専用機である。第三世代機、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女を起動させる。

雷真、刀奈、セシリアは難なくISを起動させたが一夏は……。

一夏「よし！んん、あれ？」

千冬「早くしろ！熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

一夏「集中……。来い、白式！」

やはり一夏には即時展開は難しい、音声認識で白式を展開した。

一夏「できた」

千冬「よし、飛べ！」

織斑先生の号令でセシリアたちは一気に上空へ上昇する。

セシリア「はい！」

刀奈「はい！」

雷真「了解！」

一夏「よーし」

一夏は見よう見真似で刀奈たちの動きを真似しようとするが決闘の時以外、ISを動かしたことが皆無な一夏はあちらこちらに飛んでいく。

一夏「うわああああ!?!」

雷真「やっぱり、こうなったか。セシリア、一夏のことを任せていいか？」

雷真はプライベートチャンネルでセシリアに繋ぎ。一夏のことを任せる。

セシリア「分かりましたわ」

雷真「すまないな」

セシリアとプライベートチャンネルで話しているのを刀奈はヤキモチを焼いたのか。刀奈もプライベートチャンネルを繋いでくる。なので、頭部だけストライクの装甲を外し刀奈と顔を合わせる。

刀奈「何を話してたの？」

雷真「あ？セシリアに一夏のことを頼んだよ」

刀奈「ふくん。それと、いつからオルコットさんのことを名前で呼ぶようになったのかしら？」

雷真「なんだ、ヤキモチか？それなら、安心しろ。セシリアの狙いは一夏だ」

刀奈「ならいいけど」

刀奈はまだ拗ねているようだ。

雷真「わかった。今度の休みに二人で何処か行こう」

刀奈「本当!？」

雷真「ああ」

刀奈「やった！」

刀奈はデートができることが嬉しいのか声が弾んでいた。

雷真「そう言えば、デートするのも約2年ぶりか

……」

実際は4年ぶりですが……。

刀奈「そうね。雷真が家の庭で見つかってからは、貴方の体の精密検査や精神カウンセリングとかで入院生活だったしね」

雷真「その節は本当にご心配をおかけしました」

刀奈「なら、デートは雷真持ちでね」ニコ

雷真「ま、マジか!？」

刀奈とのデートの話しをしていると下にいる織斑先生から通信がくる。

千冬『そこのバカ夫婦！惚けてないで授業に集中しろ！』

「は、はい！」

それといつの間に一夏とセシリアも雷真たちの後ろにいた。

一夏「待たせたな」

雷真「いんや、素人なんだ仕方ないだろ」

セシリア「雷真さんはIS操縦は初めてではないのですか？」

雷真「ISはそうだが、似たような物はかなり動かしたことがあるからな」

刀奈「へくえ、そうだったんだ」

千冬『織斑、オルコット、黒牙、更識。急降下と完全停止をやつてみせろ』

「了解！」

刀奈「誰から行くの？」

雷真「できれば、先に二人にやつてもらいたい。お手本がないと分からないからな」

セシリア「分かりましたわ。それでは私から、お先に」

セシリアは一気に急降下して行き、滑るように完全停止を試みせた。刀奈も同様に一気に急降下、完全停止を試みせた。

一夏「上手いもんだな」

雷真「それじゃ一夏。俺も先に行くぜ？」

一夏「おう」

雷真「それと一夏」

一夏「なんだよ？」

雷真「俺の真似は絶対にするなよ？」

一夏「へ？」

雷真はISの基本システムであるPICを切り。電源が抜けたように真つ逆さまに急降下する。それを見た、一夏、セシリア、刀奈が声を上げる。他の生徒たちも同様に声を上げる。

一夏「お、おい!？」

セシリア「雷真さん!？」

刀奈「雷真!？」

「きゃあああああ!？」

そのまま地面スレスレまで降下したらエールストライカーのスタターを噴かせ、そのまま織斑先生たちがいるまで滑るように移動し、逆さまのまままで完全停止する。

千冬「黒牙、頭部の装甲を外せ」

雷真「わかりました」

織斑先生に言われた通り、頭部の装甲だけ外し顔を見せると

……………。

千冬「このバカ者が！誰があんな危険な急降下と完全停止をやれと言った!!」バシン！

雷真「イツテエエエエ!？」

織斑先生のお怒りと出席簿での下からスイングという、お仕置きを受けました。その時の痛みでストライクが展開状態から待機状態に戻ってしまい、宙に浮いていた雷真は頭から地面に落ちる。

雷真「グエツ!？」ドサ

雷真「いてててて」

だが、それだけ済めばいいのだが…………。

刀奈「……………」プルプル

刀奈が無言でプルプルと震えながら、こちらにやってくるではありませんか。

その時の俺の心境は…………。

あつ、やつちまった!。(。口。;)

である。

そして、刀奈が顔を上げると泣きながら俺に突撃してくるのだ。それも無意識なのか毎度鳩尾にくるのだ。

刀奈「バカああああ!!」ポロポロ

雷真「グハツ!？」

刀奈「バカ、バカ、バカ!あんな危ない操縦をして。見てるこつちの身にもなりなさいよ」ポロポロ

ああ、やつぱり。俺が行方知らずの二年間で刀奈は少し脆くなつてしまったのか……。これは俺の責任だな。

本音「そうだよ、ライライ。お嬢様を心配させちやだめだよ」

雷真「すまん、心配かけた」

刀奈「本当よ」

本音「もし、次にお嬢様とかんちゃん、どちらかを泣かせたら……。」「

雷真「泣かせたら？」

本音「あの”呼び方”を学校でするからね？」ギロリ

雷真「ちよつ、それは勘弁だ!?!それと何で簪まで、この話しに出てくるんだよ!?!」

あの”呼び方”とは、俺が刀奈の婚約者であるため、従者の本音と虚さんは形式上、俺の従者にも成る訳で……。更識が参加するパーティーでは俺のことを”若旦那様<sup>わかだんなさま</sup>”か”若様<sup>わかさま</sup>”と呼ぶのである。

本音「はあく。やつぱり、ライライは気付いてなかったのか。お嬢様は気付いてました？」

刀奈「それはもちろん!だって双子だもの」

刀奈は本音の質問に答えながら、何処からか扇子を出して開き。扇子の真ん中には『意識疎通』と書かれていた。

雷真「ところで、他のみんなは？」

「あつ」

辺りを見渡すと、皆から暖かい目で見られ。俺と刀奈は、一気に顔が熱くなるのを感じた。

雷真「／／／／／／／／」

刀奈「／＼／＼／＼／＼」

本音「ひゅーう、ひゅーう！熱いね、二人とも  
ニシシシ

本音が俺たちのことを冷やかしていると……。少し離れて場所から……。【ドゴーン!!】と音とともに何かグラウンドに落下した衝撃が来た。

雷真「な、なんだ!？」

音と衝撃の原因はどうやら一夏が完全停止ができずに落下速度を誤り、グラウンドに向かってダイブしたことにより起きたものらしい。

箒「一夏!」

真耶「織斑くん！大丈夫ですか?」

一夏が落下したであろう場所は土煙が上がっており、それが止むと地面に首を突っ込み、それを引き抜こうと必死にもがいている一夏がいた。

雷真「刀奈、少し行ってくる」

刀奈「ええ」

俺は再びストライクを起動させて、必死にもがいている一夏に念のため声をかける。

雷真「一夏、引き抜くぞ?」

一夏「んん！んん！んん！」

声が届いたのか片手のハンドサインで”すまない”を表したので、



一夏を優しく引き抜く。

雷真「そうっれ！」

一夏「ぷはく!?助かったぜ、雷真。さっきのは死ぬかと思ったわ」

雷真「死ななくて良かった。白式に感謝しろよ」

一夏「そうだな」

逆さまの一夏を優しく降ろし、刀奈と下へ戻る。何故、戻ったかは一夏のことを想っている女性陣のとぼっちりを受けたくないからです。

はい、(o・ω・o)

それから一夏はグラウンドに穴をあけた罰として自力でグラウンドを整備するはめになったみたいだ。

ドンマイ、一夏。

## 第6話

一夏がグラウンドに穴をあけた、後はスムーズに午前の授業が終わり。お昼は刀奈の手作り弁当を食べ、午後の授業も終了。そして、今は刀奈とアリーナで模擬戦をしている。ちなみに装備はエールだ。

刀奈「ヤアアアツ!!」

刀奈は自分の専用機である霧纏ミス・テリアス・レイディの淑女の武装の蛇腹剣を鞭のように扱いながら攻撃してくるがそれを雷真はストライクの初期武装である、両脚部に収納されているアーマーシユナイダーで弾いていく。

刀奈「なっ!?!」

刀奈「だったら、これでどう!」

刀奈は蛇腹剣を自分の頭上でグルグルと回し始めた

雷真「ん? あれは……渦潮か!?!」

刀奈「そうよ。霧纏ミス・テリアス・レイディの淑女のナノマシンで水を操り渦潮を作ったの。貴方はこれを防げるかしら?」

蛇腹剣のよりグルグルと回転をさせたアクア・ナノマシンの渦潮を独楽のように飛ばしてくる。

雷真「エールじゃ分が悪い。あまり人に向けて使いたくないが仕方ない」

エールのスラスターで距離取り、バックパックをエールからランチャーに換装し、アグニの照準をギリギリ刀奈に当たらないようにして渦潮に合わせ、放つ。威力は二割。

刀奈「……」ニヤリ  
雷真「ツ!？」

アグニで渦潮を霧散させたことで刀奈がニヤリと笑った気がした。

刀奈「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

刀奈「少し空気が熱くないかしら？」

雷真「そんなことは………ツ!？。まさか！」

雷真の頭には3つの単語が浮かんだ。水、熱、空気。

普通はその3つが浮かべは水蒸気と考える人が大半だろうが。I  
S戦闘はダメージを与えることが当たり前なので、水蒸気で相手にダメージを与えられるとしたら、一つだけだ。それは『水蒸気爆発』。

刀奈「喰らいなさい、クリア・パッション清き激情！」

アリーナ内に「ドガンー!」と盛大な爆発と爆煙が舞う。次第に爆煙が止んで行く。しかし、刀奈がクリア・パッション清き激情を放ったであろう場所には誰もいない。

刀奈「い、いない!？」

刀奈は雷真がいないうことに驚き辺りを見渡すが雷真の姿は見えない。すると直ぐにハイパーセンサーにより、ロックオンをされている危険アラームが鳴る

刀奈「何処から!？」

再度、辺り見渡す。すると上の方で何かがキラリと光るのが見えた。それを頼りに頭上を見ると右手でビームライフルのメイングリ

プを持ち、左手でフォアグリップを横にして照準を安定させて、こちらを狙らう、雷真が駆るエールストライクがいた。

刀奈「でも、どうやって清クリア・バツシヨンき激情を……………」

刀奈は今だに雷真が霧纏ミステリアス・レイディの淑女の清クリア・バツシヨンき激情を回避また耐えた策がわからない。けれど直ぐにその疑問は解消された。なぜなら雷真の左腕に装備されているストライクの対ビームシールドがゆらゆらと少し陽炎を起こしていた。それは清クリア・バツシヨンき激情の蒸気熱が残っている証拠である。

刀奈「なるほど、シールドで防いでその勢いで私の上に……………」  
やるわね」

雷真の策のタネがわかると雷真はビームライフルを撃ってくる。刀奈はそれを回避する。回避できないものはアクア・ナノマシンで威力を軽減させて、またアクア・ナノマシンを纏わせた蛇腹剣で弾いていく。(ビーム兵器は威力を落としてます)

雷真「流石は刀奈。やるな、けど!」

雷真はバックバックをエールから、まさかのオオトリに換装する。そのまま、小型ミサイルを放つ

刀奈「次はミサイル!?!」

しかし雷真は刀奈のアクア・ナノマシンに当たる直前にビームライフルで誘爆させ、煙幕を張る。

刀奈「ミサイルを煙幕に？」

刀奈が雷真がミサイルで煙幕を張ったことに疑問を抱いた。次の瞬間、煙幕の向こう側からビームとレールガンの嵐が刀奈を襲う。あまりの砲撃の数に刀奈は対象しきれずに被弾する。

刀奈「きゃああああ!!」

これにより、霧纏ミステリアス・レイディの淑女のSEがemptyになったアラームがアリーナに響く。



模擬戦が終了した後。雷真と刀奈は隣合わせで座り、スポーツドリンクを飲みながら、さつきほどの模擬戦の反省会をしている。

刀奈「あああああ、悔しいいいい！」

雷真「そう言うなよ」

刀奈「だって、私は一応生徒会長よ？なのに、負けるだなんて」

雷真「ビーム兵器に換装システムを扱う俺に、初戦であそこまで攻めたんだ。誇ってもいい気がするけどな？」

刀奈「それでも、悔しいものは悔しいの!!」

雷真「はいはい。刀奈は昔から負けず嫌いだもんな」

刀奈「なによ！」プクー

雷真「膨れても可愛いのは変わらないぞ？」

刀奈「……………バカ。／＼／＼／＼」

（反省会も終えて更衣室で交互に着替えて、アリーナを出ると本音がこちらに向かってきた）

本音「お嬢様にライライ」フリフリ

雷真「どうした？」

本音「この後クラスの皆で、おりむくのクラス代表就任のお祝いをするんだけど、二人も参加するでしょ？」

刀奈「そうね……。なら、参加しようかしら」

雷真「俺も腹が減ったし少し参加しようかな」

本音「少し？」

雷真「ああ。ある程度、食べ物を食べたなら整備室に行こうと思ってな。ストライクの武装を少しいじろうと思ってるんだ」

刀奈「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

刀奈「なんで、貴方はクラス代表に成らなかったの？」

雷真「そんなの決まってるだろ？俺は刀奈の居る生徒会に入るからだよ」

刀奈「そんなこと言って。本当は面倒だからじゃ、ないわね？」

雷真「な、ナンノコトデセウカ」

刀奈「まあ、今回は生徒会に入ることで見逃してあげるわ」

雷真「サンキュー」

刀奈「ただし、雷真には副会長に就任してもらおうよ？」

雷真「はあ!?書記とか庶務じゃないのか？」

刀奈「だって、私の未来の旦那様なら副会長くらいやってもらわな  
いとね♪」

雷真「はあく。まあ、クラス代表よりかはましか」

模擬戦が終わり一度部屋に戻った後、一年一組の生徒で一夏のクラス代表のお祝いパーティーをするために食堂に来ている。

「織斑くん。クラス代表決定、おめでとう！」

それを合図にクラスの女子たちがクラッカーを鳴らす。

「「「おめでとう！」」」

一夏「なんで、俺がクラス代表なんだよ？」

セシリア「それは、わたくしが辞退したからですわ」

一夏「なら、雷真！お前はどうかなんだよ？お前は俺とセシリアに勝ったじゃないか！」

一夏は食堂の端っこで刀奈、本音と適当に料理を取り、今まさにフライドチキンを口にしようとしていた雷真に近づいて問い詰めた。

雷真「あ？そんなの辞退するに決まってるだろ？あの時、言い忘れてたが俺のISである、ストライクは実弾や実剣の攻撃を無効化できる装甲だぞ？そんなのでクラス対抗に出てみる。如何様だ、何だと言われかねないぞ？」

一夏「そ、それは……」

雷真「それに、お前は『守る』んじゃないのか？」

一夏「ッ!？」

雷真「なら、クラス代表になって強い奴と刀を交えて強くなるしかないだろう。そうだろう、一夏？」

一夏「そうだな……。うん！雷真のおかげで目が覚めた。サンキュー、雷真」

雷真「気にするな。友達だろ？それに俺も守りたい者があるからな」

そう言つて雷真は隣に座ってスイーツを美味しそうに食べている

刀奈を見つめた。

一夏「なるほど、雷真にも守りたいものがあるんだな」

一夏は強い意思を宿した雷真の瞳を見て。自分も今よりも、もっと強くなりたいと、と思い雷真にある提案をする。

一夏「なあ、雷真」

雷真「今度はなんだ？」

一夏「明日から俺を鍛えてくれないか？」

雷真「はあ？」

一夏「なあ、頼むよ！」

一夏は頭を下げて、頭の上で両手を合わせお願いのポーズを取る。

雷真「刀奈、どうする？」

刀奈「ふあ雷いん真ひんに任ませふあるふあわ」モキュモキュ

刀奈は雷真お手製のシュークリームを口一杯に頬張りながら喋っているため、雷真と同じ幼馴染である本音でさえ刀奈の言っていることが分からなかった。

本音「ライライ、お嬢様は何て？」

雷真「俺に任せるってさ。それと刀奈、喋るなら口に入ってる物を呑み込んでからにしろよ」

刀奈「ごめんなさいね。だって雷真の作ったシュークリームがあまりにも美味しいんだもの」

雷真「材料さえ、用意してくれば暇な時に作って置くから。あつ、ほら刀奈、こっち向いて」

刀奈「んっ」



雷真は刀奈の口回りと頬つぺたについた生クリームとカスタードクリームを合わせたミックスクリームをナフキンで拭き取る。

雷真「はい、取れた」

刀奈「ありがとう、雷真」

雷真「いつものことだ。気にするな」

この光景を見ていたクラスの女子たちはブラックコーヒーを頼んだそう。その中で、ブラックコーヒーを飲まずに済んだのは箒とセシリア、そして本音の友達である、四十院神楽と鏡ナギだけである。また箒とセシリアは、いつか一夏にやってもらいたいと心の中で思っていたそう。

鏡「ねえ、本音」

本音「なあくに、ナギ」

鏡「黒牙さんと更識さんって、いつもあくなの？」

本音「ん？いつもより、控えめだと思うよ。ライライが行方不明になる二年前はかっちゃんもライライに口で取るよう、おねだりした時があつたからね。今は人がいるからしてないけど」

四十院「なに、それ……」

鏡「甘い、甘過ぎるわ」

本音「あはははは」

しかし、本音の話しでやはり二人もブラックコーヒーを飲むことになつた。

そして、一夏を鍛える話しに戻り。

一夏「ダメか？」

雷真「ん？弱音を吐いても止めないからな？」

一夏「おっしや！」

雷真「明日の朝からやるからな」

一夏「わかった」

早朝特訓の話しを終えると一夏は箒とセシリアがいるところに戻る。そして、何やら二人と一夏は揉めているようだ。

刀奈「いいの、雷真？」

雷真「何が？」

刀奈「貴方の特訓って、普通の特訓じゃないじゃない」

雷真「そうだな。行方不明から帰ってきてからは、皆から言われるな」

それもそのはず。雷真の特訓は1000m走を重さ40キロを超える重りで10秒切る走りを往復10セット。他には40キロの重りをつけた状態で片手腕立て伏せ、片手逆立ち腕立て伏せ、片手懸垂をやるのだ。

端からみたら、何処のボディービルダーだと言われても可笑しくない。

刀奈「まあ、彼を潰さない程度に鍛えてあげなさい」

雷真「そうする」

それからは普通に雷真は夕飯としてパーティーの料理を食べる。あらかた、腹が満たされたところで雷真は刀奈と本音に一言言ってから整備室に向かった。



雷真が整備室に向かって、直ぐに首からカメラをかけた女子生徒が刀奈たちのところへやってきた。

???「どうも、新聞部です。二人目の男性IS操縦者の黒牙雷真くんは居るかしら？」

刀奈「彼なら、もう居ないわよ？」

???「そんな〜」

刀奈「確か、貴女は虚の友人で……」

黛「黛薫子よ。虚には、いつもよくしてもらってるわ。だから、刀奈ちゃん。貴女は私のことを薫子でいいわよ」

刀奈「なら、私のことも刀奈でいいわ」

黛「了解。ところで刀奈」

刀奈「何かしら？」

黛「刀奈が黒牙くんと婚約してるって本当？」

刀奈「ええ、本当よ」

黛「それで、それで、二人の馴れ初めはいつ？」

刀奈「そうね……もう五年も前になるかしら」

黛「そんなに……」

刀奈「私と双子の妹が学校の帰り道に知らない大人たちに誘拐されてしまったことがあるの。そんな私たちを額から血を流しながら傷だらけで助けに来てくれたのが幼馴染の雷真だったの」

黛「まさにお姫様たちを救い出す王子様ね」

刀奈「その後は私の両親がその大人たちに制裁を下してからお父さんが雷真に『何で自分一人で刀奈たちを助けに言ったんだ』って聞いたの」

刀奈「そしたら雷真は、『自分の手が届くのに、手を伸ばさないで諦めるなんて嫌だし。それに刀奈と簪が心配だったから』って言ったの

よ。その時、私は、この人と共に人生を歩みたいと思ったの」

黛「なんとも王道なラブロマンスね」

刀奈「そうね。けれど、これが私と彼の馴れ初めよ」

く刀奈の回想く

私たちは小学校の帰り道で知らない黒服の大人たちに布を顔に当てられて誘拐されてしまった。今、自分たちが何処に居るのかすら分からない。

簪「お姉ちゃん、怖いよ……」グスグス

刀奈「大丈夫よ、簪ちゃん。お姉ちゃんがついてるから」

簪「う、うん」

それから何時間経つたろ？そんな時、外が騒がしくなり始めた。

『なんだこの、クソガキ、どこから!』

『ガッ!』

『野郎共、ガキだと思って手加減なんかするな！殺す気で殺れ!』

『『『おとおお!!』』』

『グギッ!』

『グボワッ!』

『グギヤッ!』

大人たちの苦しむ声が私たちのところまで響いてくる。その声に私も怖くなる。

簪「おねえちゃん……」ポロポロ

刀奈「大丈夫、大丈夫だ……から」ガタガタ

私たちが恐怖していると外から聞きなれた人物の声が届く。

雷真『助けに来たぞおおおお!!』

その声は幼馴染の男の子。名前は黒牙雷真。彼は三歳の頃に両親が彼のことを捨てて居なくなつてからは、うちで引き取り家族同然の付き合いだ。そんな彼がなぜ一人で？

ふと、あることを思い出した。前に私たちの誕生日に私と簪ちゃんに月と太陽のお守りをくれたことを。

雷真『誕生日にこれを渡すのは何だけど、お守り。二人を必ず守つてくれるから』

まさか、彼はあのお守りに私たちの居場所が分かるように細工がしてあつた。そういうことなの？

そんな考えが頭のグルグルと巡る中、私たちを閉じ込めた重い扉が開き、眩し光が私たちの目に入る

簪「ま、まぶしい！」

刀奈「うっ！」

雷真「やっと、見つけた」

刀奈「えっ？」

簪「えっ？」

雷真「助けに来たぞ。刀奈、簪」

光に慣れるとそこには、木刀を右手に持ち、額から血を流してボロボロの雷真がいた。

刀奈「なん……で？」

雷真「あ？助けていから助けに来たに決まってるだろ？」

刀奈「でも、外には大人たちが」

雷真「そんなの全員、叩きのめした。ちよつとミスったけど」

刀奈「バカよ……貴方は本当のバカよ。そんなポロポロになって」  
ポロポロ

今までの我慢していた恐怖が今になって解放される。それに合わせて、雷真が助けに来てくれたことに嬉しくなる。

雷真「取り敢えず、今から縄を解くからじつとしてろよ」

雷真は大人たちから奪ったであろうナイフで私たちが拘束している縄を切り、解放してくれる。

雷真「よし。そんじゃ、かえ……」グラッ

雷真は私たちを助けたことにより、緊張状態が解けてアドレナリンの分泌が急激に低下したのか足が縋れ倒れそうになる。

「雷真！」ガシッ

雷真「わり……。気が抜けて転けそうになったわ」

刀奈「全く……。簪ちゃん、そっちの腕をよろしくね」

簪「うん！」

それからは私たちが雷真の両腕を首にかけて、彼を引き摺りながら外に出て、公衆電話で家族に連絡すると30分ほどで来てくれた。

これが私たちを魔の手から救い出してくれた。正義のヒーローのお話である。

〈回想終了〉

刀奈「本当、貴方は私たちにとって唯一無二の正義のヒーローなんだからね。雷真」

私は久しぶりに彼に惚れた時のことを思い出して胸が熱くなるのが分かった。また、刀奈の首には過去に雷真からもらった、太陽のお守りがかかっている。

刀奈「さて、私も整備室に行こうかしらね」

## 第7話

雷真はパーティーから抜け出し整備室に行くと整備室の明かりが廊下に漏れていた。

雷真「誰かいるのか？」

雷真「失礼します」

誰か居ると思い。一応、挨拶をしながら整備室に入ったのだが誰もいない、もぬけの殻のようだ。

雷真「誰かが明かりを消し忘れたのか？まあ、いいや」

明かりのことは放って置き。整備用のカタパルトにストライクを起動させて待機させる。

雷真「さっきの刀奈との模擬戦でストライクをランチャーからエー ルに換装するタイムラグが問題になることがわかったから、あとはそれを無くすためにOSをいじれば」

雷真「ストライクの換装接続タイムを1秒から0.05に書き換えて。よし、やってみるか」

雷真はキーボードでストライクの換装システムのOSを書き換えて実験するがやはり、タイムラグが発生してしまう。

雷真「駄目か……。そうだ、どこかにISの高速武装交換をする動画とかないかな」

雷真のストライクは今はMモバイルスーSではなくIS。なら、ISの機能や能力で高速で換装することを思いつきネットでその動画を漁る。



雷真「あつた！えつと名前はラビッド・スイッチ……。」

ラビッド・スイッチ  
高速切替の動画を再生すると雷真はこれだ！と頭の中でパズルピースが嵌まる感覚を感じた。

雷真「このラビッド・スイッチでタイムラグは解消できる。他にはストライカーを換えずに部分換装できるようにセッティングしてみるか」

それから約1時間ほどOSを書き換えてラビッド・スイッチの動作における不備がないかを確認しながら何回も繰り返していると……。

「……………真」

「……………雷真」

「ねえ、雷真ってば！」

雷真「うおわっ!？」

雷真はあまりにもラビッド・スイッチに熱中していたためか周りの声が全然聞こえておらず。簪の声で驚いてしまった。

雷真「なんだ、簪か……驚かすなよ」

簪「簪か……じゃないよ！何度も呼んだのに」

雷真「それは悪かったな」

簪「それで雷真はどうしてここに？」

雷真「今日の放課後に刀奈と模擬戦をしたんだが、途中でストライクの換装が間に合わなそうになったから、その対策だ」

簪「ふくん。ところで、その模擬戦はどっちが勝ったの？」

雷真「俺だ」

簪「えっ？えええええ!？」

雷真「どうしたんだよ？そんなに驚いて」

簪「いやいや、普通は驚くよ！だって、お姉ちゃんはIS学園史上で最も最速で生徒会長になったんだよ？それなのに、雷真はそんなお

姉ちゃんに勝つただなんて……………」

雷真「だからか、あんなに悔しがってたのは」

簪「本当に雷真は色々は無茶苦茶というか出鱈目というか……………。はあく、止めた、気にしてる私の方が疲れちゃうもん」

雷真「ところで簪はなんで整備室に？」

簪「それはね、私の専用機がまだ出来てないからなの」

雷真「はあ？」

雷真「ちよつと待て。なんで日本代表候補生である簪の専用機が完成してないんだ？日本代表である刀奈の霧纏ミステリアス・レイディの淑女は完成してるのに」

簪「ううん。お姉ちゃんの専用機は元々ロシアの専用機をベースに作ったの。ロシアで開発されていた第三世代機のプロトタイプが破棄されるころを日本が無理やりロシアと交渉して戦闘データ以外を提供してもらった後に虚さんや本音、私と力を合わせて完成させたの」

雷真「なら、簪の専用機が急ピッチで開発させるはずだろう？」

簪「本当はそのはずだったんだけど、イレギュラーが発生したんだよ」

雷真「イレギュラー……………まさか!？」

簪「雷真も気付いたみたいだね。そう、本来ならあり得ない、一人目の男性操縦者の出現。もつと正確に言うなら織斑一夏の発見によって、開発されるはずだった私の専用機が後回しにされて、織斑一夏の専用機である、あの白式が完成したの」

雷真「……………」

簪「それも運が悪いことに私の専用機を開発している企業と織斑一夏の専用機を開発した企業は同じ企業なんだよ」

雷真「そんなことって……………」

簪「正直、なんで私がこんな目に合わないといけないの、って思ったよ。でも、泣いてる私を何も言わずに真っ先に慰めてくれたのは雷真だった。本当のヒーローみたいに何も言わずに慰めてくれた」

雷真「えっ?」

簪「今でも覚えてるよ。額から血を流しながら傷だらけでポロポロな状態で私たちを助けてくれたこと。あの時の雷真は、まさに私が憧れる大好きなヒーローみたいだった。だから、そんな私の大好きヒーローが近くにいるのに織斑くんを恨んだら、その人に嫌われちゃうから」

雷真「ちよつと待て、簪。俺はヒーローなんかじゃ……」

簪「いや、待たない!だって、これが最後のチャンスかもしれないから。だから、ちゃんと聞いてお願い」

雷真は簪の赤い瞳から真剣さが見て取れたので頷くことしかできなかった。

簪「すう、はあく。よし」

簪は下を向いて深呼吸をしてから、何やら決意をして、そして顔を上げ、こちらの正面を向くと、彼女の瞳は少し潤んでおり、頬も少し赤くなっているように見える。

そんな簪の顔を見た瞬間、雷真は胸の奥が「ドクン!」と跳ねた。

簪「えつとね……その私、ね」

雷真「お、おう」

簪「私……雷真のことが好き!五年前のあの時からずっと雷真が好きだったの、けれど付き合っとは言わない」

雷真「……」

簪「だって、だって……雷真には……お姉ちゃんが……刀奈がいるから」ポロポロ

雷真「……」

簪を泣かせてしまった。俺の所為で簪を泣かせてしまった。刀奈と同様に簪を守ると決めたのに……なのに俺は……。

簪「だから、答えはいらない。答えを聞いたら、今よりも辛くなつて、きつと刀奈に当たっちゃうから」ポロポロ

雷真「……………」

簪「だから、これでいいの。胸の奥にしまったてた思いを打ち明けて、スツキリしたから」ニコ+ポロポロ

バカやろ……。そんな泣きながら無理な笑顔を作っても説得力なんてねえよ。

簪「ごめん私、先に出るから、戸締まりとかよろしくね！」タタタタ

簪は俺の横を走って通り過ぎ、整備室を出て行こうとするが……………。

??? 「待ちなさい、簪ちゃん」

整備室の入り口から先ほどまで一緒に居た女性の声が聞こえた。

簪「なんで…………お姉ちゃんがここに」

雷真「刀奈」

刀奈「さっきの話し、聞かせてもらったわ」

簪「そっか…………聞かれてたんだ」

刀奈「やつと勇気を出せたわね、簪ちゃん」

簪「でも…………」

刀奈「雷真、IS学園にくる前にお父さんは何て言ってたか覚えてる?」

雷真「それは…………」

〈回想〉

更識父「ああ、雷真君。ちよつと待ってくれ」

雷真「なんですかお義父さん」

更識父「何、刀奈と簪のことを頼んだよ。と言いたかっただけだよ」  
雷真「わかつてます」

く回想終了く

出発前のお義父さんとの会話を思いだした。  
もし、その言葉が俺の解釈通りなら……………

刀奈「どう、わかった？」

雷真「刀奈、お義父さんのあの言葉はそういう意味で解釈していい  
のか？」

刀奈「さあ、ね？私はさつき食堂でも言ったけど雷真に任せるわよ」  
雷真「わかった」

俺は今だ、俺たちのやり取りを理解していない簪に近づき、正面で  
話しをする。

雷真「簪」

簪「なに、雷真？」

雷真「これは俺の意思だから、言わせてもらう。所謂、エゴってや  
つだ」

簪「……………」

雷真「更識簪さん」

簪「……………」

雷真「俺は…………簪も刀奈も同じくらい好きです」

簪「へっ？」

雷真「だから、俺と結婚を前提に付き合ってください」

簪「えっ？うそ…………でも、そんなことは」ポロポロ

刀奈「普通は出来ないわね。けど、雷真は今では世界で貴重な存在よ？なら、やり方によつては

”それを”一夫多妻を可能にすることはできるはずよ」

簪「本当にいいの？刀奈も本当に？」

雷真「俺から結婚を前提としたお付き合いを申し込んでいるんだがな？」

刀奈「この私が簪ちゃんが雷真の好きだつてことを分らないとも思つた？」

簪「ありがとう、二人とも。ありがとう」ポロポロ

刀奈「それじゃ、私たち二人の未来の旦那様から好きである証拠を見せてもらおうおうかしらね」

刀奈は艶かしく唇を人差し指でなぞる。その行動だけで雷真は刀奈が示す証拠とやらが理解できた。

雷真「わかつたよ。ただし、簪からな」

刀奈「わかつてるわよ。待たせた分、しっかりと証拠を残してあげなさい」

雷真「わかつた。簪、目を閉じて」

簪「う、うん」

雷真は簪の前に立ち、優しく簪の肩に手を乗せる。手を乗せる際、簪の体がビクツと動いたのは無視する。

雷真「いくぞ」

雷真の合図で簪は少し顎をあげる。これにより、雷真と簪の顔はちょうど良い角度で交わる。

雷真「んっ……」

簪「んっ……」

今はただ唇と唇を当てるだけで終わり。

簪「しちゃった、ね」ニコリ

雷真「ッ!?!。／／／／／」

やはり、簪と刀奈が双子だからなのか。今の簪の笑顔が初めて刀奈とキスを交わした時によく似ていたが少し違う。

刀奈「雷真、何をそんな初々しい反応してるのよ」

雷真「す、すまん。さっきの簪の笑顔が初めてキスをした刀奈の顔に似ていたから」

刀奈「バカ……。／／／／／」

簪「フフフフ」ニコニコ

刀奈「それじゃ、私の番ね」

雷真「わかってるよ」

刀奈も簪と同じように正面に立ち、優しく肩に手を置き顔を近づけキスを交わすが……………。

雷真「んっ、んふ……………!」

刀奈「んっ、んむ……………あむ……………ぷはっ!」

腕を首の後ろに回されて、まさかのディープキスをやられるとは思わず雷真も目を白黒させてしまう。

刀奈「ごちそうさま」

雷真「か、刀奈、お前」

刀奈「フフフフ、二年と半年ぶりのキス。美味しかったわよ。ら・い・し・ん♥?」

こいつ、マジでお義母さんの血が一番濃いんじゃないかと疑いたくなる。その理由は何とお義父さんが大学生の時、二つ上であるお義母さんに言い寄られた結果。お義父さんが四年のころに刀奈と簪がお腹に出来て結婚したそうさ。

簪「お姉ちゃんがエッチい」

雷真「はあく。ところで簪の専用機の話しなんだがストライクの中にある戦闘データを流用できないか？」

簪「多分できると思うけどいいの？」

雷真「大切な婚約者が困ってるんだ。いいに決まってる」

簪「う、うん、ありがとう。／／／／／」

こうして、新たに雷真の婚約者に簪が加わった。

また、簪の専用機を担当していた企業である倉持技研が、ミスターKと名乗る男により破産一步手前までにされていたり、極秘にしていた情報が日本政府に渡り家宅搜索をされたそうさ。



## 第8話

一夏とパーティーと簪が婚約者に加わった、翌日。朝、時計は時刻を5時30分と示している。

雷真は朝早くから起き、特訓をする。

これは、コズミック・イラのなごりで早朝特訓をしてしまうのだ。一種の職業病だ。

そして、雷真は1025号室の前にいる。扉の前でノックを三回する。すると寝間着なのか？浴衣姿の簪が出てくる。

簪「こんな朝早くに何の用だ？雷真」

雷真「昨日、一夏が強くなりたいたいから特訓してくれと頼まれてな。だから、早朝特訓だ。」

簪「なにっ!？」

雷真「簪、声を落とせ」

簪「す、すまない。それで、私も付いて行っても構わないか？」

雷真「ああ。第三者の目からの意見も特訓に必要なだから。取り敢えずは一夏を起こすから、入っていいか？」

簪「どうぞ」

雷真「お邪魔します」

簪に招き入れてもらい、ベッドの中で眠っている一夏を起こす。

雷真「一夏、起きろ。早朝特訓するぞ」

一夏「ん、雷真？何でいるんだ？」

雷真「昨日、お前が言ったんじゃないか。強く成りたいんだろ？」

一夏「そうだった!？」

一夏は昨日のことを思い出して、バツという効果音が鳴りそうな勢いでベッドから飛び起きる。

雷真「起きたなら、早くISスーツと動きやすい服に着替えろ」

一夏「わ、わかった。雷真はエントランスで待っていくれ」

雷真「了解」

一夏に言われるまま、エントランスで一夏と箒を待っていると、ジャージ姿の織斑先生に出会った。

千冬「黒牙か、早いな」

雷真「いえ、これはもう習慣なので」

千冬「いい心掛けだ。一夏もお前を見習ってほしいものだ」

織斑先生がそんなことを愚痴っていると……。

一夏「誰が雷真を見習えって?」

千冬「い、一夏!?!」

織斑先生はこんな朝早くに一夏が起きているのに驚いているようだ。

一夏「おはよう、千冬姉」

箒「おはようございます。織斑先生」

千冬「お、おはよう」

雷真「それじゃ、まずは軽く準備体操してから4キロのマラソンな。制限時間は10分だ」

(作者も10分で4キロ走れちゃいます)

一夏「10分で4キロ!?!」

千冬「ほう?」

雷真「あつ、織斑先生」

千冬「なんだ?」

雷真「ISとアリーナの使用許可をいただけませんか？」

千冬「何のためだ？」

雷真「一夏が昨日、強く成りたいから特訓してくれと頼まれました」  
千冬「なるほどな。許可しよう」

雷真「ありがとうございます。では、さっそく」

雷真はストライクを出さずに対ビームシールドだけを出現させて、それを担ぐ。

雷真「よし、マラソン始め！」

雷真は対ビームシールドを担ぎながらタツタと走っていく。対ビームシールドの総量は約60Kgはあるのだが、それを軽々と担ぎながら走る雷真はいかに……。

一夏「す、すげえ」

箒「本当だな」

4キロのマラソンが終わると一夏はゼハゼハ、と息切れしながら倒れ、箒も流石に10分で4キロはキツイようで息が切れている。雷真はというと全く息が切れていない。

また、織斑先生だが、まだ走るとのことで別れた。

雷真「うっし。今から30分休憩だ。休憩が終わったらISの特訓に入る」

一夏「ま、マジか……」

箒「雷真は凄いな……。毎日、こんな特訓をしてるのか？」

雷真「そうだな。行方不明になる前は刀奈の家で両手足に10kgの重りを着けて走ってたけどな」

箒「そうか」

雷真「ほれ、二人とも」

一夏「ぎ、サンキュー」  
箒「すまない」

一夏と箒に渡したのは簡易食。所謂、10秒チャージのようなものだ。それから休憩が終わり、アリーナでISの特訓に入る。



雷真「ほら、またロックオンされてるぞ。射線から逃げろ！」  
一夏「クソオオオオ！」

今、行っている特訓は一夏を俺がエールストライクで追いかけて、ビームライフルのロックオンから逃げる特訓だ。  
かつて誰かが、『当たらなければ、どういふことはない』と言ったようにそれを実現させるためにやっている。

雷真「また、速度が落ちてるぞ。蜂の巣に成りたいのか！」  
一夏「キツイ」  
雷真「今からはロックオンだけじゃなくて実際に撃っていくからな。当たるなよ？」

一夏「へえ？」  
雷真「行くぜ！」  
一夏「うわあああああ!？」

雷真はギリギリ掠るところを狙って一夏にビームライフルを撃つ

ていく。ギリギリとはいえSEは確実に削れていく。

一夏「クソツ、このままじゃあ」

一夏はあることを思い出した。それはクラス代表決定戦で雷真がやってのけたビームを弾く。それを零落白夜でも、やれるのではないかと考えた

一夏「一か八かだな。けど、何もしないで殺られるよりはましだ！」

一夏は高速移動しながら零落白夜を発動し、ビームライフルから放たれるビームを弾いた。

雷真「へえ〜」

一夏「おっしや、いける！」

雷真「なら、ちよつとギアを上げようか」

一夏「えっ？雷真さん、今ギアを上げると仰いました？」マツサオ

雷真「その通りだ、一夏」ニヤリ

一夏「あ、あ、あ、うわああああ!!」

今回は容赦なく、完全に相手に当てる感覚でビームライフルの照準を合わせて、トリガー引いていく。

雷真「ほら頑張つて、知恵を絞って！」



一夏の早朝訓練の話しを聞き付けたセシリアは刀奈と共に雷真たちが居るアリーナに来ていた。そこで目にしたのは地獄絵図。

セシリア「刀奈さん、貴女のフィアンセは鬼か何かですか?」

刀奈「ああなった雷真は、私も久しぶりに見たかも」

セシリア「久しぶりということは前にも?」

刀奈「ええ、調子に乗って私と双子の妹の簪ちゃんにしつこくナンパをしてきた男を笑顔でね」

セシリア「あー、なるほど。容易に想像できましたわ」



あれから、一夏の雷真による特訓が始まって早二週間が経ち。現在、早朝特訓を終えた一夏は教室の自分の席でボロボロの状態で突っ伏している。

一夏「……………」ボロボロ

本音「おりむく、大丈夫?」

一夏「のほほんさん、君にはそんな風に見える?」

本音「ううん、ぜんぜん。だって、特訓の相手があの子ライライだもん」

一夏「のほほんさんは雷真と長い付き合いなのか?」

本音「うん。私とお姉ちゃん、それにかっちゃんにかんちゃんはライライとは幼馴染なのだ!」

本音との会話の後はチラホラとクラスのメンバーが教室に入ってくる。その中の何人かがクラス対抗戦の話をしている。

「もう直ぐ、クラス対抗戦だね」

「そうだ。二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」

「ああ。なんとかっていう転校生に変わったのよね？」

一夏「転校生？今の時期に？」

鏡「うん、中国から来た娘だった」

セシリア「フーン！私の存在を今さらながら危ぶんでの転入かしら？」

雷真「それはないだろ。だったらなんで入学当時に来ない？大方、一夏か俺のデータ取りだろう。お偉いさん方はそんなことしかしないからな」

一夏「なるほどな。でも、どんなやつだろうな？強いのかな？」

雷真「どんな相手だろうが気を抜くなよ。気を抜いて恥さらしな負けた方をしたら、特訓内容を地獄にしてやる」

一夏「わ、わかった」ダラダラ

鷹月「でも今のところ専用機を持つてるのは一組と四組だけだから余裕だよ」

一夏「いや、雷真の言葉通り俺は余裕だなんて思わないことにするよ」

と一夏がいうと……いきなり教室の前の扉が開く。

???「その女子の情報古いよ。二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

一夏「鈴？お前鈴か？」

鈴「そうよ！中国代表候補生、凰鈴音よ。今日は宣戦布告に来たってわけ」ビシッ！

とまあ、漫画で出てくる。ライバル的なやつとのセリフを言ってみせた。一夏の知り合いらしい、中国代表候補の凰鈴音がこの学園にやって来たみたいだ。

鈴「アンタね、二人目の男性IS操縦者ってのは」

凰はこちらにやってきて、俺にそう問うてきた。

雷真「ああ、そうだ。既にそちらから自己紹介があつたから俺だけ言わせてもらう。黒牙雷真だ。俺のことは雷真で構わない」

鈴「こっちも鈴でいいわ」

そうして、互いに握手をする。

雷真「なあ、鈴。そろそろ、自分の教室に戻ったほうがいいぞ」

鈴「どうして？」

雷真「一組の担任が織斑先生なんだよ」

鈴「うげっ!?それは本当？」

雷真「本当だ。あと40秒で来るぞ」

鈴「ヒイイイ!?!」

鈴は悲鳴のような声を上げながら教室を出ていくが何かを忘れたのか戻ってくる。

鈴「一夏、このあと昼休みに話があるから、じゃあ!」

一夏「……………」

雷真「なんか嵐みたいなやつだな？」

一夏「まあ、良いやつだよ」

鈴との邂逅のあとは授業は普通に終わり。しかし、途中で何回か一夏は織斑先生の出席簿アタックを受けて頭から湯気を出していた。



そして、昼休み。今日は一夏たちと食堂で食べることにしたので途中で鈴とも合流した。

一夏「にしたもビックリしたぜ。お前が二組の転校生とはな。連絡をくれりや良かったのに」

鈴「こつちだつて代表候補生として忙しいのよ。アンタと違って」  
一夏「なんだよ、その言い方。それとお前、まだ千冬姉のことが苦手なのか？」

雷真「そうなのか？あんなに優しいのに」

鈴「雷真、アンタのその感覚を疑うわ」

雷真「いや、俺はあれより酷いのを知ってるからな」

雷真の頭には戦闘訓練と言う名の地獄。それもコスミック・イラの伝説の二本の剣、”ストライクフリーダム”と”インフィニットジャスティス”によるいじめが脳裏でよみがえった。

刀奈「雷真、戻ってきなさい。後ろが詰まってるわよ？」

雷真「す、すまん」

刀奈の声で半年しか月日が経っていないが、コスミック・イラのこととがひどく懐かしく感じていた。

そして、席に着くと一夏は鈴と二人で、それに付いて来た輩は集まって座っている。

俺と刀奈は普通に二人で座っている。また、あのクラス代表決定パーティー以降から簪も俺たちと一緒に食べるようになった。

簪「ごめん、待たせちゃった？」

雷真「いや、そんなことはないぜ。ほら、簪のオムライスも取ってあるから」

刀奈「そうよ、簪ちゃん」

簪「ありがとう、二人とも」

そして三人で食事に感謝をする。これは俺がコズミック・イラで宇宙から地球に降りた際に、北アフリカ砂漠でアークエンジェルやストライクの補給物質を提供してくれた人達を見て思ったことだ。どれだけ自分たちが裕福な生活を送ってきたのか。どれだけ住みやすく、安全な環境に置かれていたのかを実際に体験すると、その有り難みが酷く、重く、大きく、感じてしまったのだ。

雷真「それで簪。専用機の調子はどうだ？」

簪「うん、雷真からもらったストライクの戦闘データが役に立ってるよ。特にランチャーストライクと【GAT-X102 デュエル・アサルトシユラウド】、【GAT-X103 バスター】がね」

雷真「ああ、そいつらか」

コズミック・イラ71年の時に敵として戦ったGATシリーズのうちの二機。デュエルは白髪でプライドが高い性格のイザーク・ジュール。バスターは金髪で外見からしたチャラそうだが芯があるディアッカ・エルスマン。

そして雷真がストライクに搭乗して互いに命のやり取りをした相手だが、第二次ヤキンドウ工攻防戦後は良き友として仲を深めた二人だ。

簪「でも、あんなIS見たことがないけど。どうやって、あの戦闘データを手に入れたの、雷真？」

雷真「それは、ごめん。まだ、話せない。刀奈にも同じことを言ってるけど、あの二年間に関わる話は決心が着いたら話すから待っていてくれ」

簪は刀奈の方を見ると真剣な顔で頷く。しかし、その瞳には悲しみの色が混ざっていたことを簪は見逃さなかった。

簪「わかった。お姉ちゃんと一緒に雷真の決心が付くまで待ってるね？」

雷真「悪いな」

簪「ううん。だってヒーローはいつも、色んな感情が葛藤するから、それが落ち着くまでは待たないと」

雷真「ありがとう」

## 第9話

一夏「ウオオオオオツ!!」

雷真「あまい！バカみたいに真っ直ぐに突っ込むな！」

一夏「クソっ！」

現在は放課後。今日、1日の授業を終えてから雷真の放課後特訓が現在に行われている。今、行われているメニューは一夏の白式に搭載されている単一仕様能力ワンオフ・アビリティの零落白夜を効率良く最適な場面で使うやり方と近接型と戦い方を肌で覚える特訓をしている。

雷真の装備はソードストライカーである。

雷真「そんなので諦めるのか？」

一夏「まだまだ！」

一夏は雷真に何度吹き飛ばされようが立ち上がり、スラスターを噴かせて突撃する。しかし、この時、一夏の動きに変化が起きた。それは一夏が無意識下で白式のスラスターにエネルギーを二度溜め込み放出した、これにより雷真が手に持つシューベルトゲーベルが空を切ったのだ。

雷真「なにっ!？」

一夏「そこだああああ!!」

この二週間で初めて一夏は雷真に一撃を入れることができた。

一夏「おっしやああああ！」

一夏はやっと雷真に一撃を入れられたことに歓喜の声を上げるが端で観戦している刀奈から注意が入る。

刀奈「一夏くん、まだブザーが鳴ってないわよ。雷真はまだ終わってない！」

一夏「はっ！」

雷真「そうだぜ、一夏。気を抜くのは早すぎだ！」

雷真「セヤアアアッ！」

雷真は瞬<sup>イグニッション・ブースト</sup>時加速で一夏に近づいて、二本の剣で縦横無尽に切り刻む。雷真の左手にはソードのシューベルトゲーベル。右手にはオトリの大型対艦刀を持っていた。

前に整備室でストライクのOSを書き換えをしたため、換装しなくてもそのバックパックの武装が出せるようになっている。

一夏「ぐああああ!!」

計16回の躊躇の無い斬撃で白式のSEはemptyしてしまう。

雷真「一夏、休憩。刀奈にセシリア、頼む」

刀奈「了解よ」

セシリア「わかりましたわ」

次に行うのは雷真の自己特訓。これは毎回、一夏がSEを補給している間に行っているものだ。内容はセシリアのブルー・ティアーズドラグーンのような動きで雷真を狙い、それを回避する。刀奈はセシリアのブルー・ティアーズに当たらないよう気をつけながら、雷真から借りているビームライフルで雷真を狙撃する。

一般人が見ていたら、どんだけバカな特訓をしているんだと言われてもおかしくはない。

雷真「はじめてくれ」

セシリア「行きます！」

刀奈「行くわよ！」



場所は変わって観客席。そこには二組のクラス代表であり、中国代表候補生の凰鈴音がいた。彼女は昼休みに一夏の特訓をしてあげようか提案したところ、『雷真に相手をしてもらっているから』と断られてしまったのだ。そして、その特訓内容が気になり、こっそりと見に来ていたのだ。

鈴「何よ……………あの動き」

鈴は雷真のあまりの動きに驚きを隠せないでいる。鈴は最初、雷真のことを一夏と同じでIS操縦はド素人と考えていたが、その考えは大きく外れた。雷真の動きは、代表候補生…………いや国家代表よりも上に行く動きをやっているのだ。

鈴「あいつ、本当にISを動かして二週間なわけ？あんな動きをそんな短時間でマスターできる訳がないわよ」

そんなことを溢していると雷真が…………

雷真「このまま次に移る」

鈴「次って何よ…………」

鈴は雷真の特訓の状況を見てないで自分も今直ぐにクラス対抗戦に向けて改めて特訓をしないと思う自分と、雷真の特訓を見て自分の

糧にしたいと思う。二人の自分がいた。



次の段階に移行した雷真はエールストライカーから二本のビームサーベルを引き抜き、ビームサーベルでセシリアと刀奈の狙撃を相殺する特訓。そのため雷真はターゲットをとる物を置き、セシリアと刀奈はターゲットを狙ってビームとレーザーを撃つ。

「セシリア「全く当たりませんわね」

刀奈「まあ、雷真だから」

セシリア「それを言われてしまわれると納得してしまう自分が不甲斐なく感じますわ」

白式のS E補給が終わったら、最初と同じ一夏を雷真が相手をしながら特訓。それを見る間、セシリアはブルー・ティアーズを扱いながら自分も移動できるようになる特訓をする。刀奈の方は霧纏ミステリアス・レインメイの淑女で一夏と雷真の戦闘データを録画する。録画したデータはあとで簪に渡している。

雷真「それじゃ、今日の特訓はここまで」

一夏「お、おつかれ」ボロボロ

セシリア「お疲れ様ですわ」

刀奈「お疲れ様」

雷真「あまり、体を冷やすなよ？」

一夏「おう……」

雷真「仕方ねえな。よっ」

一夏「わるい」

雷真「気にするな。毎回のことだ」

そう雷真の特訓に参加した一夏は初日から放課後の特訓後はグダグダになるのだ。そんな一夏を見かねた雷真は肩を貸して引き摺りながら更衣室に運び、ベンチに寝かせるのだ。

一夏「サンキュー」

雷真「おう」

一夏に返答してから更衣室を出て、アリーナの外に出るとそこに鈴がこちらに向かってきていた。

雷真「よう、鈴」

鈴「あら、雷真じゃない」

雷真「一夏なら更衣室のベンチでグダってるぞ」

鈴「そりゃ、あんな特訓してればそうなるわよ」

雷真「やっぱり観客席で見てたのは鈴だったのか」

鈴「気づいてたの？」

雷真「いや、視線は感じてたけど警戒するほどの殺気とかが感じられなかったから誰でもいいやって思ってな」

鈴「アンタ、本当にIS操縦といい規格外だわ」

雷真「それよか、一夏のところへ行ってやれよ」

鈴「わかってるわよ！それじゃあね」

雷真「ああ」

鈴と別れた後、すぐにアリーナの中から刀奈とセシリアが出てくる。二人ともシャワーを浴びていたのか髪が少し潤っている。

刀奈「お待たせ」



セシリア「お待たせしましたわ」

雷真「いや、そんなに待ってないよ。まだ、髪が濡れてるようだけ  
ど大丈夫か？」

刀奈「私は平気よ」

セシリア「私もですわ」

雷真「それじゃ、部屋に戻ろうか」

部屋に戻り、私服に着替えて刀奈と簪、本音を交えて今日の特訓の  
反省会をして食堂で夕飯を食べる。

雷真「簪、専用機の完成まであとのくらいだ？」

簪「ん〜、クラス対抗には間に合わないけど、武装の方は整備科の  
皆が助けてくれてるからなんとか、あとはOSとマルチロックオン・  
システムがね」

雷真「OSはなんとかなるけど、マルチロックオン・システムはな  
……」

まあ、コズミック・イラでキラのフリーダムを整備するのを手伝っ  
た時にマルチロックオン・システムの作り方を教わったことがあるけ  
ど。この世界でフリーダムと同様のマルチロックオン・システムを  
作って流用されては困るし、どうしたものかな……と考えていると  
刀奈が……。

刀奈「雷真、貴方ならマルチロックオン・システムを作れるんじゃないの？」

雷真「ビクッ！」

簪「そうなの？」

雷真「えっと、だな……」

簪「雷真……」上目遣い

雷真「うぐっ！」

簪「お願い……」上目遣い+ウルウル

雷真「わかりました。作らせていただきます」  
簪「やった！」

簪よ。その上目遣いとウルウルのやり方を誰に……。あ、もう犯人がわかりました。だって、双子の姉が妹とハイタッチを交わしてるもの。

こうして簪の上目遣いに負けて俺は、フリーダムのマルチロツクオン・システムより性能を落とした、システムを後日、作ることになった。

鈴が転校してきてから一週間が過ぎた。そしてクラス対抗戦の対戦カードが今朝、発表された。

一回戦は、織斑一夏vs凰鈴音だ。

雷真「へえ、面白い対戦カードだな。この対戦カードにしたのは刀奈だろ？」

刀奈「ええ。強くなりたいたいなら遅かれ早かれ彼女とはぶつかるもの。なら今の実力でどの程度までやれるかを知っておくのもいいと思っただの」

雷真「なるほど。それじゃ、俺は少し一夏に激励を送ってくるよ」

刀奈「行つてらっしゃい」バツ

刀奈は懐から扇子を出し開くとそこには『熱き友情』と書かれていた。

まったく毎回、どうやって書いてるんだか……。

まさかとは思うけど、拡張領域バススロットに色んな言葉を書いた扇子を入れるんじゃないだろうな……。

そんなことを思いながら一夏が待機している第三待機所に向かう

と織斑先生と鉢合わせる。

千冬「黒牙か、どうした？」

雷真「一応、友であり教え子に激励を、と思いまして」

千冬「なるほどな」

待機所に着くと既に山田先生から鈴のIS情報の説明を受けて、白式を起動させていた。

雷真「一夏！」

一夏「んあ、雷真？」

雷真「必ず勝てとは言わない。だが、全力で戦え。そして、仮に負けてもそれを糧にしろ」

一夏「おう！」

真耶『織斑くん。発進どうぞ！』

一夏「雷真、お前の借りるぜ」

一夏「織斑一夏、白式。行きます！」

と声を上げながら一夏はフィールドへ発進して行った。そして雷真は一夏が発進したあとは刀奈たちがいる観客席に戻る。

本音「ライライ、お帰り」モグモグ

本音は萌え袖にも関わらず、その手に持っているポップコーンのバケツトからポップコーンを頬張りながら喋る。

雷真「お前は相変わらず、お菓子を食べてるな」

本音「えへへ」

雷真「褒めてない！それよか、少しくれないか？」

本音「ライライだって、食べるんじゃん。はい」

雷真「そりゃ、俺だって食べるさ」モグモグ

雷真「それで、戦況は？」

刀奈「近接戦闘なら一夏くんが有利ね」

雷真「そうか」

簪「けど、あの中国の子のISにはまだ何かあるはず」

雷真「多分、あの両肩にある武装だな」

雷真の言葉通りに鈴は両肩に装備されている甲龍の龍咆で一夏を攻めて行く。しかし、一夏も負けておらず雷真との特訓の成果なのか龍咆の攻撃をどんどん避けていく。

刀奈「特訓の成果が活きているわね」

雷真「そうじゃなかったら、地獄を見せてやる」

試合は後半になり流れは鈴に向いているように見えるが雷真は一夏が何かをすると考えている。一日だけだが一夏は雷真とはなく姉の千冬と特訓をしたことがあるのだ。雷真はそれが今回、鈴に勝利するキーだと思っている。

そして一夏が鈴に仕掛けようとしたその時、上空からアリーナのシールドバリアを突き破り、爆発した。

刀奈「なにっ?!」

雷真「外部からの攻撃だ?! 簪、熱源の探知を頼む！」

簪「わかった」

雷真は簪に熱源を探知させて、空をみるとチラリとだがアリーナを攻撃してきた黒いやつ以外にも空に紫色の機体が二機。水色の機体が四機をストライクのハイパーセンサーで見ることができた。その後、すぐにアリーナの防護シャッターが起動する。

雷真「あれは!?!」

まさか……………でも、あの機体は間違いなく、コスミック・イラあつち側の機体だ。なんで居るんだ?

俺が……………こつちに帰ってきたから? なら、俺が終わらせないとだめだ。

簪「雷真、上空に未確認熱源反応が6ある!」

雷真「了解。織斑先生! 織斑先生、聞こえますか!」

俺は上空にいるであろう他のアンノウン機体を破壊するために織斑先生に緊急通信を繋げる。

千冬『どうした、黒牙?』

雷真「上空に黒い未確認IS以外に、もう六機、未確認に機体を確認。これより、制圧に向かいます。処罰は後程受けますので!」

千冬『黒牙、お前は何を!?! ちよつとま…………』

織斑先生が言い終わる前に通信を切り、避難誘導とは逆にアリーナの外に向かう。

雷真「クソっ! なんで、アイツらがなんで!」

雷真「皆、そこをどけ!」

ストライクを起動させてソードストライクに換装して扉をぶった切り、アリーナの外に向かう。すると後ろから刀奈が追いかけてくる。

刀奈「雷真、待ちなさい!」

雷真「刀奈、なんで!？」

刀奈「何でじゃないわよ。雷真がアリーナの外に出て行くのを見かけたから追いかけてきたのよ」

雷真「バカ野郎。なんで、そんな危険なことを……………ッ!？」

刀奈「そりゃ、雷真が…………「刀奈!」…え?」

刀奈が言い終わる前に上空から高エネルギーのビーム砲が迫っていた。そして、「ドガン!」と今まで聞いたことのない爆発音と爆風が刀奈を襲う。

刀奈「きゃああああ!!」

雷真「クソッ!」

♪BGM:Zips♪

雷真、尚もこちらにビーム攻撃をしかけてくる敵の攻撃を対ビームシールドで霧散させる。

雷真「刀奈、これを持ってアリーナにいる生徒を守れ」

刀奈「でも、雷真は?」

雷真「大丈夫だから、頼んだぞ!」

刀奈「ちよつと、雷真!？」

俺は対ビームシールドを置いて、ソードからエールストライクで上空にいる。アンノウン機体に迫りながらIS学園から遠ざかるように誘導する。

雷真「やっぱりか、あの機体!【AM-A-953バビ】が二機に【Z

G M F—2000グフ」が四機」

雷真が捉えたのはコスミック・イラでZ A F T軍が開発した。セカンドステージのM<sup>モビルスーツ</sup>S。【A M A—953バビ】に【Z G M F—2000グフ・イグナイテッド】。

雷真はすぐにオープンチャンネルでバビとグフに通信を繋ぐ。

雷真「こちらは、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジン所属、クロキバ・ライシン。そちらの搭乗名と所属部隊を聞きたい。繰り返す」

いまだ、攻撃を仕掛けてくるバビの二機とグフの四機に二度繰り返す、同じ通信をしているが返答がまったくなくない。

雷真「繰り返す。こちらは、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジン所属、クロキバ・ライシン。聞こえているなら、搭乗名と所属部隊を答えてくれ……」

しかし、三回目の通信を返答がない。

雷真「答えろ、Z A F T！お前たちがやっていることは、あのラクス・クラインが掲げた理想を踏みこむ行為だぞ。なのに、何故それがわからない!!」

雷真「あの戦争で何を学んだんだ、お前たちは!!」

けれど雷真の叫びは虚しくバビたちには届かない。

雷真「これが最終通告だ。これを最後に返答がなければ貴君等を敵とみなし、撃墜する。以上だ。」

やはり、と言うべきかバビとグフから返答の通信は無く、ビーム攻

撃がくる。

雷真「わかった、お前らは敵だ。だから躊躇なく俺は撃つ！」  
キュ  
パン

雷真は『殺す』と意識を決めると頭の中で何かが弾ける。すると一気に思考がクリアになり、撃つことに躊躇がなくなる。また、雷真の瞳からハイライトが消える。

雷真「……………」

雷真はストライクをエールからマルチプルアサルトに高速切替で換装する。次に今までストライクにかけていたセーフティロックを全て解除する。

セーフティを解除すると、バビがM A 形態からM S 形態に変形し、腹部の砲門からアルドール複相ビーム砲が放たれるが、それを雷真はマルチプルアサルトのアグニで干渉させて相殺する。相殺に成功するとすかさず、イーゲルシユテルンとビームライフルでバビに近づきながら撃つが……………グフが二機、雷真を左右で挟み、両腕についているうちの片腕でドラウプニル4連装ビームガンを撃ってくる。

それを回避しながらアグニをグフに放ち、一機を撃墜する。もう一機は瞬間加速で近づいて、メインカメラをシユベルトゲベールで切り落とし、そのまま腕を掴みM S 形態のバビに投げつける。バビとグフがぶつかり合ったらシユベルトベーゲルを投擲して串刺し撃墜。

雷真「次！」

残りのバビが一機にグフが二機を倒すために背中からビームサーベルを引き抜き、グフに突撃する。その際、グフは雷真の突撃を防止するためにビームガンを撃ってくるが左腕のシールドで弾きながら



突撃する。

雷真「ウオオオオオツ!!」

そして、シールドを構えたままビームサーベルを突き出し、挿し込む。そのあとは蹴りを入れてビームライフルで撃墜。残りのグフにはシールドに複合させている、ロケットアンカーを放ち捕まえる。捕まえたら、そのままグルグルと振り回し、こちらを狙ってビーム砲を放ったバビのビーム砲の盾にする。それにより、爆煙が起きるがバビは居るはずなので、ビームライフル、アグニ、イーゲンシユテルン、ガンランチャー、対艦バルカンの5つをエネルギーギアが切れるか弾が切れるまで乱射する。

やがて、イーゲンシユテルン、ガンランチャー、対艦バルカンの弾が切れ、ビームライフルとアグニも撃ち過ぎて、ストライクのエネルギーギアが切れてフェイズシフトダウンを起こすまで撃ち続けた。

雷真「はあ、はあ、はあ、はあ、」

SEEDを使った反動で疲労が一気に押し寄せてくるが、刀奈から緊急通信がきているので、それに応じる。

刀奈『雷真、無事なの!?!』

雷真「ああ、敵機を全て撃破。残骸を持ってIS学園に帰投する。それと織斑先生に例の話しをすると伝えてくれ」

刀奈『なんだか、わからないけど。雷真が無事で良かったわ』

雷真「サンキュー」

雷真「……………」

俺は海に浮かぶ、バビとグフの残骸を見ながらこう思う。  
もう、決心を付けなきゃいけない時なんだと。  
そして残骸をある程度回収してISに帰投する。

## 第10話

バビとグフを全て撃破した雷真はマルチプルアサルトからエールに換装して、夕陽に当てられながら刀奈たちが待っているIS学園に帰投する。そして、第三アリーナ付近に降りようとすると、そこに刀奈と簪の姿があった。

ゆっくりと地上に降り立つと泣きながら刀奈と簪がこちらに飛びついてくるのでストライクを解除する。

「らしいいいいん！」ポロポロ

雷真「すまない、心配をかけたな」

刀奈「本当よ！」ポロポロ

簪「いつも、無茶をして！」ポロポロ

雷真「……………」

刀奈「でもね」

簪「うん、でも」

「おかえりなさい、雷真」

雷真「ツ!?!。ああ、ただいま」

それから少しすると織斑先生と山田先生がこちらに来る。

千冬「黒牙。更識から聞いた。今回の件と例の件の話しはしてくれるのだから?」

雷真「はい。ですが一度部屋に戻り、必要な物を取りに行きます。

それから刀奈、虚さんと本音も呼んでくれ。織斑先生に話すことは俺が行方不明になった二年間に関わる話しだ」

刀奈「わかったわ」

千冬「それでは30分後にまたここ、第三アリーナに集合だ」  
雷真「はい」

自室に戻り、お義父さんに送ってもらった着替えの入ったキャリーバックの中にお守りの代わりに入れておいた。オーブ軍の制服を取り出す。

雷真「本当はお守りのつもりで持ってきていたんだがな……」

学園の制服からオーブ軍の制服に着替えて、アリーナに向かう。アリーナに着くと、そこには織斑先生、刀奈、簪、虚さん、本音が揃っていた。

千冬「よし、集まったな。ついてこい」

織斑先生に言われるままついていく。

刀奈「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

刀奈「その服はなに？コスプレ？」

雷真「それについても後で皆に話す」

千冬「着いたぞ。ここは、IS学園でも極秘区画に入る。他言するなよ」

織斑先生の言葉に皆、頷く。

千冬「では、黒牙。先日、話した。お前のIS、【GAT-X105 ストライク】について話してくれ」

雷真「わかりました。ですが、まずは謝罪をさせてください。刀奈たちもすまない。今まで待たせたな」

雷真「改めて自己紹介をさせていただきます。」

雷真は姿勢をただし、オーブの敬礼をする。

刀奈「雷真？」

雷真「自分はオーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジェル所属、クロキバ・ライシン中尉であります。そして、書類では満15とありますが、実際は満18であります」

虚「雷真くんが……」

本音「軍……」

簪「人……」

刀奈「うそ……」

刀奈たちはいまだに雷真が軍人であることを信じられないでいた。しかし、千冬だけは違った。クラス代表決定戦で見せた初心者とは思えないバレロールに戦い方、殺気の出し方。何もかもが軍人なら納得できると思った。

千冬「それでは黒牙中尉。貴君が現在所持している専用機、「GAT-X105 ストライク」について話してもらいたい。ならばに、今回の襲撃時に貴君が私に緊急通信で話した未確認ISについて話してくれ」

雷真「了解！まずは山田先生、ストライクをモニターか、何かに接続できませんか？」

真耶「わかりました」

真耶「黒牙くん、接続できましたよ」

雷真「ありがとうございます。ストライク、コードファイル、コズミック・イラを起動」

『音声認識を起動。音声情報、クロキバ・ライシンを検知。コードファイル、コズミック・イラを起動します』

モニターにはストライクからコズミック・イラのデータが映し出され、皆、モニターに目が釘付けになる。

千冬「これは……………」

雷真「それでは、今から自分がこちら側の世界で行方不明になった二年間の話からですが、実際はコズミック・イラという世界で、年号が西暦ではなく、コズミック・イラ70から74までの四年間のご説明をさせていただきます」

それから雷真の口から出た話はみな、信じ難い物であったが、ストライクによって映しだされる映像は本物だと言わざるを得ない。

C・E・70に起きた、血のバレンタイン。C、E71に起きたザフトによる、ストライク以外のGATシリーズの奪取、ならびにヘリオポリス崩壊、低軌道会戦、第二次ビクトリア攻防戦、マラッカ海峡突破戦、オーブ防衛作戦、第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦などのC、E74のユニウス戦役が終結するまでの四年間の話を包み隠さず全てを話した。

雷真「……………以上です」

千冬「ふむ……………俄には信じ難い話だが、貴君の目を見るに本当のようだな」

雷真「信じていただき、ありがとうございます」

千冬「では、後日改めて、今回の襲撃に現れた、バビ、グフという機体の詳細を話して貰いたい。勝手にこちらが調べたらマズいのだろうか?」

雷真「はい。もし、ストライクや他の機体がこの世界で作られたら戦争が起きかねませんから」

千冬「わかった。では黒牙中尉としての話は終わりだ。今からはIS学園の一年一組に所属する黒牙雷真に話す」

雷真「はい」

千冬「明後日まで反省文50枚と1日の謹慎処分だ。今回は助けら

れた、黒牙」

雷真「いえ、俺は守るもののために戦っただけですから」  
千冬「そうか。では解散！」

織斑先生の号令でその場を後にして、アリーナから出て寮に戻る。  
それと先ほどの話の所為か空気が重い。

刀奈「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

刀奈「さっきの話は全て本当なの………？」

雷真「本当だ。俺はこの手で何人もの人を撃って、殺した」

刀奈「そう……。」

雷真「今から一方的に話すぞ。もし、こんな人殺し野郎と今後一緒に居たくないなら、二人とも婚約を破棄してくれて構わない。俺には止める権利はないから」

刀奈「ッ!？」

簪「ッ!？」

本音「ちよっ、ライライ!？」

虚「雷真くん!？」

雷真「それから虚さんに本音。もしかしたら、これが刀奈と簪の婚約者として最後のお願いかもしれません。今日は二人をお願いします。じゃあ」

俺はそれを最後に逃げるように走り出した。本当は知ってほしくなかった。けれど、それは俺の勝手なエゴだ。

自室に戻り、月が照らす夜空を見る。

雷真「……………」

窓際の椅子に腰を落として、自分で淹れたコーヒーを飲む。

雷真「にがっ！」

雷真「やつぱり、ブラックコーヒーは苦いですよ。バルトフェルトさん」

雷真はコーヒーの良さを教えてくれた元ZAFの隊長で、ストライクに敗れた後はZAFのジェネシス計画を止めるために力を貸してくれた、戦友を思い出している。

バルトフェルト『まだまだ、君もお子ちゃまだな、少年。コーヒーが普通に飲めるようになれば、一人前の男さ。それに世界ではコーヒーのように苦い時があるのを忘れるなよ』

雷真「いつまでも甘えてられないんだよな」

コーヒーを飲み干すとシャワーを浴びて床に付く。明日、刀奈と簪からどんな答えが来ようが受け止めるしか自分にはできないと覚悟を決めて。

昨日の未確認ISとバビ、グフの襲撃から翌日。俺は今、寝苦しく感じている。

雷真「く、苦しい」

その原因を確かめるために首を動かすと掛け布団に二つの大きな山が出来ていた。

雷真「なんだ？」

大きな山の正体が気になり、掛け布団を剥ぐとそこには……寝間着



姿の刀奈と簪が俺の横で人の腹を器用に半分こして枕代わりに使い寝ている。

雷真「こいつら……」

刀奈「すうく、すうく」

簪「ふにゆく」

雷真「つつたく。おい、起きろ二人とも」

「ふあくあ、おはよう雷真」

雷真「おはようさん。てかお前ら。昨日、あんなことがあったのに、よく人の腹を枕にして寝られるな？」

刀奈「だって、ねえ？」

簪「うん。だって、ねえ？」

その首を傾げながら顔を見合わせる所は本当に双子だからそつくりだな、おい。

雷真「で、昨日の答えは言うのか？」

刀奈「ええ」

簪「うん」

雷真「それじゃ、言ってくれ。どんな結末でも俺はお前たちの意見を飲み込むから」

刀奈「それじゃ……」

簪「せくの」

「今まで通り、私たちは雷真が好きだから、離れない！」

雷真「それが答えでいいのか？」

刀奈「そうよ」

簪「雷真は私たちのヒーローだから」

雷真「でも、俺は人を殺してるんだぞ？お前たちと違って、俺の手は血で汚れているんだぞ？」

刀奈「そうね。でも、貴方は誰かを守るために銃を手にした」

簪「そうするしかないって思ったんでしょ？」

雷真「……………」

刀奈「けれど、そのことを仕方ないとは言わないし、言わせない」

簪「だから、その奪った命の分も幸せにならないと」

雷真「……………わかった。これからもよろしく頼む」

刀奈「ええ！」

簪「うん！」

本当に二人には敵わないな。こんな俺を受け入れてくれるのだから。

## 第11話

刀奈「ほら雷真、いくわよ」

簪「いくよ」

雷真「わかった、わかったから、そんなに引つ張るな！」

今日は土曜日。なので学生の人間は大いに休日を楽しんでいる。そんな中、俺たちは久しぶりに実家に帰ってきていた。俺の場合、実家でいいのか？

「「ただいまー」」

更識父「おかえり、三人とも」

刀奈「お父さん、ただいま」

簪「ただいま」

雷真「ただいま戻りました」

俺のたちはそれぞれお義父さんに帰ってきたことを挨拶する。するとお義父さんは何か気づいたのか俺に後で書斎にくるよう伝えてくる。

更識父「雷真くん、あとで私の書斎に来なさい。話がある」  
雷真「わかりました」

手洗いうがいをしてから仏壇に向かい手を合わせる。今は亡き、刀奈たちのお母さんに帰ってきた挨拶をする。

【チーン】

「「……………」」合掌

刀奈「ただいま、お母さん」

簪「ただいま」

雷真「ただいま戻りました」

挨拶が済むと俺はお義父さん書斎へ。刀奈と簪は昼飯の用意をしに台所へ。

お義父さんの書斎の前に立つと四回ノックする。

更識父「入ってきなさい」

雷真「失礼します。それで、どんな話しですか？」

更識父「そんなに固くならなくていいよ。なに、簪のことだよ。まあ、座りなさい」

雷真「わかりました」

お義父さんに勧められるまま、お義父さんと対面するように座布団の上に正座で座る。

更識父「それでは雷真くん、簪は君に告白したかな？」

雷真「はあ？あつ、はい！」

ヤベええ！一瞬反応に遅れた。まさかの簪の話がああ告白の話しだとは思わなかった。それにお義父さんは義理の息子である俺には厳しい時があるが娘には稽古以外は激甘なの、わすれてた！

更識父「そうか、そうか！これで私も安心だよ。君になら娘たちを任せられるしね。」

雷真「ありがとうございます」

更識父「いっそのこと、【楯無】の名前も受け継ぐかね？」

雷真「それはまだ……。けれど、刀奈か簪が襲名しなければならぬのであれば、できることなら俺が襲名したいと思います」

更識父「ハハハハハ！まさか、本気にするとはな、アハハハ。けれど自分で言っておきながら、言うがね。それは厳しいよ、なんせ君は世界で貴重な二人目の男性IS操縦者なんだがらね」

雷真「わかっています」

更識父「なら、更識を君の代で変えてみるのもいいだろう。暗部か

ら離れ、普通の一般家庭にしてしまえば」

雷真「本気で言ってますか？」

更識父「君なら、それができるだろ？」

雷真「はあく、まあ、考えておきますよ」

更識父「それでは、これで話しは終わりだよ」

雷真「わかりました」

こうして、刀奈を含めた簪とも交際することをお義父さんへの報告は終了した。その後は昼飯を食べて、自室でゴロゴロしたり、刀奈、簪と後から帰ってきた本音、虚さんとゲームをしたりして、久しぶりのんびりとできた。

そして、翌日の日曜日は早朝の特訓を終えたあと、俺は教員用駐車場に駐めてある、自分のバイクの【ビートチエイサー2000】の洗車をするために来ている。

雷真「やっぱり、埃を被ってるな」

洗車が終わると右グリップのビートアクセラーを着けて、暗証番号を入力してエンジンをかける。

雷真「よし、エンジンとかは平気だな」

一度、ビートチエイサーに乗り。何回か噴かしていると、簪とその友達らしき生徒がくる。

簪「雷真、バイクの調子はどう？」

雷真「ああ、問題ないよ」

「ねえねえ、黒牙くん。これって、ビートチエイサー2000?」

雷真「ああ、そうだ」

「凄い！本物のビートチエイサーを見られるなんて！」

「だよね。ねえ、黒牙くん。少し乗ってもいい?」

雷真「いいけど」

簪の友達たちは、やはり整備科の生徒らしく。みんな、ビートチェイサーに夢中だ。

「いいなあ、私もビートチェイサー欲しいな」

「でも、私はトライチェイサーかな?」

「私はブルースペイダーかしら」

「私はオートバジンもいいと思うよ」

皆、仮面ライダー好きの人なのか色々なライダーのバイクを話している。無論、俺はクウガ派だ。

(ちなみに作者もです)

雷真「そろそろ、俺は部屋に戻るからいいか?」

「ああ、ごめん」

「黒牙、ありがとう」

「夢が一つ叶ったわ」

雷真「それはよかった」

ビートチェイサーのエンジンを落として、ビートアクセラを抜き、部屋に戻る。

部屋に戻ったあとは簪の専用機に搭載する、マルチロックオン・システムを開発するためにパソコンとにらめっこだ。

その日の夜、山田先生から……………。

雷真「引越し……………ですか?」

山田「はい。部屋の準備が整ったので黒牙くんは一人部屋へ移動してもらいます」

刀奈「ええええええ!? そんな……………雷真と離れるなんて」

山田「決定事項ですから……………」

刀奈「だったら!」

雷真「会長権限を使うなよ?」

刀奈「うぐっ!」

雷真「今までは織斑先生のご好意で何にも言われてないが、他の生徒にバレてみる? 皆に何て言われるか」

刀奈「婚約者ならいいじゃない!」

雷真「親しき仲にも礼儀ありだ。お前は俺がそういうの我慢してるの知ってんだろうが」

刀奈「そりや、雷真だつて男の子だし。発育のいい綺麗で可愛い婚約者の寝間着姿や寝顔を見たら? 狼になりたくなるのも分かるけど」

真耶「あわわわわ!? く、黒牙くん、そうなんですか?」

雷真「山田先生、流石に本当の歳が18で軍人経験がある俺でも、今は健全な男子高校生ですよ? 性欲だつてありますよ。特に刀奈は他の女子より俺へのスキンシップが激しいんですよ」

雷真「その度に何度、煩惱退散と唱えたことか……………」

真耶「それは、ご苦労様です……………」

雷真「正直に言つて、山田先生もその類に入るんですよ」

真耶「私もですか!」

雷真「失礼を承知で言わせてもらいます。山田先生は男性経験がなさすぎで男性との距離感がわかっていません。少し、考えてください」

真耶「わ、わかりました。すみません」

雷真「今後、気をつけてくれれば構いませんよ。それで今から引越しをした方がいいですか?」

真耶「はい。できれば……………」

雷真「わかりました。荷物もそんなにないので直ぐに移動できますよ」

真耶「ありがとうございます」

それから荷物を纏めて山田先生に付いて行くのが……。

真耶「ここが黒牙くんの新しい部屋になります」

雷真「てか、隣じゃないですか!」

そう、引越しと言うからもう少し離れているかと思えば。まさかの隣だとは……………。

刀奈「心配した、私がバカみたいじゃない」

雷真「そうだな」

刀奈「少しは否定しなさいよ!」

こうして、夜は更ける

雷真が引越しをした翌日。一組の教室では来月の学年別トーナメントで優勝したら一夏と付き合えるという噂が流れている。

その後は織斑先生が来て、ホームルームが始まった。

真耶「今日はなんと転校生を紹介します」

山田先生の説明の後に教室に入ってきたのは金髪の男子?だった

シャル「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしく願います」

「お、男?」

シャル「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を……………」



ヤバい、この展開は……!?!。耳詮をセットして耳を手で守り

「「きゃあああああー!」」

女性特有の黄色い音波攻撃が耳栓をしていない、一夏に単独ダメー  
ジを与えた。

一夏「ピクピク

雷真「一夏、ドンマイ」

黄色い歓声が止むとデュノアは驚いた顔をしていた。それもそう  
だろう。最初は誰でもそうなる。

シャル「ふえ?」

「男子、三人目の男子!」

「それも美形、守ってあげたくなる系の」

女子たちはそれぞれ感想を言っているが織斑絶対?によって静ま  
る。

千冬「騒ぐな、静かにしろ。今日は二組と合同でI S 自習を行う。  
各人は速やかに着替えて第二グラウンドに集合。それから織斑、黒  
牙」

雷真「わかってます。織斑先生の手を煩わせませんよ」

千冬「そうか。頼んだぞ」

雷真「了解」

千冬「解散!」

そんじやまあ、いきますか。捕まらないうちに。

雷真「一夏、デユノア、いくぞ！」

一夏「おう！」

シャル「君が黒き……」

雷真「デユノア、話は後だ。今は移動が先だ。」

俺は一夏の席に近づいてデユノアの手を取り教室を出る。一夏は離れないように俺たちに付いてくる。

シャル「うわっ!?!」

デユノアの手を引いて走りながらアリーナに向かう。

シャル「ねえ、なんでそんなに急いでるの？」

雷真「一夏、説明」

一夏「ああ。俺たち男子は女子と違ってアリーナで着替えないといけないんだ。そして、アリーナまで距離がある。着替えで時間が取られて授業に遅れたら千冬姉の出席簿が頭に落ちてくるし」

雷真「アリーナまでの行く道を妨害する奴等がいるしな」

シャル「そ、そうなんだ」

「あつ、織斑くんと黒牙くん、発見」

「見て、転校生の子もいるよ」

雷真「ヤバい！急ぐぞ」

一夏「おう！」

シャル「ちよ、ちよつと!?!」

女子たちに追いかけられながら俺たちはアリーナを目指すが女子たちの連携が上手い。

雷真「クソっ、一夏、別れるぞ！」

一夏「了解」

雷真「デユノア、悪い！」

シャル「うえっ?うえええええ!!」

雷真は一瞬でデュノアをお姫様抱っこで抱え、全力で走る。雷真はスーパーコーデイネーターのため、常人より身体能力が上である。全力で走れば100mを9秒ほどで切れる実力である。

シャル「なんで、皆、僕たちを追いかけるの?」

雷真「それは俺たちが唯一ISを動かせる男子だからだよ」

シャル「そ、そうか」

なんとか女子たちの追尾を振り切りアリーナの更衣室にたどり着く。

雷真「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

シャル「黒牙くん、ありがとう」

雷真「いや、大丈夫。そんじや改めて、黒牙雷真だ。雷真で構わない」

シャル「よろしく、雷真」

一夏「俺のことを忘れてもらっちゃ困るぜ?」

雷真「よう、一夏。お疲れ」

一夏「雷真こそ」

雷真と一夏は互いに拳と拳をぶつけあう。

一夏「俺は織斑一夏。一夏で構わない」

シャル「よろしくね、一夏。二人とも僕のことシャルルでいいよ」

「よろしくな、シャルル」

雷真「あつ、そろそろ着替えないとヤバイ……」

雷真の言葉で三人ともイソイソと着替える。その時、シャルルが何故か悲鳴を上げたり、顔を赤くて染めたりしていた。

千冬「本日から実習を開始する」

「はー！」

千冬「まずは戦闘を実演してもらおう。凰、オルコット！」

凰「はい！」

セシリア「はい！」

千冬「専用機持ちなら直ぐに始められるだろう。前に出ろ」

鈴とセシリアは渋々といった感じが出るが織斑先生が何か耳打をしたら、途端にやる気を出した。

セシリア「それでお相手は？鈴さんでも構いませんが……まさか!?織斑先生、雷真さんではありませんわよね……！」

鈴「無理よ！雷真の実力は国家代表となんら変わらないほどなんだから!？」

鈴とセシリアの二人はまさか、対戦相手が雷真ではないかと心配になり顔が青くなる。それもそのはず、クラス対抗以降は鈴も含めて一夏の特訓を行っているため、雷真と一騎討ちをすることが度々あり対戦すると毎回ボロボロに負けるのだ。また鈴とセシリアの発言で周りの女子から意外と言った声上がる。

「へえ、黒牙くんって、そんなに強いんだ」

「知らなかった」

千冬「流石に私もそこまで鬼ではない。相手は黒牙ではないさ」

流石に死線を四年も生き抜いた、ベテラン操縦者の相手などさせるものか。今の私でも負けるかもしれないのに。と思ったそうだ。

「ふう〜」

織斑先生の言葉で二人は安堵の息を吐く。

雷真「なんだよ？人を化け物のような言い方をしやがって」  
千冬「それで対戦相手だが……」

織斑先生が鈴たちの対戦相手の名前を言う前に空から緑色のISSに乗った、山田先生が回転しながら落ちてくる。

真耶「うわわわ!?退いてください!」

雷真「一夏!回転速度合わせて、山田先生を救出」

一夏「おう!」

一夏は白式を起動させて、回転速度を合わせながら山田先生を捕まえ、白式のスラスタを噴かせて回転速度と落下速度を落とす。

真耶「た、助かりました。織斑くん」

一夏「いえいえ、無事で何よりです」

一夏の動きを見て織斑先生がこちらに来る。

千冬「黒牙、あの動きはお前が教えたのか?」

雷真「ええ、回転落下した状態での敵の攻撃を捌くやり方、相手の落下速度を合わせての距離の取り方、等々」

千冬「なるほどな。流星は死線を生き抜いたことはある」

雷真「どうも」

織斑先生はその後、一夏の下へ行き、何か言ったあと一夏が小さくガツツポーズを取る。

そして、鈴&セシリアvs山田先生の試合だが……。まさかの鈴たちの敗北。

その後、グループに別れてIS操縦者の自習になる。そのため専用機持ちがサポートすることになるが、男子である雷真、一夏、シャルルの三人のグループは何故かお見合いのようになる。また雷真のグループは刀奈の”凍てつく波動”により普通に終了するが、一夏の方は一騒動あったようだ。

そして、授業が終わると一夏から昼ごはんの誘いを受ける。

一夏「なあ、二人とも」

雷真「なんだ？」

シャル「どうしたの？」

一夏「今日の昼、一緒に食べないか？」

雷真「一夏、先に聞くがメンバーは？」

一夏「メンバーは箒にセシリア、鈴だな」

雷真「はあく。俺は箒たちに悪いからシャルと一緒に刀奈たちと食べるよ」

一夏「なんで箒たちが出て来るんだ？」

雷真「いい加減、気がつけよ。唐変木め」

一夏「はあ？」

シャル「??？」

着替えを済ませて、シャルルを連れて刀奈たちと共に食堂で食べることにした。メニューは刀奈が天ぷらうどん、簪が天ぷら蕎麦、俺が鴨せいろ、シャルルはクリームパスタだ。

やはり、ここでも刀奈と簪は双子の特性なのか天ぷらが被っている。

また、既に自己紹介も終わっている。

シャル「それで雷真。なんで、さっきは一夏の誘いを断ったの？」

雷真「あ？それはな、一夏を求めて箒たちは恋の戦争をしてるんだよ」

シャル「じゃあ、一夏のあの反応は……」

雷真「ああ、まったく気がついていない」

簪「それ、雷真が言うの？」

雷真「うぐっ！」

刀奈「そうね。雷真は簪ちゃんのことを気がつけていなかったものね」

雷真「その節は誠に申し訳ございません」

シャル「えっと……何の話？」

雷真「いや、なんでもない」

流石に本音たち以外に俺が刀奈と簪の二人と付き合っていて、婚約関係にあるってバレたら色々と面倒になるか誤魔さないで。

シャル「そ、そう？雷真がそういうなら、聞かないけど」

雷真「助かる」

昼休みが終わって今日に行くと一夏が何故か青い顔をして机に突っ伏していた。

雷真「一夏、大丈夫か？」

一夏「ああ、三人と食べさせ合いをしてたら腹が、な」

雷真「御愁傷様で」

そして、今日の授業が終わり。いつも通り、一夏の特訓を終えて部屋に戻るとそこにはシャルルがいた。

シャル「あれ、雷真？」

雷真「なんだ、新しい同居人はシャルルなのか。よろしくな」

シャル「うん、よろしく」

その後は夕食を食べて今日の授業の復習をしながらコーヒーを飲む。一段落ついたらコーヒーを淹れ直す。

シャル「このコーヒー、美味しいね」

雷真「だろ？ある人から配合を教えしてもらったんだよ」

シャル「そうなんだ。ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

俺はパソコンで簪のマルチロツクオン・システムの最終段階を作りながらシャルルの話を聞く。

シャル「雷真はさ。いつも、早朝と放課後に特訓してるんだよね？」

雷真「ああ。一夏に頼まれてな、だから一夏の特訓にも付き合ってる」

シャル「ならさ、僕も参加してもいいかな？専用機もあるから、力になれると思うし」

雷真「ふむ……。わかった、明日から頼む」

シャル「うん」



## 第12話

シャルルが転入、そして雷真の同居人になった翌日、一組に新たな転入生が……………。

しかし、山田先生も何故か戸惑っている。

真耶「えつと…………。きよ、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました。」

転校生は山田先生の隣にいる銀髪の女子だろう。てか、こいつ軍人じゃん。立ち姿がまんまだもん。

真耶「ドイツから来た、転校生のラウラ・ボーデヴィツヒさんです」「どういうこと?」

「二日連続で転校生だなんて?」

「いくらなんでも、変じゃない?」

真耶「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

千冬「挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

やっぱり、軍人だったよ。てか、織斑先生が教官ってことは……………前に話した。ドイツに居た時の教え子ってことか。流石は教師。

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ボーデヴィツヒが名前を言ってから、しばしの沈黙。

真耶「あ、あの…………以上、ですか?」

ラウラ「以上だ」

ボーデヴィツヒがそういうと、一夏を見て動きだし、そのまま……。

雷真「おい！」ガシッ

ラウラ「何をする、貴様！」

雷真「何故、一夏を殴ろうとした？」

そう、ボーデヴィツヒは一夏の前に行くと言った裏拳をかまそうとしたのを俺が止めたのだ。

ラウラ「何故だ？そんなのは決まっている！その出来損ないの所為で教官は偉業をなすことができなかつたのだからな！」

雷真「なら聞くが、その偉業を成し得たかも知れない人の前で、その教え子が何の抵抗もしない人間に手を上げたら、その人はどう思うかな？」

ラウラ「ツ!?!」バツ

ボーデヴィツヒは雷真の言葉で千冬のことを見る。

千冬「……………」

雷真「一夏と何やら因縁のようなものがあるのは分かった。けれど、お前がしようとしたことは相手に宣戦布告もなく、戦争を仕掛ける愚者のすることだ。気をつけろよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

俺は殺意を少し向けながら言うと、ボーデヴィツヒは殺意に気押されたのか距離を取る。

ラウラ「き、貴様……………」

雷真「貴様じゃない、黒牙雷真だ。覚えなければ覚えればいい」

ラウラ「貴様が二人目の……………」

千冬「そこまでだ！黒牙、ボーデヴィツヒ。席に座れ授業を開始す

る」

雷真「すみません」

ラウラ「申し訳ありません」

朝のホームルームが終わって、放課後になり、今は一夏といつもの特訓メニューの雷真のギリギリの射撃から回避する特訓。

雷真「いくぞ！」

一夏「おう！」

まずは一夏が動き、それを追いかけるように飛ぶ

雷真「それじゃ、始め！」

雷真の合図、ハイパーセンサーにロックオンをされている警告アラームが鳴る。

一夏「ぐっ！やつぱり、まだ雷真のロックオンから簡単に抜け出せないか」

何度もバレルロールやジグザグ運動をするが雷真のギリギリ当たる射撃からは逃れられない。



雷真と一夏の追いかけてっこを見ているシャルルは歓喜の声をもらす。

シャル「凄い……………雷真はわざと一夏にギリギリ当たるか当たらないかの所を狙って撃ってるんだね」

刀奈「そうよ。雷真はいつも、放課後の特訓で一夏くんに射撃回避のやり方を教えるんだけど、雷真曰く、『一夏は頭で覚えるより、実戦的にやった方が覚えがいい』って言ったの」

シャル「そうなんだ」

刀奈「それにしても雷真ったら、特訓と言っておきながら遊んでるわね」

セシリア「そうですわね。雷真さん、遊んでらっしゃいますわね」

鈴「本当にね」

箒「だな」

シャル「え？雷真はあれで遊んでるの？」

刀奈「そうよ。雷真が本気を出したら、私でも勝てないもの。生徒会長である、この私ですら。」

この前だって、手加減されたし……………」

シャル「ちなみに皆、流星に雷真に一撃くらいは…………？」

刀奈以外「……………」「……………」「……………」「……………」「……………」

シャル「うそ……………」

刀奈「本当よ。私も雷真との初戦でなんとか運良く一撃を入れられたけど、そのあとは滅多に入らないもの」

シャル「雷真って、そんなに凄いんだね……………」

刀奈「当たり前よ。なんせ死線を生き抜いて来たんだもの」ボソツ

刀奈のその最後の呟きは誰にも聞かれなかった。



ある程度、特訓が終わると一度休憩に入り、現在は刀奈とセシリアが模擬戦を行っている。

雷真「なあ、シャルル」

シャル「なに？」

雷真「悪いんだけど、一夏に射撃の特性を教えてやってくれないか？俺はビームライフルとコンバインシールドっていう、シールドと複合されたバルカンしかロックを外せなくて。あまり他の射撃武器を試したことがないんだ」

シャル「二つだけ？他にはないの？」

雷真「あるにはあるが、ストライクしか装備が出来ないんだよ。一種の単一仕様能力みたいな？」

ワンオフ・アビリティ

シャル「なるほどね。わかったよ、僕で良ければ教えるよ」

雷真「頼む」

シャルルに一夏の射撃特性の説明を頼んでいる間に簪のマルチロック・システムのテストを刀奈に手伝ってもらったことにした。

雷真「刀奈、頼む」

刀奈「わかったわ」

刀奈はアクア・ナノマシンでターゲットを10体作り、それを雷真がランチャーのミサイルで撃ち落とす。

雷真「いくぞ！」

刀奈「いいわよ」

雷真「ターゲット、ロック。ミサイル発射！」

ランチャーのミサイルを10発連続で放ち、ターゲットにちゃんと着弾するかを見ていると10発中、7発が命中。残り3発はあと少しの所で外れてしまった。

雷真「少し、ズレがあるな」

雷真はシステムのズレを直すためにホロウ・ウィンドウで修正していく。

雷真「熱源探知システムは問題無し。熱源追尾システムは………少しズレがあるな。他には、着弾までの射程距離の演算処理は問題無し。あとは………」ブツブツ

刀奈「相変わらず、早いわね」

セシリア「刀奈さん。雷真さんは今、何をやってらっしゃるんですか？」

刀奈「雷真は、簪ちゃんの専用機に搭載する、マルチロックオン・システムの開発をしているのよ。もうあと少しで完成みたいけど」

鈴「はあ!?!マジで言ってるの?各国が必死こいて、そのシステムを作ってるのに、アイツは一人でそれを軽々と製作してるわけ!?!」

刀奈「元々は簪ちゃんの作ってたデータを元に雷真が改良してたんだけどね」

鈴「それでもやっぱり、アイツは規格外だわ………」  
箒「本当にな」

箒、セシリア、鈴は雷真のマルチロックオン・システムを一人で大半を製作してしまうことに度肝を抜かれていた。

そんな中、観客席にいる生徒から声上がる。

「ねえ、ちょっとアレ？」

「うそ、ドイツの第三世代じゃない」

「まだ、本国でのトライアル段階だって聞いていたけど……」

そのドイツの第三世代機に乗っていたのは今朝ホームルームで一夏のことを殴ろうした、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

セシリア「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

鈴「なに、アイツなの？一夏のことをひっぱたこうとした、ドイツの代表候補生って」

箒「……………」

ラウラ「織斑一夏」

一夏「なんだよ？」

ラウラ「貴様も専用機持ちだそうだな？なら話が早い。私と戦え」  
シャル「えっ？」

一夏「嫌だ。理由がねえよ」

ラウラ「貴様に無くても、私にはある」

一夏「今で無くてもいいだろ？もうすぐ、クラスリーグマッチなんだが、その時で」

ラウラ「ならば……………」

ラウラは問答無用で一夏に向けて右肩に装備している、大型のレールカノンを放った。

がしかし、そのレールカノンは赤と白の混じったビームによって阻まれる。そのビームの正体は雷真の乗る、ランチャーストライクのアグニだ。

ラウラ「誰だ！」

雷真「そうカツカすんなよ。軍人ならば、冷静に状況を対処するの

が常識だろう」

ラウラ「その声は今朝の……。貴様も専用機を持っているとはな」

雷真「どうする、このまま続けるか？けど、そろそろ教師陣が来るけどな」

雷真がそういうと、言葉通りアリーナ内に教師の声が響く。

『その生徒、何をやっている！』

ラウラ「フツ。今日のところは引いてやろう」

雷真「負け犬の遠吠えにしか聞こえないがな？」

ラウラ「……………」

ラウラはそのまま、シユヴァルツエア・レーゲンを待機状態に戻し、アリーナを去っていく。

箒「一体、どういうことだ。一夏？」

セシリア「あの方と貴方の間に何がありましたの？」

箒とセシリアが一夏とラウラの関係を聞き、捲し立てるが、それを雷真が止める。

雷真「ストップだ。二人とも」

箒「雷真」

セシリア「雷真さん」

雷真「二人とも、一夏にも知られたくない秘密があるはずだ。お前らだってそうだろう？俺だってそうだからな」

箒「それは……」

セシリア「確かに……」

腑に落ちていなさそうな三人に近づき、耳打ちをする。



雷真「それに一夏だって、しつこい女は好みじゃないかもしれないぜ。気をつけるよ、お三方」ボソツ

三人「「ッ!?!」」

雷真「ああ、場が白けたな。一度、休憩しようぜ。小腹が減ると思っつて、お菓子を作ってきたから」

刀奈「本当!」

雷真「ああ、今日はラスクを作ってきたんだ。よかつたら食べてくれ」

ラウラによって場が白けてしまったが、雷真のお菓子で空気が穏やかになる。

また、女性陣は男である雷真の料理の腕に『女として負けた』と思っただそうな。

雷真のお菓子を食べたあと、放課後の特訓でアリーナの使用限界時間まで使い、女性陣と別れ、更衣室で着替えていると、一夏が何やら思い悩んでいるようだ。

一夏「……………」

シャル「一夏、大丈夫?」

一夏「あ、ああ。雷真もさつきは助かった、サンキューな」

雷真「気にするな、友達だろ?」

一夏「本当にお前と友達になれて、よかつたぜ」

雷真「よせよ、照れ臭い」

シャル「男の友情だね。それじゃ、二人とも僕は先に部屋に戻るよ」

一夏「え?ここでシャワーを浴びて行かないのか?お前、いつもそうだよな?」

雷真「一夏、シャルルだって自分のペースでゆつくりとシャワーを

浴びたいんだろう？アリーナだとゆつくりできないし、部屋に戻る前に湯冷めして風邪を引いちまうかもしれないだろう？」

一夏「なるほどな。悪かった、シャルル」

シャル「ううん、大丈夫。それじゃ、雷真。部屋のシャワー、先に使わせてもらうね？」

雷真「ああ」

一夏と一緒に制服に着替えてアリーナを出る。

雷真「それじゃ、一夏。俺はこの後は整備室に用事があるから」

一夏「そうなのか？わかった、またな」

雷真「おう」

一夏と別れた後は、簪が居る整備室に向かう。

雷真「失礼しまゝす」

簪「あつ、雷真」

本音「おく、ライライだ」

雷真「専用機の調子はどうだ？」

簪「大分完成してるよ。あとは、テスト飛行と雷真が今作ってるマルチロックオン・システムを組み込んで完成だよ」

雷真「そうか。それじゃほい」

雷真は首から待機状態のストライクを簪に渡す。

簪「ありがとう。今日も特訓の戦闘データを貰うね」

雷真「それだけじゃないぜ」ニヤリ

簪「えっ……まさか!? 完成したの、マルチロックオン・システムが!？」

雷真「おう。性能はランチャー・ストライクで確証済みだ。そのデータもストライクに入ってるから抽出すればいい」

簪「ありがとう、雷真。これなら、クラスリーグマッチまでには間に合うかもしれない」

雷真「それは良かった」

本音「ねえ、ライライ」

雷真「なんだ？」

本音「お菓子ない？」

雷真「まったく、本音。お前はいつも、そればかりだな？」

本音「だつて、ライライが作るお菓子は凄く美味しいんだもん。駄目かな、雷真？」

雷真「久しぶりに、お前に名前で呼ばれたな。ほら、ラスクだ」

本音「わくわく、ライライ。ありがとう」

俺は喜んでいる本音にラスクの入ったバスケットを渡す。

俺の年齢が実際、3つも離れているためか本音が妹のように感じてしまう。

バスケットを受け取った本音は、簪の専用機を作るのを手伝っている整備科の生徒にもきちんと分けてから食べている。

「なにこれ……美味しい！」

「それに味が4つもある！」

「プレーンに、チョコレート、メープル、ガリリック」

「なんか……女として負けた感が否めないわ」

「「「確かに……」」」

それから、しばらく整備科の皆とブレークタイムを楽しむ。簪がストライクのデータを抽出し終わり、シャルルもシャワーを浴び終わっ

た頃だろうと思い、整備室を出て部屋に戻る。

雷真「簪の専用機もあと少しか……。」

部屋に戻ってきたので手洗いうがいをしようと思つたと脱衣場に入るとそこには……………。

雷真「えっ?」

シャル「えっ?」

束ねていた髪を解いて長くし前屈みになりパンツを履こうしているシャルルがいた。しかし、注目する点はそこではなく……………シャルルが持つパンツだ。それは男物のボクサーやトランクではなく、はたまた子供が履くようなブリーフではなかった。そう、シャルルの手には女性用のショーツがあった。

シャル「……………」

雷真「……………」

雷真「な、なんか、ごめん。シャルルがそんな性癖を持っているなんて思わなかった。大丈夫、安心して、誰にも言わないから」ボタン

俺はその言葉と、共に脱衣場の扉を閉じる。すると脱衣場の中から……………

シャル『うわああああ!?!』

こんな時は冷静になるためにコーヒーを飲もう。うん、そうしよう。それと今度からシャルルに気をつけないと。

阿部さん、みたいに「ア”ア”ア”ア”ア”く!!」、みたいなことになりかねん。

シャルルの脱衣場での叫びと俺の脳内の叫びが終わって少し経つ

たころ、脱衣場からシャルルが出て来た。

シャル「ら、雷真……」

雷真「だ、だだ大丈夫だ、シャルル。マジでシャルルがあんな性癖を持つていることを誰に言わないから」

シャル「そうじゃなくて……こっち見てよ」

雷真「わ、分かった」ギギギギ

シャルルに言われるまま、シャルルの方に向くと……二度目だが、そこには男の物でないものが俺の視界に入った。それはパンツとかではなく、もっと分かりやすい部分、そう胸部が男性ではないほど、膨らんでいるのだ。

雷真「ん？えっ……」

雷真「ええええええええ!？」

今度は脳内では無く、部屋に響くほど叫んでしまった。

## 第13話

脱衣場の一件で空気が凄く重い。また、シャルルの胸部が膨らんでいることに理解ができないでいる。シャルルは男子のほず、なのになんで……。

雷真「……………」

シャル「……………」

雷真「えつと……シャルル。その胸部の、ふ、膨らみは……？」

シャル「……………」

雷真「まさか、パッド!？」

シャル「違うよ!」

雷真「つてことはつまり……………自前?」

シャル「……………」コクリ

雷真「えつとつまり、シャルルは……霊長類ヒト科の男じゃくて、男性でもなくて、はたまた男の子や男の娘でもなく。霊長類ヒト科の女で、女性であり、女の子で、一人称がMR.ではなくMS.で、トイレの標識は黒じゃなく赤の方で、生物表示では雄ではなく雌。そういうことなのか?」

シャル「うん……。てか、途中から質問の内容がおかしくなっていない?トイレ標識とか、生物表示とかさ」

雷真「いや、俺でも流石にこれは……………」

シャル「僕だって、女だつてことを黙ってたのは悪かったけどさ」

雷真「まあ、とりあえず。なんで、シャルルは男に扮してIS学園に来た?なんてのは野暮か。まあ、大方予想はついてるから聞かないし。それに聞かれたくないだろう?」

シャル「なん……で?」

雷真「俺も人に聞かれて欲しくないことがあるからな」

その時の雷真の瞳には悲しみの色がシャルルには見て取れた。こ

れにより、シャルルは決心をする。

シャル「ううん、雷真には知ってほしい。なんで、僕が男の格好をして、IS学園に来たのかを」

雷真「分かった」

シャル「僕がこの学園に来たのはね、実家からそうしろって命令されたんだ」

雷真「シャルルの実家って、デュノア社だよな？」

シャル「うん……。僕の父がその社長をやっているんだよ。その人から直接の命令でね」

雷真「は？なんで、シャルルがそんなことを命令されないといけないんだよ」

シャル「雷真、僕はね。父の本妻の子じゃないんだよ」

雷真「……………」

シャル「父とはねずっと別々に暮らしてたんだけど、二年前に引き取られたんだ。そう、僕の実のお母さんが亡くなった時、デュノアの家の人が迎えにきてね」

シャル「それで色々と検査を受ける過程でIS適性が高いことがわかって、で非公式であつたけれどテストパイロットをやることになつてね」

シャル「でも、父に会ったのはたったの二回だけ。話をした時間は一時間にも満たないと思う」

雷真「……………」

シャル「その後のことだよ、会社が経営危機に陥ったのは…………」

雷真「世界第三位のISメーカーでも第三世代機が完成していないから、その立場は危うくなるわけか」

シャル「その通り、第三世代機の開発が形にならなくてね。このままだと、開発権限が剥奪されてしまうかもしれないところまで来てね」

雷真「それがシャルルの男装になんの関係があるんだよ？」

シャル「簡単だよ、注目を集めるための広告塔。それに雷真が思っ

ている通り、男性操縦者情報とその専用機の機体情報が手に入るかもって……。そう、雷真、君と一夏のデータを手に入れるために命令されたんだよ、あの人にね」

雷真「……………」

シャル「はあー、本当のことを話せて楽になったよ、聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついていて、ごめんさい」

雷真「シャルルはこのままでいいのか？一応、シャルルから秘密を聞いたから俺も話す。俺は軍人だ」

シャル「え？雷真が軍……人？」

雷真「だからシャルルがやっていることは他国へのスパイだ。それが日本政府にバレたら、日本政府がフランス政府に告発して、シャルルは本国に強制送還されて、牢獄に入れられるぞ？」

シャル「……………」

雷真「お前はそんなのでいいのか？それに俺たち子供は親を選べない。親は子を望めるが俺たち子供はそんなことすら望めないんだよ！俺たちは産まれてからじゃないと何にも望めないんだ」

雷真「だからシャルル。今は望んでいいんだよ。お前が生きたいように、暮らしたいように、過ごしたいように、心の底から願う、お前自身の生きざまをさ」

シャル「僕は……僕は……僕は」

雷真「大丈夫だ、安心しろ。だから、言ってごらん？」

シャル「僕は皆とまだ一緒に居たいよ！もつと普通の女の子みたいにお洒落したり、恋をしたいよ！誰か助けてよ！」ポロポロ

雷真「やつと本心から助けを求めたな」

シャル「えっ？」ポロポロ

雷真「安心しろ、俺がお前の……最後の希望だ」

シャル「雷……真」ポロポロ

雷真「さて、やりますか！俺の友達を泣かせたんだ。それ相応の制裁は受けてもらうぜ、フランス政府とデユノア社長様よ！」ゴキゴキ

肩の骨を鳴らしてからパソコンを開き、ネットで色んなサイトを経



由しながら、偽造と攪乱工作を行い、デュノア社にハッキングする。これにより、フランス政府とデュノア社の黒い部分がアレよアレよと出てくる。

雷真「おいおい、マジかよ。フランス政府も真っ黒かよ。笑えねえな、ああ笑えねえよ」

シャル「雷真、君は一体何をやっているの？」

雷真「そんなの決まってるじゃん、フランス政府とデュノア社にハッキングをかけてるんだよ。てか、こんな簡単なセキュリティでよくもまあ、今まで情報が無事だったな。マジでこんなのはお遊びと何ら変わらないぞ？」コスミック・イラ「あっち側」なら小学生でもこんなことができるぞ」

シャル「あっち側って？」

雷真「いや、こっちの話だから気にするな。よし、これで終了」

ハッキングが終わると携帯を使い国際電話で、デュノア社に連絡を取る。そして、デュノア社の社長が出て来たら、まずは名前をミスターKと名乗り、デュノア社が秘密裏にしていたことを各国の政府に告発するぞと脅し、シャルルの親権を更識に変更させる。

次はフランス政府に国際電話を繋ぎ、フランス政府のお偉いさん方にミスターKと名乗り、これまたデュノア社と同様にフランス政府が秘密裏にしている情報を各国の政府に告発するぞと脅し、シャルルが仮にフランスに帰国しても投獄をしないよう約束させる。

雷真「ふいふ、疲れたが全部終わった。あとはお義父さんの方に連絡を入れるだけか」

携帯を今度はお義父さんに繋げる。

更識父『どうしたんだい、雷真くん？』

雷真「いきなりですが、三人目の娘は欲しくありませんか？」

更識父『えっ?』

それからお義父さんにシャルルと俺のハツキングしたことにより得た、経緯や情報を話した。それにより、お義父さんは快くシャルルを三人目の娘として迎え入れてくれることを約束してくれた。

雷真「では、今度は夏休みに、はい。では、おやすみなさい」

シャル「終わったの雷真?」

雷真「ああ。それとコーヒーをありがとうな」

シャル「ううん。どうせ、これが最後になるかもしれないし」

雷真「それなんだが……。シャルルはフランスに帰国しても投獄されないことになったから。フランス政府をおど……ンン! フランス政府と話をつけたから、あとデュノア社にも話をつけて親権を奪ったから。だからシャルル、お前はもう籠の中の小鳥じゃなくて、自由に飛んでいいんだよ」

シャル「えっ? それ………本当なの、雷真?」

雷真「ああ、本当だ」

シャル「つてことは僕は、牢獄に入れられないで済むの?」ポロポロ

雷真「ああ」

シャル「普通に自由に生きていけるの?」ポロポロ

雷真「ああ」

シャル「普通の女の子みたいにお洒落してもいいの?」ポロポロ

雷真「ああ。だけど、女の子としてこの学園で生活するはちよつと待つてな。今はまだ、早いから」

シャル「うん! 雷真が救ってくれた命だもん、だから雷真が決めて」

雷真「ちよつとまで、シャルル! 今の発言はいかんせん、良くないと思うぞ」

シャル「なんで?」

雷真「今の発言を端から聞いたら、一種のプロポーズに聞こえるから注意しろよ」

シャル「ぷ、ぷぷぷプロポーズ!?!?!?!?!」プシユ

雷真「それじゃ、飯に行こうぜ。先に出てるから準備をしてくれ」  
シャル「うん」

先に部屋を出ると、そこには……鬼の形相をしている、刀奈と簪が居た。その後ろには虚さんと本音も居た。

雷真「ど、どうしたんだ？刀奈に簪。そんな鬼の形相で……」

刀奈「どうした、ですって？」ゴゴゴゴ

簪「そうだね。なぜ私たちが居ることが分からないなら自分の胸に聞くといいよ？」ゴゴゴゴ

雷真「え、えつと……」

一応、簪に言われた通りに手を胸に当てながら虚さんに助けを求める視線を送ると、虚さんはハンドサインで電話を表した。あつ、なるほどね。お義父さんからの電話……終わったわ。

雷真「えつと、お二方に新たな姉妹が出来て良かったですね」ガタガタ

刀奈「言い残すことは？」

簪「それだけ？」

雷真「ひ、いや!?!」

更識姉妹「私たちという者が居ながら……。他の女なんか……いつそ一回、死んでこい!?!この浮気者!!」

雷真「ギヤアアアア!!」

また、男の格好になって部屋から出て来たシャルルがまず見たのは、頭から湯気を出して地面にめり込んでいる雷真と、こちらを鬼の形相で睨んでいる更識姉妹の姿だった。

シャル「え、えつとこの状況は一体……何？」

雷真「……………」チーン

刀奈「シャルルくん、少しお話がしたいの」ゴゴゴゴ

簪「だから、一緒に来てくれるよね？」ゴゴゴゴ

シャル「は、はい！」

その言葉の後、シャルルと撃沈している雷真は刀奈と簪によって部屋の中でO☆H A☆N A☆S H Iをされたそう。

## 第14話

刀奈と簪のO☆HA☆NA☆SHIを受けたあとは刀奈たちと共に食堂に行ったが、食堂にいる生徒が俺のボロボロの姿に驚いていた。

そして、その翌日。教室ではまた、一夏の例の噂が流れているようだ。

雷真「一夏も大変だな」苦笑

シャル「そうだね」苦笑

またそして、今日の放課後は一夏たちと特訓をせずに簪の専用機『打鉄式式』のテスト飛行だ。

雷真「簪、なんかあつたら叫べよ？助けるから」

簪「大丈夫だよ。雷真やお姉ちゃん、皆が協力してくれたんだから、きっと大丈夫」

雷真「けど、無茶はするなよ？」

簪「わかってる」

簪はそういつて打鉄式式を纏い、カタパルトに乗る。カタパルトの進路がクリアされたら出撃準備の完了だ。

簪「更識簪。打鉄式式、行きます！」

その言葉を合図に簪は打鉄式式で空を飛んだ。念のため、俺もストライクで出ることにする。装備はエールストライカーにするつもりだ。

雷真「ストライク、起動！」

今回は管制をする人が誰も居ないが頭の中でコズミック・イラの義姉である、ミリアリア・ハウの管制をする声を思い出す。

ミリアリア『APUオンライン。カタパルト接続。エールストライカー、スタンバイ。』

足をカタパルトに接続してからストライクにエールストライカーとビームライフル、対ビームシールドと一緒に装備する。

ミリアリア『各パワーフロウ正常。進路クリア。ストライク、発進、どうぞー！』

雷真「黒牙雷真、ストライク。行きます！」

カタパルトを起動させて、空へとストライクに乗る、雷真を射出する。射出された雷真は綺麗なバレルロールで空を飛ぶ。

カタパルトから出ると一度、地上に降りて、簪の様子を見る。

簪「機体制御は大丈夫。あとはハイパーセンサーの接続と連動。姿勢保持スラスター問題無し。展開時のポイントを調整。PIC干渉領域からズラして、グラビティーヘッドを機体前方6cm調整。それから脚部ブラスターバランスを4で再点火」

簪は飛行をしながらホロウ・ウィンドウをタイピングして、打鉄式式の微調整をしていく。

簪「全システム……良好。やった、ついに私の専用機が完成した！」

簪は空を飛びながら喜んでいるが、それもつかの間。いきなり打鉄式式の全スラスターが止まったのである。

簪「えっ……?」

簪「きゃあああああ!!」

打鉄式式の重さと重力により、簪は勢いよく地面へと落下していく。

簪「怖い………怖いよ!お願い、助けて」ポロポロ

簪「助けて、雷真!!」ポロポロ

簪は自分のヒーローで恋人であり、婚約者の名前を叫んだ。その叫びに答えたかのように空の彼方から全身装甲でトリコロールカラーのISが高速で、簪に向かって飛んでくる。それは、雷真が乗る【GAT-X105ストライク】だ。

しかし、いつもデータで見ているストライクより、明らかに飛行速度が早い。

雷真「かんざしいいい!!」

簪「雷真……?」ポロポロ

雷真は通常はかけているストライクのセーフティを全て解除して、落下している簪を助けた。簪を安心させるために頭部の装甲を外す。

雷真「簪、大丈夫か?」

簪「うん……。雷真が助けてくれたお陰で無事だよ。それと雷真、目が……」

雷真「ああ、これか。前に話した、”コスミック・イラあつち側”で覚醒した力だ。」

簪「なんか、格好いいね。それ」

雷真「そうか?」

簪「うん」

雷真「そうか」

簪をお姫様抱っこのまま、ゆっくりと地上に降りて、簪を降ろす。しかし、簪は落下する恐怖で腰が抜けた。そのまま簪のお願いでお姫様抱っこの状態で整備室に戻り、全てのスラスターのシステムを調べたが異常が見られなかった。



く少し時間を遡り、簪が言った雷真の目についてく

ストライクを装着して、地上から簪を見ているがあまり心配することはないみたいだ。

なので、簪と共に空を飛ぼうとエールのスラスターと脚部のバーニアを噴かせる。

また、俺は子供じみたイタズラをしようと思い、簪を驚かせるために遠回りをする。

しかし、この時、もっと早く簪に近づいていれば、もっと安全に助けることが出来たのではないかと後悔する。

雷真「なんとか、形に成ってるな。あとは実戦訓練で慣れていくだけだな」

そんなことを口に出していると、いきなり簪の専用機の打鉄式式のスラスターが全て停止し、そのまま地面に向けて落下していく。



雷真「簪は何をやってるんだ？」

簪の行動を疑問に思い、簪に近づくと……………。

簪「助けて、雷真!!」ポロポロ

雷真「ツ!」キュパーン

この時、簪の『助けて』の声がトリガーになったのかは分からないが、意識をしていないのに俺の頭の中の何かが弾け、SEEDの発動状況になった。

なんで、SEEDが…………?それより、今は簪が優先だ。絶対に死なせない!

すぐにストライクにかけてあるセーフティを全て解除する。これにより、今までよりもストライクの速力が上がる。

雷真「かんざしいいいい!」

簪「雷真……………?」ポロポロ

雷真「簪、大丈夫か？」

簪「うん…………。雷真が助けてくれたお陰で無事だよ。それと雷真、目が……………」

雷真「ああ、これか。前に話した、”コスミック・イラあつち側”で覚醒した力だ」

簪「なんか、格好いいね。それ」

雷真「そうか？」

簪「うん」

雷真「そうか」

く現在に戻りく

雷真「このまま、地上に降りるからな」

簪「う、うん…………。／／／／／／」

ゆっくり、減速しながら地上に降りる。

雷真「簪、立てるか？」

簪「……………」

雷真「簪？」

簪「ごめん……腰が抜けたみたい」

雷真「プツ、アハハハ」

簪「笑うこと無いじゃない！もう……。／／／／」

雷真「なら、ちよつと我慢してくれな」

簪「えっ？」

俺は簪を一度観客席に座らせてから、簪に背中を向け、腰を落とす

雷真「よし、いいぞ」

簪「えっ？これって……」

雷真「そつ、おんぶの体勢だ」

簪「本当はあのままお姫様抱っこでよかったんだけどな……」

雷真「なら、そうするか？」

簪「いいの？」

雷真「ああ。俺は構わないよ？」

簪「じゃあ、お願いします」

雷真「了解、お姫様」

簪「お、お姫様!？」

雷真「だつて、そうだろ？簪と刀奈は俺にとっては自分の命と同じくらい大切な《花》なんだ」

簪「花……。なんで、私たちは花なの？」

雷真「前にも話したが俺は、コスミック・イラあつち側で本当の戦争を二度も経験しているからな。それで戦争で散った《花》は戻らないけど、新しく植えることはできると、友達は言ってたんだよ」

簪「そうなんだ」

雷真「だから、思ったんだ。俺は、俺の大切な人の平和を守るため

に戦いたいと。もう二度とあんな悲劇は繰り返したくないから……。  
今度こそ、《花》を散らせたなりなんかさせない、絶対に」

簪「雷真……」

雷真「湿っぽい話しは終わり。そろそろ、整備室に着くぞ」

簪「うん、ありがとう」

それから簪や整備科の人と共に打鉄式式のシステムの不備を探していくが見当たらない。しかし……………。

雷真「簪、打鉄式式は一夏が見つかる前までは開発が優先されてたんだろう?」

簪「そうだよ?」

雷真「一応、内部点検してみたら?」

それから色々と点検とかをしているがスラスタが止まった原因は分からなかった。

その後は簪たちと別れて、一夏たちを見に第三アリーナに向かっていると……。

一夏「よう、雷真」

雷真「おう、まだアリーナに行ってなかったのか」

シャル「うん。一夏が今日の授業で分からない部分があったみたいで僕が教えてたんだ」

雷真「なるほどな」

一夏がアリーナに行っていない経緯をシャルルに聞いているとクラスの女子たちが廊下を走りながら、こんなことを言っていた。

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって」

雷真「おい、今の!」

一夏「ああ！」  
シャル「急がないと！」

俺たちは全力疾走で第三アリーナに向けて走る。

## 第15話

雷真たちはクラスの子供たちが第三アリーナで代表候補生が模擬戦をしていると聞き、急いで三人は全力で第三アリーナを目指し、途中で箒とも合流した。そして到着すると、そこにはセシリアと鈴がラウラに2対1で押されていた。

シャル「鳳さんにオルコットさんだ」

箒「ラウラ・ボーデヴィツヒも」

一夏「何、してるんだ。あいつら?」

鈴「喰らえ!」

ラウラ「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前にはな!」

鈴はセシリアと共に吹き飛ばされて壁にぶつかかるがすぐに体制を直し、甲龍の龍咆をラウラに放つ。しかし、ラウラが右手を前に出すと結界のバリアのような物が生まれ、龍咆の攻撃がラウラに当たる前に爆発する

鈴「なっ!?!」

一夏「龍咆を止めやがった!?!」

シャル「A I Cだ」

雷真「A I C?」

箒「そうか。あれを装備していたから龍咆を避け様としなかったんだ」

一夏「A、I、C、なんだそれ?」

シャル「シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器、Active Inertial Canceller」

箒「慣性停止能力とも言う」

雷真「なるほど、だからか」

一夏「ふくん」

箒「本当に分かっているのか？」

一夏「今見た。それだけで十分だ」

雷真「なら、いいがな」

鈴は再び、龍咆でラウラを狙うが地上を滑るように龍咆を回避していく。またはA I Cで無力化していく。

鈴「ここまで相性が悪いなんて。でも、実力なら雷真の方が上ね」

ラウラはシュヴァルツエア・レーゲンから無数のワイヤーブレードを射出して鈴を攻め立てる。そして、ワイヤーブレードは鈴の足に巻き付く。

鈴「わあっ!!」

ラウラ「この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

ラウラが笑っているが、すぐに今まで攻撃していなかった。セシリアがビット兵器で攻撃し、ラウラの隙を狙う。これにより、ラウラはA I Cを使うために隙ができた。それをセシリアは見逃さずにスターライトm k IIで狙う。

セシリア「動きが止まりましたわね？」

ラウラ「貴様もな」

セシリアはスターライトm k IIをラウラはレールカノンをお互いに放ち、爆発。そして、ラウラはワイヤーブレードを巻き付けている鈴を引っ張り、セシリアに向けて当てる

ラウラ「フンッ！」

鈴「きゃあああああ!!」

セシリア「きゃあああ!!」

鈴とセシリアは勢いよく、ぶつかり合い地面に向けて落下した。倒れながらも鈴はお返しとばかりに龍咆を撃とうするが……。

ラウラ「あまいな。この状況でウエイトのある空間圧力兵器を使うとは」

ラウラはつまらないと言った顔をしながら鈴にレールカノンを放つ。それと同時にセシリアが至近距離でミサイルをラウラに向けて発射

鈴「ああああ!!」

ラウラ「なっ!？」

ミサイルがラウラに命中し、爆煙があがる。その内に鈴たちは一度距離を取り、ラウラの出方を見る。

鈴「この至近距離でミサイルだなんて、無茶するわね」

セシリア「雷真さんが仰っていましたの、『もし仮に至近距離でミサイルしか武装が使えなくなっても躊躇なく撃て。どんな戦いにもリスクの無い勝利などない』と」

鈴「なるほどね、今回はアイツに助けられたってことね」

セシリア「ですわね。けれど、これなら確実にダメージが……」

ラウラが居た場所の爆煙が止んで行くところには……。

鈴「なっ!？」

ラウラ「終わりか？」

ミサイルを受けたのにも関わらず、無傷のシュヴァルツエア・レーゲンが佇んでいた。

ラウラ「ならば、私の番だな」

ラウラは脚部の近くにある武装からワイヤーブレードを出し、それを鈴とセシリアの首に巻き付ける。

鈴「ぐああああ!!」

セシリア「ぐううう!!」

そこからはラウラが行う、鈴とセシリアの蹂躪が始まった。

シャル「ひどい!あれじゃ、SEが持たないよ」

一夏「……」

箒「もし、ダメージが蓄積しISが強制解除されれば二人の命に関わるぞ!」

雷真「なにっ!?!」

雷真「ストライク!」

シャル「雷真、何を!?!」

雷真「決まってる、シールドバリアをぶち破るんだよ!だから皆離れてろ!」

雷真はストライクを起動させて、ランチャーを装備。

アグニをセーフティ状態でラウラに向けて放つ。

雷真「セーフティとシールドバリアがあるんだ。ボーデヴィツヒのSEは突破しないだろ」

ラウラは鈴とセシリアを蹂躪することに気が回っていたため、観客席から放れるランチャーストライクのアグニに気がつくのがワンテンポ遅れた。



ラウラ「なに、があっ!？」

アグニがラウラに当たると雷真はランチャーからソードに換装する。

雷真「一夏とシャルルは二人の救助を頼んだぞ！」

一夏「お、おい！」

シャル「ちよ、雷真！」

ソードストライクのスラストを一気に噴かせながらシュベルトゲベールを引き抜き、ラウラに突撃する。その際、左肩にあるマイダスメツサーも一緒に引き抜き、バレないよう体で隠しながらラウラの後ろを大きく回るように投げて置く。

雷真「ウオオオオオッ!!」

ラウラ「またもや、貴様か！」

雷真「ハアアッ!!」

ラウラ「あまい！」

雷真の突撃はラウラの専用機、シュヴァルツエア・レーゲンのAIによって止められてしまう。

ラウラ「この程度か？」

雷真「お目当てはこっちじゃ、ないんだよ！」

ラウラ「なに………なっ!？」

ラウラは鈴とセシリアの首に巻き付けていた。シュヴァルツエア・レーゲンのワイヤーブレードがいつの間にか切断されていることに驚いた。

雷真「だから、言っただろう？お目当てはこつちじゃないって」  
ラウラ「貴様ああああ！」

ラウラは雷真にしてやられたことに怒り、雷真に向けて至近距離でレールカノンを放ち、命中する。それにより、爆煙が上がる。

そして鈴とセシリアを救助し、介抱しているシャルルは至近距離でレールカノンを受けた雷真に悲鳴をあげる。

シャル「雷真!?!」

一夏「安心しろ、シャルル。雷真のストライクはあんな攻撃は通用しない」

シャル「え？」

シャルルは一夏の言っていることが分からないでいた。いくら、SEがあるとはいえ、あんな至近距離で攻撃を受けたら、かなりのダメージが体に受けるはず。

しかし、シャルルの予想は外れた。

雷真がいた場所の爆煙が止むとそこには先ほどのラウラと同じように無傷の雷真が佇んでいた。

シャル「うそ……」

一夏「なっ？だから、言っただろう？」

ラウラ「貴様！なぜ、あの至近距離で私のシユヴァルツエア・レーゲンのレールカノンを受けて無傷でいる!!」

雷真「悪いな。俺の機体はどの国よりも高性能でな。SEが無くても実剣、実弾は無効化できる装甲で出来てるんだよ」

ラウラ「なっ!?!そんな………バカな」

ラウラ「何故、その様な機体を貴様なんぞが持っている!?!」

雷真「教える義理はない!」

レールカノンによりA I Cから解放された雷真は装備をソードか

らI W S Pに換装して、右手にビームライフル、左手にコンバインシールドのガドリリング、レールガン、単装砲、イーゲルシュテルンをフルバーストする。

ラウラ「舐めるなああああ!!」

I W S Pのフルバーストで爆煙が上がるが、その中からラウラがシュヴァルツエア・レーゲンのプラズマ手刀を両手共出して、雷真に突撃する。それを雷真は両脇に装備している、試製対艦刀で待ち構える。

??? 「両者、そこまでだ!」

ラウラ「きよ、教官!」

雷真「遅いですよ。織斑先生」

千冬「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。それと黒牙、緊急事態とはいえ。セーフティ状態のアグニを人に向けて撃つのはどうかと思うが?」

雷真「すみません。鈴とセシリアの命が危なかったもので……」

ラウラ「あの最初の砲撃がセーフティされていただと……?」

千冬「模擬戦をするのは構わん。だが、アリーナのバリアまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで着けてもらおう」

ラウラ「教官がそう仰っしゃるのなら」

ラウラは織斑先生の言葉でI Sを解除する。

千冬「黒牙、お前もそれでいいなあ?」

雷真「自分よりも、一夏なんじゃないんですかね?」

千冬「現状では貴様だ」

雷真「了解です」

千冬「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。それ

と黒牙、お前は反省文30枚を明日提出しろ」

一夏「なっ!?!ちよつと待てよ、千冬姉」

千冬「織斑先生だ。なんと言えればわかる?」

一夏「雷真は鈴とセシリアを助けるために……………」

雷真「一夏!いいから……………」

一夏「雷真…………お前」

千冬「それでは、解散!」



第三アリーナの事件の後、俺たちは鈴とセシリアを医務室に連れて行き、今は喋るくらいまで回復している。

鈴「別に助けなくてもよかったのに……………」

セシリア「あのまま続けていれば、勝ってましたわ」

二人はそんなバカなことを口にしたので俺は頭にきた

雷真「ふざけるも大概にしろよ、お前ら!」ギロリ

「ニツ!」

雷真「あのまま、続けていたら勝っていた?あんなボロボロになるまで一歩的に蹂躪されてか?」

雷真「どこに勝てる要素がある。もしかしたら本当に死んでいたかもしれないぞ!」

雷真「本当の死の恐怖を知らない奴等がふざけたこと抜かしてんな!シャルル、俺は先に帰る。二人とも少し頭を冷やせ」

俺はそう言い残し医務室を出る。



雷真が激怒して部屋から出て行った後の医務室は空気が重たかった。

一夏「二人とも、さっきのは流石に雷真が怒るのも俺にも理解でき  
るぞ」

シャル「僕もちよつとね」

鈴「それは……」

セシリア「その……」

シャル「雷真は二人のことを思って、あんなに怒ってるだと思っ  
た？」

一夏「そうだな。最初に二人を助けようと動いたのは雷真だったし  
な」

鈴「そう……雷真が」

セシリア「雷真さんには、申し訳のないことをしましたわね」

一夏「自分が悪いと思うなら、ちゃんと謝らないとな？」

シャル「そうだよ。怪我を治しからきちんとして謝れば雷真だつて許し  
てくれるよ」

鈴「そう……ね。そうするわ」

セシリア「私もそういたしますわ」

鈴とセシリアが雷真に謝ることを決めると医務室の中にある薬のビンがカタカタを揺れ始め、医務室の入り口が勢いよく開けられた。入り口から入って来たのは大勢の女子生徒たちだった。

一夏「な、なんなんだ？」

シャル「ど、どうしたの皆？」

「「これ！」「」

シャル「えっ？」

女子生徒たちが見せたのは一枚のプリント。シャルと一夏は女子生徒の中から一枚プリントを拝借してプリントの内容を確認する。

シャル「何これ？」

一夏「今月開催される学年別トーナメントでは、より実戦的模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。尚、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは……」

「とにかく、私と組もう織斑くん」

「私と組んでデユノアくん」

一夏「え、えつと……」

シャル「ごめんね、皆。僕は雷真と学年別トーナメントに出るから。本当にごめん」

一夏「シャルル!?!」

「なら、織斑くん。私と出よう!」

「いや、私と組もうよ!」

一夏「た、助けてくれ!」

シャル「ごめんね、一夏」

一夏「そんな……」

こうして、医務室での騒ぎは終了した。ただし、一夏とのペアを巡った騒ぎは続いているようだ。



医務室での一件で俺は頭にきていた。それも周りの皆が俺を避けて道を作るほどに……………？

刀奈「ちよつと雷真。どうしたの？そんな怖い顔して」

雷真「ん？刀奈か……。まあ、ちよつとな」

刀奈「取り敢えず、私の部屋に来なさい」

雷真「なら、そうしようかな」

刀奈に言われるまま、刀奈の部屋に入る。

刀奈「はい、お茶」

雷真「ありがとう」

刀奈「それで、本当にどうしたの？」

雷真「ああ、それなんだが……」

俺は第三アリーナでのことと医務室でのことを刀奈に話した。

刀奈「なるほどね。雷真が怒るのも無理ないわ。だってアナタは二度も本当の戦争を経験してるもの」

雷真「ああ、だから……命を粗末にして欲しくないんだ。それも俺の大切な人や友人なら尚更」

刀奈「ねえ、雷真。アナタ、少し休んでもいいと思うわ」

雷真「睡眠ならちゃんと取ってるぞ？取れる内に取るのは軍人の鉄則だ」

刀奈「ああ、もう！そうじゃなくて、ちよつとこつちに來なさい！」  
トントン

刀奈が示すのは引越す前に使っていた俺のベッドだ。刀奈に勧められるまま、刀奈の横に座ると……。

刀奈「ほら」

雷真「うおっ!？」

俺は刀奈に引き寄せられ、頭が刀奈の膝の上に乗る。所謂、膝枕だ。

雷真「か、刀奈？」

刀奈「何を今さら緊張してるのよ。中学時代にもやってたでしょ？」

雷真「一年だけな……」

刀奈「あつ、ごめんなさい。私ったら……」

雷真「いいよ。でも、心残りはあるけどな」

刀奈「雷真……」

雷真「本当は刀奈や簪、本音たちと一緒に林間学校、修学旅行にも行って見たかった……。それに二年間も皆の誕生日を祝ってやれなかった」ポロポロ

刀奈「……」ナデナデ

雷真「ごめん、ごめん、刀奈……君を泣かせて、心配をかけて……本当にごめん」ポロポロ

刀奈「いいわよ。貴方が無事で帰ってきて、今は一緒に居てくれるんですもの」ナデナデ

雷真「ありがとう」

刀奈「どういたしまして」ナデナデ



雷真は泣き疲れたのか、いつの間にか眠ってしまった。

雷真「すうく、すうく」ZZZZ

刀奈「やつぱり、知らず知らずのうちに色々溜め込んでいたのね。全く、昔から心配をかけるんだから、私たちの旦那様は」ナデナデ

雷真「すうく、すうく」ZZZZ

刀奈「雷真………私は、私たちは貴方を愛しているわ。今も、これからも、ずっとね」チュツ

それから、何十分経ったんだろうか？刀奈のお陰で、今まで我慢していた感情の奥底にある物を全て出したら、すごく楽になった。

雷真「んんん」

刀奈「あつ、おはよう、雷真」

雷真「おはよう、刀奈。って、今は何時だ？」

刀奈「今は、午後の8時くらいよ」

雷真「やばっ！シャルルがもう帰ってきてる時間じゃないか。それに食堂だって終わっちゃってるし。一度、部屋に戻るわ」

刀奈「それがいいかも。あと、雷真」

雷真「なんだ？」

刀奈「生徒会の仕事、手伝って」

雷真「わかった。暇になったら手伝ってやる。虚さんにも伝えとけよ」

刀奈「やった！」

そして部屋に戻ろうとする。部屋に入るまえにノックをあるテンポでしてから入る。これはシャルルが女の子だってバレないようにするための対策の一つだ。

雷真「ただいま、シャルル」

シャル「遅いよ！何処に行つてたの？」

雷真「えっと、刀奈のところにな」

シャル「刀奈の？」

雷真「そう。それと飯、サンキューな」

シャル「ううん。僕が勝つてに雷真と食べようと思つて貰つてきただけだから」

そう、俺とシャルルの勉強机の上には冷めているいるが食堂の料理が置いてあるのだ。

雷真「なら、俺ができる範囲でシャルルのお願いを聞いてやるよ」

シャル「えっ、本当？」

雷真「ああ」

シャル「なら、僕と学年別トーナメントにペアして出て欲しいんだ」  
雷真「なんだ、そんなことか。それなら、元々そうするつもりでいたぞ？だから、それはノーカン。他にないなら考えて置いてくれよ？」

シャル「うん、ありがとう雷真」

雷真「こつちが礼を言う方なんだがな？」

シャル「フフフフ、気にしない、気にしない」

シャルルと部屋で夕飯を食べたあと、のんびりしていると俺の携帯が鳴る。それも、こつち側に帰つてきてからお義父さんに貰った、刀奈や簪の介入無しで裏の仕事をやる番号だ。そのため、人がいない屋上に向かう。それと、何故俺が更識の裏の仕事をやるようになったのは、過去に刀奈と簪が誘拐されたのが発端だ。二人を守るために裏の仕事を覚えた。それだけだ。

雷真「どうしたんですか、”楯無”さん。こんな時間に」

更識父「現在、IS学園にいる。ドイツの代表候補生である。ラ

ウラ・ボーデヴィツヒに関わる案件でね』

雷真「ボーデヴィツヒですか？」

更識父『そう。その、ラウラ・ボーデヴィツヒの専用機であるシュヴァルツエア・レーゲンにVTシステムが秘密裏に組み込まれている可能性がある、という情報を得た』

雷真「なっ!？」

VTシステム。正式名称、ヴァルキリー・トレース・システム。これは過去のモンド・グロッソ優勝者の戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステム。パイロットに能力以上のスペックを要求するため、肉体に莫大な負荷が掛かり、場合によっては生命が危ぶまれる代物だ。

なのに、何でそんなものをボーデヴィツヒの機体に……………？

更識父『とにかく、刀奈と簪に危害が及ばないように頼むぞ。義息子よ』

雷真「わかりました、お義父さん。今回の案件には今まで通り細心の注意を払います。最悪は自分が介入するかもしれませんが」

更識父『わかっている。だが、くれぐれも娘たちを頼むぞ?』

雷真「わかってます。それでは」

雷真「はあく、盗み聞きはよくありませんよ……………虚さん」

虚「気づかれていますか」

そういつて虚さんは物影から出てくる。

雷真「今回は?」

虚「いえ、私の所には何も」

雷真「わかりました。では、サポートをお願いします。ボーデヴィツヒの試合時は極力二人から離れないでください」

虚「わかりました。若様」

雷真「その呼び方は慣れませぬ」苦笑

虚「それでは、私はこれで」

その言葉と共に虚さんは闇へと消えた。

雷真「さてさて、学年別別トーナメントはどうなることやら」

嫌に丸くて大きな満月を見ながら、その言葉がこぼれた。



そして、ついに来ました。学年別トーナメント当時。そして、今俺がいる場所は織斑先生がいる管制棟の中である。

千冬「それで黒牙、話とはなんだ？」

雷真「今はオーブ軍人としてここにいるつもりです」

千冬「それはすまなかった。それでは中尉、私に話とはなんだ？」

雷真「では、説明します。まだ確信とまでは行きませんが、自分の情報網からドイツの代表候補生である、ラウラ・ボーデヴィツヒの専用機、シュヴァルツエア・レーゲンにVTシステムが秘密裏に組み込まれている可能性があると言情を得ました」

千冬「VTシステムだと!？」

雷真「はい。仮にもし、そのVTシステムが起動した場合、自分は軍人として教師陣と連携を図り、国家首脳ならびに一般生徒を守ろうと思います。ですので、その許可をいただきたく、ここに参りました」

千冬「ふむ……………。わかった」

「織斑先生!？」

千冬「心配するな。こいつは、黒牙雷真中尉は本物の戦争を二度も生き抜いた強者だ」

「そんな……」

「黒牙くんが……」

「戦争を……」

雷真「では、織斑先生が言っていることが本当か、今この場で全力の殺気を放ちます。殺気に当てられて失神しないでくださいよ？」  
キュパーン

目を閉じて、クラス対抗の時と同じように、『殺す』に意識を集中させる。すると、頭の中の何かが割れて、思考がクリアになる。また、瞳からハイライトが消える。

雷真「……………」

「ニッ!?」「ニッ」ゾワリ

千冬「どうだ、理解したか？」

「は、はい……」

雷真「では、自分はいつでも出られる様に待機場に居ますので」  
千冬「わかった」

## 第16話

織斑先生に許可をもらい。待機場にて、いつでも出撃できるように備える。

そして、学年別トーナメントの第一試合の対戦カードは、まさかの………織斑一夏&鷹月静寂vsラウラ・ボーデヴィツヒ&篠ノ之箒、だった。

雷真「初戦から仕組みられたような対戦カードだな。てか、対戦カードを組んだの俺だったわ」

今回の対戦カードは生徒会の仕事で学年別トーナメント対戦カードを決めるために副会長である俺が、遊び半分にペアを書いたカードをシャッフルして、裏の状態に対戦カードを決めたのだ。だから、公平な決め方なのだが………。

雷真「これでVTシステムが発動したら、どうしょ?」



その頃、アリーナの中央では第一試合のカードが対面していた。

ラウラ「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

一夏「そりゃ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

お互いに言い合うと試合開始のカウントが始まる。

『5』

『4』

『3』

『2』

『1』

一夏×ラウラ 「叩きのめす!」

『0』

まず最初に動いたのは一夏だ。高速でラウラに突撃していく。それをラウラはA I Cで難なく止める。

ラウラ 「開幕直後の先制攻撃か、わかりやすいな」

一夏 「そりゃ、どうも。以心伝心で何よりだ」

そんな、子供みたいな言い合いをしているとラウラはA I Cで止まっている一夏にレールカノンの照準を当てる。

しかし、ラウラがレールカノンを撃つ前に鷹月が一夏の後ろから、ラウラを学園の量産型ラファール・リヴァイヴのサブマシンガン二丁を構えて撃ちながら飛び出てくる。

鷹月 「ハアアアアッ!!」

ラウラ 「くっ!?!」

これにより、ラウラのレールカノンは一夏の頬を少し掠めて外れ

る。逆に鷹月が放った、サブマシンガンの雨はラウラに着弾する。

また、着弾したことによつて一夏の動きを止めていたAICの結果が解ける。こんな絶好のチャンスを雷真による日頃からの特訓をしている一夏は見逃さずに攻撃を入れる。

一夏「ラアアアッ!!」

ラウラ「ぐううっ!!」

鷹月「まだまだ!」

鷹月はダメ押しとばかりに一夏の攻撃で吹き飛ばされた。ラウラを狙い撃つ。しかし、そこに箒がSEを犠牲に割り込んでくる。

鷹月「篠ノ之さん!」

箒「私を忘れてもらっては、困る!!」

今度は一夏が箒の相手をするその隙に、鷹月が一度距離を取り、アサルトライフルで箒を狙う。

鷹月「当たって!」

鷹月がアサルトライフルを撃つが箒には当たらなかった。その理由はラウラのISである、シュヴァルツエア・レーゲンの黒いワイヤブレードを箒が乗る、打鉄に巻き付けて力任せに引張る。

鷹月「えっ!」

一夏「なっ!」

箒「何をする!」

ラウラ「……………」

ラウラは箒の問いに答えずに一夏に突撃する。その途中でシュヴァルツエア・レーゲンのプラズマ手刀を二本で一夏と近接勝負をす



る。

それと同時にワイヤーブレードで鷹月にも攻撃する。

箒「ハアアアッ!!」

箒はラウラに吹き飛ばされたが体勢を持ち直し、一夏に攻撃を仕掛けようとするが、それを鷹月がアサルトライフルからサブマシンガンに変えて抑える。

鷹月「織斑くんの邪魔はさせないよ」

箒「クソッ!」

次に鷹月は一夏に教えてもらった刀との戦い方を元にナイフで刀を受け止め、その隙にサブマシンガンで隙のできた相手に弾丸の嵐を降らせるやり方で、箒の乗る、打鉄のSEをゼロにする。

鷹月「やった!」

箒「ここまでか……………」

一夏「鷹月さん、喜んでないで、次!」

鷹月「あつ、ごめん」

ラウラ「話をするとは余裕だな?」

一夏「へえっ! 雷真と比べたら、お前なんて楽勝だぜ」

ラウラ「この減らず口が!」

鷹月「織斑くん、下がって!」

一夏「おう!」

一夏は鷹月の声で一度、後方に下がる。

ラウラ「逃がすか!」

ラウラは一夏を追撃しようとするが足元に何かが転がってくる。

ラウラ「これは……………グレネード!？」

そう、ラウラの足元に転がってきたのは鷹月が投げたグレネード。ラウラは一夏のことと視野が狭まり周りに気を配ることを疎かにしてしまった。

一夏「サンキュー、鷹月さん」

鷹月「どういたしまして」

一夏「なら、俺も決めないとな!」

一夏は白式のエネルギーを最大にして、単一仕様能力の零落白夜を発動させる。それに合わせて、鷹月は自分が囷になりラウラに隙がでるように地面を高速で滑りながら、ラウラに向けてマガジンを新しく入れ換えた。サブマシンガン二丁で狙い撃つ。

しかし、その動きもA I Cによつて止められてしまう。だが、これは一夏たちには好機となる。A I Cは停止させるものに意識を集中させる必要があるため、鷹月をA I Cで止めた場合、鷹月を止めている以外は他のことが疎かになる。

一夏「セヤアアアツ!!」

ラウラ「ガツ!？」

一夏「まだまだ!」

ラウラ「この程度!」

鷹月「私だつて」

ラウラ「クソツ!」

一夏「これで終わりだ!」

一夏は最後にS Eをギリギリまで使い、零落白夜でラウラを斬り吹き飛ばす。

ラウラ「ぐあああああ!？」

ラウラはアリーナの壁にぶつかり、沈黙する。

▽▲▽

私は負けるのか……。こんな、奴に……。私が憧れた、あの凛々しく堂々としている教官を変えてしまおう。お前が……。ゆるせないんだ！織斑一夏……。貴様がいなければ！

力が欲しい……。奴を圧倒的に叩きのめす力が！

—願うか……。？—

—汝、より強い力を欲するか？—

寄越せ、力を……。比類なき、最強の力を！

—よかろう、くれてやる。力を—

▽▲▽

アリーナの壁にぶつかり、ラウラは沈黙していた。しかし、次の瞬

間、ラウラの叫びと共にラウラが乗る、シュヴァルツエア・レーゲンがラウラを呑み込み、その形を変えていく。

ラウラ「うああああああ!!」

ラウラ「ああああああ!!」

鷹月「なに、あれ？」

一夏「……」

一夏たちはラウラに起きた現象に驚きのあまり動けないでいる。

く場所はアリーナの待機場場に戻りく

雷真「やっぱり、始まったか。織斑先生、出撃の許可を！」

千冬『許可する!』

雷真「了解! ストライク、起動！」

雷真「黒牙雷真、ストライク。行きます！」

俺はエールストライクで一夏たちがいるところに向かう。

雷真「二人とも下がれ! ここからは、俺の仕事だ」

一夏「仕事って……。あれは、なんなんだよ!」

雷真「話はあとだ。下がれ！」

一夏とボーデヴィツヒが呑み込まれた物を話していると教師陣が避難の放送を流す。

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止。状況をレベルDと認定。鎮圧のため、教師部隊を送り込む』

『来賓、生徒はすぐに避難すること』

警報と共に第三アリーナの防護シャッターが起動していく。

また、ラウラを呑み込んだ、シユヴァルツエア・レーゲンは元の形から黒い打鉄を纏った女性の姿へと変えた。

一夏「あれは雪片……………。千冬姉と同じじゃないか」

雷真「鷹月さん、君だけでも先に下がってくれ！」

鷹月「う、うん」

雷真「一夏、お前も下がれ！」

一夏「俺がやる」

一夏は雷真の言葉を無視し、雪片式型を構えると黒いISは高速で一夏に近づき、左下から切り上げを繰り返す。

雷真「一夏!？」

一夏「ぐあっ!？」

それにより、一夏が手に持つ雪片式型が吹き飛ばされてしまい、無防備になる。それを黒いISは追い討ちをかける。それを一夏は咄嗟に左腕を盾にするが、先ほどの零落白夜でSEを限界まで使ってしまった、黒いISの攻撃で白式が解けてしまう。

一夏「ぐううう!？」

そのまま、再び、一夏に攻撃をしようとする所を

……………。

雷真「バカ野郎、熱くなりすぎだ！」

雷真が手に持つ、対ビームシールドで黒いISの攻撃を受け止める。

鷹月「織斑くん！」

一夏「鷹月さん!？」

雷真「鷹月さん、ナイス！」

先ほど、避難したはずの鷹月が一夏を抱えて、雷真と黒いISから離れる。

二人が離れたのに合わせて、雷真も黒いISの武器を跳ね上げさせて一度距離を取る。

一夏「箒、離してくれ！俺がアイツを……」

雷真「『俺がアイツを』なんだよ？そんな状態で戦う気か？」

一夏「アイツは千冬姉の……」

俺はストライクの右腕装甲を外して、一夏の顔面を殴る。

一夏「ガツ!？」

雷真「熱くなって、頭に血が上って、感情的になって、今のお前に何が守れるって言うんだよ！なあ？」

雷真「そんなのじゃ、何も守れないし、かえって守りたいものを危険に晒すだけだ」

一夏「……………」

雷真「頭を少し冷やせ」

一夏「アイツは千冬姉と同じ、居合いの技を使うんだ。アレは千冬姉だけの物なんだ。だから！」

箒「雷真が言っていたように今のお前に何が守れる？白式のエネルギーも残っていない状況で、どう戦う？それに見ろ、一夏。お前がや

らなくとも状況は收拾される」

箒は黒い I S を指で示す。そこには黒い I S を囲むように教員たちがラフアール・リヴァイヴを装着して臨戦体制でいる。

一夏「違うぜ、箒。全然、違う。俺がやらなきゃいけないんじゃないやなくて。これは俺がやりたいからやるんだ！」

箒「ならば、どうすると言うんだ？」

一夏「それは……………」

雷真「全く、やっと頭が冷えたみたいだな。一夏？」

一夏「雷真？」

雷真「S E があればいいんだろう？なら、ストライクから補給すればいい」

ストライクから一本のコードを抜いて、待機状態の白式に繋ぐ。

雷真「ストライクのコアバイパスを解放。エネルギーの流出を許可」

すると白式に繋いだ、コードが白く光りだす。すると S E だけではなくバッテリーまで白式に送られ、フェイズシフト装甲がトリコロールカラーから灰色に変色し、フェイズシフトダウンを起こす。

雷真「お前が最後を決めろ、一夏。それまでは俺が道を作ってやる」  
一夏「えっ？」

箒「雷真、道を作ってやるって、お前のストライクは S E を白式に送っているのだから、もう戦えないだろうが」

雷真「もう、忘れたのか？前のボーデヴィツヒとの戦いで言ったよな？俺のストライクの装甲は S E が無くとも戦えるって」

箒「ということは……………」

雷真「それにストライクは元々、S E が無いことを前提に開発され

た機体だ。だから、装備を換装すれば、SEは使えないが実剣や実弾の無効化はそのままだ」

一夏「ハハハハ、本当に俺はいい友を持ったよ」

雷真「行くぞ、一夏」

一夏「おう！」

雷真「ストライク！」

一夏「白式！」

俺はストライクをエールからソードへと換装する。すると灰色から再び、トリコロールカラーに変わる。一夏はエールストライクから移したエネルギーで白式のSEがMAXの状態で起動する。

雷真「オオオオツ！」

まずは雷真が瞬間<sup>イケンニッションプースト</sup>加速で黒いISに突撃する。黒いISは武器を持った、雷真がテリトリーに入ったことを認識したのか雪片に似た黒い刀を振り下ろす。

雷真「セヤツ！」

それを雷真はシューベルトゲーベルで上手い具合に跳ね上げさせる。

雷真「一夏、スイッチ！」

一夏「これで、終わりだ！」

雷真のかけ声で一夏と立ち位置を入れ換え、一夏はそのまま、零落白夜で黒いISに一閃する。

すると、黒いISが真つ二つに切られ、中から意識を失っている、ラウラが出てくる。

それにより、宿主を失った黒いISはドロドロと溶けていき待機状



態に戻る。

雷真「終わったな」

一夏「だな……」

雷真「織斑先生、現時刻をもって状況終了」

千冬『よくやった。それと、教え子を助けてくれたことに礼を言う』

雷真「自分は仕事をしただけです」

千冬『そうか』

こうして、VTシステムの騒動は幕を閉じた。

## 第17話

ラウラのVTシステム事件後、雷真とシャルルは珍しく二人だけで夕食を食べている。

シャル「結局、学年別トーナメント中止だった。けれど、個人データを取りたいから一回戦は全部やるらしいよ」

雷真「みたいだな」

シャル「他の女子たちは酷く落ち込んでるみたい」

雷真「だろうな。トーナメントが中止なら、あの噂も無くなるからな」

そんな話をしていると一夏と箒が何やら話しているのが聞こえてきた。

一夏「箒、先月の約束な」

箒「えっ!？」

一夏「付き合ってもいいぞ」

雷真「へえ」

シャル「……………」

箒「なにっ?」

一夏「だから付き合ってもいいって…………」

箒は一夏からそう聞くと嬉しさのあまり、一夏の胸ぐらを掴んでしまふ。

一夏「ぐああっ!？」

箒「本当か、本当の本当なのだな?」

一夏「お、おう…………」

箒は一度、一夏を離して、付き合うという考えに至った経緯を尋ね

た。

箒「何故だ？理由を聞こうではないか」

一夏「幼馴染の頼みだからな。付き合うさ……」

箒「そうか！」

一夏「買い物くらい」

雷真「バカだ。正真正銘の唐変木のバカがいる」

シャル「あははは」苦笑

次の瞬間、一夏の顔面に左ストレートが炸裂。

一夏「ぐああああ!!」

箒「そんなことだろうと思ったわ。フンツ！」

次は右足が一夏のボディに炸裂し、体が宙に浮く。

【KO，パーフェクト！】

一夏「ぐううううう」

一夏は腹を抱えながら蹲る。

シャル「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うんだよね？」

雷真「その所為でこっちにまでとばっちりがくるんだぞ？主に箒、

鈴、セシリアから……」

シャル「どんなの？」

雷真「大体は、男が女の子を好きになるタイミングとかだよ」

シャル「なるほどね。鈍感で唐変木でもある難攻不落の一夏が相手じゃねえ」

雷真「無理もないか」

真耶「織斑くん、黒牙くん、デュノアくん。朗報ですよ！」

雷真「??？」

一夏「??？」

シャル「??？」

真耶「今日は織斑くんと黒牙くんは大変でしたね。でも、二人の労をねぎらう素晴らしい場所が今日から解禁になったのです！」

一夏「えっ？」

雷真「場所？」

真耶「男子の大浴場なんです！」

一夏「本当ですか!？」

真耶「はい」

一夏「おっしやあ！」

雷真「一夏、俺とシャルルは明日の試合の打ち合わせをするから、先に大浴場を堪能して来いよ」

一夏「なんでだよ？一緒に入ればいいじゃんか」

雷真「一夏、お前を信用しない訳じゃないが、俺たちの作戦がバレると面倒になるんだ。頼む、一夏」

一夏「そういうことなら、わかった。なら、先に一番風呂をもらうな？」

雷真「ああ。お前は今日一番の貢献人だからな」

な、なんとか一夏を丸め込めた。あのまま、一緒に大浴場に行ったらシャルルが女の子だってバレちまうからな。

そして、一夏と別れ、先ほど一夏に説明した通り試合の作戦を練ることにした。

シャル「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

シャル「さつきは僕を助けてくれたんでしょ？」

雷真「まあな。前にシャルルに言ったろ？俺がお前の最後の希望だつて」

シャル「そうだね。雷真は僕の……最後の希望だよ」

その時のシャルルはこの学園に来て一番いい笑顔だった気が俺にはした。

雷真「ところで、俺たちの対戦カードは誰だった？」

シャル「それがね……」

雷真「ああ」

シャル「刀奈と簪なんだよね」

雷真「はあ？」

雷真「はあああああ!？」

シャル「やつぱり、その反応するよね？」

雷真「当たり前だろう！」

シャル「多分、これは雷真に対するお仕置きだと思うよ。無論、僕にも」

雷真「あー、なるほどな。となると、装備はどうしよう？」

シャル「雷真の専用機、ストライクにはどんな武装があるの？」

雷真「そうだな。まずはシャルルにストライクの武装を教えないとか」

雷真「ストライクは主に換装システムを使うんだ。その場に応じた最適の装備で戦うことができるんだよ」

シャル「かなり、万能な機体だね」

雷真「まあな」

パソコンを開き、ストライクに装備できる、全てのストライカーをシャルルに見せて説明する。

雷真「高機動型のエール、近接型のソード、遠距離型のランチャー、

その三つを合わせたマルチプルアサルト、他には複合兵装の I W S P。そして最後に I W S P が発展した、多目的型のオオトリだ」

シャル「色々あるんだね」

雷真「どうするかな」

シャル「ソードと I W S P 以外はビーム系の射撃武器が付いてるんだね」

雷真「ああ」

シャル「それに最低限、何かしらのビーム兵器も付いてるし凄いや、このストライクは」

雷真「俺が作った訳じゃないけど、凄いの分かる」

シャル「でも、どうやってこんななビーム兵器を……。それに、前のボーデヴィツヒさんとの騒動の時に、ボーデヴィツヒさんの専用機の攻撃をあんな至近距離で受けて無傷だなんて」

雷真「まあ、それについては話す時になったら話すよ」

シャル「うん、わかった」

雷真「ん？一夏からメールだ。大浴場から出たつてさ、悪いが先にもらうぞ。俺が終わったらメールするから」

シャル「うん、行ってらっしゃい」

シャルルに許可をもらったのでお風呂セットを一式を持って大浴場に向かう。

雷真「あゝ、風呂は気持ちいな。今日は被害者が出なくて良かった」

雷真「もし、最悪の事態になっていたら……。俺はボーデヴィツヒを殺すつもりでいたしな」

と今日の最悪の事態になった場合をひとりごちていると……………。

【ガラガラガラ】

シャル「お、お邪魔します」  
雷真「はあ!？」

大浴場の入り口の方を見ると、束ねていた髪を下ろし、体をタオル一枚で隠しているシャルルの姿があった。

シャル「あんまり見ないで、雷真のエッチ……」  
雷真「わ、悪い!？」

何でだ？部屋では先にもらうって言ったのに！終わったらメールするって言ったのに！

雷真「ど、どうして入ってきたんだ？さつき、部屋で終わったらメールするって言ったのに」

シャル「雷真は僕と一緒に入るのは嫌?」

雷真「そういうことじゃなくてだな！俺だつて健全な男子高校生だから、その……」

シャル「でも、刀奈や簪とは一緒に入ってたんでしょ?」

雷真「それは中学校に上がるまでの話だ！小五からはアイツらの発育が良くなったから入らないようにしたんだよ!」

なんでシャルルが刀奈のと簪との過去の話を知っているかは、前にお義父さんに三人目の娘は欲しくないかと電話した後に、俺の婚約者様二人から聞いたそうさ。その時、俺は二人によつて撃沈していた。

シャル「迷惑なら上がるけど……」

雷真「いや、俺が上がるよ」

シャル「雷真、待って」

雷真「えっ?」

シャル「話があるんだ。大切な話をしたいから」

雷真「わかった」

それから俺たちは背中合わせで湯船に浸かっている。

シャル「前にも話したことなんだけど」

雷真「それなら学園に残れるようになったじゃないか」

シャル「うん。それを僕は自分の意志でこの学園に残ろうと思うんだ。居られるからじゃなくて、僕が残りたいから。それに雷真が居るからここに残りたいって思えたし、思えるんだ」

背中合わせのシャルルが俺の手の上に自分の手を重ねてきたことに歴戦の強者でも、流石にこれはビックリするし、心臓がバクバクだ！

雷真「そ、それは男としてシャルルみたいな美少女にそう言って貰えるのは嬉しいな。男冥利に尽きるな」

シャル「それとね、もう一つ決めたんだ。僕のあり方を」

そういうとシャルルは俺の肩に手を置き。身体を密着させる。

雷真「あ、あり方って？」

ちよつと待って！それ生だから、生だからさ!!

さつき巻いてた、タオルはどうしたんだ!?

流石にこの事が刀奈や簪にバレたら………。今度こそ、俺は死ぬかもしれない。

シャル「僕のこととはこれから」シャルロット” って呼んでくれる？二人きりの時だけでもいいから」

雷真「それが本当の君の名前なんだな？シャルロット」

シャル「そう、それが僕の本当の、お母さんからもらった名前なの」



雷真「改めて、よろしくな。シャルロット」  
シャル「うん」



大浴場でのシャルロットとのやり取りから翌日。今は第2アリーナで刀奈&簪の更識姉妹ペアと対峙しているのだが……。もの凄く怖い!!

だって二人の後ろから、般若と阿修羅が見えるもの。するとプライベートチャンネルで……………。

それと装備はI W S Pにしました。

刀奈「昨日はお楽しみだったみたいね、お二人さん。それも大浴場で」ゴゴゴゴ  
「ニツ!?」ビクッ

なぜ、どしてバレた? 昨日は刀奈たちはいなかったはずだ。

簪「雷真。今、昨日は私たちはいなかったはず、って考えてるでしょ?」ゴゴゴゴ

雷真「い、いや、それは……………」ダラダラ

刀奈「私たちもね。鬼じゃないのよ」

簪「だから一度目は許した。けれどね……………」

刀奈「二度目はね。それもよりによってお風呂だなんて……………」

刀奈と簪が目を閉じる、再び目を開くと試合開始の合図になる。

更識姉妹 「許せるはずがない、じゃない!!」

雷真 「ヒイイイツ!」

刀奈 「覚悟しなさい!」

簪 「ボコボコにしてやるんだから!」

簪はいきなり打鉄式式の春雷を、刀奈は霧纏ミステリアス・レイディの淑女の蒼流旋に装備されているガトリングガンで、雷真が乗るストライクを狙い撃つ。それを雷真はI W S Pのコンバインシールドで防ぎながら回避する。

雷真 「ちよつ、いきなりかよ!?! 試合中はストライクのSEかバッテリーが切れてフェイズシフトダウンしたら負け扱いなのに二対一とか……。それに、二人の動きが普段よりも良いってどういうことだよ!?!」

簪 「逃がさない!」

簪は打鉄式式の山嵐を48発中、16発を雷真に向かって放つ。それを雷真はイーゲルシュテルンで迎撃するが、その隙に刀奈が後ろから蒼流旋のガトリングガンを撃ってくる。

雷真 「クツ!」

特訓の時と桁違いに連携が上手い!?! ミサイルを俺が迎撃することを読んで、イクニツジョン・フーレスト瞬時加速で刀奈が後ろからガトリングガンで攻撃するなんて……。

それにシャルロットからの援護も刀奈の霧纏ミステリアス・レイディの淑女が作る、水の障壁で銃弾が止められてしまう。

シャル 「雷真!?! クソツ、この障壁が邪魔で雷真の援護ができない!」

刀奈 「そう簡単に貴女は行かせないわよ?」

雷真 「なら、これで!」

後退しながらコンバインシールドを構え、イーゲルシュテルンと単装砲で刀奈を狙い撃つが……。

簪「私を忘れてない？」

雷真「本当に連携が上手すぎだろ!？」

刀奈を狙っている俺に横から簪が接近してきて、近接武器であり対複合装甲用の超振動薙刀の夢現で攻撃をしかけてくる。

雷真「I W S Pじゃ、部が悪い」

レールガンを地面に向けて放ち、土煙を上げさせて煙幕に使い、その隙に他の装備に換装するつもりだったのだが……。

簪「そんなこと……」

刀奈「させないわよ。ハアアアア!!」

雷真「なっ!？」

ストライクを他の装備に換装するためにI W S Pを一度パージした、その時に土煙の向こう側から蒼流旋と夢現が此方に飛んできた。

雷真「やられた!」

これにより俺は今、武装がイーゲルシュテルンとアーマーシユナイダーしかない、丸腰と何ら変わらない状態だ。

雷真「まさか、刀奈と簪の連携にここまで押されるとはな。マズツたな……」

刀奈「さあ、今の貴方は丸腰同然よ？」

簪「どうするのかな？」

雷真「……………」ニヤリ

更識姉妹「「ッ!?!」」

雷真「シャルル、今だ!」

シャル「OK!」

簪「なっ、イグニッションブースト瞬時加速!?!過去にそんなにデータはなかったのに!?!」  
シャル「そりや、今初めてやったからね」

刀奈「それに、どうやって水の障壁を……………ッ!!」

刀奈「グレネードランチャー!?!」

シャルロットはその手に持つ、二丁のグレネードランチャーで刀奈が操る、アクア・ナノマシンをグレネードランチャーの爆風で霧散させて、その隙にイグニッションブースト瞬時加速でこちらに来てもらったのだ。

シャル「そう。昨日のうちに雷真から刀奈の専用機の特性を聞いたのさ。簪の方は過去の戦闘データがないけど遠距がメインの機体だっって聞いていたからね」

雷真「そういうとことだ」

シャル「それと、雷真に集中し過ぎて他が疎かになってるよ?」

刀奈「言ってくれるじゃない?」

シャル「雷真、今のうちに!」

雷真「サンキュー!」

刀奈「しまった!?!」

シャルロットのおかげで、俺はストライクをオオトリに換装ができた。

雷真「こっからは反撃だ。シャルロットは簪を頼む!」

シャル「ッ!!(今、名前で…………。これは恋する乙女としては勝つかないね)」

シャル「うん、任せて!」

雷真「さつきまで、一方的にやられてたからな。本気で行くぞ、刀奈」

刀奈「ッ!？」

俺はビームライフルとレールガンで刀奈を狙いながら高速移動する。刀奈はそれを回避しようとするが回避が間に合わず、SEがどんどん削れていく。

刀奈「そんな高速で移動しながら、一発も外さないなんて……」

雷真「まだまだだ!」

オオトリに備え付けられているミサイルランチャーと小型ミサイルを全弾、余すことなく刀奈に向けて放つ。

刀奈「ハアアアッ!!」

刀奈は回避ができないと思い、アクア・ナノマシンで水の障壁を作り、防御体制に入るが……。俺は背中から大型対艦刀を刀奈に向けて投擲する。しかし、それは水の膜によつて途中で止められてしまうがそれでいい。少しでも水の膜を貫いてくれれば構わない。

刀奈「残念。あと少しだったわね、雷真」

雷真「刀奈、それは悪手だぜ?」

刀奈「えっ?」

雷真「セラアアア!!」

刀奈のアクア・ナノマシンで刀身半ばで止まっている大型対艦刀の持ち手に向かつて瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で刀奈に向かうように蹴りを入れる。すると力エネルギーが新たに働き、水の膜を突き破る。

刀奈「きゃああああ!!」

アクア・ナノマシンで刀身半ばで止まっていた、大型対艦刀は新た

な力エネルギーによって刀奈の専用機である、霧纏ミスデアス・レイディの淑女にダメー  
ジを与え。SEが尽き、アナウンスが響く。

『更識刀奈、SE empty!』

雷真「シャルロットの方は……」

シャル「ヤアアアツ!!」

なんとシャルロットはゼロ距離で簪にパイルバンカー、通称：盾殺しを打ち込んでいた。

簪「ぐううう!!」

シャル「僕だつて負けられないんだ！こんな僕を救ってくれた雷真のためにも！」

雷真「シャルロット、お前………」

パイルバンカーを打ち込んで後、二人はプライベートチャンネルで何やら話しているようだ。

シャル「僕は雷真が好きなんだ！だから、君たち二人みたいに雷真の隣に居たいんだ。そのためにもこの試合に勝って、君たちに認めさせてみせる！僕も君たちと同じくらい雷真のことを愛しているということを！」

簪「だつたら、私もこのまま負ける訳には行かない！婚約者として、雷真を愛する一人の女として！」

シャル「それは僕も同じさ！」

それから二人の戦いは熾烈を極めた。簪が山嵐を撃てば、シャルロットがそれを二丁の連装ショットガンで迎撃。その迎撃によってできた爆煙を利用して簪が夢現を持って突撃。それを待ち構えるようにシャルロットが近接ブレードを構えて打ち合う。

それを俺は刀奈と一緒に見ている。流石にあの戦いに茶々を入れるほど野暮じやないさ。

雷真「スゲエな……」

刀奈「あれは女の戦いよ」

雷真「えっ?」

刀奈「それも貴方が関わっている、戦いね」

雷真「おい、刀奈。その言い方だとシャルロットは俺のことを……」

刀奈「あら気づいていなかったの?それと彼女、本名はシャルロットっていうのね」

雷真「薄々は感じていたが、それが合っているのかは曖昧だったしな」

刀奈「なら、もしも彼女が貴方に告白したらどうする?」

雷真「それは……」

刀奈「全く、私たちの旦那様は女誑しで優柔不断なんだから」

雷真「本当にすみません」

刀奈「まあ、私も彼女なら三人目に加えてもいいと考えてるわ。そんなに雷真のことを想って、簪ちゃんと正面からぶつかる程だし。それに大切な妹だもの」

シャルロットが俺に対して恋心を抱いているか刀奈と話をしているとシャルロットたちは互いに最後の一撃を繰り出そうと空中で対峙する。

そして………

簪「ヤアアアツ!!」

シャル「ハアアアツ!!」

両者互いに瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で相手に向かって突撃をする。そして、アリーナ内に大きく、「ガキンツ!」と金属がぶつかり合う音が響く。音が止むと【プシュー!】と圧力が抜ける音が聞こえ。

アリーナにアナウンスが流れる。

『更識簪、ならびにシャルル・デュノア、S E e m p t y!』

『黒牙雷真のS E が残っているため、よって勝者は黒牙雷真&シャルル・デュノア、ペアです!皆様、選手に大きな拍手を』

I S 学園の生徒たちが簪とシャルロットに大きな拍手と喝采を送る。

そして、その日の夜。やはりと言うべきか、俺とシャルロットの部屋に刀奈と簪が来ており、刀奈が言っていたことが本当かどうかを確かめることになった。

刀奈「それではシャルルくん。いいえ、シャルロットちゃん。貴女は雷真のことが好きなの?」

シャル「うん……。好き、大好き。だって雷真は僕のことを救ってくれたから」

刀奈と簪はシャルロットの『救ってくれた』に大きなため息を吐く。

更識姉妹 「「はあ〜」」

刀奈「この男は……。まさか、私たちと同じ理由でシャルロットちゃんを墮とすなんて……」

簪「本当にね」

シャル「え?え?え?え?」

簪「えつとね、シャルロット。私たちが雷真に惚れたのが今から五年前のことなの」

刀奈「ある日、学校の帰りに知らない黒服の大人たちに私たちは誘拐されたの」

簪「それを額から血を流して、ボロボロの状態で、尚且つ一人で私たちを救ってくれたのが雷真なの」



刀奈「だから、貴女と私たちは雷真に恋心を抱いた境遇がちよつと似ているのよ」

シャル「本当だ、ちよつと似てる。僕の場合はデユノア社によって、雷真と一夏の専用機のデータを盗んで来いって言われたんだけど。まさか、僕がシャワーから出て服を着ようとしている最中に雷真が脱衣場に入ってきて、僕が女だつてバレるとは思わなかったよ」

雷真「ちよつ、シャルロット!？」

シャル「えっ? あっ!」

簪「へえ〜」

刀奈「脱衣場で服を着ようとしている最中に、ねえ……」

雷真「あ、あれは不幸な事故と言うかなんと言いますか……」

更識姉妹「問答無用! もう、いつぺん死んで来い! この浮気者のド変態!!」

雷真「ギヤアアア!!」

そこで俺の意識は途絶えた。



翌日、朝起きたら。何故か頭痛がひどいので薬を飲んでから、刀奈、簪、シャルロットの三人と共に朝食を食べて学校に行く。それと何故か、三人は凄く仲が良くなっていた。そして教室に向かう途中でシャルロットとは別れ席に着き、ホームルームになるがシャルロットの姿が見えなかった。

真耶「えっと、今日は皆さんに転校生を紹介します」

山田先生のその言葉で俺は刀奈の方に勢いよく振り向く。

雷真「ツ!?!」バツ

刀奈「フフフフ」

その時の刀奈の手に扇子があり。それを開くと扇子の真ん中に『ビックリ大成功!』と書かれていた。

真耶「入ってきてください」

???「はい」

やっぱりだ!席についてないと思ったら、こういうことかよ!

そう、その転校生は女子の制服を着ていた。シャルル・デュノア、改め、シャルロット・デュノアである。

シャル「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

真耶「えっと、デュノアくんは………デュノアさん、ということでした」

箒「はっ?」

「つまり、デュノアくんは女?」

「おかしいと思った。美少年じゃなくて美少女だった訳ね!」

「って、黒牙くんは同室だから知らないことは……」

「ちよつと待って、昨日と一昨日って男子が大浴場を使ったわよね?」

その言葉で隣のクラスからISを纏った、鈴がやってきた。

鈴「一夏ああああ!」

そして、鈴は龍咆を一夏に向けて撃とうとする。

一夏「ちよつと待て！それは死ぬ、それ絶対に死ぬうううううう！」

一夏は甲龍の龍咆を撃たれると思い、目を瞑るが……一向に龍咆の衝撃がやってこない。

一夏「あれ……死んでない？」

一夏が目を開けると、一夏の前にはシュヴァルツエア・レーゲンを纏い、A I Cを発動している。ラウラの姿があった。

一夏「ラウラ……。助かったぜ、サンキュー」

一夏がそう言い終わると……

ラウラ「んっ……」

一夏「んぐっ!？」

雷真「ワオ！」

刀奈「あらあら、フフフフ」

シャル「わあく！／／／／／／／／／／」

俺と刀奈。それとシャルロット以外の女子は皆、ラウラが一夏にキスをしたので驚きのあまり口が開いたままだ。

ラウラ「お、お前は私の嫁にする。決定事項だ。異論は認めん！」

「「え、ええええええええ!？」

一夏「んあ?……はあああああ!？」

雷真「アハハハハ」

刀奈「面白くなりそうねwww」

シャル「いやいや、二人とも笑っちゃ可哀想だよ」

こうして、完全に学年別トーナメントの騒動は幕を閉じた。

## 第18話

シャルロットが女子生徒として活動し始めた、翌日。  
今日も一夏の早朝特訓をするために一夏の部屋に来ている。

雷真「一夏、起きてるか？入るぞ？」

一夏「雷真!?ま、待って！今は……………」

雷真「なんだ、起きてるじゃないか」

俺は一夏が起きてると思ひ。部屋のドアを開けると……………。

一夏「……………」

ラウラ「……………」

雷真「寝技の訓練と見せかけた、早朝から夫婦の営みとは……………  
これは失礼した。後は二人でごゆっくりと」

一夏「待て、待て！雷真、これは違うから助けてくれよ！」

俺は無心で一夏の部屋から出る。すると部屋の前で箒と出会う。

箒「雷真、一夏はどうした？」

雷真「入ってみれば、わかる」

箒「わ、わかった」

箒はいまいち分からないと言った表情で一夏の部屋に入り少し経  
つと一夏の部屋の中から一夏の叫び声と竹刀のしなる音が何度も響  
いた。

一夏よ。いい加減、気がつけよ……………。



そして、早朝特訓が終わり。今日は日曜日なので、俺はシャルロットと共に水着を買いに行く。なんでも近々、臨海学校があつて、それで水着が必要なんだとか。刀奈と簪はシャルロットに気を使い、生徒会の仕事をしている。

雷真「まったく、一夏の鈍感さにも困ったものだ」

シャル「そうだね。僕の方にも箒に鈴、それにセシリアまで、どうやって雷真を墮としてみせたのか聞いてくるよ」

雷真「それは大変だな」

そう、あのラウラが一夏にキスをした後に刀奈が一組の皆に俺が刀奈だけでなく、簪とシャルロットの二人を新たに婚約者として迎え入れたことを公表したのだ。まあ、色々と言われたが刀奈が……………。

刀奈『文句があるなら、私に何でもいいわ、勝負して勝ってみなさい。私に勝てたなら、その言い分を聞きましよう?』

と言ったため。学園最強の生徒会長である、刀奈に誰も勝てないと思ひ。一瞬にして黙ったのである。

シャル「ねえ、何で僕だけ買い物に誘ったの?」

雷真「だってシャルロットは今まで男子の振りをしてたろ?だから、水着がないと思つたんだ」

シャル「そ、そうなんだ……」 シュン

雷真「つてのは建前だ」

シャル「えっ?」

雷真「刀奈や簪には渡してあるんだが、シャルロットには渡してな

いものがあるからな。それをシャルロットと買いに来たくてな。所謂、デートつてやつだ」

シャル「雷真……」キュン

雷真「付き合つて、早々で悪いが……。いや……。だったか？」

シャル「ううん！とつても嬉しいよ！」ニッコリ

雷真「そ、そうか……。／／／／／」

モノレールから降りて、デパートに向かうが途中ではぐれてはせつかくのデートが台無しになるので、シャルロットに手を差し出す。

雷真「シャルロット、手を繋がないか？」

シャル「えっ？」

雷真「はぐれたりしたら、面倒だろ？」

シャル「わかった」

シャルロットは普通に手を繋ぐつもりだったらしが俺は少し指を動かし、自分の指とシャルロットの指を絡める。

シャル「!!」

シャル「フフフフ」ニコニコ

シャルロットは指を絡めたことでニコニコ笑い始めた。理由は恋人繋ぎをしているからだろう。

雷真「それじゃ、行こうぜ」

シャル「うん！」

雷真「あれは一夏？」

シャル「どれどれ？あつ、本当だ。それに相手は鷹月さん？」

雷真「学年別トーナメントでペアを組んでたし、その時に仲良くなつたんじゃないか？」

シャル「つてことは……。箒たちに新たに恋のライバルの出現？」

雷真「あー、そうなるかも」

シャル「皆、苦労するね。まあ、雷真は一夏と違つて僕のことを一応は意識してくれてたみたいだから良しとしようかな?」

雷真「そりや、大浴場であんなことされたら普通は意識するだろうが……。／＼／＼／＼／＼」

シャル「……バカ。雷真のエツチ。／＼／＼／＼／＼」

雷真「すまん……。俺も男だから」

話をしながら歩いていると、来ました!皆、大好き、レゾナンス。

シャル「それじゃ、まずはどんなお店に入ろうか?」

雷真「そうだな……。ん?シャルロット、あそこのお店に入ろう」

シャル「えっ?あれつて……」

雷真たちが入ったのはジュエリーショップ。雷真はジュエリーショップに入ると店員に話しかけた。

雷真「すみません、オーナーはおられますか?」

「オーナーですか?少々、お待ち下さい」

シャル「雷真、ジュエリーショップのオーナーを呼び出すなんて……。君は本当に何者?」

雷真「あー、それも含めて追々な」

シャルロットと俺のことについて話していると奥の方からオーナーが出てくる。

オーナー「これこれは若様ではありませんか。御無沙汰しております」

雷真「いや、今は家の都合で来てる訳じゃないので……。一人の客として来ているのでそんなに畏まらなくて大丈夫ですよ」

オーナー「いえ、若様には我が社を支えていただいていますから」



雷真「そんな、たかだか株を数億買ってるだけじゃないですか」  
シャル「す、数億!？」

オーナー「いえいえ、それだけではなく。前回、我が社が経営危機に陥った時は資金援助をしていただけ誠にありがたいがとうございます」ペコペコ

雷真「あんなの株で儲かった物なので大丈夫ですよ。そうですか……でしたら、彼女に星形のネックレスか何かを選んでもらえますか？」

オーナー「そんなことで、よろしいのですか？」

雷真「ええ。この度、彼女も自分の婚約者に成りまして」

オーナー「成る程、わかりました。では此方へ、どうぞ」

オーナーに勧められるまま、奥の部屋に……。

シャル「雷真、君って意外にお金持ちなんだね？」

雷真「そうだな……。小学校の頃に遊び半分でお義父さんのパソコンをいじってたら、いつの間にお金がかなり貯まっていたな。その時は怖くなってお義父さんに聞いたら、株だったわけ。ああ、お義父さんってのは刀奈たちの父親な。俺の両親は俺を幼い頃に捨てて、何処かに行っちまったから、顔も覚えてないしな。」

シャル「……………」

雷真「それからはお義母さんにバレないように二人でコソコソと株をやってたんだよ」

シャル「なんか、雷真が色々と規格外過ぎて驚くのに疲れそうだよ……」

雷真「刀奈と簪はなんかもう諦めてるみたいだけどな」

シャル「それは君の所為だよ」

雷真「アハハハハ！」

とシャルロットに俺の過去の話をしていると、オーナーが大きなケースを持つてくる。

オーナー「お待たせしました。当店にはこれだけしか、現在種類が御座いません。我が社は、若様のお陰でオーダーメイド等を取り扱えるようになりましたが、如何なさいますか？」

オーナーが持ってきた、ケースの中を見ると色々な星形のネックレスがある。また、オーダーメイドも勧めてくるが……。うくん、どれもいまいちだ。

雷真「すみません、同じ星形のブレスレットも見せてもらえますか？」

オーナー「わかりました」

次に持ってきた、星形のブレスレットの種類の中でピン！ときたのがあった。

雷真「すみません、これをお願いします」

オーナー「わかりました」

それから会計機で口座から引き落としされる決済をする。

雷真「はい。シャルロット」

シャル「本当にいいの？僕なんかもらって？」

雷真「俺はシャルロットにつけてほしいから買って君に贈ってるんだけどな？」

シャル「じゃあ、ありがとう。大事にするね」

雷真「そうしてくれ」

シャル「うん！わああああ！」

シャルロットは俺が買った、星形のブレスレットを見てはしゃいでいる。

雷真「オーナー、悪いんだけどオーダーメイドを頼みたい」

オーナー「どんなオーダーメイドで？」

雷真「それはこの紙に書いてあるから、作成はそちらに頼みたい。代金は同じ口座から引き落としてください」

オーナー「畏まりました」



ジュエリーショップへ寄ったあとは、色々とウインドウショッピングをしているのだが……。こちらを見張る視線が4つ。

雷真「はあく。アレでバレてないつもりか？」ボソツ

シャル「どうしたの、雷真？もしかして、僕とのデートはつまらない？。」

雷真「そうじゃないよ。これを見てごらん」

俺は携帯の内部カメラで後ろに付いてきている奴らの姿をシャルロットに見せた。

シャル「えっ!?!これって……」

雷真「そういうこと……。まさか、あの人まで参加するなんて」シャル「その人はどんな人なの？」

雷真「そうだな。その人は俺たちのお姉さんみたいな存在だな」シャル「お姉さん？」

雷真「そう。俺には兄弟がいないから、唯一その人を血の繋がりがなくても姉だと思えたんだ、

それ以外は両親、幼なじみ、友人、目上の人、って感じでカテゴラ

イズしてたな」

シャル「刀奈たちは兄弟とかのカテゴリイズをしてなかったの？」

雷真「ああ。二人は幼なじみのカテゴリかな？幼稚園では毎回、刀奈、簪、本音、虚さんの四人で遊んでたから。だから、自然に虚さん以外の三人は幼なじみで友人のカテゴリだったのかもな」

シャル「だそうですよ。四人とも」

「「ギクツ!?!」」

シャル「僕、産まれて初めてバレた時に『ギクツ!?!』って言う人たちを見たよ……」

雷真「大丈夫だ。俺もだ」

俺たちにバレていた。四人には渋々といった感じで物陰から出て来た。

雷真「はあく。本音、5秒以内に出て来ればお菓子を大量に買ってやる」

渋々といった感じの本音だが、その言葉に目をキラキラとさせながら、高速で俺の目の前にくる。

本音「ほら、出てきたよ！約束通り、大量にお菓子を買ってね、ライイ」

雷真「わかったよ」

虚「まったく本音は……」

雷真「それを言うなら他の三人ですよ」

「「すみません……」」

雷真「で、何で尾行なんてしてたんだ？」

刀奈「そ、それは……」

本音「ライライたちのことが気になって、仕事に集中できなかったから、来ちゃったのだ」

雷真「本音、お菓子の追加を許す」

本音「やった〜!」

刀奈「本音、貴女!」

雷真「はあく、こうなつては仕方ない。シャルロット、悪いがこの四人も一緒でもいいか?」

シャル「今度、二人きりでデートを改めてしてくれるなら、いいよ」

雷真「わかった」

刀奈「私とのデートも忘れないでよ、雷真?」

簪「何それ。私、聞いてないよ? 雷真」

雷真「刀奈の方は簪と付き合う前の話な。で、シャルロットの方はデートとして来ていたんだが、何処かの誰かさんがな」ジトー

刀奈「うぐっ!」

簪「お姉ちゃん……」ジトー

刀奈「いやん! そんな目で見ないでよ、二人とも」アセアセ

雷真「ここに居ても人の邪魔になるから行こうか」

「「賛成!」」

そして、俺、シャルロット、刀奈、簪、本音、虚さんの一行は臨海学校のための水着を買うために水着を売っているお店に向かった、

雷真「やっぱり、男性物が少ない……」

シャル「それは仕方ないよね」

刀奈「取り敢えずは自分たちの水着を選びましょうか」

簪「そうだね」

虚「私は雷真くんと居ますね。ここは女尊男卑の人間が多くいますから」

刀奈「そうね。お願いしようかしら」

刀奈たちと別れ、虚さんと共に俺は自分の水着を選んでいると虚さんから話しかけられる。

虚「雷真くん」

雷真「なんですか？」

虚「あの………さつき言っていたこと、なんですが」

雷真「さつき？ああ、シャルロットに話したことですか」

虚「雷真くんが私のことを、血の繋がりの無い姉だって、アレは本当ですか？」

雷真「本当ですよ。虚お姉ちゃん」

虚「っ!!そう、私もそう思っていてくれて、嬉しいわ。雷真」ニコ

ニコ

雷真「なんか久しぶりだな。碎けて喋るのは」

虚「そうね。雷真がお嬢様とご婚約してから敬語を使っていたから」

雷真「そうだったな」

雷真「ハハハハ」

虚「フフフフ」



私たちは雷真と虚と別れ、それぞれ水着を選んでいる。

刀奈「簪ちゃん、これなんてどう？」

簪「お姉ちゃん、流石にスリングショットはないよ……」

刀奈「そうかしら？雷真をこれで悩殺してやれば……」

???「更識姉、私がそんな卑猥な水着を許すとも思うか？」

刀奈「えっ？」ダラダラ

刀奈は凜とした女性の声が出た方を機械が軋むような、「ギギギギギイ」という音の効果音が出そうな感じでそちらを振り向くと………そこには。

刀奈「は、般若!？」

千冬「誰が鬼女だ!」ガシ!

刀奈「アイダダダダダ!! 織斑先生!ギブ、ギブギブギブ!!」

真耶「先輩、そこまでにしてあげたらどうですか?他のお客さんの目もありますし」

千冬「ふむ、そうだな」

山田先生のお陰で織斑先生のアイアンクローから解放された。

刀奈「うううう、ひどい目にあった」

簪「それはお姉ちゃんの自業自得だよ」

その後は雷真たちと合流してランチを食べて、学園に戻り、一日が終了。

## 第19話

千冬「本っ当にすまない。こちらの不手際でバスの定員がオーバーするとは……」

雷真「そんな謝らないでくださいよ。俺もシャルロットも怒ってませんから」

シャル「そうですよ。逆に織斑先生のお陰で雷真が運転するバイクに乗れますし」

何故、織斑先生が俺たちに謝っているかというところ……。臨海学校の一組のバスだけ定員オーバーで二人だけ乗れないという事態が起きたのだ。

なので幸い、バイクを持っている俺と後一人、俺のバイクの後ろに乗せることになったのだ。

そこで勃発したのが一組の刀奈とシャルロットの二人の婚約者によるバイクでタンデムする権利を競う勝負。結果はシャルロットが勝ち、刀奈がバスに乗ることになった。簪は他のクラスのため断念。

雷真「シャルロットさんや、それは単にお前が乗りたいただけでは？」  
シャル「だって憧れなんだから。好きな男性とバイクに二人乗りたいの……」

千冬「そ、そうか……。では、十分運転には気をつけるように。それと先に宿に行っても構わないぞ？」

雷真「いえ、せっかくですから皆のバスと一緒にいきますよ」

千冬「そうか、では私はバスに乗るとする」

雷真「了解です」

織斑先生との話を終えて、俺とシャルロットは駐車場へビートチェイサーを取りに行く。

シャル「雷真、これが雷真のバイク？」



雷真「そう。ビートチェイサー2000だ」

シャル「ビートチェイサー2000?」

雷真「元々、このバイクはとあるアニメのバイクでな。それをモチーフにお義父さんが再現と改造をしてくれたんだ。その時に著作権や肖像権なんかで揉めたけどなんとかなったそうだ」

シャル「そ、そうなんだ」

ビートチェイサーにビートアクセラーを差し込んでエンジンを入れる。

雷真「シャルロット、はい」

シャル「ありがとう」

シャルロットにヘルメットを渡してからビートチェイサーに跨がる。その後にシャルロットもビートチェイサーの後部座席に跨がる。それとシャルロットには念のため長ズボンを制服の下に履いてもらっている。

エンジンが後ろ側にあるとはいえ、なんかの拍子でエンジンに触れて生足が火傷をされては困る。

それが大切な婚約者なら尚更だ。

シャル「乗れたよ」

雷真「それじゃ、次にこのベルトを腰の後ろをぐるりと一周させてから俺の腰にある、嵌め込みに差し込んで」

シャル「わかった」

後ろから【カチツ!】と音が鳴るのを確認してから、もう一度シャルロットに準備は大丈夫か聞く

雷真「準備は大丈夫か?」

シャル「うん!大丈夫」

雷真「じゃあ、しっかり捕まってるよ？」

シャル「了解」

俺たち以外の生徒を乗せた、バスが動きだす。それを追いかけるようにバイクを走らせる。高速に乗るとシャルロットは歓喜の声を上げだした。

シャル「うわー、ISと違うけどバイクも結構早いね？」

ヘルメットについているインカムからシャルロットの声が聞こえてきたので返答する。

雷真「まあ、このビートチェイサーだけが特注品なんだよ」

シャル「どういうこと？」

雷真「普通のオフロードなら速度が250出せれば凄いほうだ。それに比べて、ビートチェイサーは設計上はアニメと同じで最高時速570kmなんだよ」

シャル「つまり、このバイクの最高時速は……」

雷真「あまく計算してマツハ0.5が最高だな」

シャル「す、凄い」

雷真「でも、そこまで出したら速度違反で捕まるけどな」

高速道路を走っているとIS学園のバスがサービスエリアに入つたので続いて俺たちも入ることにした。

雷真「シャルロット、トイレ休憩に入るぞ」

シャル「うん、わかった」

サービスエリアに入るとバイク専用の駐車場に停めてからタンデム用のベルトを外し、バイクから降りて体を伸ばす。

雷真「んん、はっ！」

シャル「んんん、っば」

雷真「流石に体が凝ったろ？」

シャル「流石に一時間も同じ体勢だとね」

雷真「それじゃ、体を解すついでにサービスエリアの中を見てくればいい。それと小腹が空いているなら早目に食べておいてくれ。運転の最中に後ろでリバーズされても困るから」

シャル「わかったよ」

シャルロットはそう言ってクラスの皆の所へ行ってしまった。俺は一応、織斑先生のところに行き、現状報告。休憩とはいえ、バスの中のような団体行動をしている訳ではなく、バイクでの行動。それもタンDEMとなれば、それなりにリスクが生まれるので報告だ。報・連・相、が大切だ、何事も。

雷真「お疲れ様です」

真耶「あつ、黒牙くん」

千冬「おお、黒牙」

俺はバスでスケジュール表やらを確認している、山田先生と織斑先生に息抜きにと思って自作したブレンドコーヒーの粉と氷水を入れた魔法瓶をストライクの拡張領域バススロットから出して、その場でブレンドコーヒーを紙コップに淹れて渡す。

雷真「どうぞ」

真耶「ありがとうございます」

千冬「これは、すまないな」

雷真「いえ」

「ッ!!」

千冬「うまいな……」

真耶「美味しいですね、このコーヒー」

千冬「黒牙、このコーヒーはインスタントなのか？」

雷真「いえ、それは俺のオリジナルブレンドですよ。作り方は”コズミック・イラあつち側”でザフトの元隊長に教えてもらいました。」

真耶「苦味や渋味が少なく、コーヒーの香りがとても豊かで、リラックスできますね。先輩？」

千冬「そうだな。このコーヒーは心を落ち着かせてくれる。礼を言う、黒牙」

雷真「そんなたいしたことはしてないですよ」

それからは時間になるまで織斑先生と山田先生と共に雑談等を話しながら時間を潰していた。

そして、再びバスが動きだし、シャルロットを後ろに乗せてバイクを走らせるのだが……。いきなり、一組を乗せているバスが待避所に止まってしまったため、バスを追い越してしまった。

シャル「何かあったのかな？」

雷真「分からない。けれど一応、刀奈の方に連絡を取ってみる」

俺たちも一つ先の待避所に止まり。刀奈に連絡を取ると……。何でも、本音がお菓子の食べ過ぎで、気持ち悪くなり、リバーしたらしい。

雷真「はあゝ」

シャル「心配して損したかも」

雷真「取り敢えず、俺たちはどうしたら良いか、織斑先生に替わってくれるか？」

刀奈『わかったわ』

千冬『電話を替わった』

雷真「織斑先生、俺たちはこのまま、どうしたらいいですか？先に  
行っているバスを追うか、それとも、そちらと合流した方がいいです  
か？」

千冬『そうだな……。そちらは先に行ってくれて構わん』

雷真「了解です」

シャル「織斑先生、なんだって？」

雷真「先に行ってくれてさ」

シャル「了解だよ」

それから、バイクを走らせる。そして、二度目のトイレ休憩になり、  
本音のところにお見舞いに行くと……………。

雷真「本音、大丈夫か？」

本音「こ、今回は無理」グデー

雷真「こんな本音を見るのは何時以来だ？」

グロツキーな本音の見舞いを終えて、一人バイクに戻るとそこには  
四組の先生と顔を青白くして具合が悪そうな簪の姿があった。

雷真「簪!?!。大丈夫か？」

簪「雷真……………」

先生「貴方が黒牙くん？」

雷真「あつ、はい」

先生「簪さん、バスの中で乗り物酔いになっちゃってね……。それ  
で、簪さんが貴方のバイクなら多分、大丈夫だろうって」

簪「ごめん、雷真」

雷真「こんなんで謝んな」

雷真「わかりました。取り敢えずは学園からタンデムしてきてる、パートナーに聞いてから、どうするかを考えます」

先生「お願いね」

先生から簪のことを聞いて、シャルロットが戻るのを待った。シャルロットが戻ってきたら、簪のことを全て話し、タンデムを簪と交替することを伝える。

雷真「……ということなんだ」

簪「ごめんね、シャルロット」

シャル「ううん、これは仕方ないよ。じゃあ、僕は4組のバスに乗るから」

雷真「わかった」

簪「ありがとう」

シャル「それじゃあね」

シャルロットは4組の先生と共に4組が使用しているバスに向かった。

雷真「簪、俺たちもそろそろ行こうか？」

簪「うん……」

簪はまだ顔が青いが、先ほどよりは少しましになっている。ヘルメットを渡してバイクに跨がり、後部座席に簪が乗り、慣れた手つきでタンデムベルトを取り付けていく。

雷真「準備はいいか？」

簪「うん」



サービスエリアで簪を後ろに乗せた俺は、学園のバスと共に、今回の合宿先に無事に着くことが出来た。

雷真「くあく、体がバキバキだ……」コキバキ

簪「運転お疲れ様、雷真」

雷真「ああ。簪も体調はどうだ？」

簪「うん。雷真のお陰で乗り物酔いも治ったよ」

雷真「それは良かった」

千冬「全員、クラス順に整列！織斑と黒牙は私のところに来るように」

「「はいー」」

一夏「はい」

雷真「はい」

千冬「それではここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の皆さんの仕事を増やさないように注意しろ」

「「はいーよろしくお願いします」」

織斑先生の注意事項のあと、IS学園一年全員で女将さんに挨拶する。また、この花月荘は毎年IS学園の合宿所としているらしい。

女将「今年の1年生も元気があつてよろしいですね。それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますからそちらをご利用なさってください。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女将さんは優しい人らしく、優しい笑顔でIS学園の生徒にお辞儀をした。

そして、俺と一夏以外の生徒は従業員の人に案内をしてもらい、自分が寝泊する部屋に向かった。

女将「で、こちらが噂の……?」

千冬「ええ、今年は男子がいるせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

女将「いえいえ、いい男じゃありませんか。しっかりしていてそんな感じをお受けしますよ」

千冬「二人とも挨拶をしろ」

一夏「織斑一夏です。よろしくお願いします」

雷真「黒牙雷真です。御手数をお掛けしますが、よろしくお願いします」

女将「ご丁寧にも、清洲景子です」

千冬「それでは挨拶も終わったことだし、お前たちの部屋に行くぞ」

「はい!」

それからは織斑先生の後を追いかけて、花月荘の中に入り、南側の三階、つまり海側の部屋に着いた。

着いた部屋には『教師室』と書かれて札と、『更識』と書かれた札があった。

雷真「はあ?」

千冬「織斑は私と同じ部屋。黒牙は、お前の婚約者三人と同じ部屋だ」

雷真「いやいやいや!?。ちよつと待ってくださいよ!!」

千冬「なんだ?」

雷真「流石にまずいでしょ!?!年頃の男女が同じ部屋だなんて」

千冬「お前は今更なに言う。入学初日から更識姉と同居、デユノ



アが転校してきてからはデユノアと同居。そんな、お前が今更だろうに」

雷真「うぐっ!？」

雷真「そ、そうですけど!」

千冬「これは決まりだ。予備の部屋とかはないからな。異性交遊もほどほどにしろよ?」

雷真「流石に他の生徒がいるのにしませんよ!」

千冬「フフフフ」

織斑先生は笑いながら自分の部屋に入って行った。

一夏「雷真、その……なんだ?頑張れよ」

雷真「なにをだよ!」

雷真「はあく」

仕方なく、俺は『更識』と書かれた部屋に入る

【ガラガラガラガラ】

刀奈「お帰りなさい。ごはんにします?お風呂にします?それとも、わ・た・し?」

簪「そ、それとも、わ、わ、わ、わ、私にしますか?／／／／／／／／／／」

シャル「そ、それとも、僕………?／／／／／／」

雷真「……………」

雷真「ぶはっ!?!」鼻血ブー

「「ら、雷真!?!」」

刀奈「だ、大丈夫?」

雷真「お、お前ら、なんつう格好を……………」鼻抑え

シャル「こ、これは…………」

簪「お姉ちゃんが雷真を驚かそうつて…………」

雷真「その下はちやんと着てるんだろ?」鼻抑え

刀奈「はい、ティッシュ」

雷真「サンキュー」鼻にツメツメ

シャル「うん。一応、このエプロンの下には水着を着てるよ」

雷真「それは良かった」

俺がなぜ、鼻血を出したのかは…………。まさか部屋に入ったら中には刀奈、簪、シャルロットの三人が裸エプロンならぬ、水着エプロンをしていたのだ。三人の格好を光の加減のいたずらか裸エプロンをしているように見えたため、俺のキャパシティがオーバーフローして鼻血が噴出たのだ。

雷真「取り敢えず、服を着てくれ」

刀奈「水着を着ているじゃない?」

雷真「まあ、そうだが…………」

シャル「雷真、僕たちは今から海に行くけど雷真はどうする?」

雷真「少し休んでから行くよ」

シャル「わかった」

刀奈、簪、シャルロットの三人は俺をおいて、海に向かって行った。



雷真にちよつとした、イタズラをした私たちは三人で先に海に来ている。

刀奈「簪ちゃん、シャルロットちゃん、早く！」

簪「待つてよ、お姉ちゃん」

シャル「そうだよ。待つてよ、刀奈」

私たちはそれぞれ、海に向かって走り出す。すると山田先生から注意事項が大声で説明された。

真耶「今、11時です。夕方までは自由行動、夕食に遅れないように旅館に戻ることに、いいですね？」

「「はーい！」」

本音「かつちゃん、かんちゃん、デュツチー」

刀奈「あら、本音」

簪「本音……。貴女、やっぱり着ぐるみなんだね」

本音「ちゃんとこれも水着なんだよ？」

シャル「そ、そうなんだ……」

本音「あれ？ライライは？いつも三人と一緒にいるのに」

刀奈「えっと、それは……」

簪「うん、それはね……」

シャル「雷真はバイクの運転で少し疲れたみたいだから少し休むっ

て」アセアセ

刀奈「(シャルロットちゃん、ナイス!)」

簪「(シャルロット、ナイスアシスト!)」

本音「ふくん、そうなんだ。じゃあ、私はもう行くね」

刀奈「ええ」

簪「わかった」

シャル「うん」

本音はそのまま、一夏くんのところへ。友達と一緒にビーチボールを持って走って行った。

「「はあく」」

刀奈「シャルロットちゃん。さっきのはナイスよ」

簪「本当だよ」

シャル「なんとかなつて、良かったよ」

簪「もしも、本音や他のみんなに私たちが雷真に水着エプロンをやって鼻血を出させちゃった、なんて知られたら……」

シャル「恥ずかしいもんね」

刀奈「そんなにかしら？少しだけ恥ずかしいのは分かるけど」

簪「そう思うのはお姉ちゃんだけだよ！」

シャル「そうだよ！」

こうして、刀奈、簪、シャルロットのちよつとした、黒歴史の拡散は避けられた。



雷真「まったく、刀奈にも困ったものだ。時と場合を考えてからやってくれよ……。こっちの身が持たないぞ」

俺は拡張領域からブレンドコーヒーの粉と魔法瓶を取り出して、一息入れる。

雷真「ふう、青い海を見ながら飲むコーヒーはまた格別だな」

それから、約2時間ほどコーヒーを何杯か飲みながら小説を読み、ゆっくりと過ごしていると、俺の携帯が鳴る。

雷真「誰だ？人がのんびりしているのに……」

携帯を見ると、着信の主は刀奈からだ。

雷真「あ、もしかして？」

刀奈『あつ、雷真？今すぐ、海に来なさい』

雷真「え」

刀奈『いいから、来る！じゃあ、待ってるわよ♪』

雷真「ちよ、刀奈！……切れる」

雷真「はあ、仕方ない。行くか」

俺は仕方なく、刀奈たちがいるビーチへと足を運ぶことにした。

## 第20話

雷真「熱い……………」

刀奈に呼ばれて水着に着替えてビーチに来たものの、日射しが強く、熱い。そして、ビーチの至るところに健康的な美人が水着ではしゃいでいる。

「あつ、黒牙くんだ！」

「本当だ！」

「ねえ、黒牙くんの腹筋やばくない？」

「本当……………6つに割れてるし、筋肉に無駄がない」

と女子たちから、俺の筋肉の話をされていたりする。

刀奈「らくいしくん！」

雷真「あ？」

刀奈に呼ばれたと思い、声をする方に向くとそこにはパラソルの下でマットの上に寝そべる刀奈の姿があった。

雷真「来てやったぞ、刀奈」

刀奈「ありがとう。それじゃ、いきなりで悪いんだけど、はい」日焼け止め

雷真「はあ？なんで、俺なんだよ？簪かシャルロットとかに頼めよ」

刀奈「ええっ？だって、一夏くんはセシリアちゃんにやってたし」

雷真「一夏め……………。特訓メニューを地獄にしてやるからな」

雷真「はあく、やってやるからうつ伏せに寝ろ」

刀奈「はくい♪」

雷真「つたく……………」

俺は刀奈から日焼け止めを受け取り、手の平に出して少し体温で温めてから、優しく刀奈の背中に塗っていく。

雷真「いくぞ?」

刀奈「いいわよ」

刀奈「んっ」

雷真「……………」ヌリヌリ

刀奈「んあっ……………あっん……………」

雷真「……………」ヌリヌリ

刀奈「くふううっ……………」

雷真「あのさ、刀奈」

刀奈「なに……………かし……………ら……………あんっ!」

雷真「お前、わざとだろう、それ」

刀奈「あっ、バレた?」

雷真「当たり前だ。声は喘いでいるように聞こえるが汗が分泌されていない」

刀奈「あら?経験がある風に聞こえるのは私だけかしら?」ジト

雷真「あっち側<sup>コスミック・イラ</sup>の上官が艦内のシャワー室で女性艦長とナニを

してたんだよ……………。それを問い詰めて、あまり艦内でしないでくれって頼んだら、いろいろと知らない情報を聞かされたんだよ」

刀奈「それってどんな情報?」

雷真「体験してみるか?まずは、肩甲骨の辺りから尾骨まで人差し

指でツート……………」

刀奈「ひゃうっ……………ああっ……………んっ!」ビクビク

雷真「一度戻してから、今度は尾骨より少し下に……………」

刀奈「ちよっ……………らい……………しん……………そこはっ!」ビクビク

雷真「そして極めつけは……………」

【パク】

刀奈「あんっ!」ビクン

雷真「耳たぶを甘噛みして……」アムアム

刀奈「雷真……ほんと……これ……以上は……」ビクビク

雷真「最後に……」

『刀奈、めちやくちや可愛いよ』

この時の俺は暑さで頭をやられていたのか今まで我慢していたものが止められずに、周りの女子が見ている中、刀奈を愛でてしまった。

刀奈「らめええええっ!!」ビクン!ビクン!

雷真「……………」

千冬「止めんか、このバカ者が!」バシン

雷真「あうっ!?!」

雷真「はっ!俺はなにを……………」

刀奈「はあ はあ、はあ、はあ。//////」グデン

簪「お、お姉ちゃん、大丈夫?//////」

刀奈「お姉ちゃんも……流石に……腰が抜けちゃった。雷真たら

……テクニシャンなんだから……もう。//////」ハアハア

シャル「あんな刀奈、初めてみたけど……いろいろとすごいね。／

／／／／

千冬「黒牙、貴様は公共の場でなにをしでかしている!」アイアンクロー

雷真「あががががっ!?!す、すみません、今までの鬱憤と暑さの所為で……。頭が、頭が割れるうううう!?!」

千冬「次は無いぞ。いいな?」

雷真「イエツサー……」ピクピク

なんとか、織斑先生のアイアンクローから解放された俺は、簪たちに水着の感想を聞かれた。

簪「雷真、今更だけど、どう似合ってる?」

シャル「僕のも、どう……かな?」



雷真「簪は黒のビキニでシャルロットが黄色と黒か……。うん、二人とも似合ってるよ」

簪「そっか、良かった……。／＼／＼／」

シャル「えへへ、雷真にそう言ってもらえると僕も嬉しいな。／＼／＼／」

二人のことを褒めていると背後から刀奈に抱きつかれ、刀奈の水着の感想も聞かれる。しかし、その抱き付かれている状態が少しヤバいのだ。

何故、ヤバいかは刀奈がトップの水着を着けていないのだ。

刀奈「雷真、二人の水着だけ褒めて、私にはないわけ？」ギョツ

雷真「か、刀奈!?!お、お前、トップの水着はどうした!?!／＼／＼／／」

刀奈「あら、雷真に抱き付いているから、今はいらなと思うって……。それとも、私の胸の感触がそんなに、い・い・の？」ポヨポヨ

雷真「お前、万が一にも一夏に見られたらどうするんだよ!」

刀奈「大丈夫よ。彼なら織斑先生たちとビーチバレーをしているもの」

雷真「それでもだ。前にも同じやり取りをした記憶があるんだが……。」

刀奈「そうね、入学式の日にもやったわね」

雷真「取り敢えず、トップを着てくれ!でないと感想が言えん!」

刀奈「仕方ないわね」

雷真「仕方ない、っってお前な……。」

刀奈「はい、これでどうぞ?」

刀奈はトップの水着を着直してから俺の前に周り込む。そして、刀奈の水着姿を見た俺は……。

雷真「／＼／＼／／」

刀奈「ねえ、何か感想はないわけ？」

雷真「えっと、その……すごく、似合ってる」

雷真「めちやくちや可愛くて、俺以外の男には見せたく無くなるほどだ」

刀奈「あ、ありがとう。／＼／＼／＼／＼」

刀奈は雷真の『俺以外の男には見せたく無いほどだ』の言葉に顔を真っ赤に染めて俯いてしまう。

二人して顔を赤くしているとビーチバレーをしている、一夏から声が掛かる。

一夏「おい、雷真。お前も一緒にビーチバレーをしないか？」

雷真「わかった。今、そっちに行く」

一夏からビーチバレーに誘われたのでやることにした。俺のチーム、刀奈、簪、シャルロットで、一夏のチームはセシリア、鈴、ラウラだ。

まあ、なんとも俺たちに好意を寄せている女子でうまくチームを組んだものだ。

♪ BGM : Straight Jet ♪

雷真「それじゃ、いくぞ？」

一夏「バチ来い！」

雷真「せーの、フッ！」

俺はビーチボールを少し前に高く上げ、助走を付けて飛び、ジャンピングサーブする。

一夏「なっ！ジャンピングサーブ!?!」

一夏「ラウラ!」

ラウラ「任せろ!」

勢いよく、一夏側のコートに射し込むように放った俺のボールはラウラがドイツ軍で培った反射神経でレシーブして、ボールを空に跳ね上げさせる。

一夏「ナイス、ラウラ!」

ラウラ「当然だ!」

セシリア「鈴さん、行きますわよ!」

鈴「OK!」

ラウラが跳ね上げたボールをセシリアはトスでネット際にいる鈴に合わせて打ち上げ、鈴はセシリアから来たボールをスパイクする。

刀奈「させないわよ!」

しかし、鈴がスパイクする直前で刀奈がネット際に走って飛び上がり、鈴のスパイクを上から覆うようにブロックする。

鈴「なっ!?(制服越しでもわかるけど、水着になるとやっぱりデカイわね……)」

この刀奈のブロックにより、俺たちは先制点となった。

刀奈「そう易々とは先制点をあげないわよ」

鈴「ぐぬぬぬ」

雷真「次、いくぞ?」

一夏「今度こそと、止める!」

雷真「セイヨツ！」

再び、ジャンピングサーブで一夏たちに放つが、そのボールは先程と違い、まったく勢いがないがフワフワと浮かんでいるように見える。

鈴「無回転サーブ!？」

セシリア「まさか、あんな技まで！」

俺が放った、無回転ボールはそのまま、ネットに引っ掛かり、ネットの上で……

雷真「秘技、綱渡り」

コロコロとボールは横に転がり、そのまま一夏側のコートに落ちた。

一夏「マジかよ……」

雷真「うゝん、エクスタシゝ！」

簪「雷真、さっきのも今のもネタだよね？」

雷真「あつ、わかった？」

簪「流石にね。中学の友達も同じこと授業中にやろうとしてたから」

雷真「授業中にやるのかよwww」

一夏「次はこっちの番だ！」

鈴「いくわよ！」

鈴は普通にアンダーサーブする。

雷真「簪、頼む！」

簪「わかった！」

簪がレシーブで上に上げ……

簪「お姉ちゃん！」

刀奈「了解よ！」

刀奈がトスをする。その時、刀奈からアイコンタクトが飛んでくる。

雷真「(なるほど……)」

雷真「シャルロット、一緒に頼む！」

シャル「わかった！」

雷真とシャルロットは一斉にネット際まで走り、飛び上がる。

セシリア「シンクロ攻撃まで!？」

雷真「刀奈！」

刀奈「いくわよ！」

刀奈によってトスされたボールは雷真に……ではなく、シャルロットに回された。

鈴「雷真、じゃないの!？」

雷真「シンクロ攻撃は誰が打つか分からないのが利点だ」

シャル「セイツ！」

シャルロットが放った、スパイクはそのまま、コートギリギリに刺さると思いきや、そこへ。

一夏「うおおおおおっ!!」

雷真「なに!？」

シャル「嘘、一夏は逆サイドに居たのに!？」

一夏は何と、逆サイドから滑り込む感じでシャルロットが放ったスパイクをブロックし、上に跳ね上げたのだ。

鈴「一夏!」

セシリア「一夏さん!」

ラウラ「流星は私の嫁だ!」

一夏「こんなのは、いつもの特訓と比べたら全然だぜ!」

それから、一夏チームvs雷真チームのバトルは白熱していく。そして、そんな中、ある人物がこの試合に参加する。

千冬「ほう、なかなかやるじゃないか、黒牙」

雷真「あつ、織斑先生」

千冬「オルコット、私と交代だ」

セシリア「わかりました。あとはお願いしますわ」

千冬「任せろ」

千冬「黒牙、貴様とは一度、本気で闘ってみたいと思っていたのだ」

雷真「マジかよ……」

千冬「いくぞ? 黒牙」

雷真「みんな、しまつてくぞ!」

「「ええ! (うん!」」

千冬「ハッ!」

織斑先生はボールを高く放り上げ、それは綺麗なフォームでジャンピングサーブを放つ。その勢いは常人のサーブを超えている。

雷真「任せろ!」

雷真「ッ!? (ぐっ!なんだ、このボールの重さは!?)」

雷真「うおおおおおつ!!」

なんとか、サーブをブロックし、跳ね上げさせるが勢いを殺せずに俺は後ろに後転してしまう。

雷真「すまん、カバー頼む！」

シャル「僕に任せて！」

刀奈「簪ちゃん、いくわよ！」

簪「うん！」

今度は反撃にシャルロットがトスでボールをパスをして、更識姉妹が完全に息があつたシンクロ攻撃をする。

千冬「一夏！」

一夏「おうよ！」

しかし、更識姉妹のシンクロ攻撃を、織斑姉弟がシンクロ攻撃ならぬ、シンクロブロックで二人の攻撃を止める。

刀奈「ぐっ!？」

簪「そんな……!？」

織斑姉弟にブロックされた、ボールはそのままコートに落ちると誰しもが思ったが……やはり、そこへ更識姉妹のヒーローである。黒牙雷真がスライディングでボールを跳ね上げる。

雷真「まだまだだ！」

刀奈「雷真！」

簪「雷真！」

雷真「シャルロット、スパイク！」

シャル「いつけええええ!!！」

織斑姉弟の隙を突き、雷真によって跳ね上げられたボールはシャルロットのスパイクによつて一夏チームのコートに決まる。

シャル「やった！」

刀奈「シャルロットちゃん、ナイス♪」

簪「ほんと、シャルロット、ナイスだよ」

雷真「ナイス、カバーだ。シャルロット」

「」「イツエイ！」「」 パシンツ！

シャルロットのナイスプレイに俺たちはハイタッチを決める。

千冬「黒牙、まだ試合は終わっておらんぞ？」

雷真「わかってますよ。必ず、俺たちが勝ちます！」

千冬「やれるものならやってみろ？」

雷真「ええ！」

その後はどちらもお互いに譲らない攻防戦になったが………や  
はり、ブリュンヒルデの名は伊達ではなく、織斑先生がいる、一夏チー  
ムの方に軍配が上がる。

雷真「だあく！負けた」

千冬「まだまだ、ガキには負けんさ」

刀奈「まさか、雷真が居て負けるだなんて……」

簪「私も、雷真が居て負けたのは初めてかも……」

更識姉妹はチートのような身体能力を持つ雷真と同じチームに  
なつて、今まで一度も負けたことがなかったので二人は驚いている。  
そして、一夏チームの千冬以外のメンバーは……



一夏「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

鈴「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

ラウラ「はあ、はあ、この……私が……体力……切れとは、落ちぶれたものだ」

砂浜の上でゼエゼエと息を切らしながら、仰向けで倒れていた。

真耶「皆さん、お疲れ様です」

## 第21話

昼間にビーチで思う存分に遊んだ、俺たちは海の家シャワー室を使い。ある程度まで、海水や砂などを落としたりと旅館に戻り、夕食の時間までのんびりと過ごし、今はみんなで大広間で夕食を食べている。

席順は……………。

刀奈、俺、シャルロット

【テーブル】

セシリア、一夏、相川さん

の順だ。

簪はクラスが離れているのでドンマイ……。

一夏「うん、美味しい！流石は、本わさ」

一夏は夕食に出てくる。新鮮な魚の刺身にワサビを付けて食べたあと、感想を口にした。

シャル「本わさ？」

雷真「シャルロットはまだ、日本に来て日が浅いからな。一夏が言っているのは多分、本ワサビの方だと思うけど。で、本ワサビっていうのは、元々こんくらい約10cmほどの緑色の物をすりおろした物なんだ。そんで、市販で売られているのは、わさびと化学調味料なんかを混ぜ合わせた物なんだ」

シャル「へー、どれどれ？」

シャルロットは俺のワサビの説明を聞いて、興味が湧いたのか、お皿に乗っているワサビの塊をそのまま食べようとしたので慌ててそれを止める。

雷真「シャルロット！ストップ、ストップ！」

シャル「えっ?」

雷真「シャルロットは、ワサビは初めてなんだから、ほんの少しだけ、自分の舌に乗せて味を確かめた方がいいぞ? でないと、あとで後悔するから」

シャル「わかった。雷真がそういうなら」

そして、シャルロットは本当にお箸の端っこに付いたくらいの量でワサビを口にする。

シャル「っ!？」

雷真「どうだ?」

シャル「風味があつて美味しいけど、雷真の言う通りにおいて正解だったよ」

雷真「なら、良かった」

そして、俺も刺身を食べることにした。しかし、前の席に座っている、セシリアが何故かモジモジし始めたのだ。

セシリア「んん……」モジモジ

一夏「大丈夫か? 正座がダメならテーブル席に移動したらどうだ?」

セシリア「へ、平気ですわ」ニコリ

セシリア「この席を獲得するのにかかった労力に比べたら、このくらい」ボソツ

セシリアも苦労しているようだ。俺は、一夏と違い、もう、あまり唐変木ではないので大丈夫な、はず……。

一夏「席?」

セシリア「い、いえ! 何でもありませんわ!」アタフタ

セシリアが一夏の質問にアタフタしているところをシャルロットが援護する。

シャル「一夏、女の子にはいろいろあるんだよ」

雷真「そうだぞ、一夏。俺も、それでたまに後悔することがあるから、気をつけろよ?」

一夏「そうなのか……?」

「「そうなの（そうなんだよ）」

一夏「……………」

そのあと、一夏は何か視線を感じたのか箒の方を見た。

雷真「箒も苦労してたみたいだな」

セシリア「……………んはっ!」

セシリアがなんとも艶かしい声を上げて、正座から膝を崩す。

一夏「セシリア、そんなにキツイなら、俺が食べさせてやろうか?」

セシリア「それは本当ですか?」キラキラ

セシリアは一夏の発言に目をキラキラと輝かせながら一夏に迫る。

セシリア「食べさせてくれると言うのは?」キラキラ

一夏「お、おう……………」

セシリア「せっかくのお料理、残したりしては申し訳がありませんもの」

そう言って、セシリアは一夏に自分のお箸を渡した。

刀奈「ねえ、雷真」

雷真「俺はやらないぞ」

刀奈「何も言っていないじゃない!」

雷真「言わなくても分かる。この場のあの状況で、分からないバカが一夏以外にいるか?」

刀奈「それはないわね」

雷真「なら、自分で食べる」

刀奈「ちえ」

それからは、俺たちは普通に食べるが……。一夏がセシリアに『あくん』をするから騒がしくなってきた。

雷真「あのさ、静かに食わせてくれないか?それと、騒ぎ過ぎると織斑先生の出席簿が脳天に落ちるぞ?」

「「「……………」」」」

俺の言葉で、さつきまで騒いでいた女子たちの声が「シーン」となり止む。

そして、一夏の後ろの戸から織斑先生がやって来た。

千冬「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ。それと黒牙、騒動を鎮めるために私を使うな」

雷真「ですが、織斑先生がそれだけ偉大だと生徒たちが皆、理解していることの証明だと、俺は思いますが……」

千冬「この、屁理屈め」

雷真「褒め言葉と受け取っておきます」

そのやり取りの後、織斑先生は戸を閉めて、自分の席に戻って行った。

「はあく」

みんなは、俺と織斑先生のやり取りで息が詰まる思いをしていたよ  
うで、一斉に安堵の息を吐く。

一夏「という訳で、セシリア。悪いけど、自分で……」

セシリア「……………」プクー

セシリアは納得が行かない、という感じで頬を膨らませている。  
その後、一夏はセシリアに何か耳打ちをすると、セシリアは頬を赤  
くする。

雷真「(また、面倒なことにならないか)」ズズズズ

俺は緑茶を飲みながら、そう思っていたのである。



夕食を食べ終わり、部屋でのんびりと昼間の小説の続きを読みなが  
ら、ブレンドコーヒーと売店で売っていたミルクを混ぜて、カフェオ  
レを飲んでいると、扉からノックが聞こえる。

「コン、コン、コン」

雷真「は〜い」

部屋の扉を開けるとそこには箒がいた。

雷真「あれ、箒。どうしたんだ？一夏の部屋なら隣だぞ？」

箒「いや、織斑先生からシャルロットたち、三人を呼んでこいで来いと言われて」

雷真「シャルロットたちを？」

箒「ああ。呼んでもらえるか？」

雷真「わかった。刀奈、簪、シャルロット、ちよつと来てくれ」

俺は三人を呼んで、箒が先程俺に言ったことを伝えると何故か三人は少し体が強張っていた。

お前たち、今度は何をしでかした……………？



私たち三人は、箒ちゃんに織斑先生から呼ばれていると言われたので、体が強張ってしまったが、なんとか体を動かし、隣の織斑先生の部屋に向かう。

刀奈「あれ？鈴ちゃんに、セシリアちゃん、ラウラちゃんも」

箒「織斑先生、三人を言われた通り、連れてきました」

千冬「ご苦労。座ってくれ」

織斑先生に言われるまま、私たちも畳に座る。

千冬「お前たちを呼んだのは他でもない。二人のことだ」

織斑先生が示す、二人とは間違いなく、雷真と一夏くんのことだろ

う。そして、この場にいるメンバーは雷真と一夏くんに好意を寄せている女子の集まりなのだから間違いない。

織斑先生は缶ビールを開けて、飲みだす。

千冬「で、お前ら。あの二人のどこが良いんだ？」

「!?!」

千冬「まあ、確かに一夏は役に立つ。黒牙の方は更識姉妹が一番知っているだろうが言わせてもらう」

千冬「二人とも家事や料理はなかなかのものだろう。黒牙の方は知らんが一夏はマッサージも上手い。付き合える女は得だろうな」

刀奈「……………」

簪「……………」

シャル「……………」

箒「……………」

セシリア「……………」

鈴「……………」

ラウラ「……………」

千冬「どうだ、欲しいか？」

「「くれるんですか？」」

私と簪ちゃん、シャルロットちゃんの三人以外のこの部屋にいる女子は織斑先生の言葉に一夏くんをくると期待したのか前のめりになる。

千冬「やるか、バカ」

そうやって織斑先生は立ち上がる。



「「ええ……………」」

一夏くんのことを好んでいる女子たちは心底残念そうな声を漏らす。一夏くん、早くこの子たちの好意に気づいてあげて、見てる私がこの子たちを可哀想に思えてくるから。

千冬「女ならな、奪うくらいの勢いで行かなくてどうする？女を磨けよ、ガキ共」

刀奈「あの、織斑先生」

千冬「なんだ、更識姉」

刀奈「何故、私たちが呼ばれたのか、いまいち分からないのですが？」

千冬「そうだったな。単刀直入に聞く、お前たち三人と黒牙の馴れ初めを聞かせてほしい」

「「へっ？」」

「「ええええええええ！」」

刀奈「そ、そんなことをいきなり言われても…………」

簪「そ、そうですよ！」

シャル「こ、心の準備が…………」

千冬「なら、黒牙の奴に聞くとするか」

刀奈「雷真に言われるよりは自分の口で言いますよ…………」

簪「私もお姉ちゃんと同じです…………」

シャル「僕も…………」

千冬「そうか、では誰から話す？」

シャル「じゃあ、僕から…………」。みんなも知っている通り、僕はある都合で男の振りをしてIS学園に来ただけど、それが雷真にバレてね」

「「……………」」

シャル「もしも、そのことがバレたら、僕の人生は真つ暗だったはずなのに、雷真はそんな僕を救ってくれたんです。そして雷真は、僕にこんな言葉をかけてくれたんです」

く回想く

雷真『お前はそんなんでいいのか？それに俺たち子供は親を選べない。親は子を望めるが俺たち子供はそんなことすら望めないんだよ！俺たちは産まれてからじゃないと何にも望めないんだ』

雷真『だからシャルル。今は望んでいいんだよ。お前が生きたいように、暮らしたいように、過ごしたいように、心の底から願う。お前自身の生きざまをさ』

雷真『安心しろ、俺がお前の……最後の希望だ』

く回想終了く

シャル「だから、もし許されるのであれば、こんな嘘付きな僕だけれど……。彼の、雷真の側にずっと居たいって思えたんです」

千冬「そうか……。デュノアは黒牙に出会えて良かったようだな」

シャル「はい！」

刀奈「それじゃ、次は私と簪ちゃんね」

簪「そうだね」

千冬「なんだ？お前たち姉妹は偶然にも同じタイミングで黒牙を好きになったのか？」

刀奈「はい。実は私たちの家はある名家の家柄で、それなりに恨まれたりするんですよ」

簪「そんな家柄のため、小学生4年生の時にお姉ちゃんと私は誘拐されてしまって……」

刀奈「そして誘拐された私たちを助けに来てくれたのが……」

千冬「当時、10歳のお前たちと同じ歳である、黒牙だった訳か

……」

刀奈「はい……。木刀を持って一人だけで雷真は、武器を持った何十人という大人たちを一人残らず行動不能まで追い込み、傷だらけで私たちを救ってくれたんです」

鈴「凄いわね、雷真の奴」

ラウラ「そうだな。当時、10歳で何十人の大人を相手するのは私でも辛いだろうな」

セシリア「まさに、お二人の白馬の王子様ですわね」

箒「そうだな」

千冬「黒牙は、その頃から戦いの道に進んでいたのか……」

その後は織斑先生の仕事の愚痴や箒ちゃんたちの一夏くんへの愚痴や私たちの雷真を落とした必勝法などを話していたら、就寝時間に近くなっていたので自分たちの部屋に戻るようになった。

## 第22話

雷真「はっ、はっ、はっ、はっ」

一夏「はっ、はっ、はっ、はっ」

今日も俺たちは早朝のランニングをしている。合宿といえど、特訓は継続してこそ意味があるので、今日は普通ではできない裸足で砂浜ランニングをしている。

雷真「一夏、速度が落ちてるぞ！」

一夏「おう！」

何故、砂浜を裸足で走れるかは、走る前に準備体操代わりに昨日のビーチで遊んだゴミなどを拾い集めたのだ。

雷真「はっ、はっ、はっ、はっ」

一夏「はっ、はっ、はっ、はっ」

雷真「ラスト、一本！」

一夏「ラスト、一本！」

ランニングのあと、部屋に戻ろうと通路を歩いていると、旅館の庭で箒が何やら、地面にささっている謎の物体を見ていた。

一夏「箒？」

そして謎の物体の少し後ろには『ひっぱってください』と書かれてあった。

一夏「なあ、これって……………」

箒「知らん。私に聞くな」

箒はそう言って何処かへ言ってしまった。

一夏「おい、放って置いて良いのか？」

雷真「なあ、一夏。これを引き抜けばいいのか？」

一夏「あつ、ちよっ！」

雷真「えいよ」

俺がその物体を引き抜くと……………。空から【ゴゴゴゴゴ】と航空機のような音が聞こえてくる。

てか、これって何かが落下する音じゃあ……………。

そして10秒も経たずに空から大きな人参が降ってきた。

雷真「一夏！空から女の子じゃなくて、大きな人参が降ってきたぞ！？」

???『アハハハ、ウフフ、アハハハ』

俺がいろんな事で戸惑っていると大きな人参から女性の笑い声が聞こえて、声が止むと大きな人参が【プシュー】と音を立てながら二つに割れ。中から絵本の一つである、不思議な国のアリスのアリスの格好をした女性が出てきた。

???「引っ掛かったね、いっくん！ブイブイ」

雷真「……………」

一夏「……………」

一夏「お、お久しぶりです。束さん」

束「うんうん、お久だね。本当に久しいね。ところでいっくん、箒ちゃんは何処かな？」

一夏「え、えつと……………」

束「あつ、私が開発した、この箒ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。じゃあね、いっくん。また、後でね〜！」

雷真「一夏、今の女性と知り合いなのか？」

一夏「ああ……。篠ノ之束さん、箒の姉さんだ」  
雷真「マジかよ……」

篠ノ之束との邂逅のあと、俺たちの部屋に戻り、汗を流したあとは旅館の朝食を食べてから、今日の合宿本来のカリキュラムを行うのだが、何故か俺たち専用機持ちが織斑先生に呼ばれて集合している。

千冬「よし、専用機持ちはこれで全員揃ったな？」

鈴「ちよつと待つてください。箒は専用機を持ってないでしょ？」

箒「そ、それは……」

千冬「私から説明しよう。実はだな……」

織斑先生がこの場に箒が居ることを説明しようとする……。

???「やつほく！」

「「……………」」

???「ちくいちやくん！」

またもや、何処からか不思議な国のアリスの格好をした。箒の姉である、篠ノ之束が崖の上からやって来た。

束「やあやあ！会いたかったよ、ちくちゃん！」

束「さあ、ハグハグしよう！愛を確かめよう！」

千冬「五月蠅いぞ、束」

織斑先生は崖から飛んできた、篠ノ之束を片手で鷲掴みしたまま会話をする。

束「相変わらず容赦のない、アイアンクローだね！」

そして、織斑先生のアイアンクローから逃れた。篠ノ之束は岩影に隠れている箒に声をかける

束「じゃじゃくん！やあ？」

箒「どうも……………」

束「久しぶりだね、こうして会うのは何年振りかな？大きくなったね、箒ちゃん！特におっぱいが……………」

箒は篠ノ之束の『おっぱいが』の言葉が頭に來たのか、何処からか木刀を取り出し、篠ノ之束の顔面に突き決める。

箒「殴りますよ！」

束「殴ってから言った！箒ちゃん、ひどくい！ねえ、いっくん。ひどいよね？」

篠ノ之束は一夏に助けを求めるが…………。

一夏「は、はあ……………」

千冬「おい、束！自己紹介くらいしろ」

束「ええ？面倒くさいな……………」

織斑先生の言葉に渋々と言った感じでこちらに振り向き、自己紹介をする篠ノ之束。

束「私が天災の束さんだよ。ハロー！終わり！」

もの凄い、簡単に幼稚園生でもできるほどの自己紹介だった。

鈴「束って……………」

シャル「ISの開発者にして、天才科学者の……………」

ラウラ「篠ノ之束」

束「フ、フ、フゝン」

篠ノ之束はなにやら、意味ありげな笑いをした後、空に向けて指を差し示す。

束「さあ、お空をご覧あれ！」

その言葉で、皆が空を見上げると空からひし形の金属が落ちてきた。

何これ？使徒のラミエルなの？

束「じゃじゃあくん！これぞ、箒ちゃん専用機こと、【紅椿】！」

篠ノ之束がリモコンを操作するとひし形の物体は粒子変換され、中から赤いISが出て来た。

束「全スペックが現行ISを上回る、束さんお手製だよ？でも、例外はあるけどね？そのイレギュラーとか」

篠ノ之束はこちらを睨み付けるが、そんな程度では俺は怯まない。そんなので怯んでいたら”コスミック・イラあちら側”に居た時に既に死んでいるはずだ。

束「で、紅椿だけど、この天災束さんが作った第四世代型ISなんだよ」

ラウラ「第四世代？」

セシリア「各国がやっと、第三世代型の試験機が出来た段階ですよ？」

シャル「なのに、もう……」

束「そこがほれ、天災束さんだから。さあ、箒ちゃん。今からフィッ



テイニングとパーソナライズをしようか」

千冬「さあ、篠ノ之。黒牙、お前も手伝え」

雷真「えっ?」

千冬「お前はクラス代表を決めるとき、自分でお前の専用機である、ストライクのOSを書き換え、且つ、各国がやつきになって現在製作しているであろう、マルチロックオン・システムを作り上げた。その能力は束とあまり変わらんだろう?」

束「アハハハ、ちくちゃん。そのイレギュラーがそんなこと……」  
千冬「現にやっている。そのメガネをかけている生徒の専用機には黒牙が作った、マルチロックオン・システムが導入されている。それと、コイツはIS戦闘では一度しか本気を出していない」

「「「えっ!?!」」」

シャル「そうなの、雷真?」

ラウラ「本当か、雷真?」

雷真「……織斑先生の言う通りだ」

織斑先生が言う通り、俺はクラス代表戦の襲撃事件に出て来た、グフトバビの殲滅の時しか、本気、所謂『殺気』を出したことがないのだ。

束「ちくちゃんがそこまで言うならやつてもらえるかな?お前、名前は何?」

雷真「黒牙雷真。覚えてれば覚えればいい。それと一つだけ質問がしたい」

束「何かな?」

雷真「篠ノ之束。貴女は、ザフト、オーブ、地球連合、そしてロゴスと言う名の軍や組織を知っているか?」

束「知らないよ?なんで、そんなことをこの束さんに聞くの?」

そうか、彼女は白か……。だとすると誰が、あの六機を作り、襲撃させたんだ？

雷真「もしも、貴女がその三つの軍か組織に与して、尚且つ、クラスタ代表戦の襲撃事件にあの六機を作ったのであれば……。俺はアンタを止めないといけない。最悪は……。殺さなければいけない」

俺は篠ノ之束に向けて全力の殺気を放つが、その殺気が少し刀奈たちの方に漏れてしまった。

「!?」「ニゾワリ

雷真「戦争をこっちの世界で起こさせないためにも」

千冬「黒牙、殺気を収めろ。皆が呼吸がしづらそうだ」

雷真「すみません」

俺は織斑先生の言葉で殺気を収める。すると、皆、一齐に酸素を求めるように荒い呼吸をする。

「「かはっ!?!」「」ハアハア

鈴「何……。今の……。」ハアハア

セシリア「今の感じは……。雷真さんが出してたのですか？」ハアハア

ラウラ「まさか、あそこまで濃厚な殺気をだすとは……。」ハアハア  
一夏「雷真……。お前は一体……。」ハアハア

束「へへ。お前、少し気に入ったよ。今日から『らつくん』って呼ぶことにしたよ」

千冬「!!」

一夏「!!」

箒「!!」

雷真「ご自由に」

束「それじゃ、らつくん。箒ちゃんのフィッティングとパーソナライズを手伝って」

雷真「織斑先生にも言われたのでやりますよ」

俺は紅椿に近づき、ホロウ・ウィンドウをタイピングしていく。タイピング速度は篠ノ之束とあまり変わらない。

束「箒ちゃんのデータは、ある程度先行して入れてあるから、あとは最新データに更新するだけだね」

鈴「凄い……信じられないスピードだわ……」

ラウラ「そんなスピードに易々についていく、雷真もなかなかの物だ」

束「ほい、フィッティング終了。らつくんもありがとうね」

雷真「いえ」

束「いや、らつくんがあんなに私のスピードについて来られるとは、驚きだよ」

束「それじゃ、試運転を兼ねて飛んでみてよ？箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

箒「ええ。では、試してみます」

箒は精神統一をしてから、紅椿で一気に空へ。飛んで行った。

鈴「何、これ、早い！」

シャル「これが、第四世代の加速って、いうこと？」

束「どうどう？箒ちゃんが思っていた以上に動くでしょ？」

篠ノ之束は頭のウサ耳が通信機になっているのか、手では何も通信機のような物を扱わずに箒と通信をしていた。

箒『え、ええ、まあ……』

束「それじゃ、刀を使ってもみてよ。右のが雨月で、左のが空裂ね。武器特性のデータ送るよ」

篠ノ之束は再び、ホロウ・ウインドウを出し、高速タイピングしていき、箒に紅椿の武器データを送信した。

一夏「……………」

空中で急停止した箒は右の刀である、雨月を空の彼方へ振るう。

箒『雨月、いくぞ！』

箒『はっ！』

箒が振るった雨月から無数の紅い光線が空の彼方へ真っ直ぐに飛んでいき、途中で雲の塊があつたがそれを簡単に霧散させた。

箒『ほお……』

箒は雨月のあまりの性能にド肝が抜かれ声を漏らした。

そして、篠ノ之束は量子変換してあつた、多連装ミサイルを箒に向けてぶっ放した。

束「いいねいいね！次はこれを打ち落としてみてね！」

箒はミサイルを紅椿の飛行速度で回避し、左の刀である、空裂の一振りでミサイルを一掃する。

ラウラ「やるな」

一夏「すげえ……」

東「うんうん、いいねいいね！フハハハハ」

篠ノ之束は箒の乗る紅椿の出来に満足なのか、無邪気な笑顔で笑っている。

箒『やれる！この、紅椿なら……』

真耶「た、大変です！」

いきなり、旅館の方から山田先生の切羽詰まった声が聞こえ、声がかかる方を向くと、そこにはジャージ姿でこちらに走ってくる山田先生がいた。

真耶「織斑先生！これを……」

山田先生はそのまま、織斑先生に何かの端末を見せる。すると、織斑先生の顔が険しくなった。

千冬「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……。テスト稼働は中止だ。お前たちにやってもらいたいことがある」

何やら、不穏な出来事が起こるようだ。

## 第23話

紅椿のテストのあと、俺たち専用機持ちは旅館に戻り。いろいろな機械が置いてある、なんちゃってブリーフィング室のような部屋に集まっている。

千冬「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあった、アメリカとイスラエルの共同開発の第三代型のIS【シルバリオ・ゴスペル】、通称【福音】が制御下を離れて暴走、監視空域を離脱したとの連絡があった」

千冬「情報によれば、無人のISとのことだ」

一夏「無人……」

千冬「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2km先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後、学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することになった」

千冬「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

一夏「は、はい!？」

ラウラ「つまり、暴走したISを我々が止めると言うことだ」

一夏「マジ?」

雷真「マジだ、一夏」

一夏「なんで、雷真は驚かないんだよ!」

雷真「俺は似たようなことを過去に何度も経験したからな」

一夏「マジかよ……」

千冬「それでは作戦会議を、と言いたいところだが……。黒牙、お前には他の作戦を行ってもらおう」

雷真「他の作戦?」

千冬「コイツを見てくれ」

織斑先生は中央のスクリーンにある映像を映しだした。スクリーンには“コズミック・イラあちら側”の機体であるザクが五機、グフが一機。それも全

てカラーリングがされており、ワンオフ機だと直ぐにわかった。

雷真「なっ!?!なんで、あの機体が!」

千冬「やはり、驚くか。この機体も”コスミック・イラあちら側”の機体なのだろう

?”

雷真「はい!なので、今から自分はIS学園の黒牙雷真ではなく、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジェル所属の黒牙雷真中尉として、その任にあたります」

俺は席を立ち上がり、オーブの敬礼をしながら、織斑先生に向けて言った。

一夏「雷真が……」

鈴「軍人……」

セシリア「信じられませんわ……」

ラウラ「雷真、お前が軍人だったとはな……」

千冬「了解した。黒牙中尉には、未確認ISの対処に当たってもらおう」

雷真「はっ!」敬礼

一夏「千冬姉!雷真が軍人って、どういうことだよ!」

千冬「その話は後だ。それでは改めて作戦会議を始める、まずは福音からだ。意見がある者は挙手するように」

セシリア「はい!目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

千冬「ふむ。だが、決して公開するな。情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会の裁判と最低でも二年の監視が付けられる。また、黒牙が担当する未確認ISは黒牙以外は詳細なスペックデータは知らない」

セシリア「何故ですか?」

千冬「あの未確認ISは我々と別の世界の代物だからだ」

セシリア「別の世界って……」

鈴「そんな漫画の話じゃ……」

ラウラ「いや、教官が言っていることは本当かも知れんぞ？ 雷真の乗る、ストライクには実剣実弾兵器を無力化ができる装甲に、多種多様なビーム兵器。これが別の世界で作られた物ならば辻褄が合うはずだ」

雷真「さすがはラウラ。軍人として、冷静に状況を認識したな」  
ラウラ「当たり前だ」

セシリア「……未確認ISはわかりました」

千冬「よし。それでは山田くん、頼む」

真耶「はい」

山田先生の操作により、中央のスクリーンに福音の詳細スペックデータが映しだされていく。

セシリア「広域殲滅を目的とした、特殊射撃型……。私のISと同じ、オールレンジ攻撃が行えるようですわね」

鈴「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ……」

シャル「この特殊武装がくせ者って感じがするね。連続しての防御は難しそうだね。」

ラウラ「このデータだけでは格闘性能が未知数。偵察は行えないのですか？」

千冬「それは無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だ」

真耶「一回切りのチャンス……。つとということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に専用機持ちは一様に一夏に視線を向ける。

一夏「うんうん、えっ!？」

鈴「アンタの零落白夜で墜とすのよ」

セシリア「それしかありませんね。雷真さんは未確認ISの担当ですから。ただ、問題は……」



シャル「誰が、どうやって、一夏を運ぶかだけど……。エネルギーを全て攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか？」

ラウラ「目標に追い付ける速度が出せるISでなければいけない……。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

一夏「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺が行くのか？」

「「当然！」」

女性陣の皆様は満場一致で一夏にそう答えた。

一夏「ユニゾンで言うな！」

千冬「織斑、これは訓練ではない……。実戦だ。もし、覚悟がないなら無理強いはしない」

一夏「やります。俺がやってみせます」

千冬「それでは、この中で最高速度が出せる機体は……………」

???「待った、待った！」

天井から何やら天災の声が聞こえたと思ったら、本当に居たよ。この天災のウサギ……。

東「その作戦はちよつと待ったなんだよ」

一夏「また出た……」

雷真「神出鬼没だな、あの人は……」

そして、天井からくると回転しながら畳に着地。そのまま、脱兎の勢いで織斑先生にかけよる。

東「ちくちゃん、ちくちゃん！もつと良い作戦が私の頭の中で  
ウプリンティング！」

千冬「出ていけ！」

東「聞いて、聞いて！ここはだーんぜん紅椿の出番なんだよ！」

千冬「何？」

束「紅椿は束さんが開発したIS中で最速を誇るんだよ。展開装甲つてやつで爆発的に加速するしね」

千冬「ふむ………わかった。福音の方は織斑、篠ノ乃の二名でいく。次に黒牙の方の作戦だが……黒牙、皆に未確認ISのスペックデータを説明してほしい」

雷真「わかりました」

織斑先生の指示でストライクから未確認ISのスペックデータを部屋の中に出現させる。

♪BGM：出撃！インパルス♪

雷真「それでは説明する。まず、俺は過去に二年間行方不明になっているが、実際は異世界で四年間も過ごし、本当の戦争を二度、経験している」

「！！！！」

俺の言葉に、刀奈、簪、織斑先生、山田先生の四人以外は信じられないと顔をしているが二人だけ違った。それはラウラと篠ノ乃束だ。

雷真「そして、スクリーンに映しだされている機体だが、名前は【ZGMF-1000 ザク】、【ZGMF-1001 ザクファントム】、【ZGMF-2000 グファイグナイデット】。元々、ザクのカラーリングは緑で、グファイグナイデットが水色なのだが、一機を除いた五機を見るに、どれもワンオフ機としてカスタムされた機体のようだ」

雷真「ザクの基本装備、『ビーム突撃銃』が一丁、『対ビームシールド』が1つ、またビームシールドの内に収納されている『ビームトマ

ホーク』が一本、そして腰に装備されている、『ハンドグレネード』が4つ。しかし、この他にストライクと似た換装システムによって装備が異なる、システムの名前はウイザードシステム」

刀奈「ストライクと同じ……」

簪「万能機……」

雷真「まずは、ブレイズウイザード、こいつはザクの背中にストライクのエールを取り付けたような機動型のウイザード。武装は背中のウイザードに備え付けられている、『ファイヤビー誘導ミサイル』が28発。これは緑色の奴がそれだ」

雷真「次に、ガナーウイザード、これはランチャーと同じ、砲戦型ウイザードだ。武装は『オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲』だけだ。これはランチャーのアグニに匹敵する威力を持っている。これは赤と黒の機体がそれだ」

「！！！！」

鈴「うそ……」

ラウラ「アグニに匹敵するだと……」

雷真「最後に、スラッシュウイザード、これはソードと同じで近接格闘型のウイザードだ。武装は背中に備え付けられている、『ハイドラガトリングビーム砲』が二門、『ファルクスG7ビームアックス』が一本だ。ビームアックスは易々とストライクの対ビームシールドを切り裂く程の切れ味がある。これは水色の機体がそれだ」

箒「あのシールドを易々と……」

雷真「次はグフだ。武装は対ビームシールドの中に収納されている、『テンペストビームソード』が一本。次に両前腕部に収納されている、格闘用鞭の『スレイヤーウィップ』。最後は両前腕部に内臓されている、『ドラウプニル4連装ビームガン』。これは黄色の機体がそれだ。」

雷真「他にはストライクのように実剣実弾を無効化する装甲はない、あとはザクたちもISとして改造されているのか、本来なら支援

空中飛翔体の『グウル』がないと長時間の飛行は出来ないという欠点が改善されている様だ。また、これは俺の憶測だが、どの機体も無人機だとは思うが、俺が二度の戦争で戦ったことのあるパイロットの戦闘データが組み込まれている可能性があるかも知れない」

刀奈「ということとは、その六機は……」

シャル「雷真と同じくらい、強いってこと……?」

雷真「いや……もしかしたら、俺以上だ。それにどの機体もスペースはストライクより上だ」

簪「そんな……」

雷真「だから、これは俺、一人でやる」

刀奈「バカ言わないで!なんで、雷真が一人で行くのよ!?雷真が行くなら私も行くわ!」

雷真「刀奈、お前……」

簪「私も!」

シャル「僕も!」

雷真「お前ら、まで……」

鈴「しようがない、私も雷真の作戦に参加するわ」

ラウラ「私もだ」

雷真「なんで……」

ラウラ「私はお前に少し恩があるからな」

鈴「私はどうせ、一夏の役にたてないから、参加するだけよ。それに私も雷真には恩があるし」

セシリア「私も雷真さんには恩義がありますわ。だから、私も参加いたしますわ」

雷真「これは遊びや訓練でも無い。本当の死が間近に迫りくる作戦なんだぞ!」

鈴「わかってる。前に雷真に怒られた意味も理解した。そして、あの時、なんで雷真が怒ったのも今、理解した」

セシリア「ですから、あの時とは違いますわ」

千冬「それでは黒牙の作戦には、織斑と篠ノ乃以外のメンバーで当たってもらおう。いいな?」

「はい！」」

千冬「作戦開始は30分後、各員準備にかかれ」

織斑先生の号令で各自、自分の機体を調整しに行くが、俺はセシリア、鈴、ラウラを呼び止めてあることを頼んだ。

雷真「三人に頼みがある。もしもイレギュラーが発生したら……  
……っしてくれ。頼む」

ラウラ「貴様、それは本気で言っているのか!？」

雷真「ああ、本気だ」

ラウラ「そうか……わかった！」

雷真「ぐっ!!」

ラウラは俺の頼みを了承し、そのまま歩き出すと見せかけて俺に腹パンを一つ入れた。

ラウラ「これは、シャルロットの分だ」

ラウラはシャルロットと親友であるため、俺の頼みはシャルロットを悲しませると理解したようだ。

そして……………。

鈴「これは、簪の分よ！」

雷真「かはっ!!」

鈴も簪と仲が良くなっているため、ラウラと同じように簪を悲しませるとわかったようで、俺の腹に一撃を入れた。

セシリア「これは、刀奈さんの分ですわ！」

セシリアは刀奈と色々話しをして鈴と簪のように仲が良くなったみたいで、二人とは違い。ビンタを喰らった。

雷真「いつつううう」

三人はそれぞれ、俺に一撃を入れたあとは機体の調整に向かって行った。

部屋に戻ると刀奈たちが話しがあるとされた。

雷真「話しててなんだ？」

刀奈「雷真……貴方、一人で三機を相手する気でしょう？」

雷真「ああ……そのつもりだ」

簪「やっぱり……」

シャル「止めても、無駄……なんだよね？」

雷真「ああ。本当なら俺がああ六機、全てを破壊しなちやいけな  
いんだけどな」

俺は天井に顔を向けて、息を吐く。

刀奈「なら、これだけは約束して」

雷真「……………」

刀奈「もしも、何かあっても必ず、私たちの下に帰ってきて！」

雷真「……………」

刀奈「もう、雷真がいない生活は嫌なの！」ポロポロ

刀奈は俺が行方不明になって二年間の生活を思い出してしまったのか泣き出してしまった。

簪「私もお姉ちゃんと同じかな」

シャル「僕も、雷真がいない生活は考えたくないな」

雷真「わかった。その約束、なんとしても守るよ」

準備時間の30分が過ぎ。時刻は11時30分。各自、砂浜で集合して、ISを展開する。

雷真「いくぞ！」

「「おう！（ええ！（ああ！）」」

そして、みんな空へ向けて飛ぶ。

雷真「黒牙雷真。ストライク、行きます！」

俺が終わらせないといけないんだ。この世界で……刀奈や簪、シャルロット。それに、皆がいる、この世界で戦争なんか起こさせてたまるか！

## 第24話

未確認IS撃墜のために花月荘の砂浜からISを展開して、未確認ISである、ザク、ザクファントム、グフに向けて飛行する。また、ストライクの装備はエールだ。

雷真「各機に伝達。今回は本当の死線だと思ってくれ。そのため、刀奈と簪はグフを、シャルロットとラウラは赤いのを、鈴とセシリアは白いのを、それぞれツーマンセルで一機ずつ当たってほしい」

刀奈「やっぱり、雷真は三機なのね……」

雷真「ああ。俺が相手をするのは緑と水色、黒の三機だ。この三機は他の三機と比べてかなり強い」

雷真「シャルロットとラウラは赤いザクのオルトロスには絶対に当たるなよ」

シャル「わかった」

ラウラ「心得た」

シャルロットとラウラにガナーザクの一番脅威である、オルトロスを必ず回避するよう念を押す。

千冬『各機、聞こえるか?』

「「はー」」

千冬『あと、約30秒後に未確認ISと接触する。気を引き締めろ!』

♪BGM：ミッション開始♪



織斑先生からのザクたちとの接触時間を聞いたあと直ぐにストライクのハイパーセンサーの危険アラームが鳴った。

雷真「!!」

雷真「全機、回避!!」

「!?!」

何とか俺の叫びで回避が間に合うが、俺たちが居たであろう場所に赤と白が混ざりあつた太いビームが二本流れた。

刀奈「今のは……?」

雷真「間違いない、ガナーウイザードのオルトロスだ」

鈴「あんな距離から……」

雷真「オルトロスは設計上、超遠距離からの砲撃を目的に作られるからな……」

雷真「悪いが先に行く!ガナーウイザードを一機だけ抑える。あと  
の指揮はラウラに一任する」

刀奈「ちよっ、雷真!」

鈴「あくもう!」

俺はストライクのセーフティを全て解除して一気にザクたちに向けて加速し、ラビット・スイッチ高速切替で装備をエールからI W S Pに換装する。エールみたいにビームでエネルギーを使いより、フェイズシフト装甲を持たないザクやザクファントム、グフには実弾実剣兵器が多いI W S Pが最適だと判断した。また、エールの時にビームで消費するエネルギーをI W S Pなら全て推進力に回せると判断した。

他には、この六機を墜としたり、直ぐに一夏の加勢に行くためだ。

雷真「さあ、相手をしてもらうぜ？アスラン、イザーク、ディアツカ！」

緑のブレイズザク、黒のガナーザク、水色のザクファントムの三機にコンバインドシールドのガトリングガンで牽制しながら他のザクたちと距離を取らせる。

雷真「やつぱり、アーモリーワンの強奪事件からの戦闘データを元に出しているか……………」

やはり、三人は連携が上手い。こちらがガトリングガンやレールガンの遠距離兵器を撃てば、イザーク機が対ビームシールドで防ぎ、その隙にディアツカ機がオルトロスを放ってくる。

逆に近接に持ち込めば、アスラン機がビームトマホークで攻撃を捌き、その隙にイザーク機が背中のハイドラガトリングビーム砲でこちらを狙ってくる。

雷真「クソツ！本当に厄介だな」

そんな愚痴をこぼしながら、戦闘を続けていると刀奈からオープンチャンネルの通信が入る。

刀奈『雷真、聞こえる？』

雷真「どうした？」

刀奈『どうやら、このグフとかいう奴にはSEがないみたい。それにそこまで強くもないみたい』

雷真「はあ？」

三機から放たれるビームを回避しながら、刀奈の言葉に質問する。

雷真「どういうことだ？」

刀奈『さつき、グフの攻撃をナノマシンで防いでる隙に簪ちゃんやんが山嵐を撃つたの。そしたら、そのうちの何発がグフに命中してマニピュレーターが一つ使えなくなったの』

鈴『こつちも刀奈と同じよ。セシリアのレーザーが白い奴の肩や足に当たったわ』

ラウラ『こちららも、シャルロットのサブマシンガンが何発もザクに命中しているが決定打にはなっていないようだ』

雷真「つてことは……。SEを推進力か武器の威力に回しているのか？それに戦闘データも……」

雷真「だとなると、持久戦が有利か……」

俺は三機にビームを無駄撃ちさせるように近接と遠距離を交互に攻める戦法に変えた。するとアスラン機のビーム突撃銃が弾切れを起こしたのか対ビームから替えのマガジンを出そうするがそれをさせるほど俺は甘くない。

雷真「そこだ！」

イグニッション・ブースト  
瞬時加速でアスラン機に近付き、対艦刀でマニピュレーターを切り落とそうとするが……。やはり、近接はアスランのデータを持っている、アスラン機に対ビームシールドで防がれてしまう。

雷真「やはり、近接はアスランが有利かよ」

量産機で無人機とはいえど、中身はエース級パイロットのデータが搭載されている機体、操縦技術の差が出てくる。

雷真「なんとかしないと……」

雷真「ん？無人機にデータ？もしかして……」

俺は機体特有の発想、誰しもが思い浮かぶであろう発想をザクたちから放たれるビームを回避しながらプライベートチャンネルでセシリアに確認することにした。

雷真「セシリア、聞こえるか？」

セシリア『なんですか？』

雷真「戦闘中にすまない。クラス対抗の時の無人機はセシリアの射撃にどう対応していたか知りたいんだ」

セシリア『あの時は、急なことに反応が………ツ!!』

セシリア『……無人機だから？』

雷真「それは分からないが、それが有効かどうか、こちらで試してみる」

セシリア『分かりましたわ。こちらでも試してみます』

雷真「何かあったら連絡を頼む」

セシリア『了解』

セシリアとの通信のあと、一か八かで海面スレスレまで降下し、滑るように海面で回避行動をしながら三機を誘う。

雷真「これなら、どうだ！」

こちらを追尾してくる三機の少し前に単装砲を撃ち、それをレーリングで爆発させ、海面から大きな水しぶきを上げさせる。これにより、無人機の三機は急なことに対応が少し遅れる。

雷真「いつけええええつ!!」

その隙に三機に対して、ガドリリングガンとレールガンを連射する。連射した何発がディアツカ機のオルトロスに命中し、爆発。それにより、ディアツカ機の右腕が肩から破損する。

雷真「よし、いける!」

水しぶきが止むとイザーク機がビームアックスを腰から引き抜き、振り下ろして来るのでコンバットシールドに備え付けられているビームブーメランを短剣代わりに使い、ビームを干渉させながら受け止める。その際、ビームアックスとビームブーメランの間にプラズマが飛び散る。

雷真「隙ができたな」

イザーク機はそのビームアックスの重さに両手を使う必要がある。また、ビームアックスは上から振り下ろしているため、スラッシュウイザードの武装である、ハイドラガドリリングガンが使えないのである。

そこへ俺はストライクの内蔵武装のイーゲルシユテルンでイザーク機のメインカメラを破壊する。

雷真「よし」

メインカメラを破壊すると、イザーク機の腹部へ蹴りを入れて、一

度後退する。そして、体制が整ったらいザーク機に向けて、ディアツカ機と同じようにレールガンと単装砲を連射する。

しかし、狙い撃ちされるはずのイザーク機の前にアスラン機が対ビームシールドを前にしてイザークを守るようにレールガンと単装砲の射線に入ってきたのだ。

雷真「なっ!？」

いくら、本人のデータが内蔵されているとはいえ、自分を犠牲にしてまで仲間を守るのは無人機ではありえないはず……なのに……。

雷真「まさか、そこまで学習しているのか？」

あまり考えたくはないがアスランたちの戦闘データだけでなく、学習するAIがこのザクたちに搭載されているのであれば、非常に厄介だ。

雷真「けれど、イザークの方はメインカメラがやられてるんだ。そこまで脅威にならないは………ッ!？」

イザーク機がメインカメラをやられたことで、そこまで脅威ではないと安心しているとストライクのハイパーセンサーの危険アラームが鳴る。

雷真「下だと!？」

先ほどの急なことに対応しきれずに右腕を失ったはずのディアツカ機がないことに気が付かずに、ビームトマホークを左手で持ち、海水の中から出てくるディアツカ機の攻撃に対応が遅れ、コンバットシールドのガドリリングガンがビームトマホークに切断されてしまう。

雷真「しまっ……!!」

ガドリリングガンを切断されたので慌てて左腕からパージする。そして、パージされたコンバットシールドは爆発する。

その爆発により、ストライクのバッテリーが少し削られてしまった。

雷真「まさか、あの状態でまだ動けるとはな……」

また、爆発したコンバットシールドの爆煙からビームが飛んでくる。これは、アスラン機のビーム突撃銃だ。

雷真「さすがはフェイスって所かよ!」

メインカメラがやられてた、イザーク機もアスラン機、ディアッカ機から俺の位置情報を得ているのか、ハイドラガトリンガンを撃ってくる。

雷真「チッ!」

流石にこれ以上時間をかけるのは刀奈たちが心配なので瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速を使い。I W S Pのレールガンと単装砲をイザーク機に向けてフルバーストする。

これにより、イザーク機は至近距離でI W S Pの砲撃を受け、撃墜。残りは、アスラン機とディアッカ機だが、侮れない。

雷真「残り、二機!」

弾切れをしているI W S Pから一気に二機共に仕留めたいのでマルチプルアサルトに換装する。

出来るだけ、アグニやビームライフルを使わずに近接で攻めるた

め、シユベルトゲベールとイーゲルシユテルンとマイダスメツサーのみで戦う。

雷真「ハアアアアッ!!」

シユベルトゲベールでアスラン機に斬りかかりながら、ハイパーセンサーでディアツカ機を追いながら、アスラン機の後ろにディアツカ機が回った所でイーゲルシユテルンを放つ。

それを何回か繰り返していると刀奈と簪のペアから通信が飛んでくる。

刀奈『雷真、こっちは終わったわよ?』

簪『そっちに加勢した方がいい?』

雷真「こっちよりも、セシリアたちの援護を頼む」

刀奈『分かったわ。あまり、無茶はしないでね』

雷真「分かってる」

通信が終わると先ほど同じようにアスラン機のビーム突撃銃を回避しながらシユベルトゲベールで切り掛かろうとすると、アスラン機は左肩に装備されている対ビームシールドからビームトマホークを引き抜き、シユベルトゲベールのビーム刃とビームトマホークのビーム刃でつばぜり合いになる。

これにより、シユベルトゲベールとビームトマホークの間でビーム刃同士がぶつかり合いプラズマが飛び散る。

互いにビーム刃の脆い場所を探して、自分の得物を動かす。それを何度もしていると後ろから危険アラームが鳴る。

雷真「またかよ!?!」



後ろからの攻撃を回避するために、アスラン機に向けてイーゲルシユテルンでメインカメラを狙い、引き剥がす。

そして、後ろから攻撃してくるであろう輩の正体はディアツカ機だと分かっているため、ストライクの脚部スラスタターだけを強く噴かせ、逆上がりの要領で前後を反転させ……………。

雷真「おらあああつ!!」

オーバーヘッドキックのように後ろから襲いかかってくるディアツカ機に蹴りを入れる。蹴りを受けた、ディアツカ機はそのまま海面に向かって落下していくので、アグニの照準を合わせ、放つ。

これにより、残るはアスラン機のみだ。

雷真「残るは、お前だな。アスラン！」

ディアツカ機を撃破したあと、雷真はアスラン機と睨み合う形で宙に浮いたままでいる。そして、互いに出方を見ていると、両者共に同じタイミングで突撃する。

雷真「ハアアアアツ!!」

両者は先ほど同じように何度もビーム刃を高速で移動しながら交える。しかし、やはり無人機では雷真が操るストライクに負ける。

それは、ディアツカ機にもやった様にフェイク技だ。

雷真はアスラン機とビーム刃を交えるギリギリのところでは瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速で後退し、左肩に装備されている、マイダスメツサーを引き抜き、アスラン機に目掛け投擲する。

アスラン機は雷真から投擲された、マイダスメツサーをビームトマホークで弾くがそれが決定な隙になった。

そんな、絶好の隙を雷真は見逃ずにアグニを放つ。

それにより、アスラン機は撃墜。

雷真「よし、終わったな」

アスラン機、イザーク機、ディアッカ機の計三機のザクを倒し終わると刀奈たちから通信が飛んでくる。

刀奈『雷真。こっちは全部倒したわよ』

雷真「こっちも今終わったところだ」

そんな、通信で雷真と刀奈は安堵していると……………

箒『一夏！一夏！』

「『『『?!』』』」

オープンチャンネルで箒が一夏の名前を叫ぶ声が雷真たちに届く。

雷真「箒、どうした!?!一夏に何があった!?!」

雷真もオープンチャンネルで箒に通信を送るが返信が返って来ない。

雷真「クソツ!」

雷真「全機、これより一夏と箒のバックアップに向かう!」

『『『了解!』』』

刀奈たちと合流し、全機で一夏と箒のバックアップに向かう雷真たち。しかし、その途中で一本の赤と白が混ざり合ったビームが刀奈を

襲う。

雷真「!?」

雷真「刀奈ああああ!!」

刀奈「えっ?」

雷真はビームが刀奈に当たる前にイグニッション・ブースト瞬間加速を連続行い、ダブル・イグニッション・ブースト二段階瞬間加速で刀奈の前に躍り出て、ソードストライカーの対ビームシールドでビームを弾く。

雷真「刀奈、大丈夫か?」

刀奈「え、ええ……」

雷真「それにしても、一体何処から……ッ!」

雷真は刀奈に目掛けてビームを放った犯人を探しているとハイパーセンサーのレーダーに新たに四機の熱源が確認された。

それは………【ZGMF-X88S ガイア】、【ZGMF-X2

4S カオス】、【ZGMF-X31S アビス】、【ZGMF-X23

S セイバー】の四機だった。

## 第25話

何処からか刀奈を目掛けて放たれたビームを対ビームシールドで弾いた雷真はストライクのレーダーで敵機を探すとレーダーには四機の熱源が探知された。

それは……………

雷真「ガイア、カオス、アビス。それに……………セイバー」

その四機がハイパーセンサーで目視できる距離まで近付いてくると雷真はセシリア、鈴、ラウラにある指示を出す。

雷真「セシリア、鈴、ラウラ！イレギュラーだ、例の約束を頼む！」

そう言つて雷真は再び、ストライクのスラスタを一気に噴かし、ガイアたちに向かう。

セシリア「わかりましたわ……………」

鈴「分かったわ……………」

ラウラ「了解……………」

三人は仕方ないと分かっているても、約束を守るために刀奈、簪、シャルロットに抱き付き、自分たちから逃がられないよう拘束して、戦線を離脱する。

刀奈「ちよっ！セシリアちゃん!？」

簪「鈴!？」

シャル「ラウラまで!？」

セシリア「申し訳ございませんわ、刀奈さん」

鈴「ごめん、簪」

ラウラ「すまない、シャルロット」

刀奈、簪、シャルロットの三人はセシリアたちによる拘束を解こうとするが上手くいかない。

刀奈「セシリアちゃん、離して！まだ、雷真が!?!」

簪「そうだよ、雷真がまだ!」

シャル「何で、こんなことするのさ!?!」

セシリア「それは……………」

ラウラ「これは雷真の願いだからだ!」

刀奈「雷真の?」

ラウラ「雷真は出撃する前に言っていたんだ」

く回想く

雷真『三人に頼みがある。もし、イレギュラーが発生したら。俺を置いて、刀奈たちを連れて逃げてくれ。頼む』

く回想終了く

ラウラ「……………とな」

シャル「そんな……………」

簪「そんなことって……………」

刀奈「いや、いやああああ!!」

ダメ！行かせちゃ、ダメ、絶対にダメよ！今、彼を行かせたら……………帰って来ない気がするから。

刀奈「雷真！らしいいいいいん!!」ポロポロ

刀奈は泣きながら雷真の名前を叫ぶが刀奈の目に映るのは新たな未確認機体に一人で挑もうと突撃する雷真の姿だけだった。



♪BGM：狂気の果て♪

セシリア、鈴、ラウラに刀奈たちを任せた雷真は一人でセカンドステージのエース機に挑んでいた。

雷真「まずは、刀奈たちから離さないと！」

雷真はザクやグフ、ザビのような量産型<sup>モビルスーツ</sup>M Sが、この世界に存在しているだけでも困惑しているのにも関わらず、今回はセカンドステージのエース機で、尚且つ、ストライクから派生した特殊装甲、<sup>ヴァリアブルフェイズシフト</sup>V P S 装甲を持つ機体が四機。

また、その四機の性能はキラ・ヤマトが乗っていた、フリーダム<sup>の</sup>性能に近付けているため、ファーストステージのストライクとの性能差は明らかである。

雷真「こっちだ！来い！」

雷真は、「ガイア」、「カオス」、「アビス」、「セイバー」の四機を刀奈

たちと花月荘にいる、IS学園の生徒たちを守るためにかなり離れた場所にある孤島で一人で戦うために誘導する。

誘導している際に花月荘に居る、千冬から雷真へ緊急通信が飛んでくる。

千冬『黒牙！何故、お前だけ此方の帰投ルートから外れている!？』

雷真「すみません。現在、新たな未確認機体、四機と交戦。それも、コスミック・イラによりよって”あちら側”のエースの専用機です!」

千冬『専用機だと!？』

雷真「念のため、四機の内の一機のデータを送ります!」

雷真は千冬に四機の内のカオスのデータを送ろうとするがカオスとセイバーの二機はMモビルアーマーA形態になりビーム攻撃を始める。

雷真「クソツ!」

千冬『どうした!？』

雷真「未確認機体からのビーム攻撃です!すみませんが通信を切ります」

千冬『待て!黒き……』

雷真は千冬の通信を一方的に切り、カオスとセイバーからのビーム攻撃を回避、または対ビームシールドで弾きながら千冬へ、カオスのデータを送る。

雷真「よし!データの送信完了。これで、戦闘に集中できる。けれ

ど、ストライクで何処まで耐えられるか……………」

ストライクのバッテリーはマルチプルアサルトのバッテリーパックは残り4つ。

他に使えるのは、バッテリーしか残っていないソードとオオトリ。それと武装の弾丸が無く、宿に戻る程度しかバッテリーが残っていないI W S P。

現在の武装で何処までカオスたちと殺り合えるかを考えていると左方向から三本のビーム、また下からは多数のビームが飛んでくる。

雷真「次はガイアにアビスのビーム攻撃か！」

ガイアとアビスのビーム攻撃をバレルロールやスプリットSで回避しながら海面に在るであろうアビスにバルカン砲で牽制しながら孤島に向けてスラスターを噴かす。

雷真「もう少し！」

スラスターを全開で飛ばしているが、性能差があるため、次第にカオス、セイバーのビームがエールストライカーパックの両翼に掠り始める。

しかし、それだけではなく海中ではM モビルアーマー A 形態に変形したアビスが雷真の進行する方向に先回りし、海中から海面に出て、3連ビーム砲2門、カリドウス複相ビーム砲、バラエーナ改2連装ビーム砲が襲ってくる。

雷真「クソツ、数が多い!？」

アビスから放たれる、計10門のビームを回避する。しかし、それが罠だとは雷真は直ぐに理解した。何故なら、回避した方向はセイバーの真ん前だからだ。



雷真「誘い込まれた!?クソツタレエエエ!!」

セイバーはM<sup>モビルアーマー</sup>A形態のまま、雷真目掛け、アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲2門が放たれた。

雷真は最早回避は不可能、防御してもアムフォルタスプラズマ収束ビーム砲の威力では防ぎ切れないと判断し、ランチャーパックのアグニで完全に相殺出来なくとも逸らすくらいならと思いつつ。

雷真「ぐううう!!」

なんとか二発の内、一発は相殺。しかし、もう一発は逸らしは出来たものの残りがアグニに半分当たり爆発する。その爆発により、バッテリーが削られバッテリーパックが残り3つになってしまった。

雷真「このまま、じゃあ……」

続けて、カオスがファイヤーフライ誘導ミサイルを撃ってくる。雷真は誘導ミサイルをイーゲルシユテルンで迎撃。誘導ミサイルはイーゲルシユテルンで爆発し、爆煙が発生する。

雷真「次は……」

爆煙でカオスを見失っていると爆煙の中から大量の実弾の雨が雷真に降り注ぐ。それはセイバーとカオスの武装であるCIWSだ。

雷真「ヤバイ、装甲が!」

あまりのCIWSの量でソードの対ビームシールドでも防ぎ切れずにストライクのバッテリーが急激に減少し、やがてフェイズシフトダウンを起こしてしまった。

だが、それだけならよかつたのだが、運が悪いことに先ほどのアグ  
ニの爆発でエールストライカーまで被弾したようだ。

バチバチバチバチ!!

ボンツ!

雷真「スラストターまで!?!」

雷真「グアアアアアアツ!!」

先ほど、カオスとセイバーのビームを擦った際にエールストライ  
カーがおかしくなったのかスラストターが爆発。そして、スラストターが  
完全停止をしてしまい、雷真は空中で身動きが取れない状態になる。

雷真「オオトリ!」

雷真はオオトリを<sup>ラビット・スイッチ</sup>高速切替ではなく、コールで呼び出し換装する。  
すると灰色だった装甲が新たな電力を得たことにより装甲の色が灰  
色からトリコロールカラーに変わる。そして、カオスたちの攻撃網か  
ら脱出するために対ビームシールドを構えながらオオトリのスラス  
ターを全開にする。

カオスたちの射程範囲から離脱に成功すると雷真は孤島に向かい  
ながら反撃をする。

雷真「お返しだ!」

雷真はオオトリのレールガンとビームランチャーとビームライフ  
ルでカオスたちを狙うがやはりセカンドステージとファーストス  
テージの専用機とでは性能差があるためか、なかなか思う様に攻撃が  
当たらない。

雷真「当たらない!？」

カオスたちと攻防を繰り返しながら、なんとか孤島に到着した雷真はアビスを海中ではなく地上に誘うように孤島にある森の中へと入る。

雷真「よし、このまま」

それを追いかけるようにガイア、カオス、アビスがM モビルスーツ S形態で追撃してくる。セイバーはM モビルアーマー A形態のまま空から索敵をしているようだ。

雷真「何処か身を隠せるところで武装の確認をしたいな」

雷真は森の中へ入るとオオトリをストレージに戻し、装備をソードへ換装し、木々の陰に隠れながら身を隠せる場所を探す。すると孤島の中央に山があり、その中へと繋がる洞窟入り口を見つけた。

雷真「行くか」

スラストアーを噴かさずに自力でゆっくりと足音を立てないよう歩きながら洞窟の入り口へと足を踏み入れる。

ストライクのツインアイで洞窟内を照らしながら奥へと進み。ある程度まで入ったら大きな岩を盾にするようにして腰を落とす。

雷真「残り武装とSEは……………」

ホロウウィンドウを出し。現在、使用できる武装を確かめていく。

雷真「ビーム兵器はバッテリーがあればなんとかなる。大鑑刀はソード、オオトリの二本。ビームシールドはソードとエールで二つ。

あとアグニ以外のランチャーパックにガトリング砲にバズーカランチャー。他はオオトリの武装か……。SEは何回も瞬間加速を使ったから残り5割か……」

雷真「それにしても、何であの四機があるんだよ。あの四機はキラとシンが墜としたはずだ。なのに、なんで？」

雷真「考えられるのは3つ。1つ、俺と同じように”こちら側”から”あっち側”<sup>コスミック・イラ</sup>に行つて帰ってきた奴が作り上げたか。2つ、俺のケースとは違い、”あちら側”<sup>コスミック・イラ</sup>から来て作り上げたケース。3つ、元々、この世界にあの四機のデータがあつた。」

雷真「最後の3つ目は除いていいだろう。けれど残り二つは厄介だな。もしも、これがブルーコスモスやロゴスの奴らだったら……」

ザクやグフ、バビのみならず、ガイアたちが何故”こちら側”の世界に存在するのかを考えていると洞窟の入り口から爆風が飛んでくる。

雷真「ま、まさか!？」

どうやら、雷真の嫌な勘というものは当たるようだ。

爆風の原因は入り口にいるであろう、ガイアたちが山もろとも雷真を押し潰そうと洞窟の入り口にビームを連射しているからだ。

雷真「無茶苦茶にも程がある！」

瓦礫で押し潰される前に出口を探し、洞窟から脱出することにした。雷真は洞窟の中央で上から射し込む太陽の光を見つけた。

雷真「多分、罨だろうな。けれど、今は時間がない」

バックパックをソードからオオトリに再び換装し、両肩にはソードとランチャーの装備を装備する。所謂、なんちゃってマルチプルであ

る。そして、オオトリのビーム砲を太陽の光が射し込んでいる所へ放ち、そこから外へと出る。

けれど、やはりというべきか雷真が開けた場所にはカオス、ガイア、セイバーの三機が待ち構えていた。

雷真「罨と分かっていたが、嫌な物だな！」

カオスたちは雷真を捉えるとビームライフルで攻撃する。それに対抗するように雷真もビームライフルやビーム砲、レールガンを撃つ。

しかし、いくらファーストステージの機体よりもエネルギー効率が改善されたとはいえ、かなりの数のビームを放っているのにも関わらず、カオス、ガイア、セイバーのエネルギー切れが起こる気配が見えない。

逆にストライクのバッテリーが危険域に入り始めている。

雷真「いくらなんでもエネルギーの持ちが良過ぎるだろう!？」

愚痴を溢しながら三機の相手をしているとカオスが何故か今まで使って来なかった、機動兵装ポッドでのビーム攻撃までもが加わる。

雷真「ドラグーンまで!？」

ガイア、セイバー、カオス。そして、カオスによる機動兵装ポッドにより、四方八方からのビーム攻撃が雷真を襲う。

雷真「クソツ、捌き切れない!!」

ついに完全に囲まれてしまった雷真はガイアたちによるビーム攻撃をもろに受けてしまう。

しかし、ISにはSEがあるため致命傷は避けられたが装甲はフェ

イズシフトダウンを起こし、バックパツクのオオトリは大破してしま  
い、そのまま海面に向けて落下してしまう。

雷真「うわああああ!!」

しかし、これだけに終わらなかった。何故なら、雷真が戦闘してい  
るのはガイア、カオス、セイバーの三機だけでなく、アビスもいるの  
だから。

そして、そのアビスは落下している雷真の真下で雷真に全ビーム兵  
器を向けていた。

また、上空からはセイバーたちがビームライフルと機動兵装ポツド  
を雷真に向けていた。

雷真「ダメだ………避けきれない」

雷真「ごめん、三人とも。お前たちとの約束、守れそうに………」

雷真が今頃、花月荘に無事に帰還しているであろう、刀奈、簪、シヤ  
ルロツトの三人に最後の言葉を残そうとしているとセイバーたちが  
らビームが放たれる。ビームは雷真が乗る、ストライクに命中する。

しかし、命中する際にストライクのツインアイが光り、雷真は意識  
を失っていく。

また、雷真は意識が薄れ行く中である男の声を聞いた。

「今、君には死んでもらっては困るのだよ。

クロキバ・ライシンくん――



く少し時間を遡り、花月荘にてく

雷真が単独で作戦領域に残り、刀奈たちだけが雷真から離れ、花月荘へ帰還するルートを飛行していることに気が付いた千冬は雷真に通信を送ろうとする。

千冬「黒牙！何故、お前だけ、此方の帰投ルートから外れている!？」

雷真『すみません。現在、新たな未確認機体と交戦。それも、よりよつて”コスミック・イラあちら側”のエースの専用機です!』

千冬「専用機だと!？」

雷真『念のため、四機の内の一機のデータを送ります!』

雷真『クソツ!』

千冬「どうした!？」

雷真『未確認機体からのビーム攻撃です!すみませんが通信を切ります』

千冬「待て、黒牙!おい!聞こえているのか黒牙!!」

千冬「クソツ!」

千冬は苛立ちに任せて通信機を畳に投げつける。すると真耶から雷真によって送られた、未確認機体一機のデータが送られたことを知る。

真耶「織斑先生!黒牙くんからの未確認機体のスペックデータです

！」

千冬「直ぐに表示してくれ」

真耶「はい！」

千冬「いいか！今から表示される機体データはIS委員会に提出するな。そんなことをすれば、戦争が起きるからな？分かったか！」

「「はい！」」

そして摩耶によって表示された未確認機体のスペックを見た千冬たちはあまりの性能に驚きを隠せないでいた。

束「何、この出鱈目な性能……」

千冬「[ZGMF-X24S カオス] ……なっ!? ヴァリアブルフェイズシフト V P S

装甲だと………」

真耶「先輩!!」

千冬「ああ、間違いない。コイツの機体性能はストライクを大きく凌駕している。そんな奴らに黒牙の機体でも通用するはずがない。黒牙の奴め………無茶なことを」

これから、どうしたものかを考えていると、セシリアたちによって作戦領域から強制的に帰還させられた、刀奈たちが千冬たちの前に現れる。

刀奈「離して！」

簪「そうだよ！」

シャル「僕たちは雷真のところへ行かないといけないんだ！」

千冬「お前たちが行ったところで黒牙の邪魔だ!!」

雷真のところへ戻ろうとする刀奈たちを千冬はその一言で一喝する。



くBGM：君は僕によく似ている　verオーケストラく

刀奈「私たちが雷真の邪魔……………？それはどういうことですか！？」

簪「そうです！説明してください！」

シャル「織斑先生！」

千冬「なら、この機体データを見てみる」

千冬は刀奈たちに雷真から送られてきた、カオスの機体データを見せる。

刀奈「うそ……………」

簪「なに……………これ」

シャル「こんな出鱈目な性能……………」

セシリア「それに私と同じビット兵器に……………」

鈴「雷真のストライクの上位互換の装甲だなんて……………」

ラウラ「雷真、貴様……………」

千冬「これで分かったか？黒牙はお前たちを生かすために今も一人で戦っているんだ！」

シャル「そんな……………」

簪「私たちのために……………」

刀奈「雷真……………」

千冬から雷真の思いを刀奈たちが聞いた時……………

ピ————ツ！

……………と心電図モニターが心肺停止を示す警告音が聞こえた。

また、それに合わせたかのように刀奈、簪は雷真からもらった太陽と月のお守りが、シャルロットも同じように雷真からもらった星のブ

レスレットが壊れる。

「「えっ?」」

刀奈「らい……………しん?」

摩耶「うそ……………でしょ?」ポロポロ

千冬「どうした、真耶!」

真耶「せん……………ぱい。ストライクのIS反応……………ならびに……………黒牙くんの生体反応が……………」ポロポロ

作戦室にいる人員皆が、真耶がこれから言おうとする言葉が自分たちの思っている言葉とは違ってくれと願うが現実はそんなに甘くない。

真耶「……………ロストしました」ポロポロ

「「「……………」」」

まさかの雷真のロストが涙を流す真耶の口から告げられた。

刀奈「そんな……………嘘よ……………いや、いや、イヤイヤイヤ、イヤアアアア!!」

簪「お姉ちゃん!」

シャル「刀奈!」

セシリア「刀奈さん!」

鈴「刀奈!」

ラウラ「刀奈!」

千冬「更識!」

雷真のロストを聞いた、刀奈は頭を抱えて叫び出し、意識を失ってしまう。それを簪が抱き止める。

刀奈「雷真が死ぬはずがない……………絶対にないかの間違いよ……………」ポロポロ

簪「お姉ちゃん……………」

シャル「刀奈……………」

鈴「簪とシャルロットは平気……………じゃないわよね」

簪「平気ではないよ……………」

シャル「僕も雷真が死んだなんて、今でも信じられない。頭の中の整理が付いてないから、今はどういう反応をしていいかわからないだけだよ」

鈴「そう……………ごめんなさい」

簪「織斑先生、私たちは一度部屋に戻ります」

千冬「すまない」

簪「いえ……………」

刀奈、簪、シャルロットが作戦室から出て行ってから千冬はセシリアたちに一夏が負傷したことを伝えた。

それを聞いた三人は一夏の元へと走りはしなかった。

自分たちよりも今は辛い思いをしている者たちを目の前で見てしまつては走りだしたりはできないでいた。

千冬「真耶、束。少し、任せる」

束「了解」

真耶「わかりました」

千冬は作戦室から出て、海岸にある岩場へと行き。そして……………。

千冬「クソガアアアア!!」ドゴン!

岩に向けて怒りと後悔を合わせた力任せの右拳を打ち込む。それ

により岩には罅が入り、右拳からは血が流れ出る。

千冬「何が世界最強のブリュンヒルデだ！何が最強の女だ！生徒一人すら守れずに死なせてしまう、こんな有り様じゃないか………」

千冬は涙を決して流さない。自分よりも涙を流したいはずの二人が理解が追い付かずに涙すら流せなかったのだから。

## 第26話

とある宇宙に白い大きな艦が飛行している。それはかつて、二度の戦争で生き抜き、『不沈艦』と呼ばれた大天使。その名は「アークエンジェル」。

その、アークエンジェルの中には二度の戦争で英雄と謳われた青年も乗っていた。

??? 「もう直ぐだな、カガリ？」

カガリ「そうだな、アスラン。あと、少しでキラやラクスがいる、プラントに到着するな」

アスラン「分かっているとは思いますが、今回は遊びでなく……」

カガリ「三度目のユニウス戦争終戦記念式だろう？それくらい、私だって分かっているさ。けれど、少しはリラクスしたいものだ」

アスラン「それは分かるが……。ラクスもあんな体なのに頑張っているんだ。君も頑張ってくれ」

カガリ「あと8ヶ月で私も叔母さんか……。……」 チラチラ

アスラン「お、俺も、その……。子供は欲しいがもう少し待ってくれ。俺も君の仕事を引き継ぐために色々と根回しがだな……。……」

カガリ「それも分かっている。アスランが私のために色々と努力してくれていることは」

アスラン「……。……」

カガリ「でも、少しだけいいだろう？」

アスラン「カガリ……。……」

カガリ「アスラン……。……」

二人は熱い眼差しで互いの瞳を見つめ、そして……。……。

【ピ。ピ。ピ。ピ。ピッー】

【!?!】ピクッ

二人は艦内通信を知らせるアラームで咄嗟に距離を取る。そして、アスランは艦内通信の応答ボタンを押す。

アスラン 「はい！アスランです」

マリユー 『ごめんなさい、アスランくん。お休み中に』

アスラン 「いえ。それで、どうしたんです？」

マリユー 『ただ、今後の日程を再確認しようと思つて……』

アスラン 「そうですか。なら、これからブリッジへ向かいます」

マリユー 『なら、お願いするわ』

アスランは艦内通信を切り、カガリに一言言つてからアークエンジェルのブリッジへ向かうと……………。

ミリアリア 「艦長！」

マリユー 「どうしたの？」

ミリアリア 「アークエンジェルのレーダーに突如、熱源を感知」

マリユー 「えっ!？」

マリユー 「熱源の照合はできる？」

ミリアリア 「待つてください。熱源の照合は……………え!?!うそ……………でも、そんな……………」

アスラン 「どうしたんだ、ミリアリア？」

ミリアリア 「熱源の照合……………照合されたのは……………【GAT  
—X 105】……………ストライクです」

「【ストライク!?!】」

マリユール「待つて！ストライクは過去の大戦で大破して、まともに動けるのではないはずよ!？」

ムウ「そうだぜ」

アスラン「いえ、艦長！一機だけ………もう、一機だけ存在します。けれど………」

マリユール「まさか!？」

ムウ「おいおい！お前さんが言う、もう一機のストライクってアイツに贈った物じゃないだろうな？」

アスラン「わかりません。なので、ジャステイスで確認してきます。ミリアリアはオープンチャンネルでストライクに呼び掛けてくれ！もしかしたら、アイツかもしれないからな」

ミリアリア「うん、分かったわ!」

マリユール「アスランくん、お願いね」

アスラン「はっ!」 敬礼

ムウ「待つて！俺も出る」

アスランとムウは急いで更衣室に向かいパイロットスーツを着て、ジャステイスとアカツキが格納されている場所に向かい、自分たちの機体に搭乗する。

搭乗したあとはコックピットに座り、シートベルトを締め、機体の電源を入れる。入れたあとは機体をカタパルトに移動させる巨大アームによってカタパルトへ移動させられる。

その際、管制官のミリアリア・ハウの通信が入る。

ミリアリア『アスラン……』

アスラン「どうした？ミリアリア」

ミリアリア『それがアークエンジェルからストライクに呼び掛けても応答がないの。だから………』

アスラン「なら、俺たちが近づいて直接連絡を取ってみる」

ミリアリア『ありがとう。どうか、私の義弟を………ライシンを  
お願い』

アスラン「わかった」

ミリアリアの義理の弟であり、アスランの友である、雷真のことを話し、通信を切るとミリアリアにより管制のアナウンスが聞こえてくる。

ミリアリア『APUオンライン。カタパルト接続』

今まで機体を掴んでいた巨大アームはカタパルトの真上に行くと機体をカタパルトに接続するために機体を放す。すると放した影響でコックピットが少し揺れる。

ミリアリア『各パワーフロウ正常。進路クリア。インフィニット・ジャステイス。発進、どうぞ！』

アスラン「アスラン・ザラ。ジャステイス、出る！」

ミリアリア『続いて、アカツキ。発進、どうぞ！』

ムウ「ヨッシャーッ！ムウ・ラ・フラガ。アカツキ、出るぞ！」





アークエンジェルが発進した。アスランとムウは突如、レーダーに現れたストライクの元へと急ぐ。

ムウ『アスラン』

アスラン「何ですか、フラガ一佐」

ムウ『本当に、あのストライクにライシンが乗ってると思うか？』

アスラン「俺はそう思います。何故なら、アイツは別の世界からやって来て、そして……………帰って行った。だから、今回も、何らかの影響でこちら側に来てしまったんだと思います」

ムウ『……………』

アスラン「目標まで、あと7kmです」

ムウ『了解！』

二人とストライクの距離が5kmまで近づくと、ジャステイスとアカツキのメインカメラにストライクを目視できた。しかし、メインカメラによって捉えられたコックピットのモニターに映し出されたストライクは……………。

アスラン「これは……………」

ムウ『こりや……………ひでえや……………』

まさに、胴体……コックピット以外の部分がビーム兵器か何かで大破させられ、装甲もフェイズシフトダウンしている状態だった。

アスラン「ライシン……………」

アスラン「こちら、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジェル所属のアスラン・ザラだ。ストライク、聞こえるか？聞こえているなら、応答してくれ。繰り返す」

アスランが二度、繰り返した時にストライクから微かな声が聞こえてきた。その声は……………

雷真『アス……………ラン？』

ムウ『坊主!？』

アスラン「ライシン、お前なのか？」

しかし、それを最後に雷真の声が聞こえなくなった。それに気づいたアスランは雷真が何かしら負傷しており、気を失っているので返答が出来ないのではないかと考えた。

アスラン「クソツ！フラガ一佐、至急ストライクを回収し、帰投します」

ムウ『索敵は任せろ!』

アスラン「お願いします。こちら、ジャステイス。アークエンジェル、応答願います」

アスランはムウと雷真を連れて帰投しながらアークエンジェルに通信を行う。

マリユール『こちら、アークエンジェル。どうしたの？アスランくん』  
アスラン「目標のストライクと接触。パイロットはクロキバ・ライ  
シン中尉と判明。ならびに中尉は負傷している模様。至急、格納庫に  
救護班を！」

マリユール『えっ!?!』

マリユール『わかったわ。救護班を急がせて！』

アスラン「持ち堪えてくれよ、ライシン……」



アスランとムウは、アスランがマリユールに救護班を頼んだ後、急いでアークエンジェルに戻り、ボロボロになったストライクから雷真を収容する。

その際、義理の姉である、ミリアリアも格納庫に来ていた。

アスラン「ライシン！おい、ライシン！」

ミリアリア「ライシン！ライシン！」

雷真「……………」

アスラン「早く、担架を！」

ストライクから回収され担架に乗せられた雷真はそのまま、アークエンジェルの救護室に運ばれた。

そして、救護室の医者が見たのは……………。

医者「これは酷い……………全身、傷だらけじゃないか！」

パイロットスーツではなく、アンダーウェアのような物を着た雷真の身体にはあちらこちらに火傷や切り傷のような物があった。

幸い、出血はしてはいなかったが至るところがボロボロだった。

医者「それに、この衣類はなんだ？パイロットスーツと違うようだが……………取り敢えず、これを脱がさない」と

医者は雷真が着ていたISスーツを上半身だけ脱がし、アークエンジェルでできる、最大限の処置を施すことにした。

ミリアリア「先生、ライシンは！ライシンは大丈夫なんですか!？」  
医者「今のところは呼吸、心肺共に正常だよ。けれど、かなり無茶をしたようだね」

ミリアリア「ライシン……………」

アスラン「ミリアリア、君はライシンに付いていてくれ。艦長には俺から話しておくから」

ミリアリア「ありがとう、アスラン」

その後、ミリアリアはずっと雷真の側に居ることになった。そして、アスランは格納庫で何故、雷真がこんなにもボロボロの状態だったのかを知るために格納庫にいるマードック曹長にストライクの戦闘データを抽出してもらったことにした。

その結果……………。

マードック「おいおい、マジかよ……………。誰か至急、艦長とフラガーとアスランを呼んで来てくれ！」

「は、はいー」

マードック「こいつはヤベエ物がデータに残ってやがる」

マードックはストライクの戦闘データを見て、これは自分の手には

余る物だと直ぐに理解した。

マードックが部下にマリユール、ムウ、アスランの三人を呼び寄せ、三人が集まった。

マリユール「それでマードック曹長、私たちを呼んだのは何かしら？」

マードック「それなんですけどね……今、先ほど、ストライクの戦闘データを抽出したんですがヤベエ物が映っていて……」

ムウ「ヤバイ物？」

マードック「これでえさ」

ストライクからデータを抽出する機械のモニターに映しだされたのは……………。

マリユール「これは……………!!」

ムウ「マジかよ……」

アスラン「バビ、グフ、ザク……………それに、ガイア、アビス、カオス、セイバー……………!?!」

アスランたち三人は雷真が乗っていた、ストライクがこんなボロボロになる理由は理解できたが、何故、Z A F Tの機体が雷真の世界にあるのかが理解できないでいた。

マードック「まさか、こんな物が映ってるとは思わなくて……俺の手にはちよつと……」

アスラン「このデータのコピーをお願いします」

マードック「わかった」

アスラン「それから艦長。このことはキラに伝えます」

マリユール「ええ、その方がいいわ。お願いね、アスランくん」

アスラン「はい」

マードックから戦闘データのコピーをもらって、アスランはブリッ

ジに向かい、キラへと連絡を取ることにした。

アスラン「こちら、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジェ  
ル所属のアスラン・ザラです。プラント、至急、キラ・ヤマト指揮官  
にお伝えしたいことがあります」

『こちら、プラント。少々、お待ちください』

プラント側の担当者に待たされること10分、プラント側から通信  
が来た。

キラ『もしもし、アスラン、どうしたの？いきなり、軍事回線で連  
絡してくるなんて……』

アスラン「それが、かなりヤバイ案件でな」

キラ『どういうこと？』

アスラン「アイツが……ライシンがまた」コズミック・イラ「こつち側」に帰って来た  
んだ」

キラ『ライシンが!?!』

アスラン「ああ。それでライシンが乗っていたストライクなんだが  
……この有り様だったんだ」

アスランはジャステイスのデータと格納庫に收容されているスト  
ライクのデータをキラに送った。

キラ『これは!?!』

アスラン「これだけじゃないんだ、キラ」

続いて、アスランはストライクの戦闘データを再び、キラの元へ送った。

キラ『この機体……でも、なんで？この機体たちは、僕やシン、それにバルトフェルトさんが……』

アスラン「ああ、わかっている。セイバーはキラが、アビスはシンが、カオスはオーブ軍が墜としたはずだ。それにガイアはバルトフェルト隊長の機体だ」

キラ『なら、どうして……』

アスラン「それはわからない。だが、ライシンは再び元の世界に戻るはずだ。だから、俺たちにできることは……」

キラ『ライシンに、僕やアスランの様に守るための【剣】を託すことだね』

アスラン「ああ。だから、俺はあの機体をライシンに託すべきだと思う。前にラクスからお前の伝言を聞いた様にアイツも何かしたいのに出来ないのが一番辛いだろうからな」

キラ『僕もそれは思うよ。僕の方でもあの機体の手続きはしておくよ。プラントに着いたら、また連絡をちょうだい、じゃあ』

アスラン「わかった」

それを機にアスランとキラは互いに通信を切る。



アスランがキラと通信をしている頃、救護室では……………。

【ピトツ……………ピトツ……………ピトツ……………ピトツ……………ピトツ……………】

雷真「んん……………あ、れ？」

ミリアリア「ライシン？ライシン！」

雷真「ミリ……………アリア？」

ミリアリア「よかった、目が覚めたんだね！もう、心配したんだから！」

雷真「俺は確か……………」

雷真は今まで自分が何をしていたのかを思いだすと、脳裏にガイアたちとの戦闘の記憶がよみがえる。

雷真「はっ！ガイアたちは……………グツ!!」

雷真はガイアたちのことが気になり、勢いよくベッドから身体を起こそうとすると全身に鈍い痛みが走り、身体を抱き抱えてしまう。

ミリアリア「ダメよ、動いちゃあ！」

雷真「ぐううう……………」



そんな雷真をミリアリアは優しくベッドに寝かせる。

ミリアリア「今は安静にしてなさい。貴方の身体は全身ボロボロな  
んだから」

雷真「それより、何でミリアリアが？」

ミリアリア「ここはアークエンジェルの救護室よ」

雷真「アークエンジェル？だとしたら、俺は、また……………」

ミリアリア「そう、コズミック・イラに帰ってきたの。こっちは貴  
方が元の世界に帰ってから3年の月日が経ってるわ」

雷真「つてことは…………コズミック・イラ77年か…………」

ミリアリア「そうなるわね。ところでライシン、貴方は何であんな  
にボロボロだったの？それにガイアつて、確かZ A F Tの…………  
??? 「それに関しては私たちも聞きたいわ」

ミリアリアがガイアたちのことを雷真に聞こうとすると救護室の  
入口からアークエンジェルのクルーの声が聞こえた。

雷真「艦長？それにフラガ一佐にアスラン、まで…………」

ムウ「よう、坊主。元気…………なわけないか」

雷真「ええ、今の状態では」

マリユー「そんな状態で悪いのだけれど。できれば、ライシンくん  
のストライクに記録されていた、Z A F T軍のM S<sup>モビルスーツ</sup>について教えて  
くれるかしら？今がダメなら後日でもいいのだけれど」

雷真「いえ、今で大丈夫です。ミリアリア、悪いけどの身体を壁に  
寄り掛からせる形にしてくれるか？」

ミリアリア「うん、わかった」

アスラン「俺も手伝おう」

ミリアリアとアスランによって身体を起こした、雷真は深呼吸をし  
てからストライクに記録されていた。バビ、グフ、ザク、ガイア、カ  
オス、アビス、セイバーのことについて語りだした。

雷真「まず、最初にZ A F Tのバビとグフと会敵したのは俺の世界にあるISの学校でクラス代表トーナメントがあった日なんだ」

ムウ「ISって確か……」

アスラン「元々、宇宙空間の行動を目的とした。パワードスーツだったな」

雷真「はい……それで、何故か分からないけど、IS学園を奇襲してきた、バビとグフを俺がストライクで三回、警告通信を行ったんですが応答がなく、やむをえず………撃墜した」

アスラン「パイロットは？」

雷真「それが全機とも無人機だったよ。ソードストライカーの大艦刀で串刺しにしたけど血飛沫が出なかったんだ」

アスラン「そうか……なら、ザクやガイアたちも」

雷真「ああ。ザフトのイザークが元々乗っていた、イザーク専用のザクファントムも、ストライクの戦闘データを見ていると思うから分かるように、あれも無人機だ。それにガイアたちも変形できるから無人機だ」

マリユール「そう………ありがとう、ライシンくん。今はゆっくり休んでちょうだい。それとアークエンジェルは現在、プラントに向けて航行中よ」

雷真「わかりました」

話が終わると再び、ミリアリアとアスランに身体をベッドの上に寝かせられ、雷真は眠りにつく事にした。

## 第27話

「パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！」

とある部屋の中で銃が発砲される音が響く。そして、その銃の発砲音の主は約10日前にIS学園の臨海学校の途中でカオスたちに撃ち落とされたはずが、何故か再びコズミック・イラに帰ってきてしまった、黒牙雷真である。

雷真「クソツ！」

早く、刀奈や簪、シャルロット……………みんなの所へ帰らないといけないのに、帰る手段が見つからない。

前はジャンク屋のロウ・ギユールさんの試作型次元転送装置で帰れたけれど、今回はそうはいかなかった。

ロウさんに頼んで次元転送装置を使えるか聞いてみたら……………。

ロウ『ありや、ダメだ。俺も何度もやってるが上手く作動しねえんだ。わりいな』

との事だった。

なので、俺はカオスたちがいる世界に刀奈たちを置いて来たことやどうにかして早く帰らないということに焦り、射撃練習が上手くいかなかった。

そうしていると、射撃場の入り口からある人がやってくる。

バルトフェルト「随分と焦っている様だな、少年？」

雷真「バルトフェルトさん……………」

バルトフェルト「今は焦っても、何にもならんだろう」

雷真「けれど、俺は……………早く帰らないといけません。でも、

【想い】だけじゃ何にもならない。けれど【力】も足りない。その証拠に首飾りもこの有り様です」

俺は自分の首から元々は白く、今はその色を失ったかの様に灰色と化した、元ストライクの待機状態だった首飾りをバルトフェルトさんに見せた。

バルトフェルト「今はまだ、その時ではないのだろう」

雷真「『今は』ってどういうことですか?」

バルトフェルト「時が来るまで身体を休めるんだな。『その時』のため」

そう言っつて、バルトフェルトさんは射撃場から出て行ってしまった。

雷真「どういうことなんだ?」

俺は訳が分からないので、頭を冷やすためにプラントのアークエンジェルクルーが宿泊している施設に戻ることにした。

そして、宿泊施設の自室でシャワーを浴びて頭を冷やし終わり、ベッドで仮眠を取っていると呼び出しのベルが鳴る。

雷真「はい」

??? 『あつ、ライシンさん? どうも、メイリンです』

雷真「メイリン? どうしたんだ?」

メイリン『いえ、ただ……一緒にランチとかどうかなくて……』

部屋の中の時計を見ると時刻は13時を示していた。

また、今頃になって急に腹の虫が栄養を求めて鳴き出した。

雷真「わかった。10分だけ待ってくれ」

メイリン『わかりました』

ミリアリアに買ってもらった私服に着替えてから、ウエストポーチに財布に携帯端末、身分証と羽の首飾りを首にかけ、それから念のため上着の下にシヨルダーホルスターを着用して、ホルスターにはオーブ軍の拳銃を入れてから部屋を出る。

雷真「悪い、待たせた」

メイリン「いえ、大丈夫ですよ」

メイリンと一緒に施設のフロントへ行き、部屋の鍵を預けてから、自動運転自動車に乗り、メイリンがオススメするカフェへと向かう。自動運転自動車に乗りながらプラントの街並みを見てみると昔より、子供や若い夫婦が増えた気がするのでメイリンに聞くことになった。

雷真「なあ、メイリン」

メイリン「なんです？」

雷真「数年前より、プラントに子供や若い夫婦が増えてないか？」  
メイリン「それはですね、ライシンさんが元の世界に帰られた後、プラントに『ナチュラル』の方々が技術交換のために来られたんですよ。それで、そのうちに『コーデイネイター』と『ナチュラル』との夫婦が生まれて、今では『ハーフコーデイネイター』の子供が多くなっているんです」

雷真「なるほどな。こっちの世界では、やっと『ナチュラル』と『コーデイネイター』の平和が訪れた訳か……」

メイリン「そういえば……ライシンさんは『ナチュラル』と『コーデイネイター』、どっちなんですか？」

雷真「何でそんなことを聞くんだ？」

メイリン「いえ、ただライシンさんの過去のデータを見ていた時に『コーデイネイター』と『ナチュラル』……どちらも記録されていな

かったので」

雷真「なるほどな。俺は多分……『コーディネイター』なんだろうな」

メイリン「多分?」

雷真「メイリンも知っていると思うが俺は別の世界の人間だ。その世界には遺伝子操作技術は<sup>コスミック・イラ</sup>こつち側<sup>コスミック・イラ</sup>の様

に確立されていないから……技術的にはクローンまでだな」

メイリン「クローン……」

雷真「だから、俺は<sup>コスミック・イラ</sup>こつち側<sup>コスミック・イラ</sup>で言えば、『コーディネイター』なんだ」

メイリン「そうだったんですね。あつ、そろそろカフェに着きますよ」

雷真「わかった」

カフェに着いた俺たちはテラス席に座ることにした。

席に着いたあと、メニューで食べる物と飲み物を頼み。あつちでの事やこちら側のことを話し合っていた。話がいい感じで終わるとウェイターの人が俺たちが注文した品をとどけてくれた。

「以上でよろしいでしょうか?」

雷真「はい、大丈夫です」

「では、ごゆっくり、どうぞ」ペコリ

ウェイターが一礼して去ってから俺たちは品を食べる。

半分くらい食べ終わると店の向かい側から聞きなれた声が聞こえてきた。

??? 「オーイ!メイリン、ライシンさん!」

雷真「ん?」

メイリン「お姉ちゃん!?!」

その声の正体はメイリンの実の姉であり、ザフト軍のキラが隊長を務めている部隊の隊員の一人でインパルスのパイロットである、ルナマリア・ホークだった。

??? 「おい、ルナ。いきなり、走り出すなよ！車が来たら危ないだろう？」

メイリン 「それにシンまで！」

シン 「あれ、メイリンにライシンさんまで？」

ルナマリアに文句を言いながら付いてきたのはルナマリア・ホークの彼氏で、ルナマリアと同じくヤマト隊所属のグステイニーのパイロットである、シン・アスカだ。

雷真 「よう、ルナマリアにシン。二人は今日は非番でデートか？」

シン 「ええ、今日は珍しく。キラさんが急遽、2日間も休暇にしましたですよ」

ルナマリア 「そういう、ライシンさんはうちのメイリンとデートですか？」

メイリン 「お姉ちゃん！」

シン 「バカ、ルナ、お前！」

雷真 「デート……か」

ルナマリア 「えっ、なに？」

シン 「お前！前にキラさんからライシンさんが何で”コズミック・イラこつち側”に帰ってきたのか、その理由を聞いていなかったのかよ！」

ルナマリア 「あっ……すみません、私……」

雷真 「いや、気にするな。今は焦っても何にもならないし、出来やしないから……」

俺はただ、ただ……自分の無力さにイラつきながら、今も尚、カオスたちと戦っているであろう、婚約者や仲間たちのことを思いながら人工の空を見上げることしかできなかつた。

雷真「刀奈、簪、シャルロット……………俺は」ボソツ  
メイリン「……………」



雷真たちがカフェに居たのと同時刻。複数の作業員がある機体の整備を急ピッチでしていた。

マードック「急げ！この機体の整備やらなんやらを明日の7時まで  
に終わらすんだ！いいな!!」  
「「はー…」」

マードックの掛け声でオーブ、ザフトの整備班は働き蟻の如く整備  
をしていく。

キラ「マードックさん」

マードック「おお、キラか」

キラ「どうですか、機体の整備は？」

マードック「動力源は前のをそのまま使えるから良いんだが、アレ  
にISとかいう奴のデータを移すのがな……………」

キラ「やっぱり、難しいですか？」

マードック「難しいってレベルじゃねえよ……………。一週間前に、ここ  
のドッグにストライクをぶちこんでからコイツにデータを移してる  
が……………エラーが大量に発生して、その修正作業で手一杯よ」

キラ「そんなにですか？」

マードック「まったく、こんな物を作り出した。シノノノ・タバネつ  
て博士はお前さん並だよ」

キラ「え？僕たちと…………？」



マードック「多分、アイツの世界には『コーディネイター』を作る技術なんてないはずだ。だから、アイツとシノノノ・タバネは……」  
キラ「『ナチュラル』でありながら『コーディネイター』だと?」  
マードック「そこら辺の詳しいことは俺には分からねえ。けど、分かることはデータをコイツに移す事だけだ」  
キラ「そうですね。では、あとをお願いします」  
マードック「あいよ」



カフェでメイリン、ルナマリア、シンと共に昼飯を食べたあと、四人でショッピングモールへ行くことになった。

メイリン「ライシンさん、どうですか?」

雷真「うーん………少し派手過ぎないか?」

メイリン「そうですね? 私は可愛いと思うんですけど……」

雷真「流石にレインボーは派手だろ」

現在、俺はメイリンとアパレル店でメイリンに服の感想を聞かれている。

また、シンたちはというと………。

ルナマリア「ねえ、シン。これなんて、どう?」

シン「どれも似たような感じじゃん……」

ルナマリア「似てないわよ! ことか、装飾や絵が違うのよ」

シン「どれも一緒だよ」

と漫画でよくあるような、主人公のセリフとヒロインのセリフを言い合っていた。

その後は普通に夕食をショッピングモールで食べて宿舎へ戻った。

そして、翌日。時刻は7時30分。俺は、何故かキラに呼び出されて、キラ、ラクス、アスラン、カガリの四人について来いと言われたので四人の後を追っている。

雷真「なあ、キラ。もう、行き先を教えてくださいても良いんじゃないか？」

キラ「うくん、そうだね。じゃあ、行き先を教える前に質問ね」

くBGM：キラ、その目覚めと決意く

雷真「質問？」

キラ「君は何のために、そんなに焦って力を求めているの？」

雷真「……………」

キラ「僕は前に君へ【力だけでも、思いだけでも】と送ったはずだよ？」

雷真「分かっている。俺は元の世界で改めて理解したんだ。力と思いがあっても、それが足らなければ何にも守れないって……………」

キラ「……………」

雷真「今の俺には思いしかないから……………。だから、今度こそ、大切な【花】を守りたいんだ。あの時の様に守れたはずの誰かを守れないなんて……………。俺は嫌だ！」

過去に俺は地球降下の時にキラと共にスペースシャトルに乗る少女に必ず守ると約束したのに、守れなかった。

キラ「分かった。やっぱり、君は何処か僕と似ているね」

雷真「えっ？」

キラ「さっ、着いたよ」

キラたちに連れて来られたのはザフトの機密施設の一番奥の扉の前だった。

雷真「どこ？」

キラ「うん。ラクス、カガリ、お願い」

ラクス「わかりましたわ」

カガリ「分かった」

ラクスとカガリは扉の左右にある、扉を開ける機械に近付き、そして……………

ラクス「カガリさん、行きますわよ」

カガリ「ああ」

ラクス「3」

カガリ「2」

ラクス「1」

「0！」

二人がドンピシャのタイミングで機械に何かカードの様な物をスライドさせると【ピーーーー】と何か反応する音とともに扉が開く。けれど、扉の先は真っ暗で何にも見えなかった。

キラ「付いてきて」

雷真「……………」

再び、キラに言われるまま扉の先に入る。

約25歩程、扉の先の部屋を直進に進むと……………

【パッ！】

雷真「まぶしっ!?!」

キラ「見てご覧、ライシン」

雷真「えっ？」

俺はいきなり照明が着いて目を瞑り、その後、目が慣れたのでキラに言われるまま正面を見るとそこには……………。

雷真「フリー…………ダム？」

キラ「そう、フリーダム。前に僕が乗っていた機体だよ」

雷真「でも、何で！フリーダムはインパルスに墜されたはずじゃ……………」

カガリ「それは、ザフトとオーブが共同で回収して、復元したんだよ」

雷真「回収って……………」

ラクス「元々は展示会に展示する予定の機体でしたのよ？」

雷真「ならなんで……………まさか!？」

キラ「そう。これが雷真、君へ送る、僕たちからの新たな【剣】だよ」

雷真「新たな、剣……………」

キラ「ちよつと、乗ってごらん？」

雷真「ああ……………」

俺は真っ直ぐにフリーダムへと近付き、コックピットへ乗り込むためにフリーダムに触ると首にかけていた、色褪せた羽の首飾りが……………

雷真「えっ!？」

摩訶不思議の現象で俺の首から羽の首飾りが独りりで動き、俺の目の前で色褪せた羽から新たな羽へ変化した。

それは青い羽に白いラインが入った、フリーダムに似た羽へと変わったのだ。

雷真「これは……………ッ!!」

分かる。これは……………フリーダムだ。

もしかして、フリーダムがISになったのか？

キラ「どうしたの？」

雷真「キラ、首飾りが……………フリーダムになった」

キラ「えっ？」

アスラン「多分、新たな力を得て、首飾りはフリーダムをISとして変化させたんだろう」

雷真「なら、フリーダムは……………」

ラクス「貴方の専用機になったと言うことですね。ライシン」

雷真「俺の新たな専用機、フリーダム」

カガリ「さっ、早く試運転をして来いよ。フリーダムの発進許可は取つてある。帰投はアークエンジェルの方だからな」

雷真「分かった」

俺は今度こそ、フリーダムのコックピットへと乗り込み、フリーダムの電源を入れる。

Generation

Unsubdued

Nuclear

Drive

Assault

Module

次にフェイズシフトの電源を入れる。すると、フリーダムに繋がれていた、何種類もの配線やコードなどが外れる。また、フリーダムの装甲の色も、青、黒、白へと変化させる。

雷真「黒牙雷真……………フリーダム！行きます！」

出撃する前の…………ルーチンワークと化した、言葉を言う俺はフリーダムのアクセルペダルを踏み込み、一気に上へ飛翔する。

## 第28話

フリーダムを新たな専用機とした雷真はアークエンジェルの格納庫でキラの指導の下、フリーダムの雷真専用システムを書き換えている。

また、アークエンジェルは現在、地球に向けて進行中で、その護衛にキラがアークエンジェルに乗艦している。

キラ「ここが………になつてて」

雷真「なるほど」

キラ「あと僕がいじったりしたのは………ここら辺だね」

雷真「分かった」

キラ「じゃあ、僕はカガリたちのところに居るから、何かあったら呼んで」

雷真「ありがとう」

キラは返事を聞くとフリーダムを蹴って、格納庫からカガリたちのいる船室に向かって行った。

雷真「これで終わりかな？ やつぱり、ストライクよりシステムが複雑だ。それにキラの戦闘データも確認しないと……。元の世界に帰れたらカオスたちを倒さないといけないし」

雷真はシステムの調整が終わるとアークエンジェルの自室に向かい、ノートPCでこれまでのフリーダムの戦闘データを見ていく。

雷真「キラはこんな動きをしているのかよ……。フリーダムが第3世代IS以上だとは分かるけど、これを俺が出来るのか？」

??? 「どうしたんですか？ また、そんな心気臭い顔をして」

雷真「えっ？」

いきなり後ろから声をかけられたので振り返るとそこには本来ならアークエンジェルに乗艦していない人物が居た。

雷真「め、メイリン!? どうして! お前は、確か、ミネルバのクルーだろう?」

メイリン「今回はちよつと我儘を言つて付いて来ちゃいました」

雷真「来ちゃいましたって、お前……」

メイリン「それで、何を悩んでいたんですか?」

雷真「はあく。それなんだが、キラの戦闘データを見ていて、元世界で再現が出来るのか悩んでいたんだよ」

メイリン「えっ、そんなこと出来るんですか!?!」

雷真「まあな。俺の世界にあるISは第3世代になるとイメージ・インターフェイスつてのが搭載されていて」

雷真「それはパイロットのイメージを最大限、ISの動きで再現するシステムなんだ。だから、キラの動きも再現できるかなって?」

メイリン「んく。何で、ライシンさんはキラさんの真似をしようとするんです?」

雷真「えっ?」

メイリン「ライシンさんはストライクに乗っていた時はキラさんの動きを真似しようと思っていましたか?」

雷真「いや、ストライクは交代で乗っていたから、そんな考えはなかった」

メイリン「なら、フリーダムでもキラさんの真似ではなく、ライシンさんが思う通りに動けば良いんですよ!」

メイリン「それとキラさんから聞きました。ISには意志があるって。なら、フリーダムに語りかけてみたらいかがですか?」

雷真「フリーダムに語りかける……」

メイリン「そうです」

雷真「ありがとう、メイリン。もう一度、格納庫に行ってくるよ」  
メイリン「どう致しまして」



雷真はメイリンに言われるまま、再び、フリーダム元へ行き、コックピットに搭乗すると目を瞑り、フリーダムに語りかける様に意識を集中する。

するとフリーダムのレーダーに何処を示す座標ポイントと……。

【ピッ……ピッ……ピッ……ピッ】

雷真「ん？これは……」

??? 『ら……い……しん』

雷真「えっ、この声は……刀奈!？」

雷真「一体何処から?」

刀奈『貴方がこれを聞いていても聞いてなくても良いわ』

雷真「刀奈、聞こえるか？俺だ、雷真だ!」

刀奈『私たちは、あと少しであの未確認機体に挑むわ』

雷真「止めろ、刀奈!クソッ、こつちからの通信は届いてないのか!？」

刀奈『だから、もしも私たちが死んじゃったら』

雷真「そんなことを言うな、刀奈!頼むから!」

刀奈『ごめんなさい。そして、貴方を愛しているわ、雷真。それじゃあ』

雷真「おい、刀奈？刀奈！」

雷真「もしも、この座標ポイントが元の世界に帰れるゲートなら………。今は、これに賭けるしかない！」

直ぐにフリーダムを発進させるために艦長に頼む。

雷真「艦長！」

マリユー『どうしたの、ライシンくん？』

雷真「今、あちら側からの通信がありました」

雷真「それに、多分……あちら側に帰れるゲートの座標ポイントがフリーダムのレーダーに表示されました」

マリユー『えっ!?!』

マリユーは、まさか雷真の元の世界から次元を超えて通信が届くとは思わず驚愕する。

しかし、そんなマリユーに新たに驚愕する情報が入る。

ミリアリア『艦長！アークエンジェルの進行方向にある、衛星軌道付近に謎の重力波が発生しています！』

マリユー『何がどうなって……』

雷真「ミリアリア！今から送る座標と重力波の座標を照らし合わせ  
てくれ」

ミリアリア『えっ？わ、わかった』

ミリアリアにフリーダムのレーダーに表示された、ゲートと思わし

き座標データを送り、謎の重力波の座標と照らし合わせてもらうことにした。

ミリアリア『これは!!』

ミリアリア『雷真、聞こえる?』

雷真「ああ」

ミリアリア『さつき、雷真から送られてきたデータと照らし合わせたら、雷真のデータと重力波の座標が完全に一致したわ』

雷真「やっぱり!」

雷真「艦長、フリーダムで出ます!」

マリユー『待つて! その、重力波が本当にライシンくんの世界に帰るゲートだとは、まだ確証が持てないのよ!』

雷真「それでも……俺は……『行かせてやれよ、マリユー』」

マリユー『ムウ!?!』

ムウ『ライシン、男には何かを守る時は危険を承知で飛び込む必要がある。お前には、それが今なんだろう?』

雷真「はい!」

ムウ『ヨッシャ! 俺たちも出る』

マリユー『もー、わかつたわよ! ライシンくん、直ぐにフリーダムの発進準備をさせるからパイロットスーツに着替えて来なさい』

雷真「ありがとうございます!」

雷真は急いでフリーダムから飛び降り、パイロット専用の更衣室へと向かう。そして、更衣室に入ると既にキラとムウ、アスランが居た。

アスラン「ライシン、フラガー佐から聞いた」

雷真「ああ」

アスラン「俺から1つだけ」

雷真「なんだ？」

アスラン「元の世界へ帰る前に彼女に会うべきだと思うぞ？」

雷真「……………」

アスランが言った彼女はメイリンのことである。

アスラン「彼女はお前が帰ってきた時、凄く喜んでいたし悩んでいた。だから…………」

雷真「わかってる」

アスラン「なら、いいけどな」

ムウ「ライシン、先に行ってるぞ」

キラ「僕も先に行くね」

アスラン「俺も先に行く」

雷真「……………」

キラとムウ、アスランが更衣室から出て行ったあと、雷真は悩んでいた。メイリンにどう声を掛け話したら良いのかと。今さら、彼女にどんな話ができるのだろうか。

色々と考えていると更衣室の扉がノックされる。

メイリン「ライシンさん、居ますか？」

雷真「ああ、居るぞ」

メイリン「入っても、大丈夫ですか？」

雷真「大丈夫だ」

メイリン「失礼します」

雷真「……………」  
メイリン「……………」

二人はこれで最後の別れとなる。それ故にどう話したら良いかわからない。

しかし、その沈黙をメイリンが打ち破る。

メイリン「あの、これ」

雷真「ハロ？」

メイリン「さつき、アスランさんからライシンさんに渡す様にと」

雷真「アスランが……………」

メイリンがアスランから雷真へと渡す様に言われた物は真つ白なハロだった。

雷真「ありがとう、メイリン。それじゃあ」

雷真が更衣室から出ようとするがパイロットスーツをメイリンに掴まれてしまう。

雷真「メイリン？」

雷真はスーツを掴んでいるメイリンの方へ向くと……………。

雷真「んぐっ!？」

メイリン「ん……………」

まさかのメイリンにキスをされていた。

雷真「メイリン、お前……………」

メイリン「女々しいのは、分かっています！けれど、私はライシン

さんが好きなんです。前の大戦でお姉ちゃんが敵になった時、アスランさんにも言われましたがライシンさんも……………

雷真『もし、仮に俺も君のお姉さんと戦うことになったら、俺が撃つ。そして、俺を恨むといい。そうすれば、君に責める先ができるだろう?』

……………って言われて、私は戦う決心が出来たんです。だから……………だから……………」ポロポロ

雷真「メイリン、お前の気持ちは嬉しい。けれど、俺はアイツらを捨てることはできない。誰よりも刀奈を、簪を、シャルロットを……………彼女たちを愛しているんだ」

メイリン「……………」ポロポロ

雷真「だから、すまない。こんなクズ野郎で」

雷真はそれだけ言い残して更衣室を出る。その際、廊下にはメイリンの泣き声が少しだけ響いた。

メイリンとの話を終え、格納庫に行くと先に出て行った三人が雷真のことを待っていた。

ムウ「よう、色男」

アスラン「話は終わったのか?」

雷真「ああ。俺は元の世界に帰る!」

キラ「わかった。途中まで僕たちも行くよ」

雷真「ありがとう」

そして、各人、自分の機体へと搭乗する。すると、管制のミリアリアからプライベートチャンネルで通信が来る。

ミリアリア『ライシン』

雷真「なんだ？」

ミリアリア『これで、もう、お別れなんだよね？』

雷真「ああ、そうなるな」

ミリアリア『そっか……。ライシンが初めてこっちの世界に来た時は私の家の庭に倒れてたんだよね？』

雷真「そうだったな」

ミリアリア『それから色々あったけど、楽しかったよ、雷真との生活。血は繋がってなくても、本当の姉弟が出来たみたいで』

雷真「……………」

ミリアリア『だから、お別れは言わない。その代わりに、行ってらっしゃい！』

雷真「ミリアリア……………」

雷真「ありがとう、ミリアリア姉さん。行ってきますー！」

それを最後にミリアリアとのプライベートチャンネル通信は終わった。

そして、発進シークエンスへ移行する。

↳BGM：勇気の滑空

ミリアリア『CPUオンライン。カタパルト接続』

ミリアリア『各パワーフロウ正常。進路クリア』

ミリアリア『【ZGMF-X10A フリーダム】。発進、どうぞ!』

雷真「黒牙雷真!フリーダム、行きます!」

雷真はアークエンジェルからフリーダムで発進してゲートまで一気に向かう。

その護衛にキラ、アスラン、ムウの三人が付いた。

そして、ある程度ゲートまで近付くと、危険アラームが鳴る。また、複数のビームも飛んでくる。

雷真「これは!?!」

キラ『ライシン、これはロゴスの残党だよ』

雷真「ロゴスの!?!」

ムウ『その証拠に、おいでなすったぞ!』

ムウの声でレーダーにはある機械のデータが表示された。それは【GFAS-X1 デストロイ】だった。

他には、【GAT-02L2 ダガール】、【GAT-04 ウィンダム】が複数存在していた。

雷真「デストロイ……まだ、居たのか」

アスラン『ライシン、デストロイたちは俺たちで何とかする』

キラ『だから、君はゲートへ向かって』

雷真「でも!」



ムウ『行け、坊主！お前さんには帰りを待っている奴らが居るだろう！』

雷真「フラガー一佐………ありがとうございます！」

雷真はキラたちがデストロイやダガーL、ウインダムを足止めしている間にゲートへと急ぐ。

雷真「これがゲート……」

ゲート前まで着くと、一部だけ空間がグニャグニャになっている部分を見つけた。

雷真「フリーダム、頼む。俺を刀奈たちの所へ導いてくれ！」

雷真の言葉に答えたのか、フリーダムのツインアイが光る。そして、ゲートへと入り込む。

雷真「今から行くぞ。刀奈、簪、シャルロット、みんな！」

## 第29話

雷真がゲートを潜っている少し前。作戦室ではIS学園の教師陣が福音ならびにカオスたちの現在位置を逐一確認していた。

真耶「全機、停止していますね」

千冬「……………」

真耶「本部はまだ、私たちに作戦の継続を？」

千冬「解除命令が出ていない以上、継続だ」

真耶「ですが、黒牙くんがロストした以上、どのような手であるの四機を沈黙もしくは撃墜しろと？」

千冬と真耶が今後の作戦について話していると作戦室のドアがノックされる。

【コンコンコンッ！】

???「失礼します」

千冬「誰だ？」

???「デュノアです」

千冬「待機と言ったはずだ！入室は許可できない」

と千冬に一喝されてしまった。

ドア前で待機していたのはシャルロットの他にセシリア、鈴、ラウラの三人だった。

シャル「……………」

セシリア「……………」

鈴「……………」

ラウラ「教官の言う通りにするべきだ」

シャル「でも、先生だって一夏のことか心配なはずだよ。それに雷

真だつて、まだ本当に死んだ訳じゃないはずだよ……………」ポロポロ

鈴「シャルロット……………」ギョツ

シャル「ありがとう、鈴」

セシリア「一夏さんもずっと目を覚ましていませんのに……………」

鈴「手当ての指示を出してから一度も様子を見に行っていないなんて……………」

ラウラ「行っていないのではない。教官はいけないのだ、鈴」

鈴「どういうこと、ラウラ？」

ラウラ「私やセシリア、鈴はそこまで心に傷を負っていないだろう。

無論、教官も」

セシリア「もしかして、自分よりも傷付いている者がいるから？」

ラウラ「ああ。十中八九、刀奈に簪。それにシャルロットもだ」

シャル「僕はまだ、二人に比べたら……………」

ラウラ「お前が無理をしているのは皆、分かっている」

セシリア「ですが、箒さんに声をかけるくらい

は……………」

ラウラ「今は福音とあのカオスとか言う未確認ISたちの捕捉に集中する。教官は自分ができることをやっているに過ぎない」

ラウラ「教官だつて苦しいはずだ。苦しいからこそ、作戦室に籠っている。心配するだけで、一夏を見舞うだけで、福音やカオスたちが撃破出来るとでも？」

ラウラ「それよりも問題は……………」



その頃、『更識』と部屋の表札に書かれた部屋の中では……………。

簪「お姉ちゃん……………」

先ほど、摩耶から雷真のロストを聞かされて泣きながら意識を失った刀奈は、今まだに布団の中で涙を流しながら、雷真の名前を弱々しく呼んでいた。

刀奈「らい……………しん……………」ポロポロ

簪「グスツ……………」ポロリ

簪「早く帰ってきてよ、雷真。約束、したじゃない。こんなお別れ、私は……………私たちは嫌だよ」ポロポロ

簪も我慢が限界になったのか、その場で声をもらしながら泣いてしまふ。

それから泣き止むまで少し経つと意識を失っていた刀奈が目覚めます。

刀奈「う、うくん。ここは……………?」

簪「お姉ちゃん」

刀奈「かん……………ざし……………ちゃん?」

簪「そうだよ、お姉ちゃん」

刀奈「私は……………はっ、雷真!」

刀奈「簪ちゃん、雷真は?雷真はどこに居るの!?!」

簪「それは……………」

刀奈「あつ、そつか!雷真は今、お風呂に行ってるんでしょ?じゃないと…雷真が…雷真が…雷真が死ぬなんて夢は有り得ないもの」ポロポロ

簪「お姉ちゃん……………」ポロポロ

刀奈「なんで……………なんで、雷真が死なないといけないの?なんで、い

つも雷真だけがこんな酷い目に遭うの？」ポロポロ

簪「……………」ポロポロ

刀奈「なんで……………なんでなのよ……………」ポロポロ

刀奈は涙を流しながら雷真が死んだことによりできた、胸の奥の感情を吐き出した。

涙が止まると二人は気分転換をするために浜辺に行くことにした。そして、浜辺に行く……………。

鈴「ぎげんじやないわよ！」

刀奈「鈴ちゃん？」

簪「鈴？」

二人が浜辺に着くと、そこには鈴と簪が揉み合っていた。

鈴「やるべきことがあるでしょうが？今、戦わなくてどうすんのよ？」

簪「もうI Sは……………使わない」

鈴「ツ……………！」

簪のその言葉を聞いた鈴は簪の顔を叩こうとするが鈴が叩く前に刀奈が動き出し、簪の頬を叩いた。

刀奈「甘ったれるな！」

鈴「刀奈……………それに簪も」

簪「……………」

刀奈「たかが、作戦を一回失敗しただけで、大切な人が傷付いただけで全てを諦めたような声を出すな！」

簪「……………」

刀奈「私なんか……………私たちなんか、大切な人を失ったのに！」ポロ

ポロ

箒「大切な人を……失った？」

鈴「箒は知らないだろうけど、私たちがザクたちを撃破した後に一夏たちのフォローに向かおうとした時、新たに未確認I Sが現れてね」

鈴「それで、雷真が私たちを生かすためにそのまま……」

箒「そんな……」

刀奈「だから、貴女は甘ったるな！まだ、敵はそこに居るんだ！なら、敵を討ちなさい！」

箒「そうだな。やはり、私は甘ったれていたのだな。私は一夏の敵を討つ」

鈴「やつとやる気になったわね？」

鈴「あくあく、いい所は刀奈に全部持っていかれちゃったわ」

鈴は後ろを振り向き、そう声を発した。

そして、振り向いた先には、セシリア、ラウラ、シャルロットの三人がいた。

箒「な、なに？」

シャル「みんな、気持ちちはひとつつてこと」

セシリア「負けたまま、終わっていいはずがないでしょ？」

シャル「それに、僕たちは雷真の敵討ちをしなくちゃいけないからね」

それからは各自、大切な人の敵討ちの作戦を練ることにした。

鈴「ラウラ、福音とカオスたちの位置は？」

ラウラ「確認済みだ」

ラウラがそういうと、部分的にI Sを展開し皆に福音とカオスたちの座標を伝える。

ラウラ「福音は、ここから30km離れた沖合い上空に確認した。カオスたちは雷真がロストした孤島から全くと行っていい程、動いていない」

ラウラ「カオスたちにはなかったが、福音はステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ」

ラウラ「衛星による目視で発見した」

鈴「流石はドイツ軍特殊部隊。やるわね？」

ラウラ「お前たちの方はどうなんだ？準備は出来ているのか？」

鈴「当然、甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済み」

セシリア「こちらでも完了していますわ」

シャル「僕も準備OKだよ」

簪「私も雷真のストライクからもらったデータにカオスたちのデータがあったから準備は万端」

簪「待ってくれ、行くというのか？命令違反ではないのか？」

刀奈「そうね、命令違反ね100%。けどね、箒ちゃん。私はね、自分の夫を殺した相手かもしれない奴を命令だからと言って諦められるほど、人間が出来てないのよ！」ギロリ

箒「!？」ゾワリ

箒が見た刀奈のその目は、復讐を誓った目をしていた。その瞳の色はどんな赤よりも暗い負の感情が詰まった紅色だった。

刀奈「それに箒ちゃんは敵を討つと言ったはずよ？」

ラウラ「お前は どうする？」

箒「私……私は……戦う。戦って、一夏の敵を討つ！今度こそ、負けはしない！」

鈴「決まりね。今度こそ、確実に撃破するわ」



みんなで敵討ちの作戦が決まったあと、私、簪、シャルロットちゃんはカオスたちを撃破することにした。

福音は箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴ちゃん、ラウラちゃんが撃破することになった。

そして現在は空が白んでくる頃、私たちはカオスたちがいる孤島へ向かう。

簪「見つけた！」

刀奈「アイツらが雷真を……………」ギリ!

シャル「刀奈、気持ちは分かるけど落ち着いて」

刀奈「ごめんなさい、シャルロットちゃん」

雷真の敵である、カオスたちを見た私は恨みや復讐の心のあまり奥歯を噛んでしまう。

また、カオスたちは東西南北を一機ずつ守るように背中合わせで立っていた。他には作戦室で見たような鮮やかな色ではなく、色を失った灰色をしている。

これは、雷真が発進する前のストライクに良く似ている。

刀奈「簪ちゃん、お願い！」

簪「うん！いっけえーっ！」

簪は打鉄式式の武装の連射型荷電粒子砲の春雷を放つ。すると荷電粒子砲はそのままカオスたちに向かい……………

簪「ヒット！」



刀奈「よし、行くわよ！」

「うん！」

春雷を自分たちの突撃の合図にして、カオスたちに突撃する。また、先ほど放った春雷でできた爆煙が止むと、そこには灰色から鮮やかな色に変わったカオスたちが佇んでいた。

簪「やっぱり、雷真のストライクのようなビームライフルと違って、そこまで有効打にはなっていないみたい」

刀奈「それでも、ダメージが入っているなら構わないわ」

シャル「そうだね。簪は引き続き、カオスたちに荷電粒子砲を当てて。この中で、簪だけがカオスたちにダメージを与えられるから」

簪「分かった」

刀奈たちの作戦は接近戦で刀奈とシャルロットがカオスたちと交戦し、隙ができたら簪が荷電粒子砲でカオスたちのV P S 装甲ヴァリアブルフェイズシフトを超えてダメージを与えていく作戦である。

刀奈「お前たちは、雷真の仇！」

シャル「だから、僕たちが墜とす！」

刀奈「ハアアアアッ！」

シャル「ヤアアアアッ！」

刀奈とシャルロットがカオスたちに近接攻撃を仕掛けようとする。カオスたちのツインアイが輝き、カオスとセイバーが二人の前に躍り出る。

そして、私の蒼流旋をカオスが、シャルロットちゃんの近接ブレードをセイバーが、腕で受け止め、反対側の拳で攻撃してくる。

刀奈「盾で受け止めるまでも無い……。そう言いたいのか、お前た

ちは！」

刀奈「嘗めるなああああ!!」

私は完全に頭に来たので右手に蒼流旋、左手に蛇腹剣を握り、カオスに突撃する。

シャルロットちゃんは近接ブレードを拡張領域パススロットに仕舞い。新たにシヨットガンを二丁取り出し、セイバーに放つ。

刀奈「この、この、この、このオオオオ！」

槍と剣で連続の突き攻撃を繰り返すがカオスはそれを全て盾では無く腕で受け止める。

刀奈「くそっ！（このままじゃ、全然ダメージが与えられない!）」

カオスにダメージを与えられないことにイライラしていると簪ちゃんから通信が来る。

簪「お姉ちゃん、離れて!」

簪ちゃんの指示でカオスから離れるとシャルロットちゃんが誘導してきたのかセイバーの位置とカオスの位置が一つに纏まり。そして……………。

簪「当たって!」

簪ちゃんの打鉄式から放たれた荷電粒子砲がカオスとセイバーに当たる。

その時、私の視界にはある物が映った。それを確かめるために私は浜辺の波打ち際に向かう。

シャル「刀奈？」

刀奈「……………」

波打ち際に着くとそこには……………。

刀奈「これは雷真のビームライフルとシールド。それにソードの剣……………」

何故か分からないけど、撃墜されたはずのストライクの武装である。ビームライフルとエールストライカーの対ビームシールドとソードのシュベルトゲベルが浜辺の波打ち際に漂着していた。なので、それを直ぐに拾いあげる。拾い上げているとシャルロットちゃんの声が聞こえる。

シャル「簪!?!」

刀奈「簪ちゃん!?!」

シャルロットちゃんの声で簪ちゃんを見ると人型から変形したのか戦闘機のような形に変わったカオスとセイバーが簪ちゃんを襲う。

—お願い、雷真。私に力を貸して!—

私はビームライフルを手に取りながら願った。すると目の前にあるメッセージが表示された。

【ビームライフル active】

刀奈「雷真……ありがとう」

私はビームライフルをカオスたちに向けて放つ。

刀奈「行けええええええ！」

私が放ったビームはカオスの爪の様な部分に命中した。するとカオスとセイバーは簪ちゃんから離れる。

シャル「今のは………？？」

簪「お姉ちゃん………？」

刀奈「簪ちゃん、大丈夫？」

簪「う、うん。でも………それって………」

簪ちゃんとシャルロットちゃんは私が手に持つビームライフルを見て驚いているようだ。

刀奈「これは雷真が残した物よ」

簪「雷真が？」

刀奈「だから、受け取って！」

私は簪ちゃんたちに近付いて、対ビームシールドを簪ちゃんに、シュベルトゲベルをシャルロットに投げ渡す。

簪「雷真………」

シャル「雷真………」

刀奈「さあ、行くわよ！」

「うん！」

カオスたちの装甲に対する武器を手に入れたことにより、カオスたちも本気になりビームライフルを私たちに向ける。

刀奈「ここからが正念場ね」

次第に熾烈を極めて行く、カオスとセイバーの二機との戦闘。しかし、この二機以外に、もう二機居ると考えると絶望的だが、彼は………雷真はそんな絶望の中、私たちを生かすために戦ったんだ。

だから、雷真の妻である、私たちがここで諦めたら天国にいる雷真やお母さんに顔向けができない。

刀奈「デエエイツ！」

カオスは私が相手を、簪ちゃんとシャルロットちゃんはセイバーの相手を今はしている。

カオスから放たれる赤と白の混ざったビームは全て回避して、緑のビームは蛇腹剣にナノマシンで海水を纏わせて相殺する。

たまにビット兵器が襲いかかってくるがそれもナノマシンで防ぎ、一つ一つ丁寧にビームライフルで落としていく。

刀奈「これでラスト！」

最後のビット兵器を墜とすと、それによりできた隙にカオスがまさかの瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速を使って私の首と右腕を掴んで来た。

刀奈「かひゅっ!?!」

簪「お姉ちゃん!?!」

シャル「刀奈!?!」

首を掴まれた私は、瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速の加速力で掴まれたことにより

ビームライフルと蛇腹剣を落としてしまう。また、カオスは私を殺そうと首を絞め始め息が出来なくなる。

刀奈「ああ……ああ……！」ジタバタ

簪「お姉ちゃん！」

シャル「くそつ、邪魔だよ！」

二人は私を助けようと此方にやってくるがセイバーがそれを邪魔して思うように来られないみたいだ。

また、SEもカオスによってドンドン削られていく。

そして、残り僅かになった。

刀奈「ぐう……ああ……！」

こんな所で、何も出来ないで私は死ぬの？

雷真を……大切な人を殺した仇も討てないで？

私が死んだら次は簪ちゃんとシャルロットちゃんなのかな？  
せつかく、雷真が命懸けで守ってくれた命なのに……。

刀奈「……ゴメン……ネ……ライシン」ポロポロ

私は意識が遠退いて行く最後に力を振り絞り、雷真に謝罪の言葉を残した。

すると私の頭の中にある声が響いた。

——刀奈アアアア!!——

ザンツ！

その声と音が届くとカオスが締めている息苦しさと喉の圧迫感がなくなる。

刀奈「カハツ、ケホツ、コホツ！」

簪「お姉ちゃん、大丈夫?!」

シャル「刀奈、大丈夫?!」

刀奈「ええ、私は大丈夫。でも、一体何が……………」

私は何故、助かったのか理解出来ないで居た。

簪「お姉ちゃんを助けたのは……………」

シャル「新しい未確認ISだよ」

刀奈「えっ？」

二人が見ている先を息を整えながら見るとそこには蒼い翼を背中に生やした……………」。

刀奈「天使……………」?

## 第30話

く刀奈たちが出て少し経った頃く

とある宇宙に宇宙服を着た青年が一人、漂っていた。

雷真「ん、んく……………ここは？」

雷真「そうだ、俺はゲートをぐぐって……………フリーダム！」

俺は慌てて辺りを見渡すとどうやら宇宙に居るようでアークエンジェルから乗ってきたフリーダムを探すが見当たらない。

なので、もしかしたらと思いき首元を探ると案の定。パイロットスーツの中に入れていたはずの蒼い羽の首飾りがパイロットスーツの外に出ていた。

雷真「ということは……………俺は元の世界に戻ってきたのか？」

雷真「取り敢えず、地球に行かないと」

雷真「フリーダム、起動！」

くBGM：ミーティアく

首飾りを握りながら『起動！』と念じると慣れた感覚でフリーダムが俺の身体を覆う様に展開された。

雷真「地球の座標は……………こつちか！」

フリーダムのレーダーを確認しながら地球へと向かう。地球の衛星軌道付近になるとフリーダムのレーダーに熱源照合がされた。

何故、こんな離れているのに照合されたかは分からないが照合され



たのは刀奈たちの霧纏ミステリアス・レイディの淑女、打鉄式式、ラファール・リヴアイブ・カスタムの三機だ。

雷真「刀奈たちは、もうカオスたちと戦ってるのか!？」

俺は直ぐにフリーダムで大気圏突入態勢に入る。

また、大気圏に突入する際、地球の花月荘に居るであろう、織斑先生たちに向けてフリーメツセージを送る。

雷真「座標誘導システム起動、姿勢制御システム起動、排熱、冷却システム起動!」

フリーダムで大気圏突入しながらフリーダムに搭載されている全ての大気圏突入用システムを起動させてからラミネートアンチビームシールドを構え、背中のスラスター翼を広げ、ハイマツトモードにする。

(※以後、ラミネートビームシールドと省略。by作者)

雷真「間に合ってくれ!」



雷真が大気圏に突入している頃。花月荘の作戦室では、無断でシルベリオ・ゴスペルとカオスたちに向かったIS学園の専用機持ちに真耶が必死に連絡を取ろうとするが通信が繋がらない。

真耶「まだ、通信は回復しないんですか!」

千冬「無駄だ。恐らく連中の方で切っている」

真耶「ですが！」

東「ちーちゃん！カオスとかいうISに向かった専用機持ちの子のSEが危険域に入るよ！」

千冬「なに!?!」

千冬「周辺の封鎖中の職員に救出命令を出せ！」

千冬が指示を出したのと共に作戦室のレーダーに新たな未確認ISの反応が出る。

東「ちーちゃん、ちーちゃん！」

千冬「今度はなんだ！」

東「新たに未確認ISの反応だよ！」

千冬「なんだと!?!」

東「それに……………コイツ、宇宙から単独で大気圏を降下してるよ！東さんでも、単独で、ましてやこんな高速で大気圏内を突入できるISは作ってないよ！」

千冬「東がたどり着けていない性能のISだと……………?」

千冬と東は単機で大気圏内を降下する未確認ISに驚いていると真耶からの口からまた驚くべきことを聞かされる。

真耶「先輩、その未確認ISからフリーメツセージです！」

千冬「読み上げろ！」

真耶『我、黒牙雷真。現時刻を以て前線に復帰する！』とのことです……………先輩、これって！」ポロポロ

千冬「黒牙……………本当にお前なのか？」



高速で大気圏を無事に通過するとフリーダムのレーダーを頼りに刀奈たちの所へ向かいながらフリーダムにかかる地球の重力や海風などをフリーダムのメインシステムで適切な状態にする。

雷真「これで行ける！」

システムの調整が終わるとイグニッション・ブースト瞬時加速を連続で使用する。また、フリーダムの通常飛行速度は明らかに箒の紅椿を凌駕している。

雷真「見つけた！」

地球に降りて約10分ほどで刀奈たちをフリーダムのハイパーセンサーで目視できる距離までたどり着いた。

また、最悪の事態になる前に間に合ったと思った。その時、カオスがイグニッション・ブースト瞬時加速で刀奈の首をつかんだのだ。

雷真「!!」キュパーン

それがトリガーになったのか俺の頭の中で何か割れ、思考がクリアになり、ダブル・イグニッション・ブースト二段階瞬時加速を使い、刀奈の首を掴んでいるカオスの右腕をフリーダムの腰に搭載されているラケルタビームサーベルで切り落とす。

雷真「刀奈アアアア!!」

カオスは右腕を切り落とされると一度後退し、セイバーと共に此方の様子を見ている。

刀奈「カハツ、ケホツ、コホツ！」

簪「お姉ちゃん、大丈夫?!」

シャル「刀奈、大丈夫?!」

刀奈「ええ、私は大丈夫。でも、一体何が……………」

刀奈は首を絞められていたがそこまで強くなかったのか無事の様だ。

簪「お姉ちゃんを助けたのは……………」

シャル「新しい未確認ISだよ」

刀奈「えっ?」

刀奈は息を整えて俺を見ると、こう口にした。

刀奈「天使……………」

雷真「……………」

良かった、無事で……。さて、俺の大切な奴らをいたぶつてくれた礼をしなくちゃな。

カオスとセイバーに向かう前に手が空いている刀奈にラミネートシールドを渡す。

刀奈「これは?」

雷真「……………」

刀奈「ちよつと!?!」

俺は無言でカオスたちに向けてスラストを噴かせて刀奈たちをいたぶつてくれた礼をすることにした。

雷真「お前ら、生きて帰れると思うなよ!」

右手に持っているラケルタビームサーベルを一度戻して後ろ腰にマウントしていたルプスビームライフルを取り、左手ではラケルタ

ビームサーベルを引き抜き、近接戦と銃撃戦を両方行う。

また、カオスは腕が使い物にならないと分かるとM<sup>モビルスーツ</sup>S形態からM<sup>モビルアーマー</sup>A形態へと変形する。

雷真「そこっ！」

ハイマツトモードで高速移動しながらルプスビームライフルでよく狙いながら撃つが思うように当たらない。

雷真「まだ、俺がフリーダムに慣れてないからか……なら！」

性能に慣れてないなら技術で補うまで！

ストライクの時には出来なかった、<sup>フレキシブル</sup>偏向射撃を使う。するとセイバーの左足に当たる。

雷真「よし！」

フリーダムの危険アラームが鳴り、後ろからカオスがビームクローで当てに来ることが分かったので、その場でバク転宙返りをしてカオスの後ろからラケルタビームサーベルで縦に真つ二つにして撃墜。

雷真「まずは一機。次！」

カオスを撃破すると下から複数のビームが飛んできたので全て回避する。回避に成功すると左手で持っているラケルタビームサーベルを右腰に付いているもう一本のラケルタビームサーベルの連結させてアンビデクストラス・ハルバードにする。

雷真「海から……なら、アビスか！だったら、これで！」

ラケルタビームサーベルをアンビデクストラス・ハルバードへと連

結させた後、態勢を持ち直し海面に向けてルプスビームライフル、バ  
ラエーナプラズマ収束ビーム砲二門、クスイファイアスレール砲二門を  
ハイマツト・フルバーストする。

雷真「当たれえええつ！」

フルバーストを連射していると少し先の海面で何かが大きく爆発  
し、フリーダムのリレーダーからアビスの熱源が消滅した。

雷真「残るは二機！」

アビスを撃破してからセイバーの方に視線を向けると今度は後ろ  
の方から危険アラームがなるので後ろを向きながら指でアンビデク  
ストラス・ハルバードを回転させて防御態勢に入る。

後ろを向き終わると複数のビームがアンビデクストラス・ハルバ  
ードに当たり弾かれる。

雷真「次はガイアか！」

右手に持つ、ルプスビームライフルを後ろ腰にマウントしてアンビ  
デクストラス・ハルバードの連結を解き、二本のラケルタビームサー  
ベルにすると緩急を付けながらガイアに向けて突撃する。

また、此方に撃つてくるビームは全て緩急を付けた高速移動で回避  
する。

そして、ガイアの前までに着くと右手に持つラケルタビームサーベ  
ルをガイアに向けて投擲し、ブラインドに使う。

ガイアは投擲されたラケルタビームサーベルを対ビームシールド  
で防ぐので、その隙にガイアの後ろに回り、後ろ腰にマウントしてい  
るルプスビームライフルを構えて撃つ。

雷真「この距離なら！」

四回ほど連射するとガイアから離れてガイアが爆発するのを見る。ガイアの最期を見届けたら次はセイバーを狙う。

因みにだが、先ほど投擲したラケルタビームサーベルは一定時間が過ぎると自動的にフリーダムスの腰にマウントされる様に設定してある。

雷真「最後はセイバー、お前だけだ！」

セイバーは俺と同じタイミングでスラスターを噴かせるとセイバーは左手肩に搭載されているヴァジュラビームサーベルを引き抜き、近接戦に応じてくる。

雷真「セヤアアアッ！」

互いのビームサーベルがぶつかるとサーベル同士の間でプラズマがバチバチと発生する。

また、互いにビームサーベルのビームが薄い部分を探すためにビーム刃の位置をずらし合う。

埒が明かないと分かったら『切り捨て御免！』のような相手を切り捨てながら走り去る様に行ったり来たりを繰り返しながらビームサーベルを交える。

そして、10回ほどセイバーとビームサーベルを交えていると、ある時、俺の視界に映る物全ての物事がゆっくりと遅く見えるような不思議な現象が起きた。

雷真「!! (なんだ、これ!?)」

その現象の中、セイバーがヴァジュラビームサーベルを上から振り下ろして来るのでそれをフリーダムスの機動性で横に反転し回避すると同時にセイバーの身体を腹から横一閃に真っ二つにする。

真つ二つにされたセイバーは俺の後ろで爆発する。

雷真「……………。(今のは一体……………)」

無事にカオス、アビス、ガイア、セイバーを倒すことに成功すると海に浮かぶカオスたちの残骸をフリーダムバーススロットの拡張領域に収納しながら刀奈たちの元へ行く。

刀奈たちの前に着くと刀奈が何故か知らないけどストライクのシユベルトゲバールを、シャルロットはサブマシンガン二丁を、簪は春雷を俺に向けていた。

刀奈「先ほどは助けて頂いた事とあの四機を撃破してくれたことに感謝します。しかし、貴方は一体何者？顔を見せてくれるかしら？」

うわー、三人ともスゲエ敵意を向けてくるよ

俺は刀奈の指示通りにフリーダムバーススロットのヘッド装甲を解除し、オーブ製のパイロットスーツのヘルメットを取る。

簪「えっ……………？」

シャル「うそ……………」

刀奈「らい……………しん？」

雷真「ただいま。刀奈、簪、シャルロット」ニッコリ

笑顔で三人に『ただいま』を言うと次第に三人の顔がグズグズの表情になり泣き出し抱きついてくる。

刀奈「らい……………しん……………雷真！」ポロポロ

簪「良かったよ、本当に良かったよ！」ポロポロ

シャル「僕たち、雷真があの四機に殺されたと思って……………」ポロポロ



雷真「悪かったな、心配かけて」

刀奈「本当よ！」ポロポロ

シャル「僕たちがどんな思いで居たと思ってるのさ！」ポロポロ

簪「あとで目一杯お説教してやるんだから！」ポロポロ

雷真「ああ、全て終わったら受けてやるよ」

### 第31話

カオスたちを撃破して、刀奈たちの前まで行き、刀奈たちに武器を向けられながらフリーダムへのヘッド装甲とオーブのパイロットスーツのヘルメットを取る。俺だということが分かった三人は泣き出してしまった。

雷真「いい加減、泣き止めよ」

刀奈「だって……」ポロポロ

簪「そうだよ……」ポロポロ

シャル「本当だよ……」ポロポロ

雷真「それより、刀奈が持つてるそれってソードの……」

刀奈「ええ、ソードストライクの武装よ。これ以外にもビームライフルに対ビームシールドも貴方がロストした孤島の波打ち際に漂着していたの」

雷真「なるほどな。刀奈たちだけがこっちにいるってことは、他の皆はシルベリオ・ゴスペルの方か？」

刀奈「そうよ。箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴ちゃん、ラウラちゃん、で福音を撃破しに行ったわ」

雷真「わかった。俺は箒たちの手助けに行ってくるから三人はゆっくりと来るといい」

シャル「ううん。僕たちは花月荘に一度戻るよ」

簪「さっきの戦闘でSEがあまりないし。なにより、お姉ちゃんの霧纏ミスティアス・レイディの淑女はSEが残り僅かだから」

雷真「なら、一度降りれる場所に移動しよう」

刀奈「何をするの？」

雷真「いいから」

俺は刀奈たちと孤島に降りてからフリーダムのSEを三人のISに譲渡することにした。

雷真「それじゃ、まずは刀奈。手を出して」

刀奈「え、ええ」

ミステリアス・レイディ  
霧纏の淑女の手を掴み、フリーダムのエネルギーを譲渡する。

雷真「フリーダム。ミステリアス・レイディ霧纏の淑女にエネルギーの譲渡を開始」

刀奈「えっ！SEが回復してる!？」

シャル「でも、そんなことしたら雷真のISのエネルギーが……」

簪「二人とも大丈夫だよ」

刀奈「簪ちゃん？今のはどういうこと？」

簪「雷真のISをストライクから抽出したデータで探してみたんだけど、その、雷真の新しいISはエネルギーの枯渇の心配はないんだよ」

シャル「エネルギーの枯渇がない？」

簪「うん。なんとたつて、雷真が乗ってる【ZGMF-X10A

フリーダム】は動力源に核を使ってるから」

「核!?!」

刀奈とシャルロットの二人は簪からされたフリーダムの動力源の説明を聞いて凄く驚いていた。

刀奈「ちよつと待って、核を動力にしているISなんて聞いたことがないわよ!？」

雷真「だろうな。なんせ、フリーダムはコスミック・イラあつち側から乗ってきて

た物だからな」

シャル「コスミック・イラあつち側って………まさか!？」

雷真「そつ。俺はストライクで墜とされた時に、またコスミック・イラあつち側の世界に行っててな。それでこっちに還ってくる時にフリーダムを貰ったのさ」

刀奈「はあく。もう、私たちの旦那様は何処まで規格外なのよ」

雷真「悪かったよ。次は簪とシャルロットも」

簪「うん」

シャル「よろしく」

簪とシャルロットの手も握って、フリーダムからエネルギーを譲渡する。

譲渡が終わるとシャルロットが刀奈から受け取ったであろう、ラミネートアンチビームシールドを受け取り、後ろ腰にマウントする。

雷真「SEの補給も終わったし、三人はゆっくりと来いよ？」

三人のSE補給が終わるとフリーダムのスラスタを一気に噴かして箒たちが居るであろう海域に向かう。

シャル「さっきの戦闘で分かってたけど……」

刀奈「やっぱり、速いわね……」

簪「マルチロックオン・システムはフリーダムの物だったんだ」

♪BGM： STRIKE 出撃!♪

刀奈たちを置いて急いで箒たちの所へ向かっていると少し先の海上で爆発やレーザー、レール砲などが行き交っていた。

雷真「あれか！」

雷真「一夏の奴……白式が第二形態に進化したのか？」

箒たちが目視できる距離までになると福音以外にもう一機。白い

ISが居たので、その機体は一夏だと理解した。

雷真「まさか、一夏まで機体を新しくするとはな」ニヤリ  
雷真「ツ!!」

一夏が強くなったことに少し笑みを浮かべていると福音が身体を捻るように回転させてエネルギー弾をばら蒔いた。

一夏「鈴!?!」

鈴「はっ!」

雷真「させるか!」

ダブル・イグニッション  
二段階瞬時加速で福音のエネルギー弾が当たる前に鈴を抱き上げて射線上から離脱する。

鈴「アンタ、一体……?」

一夏「鈴、大丈夫か!」

鈴「ええ……私は大丈夫よ。ソイツが助けてくれたから」

一夏「そうか。誰か知らないけど鈴を助けてくれて……」

雷真「礼は後で聞いてやるか今は戦闘に集中しろ、一夏!」

俺はそれだけを言い残して福音に突撃する。

一夏「今のって……!」

鈴「雷真!?!」

福音に近付きながらセシリアにオープンチャンネルで通信する。

雷真「セシリア、聞こえるか?」

セシリア「その声は……雷真さん!?!貴方、生きて……」

雷真「話は後だ。ブルー・ティアーズのビット兵器で福音を牽制し

てくれ。やれるな？」

セシリア「お任せくださいまし！」

セシリアにビット兵器で福音の動きを阻害させる。その隙に俺がラケルタビームサーベル二本を引き抜き、二刀流で福音に突撃する。

雷真「まずは翼だ！」

雷真「そこだああああ!!」

ストライクにもあつたイメージ・インターフェースを利用して俺が出来るキラの動きを再現する。

それは福音とすれ違い様に福音の背中にあるエネルギー翼を発生させる翼を切断する。

すると福音は翼を失ったことにより海面へと落ちていく。

雷真「一夏！」

一夏「任せろ！」

一夏「ウオオオオオツ!!」

一夏は落下している福音を二次移行で新たに追加された<sup>セカンドシフト</sup>ステイニーのパルマフィオキーナのような武装で近くの孤島の砂浜まで押し込み、砂浜に着くと零落白夜で止めを刺そうと雪片式型を突き立てるが福音が抵抗する。

なので俺は一夏の上から急降下して雪片式型の柄の部分を踏みつける様に真下に蹴りを入れる。それを何度も繰り返す。

雷真「一夏、そのままだ！」

一夏「分かってる！ウオオオオオツ!!」

雷真「貫け！」

一夏「貫け！」

「貫けえええええ!!」

俺と一夏の声が重なり、俺が二段階<sup>ダブル・イグニッション</sup>瞬時加速で蹴りを入れるとあまりの力により福音の抵抗を打ち破り、そのまま、深々と白式の雪片式型が福音の胴体を貫いた。

それにより、福音は完全に行動を停止した。

雷真「終わったな、一夏」

一夏「ああ。やつと、終わった」

福音が止まったことに一息着くと一夏は此方に向いた。

一夏「お前、本当に雷真で良いのか？」

雷真「この声で分かれよ」

仕方なく、フリーダムスのヘッド装甲とヘルメットを取り、顔を見せる。

すると箒やセシリア、鈴、ラウラまでやってきた。

箒「雷真、お前、カオスたちに墜とされたんじゃ……」

雷真「ああ、一度墜とされたよ」

鈴「なら、その機体は？」

雷真「この機体は”<sup>コスミック・イラ</sup>あっち側”から乗ってきた物なんだ」

セシリア「あっち側って、雷真さんが言っただけの異世界のことですの?」

雷真「それであってる」

ラウラ「つくづく、貴様は異世界に飛ばされるようだな?」

雷真「それにはどう反応していいか分からないな」

しばらく、一夏たちと話をしていると刀奈たちがやって来て、福音を回収してからIS学園の皆が待つ、花月荘へと帰る。

花月荘に着く頃には太陽が昇り、朝になっていた。

そして、花月荘に到着したのでフリーダムを解除すると俺の身体力がガクリと抜け、倒れそうになる。

雷真「うおっ!?!」

刀奈「雷真!?!」

簪「雷真!?!」

倒れそうになる俺を昔と同じように刀奈と簪が支えてくれた。

雷真「悪い。やっぱり、宇宙から大気圏を突破してきたから身体がいうことを聞かないみたいだ」

刀奈「なら、私たちに任せなさい」

簪「任せて」

雷真「すまない」

二人に支えられながら花月荘の入り口に行くと、そこには織斑先生と山田先生が俺たちを待っていた。

一夏「千冬姉……」

雷真「織斑先生に山田先生……」

千冬『『作戦完了!』』と言いたい所だが黒牙を除いたお前たちは重大な違反を犯した」

「「「はー……」」」

千冬「帰ったら直ぐ、反省文の提出だ。懲罰用の特別トレーニングも用意してあるから、そのつもりで居ろ」

摩耶「あ、あの……織斑先生。もう、そろそろこの辺で……皆、疲れてるはずですし。何より黒牙くんを休ませてあげないと」

千冬「しかしまあ……よくやった」



「「えっ……っ？」」

千冬「全員、特に黒牙、よく帰ってきた。ゆっくりと休め」

まさかの織斑先生からお褒めの言葉をもらって俺たちは解散し、朝食になるのだが。やはり俺は大気圏突破の影響で身体の筋肉が悲鳴を上げ、自分の力ではまともに飯を食えないので刀奈に部屋で食わせてもらうことになった。

刀奈「はい、あくん」

雷真「あくん」

雷真「うん。美味しい」

刀奈「良かった。ところ、あのフリーダムは本当に核を動力としてのの？」

雷真「ああ。だから、フリーダムのエネルギーは無尽蔵に精製される。それにパワーはストライクの四倍だ」

刀奈「四倍!?!」

雷真「だから、その分、フリーダムの機動性も上がるから扱いがまだ慣れないんだよ。それにあの時に見せた目を覚えているか？」

刀奈「ええ。あの据わったような目ね」

雷真「あれはSEEDと呼ばれていて、所謂ゾーンみたいな物なんだけど、それを使っても上手く扱えなかったから学園に戻ったら特訓しないとな」

刀奈「あまり無茶はしないでよ？今回みたいに雷真が居なくなるなんて私たちは嫌だからね」

雷真「分かったよ。もう、あまり無茶はしないよ。お前たちの涙や悲しむ顔は見たくないからな」

刀奈「約束よ？」

雷真「ああ、約束だ」

こうして俺たちの波乱の臨海学校は終わりを告げた。

とある施設である男がモニターを見ていた。

??? 「よもや、ザクやグフのみならず、カオス、ガイヤ、アビス、セイバーまで撃破されるとは……」

??? 「全く、君も本当に彼や奴と同じで私の邪魔をしてくれるものだ」  
「ストライク、ムウ・ラ・フラガ、フリーダム、キラ・ヤマト」  
??? 「いつか私と戦う運命にあるのかな？この世界のキラ・ヤマトである、クロキバ・ライシンくん？」

その男は椅子の背凭れに身体を預けながら顔に出来た傷を撫で高らかに笑い始めた。

また、男が見ていたモニターの横にあるもう一つのモニターがあり、そのモニターにはある機体の状態と名前が載っていた。

その名は……………【ZGMF-X666S レジエンド】

???  
「フツハハハハハハ!!」

## 第32話

臨海学校の『福音暴走』ならびにZ A F Tの『モビルスーツM S I S襲撃』の事件が終わり。無事、I S学園に帰ってくると、俺はまずメデイカルチエックをされることになった。

摩耶「はい。これでおしまいです」

雷真「ありがとうございます」

俺はメデイカルチエックをする検査機から降りて制服を着る。そして、検査機が置いてある部屋から出て、織斑先生と山田先生が居るところに行くところがあることを聞かされた。

摩耶「黒牙くん。少しいいですか?」

雷真「なんですか?」

摩耶「これは本当なら前例がないことなのですが、黒牙くんのI S適正が上がってるんです」

雷真「I S適正が?」

千冬「黒牙のI S適正は元々AランクだったのがSランクに上がっている」

雷真「AからSに………あっ!」

千冬「どうした?」

雷真「前にカオスたちを撃破する時に妙な感覚に襲われて」

千冬「妙な感覚?」

雷真「はい。相手の動きというよりも視界に映る全ての動きが遅く感じたんです。その時は今とは違ってS E E Dを使ってみました」

千冬「ふむ……。山田くん、黒牙の女三人を呼んでくれ」

摩耶「わかりました」

少ししてから山田先生が呼んだ、刀奈、簪、シャルロットの三人が来た。

刀奈「織斑先生、私たちを呼んだのは……?」

千冬「黒牙のIS適正が上がった」

刀奈「IS適正が!?!」

簪「そんなことが……」

シャル「これって前例がないことですよね?」

千冬「ああ。それに黒牙はカオスたちとの戦闘時に妙な感覚に襲われたようだ」

刀奈「妙な感覚?」

千冬「視界に映る物全ての動きが遅く感じたそうだ」

「「えっ!?!」」

千冬「黒牙のことだからお前たちには知らせておこうと思ってな」

刀奈「そうですね、ありがとうございます」

千冬「黒牙、悪いが今度はSEEDを発動しながら検査機に入れ」

雷真「分かりました」

俺はもう一度、検査室に入り、検査機の前で意識を『守る』に集中させて、検査機に入る。

雷真「……………」キュパーン

千冬「準備はいいか?」

雷真「はい」

SEEDを発動したままで検査機で検査すると隣の部屋にいる山田先生の声がマイクで伝わってきた。

摩耶「なんですか、これ!?!」

千冬「IS適正値エラー、計測不可能だと……?」

雷真「はあ？」

雷真「はあああああ!？」

俺は慌てて検査室から出て、自分の検査結果を見る。そこには、先生たちが言うようにIS適正の欄だけがエラーになっていた。

雷真「これってどういう……」

刀奈「多分、雷真がSEEDを発動している時はISとのシンクロ率が検査機では計れないくらい最大値まで上がるんじゃないかしら？」

千冬「更識姉が言った、それが妥当なんだろうな」

雷真「まあ、取り敢えずは早朝特訓や放課後の特訓で試してみます」

千冬「うむ。また、何かあつたら必ず報告しろ」

雷真「わかりました」

千冬「次に、黒牙。お前の新しい機体を見たい」

雷真「いいですけど、こいつは織斑先生たちからしたらストライクよりも厄介な代物ですよ」

千冬「なに？」

雷真「取り敢えず、はい」

首から待機状態のフリーダムを織斑先生に手渡して少し経つと、ストライクの時よりも寝れた顔のまま俺にフリーダムを返した。それから寮に戻り、部屋に入るとそのままベッドへダイブする。

雷真「くはー、疲れた」

雷真「それにしても、あの時の現象はフリーダムと俺のシンクロ率が最大値に上がっていたからと刀奈は言ってたけど。本当のところはどうなんだろう？」

俺は首に掛けている待機状態のフリーダムを握りながら仰向けで目を閉じ、意識をフリーダムに集中する。

しかし、いくらやつても何の反応や変化というかフリーダムの声の  
ような物は聞こえて来なかった。

雷真「コスミック・イラ あつち側」にいた時はこつちに還ってくるゲートの座標が  
リーダーに表示されたけど、流石に還ってきちゃったら何の反応もな  
いか」

雷真「あつ！そういうえば、ハロのことを忘れてた」

”コスミック・イラ あつち側” から還る時に更衣室でメイリンがアスランから俺へ  
の贈り物と言って白いハロを渡して来たのを忘れていた。  
こつち側に還ってきた時にはなかったのでフリーダムの拡張領域パススロット  
を調べるとカオスたちの残骸以外にハロが入っていた。

雷真「ハロ、起動」

ハロを音声起動させると丸くなった状態でゴロゴロと動きだすと、  
耳をパタパタと出してからボールのように弾みだした。

ハロ「ラアアアイシン！」

雷真「アスランと同じ呼び方かよ!?!」

ハロ「ライシン、gift to you！」

雷真「俺に?」

ハロがそういうとベッドの上に跳ね乗り、俺の元へ来ると口の部分  
からパカッと音を立てながら一本のUSBメモリーを見せてきた。

雷真「なんだこれ？」

ハロの中からメモリーを受け取り、差出人の名前を探すが表にも裏  
にも書いていない。

なので部屋に備え付けられているパソコンでUSBメモリーを解

析するとそこには懐かしい物が映っていた。

雷真「うっわー、懐かしい」

その映っていた物は俺が”コズミック・イラあつち側”に飛ばされた時から還ってくるまでの四年間の写真が大量に詰まったデータだった。キラ、アスラン、ラクス、カガリ、シン、ルナマリア、メイリン、ミリアリア、サイ、カズイ、トール、フレイ、マリユー、ナタル、バルトフェルドなど、今まで俺が関わってきた人たちの笑顔が映っていた。

雷真「本当、懐かしいな……」

思い出に浸っているとドアがノックされた。

雷真「はーい」

刀奈『雷真、私。刀奈よ。入ってもいいかしら?』

雷真「ああ、開いてるから勝手に入ってくれ」

そういうと直ぐに入口からガチャリとドアノブが回る音が聞こえてきた。すると、どうやら刀奈一人ではなく、複数の足音が入ってきた。その複数の足音の正体は簪、シャルロット、本音、虚さんのようだ。

刀奈「雷真、何を見てるの?」

雷真「これか?これは俺の大切な思い出だ」

本音「思い出って、ライライが行方不明になってた時の?」

雷真「そうだ。お前たちも見るか?」

簪「見ていいの?」

雷真「いいに決まってるだろう?」

シャル「じゃあ、遠慮なく」



俺は一度、机からキッチンへと行き、蛇口から水をポットに入れて湯沸し器にセットしていると婚約者三名と従者二名が食い入るように俺の思い出を見ていた。

刀奈「この頃の雷真はまだ、あの時と同じね」

簪「でも、お姉ちゃん。この時からはずいぶん成長してるよ？顔付きだって」

本音「ホッホーウ、どれもライライの近くに綺麗なお姉さんが写ってるね」

本音のその言葉で俺の部屋の空気がピシリと凍りついた気がした。

刀奈「そうね。言われてみれば」

簪「だね」

シャル「確かに」

雷真「え、えつと……その事に関してはどうか、そこに写ってる奴らのことは後で説明するから、な？」

そうして、何とか三名の般若を出さない様にしてオリジナルブレンドのコーヒーを窓際にあるクツション椅子に座り楽しむ。コーヒーを飲み終わると五人に”あつち側”<sup>コズミック・イラ</sup>の仲間のことを話す。

雷真「えーつと、コイツがキラ・ヤマト。ストライクとフリーダムの元パイロットだ」

簪「ストライクとフリーダムの？」

シャル「じゃあ、キラさんの今の機体は？」

雷真「それはフリーダムの後継機でキラの専用機として製造された

【ZGMF-X20A ストライクフリーダム】だ」

簪「ストライクフリーダムって、これ？」

簪は空間ウィンドウを開き、ストライクフリーダムのデータを表示

した。

雷真「そう、それ」

刀奈「へえー……って！何よ、この機体!？」

シャル「臨海学校の四機よりも遥かに高性能の機体じゃない!？」

雷真「おい、シャルロット!」

シャル「あつ………」

本音「なにになに？臨海学校の四機って何?」

雷真「本音、このことには深く関わるな。絶対に後悔することになるからな。虚さんも覚えておいてください」

虚「わかりました」

本音「それで、ライライの新しいISもいずれは、このストライクフリーダムって奴に進化するの?」

雷真「可能性は無くもないな。けど、ISが進化する時はパイロットに合わせて進化するからな」

刀奈「だとすると、雷真の場合は特別な進化というか……乗り換えただけよね?」

雷真「そうでもないぞ?」コスミック・イラ「あつち側」に飛ばされた時、羽の首飾りは色を失っていたしな」

虚「色をですか?」

雷真「ええ。白だったはずのコイツは灰色に色褪せてましたから。それで、キラたちに最高軍事機密の施設に連れていかれたら」

俺は首にかけている待機状態のフリーダムを見せる。

簪「本当だ。白から青に変わってる」

刀奈「じゃあ、そこに【ZGMF-X10A フリーダム】があつたって訳ね」

雷真「そう、フリーダムは一度墜とされたはずなのにそこにあつたんだよ。なんでも、俺が所属してたオーブ連合首長国代表とZAFТの代表が回収し復元したらしい」

刀奈「なんとも好都合なことね。でも、お陰で雷真が還って来られて良かったわ」

雷真「そうだな」

その後もパソコンに映っているメンバーの紹介していると、刀奈、簪、シャルロットの三人はアスラン、イザーク、ディアツカが元々乗っていた機体を聞いて凄く驚いていた。

雷真「まあ、こんな感じかな」

刀奈「私たち、よく生きてたわね」

簪「……………うん」

シャル「雷真の説明を聞いちゃうと雷真が居てくれたことが改めて有り難く感じるよ」

雷真「そんな大層なこととはしてないさ。俺はただ、大切な人を守りたかった、それだけだよ」

大体、説明が終わると時刻は夕食の時間になっていたので6人で食堂へ向かうことにした。

食堂に向かうと一夏と一夏ハーレムメンバーが勢揃いしていた。

一夏「おっ、雷真！」

雷真「よう」

一夏「検査はどうだった？」

雷真「まあ、筋肉の衰え以外は別に異常無し。他には何かIS適性のランクが上がったらしい」

一夏「へえー、そうなの……」「はあああああ!」「……………な、なんだよ?」

鈴「なんだよ、じゃないわよ!」

セシリア「そうですね、一夏さん!本来、IS適性が上がるなんて前例は存在しませんのよ!」

一夏「でも、現に雷真がいるじゃないか?」

ラウラ「それがおかしいと言っているのだ、嫁よ！」

一夏「は、はあ……」

刀奈「皆が驚くのは仕方のないことよね。幼馴染で婚約者である私と簪ちゃんできえ驚いたもの」

簪「うん」

シャル「幼馴染ではないけど、婚約者としては僕も驚いたよ」

鈴「やつぱり、雷真は規格外な奴ね」

本音「まあ、ライライだから仕方ないよね」

箒「それで納得してしまう、私たちも私だ」

俺と一夏以外の女性陣は箒のその言葉でため息を吐いた。

なんで？ 解せぬ。(´・ω・｀)

### 第33話

メデイカル検査を受けてから、はや一週間が過ぎて現在は8月、時刻は朝の8時。学生である俺たちは夏休みのはずなのだが俺は例外だ。

千冬「それでは、黒牙中尉。職員の訓練を頼んだぞ」

雷真「了解」敬礼

織斑先生の頼みで、もしも仮にまたカオスたちのようなM<sup>モビルスーツ</sup>S型のISが現れた時に俺一人では対処できる数ではなくなった場合に備えてフリーダムでIS学園の職員と実戦訓練を行うことになった。

また、刀奈と簪は日本代表と日本代表候補のため、学園を離れている。なんでも、姉妹で歌の収録があるのかなんとか。

シャルロットは本国に一度帰国してもいいのだが、親とは最悪な仲だから俺と一緒に訓練に参加。

一夏たちは、一夏が補習のためレポート作成。箒は剣道場で竹刀を振っているとか。セシリアは鈴と特訓。ラウラは一時帰国、以上。

雷真「それでは皆さん。いきなり実戦をやると流石に戸惑うと思うので、同じクラスの本音さんと整備科の人たちに協力して用意してもらった。特製武器を使ったゲームをします」

本音を含めた今回の訓練のために特製武器を用意してくれた整備科の生徒には、ある店のスイーツ無料食べ放題のクーポンを渡して懐柔した。

職員「ゲームですか?」

雷真「そうです。ルールは簡単、この特製のペイント弾が入った射撃武器とペイント液が塗られてある近接武器で俺のことを当ててください。それも全員で」

職員「「「!?」」」

俺の『全員で』の言葉にアリーナに総勢30名の職員が驚きを露にした。まあ、そうだろうな。なんたって1対30なのだからな。しかし、俺はそれ以上の敵と”あっち側”コスミック・イラでは殺りあつたことがあるから問題ない。

それにカオスたちの一件以来、どうやら戦争当時の感覚が完全に戻つたようで、どうも一夏との特訓の時も少々やらかしてしまふ。

すまん、一夏。(≡人≡;)

雷真「それでは準備が出来次第、始めるので準備をしてください。あつ、それともう一つ。俺はフリーダムに搭載されている射撃武装は一つも”撃たない”ので」

シャル「……………。(射撃武器を撃たないだけで絶対に切つたり、構えたりするってことだよな)」苦笑

職員「そ、それなら……………」

職員「い、行けるかも……………」

雷真「他にも、もしも当てることが出来た先生方には俺からご褒美があります。そのご褒美とは、高級ホテルのスィーツ食べ放題チケットです」

この言葉を聞いた職員たちの目がギラリと変わりやる気に満ちた目になった。特に山田先生から獲物を狩るような視線が感じられる。

雷真「それでは準備が出来たらゲームを行います。では、準備をしてください」

職員「「「はい」」」

それから職員たちは打鉄やラファール・リヴァイブに搭乗して整備科の生徒が用意したペイント武装を手取る。

雷真「それでは準備ができましたね？」

俺の問いに全員が頷く。

雷真「それでは………本音、開始の合図を頼む」

本音『はいはい。まっかせて〜』

本音『それじゃあ、訓練………か〜いし!』

本音の合図で職員たちは一気に攻めてくるのでフリーダムの機動力やら武装の威力やらエネルギーやらセーフティをかけた状態で最大限出せる能力を使い、全ての攻撃を緩急をつけた飛行で回避する。

職員「当たらない!？」

職員「それに何よ、あの速さ!？」

職員「早く、回り込んで!」

それから30分間ほどはずっと逃げるだけの簡単な作業を繰り返す。職員は連携や元々練っていた行動パターンを駆使し俺を追い込んでみるが全てが失敗に終わっている。

雷真「じゃあ、そろそろ始めようかな」



シャル「あの動きで、機動力に3割。それに加えて、ビーム兵器に7割に、他にも動力源にまでセーフティをかけてるなんて………」  
シャル「あつ、雷真、もうやるつもりでいる」

僕は雷真の動きを見て、そう口に出す。すると隣で一緒に雷真と職員  
員の訓練を見ている山田先生が質問をしてくる。

真耶「デユノアさん、黒牙くんは何をやるつもりなんですか？」

シャル「まず、雷真が訓練を始める前になんて言ってたか、覚えて  
ます？」

真耶「確か、黒牙くんは専用機であるフリーダムの射撃武器は撃た  
ない……………」

シャル「そうです。その言い方をズルい様に言い換えると、撃ちは  
しないが構えたり、殴ったり、切ったりすると言うことなんですよ」

真耶「え……………」

真耶「それって屁理屈じゃないですか!？」

シャル「僕もそう思いましたが、雷真曰く……………」

『戦争は騙し合いが常だ。弾切れと見せかけて、ここぞという時に  
撃つてくる。だから、常に敵を疑え、疑いを解く時は敵が死んだ時だ  
けだ』

……………と言っていました」

真耶「常に敵を疑え、疑いを解く時は敵が死んだ時……………黒牙く  
んが言うとその言葉は重く感じますね」

シャル「そうですね。雷真は四年間で二回も戦争を経験している訳  
ですから」

フリーダムの射撃武器を撃たずに構えたり、ビームサーベルで弾を  
切ったり、シールドで殴ったりしている雷真を見て、僕と山田先生は  
雷真から言われた言葉を胸に刻むことにした。





【ピピピピピピッー】

雷真「はい、そこまで！15分間の休憩を挟みます」

セットして置いたタイマーがなったので一度、休憩を入れることにした。すると、職員30名全員がその場で座り込んだり、仰向けに倒れたりする。

シャル「お疲れ様、雷真」

雷真「サンキュー」

シャルロットがスポーツドリンクとタオルを持ってきてくれたのでフリーダムへのヘッド装甲とオーブのヘルメットを拡張領域バズスロットにしま  
う。

シャル「ねえ、雷真。ヘルメットは着けなくてもいいじゃない？ここは地球なんだし」

雷真「そうだな。言われてみれば、ヘルメットやパイロットスーツとかを着る必要はないんだよな。こりや職業病だな、あはははは」

シャル「あはははは、つて……。 (それよりもヘルメットを被って、あの動きって……)」

シャルロットと二人で話していると前半の職員に飲み物やタオルを渡し終えた山田先生が此方にやってくる。

真耶「黒牙くん、お疲れ様です」

雷真「お疲れ様です」

真耶「黒牙くんから見て、我が校の職員はどうですか？」

雷真「それはIS操縦者としてなのか、それとも戦争を経験した一人の軍人としてなのか、どっちの答えが欲しいですか？」

真耶「……できれば、両方で」

山田先生は一度考えてからそう口にした。

雷真「では最初に、IS操縦者としての意見としては中々の物だと思えますよ？自分もまだISを動かして半年も経ってないので」

雷真「次に軍人としての意見は……………今のままだと確実にIS学園は墜ちますね」

真耶「……………」

雷真「これがもしも仮に”あつち側”コスミック・イラなら俺でなくとも30人全員を殲滅。時間にして10分もかかりませんよ」

真耶「そんなにですか……………」

雷真「ええ。まず、IS操縦者はSEと絶対防御に頼り過ぎている。そして、ないとは思いますが俺が何者かに弱味を握られてたり、あるいは洗脳された場合。この学園に俺を止められるのは織斑先生くらいですね」

真耶「そうですね。それを言われてしまうと何も言い返せません」

雷真「ですから、俺が学園を卒業するまでにSEEDを使わせるま  
でになってください」

真耶「そ、それは厳しいですよ……………!?!」

シャル「僕もそう思うよ……………」

雷真「まあ、それくらい頑張ってほしいってことだよ」

シャルロットと山田先生にウォーミングアップの感想を言っ  
てから、次の訓練に移行するために休んでいる職員の人たちに声をかけ  
る。

雷真「それでは5分後に実戦式回避訓練を行います。皆さんは回避  
することだけに集中してください」

職員「回避だけ……………ですか？」

雷真「そうです、回避だけです。整備科の皆はこれから忙しくなる  
から準備をよろしく」

俺の言葉に整備科一同は頷いて返答してくれた。

そして、回避訓練に移行したら、まず俺はフリーダムのマルチロツクオン・システムを使い、ハイマツトフルバーストで職員たちを狙い撃つ。すると職員たちから悲鳴が次々と上がる。

職員「な、何よ、これえええええ!!」

職員「いやいやいやいやいやー!」

職員「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬー!」

雷真「ほら、頑張ってください」ニコニコ

シャル「……………。(雷真、鬼だ)」

真耶「……………。(黒牙くん、鬼ですね)」

雷真による地獄の訓練は時間が経つにつれて熾烈を極めていく。雷真の訓練を受けた職員は午後の仕事で役に立たないほど疲弊したそう。

時と場所が変わり。訓練を終えた雷真は千冬と真耶と共にIS学園の秘密区画の中のIS整備場に来ていた。

また、三人の目の前には臨海学校で雷真が撃破し、残骸を回収した【ZGMF-X88S ガイア】、【ZGMF-X24S カオス】、【ZGMF-X31S アビス】、【ZGMF-X23S セイバー】の四機が並んでいる。

千冬「それで、黒牙。この四機や他の未確認ISについて何か分かったか？」

雷真「どうやら、この四機とフリーダムにはISとは異なるコアが

組み込まれていることがわかりました」

千冬「なに？」

雷真「臨海学校で自分がまだ」コスミック・イラ「あっち側」にいた時に刀奈たちがストライクの武装を使っていたようなので、その解析をしていたら。その時に、篠ノ乃東が作ったISコアとは異なった代物だということがわかりました。なので、ISコアと異なったコアを《MモビルスーツSコア》と名付けました」

雷真「他には、これといって……、分かったのは臨海学校で現れた、ザク、グフにはカオスたちの様なコアはなくバッテリーで動く仕組みと、やはり、”コスミック・イラあっち側”の戦友の戦闘データが組み込まれていたことぐらいです」

千冬「そうか……。では、これから……。特にフリーダム。そして、ガイア、カオス、アビス、セイバーの四機はどうする？ IS委員会にも引き渡す訳にはいかんだろう？」

雷真「そうですね。できれば、この四機については自分に一任させてもらえませんか？ フリーダムは何とかなりますから」

千冬「ふむ……」

真耶「どうしますか、先輩？」

千冬「真耶、お前はと思う？」

真耶「私は正直、黒牙くんにお任せしたいと思います。本当は、私たちがやらないといけないのですが、力不足ですから」

千冬「分かった。では、黒牙中尉。ガイア、カオス、アビス、セイバーの四機を貴君に一任することにする」

雷真「はっ！」 敬礼

雷真「それと、もう1つ、いいですか？」

千冬「なんだ？」

雷真「このフロアだけ、セキュリティを自分がいじってもいいですか？」

千冬「何故だ？」

雷真「織斑先生に悪いですが、これは篠ノ乃東に限らず、あらゆる国がカオスたちやスペックデータを奪いにくる可能性があるのです」

千冬「なるほど。それなら、分かった。セキュリティを書き換えて構わない」

雷真「ありがとうございます」

てな訳で、この区画だけセキュリティをフリーダムにかけているセキュリティと同等のファイヤーウォールを組み上げた。

まあ、この世界の技術だと破れたとしても40年くらいはかかる代物と思ってくれ。

## 第34話

【ピピピピッーピピピピッー！】

雷真「ん、んく、んあ？」

目覚ましのアラームかと思って起きたら、どうやら刀奈からの着信音だったらしく、電話に出る。

雷真「しもしも？」

刀奈『あー、やっと出た！雷真、今貴方どこにいるのよ!』

雷真「内緒、でも学園内にはいる」

刀奈『なら、とつとと部屋に戻って準備しない！今日は家に帰る予定でしょ?』

雷真「えっ?」

俺は身体を起こして、ケータイのカレンダーを見ると8月〇〇日。うん、マジで今日は家に帰る予定日のようだ。

雷真「分かった。部屋で着替えてからエントランスで集合でいいか？」

刀奈『ええ、それでいいわ。遅れないですよ?』

雷真「分かってる」

刀奈との通話を切り、自分の身体にかけていた毛布を剥いで立ち上がり、身体を伸ばすとゴキゴキッと関節の中にある空気が鳴る。

雷真「んー、やっぱりベッドの上で寝ないから身体が少し痛いな」

織斑先生にカオスたちとこの整備場を一任されてから俺は、ずっと入り浸っているのだ。理由は簡単。カオスたちの復元とカオスたち

の武装を元に刀奈たちでも使える武装の製作。

雷真「よし、行くか」

身体をほぐしたあと、カオスたちをそれぞれの色のペンダントの待機状態にしてから拡張領域パススロットにしまい、整備場内にある全ての機械の電源、照明などを落としてから俺がいじった異世界の技術を詰め込んだセキュリティをONにして整備場を出る。

寮の自室に入るとまずはシャワーで寝汗や寝癖などを落としてからバイクの鍵を持ってエントランスへと向かう。

刀奈「あー、やっときた」

簪「雷真、遅い」

雷真「悪い悪い」

シャル「今まで何をしてたの？」

雷真「まあー、ちよつとな」

シャル「ふーん。あまり無茶はダメだよ？」

雷真「分かってるさ。それより、早く行こうぜ」

そんなこんなで三人にあれこれ質問されるも最終的にオーブの国家機密と言って納得してもらった。

マジで、これで納得してくれるなんて俺の婚約者様は優しいです。

そして着きましたは我が家、更識の屋敷である。まずは屋敷の入り口門の敷居を跨ぐ。すると後ろでシャルロットが屋敷の門を見て固まっていた。

シャル「……………」

雷真「どうした、シャルロット？」

シャル「あ、いや、その……………なんていうかすごいね」

雷真「なに言ってるんだよ。もう、ここはお前の家でもあるんだぞ？」

刀奈「そうよ、シャルロットちゃん」

簪「血の繋がりがなくても私たちは姉妹」

雷真「だから、遠慮する必要はなんもねえよ」

刀奈「ほら」

俺と刀奈でシャルロットの両手を引つ張り、敷居を跨がせる。そのまま俺たちはシャルロットの両手を引いて、簪はシャルロットの背中を押しながら玄関へと向かう。

「「ただいまー！」」

シャル「お、お邪魔します」

刀奈「ノンノン！シャルロットちゃん『お邪魔します』じゃないわよ」

シャル「え……あつ、た、ただいま？」

刀奈「お帰りなさい、シャルロットちゃん」

簪「お帰りなさい、シャルロット」

雷真「お帰り、シャルロット」

シャル「うん！（やつぱり、家族にただいまって言うのは良いな）」

屋敷の中に入るとまずはそれぞれ、荷物を自室に置くことにした。荷物を置いたあとは、お義母さんに挨拶してから普段は襖で仕切っている部屋を襖を取り外し長い一部屋に変えて宴会場になっている部屋へと向かう。

シャル「ねえ、雷真」

雷真「なんだ？」

シャル「これから何が始まるの？」

雷真「ああ。それは俺たちが帰ってきたから、その宴を行うんだよ」

シャル「宴？」

雷真「古い日本のパーティーのような物だ。祝いごとや縁起の良い時やお互いに仲を深める時に行うんだ」

シャル「なるほど」



シャルロットにこれから行われる宴会の話をしていると台所の縁側の方から料理を持って、刀奈、簪、それと更識家のお手伝いさんたちがやって来た。

刀奈「雷真、アナタも手伝いなさいよ」

簪「そうだよ」

雷真「俺が入ったら逆に邪魔になるだろう？」

刀奈「まったくも」

シャル「ぼ、僕も手伝った方が……………」

刀奈「シャルロットちゃんは大丈夫。シャルロットちゃんは今日の主役だから」

シャル「主役？」

刀奈「そつ。だから、座って待ってて」

シャル「分かった」

それから15分後。色々な料理がテーブルの上に溢れんばかりに並べられたあと、更識家のそれぞれの部隊の人やお手伝いさんも集まり。そして、乾杯の音頭はやはり、この人。第16代目、更識楯無であるお義父さんだ。

更識父「それでは、我が娘である、刀奈、簪。そして、その婚約者である我が義理の息子の雷真と、新たに私の娘となったシャルロットがここに集まった。この良き日に……………乾杯！」

「」「乾杯!!」「」

お義父さんの音頭が終わると部隊の人たちは料理の争奪戦を始めたり、酒で互いに家庭の愚痴を語ったりで凄い。お手伝いさんはお手伝いさんで、彼氏が欲しいだの、刀奈たちに何時になったら俺と結婚するだの恋愛トークで盛り上がっている。

で、俺はと言うと……………。

雷真「お義父さん、シャルロットの受け入れ、ありがとうございます  
す」土下座

俺は頭を畳に付けて感謝の言葉をお義父さんに述べた。するとそれを  
見た皆がさつきまでのどんちゃん騒ぎが静かになり、後ろの方から  
誰かが畳の上を早歩きで此方に来るのが分かった。

多分、この足の運び方はシャルロットだろう。

シャル「ぼ、僕も、こんな僕を受け入れてもらい。ありがとうございます  
います」

更識父「二人とも、頭をあげなさい」

お義父さんに頭をあげろと言われたので頭を畳からあげて、お義父  
さんの顔を見る。

雷真「……………」

シャル「……………」

更識父「まず、雷真君から。雷真君、君は今まで自分のために何か  
をねだったことは少なかったね」

雷真「はい。それは本当の息子ではない幼い俺を本当の息子のよう  
に育ててくれましたから。俺はお義父さんとお義母さんにできるだ  
け負担にならないよう頑張ってきました」

更識父「そうだったのか……………」

雷真「だから、俺は将来、育ててくれた分の恩返しができるように  
更識の仕事を手伝いたいと思って、最初のお願いとして護身術や剣  
術、槍術を身に付けたいとねだりました」

更識父「それは君が6歳の頃だったかな？あれは……………」

雷真「はい。それにあるアニメを見て、思ったんです。目の前で悲  
しみの涙を流している大切な人がいるのに何も出来ないなんて嫌だ

から。できることなら救いたい、救えなくても話を聞いてやれるくらいのはできると思ってたんです」

雷真「それが、俺がシャルロットを救いたかった本当の思いです」  
シャル「雷真……………」

更識父「そうか…………流石は我が息子だ。よくやった、雷真」

雷真「ツ!!」

雷真「……………。(やばい、今の俺、泣きそうだ)」俯き

お義父さんは俺の話が終わると、視線を俺からシャルロットに変えた。

更識父「次にデユノアさん。すまないが、『シャルロット』と呼んでもいいかな？」

シャル「は、はい!」

更識父「まずは、さきほどシャルロットが言った『こんな』なんて言葉は私は聞きたくない。ましてや、それが私の娘なら、尚更だ。それよりも、もっと聞きたい言葉があるんだがね」

シャル「ツ!!」

シャル「あ、ありがとう、お父さん」ポロポロ

更識父「なに、娘のためだ。気にするな」ナデナデ

俺とシャルロットは嬉し涙を流しながらお義父さんの大きな、それは大きな、その手で頭を撫でられた。

更識父「さつ、湿っぽい話は終わりだ。皆、存分に酒を飲み、飯を食ってくれ!」パンパン

お義父さんは手を鳴らして、俺が作り出してしまった湿っぽい空気を消してくれた。それにより、再び、どんちゃん騒ぎが始まった。

俺とシャルロットは元居た席に戻ると刀奈と簪にコップヘジュースが注がれ、刀奈の掛け声の下、四人でグラスをコチンツと交わす。

チリーン

縁側の風鈴が夏の風で鈴の音を鳴らす。

刀奈「そりやあー！」

簪「お姉ちゃん、危ないよ!？」

シャル「そうだよ!？」

本音「ゴー、シュツ！」バチバチ

刀奈「ちよっ、本音!？」

簪「本音のバカーっ!？」

シャル「わわわわっ!？」

現在、宴が終わり。乙女たちは近くのスーパーで買った花火を庭で遊んでいる。

刀奈、簪、シャルロットは『手持ち火炎』という名の花火で。そして本音は何故か知らないが『ネズミ花火』を束で着火させて刀奈たちを困らせていた。

雷真「火傷をするなよー」

刀奈たちに一声かけてると台所の方から虚さんが御盆に乗せた切り分けられているスイカを持ってきてくれた。

虚「皆さん、スイカを持ってきましたよ」

本音「わーい、スイカだー!」

刀奈「私たちも頂きましょうか」

簪「うん」

シャル「そうだね」

花火で遊んでいた刀奈たちも燃え尽きた花火を水の入ったバケツに入れてから縁側に座り。虚さんが持ってきたスイカを食べる。

刀奈「うーん、美味しい」シャクシャク

簪「うん、美味しい」シャクシャク

シャル「日本のスイカは丸いんだね」

雷真「フランスのスイカは日本のトウガンに似てるからな」

本音「それとスイカに塩を少しかけるともつと甘くなるよ、でゅっちー」

シャル「そうなんだ」

シャルロットは本音に勧められて、その手に持つスイカに少しだけ塩を振り、かぶり付く。

シャル「本当だ! さっきよりも甘味が増してる」シャクシャク

刀奈「やつぱり、夏はスイカが美味しいわね」シャクシャク

本音「ぶぶぶぶぶーっ!」

簪「ちよっ、本音、スイカの種を飛ばすのハシタナイよ」

本音「いや、ついやつちやうんだよね」テヘヘ

虚『『つい』ではありません! 掃除をするのは誰だと思ってるの!?!』  
本音「はーい」

雷真「にしても、今年はちゃんと平和で夏らしいことができて良かった」シャクシャク

刀奈「そうね。半年前までは雷真は異世界に居たんですものね」

簪「言われてみれば」

シャル「僕も初めて雷真が『軍人だ』って聞いた時は驚いたよ」  
虚「早い物ですね」

雷真「この平和が何時までも続いてくれれば良いんだがな」

俺たちは空に浮かぶ、夏の満月を見ながら、そう口にした。

——カポンツ！

——ジャアアアアアアー!!

雷真「あ” あああ……………」

スイカを食べたあと、本音と虚さんは隣の布仏家に戻り。刀奈、簪、シャルロットは居間で簪が所有しているゲームで白熱している。その間に俺は一番風呂をもらい、湯船に浸かっている。

雷真「IS学園の大浴場も良いけど。こういう普通のサイズの風呂がやっぱり一番だな」

我が家の風呂のサイズはIS学園の大浴場よりは狭く、一般的な家庭の風呂よりは少しデカイ。もっと分かり易くいえば、旅館の部屋に備え付けられている檜風呂に似ている。

なんせ、大の大人が三人も入れるデカさの風呂なのだから。

雷真「ふう〜」

雷真「こう、気持ちいいと成人してないが酒が飲みたくなるのが分かるな」

10分ほど、肩をマッサージしながら湯船に浸かってから湯船を出て、脱衣場に繋がるドアを開けて風呂場から脱衣場に行こうとするところ……。

ガラガラガラ

刀奈「へ？」

簪「え？」

シャル「ふえ？」

雷真「は？」

よくアニメであるるように、我が婚約者である美少女三人がバスタオル姿で出てくるではありませんか。

簪「はうううう!?!?!?!?!」

シャル「うわああああ!?!?!?!?!」

刀奈「もう、雷真のエツチ♥?!?!?!?!?!」

簪とシャルロットは悲鳴をあげながら身体を抱きしめながらしやがみ込み、刀奈も悲鳴をあげはしなかったが身体を抱きしめながらしやがみ込む。

三人のバスタオル姿に見惚れていた俺はワンテンポ遅れて我に返り、後ろを向く。

雷真「わ、悪い!?!?!?!?!」

刀奈「雷真、バスキエアに座って目を閉じて」

雷真「わ、分かった」

俺は刀奈に指示されるまま、湯船と同じ檜の木で作られたバスキエアに座り、目を閉じる。

刀奈「そのままよ。そのまま」

刀奈の声の通りバスチェアの上でジツとしていると脱衣場から「ペタペタ」と水気を帯びたタイルの上を歩く音が一つ。その音がドンドン近付くと後ろから何かを目元にタオルか何かを巻き付けられるがこれは多分、目隠しだろう。

刀奈「これでいいわ。もう、いいわよ。二人とも」

簪「うううう」

シャル「うううう」

再び、脱衣場の方から「ペタペタ」と歩く音が二つ聞こえたきた。これは簪とシャルロットだ。

そして、その音が止むと……………。

簪「雷真の……エツチ。／／／／／」ボソツ

シャル「雷真の……エツチ。／／／／／」ボソツ

雷真「……ッ!?」

刀奈と違い。普段ではありえない、簪とシャルロットから熱を帯びた艶かしい声で両耳から囁かれた。それにより、今までに感じたことがなくて言い表し辛い感覚が俺の身体を駆け巡った。

また、その感覚と囁きで俺の頭は真っ白になってしまった。

そのあと、俺が三人によってどうなったかはご想像にお任せする。けれど、一つだけ、一つだけ言わせて欲しい。理性のケーブルは一本だけ繋ぎ止めた、とだけ記しておく。



## 第35話

雷真「アミューズメントパーク？」

刀奈「そつ。臨海学校の時は色々とあつて最後まで満喫できなかったし。それに夏休みは雷真はどこか行つてるからデートも一人二回までしかできなかったし。夏休みの最終日くらいパーッと遊びたいのよ」

刀奈の言う通り、今日は夏休み最後の休みなのだ。そして、夏休み中、俺は特訓以外は週に4回ほど機密整備場に籠つてはカオスたちの復元に新武装の開発で、ともに刀奈たちに構つてやれる日がなかったのだ。

また、現在、俺はベッドで横になりながら小説を読んでいる。刀奈は隣で四つん這いになり此方を見ている。

雷真「デートはきちんと二回ずつしたろうが。それに夏休み中は俺の部屋で何回も泊まつたりしてたろ？」ペラ

刀奈「それでも、学生のうちに色々としてたいの！」

雷真「まだ、あと二年もあるだろう？」ペラ

刀奈「雷真は私たちと行くのは嫌なの？」上目遣い

雷真「い、嫌じゃないけど……………」

刀奈の上目遣い&ウルウル目に押されていると空間ウィンドウが開き一夏から通話チャンネルが開く。

雷真「ちよつと、悪い。もしもし？」

一夏『もしもし、雷真？』

雷真「なんだ？」

一夏『いきなりなんだが、さつきラウラにこれに誘われたんだが』

一夏が空間ウィンドウ越しの俺に見えるように見せたのは刀奈が

行きたがっているウォーター・アミューズメントパークのチラシだった。

一夏『良かったら、雷真も行かないか？』

雷真「……………」チラリ

刀奈「……………」◇▽◇。ウキウキ

一夏の言葉を聞いて刀奈の方を向くと隣で四つん這いになっている刀奈が目をキラキラと輝かせながらウキウキワクワクとした視線を向けてくる。

雷真「はあく、仕方ない。分かった。準備ができたら駅前で集合な」

一夏『おう！』

一夏が通話を切ると俺は刀奈の方に向けて、呆れ笑いする。

雷真「どうやら、一夏も行くようだから。簪とシャルロットも誘って行くか」

刀奈「やったー！」(≧▽≧)ノ！

刀奈はウォーター・アミューズメントパークに行けることが物凄く嬉しいのか、ベッドの上で飛び上がり。これまた、物凄い速さで簪とシャルロットの元に向かって行った。

刀奈が二人を呼びに行っている間にベッドの下の収納スペースにしまった臨海学校で着た水着と必要最低限の持ち物だけ持ってエントランスに行くと既に刀奈、簪、シャルロットの姿があった。

また、簪とシャルロットの目が先ほどの刀奈と同じ目をしている。

簪「……………」◇▽◇。

シャル「……………」◇▽◇。

雷真「分かったから、行くぞ」

そして、ウオーター・アミューズメントパークに行きたい子供三人（年下）を連れて駅前に着くと、何故か……。いや、絶対にこれはそ  
うだ。

箒「……………」イライラ

セシリア「……………」イライラ

鈴「……………」イライラ

ラウラ「……………」イライラ

唐変木で朴念仁の一夏の奴が箒、セシリア、鈴、ラウラの気持ちも  
理解せずに俺たちと同様に駅前に呼んだのだろう。  
それもスゲエーご立腹だぞ。

雷真「刀奈、簪、シャルロット。悪いがあの人々に一夏に呼ばれた  
のか確かめてくれるか？ 男の俺が行ったら返って怒らせかねないか  
ら」

刀奈「分かったわ」

簪「うん」

シャル「任せて」

刀奈たちに機嫌が悪い一夏ハーレムズを任せて、俺は空間ウインド  
ウを開き、ハロや更識にいる俺専属の部隊に帰省してから製造させて  
いるある物の開発状況を確認する。

雷真「アスランがくれたハロに”コスミック・イラあっち側”の武装や色々な設計図  
がインストールされてるお陰で作れはするが……。しかし、ISサイ  
ズまでに縮小するとなるとな……………」

雷真「アレもまだ25%……………か。まだまだだな」

開発状況を確認し終わると刀奈たちの方へ視線を向けると何やら

三人とも一夏ハーレムを宥めている。  
そして、そのハーレムの中心はというと……………。

一夏「わりいー、遅れた！」

一夏ハーレム「「遅い!!」「」」

一夏「お、おう。わりい……………」

と遅れてきた一夏はハーレムメンバーに怒られた。  
そこへ刀奈が一声かけて宥める。

刀奈「はいはい。怒るのはそこまで、早くアミューズメントパークに行きましょう」

シャル「そうだね」

簪「うん。プール楽しみ」

雷真「簪の場合はパークで行われる戦隊物のヒーローショーが目当てだろうが。それと一夏」

一夏「なんだ？」

雷真「女心を少しは学べ」

一夏「はあ？」

念のため唐変木にアドバイスをしてから刀奈たちのあとを追う。  
ウォーター・アミューズメントパークにいたらまずは各人、男女に分かれて水着に着替える。

一夏「へえー、ここは温水プールもあるのか。ちよつと気になるな」

雷真「一夏、見取図を見てないで早く着替えろ。俺は先に行くぞ」

一夏「ちよつ！待ってくれよー!!」

準備が遅い一夏を置いて先にプールへと向かうとそこには既に刀奈、簪、シャルロットの三人が準備運動をしていた。

シャル「あつ、雷真」

雷真「よっ、お待たせ」

簪「他の皆は？」

雷真「一夏は置いてきた。んで、一夏ハーレムズは知らん」

刀奈「あつ？なるほど、それでか」

雷真「何か知ってるのか？」

刀奈「雷真、私たちを見て何か変化とかない？」

雷真「変化？ああ」

刀奈に変化と言われたので刀奈たちを見て、刀奈が言っている意味を理解した。

雷真「そうだな。まずは刀奈から、臨海学校の時と違った、水色と紺の横縞模様のビキニが良く似合ってる」

雷真「次に簪。前のような白と黒のビキニではなく、オレンジのタンクトップビキニも良く似合ってる」

雷真「次にシャルロット。シャルロットも二人と同じで臨海学校とは違って、水色のビキニがシャルロットの綺麗な髪を際出たせて凄く似合ってる」

それぞれ、三人の水着姿の感想を言うと三人とも顔を赤くして俯いてしまった。

刀奈「あ、ありがとう。//////」

簪「は、恥ずかしい。//////」

シャル「えへへ、綺麗だつて。//////」

刀奈「って、それとは別に変化してるところがあるでしょ!？」

雷真「他に？だとすると……その足場に置いている、イルカやサメの浮き輪か？」

刀奈「そうよ!」

簪「セシリアが気前良く私たち全員に買ってくれた」

雷真「なるほど、一夏と二人つきりになるためか」

シャル「まあ、僕たちは雷真が平等に大切にしてくれるから抜け駆けなんてしないで済むから安心だよ」

雷真「そりゃ、お前たち三人は世界を敵に回してでも守りたい者たちだからな」

刀奈「雷真……………」

簪「雷真……………」

シャル「雷真……………」

雷真「それよりも早く、プールで遊ぼうぜ？」

刀奈「そうね。行きましようか」

簪「うん！」

シャル「賛成！」

それから、まずは流れるプールにて、浮き輪に乗りながらプカプカと漂う。それだけでも意外と楽しい物だな。

ある程度、流れに任せていると前方から聞きなれた声が聞こえてきた。

??? 「オー、隊長！セツシーがエッチい水着を着てます」

雷真「この声は……………」

簪「本音？」

浮き輪を回転させて目線を前方に向けてるとバナナボートに乗っている幼馴染の本音とクラスメートの相川清香、谷本癒子ともう一人。分からないので美也子さんとしよう。

そして、その四名でどうやらセシリアと一夏を観察しているようだ。

「「セシリアはエロいな」」

セシリア「え、エロくないですわ!」

セシリアがそう本音たちに抗議の叫びを上げると一夏とセシリアの二人は後ろから激流に襲われて流されて行ってしまった。

本音「おりむー、バイバーイ」

雷真「おーい、本音」

本音「あつ、ライライたちだ」

簪「本音たちもプールに遊びに来たの?」

谷本「私たち以外にもIS学園の子達は来てるよ」

シャル「へえー、そうなんだ」

刀奈「だから、虚も今日は用事があるって言っていたのね」

それから本音たちと平行するように駄弁りながら、ある程度流されていると先に進むルートとプールサイドに上がるルートの二手に分かれる分岐点が見えたので俺たちはプールサイドへ向かうルートを選んだ。

雷真「そんじゃ皆、また学園でなー」

本音「バイバーイ」

本音と別れ、プールサイドに上がった俺たちは次にウォータースライダーに乗ることにした。そして、ウォータースライダーに乗るための階段の前に着くとシャルロットがあることを見つけた。

シャル「ねえ、このウォータースライダーにはペア滑りコースつてのがあるみたいだよ?」

雷真「へえー、ペア滑りコースなら一人一回ずつ乗るか?」

簪「いいの?」

雷真「いいも何も、さつき言ったらろうが。俺はお前たちが大切なん

だ。だから、喜んでくれるならこれくらいはお安い御用だ」

雷真「んで、誰から最初に乗るんだ？」

雷真「じゅあ、手を回すぞ？」

シャル「う、うん。／＼／＼／＼／」

その後、三人はじゃんけんをした結果、シャルロット、刀奈、簪の順番となった。そして、今はウォータースライダーの入口で俺の前にシャルロットが座り職員に説明され、滑る準備をするためにシャルロットの臍の辺りに腕を回す。

職員「それでは、行ってらっしゃい！」

職員に背中を押されると、意外と早い流れに俺たちは驚きのあまり声を上げてしまう。また、縦横無尽に左右にカーブしたり、アップダウンをしたりとかなり楽しめるウォータースライダーのようだ。

雷真「うおおあああ!! (これは、意外と早いな!!)」

シャル「きやあああ!!」

ウォータースライダーの出口に着くと勢い余って、シャルロットを抱きしめたまま出口から吹き飛ばされる感じで下のプールへと着水する。

この時、普通に着水できていれば良かったのだが、吹き飛ばされな



がら着水したためシャルロットから手を離してしまった。  
それで何が言いたいかというところ……。

雷真「んむっ……………!?」ブクブク

シャル「んんっ……………!?」ブクブク

水中で漫画やアニメのようにキスをしてしまったのだ。それもマウスとマウスである。しかも、これがシャルロットとのファーストキスである。

そして、息が限界になった俺たちは直ぐに酸素を求めて浮上する。息が整い、シャルロットを見ると耳まで赤くしながら俯いていた。

雷真「シャルロット、えつと、その……………」

シャル「え、えつとねえ、雷真。／＼／＼／＼／」

雷真「お、おう……………」

シャル「今のは……………僕のファーストキスだからね。／＼／＼／＼／」

雷真「あ、ああ。そうだな……………」

シャル「でも、こんな事故みたいの嫌だから。その……………」

雷真「その先は言わなくても分かるから、安心しろ」

シャル「……………うん。／＼／＼／＼／」

俺は、ここはケジメという何とかいうか。男として、大切な女の子の初めてのキスを事故で済ます訳にいかないと思ったので、シャルロットの肩に手を置く。するとシャルロットは少し驚いたのかビクツと身体を跳ね上げる。

雷真「シャルロット……………」

シャル「雷真……………」

シャルロットの名前を呼ぶと彼女は顔を徐々に上げて俺を見る。

その時、シャルロットの瞳は潤んでおり、頬も少し赤らんでいた。そして、今更ながら俺はこう思った。

ああ、なんてこんな、可愛いくて綺麗な女性を……………いや、女性たちと俺は婚約関係にあるのだろうと、改めてそんな贅沢な幸せを実感した。

雷真「んっ……………」

シャル「んっ……………」

雷真「んっは……………」

シャル「んっは……………ねえ、雷真？」

雷真「なんだ？」

シャル「大切な人とのキスつて、こんなにも心を幸せな気持ちにしてくれる物なんだね？知らなかったよ」ニッコリ

雷真「ツ!?!/!/!/!/」ボツ!

ヤバい、今のシャルロットの顔はスゲー色っぽい!!

そう思っていると忘れていた、二人の婚約者様から声がかかる。

刀奈「何、二人で良い雰囲気になってるのよ」ジトー

簪「シャルロット、ズルい。私も、まだキス一回しかされてないのに」ジトー

雷真「えつと……………次は簪だろう？早く行こぜ」

簪「誤魔化されないよ、雷真。あとでキスしてもらおうからね」

刀奈「私も私もー!」

雷真「わ、分かったから、部屋に帰ってからな」

更識姉妹「はーい!」

雷真「はあー、まったくこれも惚れた弱みだよな」

その後は、アミューズメントパークのプール全てを回り、簪のお目当てであるヒーローショーを見て。夜は一夏たちと共にお祭りに行って、夏休み最後の日を満喫したのであった。

## 第36話

一夏「デヤアアアツ!!」

鈴「セヤアアツ!!」

夏休みが開けて二学期初めての戦闘訓練の授業。

現在、アリーナで一夏は鈴の専用機である甲龍の龍咆を掻い潜り、近接戦闘を仕掛ける。やがて、互いに近接戦闘となり得物で激しくぶつかり合う。

そして、鏢迫り合いになると一夏は第二形態セカンド・シフト移行したことにより白式の左腕に追加され多機能武装腕《雪羅》の射撃モードで荷電粒子砲を鈴に向けて放つ。

そんな、二人を地上から雷真はいつもの面子で眺めている。

刀奈「ねえ、雷真。この模擬戦どちらが勝つと思う?」

雷真「一夏の負け」即答

シャル「即答なんだ……」苦笑

セシリア「即答でしわね」苦笑

雷真「だって、あのバカは白式が元々、燃費が悪いつて分かかって、新しく追加されたこれまた燃費が悪い武装の荷電粒子砲をバカスカと撃ってるからだ。てか、零落白夜を外し過ぎだ!」

刀奈「うんうん」

それと刀奈。頷いてるなら、教えてやれよ。

と専用機持ちに一夏の欠点を教えていると戦闘終了のブザーが鳴る。模擬戦の結果はやはり鈴の勝ちのようだ。

鈴「一夏。アンタ、バカスカと荷電粒子砲を撃ち過ぎなのとエネルギーの使い過ぎよ。もつと効率を考えなさいよ。ただでさえ、甲龍は燃費の安定性が第一に設計されてるんだから」

一夏「そんなこと言っても、第二形態<sup>セカンド・シフト</sup>移行してから前のよりもSE消費が多いんだよ」

鈴「なら、尚更よ」

と二人は白式のエネルギー効率の話をしながら、此方に戻ってくる。

雷真「お疲れ」

鈴「ありがとう」

一夏「サンキュー」

千冬『次、黒牙とボーデヴィツヒ』

と織斑先生から指示が飛んでくる。

「了解！」

なので、返事をしてなら直ぐに首にかけている待機状態のフリーダムに『起動』と念じるとゼロコンマでフリーダムを俺の身体に纏う。

雷真「黒牙雷真、フリーダム。行きます！」

地面を少し蹴るようにしてからP S 装甲を起動させてスラスタ<sup>フェイスソフト</sup>ターを噴かし、一気に高さ50mほどまで飛翔する。

また、少し遅れてからラウラのシユヴァルツエア・レーゲンが飛翔してくる。

ラウラ「やはり、お前のフリーダムは驚異的な速さだな」

雷真「フリーダムの特性は高速機動と多種多様な射撃武装だからな」

ラウラ「なるほどな。しかし、今度は勝たせてもらうぞ、雷真！」  
雷真「ああ、かかってこい！」

夏休みの訓練でフリーダムの操作に慣れるため幾度となく、専用機持ちと模擬戦闘を繰り返した。

戦績は一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロットには被弾無しで全勝。他の三人は最初の内は数発被弾したが、全勝。

ラウラ「撃てーっ！」

ラウラは戦闘開始のブザーと同時にシユヴァルツエア・レーゲンのレールカノン撃ってきたので後退しながらラミネートアンチビームシールドを構えて防ぎながら、ラミネートビームシールドの横に付いているガンポートにルプスビームライフルの銃身を差し込み、ビームを撃つ。

(※以後、ラミネートビームシールドと省略。by作者)

ラウラ「防ぎながら、撃ってくるとは!?!」

雷真「そう簡単にはやれないさ」

ラウラ「まだまだーっ！」

俺からのビームをラウラは地面を滑るようにして回避行動をしながら、ワイヤーブレードを射出してくるのでそれを全て回避する。

ラウラ「やはり、レールカノンとワイヤーブレードではフリーダムを捉えられないか……………ならばっ！」

ラウラはレールカノンとワイヤーブレードだけではフリーダム  
の機動性を抑えられないと分かるとプラズマ手刀を両腕手首から出し、  
ワイヤーブレード6機全てを射出して近接戦闘を仕掛けてくる。

雷真「今度は近接戦闘か……………受けて立つ！」

俺はラウラのワイヤーブレードを避けながらルプスビームライフ  
を後ろ腰へマウントし、ラミネートビームシールドを上へ高く放り  
投げてから両腰にあるラケルタビームサーベルを二本とも引き抜き、  
ラウラに応戦する。

ラウラ「ハアアアアッ!!」

雷真「デヤアアアアッ!!」

ラケルタビームサーベルとプラズマ手刀がぶつかり合うとガキイ  
ンツという音を立てながら火花を散らし、鏢迫り合いになる。

ラウラ「くっ……………パワーで押される」

雷真「ラウラにしては、珍しく愚策に出たな？」

ラウラ「はっ……………!」

ラウラは俺の言葉であることを理解したのは、前に一夏にやった戦  
法。ストライクやフリーダムのようなM<sup>モビルスーツ</sup>S型には頭部に近接防  
御機関砲が搭載されている。故に、鏢迫り合いになるほどの至近距離に  
居れば、間違いなく近接防御機関砲の餌食だ。

ラウラ「くそっ!」

雷真「逃がしてやるほど、俺は甘くないっ!」

直ぐに鏢迫り合いから後退しようとするラウラだが、そんなことを  
させる俺ではなく。フリーダムの実弾兵器である近接防御機関砲ピ

クウスとクスイファイアスレール砲二門を連射して、一気にシユヴァルツエア・レーゲンのSEを削っていく。

ラウラ「このままでは!?!」

雷真「ラウラ」

ラウラ「なんだ!」

雷真「前ばかり気にしてるのはいいけど頭上注意な」

ラウラ「はあ?」

ラウラ「ぐはっ!?!」ガゴンツ!

説明しよう。今、ラウラに何が起きたかというところ、少し前に俺はラケルタビームサーベルを抜く前にルプスビームライフルを後ろ腰へ、ラミネートビームシールドは空へと投げた。

そして、先ほどピクウスとクスイファイアスレール砲二門の攻撃をラウラは被弾しながら回避し続けていた。ここまでは、良い。

しかし、ラウラは知らず知らずのうちに俺の射撃によってラミネートビームシールドの落下地点へと追い込まれ、SEが心許ないままお笑いのように頭上から盥ではなく、対ビームシールドが落ちてきたのである。

そして、ラミネートビームシールドを頭から受けたラウラは頭を押さえてしゃがみ込んでいる。でも、模擬戦とはいえ、俺は優しくはない。

ラウラ「いっつつっ!?!」

雷真「ラウラ」

ラウラ「今度は、なんだ!?!」

雷真「チェックメイト」

ラウラ「へ?」

ラウラが頭を押さえている間に俺はルプスビームライフルを右手に持ち、クスイファイアスレール砲二門、バラエーナプラズマ収束ビー

ム砲二門をハイマツトフルバーストの構えを彼女の眼前に向ける。

ラウラ「こ、降参だ」

雷真「お疲れ様でした」

実戦訓練の授業が終わると俺と一夏は、今となつては俺たち男子専用となつたアリーナのロッカールームでISスーツから制服に着替えている。

一夏「はあく。やっぱり、白式の燃費が今後の課題だよな」

雷真「それだけじゃないぞ、一夏」

一夏「え？」

雷真「お前はまだ雪羅の使い方が分かってない」

一夏「分かってない？なら、教えてくれよ」

雷真「いいけど、俺から教えてやれるのは戦闘のやり方だけ。使い方は自分で覚えろ。人のやり方を真似ると何処かで自分に合わなくなるからな」

一夏「……………」

雷真「それと夜、寝る前とかに目を瞑って白式に語りかけてみるよ。なにか、応えてくれるかもしれないぞ？」

一夏「語りかける……………」

雷真「あと俺から言えることは、『攻撃は最大の防御』ってことだけ」

一夏「攻撃は最大の防御……………」

雷真「ヒントは教えた、あとは自分で考えろ。それと早くしないと織斑先生の出席簿が脳天に落ちるぞ」

一夏「へえ？」

一夏は雷真の言葉でロッカールームに備え付けられているデジタ



ル時計を見ると時刻は8時30分。アリーナから校舎まで距離は全力疾走で約10分。

故に、制服に着替えていない一夏は遅刻が確定した。

一夏「うわあああ!?!」



千冬「それでは、デユノア。ラピッド・スイッチの実演をしろ」  
シャル「はい!」

シャルロットは織斑先生の指示に従い、教卓の前まで行き。両腕だけリヴァイブを部分展開させて、射撃武装をアサルトライフル、サブマシンガン、ショットガンと高速切替ラピッドスイッチしていく。

千冬「このように、ラピッド・スイッチは普通の武装切替よりも早いため、瞬時に格闘・射撃・防御といった必要な場面に合わせて切り替えることができる」

千冬「ちんたらと武装を切り替えていたら、黒牙のような射撃精度が異常なほど高い奴に撃たれる。それと先ほど必要な場面に合わせて切り替えると言ったが、特に良い例があるのでその映像を見てもらう」

織斑先生は教卓から一つのリモコンを手に取り、教卓に向けてリモコンのボタンを押すと黒板にある映像が映し出された。

それは……………。

千冬「これは黒牙の第一次形態の時のIS、ストライクだ。このストライクは、ストライカーパックと呼ばれる換装システムで必要な場面に合わせて、近接・遠距離・高速機動と武装を切り替えることができる」

「「「おおおお!!」」」

雷真「（一応、許可は出したけど。まさか本当に授業で使うとは……………）」

千冬「この様に黒牙はこの換装システムをラピッド・スイッチを使い瞬時に換装している」

次に映し出されたのは授業や放課後の特訓、タッグトーナメントで撮影されたと思われるストライクの戦闘時の物だった。やがて、エル、ソード、ランチャー、I W S P、オオトリと色んなストライカーに換装している映像が終わる。

千冬「なので、諸君も必ず覚えるように」

「「「はー」」」」

本日のカリキュラムが全て終わり、放課後になったのでいつもの夏の放課後特訓に行こうとすると、何故かセシリアに呼び止められる。

セシリア「雷真さん、少しよろしいですか?」

雷真「分かった。歩きながらいいか?」

セシリア「はい」

雷真「で、話って?」

セシリア「刀奈さんから臨海学校の時に雷真さんがビット兵器でもないのにビームを偏向射撃フレキシブルさせたと聞いたので」

雷真「なるほど。それと、一夏に負けたのがそんなにも悔しかったか？」

セシリア「はい。イギリス代表候補生としてのプライドが……」

雷真「なら、俺は？」

セシリア「雷真さんには、実力的に勝てないと臨海学校より前に思い知らされましたから」

雷真「あははは。それ……」

何ともフォローできないや。

セシリア「ですから、よろしければ私に偏向射撃フレキシブルのご教授をお願いしたいのですわ」

雷真「……分かった、協力しよう」

セシリア「本当ですの!？」

雷真「ああ、本当だ。代わりにセシリアに頼みたいことがある」

セシリア「頼みたいこと、ですの?」

雷真「ああ。それじゃ、今日は二人だけで特訓するか。一夏の度肝を抜いてやろうぜ?」

セシリア「はい!」

てな、感じで俺とセシリアは二人だけで特訓するために刀奈に一夏の特訓の指示を任せ、俺たちは別のアリーナで特訓することにした。

雷真「まずは、セシリアのビット稼働率を見せてくれ」

セシリア「わかりました」

セシリアによって、ブルー・ティアーズのビット兵器の稼働率を見せたらうと45%だった。しかし、これでも良く伸びた方なのだから

う。前はビット兵器を使用しているとセシリア本人が動けなくなり、そのデメリット克服のため、日々鍛練を積んだ結果、ビット兵器を二つまで使用しながら自身も移動できるまでに成長した。

雷真「セシリアはさ、フレキシブル偏向射撃のイメージは出来てたりするの？」

セシリア「いいえ、全く。雷真さんがやるまでは机上の空論と……」

雷真「そうか。なら、一か八か、俺がブルー・ティアーズのビット兵器でフレキシブル偏向射撃をやってみる」

セシリア「へえ？ちよつ、お待ちなさい！雷真さん、貴方、ビット兵器の適性はあるのですか!？」

雷真「確か……先週のメデイカルチェックでビット適性がCからA+に上がったたかな？だから、多分、平気だろう」

セシリア「……はあく、わかりましたわ」

セシリアは何か諦めたような溜め息を吐いてからビット兵器のアノックをする。そして、ビット兵器をフリーダムに接続するとブルー・ティアーズのビット兵器について色々と分かった。

雷真「よし、行けるな」

セシリア「では、お願いしますわ」

雷真「了解」

スラスターを噴かせて、ある程度まで飛翔すると射撃用のIS型ドローンを出現させてからビット兵器を操る。

何回か試し撃ちでIS型ドローンを撃ったら今度はビット兵器を全て操りながら俺も高速移動する。

雷真「意外と難しいな。でも、なんかストライクフリーダムに乗ってるみたいで、キラになった感じだな」

ビットを操作している雷真を見て、セシリアは呆れたように言葉を溢す。

セシリア「分かっただけではありませんが……四機全てを操りながら、あんな高速で移動するなんて」

ビット操作に慣れると今度はビット兵器も合わせて全てのフリーダムの射撃武装と共にハイマツト・フルバーストをする。

セシリア「凄いですわ……………」

雷真「それじゃ、セシリア。そろそろ、フレキシブル偏向射撃をするから良く見てくれよ?」

セシリア「わかりましたわ!」

ハイマツト・フルバーストを撃ち終わると今度はフレキシブル偏向射撃をするためドローンにランダム回避をさせる。

雷真「行動パターン、算出、行けるっ!」

雷真「当たれえええっ!!」

セシリアから借りたビット兵器のレーザーを山なりに撃つたり、左右に湾曲させて撃つたりと色々のフレキシブル偏向射撃をやって見せた。

セシリア「これが、フレキシブル偏向射撃……………」

IS型ドローンを全てフレキシブル偏向射撃で撃ち墜とし終わるとセシリアに参考になったか確かめる。

雷真「どうだ?見本にはなったか?」

セシリア「はい、それはもう。凄く」

雷真「なら、良かった」

セシリア「ところで、雷真さんが私に頼みたいこととは一体？」

雷真「それは一夏と射撃型の基礎行動の特訓に付き合ってほしい」

セシリア「そんなことで、よろしいのですか？」

雷真「ああ」

セシリア「わかりました。この、セシリア・オルコット。その申し出、謹んでお受けしますわ」

雷真「よろしくな」

セシリア「はい！」

雷真「あつ、それとセシリア」

セシリア「なんですか？」

雷真「早くフレキシブル偏向射撃を撃ちたいなら、お前のISであるブルー・テイ

アーズに語りかけて、そして信じる」

セシリア「語りかけて、信じる」

雷真「それだけだ」

## 第37話

セシリアとの特別訓練をした翌日。現在は、早朝の特訓をしている。

一夏「雷真、セシリア。もう一度頼む！」

雷真「あいよ」

セシリア「わかりましたわ」

特訓内容は俺が二人羽織のような形でスラスタ―翼以外を展開している一夏に覆い被さりながらフリーダムで『シューターフロウ』を行いながら一夏に射撃型戦闘の間合いの取り方を感覚的に覚えさせるやり方。

前までは射線上から逃げる特訓と近接戦闘の特訓だけだったが、一週間前の夜に”楯無さん”からある情報を聞いて、それを”ある人”に伝えたら悠長にやってはられないと言われたので、この特訓をすることにした。

雷真「セシリア、準備はいいか？」

セシリア「いつでも」

雷真「それじゃあ、GO！」

俺の合図で、セシリアは俺と円を描くように飛行し回転速度を合わせながらブルー・ティアーズのメイン武装であるスターライトmkⅢを構える。

雷真「一夏、構えろ」

一夏「おう」

一夏に指示を飛ばして《雪羅》を構えさせる。また、姿勢制御のデータは白式に後で送る。

雷真「射撃開始！」

この、合図で二人は己が射撃武装を撃ち合う。当然、それは当てる気で撃つので互いに相手の弾が当たらないように緩急を付けて円状飛行を止めないように回避する。

セシリア「流石は雷真さん。まったくと言っていいほど円状制御飛翔サークル・ロンドを崩しませんわね。それに比べて、一夏さんは……………」

雷真「良く狙え、一夏！」

一夏「分かってる！」

セシリアは向かい側で飛行と回避行動は全てを行う雷真と、射撃のみを行うが何発も明後日の方向へ荷電粒子砲を撃つ一夏。ここまでの想い人と友人の実力の差を見せつけられると、少し深い溜め息を吐く。

雷真「セシリア、済まないがビット兵器を二機共使いながらシューター・フローを続けてくれないか？」

セシリア「……………わかりましたわ。ブルー・ティアーズ！」

それから、8時まで射撃型の特訓を続けたら刀奈たちが作ってくれた朝食用の弁当を食べてから教室へ向かう。そして、SHRが終わるとなんと、一限の授業を半分使用して全校集会を行うことになった。その内容は学園祭である。



そして俺は現在、ステージ裏にきている。何故、来ているかは夏休み明けから生徒会副会長になったからである。

雷真「刀奈、そろそろ時間だ」

刀奈「分かったわ」

先ほどまで、事前に自分で書いた集会でのセリフを下書きした紙を読んでいた刀奈に一声かけてから、ステージの幕をあげるよう放送委員の女子に赤のペンライトを振り、合図を送る。

刀奈「それじゃあ、行ってくるわね」

雷真「おう、行つてらっしゃい」

刀奈に『行つてらっしゃい』を言うと放送委員の女子からアナウンスが流れてから堂々とした態度でステージの上にある学校のスピーチ台の前進み、全校生徒を見据える。

刀奈「やあ、みんな。おはよう」

刀奈「さてさて、今年は私もピカピカの一年生として色々立って込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね」

刀奈「知っている人も居ると思うけど、私の名前は更識刀奈。貴方たち生徒の長よ。以後、よろしく」

と、かるーく挨拶を終わらせると本題の学園祭の話になり、刀奈の奴はニヤリと生徒たち笑みを浮かべるとなんと学園祭に特別ルールなる物を設けやがった。それは――

『各部対抗男子争奪戦』

——である。

まあ、内容は部活動、クラスの催し物で、どれが一番良かったか、全校生徒に投票させて。一位に輝いた部活動に男子を1ヶ月貸し出すというものだ。無論、これには生徒会も含まれる。

俺と一夏的には、面倒なことを、と思った。



放課後の特別HRにてクラスごとの出し物を決めるため、どのクラスもわいわいと声が聞こえてくる。

一夏「えーと……うちのクラスの出し物の案ですが………」

クラス委員長の一夏が学園祭で出す。1年1組の催し物の案について言い悩んでいる。

その理由は………。

【織斑一夏&黒牙雷真のホストクラブ】

【織斑一夏&黒牙雷真とポツキーゲーム】

【織斑一夏&黒牙雷真と王様ゲーム】

………と案は出ている。

一夏「全部却下！」

女子「「「ええええー!!」「」」

一夏「アホか！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

一夏がそう叫ぶと複数の女子がそれに反論する。

女子「私は嬉しいわね。断言する」

一夏「え?」

女子「そうだそうだ!女子を喜ばせるために義務を全うせよ!」

一夏「はあ?」

女子「織斑一夏と黒牙雷真は共有財産である!」

女子「「「「そうだそうだ!」」」」

一夏「……………くっ!山田先生、ダメですよ?こういう企画は」

真耶「えっ!?!わ、私ですか!?!」

どうやら、山田先生も女子と同じ考えだったのか一夏の話にワンテンポ遅れて反応した。

山田「え、えーと……………わ、私はポツキーなんか良いと思いますよ?」

ダメだ。この副担任。頬を赤く染めて欲に堕ちてやがる。

一夏「と、とにかく普通の意見をだな!」

ラウラ「なら、メイド喫茶はどうだ?」

なんと、あのラウラの口から『メイド喫茶』などと出たことに1組全員が驚く。

一夏「ら、ラウラ?」

ラウラ「客受けはいいだろう。それに飲食店は経費の回収が行える」

シャル「うん。いいんじゃないかな?雷真と一夏には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだね。刀奈も生徒会長としてどうかな?」

刀奈「そうね。最初の3つの案が出ていれば、流石に私としても許可を出せない物もあるし。ラウラちゃんの見解は生徒会長としても賛成ね。雷真は？」

雷真「それに関しては刀奈と同じだ。最初は皆の見解を聞くことに徹していたが、もしも、最初の3つの案が催し物として申請を出されたら即、却下しているところだ」

ラウラ「なら、メイド喫茶で決まりだな」

ラウラの案により1組は『御奉仕喫茶』に決まり。1組の女子はウキウキと学園祭の準備に取り掛かる。

クラス会議が終わったあと、これまた習慣と化した一夏の放課後特訓が始まる。内容は今朝のメニューを一人で行えるようにバルーンの周りを延々と回るだけ。

雷真「一夏、姿勢が少し右に傾いてる、姿勢を直せ。それと速度も落ちてる」

一夏「くそおおおっ！」

俺は一夏の円状制御飛翔をフリーダムサークル・ロンドのハイパーセンサーで確認しながら、学園祭までに終わらせないといけない書類を終わらせる。

また、刀奈の奴は学年別トーナメントのあとに文句があるなら『何でもいいから私に勝て!』と言ったのと学園祭の特別ルールが原因で色々な部活動で文句がある生徒とバトル中である。

他のメンバーは学園祭の手伝いや別のアリーナで自己特訓だ。

雷真「よし、これで終わり」

アリーナに持って来てきていた、約5日はかかる書類が終わったのでケータイを取り出して本音に電話する。

本音『もしもし、ライライ?』

雷真「書類が終わったから、次の書類をアリーナまで持ってきてくれ。もちろん、お前の分もな」

本音『わーい!ライライ、ありがとう』

雷真「つたく、なんで俺がお前の分まで処理しといけないんだよ。本音」

本音『ごめくん』

雷真「次からはちゃんと処理しろよ?でない……」

本音『でない?』

雷真「簪に言って、お前のお菓子を書類が全て終わるまで没収」

本音『そんなく、ひどいよ〜!』

雷真「それが嫌なら、ちゃんと書類の処理をしろ」

本音『は〜い』

覇気を感じさせない返事を聞いてから通話を切り、視線を一夏に向けてる。

すると、また姿勢が崩れてたり、速度が落ちているので何度か注意をする。約30分の間にある程度まで、一夏がマニュアルで姿勢制御を続けていると観覧席に大量の書類を持った本音がやって来ていた。

本音「お〜い、ライライ」

雷真「おう。一夏、15分休憩だ」

一夏「分かった」

一夏に休憩の指示を出してから観覧席へと向かう。

雷真「これがさつき言つてた書類な」  
本音「じゃあ、こつちが新しい書類ね」

終わつた書類は本音に渡して、新しい書類を受け取り、ペラペラと少し書類を流し読みをしていると、あることに気づいた。

雷真「なあ、本音？」

本音「なくに？」

雷真「なんで、こんな赤ペケが付いてるんだ？ええ？」

本音「それは……………」

雷真「お菓子没収な」

本音「そんな〜！」

雷真「なら、生徒会室に戻つて5日前の書類から確認して直せ！それとも”おばさん”に言いつけたほうがいいか？」クロイエガオ

本音「頑張ります」（”、マ、）ゞ

おばさん…………つまり、本音と虚さんのお母さんに言いつけると言つたら本音の奴は敬礼をして、普段では出さないような速度で生徒会室へと走つて行つた。

一夏「副会長も大変だな？」

雷真「いや、事務作業ならそうでもないさ。異世界に居た時はこんな処理の何倍もの量をやっていたからな」

一夏「マジか!?!」

雷真「ああ。あつち側<sup>コスミック・イラ</sup>に居たときはシステムの調整、OSの切り替

え、弾薬やエネルギーの補給、やらなんやらと色々な種類の書類を処理したもんだ」

一夏「すげえな…………」

雷真「まあな、これでも軍人なんぞな」

休憩が終わるとアリーナの使用限界時間まで一夏にマニュアル操作で円状制御飛翔サークル・フロントを続けさせる。

そして特訓が終わり、寮の自室に向かうと部屋の前で何故か箒が待っていた。

雷真「箒?」

箒「少しいいか?」

雷真「ああ。なら、お茶を出すから中で聞こうか」

そうして、箒を俺の部屋と招き入れた。

雷真「ほい、緑茶」

箒「すまない」

雷真「そんで、用件は?」

箒「頼みがあつてだな」

雷真「頼み?」

箒「私も鍛えてほしいのだ」

雷真「ほう。それは何のために?」

箒「もう、臨海学校の時のようなことが無いように、己を戒めるためだ」

雷真「なるほど。誤ちを繰り返さないためにも力の使い方を知りたいと」

箒「うむ……………」

雷真「箒はさ、紅椿をどう思ってる?」

箒「どう…………とは?」

雷真「紅椿を信頼しているのかいないのか」

箒「…………」

雷真「まずは、そこを軽く考えろ。それと、特訓は俺ではなく、刀奈、簪、シャルロットに頼め。アイツらも専用機持ちだからな」

箒「刀奈たちにか?」

雷真「ああ。万が一にも、俺が箒にラツキースケベのようなアクシ

デントが起きると婚約者三人の背後から般若が出るからさ」

箒「な、なるほど。しかし、お前たちは本当に仲が良いな。女三人と一人の男が恋人になってイザコザとかはないのか？」

雷真「なくはないけど。その時は両者の意見や要求を紙に書いてお互い突き合わせて、妥協できるところは妥協して。出来ない物はチェスや将棋といった平和的なゲームで決着をつけてる」

箒「なるほど。一夏と違って、雷真は優柔不断でないのだな」

雷真「いや、俺は端から見れば十分に優柔不断だろ？婚約者三人も居るし」

箒「そうかもな。それでは、相談も終わったことだし、私はお前の婚約者三人の元へ行くでしょう」

雷真「刀奈たちは、俺から連絡を入れておくよ」

箒「そうか？それは有難い」

雷真「じゃあ、また明日」

箒「ああ。また、明日」



## 第38話

一夏の射撃型戦闘と特訓を始めて、はや一週間が経過した。その間に、一夏は何とかマニュアル操作で安定した円状制御飛行<sup>サークル・ロンド</sup>を習得した。

雷真「大分、安定してきたな。次はそのまま、シューター・フロアの円軌道から瞬時<sup>イクニッション・ブースト</sup>加速または二段階瞬時加速<sup>ダブル・イクニッション</sup>を使い。敵の後ろから、ゼロ距離で荷電粒子砲を撃つことを想定した特訓な」

一夏「はあ!? 瞬時<sup>イクニッション・ブースト</sup>加速ならまだしも、この状況から二段階瞬時加速<sup>ダブル・イクニッション</sup>をやれってか!？」

雷真「やらないと大切な奴を守れないぞ。それとも、守ることを諦めるか?」

一夏「……………いや、皆を守れるならやる!」

雷真「よし。じゃあ、見本を見せるからちやんと見ておけよ?」

一夏「おう!」

一夏にシューター・フロアからの状態からの瞬時<sup>イクニッション・ブースト</sup>加速で奇襲するやり方を見せるためにフリーダムで実践する。

雷真「行くぞ?」

一夏「ああ」

右手にルプスビームライフルを、左手にはラケルタビームサーベルを構え、円状制御飛行<sup>サークル・ロンド</sup>をする。

そして、ある程度の飛行速度に到達したら、フリーダムのスラストの角度をマニュアルで変化させてから一気に瞬時<sup>イクニッション・ブースト</sup>加速で練習用のバルーンに接近して、少し掠る程度の距離を通り過ぎる。

しかし、掠るだけでもビームサーベルでは致命的な威力を持っているのでバルーンが割れる。

雷真「あっちゃく。数mmズレたか……」

一夏「何が、数mmズレたんだ？ちゃんと攻撃は当ててるじゃないか」

雷真「本当は割らないで終わるつもりだったんだよ」

一夏「マジか……」

雷真「バルーンが割れちゃったから、メニューを変更して実戦形式でやるぞ」

一夏「分かった」

それから、俺たちはフリーダムと白式で円状飛翔をしながら、円状制御飛翔からの瞬間加速を行うことにした。

しかし、始めたはいいが、一夏はシューター・フローからの瞬間加速が上手くいかないようで、何度も墜落している。上手く成功する時は、ラミネートアンチビームシールドで攻撃を防いだり、ラケルタビームサーベルで攻撃をいなしたりする。

また、俺が使う武装は近接防御機関砲ピクウスとラケルタビームサーベル、ラミネートアンチビームシールドだけである。



あれから二週間が過ぎて。今日はいよいよ学園祭当日。IS学園は色々な企業や国が開発しているISの試験運用場のため、機密保持のため他の高校と違って一般公開はしていない。

その代わりに、IS学園の生徒たちに招待チケットを一枚発行して、家族や友人などに渡して学園に招待するらしい。他には国や企

業、軍等のお偉いさんがやってくる。

そして、現在。1年1組にて、御奉仕喫茶の仕事を俺は全うしている。

女子「はい。これ、8番テーブル」

雷真「了解」

最初は二人で執事をやることになっていたのだが、それだと二人が休憩に入ったら売れ行きが落ちるとのことで、午前は俺で、午後は一夏となった。

雷真「お待たせしました。こちら、サンドイッチのAセットが2つとバルトフェルトブレンドが2つに御座います。ご注文の品は以上でしょうか？」

女子「は、はい……。／／／／／／」

雷真「それでは、お嬢様方。ごゆつくりとどうぞ」ペコリ

お客様二人に一礼してから次の料理をテーブルへと運ぶ。そして、運び終わると入り口の方からご指名が入る。

女子「黒牙くん、ご指名入りました」

雷真「了解」

はあく。これで何回目だろうか。分かっではいた、いたけれども！朝の9時からスタートして、今は11時。その間に何回、いや、何百回。ご指名を受けた？

雷真「お待たせしました。お嬢様……って簪じゃないか」

簪「来ちゃった」テヘヘ

簪は少し恥ずかしそうに言った。

雷真「では、お席にご案内します」

簪「うん」

お客様として我がクラスへ来た、簪をテーブルへと案内をし、メニューを出す。

簪「ねえ、雷真。何か、オススメとかある？」

雷真「そうですね。自分としては、このバルトフェルトブレンドがオススメですよ」

簪「バルトフェルト……………？それって確か……………」

簪がストライクのデータでバルトフェルトさんのことを知っていたのか、バルトフェルトブレンドの名前について話そうとした時、後ろからメイド姿の刀奈と本音がやってきた。

刀奈「あら、簪ちゃんじゃない」

本音「ほんとうだ、かんちやんだ」

簪「お姉ちゃんに本音」

雷真「刀奈、生徒会の方は平気なのか？」

刀奈「ええ。どこかの異世界戻りの軍人さんが大幅にバッファを持ってしてくれたお陰様でね。あとは午後の演劇だけよ」

雷真「それは良かった」

簪「異世界戻りの軍人って……………それって、雷真のことだよね？」

刀奈「もちろん。本来は本音が処理しないといけない書類5日分を2時間足らずで処理するし。挙げ句には、本音を脅して働かせるわけで、此方としては大助かりだけど」

本音「いや、私もあの時だけは、めちやくちや頑張ったよ」アハハハ

と呑気に喋っていると……………。

シャル「そこ、喋ってないで手伝ってよ！それと雷真、あとが詰まってるから早くして！」

雷真「す、すまん」

雷真「そんな訳でゆっくりして行つてな」

簪「うん」

シャルロットに注意された俺は、お嬢様方の『執事とゲーム』や『執事へのご褒美セット』や『執事とツーショット』などなど、やはり執事が関連するオーダーが飛んでくる。

女子「黒牙くん、四番テーブルで『執事へのご褒美セット』でくす」  
雷真「四番テーブルって簪じゃんか」

『執事へのご褒美セット』を持って、簪が座っている四番テーブルに向かうとそこにはソワソワとしている簪がいた。

簪「……………」ソワソワ

雷真「お待たせしました」

簪「!!」ビクンッ！

雷真「こちら、『執事へのご褒美セット』でございます」

とセットをテーブルに置いて、簪の隣へと座る。

すると、ソワソワしていた簪はセットから冷やしたポツキーを一本取り、それを俺に向けてくる。

簪「雷真……あーん」

雷真「あーん」モグモグ

簪「美味しい？」

雷真「お嬢様が食べさせてくれるので、とても美味しいです」ニツ  
コリ

簪「はうっ!?／／／／／／／／／／」

マニュアルの通りにポッキーを食べさせてもらったあとに、『どう？』と聞かれたので笑顔で『お嬢様が食べさせてくれるので、とても美味しいです』と言ったら簪は顔と耳を真っ赤に染めて俯いてしまった。

雷真「おい、今更、恥ずかしがるなよ。今よりも恥ずかしいことを昔も今もしてるだろう?」

簪「でも……さっきのは、ズルい。／／／／／／／／／／」

雷真「何がズルいんだよ?」

簪「うううう……。／／／／／／／／／／」

そのあと簪は恥ずかしさのあまり、『執事へのご褒美セット』を俺にはくれず全て自分で食べて、自分の教室へ帰ってしまった。

まあ、自分で食べないで人にあげるのは損をしているから自分で食べれば納得だ。

簪とのやり取りを終えたあと、何組かお客様に対応していると鷹月さんから声がかかる。

鷹月「黒牙くん。織斑くんと交代して休憩していいよ」

雷真「あれ、もうそんな時間か?」

教室の時計を確認すると時刻は既に12時になっていた。

雷真「じゃあ、お言葉に甘えて」

鷹月「婚約者三人と学園祭を回るといいよ」

雷真「鷹月さんは一夏と回れたのか?」

鷹月「う、うん……まあね」

雷真「そうか。じゃあ、まずは誰と回るかな?」

そう口にすると刀奈とシャルロットが俺の悩みに答えてくれた。

刀奈「そのことなら心配いらないわ。既に順番は決まってるから」

雷真「刀奈にシャルロット」

シャル「午前のシフト、お疲れ様」

雷真「ああ。それで順番は？」

刀奈「順番はシャルロットちゃん、私、簪ちゃんの順よ」

雷真「了解」

シャル「じゃあ、行こう。雷真」

雷真「ああ」



という訳でトップバッターのシャルロットとまず最初に来たのは『料理部』だった。生徒会の仕事で料理部の出し物の内容は知ってはいたけど意外と賑わっている。特に主婦の方が多い。

雷真「シャルロットが来たかったのは、ここか？」

シャル「うん。更識のお屋敷に行ってから、日本の伝統料理にチャレンジしてるんだ」

雷真「へえー、そうなのか。まあ、シャルロットも刀奈や簪と同じで料理はうまいもんな」

シャル「ありがとう」

シャルロットは更識の実家に戻って以来、刀奈や簪、虚さんに何故か日本料理を教えてもらい、その味見役を俺と本音が担当したのである。

雷真「色々あるな」

シャル「そうだね」

一言で言えば、料理部の中はデパ地下のお惣菜売り場のような感じになっている。和・中・洋のお惣菜は多種多様である。それとお手軽価格だ。

雷真「おつ、豚の角煮じゃないか」

シャル「豚の角煮？」

雷真「豚の角煮は豚ばら肉を使った煮込み料理なんだ」

シャル「これは雷真の好物なの？」

雷真「ああ！ガキの頃に、お義母さんが作った豚の角煮を楽しみにしてたっけな」

シャル「豚の角煮は、雷真にとって思い出の料理なんだね」

雷真「そうだな。もう、4年くらい豚の角煮を食べてないな」

シャル「そっか、雷真は行方不明から戻るまでは……………」

雷真「そういうことだ。だから、今度、刀奈か簪に作ってもらおうことにするさ」

シャル「じゃあ！僕が作ったら、雷真は食べてくれる？」

雷真「もちろん、食べるよ。楽しみにしてるな」

シャル「うん！楽しみにしててね」



雷真「刀奈はここか？」

刀奈「そうよ」



刀奈と来たのはなんと、『写真部』だった。  
こここの出し物の内容は確か……コスプレ撮影だったような。

雷真「で、ここで何を撮るんだ？」

刀奈「それは、勿論。コスプレよ」

雷真「ですよね……………」

今度も、てな訳で執事服から普通の高校生が着るような学ランに着替えさせられて撮影所に行くと、そこにはメイド服から女性教師の格好でメガネをかけた刀奈が待っていた。

雷真「えーつと……………これは……………」

刀奈「遅いわよ、黒牙くん。補修の時間に遅刻よ」

雷真「……………」チラリ

俺はカメラマンとしていいのか定かでない。新聞部部長の黛薫子先輩に視線を送ると親指を立てて、グツジョブのサインをしてくる。

薫子「……………」(・▽・) b

このことから撮影が終わるまでは逃げられないことが確定した。

刀奈「先生の話聞いてるの、黒牙くん？」

雷真「刀奈、お前な……………」

刀奈「違うでしょ。私を呼ぶ時は、更識せ・ん・せ・い、でしょ？」

刀奈は教師の役にすっかり入っているのか、ノリノリで人差し指を俺の鼻先にチョンとやるので少しイラツと来たので、少し仕返しをすることにした。

雷真「ねえ、更識先生」



簪「それはもう見たから。吹奏楽部に来たのは、お姉ちゃんから雷真がピアノを弾けるって聞いたから」

雷真「なるほど、それでか」

てな訳で簪が聴きたがっているので吹奏楽部でピアノを借りることにした。

そして、吹奏楽部の教室に入ると閑古鳥が鳴いているようで部長さんだけが部屋の真ん中でぼーっと楽器を手入れしていた。

雷真「こんにちは」

部長さんに一声かけると、ハツとした表情で此方に気付く。

部長「おお！おお！やっと8人目のお客さんだ！それも今度は織斑くんが続いて黒牙くんまで、写真撮っていいかな？」

雷真「いいですけど。俺たちの前に一夏が来てたんですか？」

部長「うん。セシリアさんと一緒にね」

雷真「あー、なるほど」

部長「それでそれで、黒牙くんは何を体験する？織斑くんはホルンを体験したけど、黒牙くんはワイルドにエレキギターとかどう？」

雷真「いえ。簪が俺のピアノを聴きたいと言ってるので俺はピアノで」

部長「へえー、黒牙くんってピアノが弾けるんだ」

雷真「ええ。前にある人から教えてもらったので」

部長「じゃあ、お手並み拝見と行こうかな」

雷真「そんなに上手くありませんけど、それでいいならどうぞ」

部長さんに許可を得たので部屋にある、グランドピアノを借りて、ラクス・クラインの大名曲である『水の証』を奏でていく。

雷真「……………」

部長「これは長々」

簪「綺麗な曲……………」

そして、『水の証』を奏で終わると入り口の方から部長さんと簪以外にも拍手する何処かの組織の制服を着て、帽子を深くかぶり顔を見せない、二人の客人がいた。

「まさか、こんな場所で彼女の歌が聞けるとは」

「そうですね。私も彼女の、ラクス・クライン嬢の曲を聞いたのは宇宙で彼女を保護していた時以来です」

雷真「!？」

その二人の会話を聞いた俺は直ぐにグラウンドピアノから離れて簪と部長さんを守るように前へ出て警戒心を最大にまで上げる。

簪「雷真？」

雷真「アンタら、何故ラクス・クラインのことを知っている!!」

「支部長！私が最初から申し上げたように、やはり彼は警戒してしまっただけではありませんか!？」

「いやはや、ここまで警戒されるとは思ってたのだから。すまない、脅かすつもりはなかったのだがね」

雷真「一体、アンタらは誰で、何者なんだ。答えろっ!!」

俺がそう質問すると帽子をかぶった二人は自分の正体を明かすように帽子を頭から取った。

雷真「なっ、貴方たちは!？」

## 第39話

雷真「貴方たちは、デュエイン・ハルバートン准将にナタル・バジルール中尉!？」

ナタル「久しぶりだな、クロキバ少尉」

デュエイン「本当に久しぶりだな、少年」

俺はハルバートン准将とバジルール中尉の二人がこちら側に、ましてや生きていることに驚いていると後ろにいる簪が二人について尋ねてくる。

簪「雷真、知り合い?」

雷真「ああ。この二人は、コスミック・イラあっち側」の元上官たちで、尚且つ、女性の方は同じ戦艦の乗組員だった人だ。前にデータで見たらどう?」

簪「本当だ」

雷真「それで、何故お二人がこちら側に?」

デュエイン「その事についてや、コスミック・イラあちら側」の事について、私たちも君に聞きたいことがある。だから、何処か落ち着ける場所はあるかね?」

雷真「でしたら、少々お待ちを」

デュエイン「分かった」

ハルバートン准将が落ち着ける場所と言ったので、ケータイを取り出し。直ぐに織斑先生へ電話する。

千冬『もしもし、私だ』

雷真「あつ、織斑先生。急な電話ですみません」

千冬『それで、どうした?』

雷真「それが、コスミック・イラあっち側」の知り合いがこっち側に居まして」

千冬『なに!?!』

雷真「できれば、織斑先生にも知らせておこうと思ったので」

千冬『分かった。それで、他には?』

雷真「他には、悪いのですがこれから学園祭を抜けて、知り合いの方と話をしたいのですがいいですか?」

千冬『……………分かった、許可をしよう。ただし、私も同席させてもらう』

雷真「わかりました。それでは、例の整備場で」

千冬『分かった。では、』

雷真「はい」

織斑先生から了承を得たので通話を切る。

雷真「簪。悪いが刀奈に午後にある生徒会の演劇には出られないと伝えてくれるか?」

簪「うん……………分かった」

雷真「すまないな」

簪「ううん、大丈夫。軍事関連なんでしょう?」

雷真「ああ、そういうことだから。それでは、お二人とも、落ち着ける場所へご案内します」

デュエイン「無理を言ってますまないな」

雷真「いえ。自分としてもお二人の情報が少しでも欲しいですから」

ナタル「君も立派な軍人だな」

雷真「まあ、四年もやっていれば。あつ、部長さん。ピアノ、ありがとうございます」

ハルバートン准将とバジルール中尉のことで忘れていた。吹奏楽部の部長に、お礼を言う。

部長「う、うん。それと、もしかして、黒牙くんの家って軍人家系?」

雷真「あー、まあ、そんなところです」

雷真「じゃあ、簪。刀奈によろしくな」

簪「うん」

雷真「では、お二人共行きましょう」

デュエイン「うむ」

ナタル「分かった」

俺は簪と部長さんと別れたあと、ハルバートン准将とバジルール中尉を連れてカオスたちの機密整備区画へと案内する。整備区画に到着すると既に織斑先生が待っていた。

雷真「織斑先生」

千冬「黒牙か。で、そちらの二人が黒牙が言っていた……………」

雷真「はい、そうです」

デュエイン「デュエイン・ハルバートンです」

ナタル「ナタル・バジルールです」

千冬「ご存知かもしれませんが、織斑千冬です」

雷真「それでは、情報交換と行きましょう」

それから、情報交換すると……………まず、ハルバートン准将なのだが、地球降下作戦時にガモフ艦の特攻によりメネラオスと共に殉職したはずが、気付いたら二年前のこちら側に来ていたという。

それに何と、ハルバートン准将は現在、この世界ではI S委員会の日本支部支部長の一人だとか。

バジルール中尉は、アークエンジェルのローエン格林をドミニオンが受けた際に死んだと思っていたが、ハルバートン准将と同じような形でこちら側に飛ばされており、来たのは一年前とのこと。

また、ムルタ・アズラエルの生死は分からず。バジルール中尉はハルバートン准将の秘書をしているらしい。

雷真「本当に驚きましたよ。お二人とも」コズミック・イラ「あちら側」  
では死亡認定されてましたから」

デュエイン「それはそうだろう。私はローラシア級ガモフと轟沈。彼女に関してはアークエンジェルの陽電子破城砲を撃たれているのだから。無理もない」

ナタル「私もそう思います。奇跡とはいえ、無事生きて、尚且つ、ローエングリンの身体への汚染影響もない」

雷真「本当に奇跡ですね。それは」

デュエイン「私たちのことは以上だ。次は君の方から私たちがいなくなつたあとの”コスミック・イラあの世界”の話しを聞かせてくれるかね？」

雷真「分かっています。それでは、改めて、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アークエンジェル所属の黒牙雷真中尉です」

デュエイン「ほほう、君はオーブの軍人で、中尉とは。それにアークエンジェルはオーブ軍に加わつたのか」

雷真「はい。第二次ヤキン・ドゥーエの後にも、また戦争が起こりました」

ナタル「なに!？」

雷真「まずは、これを見てください」

俺はフリーダムバスターロットの拡張領域から待機状態になっているガイア、カオス、アビス、セイバーを起動状態で二人に見せる。

デュエイン「これは!？」 ナタルくん、これは地球軍の新型MモビルスーツSなのか!？」

ナタル「いえ! 私が見ているのは、フォビドゥン、レイダー、カラムィティーです。ですから、このMモビルスーツSは初めて見ました」

雷真「それはそうです。何せ、この四機はZ A F Tが開発したセカンドステージのMモビルスーツSなんですから」

ナタル「セカンドステージ?」

雷真「セカンドステージとは、第二次ヤキン・ドゥーエ戦争以降にZ A F Tが開発したMモビルスーツSのことです。現在、自分の専用機であるフリーダム、それにジャスティス、プロヴィデンスまではファーストステージ」



ナタル「まさか、キラ・ヤマトの次に、君がフリーダムのパイロットとは……………」

雷真「まあ、色々ありましたから。詳しくはこの端末にレポートにして纏めてあります」

再び、フリーダム拡張領域パススロットを開き。棒状の携帯端末を二人に渡す。

デュエイン「これは？」

雷真「これはZ A F Tの技術で作成した物で、端末の真ん中に指を当ててから左へ、スクロールしてみてください」

ナタル「なんと!？」

デュエイン「これは凄いな」

雷真「あとはタブレットなどを使うように指でスクロールしてもらえば、自分が作成したレポートが読めます」

デュエイン「うむ。では、暫し拝見させてもらおう」

ナタル「私もそうさせてもらう」

雷真「どうぞ。それとコーヒーをお持ちしますので、適当に座ってください」

デュエイン「ありがとうございます」

ナタル「感謝する」

そうして、二人は俺が渡した棒状の携帯端末のレポートを必死に読んでいます。コーヒーを二人の前に置くと感謝の言葉を一言言つたあと、また読み続ける。

千冬「黒牙、私は山田先生と本部へ戻る。あとは頼んだぞ」

雷真「わかりました」

織斑先生が本部に戻ってから約2時間くらい経過するとハルバートンさんとナタルさんは深く息を吐いた。

デュエイン「まったく。私が殉職してからというもの。連合の奴らは何を考えているのだ」

ナタル「それには私も同感ですね。ドミニオンのフォビドゥン、レイダー、カラミテイのパイロットの詳細は知ってはいましたが、ここまで非道な物だったとは……」

デュエイン「それだけではない！ あまつさえ、核を、それも三度もだぞ、三度!!」

ナタル「それは連合が完全にブルーコスモスによって掌握されているのですから仕方ありません」

デュエイン「はあく。連合に所属していた者として、恥ずかしい限りだ。まったく」

ナタル「今となつては、それは私も同感です」

二人は《元》とはいえ自分たちが所属していた軍の悪行に頭を抱えてしまった。

デュエイン「黒牙中尉。この度の情報の提供、誠に感謝する」

雷真「いえ。自分としては、お二人に協力を仰ぎたかったですからデュエイン「協力？」

ナタル「具体的には、どういう協力をして欲しいんだ？ 此方としても、内容によつては、出来ることもあるが出来ないこともある」

雷真「そうですね。これは、遠くない未来。ISを使った、もしくはIS型のMSモビルスーツを使った戦争が起きると自分は思っています」

デュエイン「戦争……だと?!」  
ナタル「まさか……そんな」

雷真「現在、世界ではISは女性にしか扱えないと周知された女尊男卑です。しかし、ここに存在するIS型のMSモビルスーツには男女関係なしに装着が可能なんです」

ナタル「そんなことか!？」

雷真「ええ。それに、ここにはありませんがこの四機以外にもZAFTモビルスーツのMSモビルスーツである。ザク、グフ、バビというMSモビルスーツにはISの様なコ

アはなく、バッテリーだけで動いています」

デュエイン「……………」

ナタル「……………」

雷真「他には、誰が、何処で、どの様に、どんな経緯で、これらを製造しているのか今の所、まだ自分には見当がつかないんです」

雷真「ですから、お二人にはIS型のMモビルスーツSについて何でもいので情報があれば自分に流して欲しいんです」

デュエイン「ふむ……………」

ナタル「……………」

デュエイン「分かった。此方で、君に有益だと思える情報を耳にしたら流そう」

ナタル「支部長がそう言われるのであれば……………私は」

雷真「ありがとうございます」

二人から協力を得られたことが本日一番の収穫だ。本当は別の所にあつただけど、儲け物だ。

雷真「それでは、自分もそろそろ学園祭に戻らないといけないので、出口までご案内します」

デュエイン「では、頼もう」

ナタル「よろしく、頼む」

雷真「はい」

二人を機密整備場から出口へ案内して、別れたあと。俺は、元々の仕事に戻ることにした。それは一夏の護衛だ。

そのために、生徒会主催の演劇が行われているアリーナに入ると、

通路の奥。詳しく言えば、ロッカールームの辺りから爆発音が聞こえる。

雷真「まさか、もう始めてるとは……。ちよつと、ミスったかな？でも、これから挽回すればいいか」

少し相手の出方が早かったことに反省しながら、まずは一夏の様子を見てから援護に出るかを考えることにした。

そして、バレないようにロッカールームに入ると……………。

一夏「ハアーツ!!」

???「ぐあああああ!!」

雷真「……………」

あれれ、可笑しいな？てつきり、一夏がピンチだと思って援護しに来たのに。何故か、一夏を狙ってたテロリストの方が一夏によつてボコボコにされてるんですけど？

てか、あの機体は……………先日、アメリカから奪取されたはずの第二世代型の『アラクネ』だな。

オータム「このクソガキツ！よくも、このファントム・タスクのオータム様を怒らせやがったな!？」

一夏「知るかよ、そんなこと。それよりもアンタの目的はなんなんだよ!」

そう言つて、一夏は物理刀状態の雪片式型の切っ先をオータムというファントム・タスクのメンバーに向ける。

オータム「そんなは簡単だ。お前の白式が目的なんだよ!」

オータムは一夏の問いに答えながら、その手に持っている射撃武装

を一夏に向けて放つ。しかし、それを一夏は冷静に捉えながらロツカーを盾にして円状飛翔をする。

そして、オータムの武装が完全に弾切れを起こすと、一夏はオータムの背後から瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で一気に間合いを詰める。

一夏「デヤアアアアツ!!」

オータム「ヘツ……………あめえんだよ!」

一夏「なっ!?!」

後ろから奇襲した一夏をオータムはその場で高く跳び。身体を捻り、蜘蛛のように天井に張り付くと両手から蜘蛛糸のような物を射出させて一夏を捕縛する。

一夏「くそっ……………このっ!」

オータム「無駄、無駄。この、アラクネの糸はそう簡単には引き千切れねえよ」

雷真「……………」

あちやう。これは場所が悪かったな。一夏には悪いがファントム・タスクについてもっと情報が欲しいから助けるのはあとな。

オータム「んじゃ、お楽しみタイムと行こうぜ」

一夏「……………」

オータムは捕縛した一夏を大の字に蜘蛛で吊し上げると懐から六本脚のついた機械を取り出す。

オータム「さて、白式をいただくとするか」

一夏「なに?」

一夏「がああああっ!!」

一夏はオータムによって装着された六本脚の機械から電流に似たエネルギーが流される。

オータム「フツハハハ！そうそう、ついでに教えてやんよ。第二回モンド・グロツソでお前を拉致したのは我々、ファントム・タスクだ！」

オータム「感動のご対面だな。フツハハハハ！」

一夏「てめえ……………」

雷真「(そろそろ、助けるか)」

一夏はオータムの言葉で頭に來たのか、無理に身体を動かし、その動きに反応して一夏の身体に装着されている機械から、更に強いエネルギーが流し込まれる。

一夏「ぐああああっ!!」

オータム「フツハハ！お前には、もう用はないから殺してやるよ」

オータムが一夏を殺すと言ったので一夏を助けるために出ることにした。

♪BGM：翔べ！フリーダム♪

雷真「一夏を殺される訳にはいかないな。俺は友人を殺されるのを見逃してやるほど甘くはないんでね」

オータム「なっ!?!」

オータム「てめえ、何処から入った？今、ここの全システムはロックしてるはずだ！」

雷真「全システムをロック？ああ、あの子供でも解除できる三流のキーロックのことか」

オータム「てめえ、誰が三流だと!？」

雷真「フリーダム！」

オータムがそう叫ぶと同時にフリーダムを緊急展開させて、ルプスビームライフルで一夏を縛り上げている蜘蛛糸を撃ち、一夏を解放する。

一夏「雷真……………」

雷真「よう、一夏。よく、戦ったな。あとは任せろ。ここからは俺のステージだ」

オータム「てめえー！」

雷真「ごちゃごちゃと五月蠅いから少し黙れ」

お仕置き感覚でオータムが乗る、アラクネの両手のマニピュレーターをビームライフルで撃ち抜き、破壊する。

オータム「なにっ!？」

雷真「なにを驚いてんだよ。これぐらい、楽勝だろう？」

オータム「そうか……………その武装に、その全身装甲のIS。奴と同じタイプのISか!!」

雷真「奴？お前、何か知っているのか!？」

オータム「そんなことを、てめえなんかに教えるかよ！」

雷真「なら、吐かせるまでだ！」

## 第40話

オータム「このっ!!」

雷真「甘いっ!!」

オータムは専用機である《アラクネ》の両手のマニピレーターをフリーダムofルプスビームライフルで破壊されるも残りの六本の脚で仕掛けてくる。

なので、ラミネートアンチビームシールドと右腕で前二本を受け止め、残りの二本をクスイファイアスレール砲二門で破壊する。

(※以後、ラミネートビームシールドと省略。 by 作者)

オータム「くそっ!」

雷真「まだまだ!!」

後ろ脚の二本を破壊したことによりオータムは体勢が崩れるので、追い討ちにラミネートビームシールドでシールドバツシュを決めてオータムを壁に叩き付けると、そのままロツカールームからアリーナへと吹き飛ばす。

オータム「がはっ!?!」

雷真「さあ、答えろ。”奴”とは一体誰のことだ!!」

オータム「こんなガキに私は……………」

雷真「あくまで答えないつもりか……………。なら、拷問してでも吐いてもらうぞ。ファントム・タスクのオータム」

あくまで答えないので、これ以上抵抗ができない様にルプスビームライフルでアラクネの全脚部のマニピレータを破壊してから本部にいるであろう、織斑先生に連絡する。

また、アラクネの糸から解放された、一夏に周囲の警戒を頼むこと



にした。

雷真「一夏、悪いが周囲の警戒を頼む」

一夏「了解」

雷真「織斑先生、こちら黒牙。演劇アリーナにて、一夏を襲ったファントム・タスクの一人と思われるIS乗りを制圧」

千冬『分かった。そちらに更識姉妹、デユノア、ボーデヴィツヒを向かわせる。それまで、警戒を怠るな』

雷真「了解」

織斑先生との通信を切ってから約5分ほどで刀奈たちが専用機を展開させてやって来た。

刀奈「雷真！」

ラウラ「一夏、無事か！」

一夏「ああ、無事だ」

雷真「来たか。他の三人は？」

簪「箒たちは増援に備えてる」

雷真「分かった」

箒から箒たちのことを聞いているとマニピレータを全て破壊され。尚且つ、シャルロットにサブマシンガン二丁を眼前に構えられ、ラウラにはレールカノンとAICによって完全に身動きが取れない状態に陥っているオータムが声をかけてくる。

オータム「おい、そこのお前」

雷真「……………」

オータム「全身装甲のISに乗ってる、お前だ!!」

雷真「なんだ？」

オータム「お前、名前は？」

雷真「何故、そんなことを聞く？」

オータム「いいから答えろ！」

雷真「黒牙雷真。IS学園生徒会、副会長だ」

オータム「なっ……………二人目の男性IS操縦者……………」

刀奈「ちなみに、私が生徒会長よ。それといいことを教えてあげるわ。IS学園で生徒会長は『最強』の称号なのよ」

刀奈「けれどね。その『最強』よりも今年のIS学園には上がいるのよ。誰だか分かるかしら？」

オータム「まさかっ!？」

刀奈「そうよ。貴女をボロボロにした彼が、現在のIS学園最強の生徒。『裏の生徒会長』と言っても可笑しくないわ」

オータム「くそっ……………」

雷真「会長。テロリストに情報を話し過ぎだ」

刀奈「あら、ごめんなさい。うちの生徒が強いものだから嬉しくて」

雷真「はあく、まったく。じゃあ、会長にはここを任せるぞ。俺は俺たちの援護に向かう」

一夏「なら、俺も！」

雷真「ダメだ。コイツらの目的はお前の白式だ。その目標が敵の中に飛び込んでどうする？」

一夏「ぐっ……………」

雷真「お前には会長たちを任せるぞ。いいな？」

一夏「雷真……………ああ、分かった！」

雷真「それじゃ……………」

ズガアアアアン!!

一夏と話していると突如、アリーナを覆う屋根が破壊され穴が空いた。

そして、空いた穴からは更識の諜報部隊から聞いていた、イギリス製ISのBT二号である《サイレント・ゼファイルス》の姿が確認できた。

一夏「なんだっ!？」

雷真「あれはサイレント・ゼフィルス……まさか、コイツまで居るとはな」

雷真「皆、ここは任せる!」

皆に一声掛けてから、空いた穴をくぐり外へと出る。すると、サイレント・ゼフィルスのパイロットはビット兵器を此方に向けてレーザーを放ってくる。

雷真「ビット兵器なら散々相手してきたんでね。そんな、お粗末な使い方じゃ俺はやられない」

ビット兵器からのレーザーを全て回避しながら、フリーダムに掛けているセーフティーロックを解除する。するとフリーダムのウィングスラスターから赤い光の粒子が漏れる。

??? 「なっ!？」

雷真「どうした?そんなに驚くことか?」

??? 「このっ……………!」

雷真「だから、お粗末なんだよ」

俺は右手に持っているルプスビームライフルを後ろ腰にマウントし、ラケルタビームサーベルを左腰から引き抜き、高速移動しながらサイレント・ゼフィルスのビット兵器を一つずつ破壊していく。

??? 「バカな……………!？」

雷真「諦めろ、サイレント・ゼフィルスのパイロット。お前とは年季が違う」

??? 「くっ……………!」

サイレント・ゼフィルスのパイロットは顔は見えないが口元は見えており、唇を噛んでいる所を見るに悔しがっているようだ。

雷真「大人しく投降すれば命だけは保証してやる」  
???「……………」

サイレント・ゼフィルスのパイロットにフリーダムのパラエーナプラズマ収束ビーム砲二門とクスイファイアスレール砲二門を構えて、投降を促しているとアリーナにいる簪から緊急通信が飛んでくる。

簪『雷真、新たに高速で接近する熱源を多数確認っ!』

雷真「照合できるか?」

簪『照合は……【GAT-01A1 ダガー】が40。他には……

【GAT-X131 カラミティ】、【GAT-X252 フオビドゥ

ン】、【GAT-X370 レイダー】の三機だよ!』

雷真「まさか、連合だ?!」

簪『どうする!?!』

雷真「一夏、ラウラはそのまま、目の前のターゲットを拘束、監視。

刀奈、簪、シャルロットはこっちに回ってくれ」

『『『了解!』』』』

刀奈たちに指示を出してから、サイレント・ゼフィルスによって何処かへ飛ばされたと思われる、簪、セシリアと鈴に通信を繋ぐ。

雷真「簪、セシリア、鈴。聞こえるか?」

簪「ああ、聞こえている」

セシリア「聞こえていますよ」

鈴「聞こえてるわ。それと悪いわね。私たちがハマしちやたから、その尻拭いさせて」

雷真「気にするな。それより、コイツをラウラたちの所まで移送し

てくれ」

箒「分かった」

セシリア「わかりました」

鈴「了解よ」

雷真「一応、抵抗ができないように……………」

念のためにサイレント・ゼフィルスが抵抗できないようにクスイ  
ファイアスレール砲二門でサイレント・ゼフィルスの蝶羽のようなスラ  
スターを撃ち抜き破壊する。

雷真「三人とも頼む」

三人にサイレント・ゼフィルスを任せると入れ替わる形で刀奈たち  
がやってきた。

刀奈「お待たせ」

雷真「大丈夫だ。箒、この際、仕方ないから専用機持ち全員に、1  
05ダガー、カラミティ、フォビドゥン、レイダー、四機のスペック  
データを送ってくれ」

箒「でも……………いいの？」

雷真「いいもなにも、奴らはこっちに來てるんだらう？なら、既に  
人目に付いてるはずだ」

箒「分かった」

雷真「それと、刀奈とシャルロットにコレを…………」

俺は拡張領域バスターロットからカオスたちの武装を元に開発した試作型をアン  
ロックして刀奈とシャルロットに渡す。

刀奈「雷真、これは？」

雷真「刀奈に渡したのは、グフの『テンペストビームソード』を元  
に開発した、ビーム刃を発生させることができる蛇腹剣と対ビーム

コーティングを施したラミネート装甲の………フリーダムのシールドと同じ強度を持つバッククラーで、剣の名前は『テンペストビームソードⅡ』。略して『テンペストⅡ』で、バッククラーは『ラミネートバッククラー』

刀奈「テンペストⅡ……ラミネートバッククラー……」

雷真「こいつはビーム刃をしまえば、アクアナノマシーンと併用して使用できるからな」

刀奈「すごいわね、ありがとう。雷真」

雷真「次に、シャルロットのは『ハイペリオン』と呼ばれる機体の『ザスタバ・ステイグマト』と呼ばれる武装を元にIS型に軽量したビームサブマシンガンを二丁。名前は安直に『ラファール・テイラー』

シャル「ラファール・テイラー………意味は『疾風の狙撃者』……だね。ありがとう、雷真」

雷真「二人のビーム兵器には小型だが、ストライクのバッテリーの強化系を組み込んであるからエネルギーを心配する必要はない」

刀奈「分かったわ」

シャル「これなら異世界のISとも戦える」

簪「雷真、皆にスペックデータを送ったよ」

雷真「分かった。それと簪のは、まだ調整中だ。悪いな」

簪「ううん。私には春雷があるから大丈夫」

雷真「じゃあ、作戦を伝える。まずは、フリーダムのハイマツト・フルバーストで、できるだけ105ダガーの武装を破壊する。もしも、無人機ならそのまま破壊する」

雷真「仮にハイマツト・フルバーストで105ダガーを撃ち漏らしたら三人で撃墜させてくれ。その間に、カラミティ、フォビドゥン、レイダーの三機は俺が抑える」

刀奈「もう、あの時みたいに一人で戦わないのね」

雷真「今は刀奈たちも戦える力があるからな。それと、フォビドゥンのシールドに気を付けてくれ。あれには『ゲシュマイティツヒ・パンツァー』と呼ばれるビームを歪曲させるシステムが導入されてるか

ら」

シャル「なら、そのフォビドゥンは実弾の攻撃が有効だね」

雷真「ああ、だから、もしかしたらシャルロットたちにもフォビドゥンたちを相手してもらおう。これで作戦は以上だ。30km先に敵影を捕捉したから備えろ」

「了解！」

雷真「織斑先生、先ほどの会話は聞こえていますね」

千冬『ああ、聞こえている』

雷真「なら、念のために未確認ISに警告を送ってください」

千冬『分かった。やってみよう』

それから織斑先生の警告はカラミティたちに向けて発信されたがカラミティたちからは何の返答もないまま、IS学園まで18km圏内までに入った。

雷真「織斑先生。未確認ISが10km圏内に入ったら迎撃に向かいます」

千冬『分かった。こちらも教師陣にISを展開させてある』

雷真「了解」

織斑先生に最終確認を通信を終えるとカラミティたちは、あと僅かで10km圏内に入るため、動きだす。するとカラミティ、フォビドゥン、レイダー以外の105ダガーがビームを放ち始めた。

そして、念のためフリーダムに搭載されている生体反応を確認できるカメラを起動させると、カラミティ、フォビドゥン、レイダーには生体反応があり。他の105ダガーには生体反応が皆無だった。

雷真「カラミティ、フォビドゥン、レイダー、ダガー……………そして、フリーダム。これだけのMSモビルスーツが集まると、オーブ解放戦を思いだ

すな」

雷真「目標を確認。尚、生体反応はカラミティ、フオビドウン、レイダーのみ確認。他のISには生体反応無し。これより、迎撃行動に移行する」

『『『『了解！』』』』』

雷真「105ダガーの装備はエール、ジェット。それにIWS Pか……これは他にもありそうだな。距離算出、ターゲット確認、マルチロック」

雷真「いけえええっ!!」

こうして、こちら側の世界で戦争の始まり。

『IS学園防衛戦』の火蓋が切って落とされた。



## 第41話 武装設定有り

フリーダムの高イマツト・フルバーストで105ダガーたちを狙い撃ったことで105ダガーたちも反撃とばかりにビームライフルを撃つてくる。

雷真「クソツ、五機逃した!」

簪「それは私たちがやる」

シャル「任せて」

刀奈「だから、雷真は例の三機をお願い」

雷真「分かってる」

♪BGM：悪の三兵器

刀奈、簪、シャルロットと別れて俺は、カラミティ、フォビドゥン、レイダー三機の相手をするために、三機へ突撃する。

雷真「おい、カラミティ、フォビドゥン、レイダーのパイロット。何故、IS学園を狙う!」

「あ?」

「へ?」

「はい?」

雷真「なっ……俺と一夏以外の男性操縦者!」

三機の返答から聞こえたのは男性の声だった。まさかの、新たな三

人の男性IS操縦者に驚くが直ぐに思考を元に戻す。

雷真「何故、お前たちがその機体に乗る、IS学園を狙う！」

俺はそう、三機へオープンチャンネルで問う。しかし、返答は……。

???「何故って……。俺たちは、ただやれって言われたただだから？」

???「そうだぜ？俺たちは、あの人にやれって言われたから殺るだけさ」

???「シャニ、クロト。ごちゃごちゃうるせえぞ」

シャニ「面倒くさいけど、あの人に頼まれてるからね。邪魔な奴は消すよ」

クロト「ですね。俺たちはあの人に恩があるから。だからやるよ、あの白いの！」

シャニ「ハンツ！」

オルガ「俺に命令するんじゃないやねえ！墜ちろおおお!!」

雷真「なっ……!!？」

カラミティのパイロットが対ビームシールドに複合されているケーファアーツヴァイと背部にある2連装高エネルギー長射程ビーム砲 シュラークを何の躊躇もなく撃ってくる。

なので、直ぐにそれを回避する。

雷真「交渉の余地はないのか!？」

クロト「そんな物は最初からねえーよ！」

シャニ「だねー」

オルガ「ハハハハハッ！」

雷真「クソッ！」

レイダーはM A 形態でカラミティを乗せたまま此方へ、飛行しながら左腕に装備されている2連装高初速機関砲を放ってくる。

雷真「そんな物……!」

2連装高初速機関砲に合わせる形でフリーダムのカスイファイアスレール砲で相殺する。

シャニ「後ろ、がら空きだよ。白いの!」

雷真「チツ……!」

レイダーの攻撃を相殺すると直ぐにフリーダムの後方からの危険アラームが鳴るのでフリーダムのウイングスラスターを動かして仰向けになる形で回避運動をする。すると、先程まで俺の首元があった所を狙った様にフォビドウンの物理武装であるニーズヘッグが目の前で空を切る。

そして、完全に空を切ったら。前にストライクの時に行った様に逆上がりをする形で脚部スラスターを動かし、オーバーヘッドキックをフォビドウンに決める。

雷真「オラアアア!!」

シャニ「ぐああああ……!?!」

オルガ「甘めえんだよ、シャニ!」

クロト「なにやってんだよ。このバァーカ!」

雷真「このっ……!」

やはりと言うべきか、この三機を動かしているパイロットは素人のIS乗りではない。

”あちら側”で戦った、『オーブ解放戦』や『コロニーメンデル』、『第2次ヤキンドゥーエ攻防戦』の時の地球連合軍のパイロットと戦い方が酷く酷似している。

雷真「キラも、あの時は一人でこんな奴らを相手してたのかよ!?」  
クロト「必殺っ!」

雷真「くっ……!」

カラムיתי、フォビドウンの攻撃を回避していると二機の攻撃の間で上手い具合にレイダーの頭部のビーム武装であるエネルギー砲ツォーンを放ってくる。

シャニ「逃がさないよ」

それを左へ大きく回避すると、フォビドウンがわざわざツォーンに当たりに行くように動き、両肩部にあるシールドに搭載されている対ビーム防御のゲシュマイディッヒ・パンツァーを使い、ツォーンを此方へ曲げてくる。

雷真「なにつ………コイツら!」

流石に回避と防御、相殺だけでは罫が開かないので、こちら側で三度目の《本気の殺意》を持ってビーム兵器を三機へと放つ。

雷真「そこっ!」



くところ変わってアリーナにてく

一夏「なんだよ………あれ」

箒「あれが雷真の……本気の動き」

鈴「次元が違うわ……」

ラウラ「ああまで、我々の動きと違うとはな」

セシリア「私たちも力があれば……」

俺たちは雷真に言われた通りにフアントム・タスクの二人を監視しながら自分たちの専用機のハイパーセンサーで簪さんから送られて来たデータに載っていた、確か……カラミティ、フォビドゥン、ライダーとかいうISの戦闘を見ている。

鈴「なっ……ビームが曲がる!？」

ラウラ「あれがデータに載っていた、フォビドゥンの特殊武装、ゲシュマイディツヒ・パンツァーか……」

箒「防ぐのではなく、反らすといった感じだな」

セシリア「ですが、ビーム兵器がダメでも雷真さんのフリーダムには実弾兵器がありますわ!」

ラウラ「ゲシュマイディツヒ・パンツァーは何とかなるだろうが、あの三機にはフリーダムやストライクと異なる装甲が組み込まれているようだな」

一夏「うそだろ!？」

鈴「まさか、臨海学校の時に現れた、カオスたちと同じ、ヴァリアブルフェイズシフト V P S 装甲とかいう奴なの!？」

ラウラ「いや、そうではないらしい。あの三機にはトランスフェイズ P S 装甲を元に改良された装甲、名前はトランスフェイズ T P 装甲と呼ばれる物らしい」

一夏「トランスフェイズ装甲……」

ラウラ「フェイズシフト P S 装甲の省電力化で、内部に搭載されている圧力センサーによって適宜、トランスフェイズ T P 装甲が作動するようだ。実質、フェイズシフト P S 装甲と何ら変わらない」

箒「何とも厄介な装甲だな」

鈴「フェイズシフト P S 装甲と変わらないんじゃ、私の甲龍じゃあ………歯が立たないISね」

ラウラ「私のシュバルツエア・レーゲンも大して有効打になる装備はない」

セシリア「私はブルー・ティアーズやスターライトmkⅢを使つたとしても、雷真さんやあの三機の動きに合わせられる自信は皆無ですわ……」

箒「私の紅椿でも無理だ」

一夏「今は無理でも、俺はこう思うんだ。いつか、雷真の様に強くなりたい。雷真に背中を預けて貰えるようになりたい……」

箒「一夏……」

セシリア「一夏さん……」

鈴「一夏、アンタ……」

ラウラ「フツ、流石は私の嫁だな」

一夏「いつか必ず。雷真の隣に……いや、雷真を越えてみせる」

この時に俺は、明確な目標を見つけた。



く再び、ところ変わって、学園付近の海上にてく

雷真が撃ち漏らした、五機の105ダガーを相手をしている私たちは、雷真がくれた新武装のお陰で優勢に立ち回れている。

刀奈「やっぱり、カオスたちと比べると弱く感じるわね」

簪「それは分かる」

シャル「それだけじゃないよ。夏休みにやった雷真との特訓と新し

い武装の恩恵が大きいよ」

刀奈「確かにそうね」

105ダガーがビームライフルを撃つてくれば、私は雷真からもらったアンチビームバックラーで弾き。シャルロットちゃんは、自前のガデー・カーテンでビームを防ぐ。簪ちゃんは、遠距離からのバックアップをしているからビームの心配はないけど、念のためと言って何とストライクから抽出したデータを元にビームを阻害させる自作型アンチビーム爆雷を作成し、それを学園に向けて放つてくれた。

そのお陰で、105ダガーのビームライフルから放たれるビームは学園には届かずに霧散している。

また、仮にシャルロットちゃんのラファール・テイラーを連射して学園の方へ向かっててもアンチビーム爆雷が阻害してくれる。

刀奈「二人とも、そろそろ105ダガーの行動パターンは読めたかしら？」

簪「うん、大丈夫」

シャル「僕も、いつでも行けるよ！」

刀奈「じゃあ、行くわよ！」

簪「うん！」

シャル「行くよ！」

三人で五機の105ダガーへと突撃しながら、私は臨海学校の時に戦ったグフの動きと同じようにバックラーに仕舞っているテンペストIIを引き抜き、ビーム刃を発生させ、蛇腹剣形態にして鞭の様に105ダガーへ振るう。

刀奈「さあ、この子の試し切り相手になってもらうわよ!!」

シャル「僕も、ラファール・テイラーの的になってもらうよ!!」

簪「いいなあ、二人とも……………」

テンペストⅡを振るいビーム刃が105ダガーに当たる。するとその時の手応えは余りにもスーっと物が切れる感じだった。

刀奈「なに、この手応え……………!?!」

もしも、ラスティ―ネイルが錆び付いた刀と例えるなら、このテンペストⅡは宛ら……………鍛え抜かれた刀だ。

刀奈「もしも、私が斬るための刀なら、雷真はそれを鍛え直す小槌ね」フフフフ

そんなことを口にしてしていると視界にシャルロットちゃんが踊る様にラファール・ティラールを105ダガーへ撃ちまくっていた。

その、撃たれまくった的である105ダガーは既に蜂の巣状態に陥っていた。

刀奈「シャルロットちゃん、絶好調ね」

シャル「うん!この、ラファール・ティラールは凄く撃ち易いんだ。今まで、こんなに撃ち易い銃は初めてだよ!!」

簪「二人とも、嬉しいのは分かる。けど、残りの二機が学園に向かってるよ!!」

シャルロットちゃんと雷真からもらった武装の感想を言い合っていると少し怒っているのか、いつもよりも強い声を出しながら105ダガーを打鉄式式の物理武装である夢現で真つ二つに両断していた。

刀奈「分かったわ!」

シャル「了解!」





「三度どころ変わって、学園から離れた海上」

クロト「撃滅っ！」

シャニ「ぶっ壊れな！」

モビルスーツ  
M S 形態のレイダーの右腕部から射出された物理武装のミョルニルを回避すると、フォビドウンの誘導プラズマ砲フレズベルグから放たれたビームが、ゲシュマイディッツヒ・パンツァーで歪曲させた様に此方へと曲がって襲いかかってくる。

それをラミネートアンチビームシールドで防ぐと後ろからカラミティによって複列位相エネルギー砲スキュラと2連装高エネルギー長射程ビーム砲シユラークが此方へ飛んでくる。

(※以後、ラミネートビームシールドと省略。 by 作者)

雷真「ぐっ……！」

オルガ「もらったぜえ！」

実戦で試すは初めてではあるがフリーダムリボルバー・イグニッション・ブーストのメインスラスタールとウイングスラスタールを個別に吹かし、個別連続瞬時加速を行い、カラミティからのビームを全て回避する。

回避に成功すると、お返しにハイマツト・フルバーストを放つが、カラミティは瞬時加速イグニッション・ブーストでハイマツト・フルバーストを回避する。

雷真「瞬時加速まで使えるのか!？」

オルガ「この野郎っ！」

シャニ「残念でした」

クロト「下手くそ」

オルガ「シヤニ、クロト、てめえらーっ!!」

カラミティとレイダー、フォビドウンのパイロットがケンカをしているようなので、夏休みの特訓で物にした、30秒しか持続できない”アレ”を使うことにした。

そのためにはまず、SEEDを発動させる必要があるので意識を『守る』に集中させる。すると、何度も経験した、頭の中で何かが弾け飛び、思考がクリアになり、瞳からハイライトがなくなる。

雷真「……………」キュパーン

雷真「守るために、俺は……………」

SEEDを発動させてから、もつと深く集中しようとさせると今度は頭の中で、何かが弾け飛ぶのではなく、一つの雫が水溜まりに落ちて、水面に波紋が広がって行くように視界に写る物、全てがゆっくりになっていく。

雷真「行ける」

前にテレビで見た、タキサイキア現象と呼ばれる物に似た感覚になると、左右の腰からラケルタビームサーベルを二本とも引き抜き、まずは、カラミティに向かって二段階<sup>ダブル・イグニッション</sup>瞬時加速を連続で行う。カラミティの目の前まで行くと、プラズマサボット・バズーカ砲と連装高エネルギー長射程ビーム砲の砲身を切断。

オルガ「なに……………!?!」

次は、フォビドウンのニーズヘッグと、ニーズヘッグを持っている両腕のマニピュレータを切断。

シヤニ「なっ……!?!」

最後にレイダーの超高初速防盾砲とミヨルニルをマニピュレーターごと切断する。

クロス「僕まで!?!」

雷真「どうする。その状態で、まだやるのか?」

オルガ「こいつっ……!」

シヤニ「白いのっ……!」

クロト「てめえっ……!」

カラミティたちの武装を破壊するとタキサイクア現象の様な、あの現象が元に戻る。

元に戻るとそのまま、カラミティたちにルプスビームライフル、クスイファイアスレール砲、バラエーナプラズマ収束ビームの照準を合わせ、いつでもフルバーストできる様に構えながら睨み合う。

睨み合いが約5秒ほど続くと一夏たちがいるアリーナの方で爆発が起こる。

雷真「爆発!?!」

オルガ「チッ!タイムアップかよ!?!」

クロト「みたいですね」

シヤニ「次は必ず殺るよ。白いのっ!」

爆発が起きたことに驚いた一瞬の隙に、目の前にいるカラミティ、フォビドウン、レイダーの三機がそれぞれの機体の本体に搭載されているエネルギー砲が此方に向けて放たれる。

雷真「しまったっ!?!」

直ぐに、ラミネートビームシールドで三発のエネルギー砲を防ぐ

が、余りの威力に衝撃を殺しきれずに後方へ少し飛ばされる。

雷真「ぐああああ………!!」

何とか姿勢を直し、直ぐに三機からの攻撃に警戒をするが、攻撃は来ず、何故か分からないが三機は後退しており、既に距離が離れていた。

多分、追えば追い付くだろうが今は、あの三機よりも一夏たちが心配なので演劇アリーナに向かう。

雷真「皆、無事か!？」

アリーナに着くと、そこには爆発した何かの破片と、多分だが、刀奈のISである霧纏ミステリアス・レイテイの淑女のアクアナノマシンで今も尚、形成し続けている水のドームがあった。

雷真「おい、刀奈!」

水のドームに近付いて、ドーム越しに刀奈の名前を呼ぶと水のドームが上から綺麗に水が流れる様に消滅していく。完全に消滅すると刀奈以外の皆は意識を失っているのかISスーツの格好で倒れていた。

刀奈「私たちは皆、無事よ。それとごめんなさい。亡国企業ファントム・タスクの二人には爆発の時に逃げられたわ」

雷真「そうか……。でも、皆が無事で良かった」

あの爆発で誰もケガをしていないことに俺は安堵する。すると、その拍子でSEEDが解けてしまい、今まで気にならなかつた額の汗が気になりだす。

そのため、フリーダムバスターの頭部装甲とオーブロケットのヘルメットを拡張領域

に収納して、頭を左右に振り汗を飛ばす。

刀奈「すごい汗じゃない」

雷真「流石に臨海学校とは違って、今回は有人機だからな。それに、奴らの実力は”あっち側”コスミック・イラで戦った奴らと同じくらいだった」

刀奈「そんな……………」

雷真「まあ、取り敢えずは一件落着だろう」

刀奈「なら、いいけど」

## 第42話

雷真「それじゃあ、刀奈。あとの処理を頼むな」

刀奈「分かっているわ。けれど、早く帰ってね」

雷真「ああ。じゃあ、行ってくる」

刀奈「気をつけて、行ってらっしゃい」

雷真「黒牙雷真、アビス。行きます！」

今回はフリーダムではなくアビスを纏って、学園の船着き場から  
M<sup>モビルアーマー</sup>A形態で海へと入る。

何故、今回はアビスを纏っているのかはカラミティたちが撤退したため、フリーダムのハイマツト・フルバーストで撃破した、105ダガーたちの残骸を回収して、外部へ情報が漏れないように証拠隠滅をするためでもある。

他には、海中に沈んだ105ダガーたちの残骸を回収するのに、宇宙用のフリーダムよりも海中用にも設計されているアビスの方が適切だと思ったからだ。

雷真「確か、座標だところら辺に……あつ！」

雷真「あれだな！」

海底に105ダガーの頭部や対ビームシールド。他には、ストライカーパツクの残骸などを見つけた。

雷真「早く回収しないと、105ダガーを欲しがら奴らが回収しに来そうだな」

直ぐに回収するためにM<sup>モビルアーマー</sup>A形態からM<sup>モビルスーツ</sup>S形態に変形して、地道に一つずつ回収していく。

それから一時間ほど地道に残骸を回収し終わると海面に何隻か船がやって来ていた。

雷真「危ねえ……。あと少し遅かったら、105ダガーたちの残骸を回収できていたな、こりゃ」

雷真「それにしても、105ダガーのストライカーパックの中に面白いのがあったな。これを使わない手はないよな」

105ダガーの残骸の中に、面白そうな物を見つけた俺は、少しウキウキしながらM A形態で学園に向かおうとするとアビスのリーダーとソナーに背後から高速移動する熱源が五機。

雷真「後ろ!？」

雷真「次から次へと、今度は何だよ!？」

カラムיתי、フォビドゥン、レイダーだけでも頭を悩ませているのに、水中で高速移動する熱源にイラついてしまう。

因みに、この世界には水中型のISは存在しない。ISは宇宙空間を主に想定されているため、水中を主にした機体は作られていないのだ。

これらのことから、現在、水中を高速移動する熱源の正体は間違いない。<sup>モビルスーツ</sup>M Sだ。

雷真「熱源照合……。【UTA/TE-6P ジオグリーン】が三機。【UMF/SSO-3 アッシュ】が三機」

雷真「連合の次はZAF Tかよ!？」

直ぐにアビスをM A形態からM S形態に変形させて、アビスの物理武装である、ビームランスをビーム刃を出さずに構える。

一応、俺も更識の人間なので更識流の槍術は習得している。

雷真「……………」

徐々に此方へと近づいてくる、ジオグリーンとアツシユ。そして、此方との距離が50mほどになると六機は静止し、頭部とモノアイを左右に動かし、海底に何かを探すような仕草を見せ、何もないと確認すると、そのまま来た方角へ撤退して行ってしまった。

雷真「一体、何なんだよ……………」

ジオグリーンとアツシユの目的は分からないが、一つだけ分かったことがある。それは、この世界でも戦争が起きるかもということだ。

フロントム・タスクとカラミティたちの襲撃、105ダガーの残骸回収、ジオグリーンとアツシユの接触の後、学園に戻って来た俺は刀奈と共に後処理などをしてから理事長室の前へと足を運んでいた。

雷真「1年1組、黒牙雷真です」

刀奈「同じく、更識刀奈です」

理事長の扉の前でノックをしてから学年と名前を言って少し待つと理事長室から年配の男性の声が聞こえてくる。

???「どうぞ、入ってください」

雷真「失礼します」

刀奈「失礼します」

声の主である男性は普段、用務員の仕事をしているが実質は、この男性、轡木十蔵こそがIS学園の運営者にして、第16代更識楯無の武術の師匠であり、俺の武術の師匠であり、例のあの人だ。

また、師匠以外には織斑先生と山田先生もいた。



雷真「ご無沙汰しています。師匠」

刀奈「ご無沙汰してます。十蔵さん」

十蔵「お久しぶりですね、二人とも。特に雷真くんは行方不明……異世界から帰ってきて以来ですかね？」

雷真「……………」チラリ

千冬「……………」コクリ

「どうやら、俺が」コスミック・イラ「あちら側」に飛ばされたことを織斑先生が師匠に話したようだ。

十蔵「それでは、報告をお願いします」

師匠に報告をするために一步前に出て、今までの事を報告する。

雷真「分かりました。まずは、織斑一夏に関してですが、彼のIS訓練についてはかなり順調です」

十蔵「ほう」

雷真「ファントム・タスク亡国企業の一人であり、アメリカから強奪された第二世代型ISのアラクネのパイロットであるオータムと名乗る作業員を後一歩の所まで追い詰めていました」

十蔵「それはそれは」

雷真「彼も、呑み込みが早いので教え甲斐があります」

十蔵「そうですね。次をお願いします」

雷真「はい。ファントム・タスク今回の亡国企業以外に襲撃して来た、四種の未確認ISですが、この四種は自分が飛ばされた異世界の機動兵器です」

雷真「まず、このストライクに似ている機体ですが名前は「GAT-01A1 ダガー」。略して、105ダガーと呼ばれています。また、この機体はストライクの正式量産機です」

十蔵「ストライクと言えば以前は、雷真くんの専用機の名前ですね」  
雷真「そうです」

千冬「なら、この105ダガーにもストライクと同じPフェイズソフトS装甲が

？」

雷真「いえ、105ダガーは量産機のためコスト面を配慮してフェイスソフトP S装甲は使われていません。しかし、コックピットだった胴体部だけフリーダムや霧纏ミステリアス・レイディの淑女の対ビームシールドと同じ、ラミネート装甲が使われています」

真耶「胴体だけ………」

刀奈「でも、雷真。105ダガーはストライクの量産機なんですよ？なら、ストライクと同じで状況に応じて武装を換装できる、ストライカーシステムが使えるってことよね？」

雷真「ああ、そうだ。105ダガーの胴体フレームはストライクと同じX100系フレームだからな」

千冬「だとすると、ランチャーストライカーのアグニが厄介だな」  
真耶「そうですね」

雷真「次に残りの三機ですが、この三機は正直、105ダガーよりも厄介です」

千冬「105ダガーよりもか？」

雷真「ええ。まずは、【GAT-X131カラミティ】」

千冬「GAT-X……？まさか、コイツはストライクの後継機か？」

雷真「そうです。こちら側の世界で言えば、第一世代型GATシリーズ、通称：G兵器である、ストライク、イージス、デュエル、バスター、ブリッツのデータ。主にストライクから抽出されたデータを元に製造された、第二世代型のGATシリーズ内の一機です」

真耶「内の一機？では、他の二機も？」

雷真「その通りです。【GAT-X255フォビドゥン】、【GAT-X370レイダー】。この二機もカラミティと同じ、第二世代型GATシリーズに当たります」

雷真「今回、かなりの人にカラミティ、フォビドゥン、レイダー。それに、105ダガーを見られてしまったので詳細は口頭よりもデータで見た方が早いと思うのでデータを提出します」

俺はポケットからハルバートンさんとナタルさんに渡したのと同

じ機械を三本、師匠と織斑先生、山田先生に渡す。

十蔵「確かに受け取りました」

雷真「それと、105ダガーの残骸を回収している際に、先ほど説明した四種の機体以外にも新たな二種の機体と接触しました」

千冬「なにっ!？」

十蔵「その機体の正体は？」

雷真「カラミティたち、地球連合軍とは違い、接触したのはZAF Tの機体でした」

真耶「ZAF Tというとクラス代表トーナメントの時のグフにバビ。臨海学校のザク、ガイア、カオス、アビス、セイバーを作った組織じゃないですか!？」

雷真「それは<sup>コスミック・イラ</sup>あちら側<sup>モビルスーツ</sup>ならですけどね。それで、接触した機体は水中型M S、【UTA/TE-6P ジオグリーン】が三機。【UM F/SSO-3 アッシュ】が三機。計、六機と接触」

雷真「しかし、戦闘は起きず、何かを探している様な行動を見せ、その後、撤退しました」

十蔵「わかりました。報告、ご苦労様です」

雷真「いえ」

報告が終わると、一步下がり、この次の指示を待つと師匠は此方に笑顔を見せる。

十蔵「それでは、堅苦しい話はここまでにして。お茶にしましょう」  
刀奈「わーい！十蔵さんの御茶請けセンス良いから楽しみ！」

十蔵「それはそれは、嬉しいことを言ってくれますね」

雷真「では、お茶は俺が入れますよ。師匠は、緑茶とコーヒー、どちらがいいですか？」

十蔵「そうですね……。では、雷真くんのお任せで」

雷真「分かりました。織斑先生と山田先生は、どうしますか？」

千冬「私は、あのバルトフェルドブレンドを頼みたい」

真耶「あつ、私もそれで！」

雷真「分かりました。刀奈は？」

刀奈「私は緑茶がいいなあ」

雷真「分かった」

全員分のお茶を用意すると、俺たちは寮の夕食時になるまでティータイムをすることにした。

師匠たちのお茶会や夕飯を食べ終えた俺は、一夏と共に大浴場で疲れを湯船に溶かしている。

雷真「くあああ……………」プカプカ

一夏「雷真、湯船で浮かぶな」

雷真「悪いが無理だ。流石に今日は疲れが溜まってるんだ」プカプカ

一夏「そりや、あの三機を一人で相手してればな。どのくらい、神経を磨り減らすか俺には分からないけど」

雷真「(連合のあのMモビルスーツSたちが出てくるのは予想外だった。例のモノを急がせる必要がありそうだな)」プカプカ

一夏「なあ、雷真」

雷真「あ、なんだ？」

一夏「どうやったら、お前みたいに強くなれるかな？」

雷真「……………」

一夏「今日の雷真の動きを見て、次元が違うって知った。だから、いつかは俺も、雷真みたいに強くなりたいんだ。皆を守るために」

雷真「俺のように……………か……………」

♪BGM：君と僕、届かぬ想い♪

一夏が俺の様に強くなりたいたいという言葉聞いて、俺は思い出した。

初めて、人を殺した感触。初めて殺意を持って殺した感触。俺の所為で死んだ仲間の悲しみ。

雷真「一夏、お前は俺とは違う強さを手に入れろ」

一夏「え？」

雷真「俺のは、それしか他に出来なかつたから身に付いた力だ。でも、一夏は違う。一夏は、まだ、どんな強さを身に付けるのか選べるんだ」

一夏「……………」

雷真「だから、今はまだ考えるんだ。お前が本当に付けたい力を、その意味を」

一夏「本当に付けたい力にその意味……………」

雷真「それとこれは俺の戦友が言っていた言葉だ。」

『戦場で、初めて人を撃った時、俺は震えたよ。だが、すぐ慣れると言われて、確かにすぐ慣れた』

……………とな」

一夏「……………」

雷真「俺もその人の言葉通り、一時期、人を撃つことに慣れてしまった。でも、ある夢を見てから少し変わった」

一夏「夢？」

雷真「俺が……………。この、両の手で刀奈や簪、本音、虚さん。大切

だと思っっている家族や友人たち、皆を殺している夢だ」

一夏「なっ……!!?」

雷真「その夢を見たあとから、俺は力の意味を探して、考えて。そして、見つけた」

雷真「今は刀奈に簪、シャルロット、本音、虚さん。この五人を守るためなら、俺は国だろうが世界だろうが何だろうが敵に回す覚悟がある」

雷真「全ての大切なモノを守ることは出来ない。だから、俺は、この両の手で守れるだけの大切なモノだけを守る。それが今の俺の力の意味だ」

雷真「話は終わりだ。先に上がる」

一夏に、本当に身に付けたい力と、その意味を話したあと。俺は大浴場を先に出て、自室に着くと、そのまま倒れ込むようにベッドに倒れて眠った。

## 第43話 人物設定有り

色々であった学園祭の翌日。俺は振替休日を使って、一人でとある場所に来ている。

その、とある場所とは、『モーニング・グロー』と呼ばれる会社だ。元々、この会社は経営危機により廃業が決まりそうな所を偶然、お義父さんが助け、資金援助を行う代わりに会社の敷地を何割か『更識』の人間が使えるようにするという条件で今も経営は続いている。

そして、その『更識』の人間。正しくは刀奈、簪、本音、『表の更識』の人間でなく、俺や虚さんとその部隊の人間といった、『裏の更識』が使えるようになっていて特別区画の格納庫へ俺は進んでいく。

特別区画の格納庫に繋がる扉の前に立つと、扉に搭載されているセンサーが自動的に起動し色々個人認証のチェックを受ける。

チェックは、指紋、網膜、等々。生体に関する色々なチェックを受ける。何せ、この扉の奥には世間にはまだ、公表できないモノがあるからだ。

やがて、チェックが終わると扉が開き、中はエレベーターとなっている。

因みにだが、このセンサーを搭載されている扉はラミネート装甲で作られている。

雷真「……………」

エレベーターの『ORB』と書かれたボタンを押すと、エレベーターはそこへ向かうように動き出す。

そして、目的の区画に到着してエレベーターの扉が開くと、そこには約50人くらいの白衣を着用した、30〜50代くらいの男女がいそいそと何かISのような物を製造していた。

今度こそ、目的の区画へ入ると特別区画の格納庫にいるハロが俺の名前を叫ぶ。すると段ボールの中に、色々な機材を詰め込んで運んでいる一人のメカニックが俺を見つける。

ハロ「ラァァアイシン！」

「え？あつ、雷真さん！」

「え？」

「雷真さん？」

「雷真の旦那？」

その、一人の一声で今まで必死にIS擬きをいじっていた人々が手を止め。此方を向いて、俺の名前を呼んだ。

雷真「よう。皆、ご苦労様」

???「おはようございます。若様」

雷真「おはよう、シノブ。今日はこっちに来ていたのか」

俺の事を、『若様』と呼んだ男。名前は彰島シノブ。

この男は、俺の部隊の武装研究、及び、諜報班のリーダーを務める男だ。

シノブ「はい。若様は、例の武装の確認ですか？」

雷真「いや。昨日、またIS学園が未確認ISに襲撃を受けてな」

シノブ「なっ!？」

雷真「その際、撃破した未確認ISの残骸を持って来たんだよ。それに簪の試作品も受け取りに来た」

シノブ「そうですか。では、その未確認ISを改修されるのですか？」

雷真「ああ。出来れば、『アストレイ』に転用させようと思っている」  
シノブ「アストレイに、ですか？」

雷真「回収した残骸は、俺のフリーダムやストライク、アストレイと同じ、この世界と違う、別の世界の技術で作られてた機体だ」

シノブ「まさか……………」



雷真「近い未来、戦争が起きる可能性がある。それに、未確認機の数が多かった。まさか、四十機も来るとはな」

シノブ「よ、四十………?!」

雷真「それで、アストレイの状況は？」

シノブ「あつ、はい。アストレイは、現在、若様が作られた、オリジナルを元に、量産を進めています。なにぶんISとは違って完全な宇宙戦闘を目的とした機体ですから、今だに四機が精一杯です」

雷真「となると、オリジナルを含めてアストレイの数は計五機。秘密裏のなか、一ヶ月で四機とはやるな。なら、残骸を活用してくれ」  
シノブ「わかりました。それと、アキトが例の武装が約六割が完成したとかで一度、来て欲しいそうです」

雷真「分かった。それじゃ、残骸を置いてから俺はアキトがいる、第5格納庫へ行く」

フリーダムバースロットの拡張領域から105ダガーの残骸を、開けた場所に取り出すと俺の話を聞いて105ダガーの残骸が気になつて仕方ないメカニックの集まりが瞳をキラキラと輝かせながら見ている。

「オオオオオッ………」

「これは、初めて見るタイプの武装だ」

「こっちは雷真さんのISにあった武装だ」

「て、ことは新しいビーム武装に触れるのか!？」

「これはテンションが上がるわ!」

「私、雷真さんのスカウト受けて良かった」

今更だが、ここにいる白衣を着用したメカニックたちは七割が男性、三割が女性だ。主に男性のメカニックの方は、男だからという理由でISの研究所からリストラされた、能力はあるのに職を失った人たちだ。

女性のメカニックは、偶然、集まった。メカニックオタの人たちだ。残骸を取り出し終えた後、アキトが待っている、第5格納庫へとハ

口と共に向かう。



雷真「おーい、アキトー。来たぞ」

アキト「……………」カチャカチャ

雷真「聞いてない感じ？」

アキト「……………」カチャカチャ

第5格納庫に入ると、そこには全長約3mはある縦長のウエポンアームが二本、左右に並べられている後ろで全長約6mはあるデカイ飛行ユニットをカチャカチャといじっている男。彰島シノブの弟の彰島アキトに話をかけるが、集中しているのか俺の声が聞こえていないようだ。

アキトは昔から何かに没頭すると周りの声や音が頭からシャットアウトされてしまう性格。故に、コイツは研究員として配属したのだ。

それから30分……………。

アキト「ふう……………」

雷真「やつと満足が行ったか？」

アキト「え？」

アキトが飛行武装をいじるのを止めるの待ち、手が止まったところで声をかけると、鳩が豆鉄砲を食らったような顔で此方を向く。

アキト「ら、雷真さん!？」

雷真「そうです。私が雷真です」

アキト「す、すみません。雷真さんに頼まれた《ミーティア》のエンジン部の配線に少し気になった部分がありました……………」

雷真「気にしないでいい。で、俺を呼んだのは?」

アキト「はい。それは、ミーティアのウエポナームが完成したのとドッキングシステムを確認したくて」

雷真「ドッキングシステムの確認なら、フリーダムとドッキングさせればいいか?」

アキト「はい、お願いします」

雷真「了解」

アキトに頼まれた通りに、フリーダムを起動させて、ミーティアとドッキングさせる。すると、ミーティアのシステムや武装の詳細などがフリーダムに流れてくる。

雷真「フリーダム、ミーティアとのドッキングを確認。FCS接続。エネルギー配分開始」

雷真「メインシステムは大方完成してるな。あとは、マルチロックオン・システムの調整と火器のエネルギー配分。他にはドラグーン・システムにビーム兵器の試しとテスト飛行くらいか……………」

雷真「アキト、そっちの方はどうだ?」

少し離れた所で液晶が縦に2つ、横に3つ並んでいるコンピューターを全て見ながら、ミーティアのフリーダムとの接続状況を確認するアキトに声をかける。

アキト「そうですね……………。ドッキング状態は正常。FCSも正常に稼働をしています。エネルギー配分はそちらで調整してもらえば大丈夫です。パワーセル・エクテンダーも稼働は良好」カタカタ  
アキト「他には……………」

雷真「ミーティアのドラグーン・システムはどうなってる？」

アキト「すみません。ドラグーン・システムはまだ調整が終わってません」

雷真「なら、そっちは俺がやるからアキトは他の方のチェックと調整を頼む」

アキト「わかりました」

アキトに他のチェックを任せてた俺は、ミーティアをストライクのオオトリやインパルスのシルエットシステムのように、ドッキングさせる機体が離れていてもミーティアを誘導させるためのドラグーン・システムのプログラムを調整する。

雷真「誘導信号をフリーダムのコアに設定。誘導信号の周囲5kmに敵影を補足時は自動迎撃システム設定。単独、マルチロックオン設定。フリーダムとのドラグーン・システムをリンク」カタカタ

雷真「他には……………」カタカタ

それからはアキトと共におやつ時になるまでミーティアの調整を行っていた。

ある程度、作業が終わると今まで集中していた所為か今頃になって身体が栄養を求めて腹の虫を鳴かせた。

雷真「アキト、少し遅いが飯にしよう」

アキト「は、はい」

第5格納庫から出た俺たちは、『モーニング・グロー』を出て近場のラーメン屋に行くことにした。

雷真「ちわーす、二人でお願いします」

「お好きなお席へ、どうぞ」

店員に促されるまま、窓辺の席へと座った。

雷真「どれにするかな……………」

アキト「あの、雷真さん」

雷真「なんだ？」

アキト「失礼を承知で聞きますが、ぶつちやけ美人の婚約者が三人もいるって、どんな感じなんですか？」

雷真「そうだな……………一言で言えば。大変だな」

アキト「大変？」

雷真「ああ。惚れた女が三人もいて、尚且つ、ゆくゆくは自分の妻になるんだぞ？なら、そのうち子供も生まれるだろう」

アキト「あつ……………」

雷真「だから、大変なんだよ。今は両の手で守れる。けれど、この先、俺にはもっと守るべき奴が増える」

アキト「雷真さんは凄いですね。到底、15の学生には思えませんよ」

雷真「まあな。あの空白の二年間で色々あったから、その影響が大きいな。それより、お前はどうかなんだよ？」

アキト「僕ですか？」

雷真「兄貴のシノブは、来年には結婚するだろう？」

アキト「はい。元、大学の同じゼミ生で刀奈お嬢様の部隊の人だそうです」

雷真「大学のゼミで、それに刀奈の部隊の人間か…………。少女漫画のようなあるあるだな」

刀奈の部隊といっても、俺や虚さんの用な裏の仕事をメインでするような部隊ではなく。刀奈や簪の部隊は主に二人を陰ながら護衛するための部隊だ。

まあ、俺が側にいる時は心配も少ないのだが…………。

アキト「それなら、雷真さんだつて少年漫画のあるあるじゃないですか!?!」

雷真「更識姉誘拐 あんなの”がホイホイあつてたまるか!?!今だから思うが、あの時の俺は無謀な特攻をしたもんだ」

雷真「それにあの時は、やれるとか、助けられるとか、ヒーローに憧れたとかじゃないんだよ。ただ、刀奈と簪を助きたい。それだけが頭の中を一杯にしたんだ」

アキト「ただ、助きたいから……。やっぱり、雷真さんは凄いですね」

雷真「つて、話が逸れた感じがするが、アキトは気になる奴かといかないのか?」

アキト「居ますけど……………」

雷真「それで、誰なんだよ?」

アキト「アストレイ部署の子持ちの一般人です……………」

雷真「……………」(。D。)ポカーン

雷真「ちよ、ちよつと待て!お前、まさか子持ちが好みなのか!?!」

アキト「ち、違いますよ!?!僕が気になったのは、その人がアストレイをいじる笑顔なんですよ」

雷真「ほうほう」

アキト「でも、僕は『更識』の黒牙部隊の一員です。そして、彼女は一般人なんですよ。それに……………」

雷真「大切な人を守れないと思うと怖いか?」

アキト「はい……………。僕たちは、いつ、死地へ向かってもおかしくありませんから」

雷真「ふむ……………」

ここでしばらく考えることにした。アキトの好きな女性はアストレイの開発部署に所属する人で、アキトはその女性がアストレイをいじっている笑顔が好きと来た。

なら、アキトをアストレイのテストパイロット候補に選ぶか……………??

これはあとで考えよ。

雷真「取り敢えず、お前の気持ちは分かった。今は飯にしよう」  
アキト「はい」

アキトの恋話を一度切り上げ、本来の目的であるラーメンを店員に注文して30分くらいで食べ終わり、第5格納庫に戻り、大まかなプログラム調整を終えたあと。俺は入り口のエレベーターがある格納庫から簷の試作品を持って、門限になる前にIS学園へと帰ることにした。

## 第44話 武装設定有り

学園祭から4日後。現在、体育館にて全校集会が行われている。それは、生徒会というか………刀奈が発案した『各部対抗男子争奪戦』の結果発表のためだ。

そんな訳で、当の刀奈はステージの上で生徒たちの前で堂々として  
いる。

刀奈「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表を始めます」

刀奈「一位は、生徒会主催の観客参加型『シンデレラ』でした！」  
雷真「はぁ………」

「「「………え？」」」

ワキワクと期待していた全校生徒一同はポカーンと口を開く。そして、その数秒後に我に返った女子一同からブーイングの嵐が起きた。

女子「卑怯よ！ずるい！イカサマ！」

女子「なんで生徒会なのよ！おかしいわよ！」

女子「私たち頑張ったのに！」

女子「演劇には、織斑くんだけで黒牙くんは出てなかったじゃない！」

そんな苦情の雨、嵐を刀奈は『まあまあ』と手で制し、続きの言葉を述べた。

刀奈「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは生徒会は別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」



雷真「何とも、上手い手を使ったな……………」

けれど、不満を持っている生徒たちは刀奈の説明を聞いてもブーイングが収まらない。演劇の参加規約を見ずに参加しておいて、ブーイングする奴に少し頭に来た。

雷真「……………」イラ#

雷真「仕方ない、少しやるか」

俺はこのブーイングを収めるためにステージ裏の暗幕から出て、刀奈の前にあるステージ台の上からマイクを取り喋る。

刀奈「雷真?!」

雷真「あー、生徒会副会長の黒牙雷真だ。会長の肩を持つわけではないが、会長の説明に不満がある奴ら」

雷真「アンタら、いつまでガキみたいな我が儘を言つてやがる。いい加減に自己責任って言葉を覚えろ」

俺の一言で、ブーイングしていた生徒たちが一斉に黙る。

雷真「それとも何か? 高校生にもなって、誰か言ったからとか、誰かに誘われたからとか、誰かに強要されたとか、流されないと自分の道すら選ぶことができないのか?」

雷真「違うだろう。最終的に選択したのはアンタらだろうが。なのに、何をごちゃごちゃとぬかしやがる。いい加減、大人になれ」

雷真「これでも、納得が行かないなら会長がこんな状況になると予測して妥協案を考えているはずだ。それで、妥協しろ。以上だ」

俺は、マイクを刀奈に渡してステージ裏の中へと戻る。

すると、ステージ裏にはニヤニヤ顔の織斑先生と、ウンウンと頷いている教頭がいた。

雷真「な、なんですか？」

千冬「いや、流石は『裏の学園最強』だと思っただけだ」

教頭「黒牙くん。将来、我が学園で教師をする気はありませんか？」

雷真「えーっと、保留で」

織斑先生と教頭先生との話が終わると、ポカーンとしていた刀奈が  
我に返り、妥協案を発表した。

刀奈「はっ！」

刀奈「えーっと、生徒会メンバーになった織斑一夏くんと副会長の  
黒牙雷真くんは、適宜各部活動に派遣します。無論、男子なので大会  
は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それ  
の申請書は、生徒会に提出するように」

まあ、これなら不満が少しはなくなるだろう。

悪いな、一夏。

女子「ま、まあ、それなら………」

女子「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」

女子「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタよね！」

刀奈の妥協案でブーイングをあげていた周囲の生徒が少しは大人  
しくなった。

何故、少しなのかは妥協案に納得したあと、俺と一夏の最初の派遣  
の権利を巡って言い合っているからだ。

刀奈「それでは、特に問題も無いようなので、織斑一夏くんは生徒  
会に所属。以後、私と副会長の指示に従ってもらいます」

そう刀奈が締めると、生徒たちから拍手と口笛がわき起こる。これにより、無事に全校集会が終わった。



刀奈「はい。では、本日より生徒会庶務になった、織斑一夏くんです。おめでとう」

本音「おめでと〜、おりむ〜」

虚「おめでとう。これからよろしく」

雷真「よろしく頼むな」

一夏に祝いの言葉をかけてから手に持っているクラツカーを盛大に鳴らす。

一夏「な、なぜこんなことに……………」

刀奈「あら、いい解決方法でしょう？元は雷真と一夏くんがどこの部活動にも入らないのがいけないのよ。学園長からも、生徒会権限でどこかに入部させるように言われたし」

雷真「師匠からのお達しかよ。てか、俺の場合は生徒会に所属してるんだから仕方ないだろう」

虚「それにお嬢様は雷真くんがどこの部活動に入部して他の女子にチャホヤされるのが気に食わないと、ヤキモチを妬いてたじゃないですか」

雷真「そんなことがあったのか？」

本音「そうなんだよ〜。『ライライは私のモノだ！ウガ〜！』って言ってたよ〜」

刀奈「ちよ、本音に虚まで!?!」

雷真「ほうほう」チラリ

刀奈「／＼／＼／＼／＼」ウツムキ

虚さんと本音により、俺の知らないところで起きた、ヤキモチを妬く刀奈の話を聞いて、当の本人である刀奈は耳まで赤くして俯いてしまった。

雷真「まったく、困ったお嬢様だ」ナデナデ

刀奈「ムウ………バカ。／＼／＼／＼」ポカポカ

雷真「はいはい」ナデナデ

赤くなつた刀奈の頭を撫でると何故か、胸を痛くない力加減でポカポカと叩かれてしまった。

一夏「なあ、のほほんさん」

本音「なあ〜にく、おりむー」

一夏「あのやり取りは、いつもの事なのか？」

本音「そうだね〜。昔は、家で良くかつちゃんやさんがライライに甘えてるのが日常だったね〜。あと、かんちゃんや私も混ざったりしてた〜」

虚「その所為で、一部の人間は毎度のようにブラックコーヒーを飲んでいましたね」

一夏「あははは。流石は雷真………」

刀奈「と、取り敢えず。色々な視点から考慮して、生徒会で今回の措置をとらせていただきました」

一夏「そんな、俺の意思は………」

雷真「諦めろ、一夏。刀奈はこうと決めたら実行する奴だ」

刀奈「あら、なあに？こんな美少女が三人もいるのに、ご不満？」

本音「そうだよ〜。おりむーは美少女をはべらかしてるんだよ〜」

虚「美少女かどうかは知りませんが、ここでの仕事はあなたに有益な経験を生むことでしよう」

雷真「はべらかしていることに関してはノーコメントで。でだ、姉さん。姉さんは美少女ではなく。美女なんだよ」

刀奈「確かに、虚は美少女というよりは美女の方がしつくり来るわね」

本音「ライライ、私はく？」

雷真「普通にお前も可愛いだろう。何を当たり前のことを」

本音「ありがとうく」

一夏「えーと……取り敢えず、放課後は毎日集合ですか？」

一夏が生徒会の仕事について質問すると、会長の刀奈ではなく、會計の虚さんが応える。

虚「そうですね。当面の間はそうしてもらうけど、派遣先の部活動が決まり次第そちらに雷真くんと共に行ってください」

一夏「わ、わかりました」

虚「ところで……ひとつ、いいですか？」

一夏「ん？なんですか？」

虚さんが一夏に質問をしようとするが珍しく、モジモジと言いにくそうにしている。

虚「学園祭の時にいたお友達は、何というお名前ですか？」モジモジ

雷真「!? (こ、これは!?)」

一夏「え?あ、弾のことですか?名前は五反田弾です。市立の高校に通ってますよ」

虚「そ、そう……ですか。年は織斑くんと同じですね?」

一夏「ええ、そりやまあ」

虚「……………一つ下なら……………」ボソツ

一夏「え?」

虚「なんでもありません。ありがとうございました。／／／／／

「  
雷真「……………」

まさか、姉さんの初恋がここに？あれ、待てよ？

姉さんの初恋って確か、シノブだよな？ってことは……………。

雷真「一夏、興味本位で聞くが、その『弾』って奴は長身でロン毛か？」

一夏「身長は俺と同じくらいで、髪は確かに長いな」

雷真「そうか」

虚「ちよ、雷真くん!?!?!?!?!?!?!」

雷真「大丈夫だよ。姉さんの邪魔はしないさ。ただの興味本位だからな」

虚「もう……………歳上をからかって。/////////」

雷真「あの、姉さん。書類ではそうだけど、実年齢なら俺は今、姉さんより2つ上なんだが……………」

虚「い、言われてみれば……………」

一夏「そっか……………。雷真は異世界で四年間過ごしてて、こっちだと二年間の扱いだから。俺よりも3つも歳上なのか……………」

雷真「そうなるな」

一夏「なら、『雷真さん』と呼ぶべきなのか？」

雷真「今まで通りでいい。セシリアと違って、今さら敬語や『さん』付けされると違和感がある」

一夏「なら、このままで」

雷真「そうしてくれ」

姉さんの恋した相手の情報を少し得られたのと、俺の年齢の話が終わると刀奈が生徒会室に置いてある小型の冷蔵庫からワンホールのショートケーキを取り出した。

刀奈「さあ！今日は生徒会メンバーが揃った記念と一夏くんの庶務

就任を祝ってケーキを焼いてきたから、みんなでいただきますよ」  
本音「わく、さんせく」

虚「では、お茶をいれましょう」

雷真「手伝うよ、姉さん」

虚「ありがとう、雷真くん。それと、私のことを姉さん呼びになっていますよ」

雷真「あつ、そういえば……………」

虚「気を付けてくださいね。貴方は、更識家の『若』なんだから従者の私を『姉さん』呼びしては下の者たちに示しが付きませんよ」

雷真「はい。気を付けます」

虚「よろしい」フッフ



一夏の生徒会庶務就任を祝って生徒会室で行われたささやかなパーティーの翌日の放課後。

現在、振替休日で持ってきた簪用の試作型ビーム兵器の御披露目会を行うために第2アリーナにて、いつものメンバーで集まっている。

雷真「それじゃあ、始めるか」

簪「うん」

刀奈「簪ちゃんのビーム兵器は何かしら？」

シャル「刀奈のビーム兵器は、元々、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女にあった武装とグ  
フイグナイトッドの武装がベースで、シールドはフリーダムのをベースに。僕のは、ハイペリオンの武装がベースだったから……………」

刀奈「十中八九、簪ちゃんも打鉄式式と何かしらのMモビルスーツSの武装をベースに作られてるわね」

ラウラ「さて、何が出るか」

鈴「私もレーザー兵器かビーム兵器が欲しいわね。甲龍には、一切、レーザー兵器やビーム兵器がないから」

セシリア「でしたら、中国政府に……………」

鈴「したわよ。でも、甲龍の燃費を考えると現在の中国では製造が不可能。だから、雷真が保有している技術が一国の技術力よりも優れていることになるわよ……………」

鈴「はあく、雷真、私にも作ってくれないかな……………」

セシリア「それは難しいかと……………」

一夏「雷真を見ると、まるで、男版の束さんを見ているようだな」  
箒「確かに、技術力や戦闘力なら姉さんに近いだろうが、雷真は雷真だ。姉さんではない」

少し離れた所で俺と簪以外のいつものメンバーが何か言っているが、それは放って置いて。俺は、足元に置いてあるアタツシユケースから簪のために製作した試作型ビーム兵器の一つを取り出す。

雷真「簪、まず一つ目のビーム兵器だ」

簪「えっ……………籠手？」

雷真「おう。籠手だ」

そう、俺がアタツシユケースから取り出したのは左右ワンセットの甕覗色をした指穴が空いた日本風の籠手である。

雷真「だが、しかし！これは普通の籠手じゃないのは分かるよな？」

簪「うん」

雷真「じゃあ、説明しよう。これは、シャルロットと同じでハイペリオンと呼ばれるにている機体の武装である、アルミユール・リユミエールと呼ばれる光波防御シールドをベースに製作」

雷真「要は、試作型とはいえ、立派なビームシールドつてことだ。で、その耐久力はストライクのアグニをも防ぐことが可能だ」



簪「あの、アグニを!」

雷真「ああ。だが、ビームシールドだから燃費の問題がある。しかし、そこは刀奈やシャルロットと同じバッテリーで、カバーしてある」

雷真「そして、名前は、『リュミエール・ガントレット』。意味は……」  
シャル「フランス語で、「光の籠手」だよね!」

雷真「ああ、そうだ」

俺がリュミエール・ガントレットの意味を説明しようとしたらフランス代表候補生のシャルロットが答えてくれた。さすがは自国民。

簪「スゴい……。でも、何で私には籠手なの?」

雷真「何でって、簪はさ。打鉄式式を展開時は、他のISと違って腕を守るアームが無いだろう?だから、もしもSEを貫いて攻撃が簪の綺麗な手に当たったら嫌だなって、思ってたな」

簪「そっか……。ありがとう、雷真」

雷真「いや、俺はただ守りたいだけだから」

簪「それでも、ありがとう」

雷真「どういたしまして」

簪「それじゃあ、早速、付けてみるね」

雷真「ああ」

簪は俺からリュミエール・ガントレットを受けると直ぐに両腕に付けて、打鉄式式を呼び出す。

簪「来て、打鉄式式!」

簪「リュミエール・ガントレット、インストール」

簪「!!」

簪「す、スゴいよ!これっ!」キラキラ

雷真「それは良かった」

簪はリュミエール・ガントレットを打鉄式式でインストールしてい

るとリユニエール・ガントレットの詳細データを見たのか、目をキラキラと輝せながら両腕を見ていた。

雷真「これで、簪も刀奈やシャルロットと一緒にビーム兵器に対抗できるな」

簪「うん。あつ、ねえ雷真」

雷真「なんだ？」

簪「さつき、リユニエール・ガントレットを出した時に『一目』って言ってたけど。まだ、何かあるの？」

雷真「あるぞ。そうだな、インストールしていると間にコイツも説明するか」

打鉄式式に『リユニエール・ガントレット』をインストールしている間にフリーダムを起動させ、バサスロット拡張領域からその大きさ故に収納していた、もう一つの簪専用ビーム兵器を取り出す。

雷真「ほい、簪」

簪「これは？」

俺がフリーダムのバサスロット拡張領域から取り出したのは、約30cmほどの一本の白い棒だった。

雷真「これはな。こう、使うんだよ」

それを俺は、フリーダムのマニピュレーターでクルクルと回すと白い棒は突然のその長さを伸ばし、全長約100cmほどまで伸びた。

簪「えっ!？」

雷真「そんで、これを……こうするとっ！」

100cmほどまで伸ばした白い棒をそのまま、槍を構えるように

構えるとフリーダムの前に出している方から突然、ビーム刃が発生する。しかし、そのビーム刃はビームサーベルのような棒状ではなく、薙刀の刀身に酷似していた。

簪「ビームの……薙刀？」

雷真「そうだ。これは、ザクのスラッシュウイザードのビームアックスとアビスのビームランスを元に軽量・縮小化した武装で、名前は安直に『ビームハルバード』だ」

簪「……ビームハルバード」

雷真「で、バッテリーの方は刀奈たちと同様のバッテリーを採用している。他には、ビームハルバードの柄の部分には、対ビームコーティングがしてあるから回転させれば、フリーダムのアンビデクストラス・ハルバードのようにビームを弾くことができる」

簪「……雷真と同じ」

雷真「あとは、ビーム刃は左右どちらでも展開が可能だが。高出力ゆえに片方しか展開ができないから気をつけてくれ」

簪「うん、ありがとう」

簪「あつ、インストールが終わったみたい」

雷真「なら、ビームハルバードの方もインストールしちまえ」

簪「うん」

## 第45話

一夏が生徒会庶務に就任して早くも二週間が経過し、現在は9月。その間に、一夏はシューター・フロウの円軌道からの瞬時加速イクニツション・ブーストを完全にマスターした。しかし、二段階瞬時加速の方はまだミスを連発している。

他には、この二週間の間に105ダガーやカラミティたちのニュースは流れなかった。そして、現在、毎度の放課後特訓を終えて、いつもの面々で夕食を取っている。席は俺、刀奈、簪、シャルロットの四人一席で、一夏とそのハーレムメンバーは隣で五人一席を取っている。

雷真「明日から確か、『キャノンボール・ファスト』に向けた授業が始まるんだよな?」

刀奈「ええ、そうよ。9月27日に行われる『キャノンボール・ファスト』に備えて、IS学園の全校生徒は高機動調整の授業が行われるわ」

一夏「9月。そういえば、今月は俺の誕生日か」

セシリア「い、一夏さん、今なんと?」

ラウラ「い、一夏、今なんと言った?」

一夏「え?だから、今月は俺の誕生日……………」

セシリア「一夏さんのお誕生日は9月27日なのですか!」

ラウラ「嘘ではないのだな!」

一夏「なんで、自分の誕生日の日に嘘を付く必要があるんだよ?」

ラウラ「い、いや、そんなつもりで言った訳ではないのだが

……………」

セシリア「箒さん、鈴さん。少しよろしくて?」

箒「!!」ギクツ!

鈴「!!」ギクツ!

ラウラ「そうだな。二人には、少しばかり尋問か自白薬を使わなければなるまいな」

刀奈「ラウラちゃん、その発言はいただけないわね。私たち I S 学園生徒会メンバーの前で、学園の生徒に向けて尋問に自白薬を使うなんて物騒な言葉は特に」ギロリ

ラウラ「うぐっ！」

雷真「箒に鈴。もしも、本当に尋問や自白薬を行われそうになったら言えよ？その時は、俺か刀奈。もしくは、織斑先生が対処するから」箒「織斑先生の場合は分かるが、二人はどんな対処をするんだ？」

雷真「そうだな。まず、刀奈はラウラにくすぐりの刑を執行して対処。俺の場合は、ねえ？」ニヤリ

鈴「な、何よりそのニヤリ顔は!？」

箒「そ、そうだぞ!？」

雷真「箒とセシリア、鈴なら直ぐ分かるさ。一学期前半の放課後特訓を思い出せば。実際に受けた人間が側にいるし」アハハハ

箒「あ、あれをやるのか？」ガクブル

セシリア「ほ、本当におやりになるのですか？」ガクブル

鈴「こ、殺さないわよね？」ガクブル

雷真「多分な」

俺が言っているのは、一学期の前半の頃。放課後特訓中に一夏が白式の制御を誤り、落下しながら顔から霧纏ミステリアス・レイデーの淑女を展開している刀奈の胸に突っ込んだのだ。

それを見た俺は、あまりの怒りで S E E D が発動し、オオトリで一夏に向けて全門フルバーストしたのである。

そして、当のフルバーストを受けた一夏は最終的には気絶してしま。その時の記憶がなくなっているようだ。

雷真「それで、一夏。お前の誕生日を皆で祝おうと思うんだが、どうする?」

一夏「そうだな……。毎年、中学の時の友達も祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」

セシリア「も、もちろんですわ！」

ラウラ「嫁の誕生日なのだ。さ、参加するに決まっている！」

鈴「私も参加するわ」

箒「わ、私もだ！」

一夏「雷真たちは？」

雷真「無論、参加させてもらう」

刀奈「そうね。生徒会長として、同じ生徒会メンバーを祝わない訳には行かないわね」

シャル「僕も参加するよ」

簪「わ、私は三人が参加するなら」

一夏「わかった。でも、パーティーをするのは16時くらいになるけどいいか？」

雷真「大丈夫だろう」

こうして、生徒会メンバー&一年専用機持ちのメンバーでキャノンボール・ファストのあとに一夏の誕生日を祝うことになった。

一夏「そういえば、さつき、雷真と更識会長が言っていた高機動調整って、具体的には何をやるんだ？」

雷真「はい、誰か説明できる人。今がポイントの稼ぎ時だぞ」

俺のその一言で、一夏を射止めたい女性陣は獲物を狩るように目の色を変えた。

そして、一番最初に斬り込んだのはラウラだった。

ラウラ「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールが主流なのだが、お前の白式にはそれがないだろう」

ラウラはそう言い終わるとプチトマトを頬ばった。

鈴「そこで、高機動パッケージが無い場合はエネルギーの分配調整とか、各スラスターの出力調整なんかをやるのよ」

言い終わると鈴はレンゲに乗せた小籠包を頬ばる。

一夏「なるほどな。たしかセシリアのブルー・ティアーズにも機動パッケージってのはあるんだよな？」

セシリア「ええ！私、セシリア・オルコットの駆るブルー・ティアーズには、主に高機動戦闘を主眼に捉えたパッケージ『ストライク・ガンナー』が搭載されていますわ！」

そう言い終わるとセシリアは、その場でフフンと誇らしげにその腕で胸を押さえた。

一夏「なら、セシリアが有利だよなあ。なあ雷真、超音速機動について教えてくれよ」

雷真「はあ………………。女心が分かっていないバカめ」ボソツ

雷真「セシリア、悪いが一夏に教えてやってくれるか？」

セシリア「…………そう、したいのは山々なのですが、申し訳ありません。それはまた今度。ラウラさんをお願いしてくださいな」

ニコツと微笑むセシリアだったが、その顔にほんの一瞬だが曇った表情を俺は見逃さなかった。

雷真「わかった。そういうことだから、ラウラ。当分の放課後の特訓の後半を使って一夏に超音速機動をレクチャーしてやってくれ」

ラウラ「心得た」

ラウラからの返事を聞いたあと、俺は食べ終わった食器とお盆を持って食堂の返却口へ持っていく。

一夏「雷真、もう部屋に戻るのか？」

雷真「ああ。日本支部とフランス支部のIS委員会から刀奈と簪、

シャルロットのビーム兵器について詳細データを送るように通達が来ているからな」

刀奈「ごめんなさい、雷真」

簪「ごめん、雷真」

シャル「ごめんね、雷真」

雷真「気にするな。ビーム兵器を作ったのは俺だ。それに、日本支部には知り合いが居るし、フランス支部には脅……………ンンツ！軍事的交渉をしているから問題はないさ」

鈴「今、アイツ『フランス支部には脅し』って言わなかった？」

箒「確かにそう……………」

雷真「箒に鈴」ギラリ

箒「は、はい！」

鈴「は、はい！」

雷真「世の中にはな？知らない方が良いこともある。わかったか？」クロイエミ

箒「は、はい」ガダガタ

鈴「ど、？了ドンラ（わかった）」ガダガタ

雷真「よろしい」



一夏の誕生日がキャノンボール・ファストの同じ日だとわかった週末。現在、俺は刀奈、簪、シャルロット、本音、虚さんと共に一夏の誕生日プレゼントを買いにレゾナンスまで来ている。

雷真「ね、眠い……………」フラフラ

簪「雷真、大丈夫？」

刀奈「フラフラじゃない」



シャル「僕たちのビーム兵器の詳細データは月曜日に送ったのに、そんなフラフラするまで何をやってたの？」

雷真「簡単に説明すると改めて、フランス政府にシャルロット・デュノアを失うとラファール・テイラーのようなビーム兵器の情報が手に入らないと分かせて。あとは色々……………」

3 徹して、アストレイの量産状況の確認やら何やらや臨海学校前にオーダーメイドした婚約指輪と結婚指輪が完成したことに嬉しくなつて昨晚眠れなかったなんて、超絶恥ずかしくて絶対に言えるわけがねえ。

刀奈「本音に虚ちゃんは何か知ってる？」

本音「私は知らない」

虚「一応、知ってはいますが雷真くんから口止めをされているのでお伝えできません。申し訳ありません」

刀奈「そう。なら、仕方ないわね」

シャル「でも、無理はしないでね？」

雷真「大丈夫。健康管理は軍人の基本だ」

シャル「なら、いいけど」

雷真「皆は、一夏に何をプレゼントする気なんだ？」

刀奈「そうね……………。何にしましょうか？」

簪「そうだね」

本音「私はお菓子の詰め合わせかな」

虚「私は、自分が愛用しているお茶を」

シャル「僕は腕時計かな。一夏、腕時計付けてなかったし。雷真は？」

雷真「俺か？俺の方は既に手配してある」

シャル「手配？」

雷真「オーダーメイドで名入れされてる各種の包丁一式セット」

シャル「す、スゴいね……………」

刀奈「雷真が包丁なら、私は圧力鍋にしようかしら？」

簪「お姉ちゃんが圧力鍋なら、私はフライパンにしようかな?」

虚「それでは、お嬢様方と本音。私たちは四人で織斑くんのプレゼントを買いに行きましょう。雷真くんとシャルロットさん、少しですがこの間のお詫びにお二人でデートをしてきてください」

刀奈「うゝ……仕方ないわね」

簪「今回は仕方ないね」

本音「この間はごめんねゝ」

雷真「そういうことなら、お言葉に甘えて」

シャル「虚さん、ありがとう」

虚「いえ」

虚さんの提案で俺とシャルロットは少しの間だけだが二人でデートをすることにした。

刀奈たちと別れたあと、俺たちはデートをしながら一夏の誕生日プレゼントである腕時計を買うために時計屋に来ている。

雷真「それで、どんな腕時計をプレゼントにするんだ?」

シャル「んゝ、そこが問題なんだよね。雷真の好みは刀奈たちから聞いているから分かるけど、一夏の好みは全く知らないし」

雷真「なら、実用性のある時計にしたらどうだ?」

シャル「そうだね、そうするよ。すみません!」

店員「はい、何でしょう?」

シャル「実用的な腕時計ってありますか?」

店員「そうですね………これなどは如何ですか?」

店員が見せてきた腕時計はメタリックブラックのゴツい腕時計だった。

店員「彼氏さんに、お似合いだと思えますが?」

雷真「すみません。今回は自分ではなく、友人への誕生日プレゼントなんです」

店員「そうでしたか、申し訳ございません。でしたら、そのご友人のイメージカラーなどは分かりますか？」

シャル「イメージカラーですか？」

店員「はい。そちらのお兄さんは黒のTシャツにインディゴ色のデニムパンツを着ていらっしやるので、黒系の色が好きなかと思います。この、メタリックブラックの腕時計を選ばせてもらいました」

雷真「なるほど。確かに、わりと黒とか白が好きですかね」

シャル「だとなると、一夏の場合は……………白？」

雷真「だな、アイツの専用機もカラーリングは白だから白系統とかどうだ？」

店員「でしたら、こちらの白を基調とした物にゴールドホワイトのアクセントがある腕時計がオススメですよ？機能も豊富で気温、湿度、天気、ニュース等が横のボタンで小型の空中ディスプレイが起動するんですよ」

雷真「これはなかなか……………」

シャル「えつと、お値段は……………」

店員「そうですね。消費税込みで、このお値段です」

店員が自分の懐から小型の計算機で白を基調としたゴールドホワイトのアクセントがある腕時計の値段を計算していき、此方に見せた値段は……………まあ、公務員が2ヶ月働いた金額だと思ってくれ。

シャル「んく……………じゃあ、これにしようかな」

店員「ありがとうございます。では、直ぐにご用意致します」

雷真「なかなかの物が見つかって良かったな？」

シャル「うん！そういえば、雷真の誕生日は12月なんだよね？」

雷真「ああ」

シャル「なら、雷真は何か欲しい物とかある？」

雷真「んく……………これと言ってないな」

シャル「そうなの？年頃の男子とかはゲームとかだから、雷真はゲームとかやらないの？」

雷真「年頃って……あと二年もすれば実質、俺は成人なんだけども……」

シャル「そうなんだ……」

雷真「そうだな……あっ！」

シャル「何か見つかった!？」

雷真「ああ。俺の誕生日にはシャルロット特製の豚の角煮が食べたいな」

シャル「え？そんなので良いの？」

雷真「おいおい、シャルロットが学園祭の時に豚の角煮を食わせてくれるって言ったんじゃないか」

シャル「いや、そうだけど……。でも、本当にそんなのでいいの？」

雷真「俺的には豚の角煮が楽しみなんだが。なら、シャルロットが俺に何か喜びそうな物をプレゼントしてくれよ。その方が俺も嬉しいしシャルロットも満足するだろう？」

シャル「そうだね、わかった！僕が一生懸命、雷真に何か喜びそうな物をプレゼントをするよ！」

雷真「楽しみにしてる」

シャル「うん！」

シャルロットの一夏へ誕生日プレゼントを購入したあと、俺たちは別行動をしていた刀奈たちと合流して昼食を取ることにした。

雷真「この蟹のクリームスパゲッティすごく美味しいな」

刀奈「そうね。特に蟹の旨味とクリームのまろやかさがマッチしてて美味しいわね」

簪「こっちの明太子カルボナーラも美味しいよ」

本音「病み付きになりそうだよ」

虚「確かに、この二つのパスタは美味しいですね」

刀奈たちと合流したあと、六人で近場のレストランにて昼食を取る

ことにした俺たちは、ランチメニューのオススメである『蟹のクリー  
ムスパゲッティ』と『明太子カルボナーラ』を注文して、大皿に乗せ  
られた二つのスパゲッティを取り皿に取って堪能してから、学園に戻  
ることにした。

## 第46話

真耶「はい、それでは皆さーん。今日は、ここ第六アリーナで高機動について授業をしますよー！」

一夏の誕生日プレゼントの購入とシャルロットとのプチデートから数日。一組の副担任である山田先生の声が第六アリーナに響き渡る。

真耶「この第六アリーナは中央タワーに繋がっていて、高機動実習が可能であることは先週の授業で言いましたね？」

山田のその言葉に一組一同は頷く。

真耶「それでは、まず、専用機持ちの皆さんに実演をしてもらいましょう！」

そうやって山田先生が手を向ける先には一夏とセシリアが居た。何故、俺ではないのかと言うと、俺の技術は他の一般生徒では到底一年や二年そこらではマスターできない代物だと言われたからだ。流石に生き残るために身に付けた技術を簡単にこなされては此方としても困る。

真耶「まずは、高機動パッケージの『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

セシリアの専用機であるブルー・ティアーズの高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』は、通常時に使用できるビット兵器が全て使えなくなる代わりに、その分ハイスピード&ハイモビリティを得られる装備らしい。

要はストライクフリーダムがミーティアとドッキングしてスー

パードラグリーンが使えなくなったみたいなき感じか……。

真耶「続いて、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整した仮想高機動装備にした織斑くん！」

真耶「この二人にアリーナを一周してきてもらいましょう！」

一他の生徒たちが二人に『がんばれー！』と応援の声をかけると一夏とセシリアは軽く手を挙げて応えた。

そんな二人を見ていると幼馴染である本音から声がかかる。

本音「ねえ、ライライ」

雷真「なんだ？」

本音「どうして、おりむーが選ばれてライライが選ばれてないの？」

雷真「織斑先生に止められたんだよ」

本音「へ？」

雷真『お前の飛行技術は他の一般生徒では真似できん。なら、素人の織斑とある程度経験があるオルコットで実演は十分だ』とき」

本音「あー、確かにライライの技術は他の生徒だと真似できないね」

雷真「そういうことだ。だから、早く元の列に戻れ。織斑先生が睨んでるぞ」

本音「へ？」

千冬「……………」ジロリ

本音「ひやあく〜!!」

とぼとぼした足取りだが、織斑先生の出席簿が脳天に落ちる前に本音は元の列へと戻って行った。

本音が列に戻ると白線の上で一夏とセシリアが構える。

真耶「二人とも、準備はいいですか？」

一夏「大丈夫です」

セシリア「いつでも」

真耶「それでは、……………3、2、1、GO！」

山田が持っていたフラッグを振り下ろすと、それを合図に一夏とセシリアの二人は一気に飛翔し、直ぐに空気の壁を破り音速へと到達する。

雷真「なかなか早いな」

二人の飛行速度にホヘーと見ながら感想を言うと隣にいる刀奈が口を開く。

刀奈「まあ、セーフティを解除したフリーダムと比べたら。それは、なかなかよね」

雷真「セーフティを解除すれば、な」

刀奈「その口振りだと、大会当日はセーフティをかけたままなの？」

雷真「ああ。流石に緊急事態でもないのにセーフティを解除するのは危ないからな」

刀奈「まあ、そうよね。動力は核で、セーフティを解除すればエネルギーの出力はストライクの四倍ですものね」

雷真「そういうこと。フリーダムかジャスティスが一機あれば、一國を簡単に滅ぼせるからな」

刀奈「やらないでよ、雷真」

雷真「さあな。それはこの国、いや、この世界次第だな」

刀奈「この世界って……………」

雷真「俺が大切だと思ってる《花》に手を出さなければ、俺は平和を望むさ。けれど、俺の大切な《花》を散らすようなことをすれば俺は自分自身ですら、何を仕出かすか分からない」

刀奈「ねえ、その花って、もしかして……………」

雷真「おつ、二人が帰ってきたぞ」



俺は刀奈の話を遮り、一夏とセシリアの所へ向かう。



雷真に《花》のことについて聞こうして、遮る様に雷真が一夏くとセシリアちゃんの元へ行くのを見送ったあと。私は一人で先ほどの《花》について直感的に感じた物を考えることにした。

刀奈「《花》を散らさなければ、か……………」

刀奈「それって、私たちのことよね。きつと……………」

直感的に感じた《花》という言葉が私と簪ちゃん、シャルロットちゃん。それに本音や虚ちゃんのことを示していると思った。

刀奈「……………」

シャル「どうしたの、刀奈？」

刀奈「シャルロットちゃん……………。さつき、雷真と話してたんだけど…………。その中で、雷真がフリーダムとジャステイスっていう機体があれば、一国を滅ぼせるって話になって」

シャル「なかなか物騒だけど、あり得そうな話だね」苦笑

刀奈「それで、雷真にやらないように言ったら、この世界が雷真の大切な《花》を散らさない限りは、雷真はそんなことをするつもりはないと言ってたけど……………」

シャル「けど？」

刀奈「もしも、仮に散らすようなことをすれば。雷真自身、何を仕

出かすか分からないと言っていたわ」

シャル「途中で出てきた《花》って、もしかしかて……僕らのこと？ 正確には、僕や刀奈、簪、本音、虚さんのことを示してるよね？」

刀奈「やつぱり、シャルロットちゃんも分かっちゃうよね……」

シャル「そりやね……」

刀奈「今さらだけど、私たち、国家代表や国家代表候補生は雷真からしたら足手まといなのかもしれないわね……」

シャル「……」

刀奈「私は、あのM<sup>モビルスーツ</sup>S型のISが初めて現れてから4度も雷真にM<sup>モビルスーツ</sup>S型のISから守られた。その度に、雷真が一人で全て何とかしてきた……」

刀奈「クラス対抗、臨海学校、学園祭。この、全てのイベントの中で私たちが直接、M<sup>モビルスーツ</sup>S型のISと対峙してきたのは量産機と雷真が居ない時の専用機だけ。完全に量産型の方しか相手をしていないわ」

シャル「言われてみれば……そうだね」

刀奈「つい、私たちにもM<sup>モビルスーツ</sup>S型のISがあればな……って思っちゃうのよね」

シャル「僕もそれは思うけど……雷真の過去を思うとね」

刀奈「そうよね……」

雷真は異世界で身寄りの無い自分を家族として優しく迎え入れてくれた異世界の義理の姉や友人たちのためにストライクに乗り、銃を手にした。

誰も大切な人を殺させないようにと……。

刀奈「……」

シャル「……」

二人で雷真の壮大な過去のことを思い出していると一夏くんたちの所にいる雷真から声がかかる。

雷真「おーい、刀奈、シャルロット！これから、ラウラと一飛びして来ようと思うんだが、一緒にどうだ？」

刀奈「私は行くけど。シャルロットちゃん、どうする？」

シャル「無論、行くよー！」

刀奈「なら、行きましょう」

シャル「うんっ！」

今はまだ、私は雷真に守られるだけの存在でしかないのかもしれない。けれど、いつかは雷真の隣や背中を任せられる存在になれるらしい。それがダメなら……戦いから帰ってきた彼を癒してあげられる、そんな存在でありたい。



ラウラと一飛びすることになったので、フリーダムヘッド装甲以外を展開してから、少し離れている所で何やら真剣な話をしている。刀奈とシャルロットの二人に会話が終わったところで声をかけた。

そして、二人の返答は『一緒に飛ぶ』との応えが来た。

雷真「一夏、お前は どうする？」

一夏「そうだな……。俺はフリーダムの動きを参考にしたいから見てるよ。フリーダムのウィングスラスターは白式のウィングスラスターと少し似てるからな」

シャル「だったら、ダイレクト・ビューを使えばいいよ」

一夏「ダイレクト・ビュー？」

ラウラ「簡単に言えば、視界情報の共有化。ようは、雷真が見てい

る物を一夏にも共有できるという物だ」

一夏「へえー。そんなのがあるのか」

雷真「えーつと、これか！一夏、通信チャンネルを205に設定してくれ」

一夏「おう」

雷真「それじゃあ、流す程度で行くか」

俺、刀奈、シャルロット、ラウラの四人は、それぞれのペースで第六アリーナのコースを駆ける。

雷真「一夏、どうだ？」

一夏『やっぱり、フリーダムの方が速いな』

雷真「まあ、フリーダムは別格だからな。それじゃあ、速度上げるぞ」

一夏『まだ上がるのかよ!?!』

雷真「ハイマツトモードにすればなっ！」

ダイレクト・ビューで見ていると一夏にプライベートチャンネルで感想を聞きながら、中央タワーの外周に近づくとフリーダムのウイングスラスターを広域展開のハイマツトモードへと移行し、左に90度回転してタワーの外壁を這うように飛行する。

シャル「うそっ……………そんな体勢で飛行するなんて!?!」

ラウラ「どこが流す程度だっ!?!」

雷真「いや、流してるぞ?。まだ、セーフティをかけて6割ほどだ」

刀奈「セーフティをかけて、これが6割……………。それをいとも簡単に手足のように制御するなんて……………」

「「「やっぱり、規格……………外……………」」」

雷真「解せぬ……………」

第六アリーナと中央タワーの外周を一周してきたあと、地上に降りてフリーダム調整をする。

雷真「ん〜……今のままでもいいんだが、どうするかな？」

雷真「フリーダムはこれと言って弄る必要もないし。かといって、追加パッケージのミーティアはまだ調整中だし。仮にあったとしても小回りが効かないからな……」

フリーダムの調整に悩んでいると自分の専用機の調整が終わった刀奈とシャルロットがやって来た。

刀奈「雷真、何を悩んでるの？」

雷真「フリーダムの調整をな。今のままでも平気なんだが、今回は少しでもイベントを楽しもうと思って調整を考えているんだが……」  
シャル「そつか！雷真は今まで機体の調整って言ったら戦闘がメインだったから、イベントが目的で調整するのは初めてなんだね？」

雷真「そういうことだ」

刀奈「でも、キャノンボール・ファストは高速機動戦闘を想定したレースなのだから、そのままでもいいんじゃない？」

刀奈「でないとい頃の仕返しができないわよ」ボソツ

雷真「聞こえてるからな、刀奈」

刀奈「な、なんのことかしら？」プイツ

雷真「負けず嫌いも程々にしろよ」

刀奈「むう……………」

その後、本日のカリキュラムが終わり。夕食も終えて自室にいると

更識の機密回線から俺の携帯に通話が来た。

雷真「俺だ。どうした、シノブ」

シノブ『若様、ファントム・タスク亡国企業を追わせている諜報班より報告です。キャノンボール・ファストでファントム・タスク亡国企業の工作員が単独で奇襲をかけるとの事です』

雷真「イベント事で一般人に紛れて会場の観客席から奇襲する気なのか？」

シノブ『如何なさいますか？』

雷真「ファントム・タスク亡国企業だけなら、俺や刀奈たちで事足りる。しかし、ファントム・タスク亡国企業以外の介入があったら一般人の避難誘導を任せる」

シノブ『避難誘導だけですか？』

雷真「アストレイはまだ早い」

雷真「それと”天使”と”翼”を急がせろ。アストレイが間に合っても”天使”と”翼”が間に合わなければ宇宙に敵がいたら手札が少なすぎる。仮にブースターを使っても、数が居たら対処ができなくなる」

シノブ『御意っ！』

シノブとの通話を切ると俺は窓辺にある椅子に座り込む。

雷真””天使”と”翼”が完成するまで何もなければいいが

……………」

## 第47話

シノブ「若様、まもなく目標ポイントに到達します。身支度を」  
雷真「分かってる」

IS学園でキャノンボール・ファストに向けて、初めての高機動演習の授業を行ってから、はや二週間。今日はキャノンボール・ファストが開催される日なのだ。

現在、シノブが所有する一番速いプライベートボートに俺とシノブ、それとアキトが乗り合わせている。

アキト「雷真さん！西方、50km先の沖合いから高速でキャノンボール・ファスト会場方向へ飛行する熱源1。サイレント・ゼフィルスと思われます！」

雷真「来たか……。これより、作戦を開始する。二人は、俺が出撃次第、本土へ帰投。誰にも見つかるなよ？」

シノブ「御意！」

アキト「御意！」

二人に指示を出してから、深く深呼吸をして精神を研ぎ澄ましてから、ボートの船首へ走り、空中へ身を投げ出し……………。

雷真「黒牙雷真、フリーダム。行きます！」

海面に身体が着水する前にフリーダムをセーフティを解除した状態で展開し、のうのうとレース会場に向かうサイレント・ゼフィルスを追いかける。



くそのころ、レース会場ではく

刀奈「だあああああつ!!」

簪「お姉ちゃん、落ち着いて」オロオロ

刀奈「こんな状況で落ち着いてられる訳無いでしょうっ!!」

シャル「雷真にも、何か事情があるんだよ。タブン……」ボソツ

現在、私たちは一年生専用機持ち組のレースの時間が迫っているのにも関わらず、婚約者であり、IS学園生徒会副会長である、雷真が朝から姿を見せない。

また、今朝方に珍しく雷真が寝坊していると思つて会長権限で雷真の部屋を開けて見たら雷真の姿は無く、勉強机には……………

『とある事情で学園を離れる。明日のレースには多分、間に合うと思うから心配しないでくれ。』

b y 雷真』

……………と書かれた一枚の手紙が置かれていた。直ぐにそれを織斑先生に見せに行くと、今まで見たことがないほどに鬼のような形相をした織斑先生を私は初めて見たわ。

刀奈「雷真のバカ——!!」

一夏「なんか、会長がスゲーことになってるけど、どうしたんだ?」

ラウラ「どうやら、雷真の奴がとある事情とやらで、現在、学園にも会場にも居ないらしい」

一夏「は? 雷真が? なんで?」

ラウラ「私にも分からん。だが、雷真は必ずと言つていいほど教官にシゴかれるだろう結末が私には見えている」

セシリア「雷真さんも無茶苦茶なことを仕出かしますわね」

鈴「まっ、どうせ、直ぐに帰ってくるわよ。アイツは」



一夏「ああ……………雷真、ドンマイ」



く同時刻、雷真はく

くBGM：キラ、その心のままにく

雷真「追い付いた」

フリーダムを展開してから約5分。諜報班からの情報で手に入れた、レース会場へと向かう亡国企業ファンタム・タスクの一人であり、サイレント・ゼフィルスのパイロットのコードネーム【エム】と呼ばれるパイロットの姿が見えた。

雷真「……………」

サイレント・ゼフィルスを追い越すように飛行し、サイレント・ゼフィルスの正面に踊り出ると互いに静止する。

エム「ツ!!」

雷真「よう、学園祭以来だな。亡国企業ファンタム・タスクのエム」

エム「貴様はあの時のつ……………!?!」

雷真「悪いがこの先は行かせない」

エム「なら、押し通るっ!」

押し通ると決めたエムは、その手に持つサイレント・ゼフィルスのメインの射撃武装である『スターブレイカー』を向け此方へ撃ちなが

ら六機のビット兵器を射出した。

雷真「悪いが遊んでやるほど暇じゃないんだ。だから、本気で行くぞ」

エム「ほざけっ!」

サイレント・ゼフィルスからのビームをフリーダムの緩急を付けたの緩急を付けた急旋回などで回避しながら、ルプスビームライフルの偏向射撃で破壊の偏向射撃で破壊していく。

エム「なっ……………このおおおっ!!」

雷真「……………」

ビット兵器を破壊されたことに頭に来たのか。今度は瞬間加速イグニッション・ブーストを使い、スターブレイカーで近接戦闘を挑んで来るのでルプスビームライフルとラミネートアンチビームシールドを後ろ腰にマウントするのではなく、久しぶりに使うが高速切替で拡張領域に収納し、代わりに拡張領域パススロットから刀奈から受け取ったソードストライカーのシユベルトゲベルを取り出す。

雷真「(イメージしろ、あの機体の動きを!)」

頭の中で、「運命」の名を持つ機体の動きをイメージするとシユベルトゲベルを正眼に構えてフリーダムのウイングスラスターをハイマツトモードに展開し、個別連続瞬時加速リボルバー・イグニッション・ブーストを使い、デステイニーと似た動きをフリーダムできるように加速する。

元々、デステイニーのウイングユニットはフリーダムのウイングスラスターである能動性空力弾性翼を発展させた物。つまりは、元となったのはフリーダムのウイングユニットだ。故に元となったのならヴォワチュール・リュミエールやミラーージュコロイドがなくともデステイニーに似た動きを再現できる可能性があるはず。

雷真「ウオオオオツ!!」

エム「ハアアアアツ!!」

エムはイクニツション・ブースト瞬間加速で、俺はリボルバー・イクニツション・ブースト個別連続瞬間加速で距離を詰める。そして、エムとの距離が30cmほどになると姿勢を右に360度ぐるりと回転させてスターブレイカーを回避しながらサイレント・ゼフィルスの追加パッケージの左側にある大型スラスターを切断する。

エム「なん……だどっ!？」

雷真「……………」

エム「私は、私はああああ!!」

エム「織斑一夏を殺して今度こそっ!!」

エム「今度こそ、私は完全な存在になるんだああああ!!」

雷真「なるほど、お前の目的は一夏の命か。なら、尚更、お前を止める必要があるな」

エムは、さっきよりも激昂したのか再び、イクニツション・ブースト瞬間加速を、俺はリボルバー・イクニツション・ブースト個別連続瞬間加速を使い距離を詰める。しかし、サイレント・ゼフィルスは追加パッケージの片側の大型スラスターを失っているため速度が落ちている。また、この時、俺はシュベルトゲベルを上へ放り投げ、自動的に拡張領域に収納させ、サイレント・ゼフィルスのスターブレイカーを白羽取りの要領で両手のマニピュレーターで挟み掴む。

エム「何をっ!？」

そして、完全にスターブレイカーを挟み掴むと両腰のクスイファイアスレール砲2門をゼロ距離でサイレント・ゼフィルスに放つ。

エム「ぐううっ!!」

雷真「……………」

ゼロ距離でクスイファイアスレール砲を放つてもSEと絶対防衛が作動するのでレール砲くらいなら大丈夫。また、レール砲の爆風でエムはスターブレイカーを手放してしまう。

雷真「さすがに、そろそろ時間がヤバいな」

さすがにこれ以上はキャノンボール・ファストの一年生専用機持ち組のレースに遅れてしまうのでスターブレイカーを海へ放り投げて、左腰からラケルタビームサーベルを引き抜き、サイレント・ゼフィルスの右側の大型スラスターを狙う。

エム「しまっ……………!?!」

雷真「おそいつ!」

エムが回避行動を起こす前にフリーダム全スラスターを最大出力で噴かして、ラケルタビームサーベルでサイレント・ゼフィルスの大型スラスターを切り落とす。

大型スラスターを切り落とすことに成功すると、身体を捻り、勢いを乗せた回し蹴りをエムの背中に打ち込み海面へと蹴り飛ばす。

エム「ぐああああっ!!」

雷真「……………」

全てのスラスターを失い、回し蹴りを受けたエムはサイレント・ゼフィルスのPICを使うもSEの損失が激しかったのか慣性を完全には殺せずに海面へと落ちていった。

それを見た俺は、本来ならこのままエムを捕縛する所だが、極秘で行動しているため海上保安庁の船などに見つかると面倒なので、その場から直ぐに人気のない地上へ退避する。

地上へ退避するとフリーダムの拡張領域パススロットから学園の制服を取り出して着替える。再び、拡張領域パススロットから今度は量子変換してあるビートチェイサーを取り出して、急いでエンジンをかけて会場へと向かう。

急いで会場に向かうと会場の入口の前で鬼と表したら何と可愛い表現だろうと思うほどの形相で俺のことを睨み付ける織斑先生が仁王立ちで待ち構えていた。

千冬「どこをほつつき歩いていた？このバカ者が」

雷真「すみません。その事については、『裏の仕事』とだけ今は伝えておきます」

そう伝えると織斑先生は深いため息を吐く。

千冬「放課後、詳細な情報を提出しろ。いいな？」

雷真「わかりました」

ビートチェイサーを拡張領域パススロットに収納してからコースへ続く扉を抜けてそのまま、一年生専用機組がいるピットに出る。

簪「あつ、雷真！」

シャル「良かった……レースには間に合ったみたいだね」

雷真「すまん、遅れた」

刀奈「雷真！貴方、今までどこをほつつき歩いていたのっ!?それにあの手紙に書いてあった、とある事情ってなに!?!」

雷真「悪かったよ。その事に関してはあとでちゃんと説明するから」

刀奈「分かったわ。けれど、あとで必ず説明してもらいますからね！」

雷真「分かってるよ」

刀奈に謝罪と今までのことを説明すると約束して納得してもらおうと山田先生から号令がかかる。そのため、直ぐにフリーダムを展開する。

真耶「みなさーん、準備はいいですかー？これより、スタートポイントまで移動しますよー」

のんびりとした山田先生の声が俺たちの耳に届くと皆、領きながら返事をする。返事を返したら、俺は念のためにフリーダムの武装のチェックをする。無傷とはいえ、戦闘後のレースだ。それにエムとの戦闘で個別連続瞬時加速を使ったので念入りにチェックするがSEはフリーダムの核エンジンのおかげで減ってはいなかった。

チェックを終えて、メーカー誘導に従いながらスタート位置へと移動する。

『これより、一年生専用機持ち組の選手入場です。また、簡単に選手をご紹介します。呼ばれた方は順番にグリッドに並んでください』

『まずは、この人！世界で知らない人はいない！初代ブリュンヒルデの弟で一人目の男性IS操縦者の織斑一夏選手!!』

一夏「あは、あははは………」フリフリ

選手入場のアナウンスと共に選手紹介が行われる。最初に紹介された一夏は、ピットから移動しながらぎこちない動きで観客席に手を振りながら第一グリッドへと進んでいく。

『続いて、この人！織斑選手と同じで、世界で知らない人はいない、しかし、その全身装甲のISを作った人物は誰も知らない。その性能も未知数！二人目の男性IS操縦者、黒牙雷真選手!!』

雷真「(どうやら、あの人も見に来ているようだな)」フリフリ

紹介されたのでフリーダムのヘッド装甲を着けず、普通に観客席の皆さんに手を振りながら第二グリッドへと進む。

『続いて、世界で唯一の第四世代ISを持つ、篠ノ之箒選手!!』  
箒「フンツ！」

紹介された箒は、やはり試合慣れしているのか堂々とした動きで第三グリッドに移動する。

『続いて、イギリス代表候補生。セシリア・オルコット選手!!』  
セシリア「ウフフフ」フリフリ

セシリアも場馴れしているのか優雅な動きで第四グリッドへ移動しながら観客席へ手を振るう。

『続いて、中国代表候補生！凰鈴音選手!!』  
鈴「イツエイー」フリフリ

鈴も場馴れしているようで物怖じしないで観客席へ手を振りながら第五グリッドに移動する。

『続いて、一年生で唯一の国家代表！日本代表、更識刀奈選手!!』  
刀奈「ハア〜イ」フリフリ

相変わらずの人たらしというか人受けがいいというか。そんな感じで人を魅了しながら観客席へ手を振り、第六グリッドへと移動する。

『続いて、ドイツ代表候補生。ラウラ・ボーデヴィツヒ選手!!』  
ラウラ「……………」

ラウラは紹介されるもレースに集中しているのか淡々とした態度で第七グリッドへと移動する。

『続いて、フランス代表候補生。シャルロット・デュノア選手!!』

シャル「アハハハ!!」フリフリ

シャルロットは刀奈と違い、優しく、人懐っこそうな笑顔を観客席に振り撒きながら手を振り。第八グリッドへと移動する。

『続いて、姉妹揃って同じ国の代表と代表候補生に並び立つ、日本代表候補生、更識簪選手!!』

簪「／／／／／」フリフリ

簪は紹介されると恥ずかしそうにしながらも小さく胸元で手を振りながら第九グリッドへと移動する。

一年生専用機持ち組が全員、指定のグリッドで待機するとレースを開始するアナウンスが流れる。

『それでは、みなさん。一年生専用機持ちのレースを開催します!』

試合を開始するアナウンスが流れると皆、スラスタを点火させ、高速機動モード用のハイパーセンサー・バイザーを下ろし、スタートの合図が鳴るのを待つ。俺も、皆と同じようにフリーダムへのヘッド装甲を装着する。

そして、超絶満員の観客が見守る中、シグナルランプが赤く点灯する。

赤……………赤……………赤……………青!

シグナルランプが青になりブザーの音が鳴った瞬間に皆、一斉にス



ラスターを噴かした。

## 第48話

♪BGM：閃光の果てに♪

レース開始のブザーの音で各自、自分の機体のスラスタを噴かし、一気に加速する。すると、最初のストレートをあつという間に抜け、弧を描くような第一コーナーに差し掛かり全員、練習通りに機体をコーナーに合わせてカーブさせる。

また、第一コーナーで最初に仕掛けてきたのはセシリアだった。それにより、セシリアを先頭に列が出来上がる。

順番は、セシリア、一夏、俺、箒、鈴、ラウラ、刀奈、シャルロット、簪の順だ。

セシリア「このまま行きますわよ!!」

鈴「させないわよっ!」

セシリア「来ましたわね、鈴さん!」

鈴はセシリアと並ぶように瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速で加速し、両肩部の衝撃砲を前方にいるセシリアに向けて連射する。

その、空気の弾丸を放たれたセシリアは、それを回避しようとして横にロールして回避。回避に成功するが回避によって減速してしまった隙に鈴が爆発的な加速でセシリアを抜き去る。

セシリア「くっ! やりますわね!」

鈴「へへん! おっそーい!」

鈴はセシリアを抜いたことに勝ち誇ったような笑みを浮かべるが

人間、『勝った!』と思った時が一番の隙ができる。故に鈴は今まで自分の背後をべつたりと張り付いていた影に気が付かなかった。

ラウラ「フツ、甘いな」

鈴「なっ………ラウラ!?!」

鈴の背後に張り付いていたラウラに驚き、直ぐに衝撃砲を構えるが、それよりも先にラウラがシュヴァルツェア・レーゲンの大口径のリボルバー・キャノンをコンマ差で早く放ち、直撃とまでは行かないものの、高速機動状態での被弾はコースラインから逸らせるには十分だ。

雷真「展開が早いな………よつと!」

一位に躍り出たラウラは後方にリボルバー・キャノンを連射しながら牽制とリボルバー・キャノンを放つ時の衝撃を勢いに変えて加速しているようだ。それを最小限の動きで回避する。

一夏「三人に負けてられるか!」

シャル「二人ともお先に」

一夏が動こうしたタイミングでスラストターの出力を上げたシャルロットが俺たちの前に出て、そのまま第二コーナーへと突っ込む。

一夏「なっ、シャルロットまで!?!」

シャル「キャノンボール・ファストはタイミングが命だからね。それじゃあ」

雷真「いやー、白熱してるな」

一夏「呑気に言ってる場合か!?!」

まあ、俺もトップを狙っているがまだ勝負にはでない。出る時は、

海上に設置された、急角度な、つづら折りカーブをイメージしたコーナーだ。五回に渡る、つづら折りカーブは必ず減速をする必要がある。

しかし、俺はそれを減速することなく突破する秘策がある。

そして、つづら折りカーブに入るストレートに入ると背後から赤いレーザーが飛んで来た。赤いレーザーと言えば、一人しかいない。

雷真「箒だな」

一夏「これは……………箒か！」

箒「悪いが先に行かせてもらおうか！」

一夏「そう簡単にいくかよ！」

一夏は雪羅のビームクローで紅椿の赤いレーザーの斬撃を弾きながら追尾する。俺は、一夏が弾いた残りのレーザーの斬撃を機体を回転させたり、ウイングスラスターを動かして最小限の動きで回避する。

雷真「そろそろかな」

レーザーの斬撃を回避していると海上の第3カーブに設置されている5つのポイントが浮かぶつづら折りカーブが見えてきた。なので、ここでセーフティをかけている状態のままフリーダムのスラスターを先ほどより強く噴かし、ウイングスラスターもハイマツトモードに移行する。

すると、あつという間にラウラとシャルロットの隣へ並ぶ。

一夏「なつ、雷真！」

箒「は、速い！」

シャル「うそっ……………さつきまで一夏たちと後ろで！」

ラウラ「くっ……………先ほどまで全開ではなかったのか!？」

雷真「誰がそんなことを言った。それと、先に行くぜ？」

ラウラ「させるか！」

シャル「行かせないよ！」

ラウラとシャルロットの二人が俺を先に行かせない様に両サイドから挟み込むが、俺はフリーダムを海面ギリギリまで降下させて右腰のラケルタビームサーベルを引き抜き、ビーム刃を出し海面に叩き付け、海水を蒸発させて煙幕に使う。

シャル「水蒸気の煙幕!？」

ラウラ「小癪なっ！」

雷真「さあ、追い付いて来いよ！」

海水の煙幕によつて二人が減速するのをよそに、俺はフリーダムを180度前後を入れ替え、バックするような構えのまま、つづら折りのカーブに入り。高速機動モードでもエムとの戦闘で既に試しているので何の躊躇なく個別連続瞬時加速をカーブに合わせて連続で行う。

シャル「また、あんな体勢で！」

ラウラ「まだ、余裕があるということかつ！」

箒「くっ………紅椿！」

一夏「俺は、雷真に追い付くんだ！」

シャルロットとラウラは俺の体勢に驚きながらもつづら折りカーブに入る。箒は紅椿の装甲を展開させて爆発的な加速を見せ、一夏は、俺に追い付くんだと叫びながら白式のスラスターを全開で噴出す。

雷真「悪いな。俺は、レースでも手を抜く気はないんでな」

加速してくる四人には悪いが俺もセーフティを掛けているとはい

え、全力でレースに挑んでいるので手を抜くことはしない。なので、四人の足元……正確には四人の約3 m先の海面にフリーダムのルプスビームライフルとバラエーナプラズマ収束ビーム砲を向けて放つ。

シャル「やばっ!?!」

ラウラ「チッ!」

箒「これはっ!?!」

一夏「うわあああっ!!」

ルプスビームライフルとバラエーナプラズマ収束ビーム砲の今回の主な目的は当てるのではなく、四人の視角の妨害と姿勢を崩させること。

簡単に説明するとビームにより蒸発した水蒸気で視角の妨害。もしくは、真下から蒸発する水蒸気の勢いで姿勢を崩させることが目的なのだ。

それにより、シャルロットとラウラは視角が遮られ。箒と一夏は、真下からのなんちゃって水蒸気爆発で姿勢が崩れコースアウト。

雷真「よし。妨害成……ん?」

雷真「あれは……刀奈か!?!」

シャルロット、ラウラ、箒、一夏の妨害が成功しつつ折りのコーナーを抜けると後ろから紅椿とは違う、赤い閃光が今までにない爆発的な加速で近づいてくる。

その正体は刀奈が乗る。ミステリアス・レイディ霧纏の淑女が専用パッケージである『オートクチュール』と呼ばれる赤い翼のユニットを装備して超高出力モードの『麗しきクリースナヤ』を発動した状態である。

刀奈「ハア〜イ、雷真♪待たせたかしら?」

雷真「やっぱり、刀奈も奥の手を隠してたか」

刀奈「そうよ♪それにしても、まさか個別連続リボルバー・イグニッション・ファースト瞬時加速までマ

スターしているとは驚きだわ」

雷真「個別連続瞬時加速を使って、あるMSモビルスーツの動きを真似たかつたんだよ」

刀奈「へえ、それも含めて後で今日のことを聞きましようか」

雷真「分かってるよ。それと、鈴とセシリア、簪は？」

刀奈「鈴ちゃんとセシリアちゃんは簪ちゃん特製のミサイルにやられてたわ」

雷真「アハハハハ。簪もやるな」

刀奈「それにもう来るわよ」

雷真「みたいだな」

刀奈と簪の話をしていると通常状態の霧纏ミステリアス・レイデーの淑女とは違う、甕覗色をした機体が加速してくる。その正体は間違いなく、簪だ。

簪は何と、後方に春雷を連射しながらそれを追加の推進力としてウラと同じやり方で加速してくるのだ。

簪「追い……付いた！」

雷真「簪も来たか」

刀奈「フッフ。これでお馴染み三人が揃ったわね」

簪「二人が相手でも……負けない！」

刀奈「私だって！」

雷真「俺だって！」

「負けるつもりはない!!」

そこからは俺、刀奈、簪の三者で最後のカーブの前のロングストリート区間まで一步も譲らない飛行を続けている。ロングストレートの中間に差し掛かろうとした時、後ろから複数のビームやレーザー、レール砲やらが飛んでくる。

刀奈「皆、必死ね」

簪「最後まで諦めたくないのは皆、一緒だから」

雷真「それにしても撃ち過ぎじゃないか？」

刀奈「そうね。少し鬱陶しわね」

雷真「よし。二人とも、合わせてくれ」

簪「何をするの？」

雷真「そんなのは簡単。後ろの奴らを蹴散らす！」

刀奈「いいわね、それ！」

簪「のった！」

雷真「それじゃ、ラストのカーブに入ると前の会社提供の看板が残り3つになった時に一斉に射撃武装をぶちかます」

刀奈「OK！」

簪「分かった」

雷真「それじゃあ、行くぞ！」

最後のカーブまで会社提供の看板が残り4つに差し掛かると、俺は脚部スラスターを強めに噴かせ、減速させずに逆さまの状態になりながらハイマツト・フルバーストの構えを取る。

刀奈は右手に蒼流槍を左手には拡張領域バースロットから超高压水弾ガトリングガンの『バイタル・スパイラル』を振り返らずに構える。

簪も春雷と山嵐を振り返らずにマルチロックオンの体勢に入る。

雷真「3」

刀奈「……」

雷真「2」

簪「……」

雷真「1」

雷真「てえっ！」

俺の合図でフリーダムのハイマツト・フルバーストと刀奈の蒼流槍の実弾とバイタル・スパイラルの超高压水弾。簪の荷電粒子砲とストライクのデータからヒントを得たのか山嵐のミサイルをアレンジし



て中身を普通の爆薬ではなく、対空榴散弾頭に中身を変えているようにミサイルが開くと中からは弾丸の嵐。その三人の全射撃武装のフルバーストが後続に放たれた。

そして、最終カーブを抜けてゴールまでの最終ストレートに入ると後方から機影は見当たらないのにコースに沿うよう俺たちに青いレーザーが5つ、追尾してくる。

雷真「もしかして、あれはブルー・ティアーズの偏向射撃か!？」

刀奈「土壇場で偏向射撃を物にするなんて!？」

簪「さすがはセシリア」

雷真「……………。(仕方ない。ここは花を持たせるか)」

尚も追尾してくるブルー・ティアーズの偏向射撃と思われる青いレーザーを迎撃するためにフリーダムの体勢をつづら折りカーブの時の様にバックする構えをして、ルプスビームライフルで一つずつ青いレーザーを撃ち落としていく。

それにより、秒差ではあるが先頭では姉妹揃ってゴールラインを通過したアナウンスが流れる。

雷真「本当に、この土壇場で偏向射撃を習得するとはな。恐れ入る」

こうして、一年生専用機持ち組のレースは幕を閉じた。  
リザルト結果は……………

1位、更識刀奈・更識簪

3位、黒牙雷真

4位、シャルロット・デユノア

5位、セシリア・オルコット

6位、織斑一夏

7位、凰鈴音

8位、ラウラ・ボーデヴィツヒ

9位、篠ノ乃箒

……というリザルト結果になった。

## 第49話

千冬「それでは、黒牙。昨晚の無断外泊と今朝のホームルームの欠席、並びにレースの時間に遅刻ギリギリで現れた理由を説明してもらおうか」ピキピキ

雷真「は、はい……………」正座

キャノンボール・ファストの一年生専用機持ち組のレースも終わり。皆、一度学園に戻ってから本日のカリキュラムは終了となったのだが。

無断外泊等をした俺はホームルームが終わったあとに織斑先生と山田先生、それに、婚約者三名の六人で生徒指導室にて正座で問い質されています。

雷真「えっと……………裏の仕事で、その……………」

千冬「……………」ギロリ

雷真「う、海の上で亡国企業ファントム・タスクの一人である……………サイレント・ゼフィルスのパイロットと交戦しました」  
「「なっ!」「」

俺の言葉に織斑先生以外が驚きの声をあげる。

千冬「亡国企業ファントム・タスクの一人と交戦していた、だどっ!!」ガシ、アイアンクロー

雷真「痛い”、痛い”痛い!!」タップタップ

千冬「このバカ者がああああ!!何を勝手にそんな危険な行動をしている!?!」ギリギリ

雷真「ず、ずびま”ぜんんんっ!!」

雷真「”あ”あ”あ”、頭が割れるウウウウ!?!」

千冬「はあ……………。お前は織斑や他の連中以上に事をやらかしてくれる。それで、サイレント・ゼフィスルのパイロットは？」

雷真「れ、レースの時間が迫っていたので海面に蹴り飛ばして放置しました」チーン

千冬「山田先生、既にターゲットは居ないとは思うが念のため軍の奴らに連絡を」

真耶「分かりました」

千冬「おい、黒牙三人衆。あとは任せる」

「「はー。」」

シャル「そういう訳だから……………」

簪「無駄な抵抗は止して……………」

刀奈「観念しなさい、雷真♪でないと……………」

雷真「で、でないと……………」

刀奈「テンペストIIで……………」

簪「私はビームハルバードで……………」

シャル「僕はラファール・テイラールで……………」

「「ボゴボゴにしたくなるから、ね♪」「ニツコリ

雷真「は、はい……………」

その後、三人にかなりのお説教やお小言を受けたのはいうまでもないだろう。お説教が終わると何故か、今度の休日に俺の財布で高級スイーツの食べ放題に行くことになった。



刀奈「それでは、皆様、ご唱和ください。せーのっ！」

「二二一夏、誕生日。おめでとうっ！」

刀奈の声を合図にそれぞれが手に持っているクラッカーを盛大に鳴らす。

一夏「お、おう。サンキュ……………」

現在の時刻は17時。場所は織斑家。そこには、一夏の誕生日を祝うために十人近くの男女が集まっていた。

まずは、生徒会メンバーである。俺、刀奈、虚さん、本音。次に、いつものメンバーで箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、簪。そして、一夏の友人の五反田弾と御手洗数馬。それと弾の妹の五反田蘭だ。最後に何故かいる新聞部の黛薰子先輩。

雷真「知っているとは思いが、初めまして。二人目の男性I S操縦者の黒牙雷真だ」

弾「お、おお。俺は一夏と鈴とは中学からのダチの五反田弾だ。弾でいい」

数馬「同じく、御手洗数馬だ。数馬でいい」

雷真「なら、俺のことも雷真で構わない」

弾「よろしくな、雷真」

数馬「よろしく、雷真」

雷真「こちらこそ、よろしくな。弾、数馬」

弾と数馬と三人で自己紹介をし、握手をかわす。

弾「それで雷真。ぶっちゃけ、単刀直入に聞くがお前さん、婚約者が三人もいるって本当か？一夏の奴から聞いたんだが……………」

数馬「あつ、それは俺も聞きたい！」

雷真「ああ、それは本当だ。あそこの水色の髪をしている双子の姉妹と金髪で髪を後ろに束ねている女子がそうだ」

数馬「確か、今日の一年生レースでダブル優勝の日本代表と代表候補生の更識姉妹に……」

弾「4位のフランス代表候補生、シャルロット・デュノアちゃんだっけ？」

雷真「ああ、それであってる」

弾「ウオオオオオオ、羨ましい!! どうしたら、そんなにモテるんだよ!？」

雷真「そうだな……。モテるといふよりも、一緒に過ごしてたら好きになっていたのが正しいかな」

数馬「一緒に過ごしていたらって、雷真はあの三人とは長い付き合いなのかな？」

雷真「婚約者でいうなら双子の姉妹の刀奈と簪だけが長い付き合いだな。生まれた時から一緒に育ってきたようなものだから」

雷真「シャルロットに関しては、ちよつと訳ありでな。そのことに関しては答えられない」

数馬「そうか。で、さつき『婚約者でいうなら』って言ってたけど。あの二人以外にも幼馴染が？」

雷真「おう。双子の近くにいる眼鏡をかけた美人とノホホンとしている美少女も刀奈と簪と同じで生まれた時から一緒に育ってきた幼馴染だ」

弾「なにつ!?!なら、眼鏡の美人に関してはもつと詳しく」

雷真「……。 (かかった) ニヤリ

雷真「いいぜ。まずは名前からだ。名前は、布仏虚さん。それで、年齢は俺たちよりも一つ上で……」

それから弾に虚姉さんとくっつけるために色々と情報を流した。大体、情報を流し終わると鈴が『プレゼントの御披露目会』と言って一夏にプレゼントする順番をくじ引きで決めて順番に一夏へ渡して

いく。

まずは、トップバターの弾の妹の蘭だ。蘭のプレゼントはココアベースのスポンジに生クリームとチョコのケーキ。

続いて、鈴のプレゼント………これはプレゼントなのか？鈴が出したのは特製ラーメンだった。何でも、麺から作ったとか。さすがは中華民。こだわりますね。

続いて、セシリアのプレゼントは何と、王室御用達のメーカーの高級ティーセットにセシリアが愛飲している一等級の紅茶もセットらしい。流石は英国貴族のお嬢様。

え？お前もそんな変わらないだろうって？俺は更識家の婚約者であるが、俺の黒牙の家がどんな家か知らないから一緒ではないはずだ。

続いて、シャルロットのプレゼント。まあ、中身は知っているので簡単に高性能の腕時計とだけ。

続いて、刀奈のプレゼントは、前に言っていた通り圧力鍋だった。続いて、俺も簪も本音も虚さんも宣言通りの品物をプレゼントしていた。

続いて、ラウラのプレゼントは何とドイツ軍で正式に使用されているコンバット・ナイフとナイフのホルスターだった。

そして、ラストは箒。箒のプレゼントは男性用の着物だった。



雷真「……」ジー

刀奈「……」(。◆◇▽◇。)キラキラ

簪「……」(。◆◇▽◇。)キラキラ

シャル「……」(。◆◇▽◇。)キラキラ

本音「……」ジ―

一夏にプレゼントを渡したあと、俺たちはとある二人の状況を物陰に隠れて観察している。

弾「ま、また会えましたね。あはは……」ポリポリ

虚「そ、そうね……」

弾「……………」

虚「……………」

その沈黙のあと、二人は同時に口を開く。

「あ、あの……………」

弾「そ、そちらからどうぞ……」

虚「い、いえ、そちらから……」

「……………」

二人とも恐縮してしまい。思うように事を進められない様だ。こんな、少女漫画にあるあるな展開を見ている此方としては……………。

刀奈「二人を見ていると、何かこう胸が『キュンッ!』ってしちやうわね」

シャル「分かる分かる!」

簪「ヒーローがヒロインに告白する前の瞬間みたい」

本音「お姉ちゃんにも春が!」

雷真「少しは、姉さんの恋愛を応援してやれよ」

刀奈、シャルロット、簪、本音の四人は、どうやら乙女心がくすぐ



られるのかワクワク、ドキドキといった心境で二人を観察しているよ  
うだ。

刀奈「まあ、そうなんだけど……」

シャル「でも、こういう展開を見ると乙女心がね」

簪「雷真は四年間の間、戦争で忙しかったから。分からないものは  
仕方ない」

本音「でも、ライライは少年物も分からないと思うよ」

雷真「……仕方ないだろう。恋人が欲しいだなんて思う前に刀奈が  
居たんだから。それよか、そろそろ二人だけにしてやろうぜ」

刀奈「それもそうね」

簪「仕方ない」

シャル「もうちよつと見たかったな……」

本音「ドロロン！」



姉さんと弾による少女漫画のような雰囲気をあとして鈴の発案  
で二人一組になり。ボードゲームをすることになった。その際、俺と  
一夏のパートナーになる権利を求めて少しばかり肉体的に騒がしく  
なったりした。

そして、ある程度、ボードゲームで白熱したあと。俺と一夏は近所  
の自販機へ飲み物を買に行くことにした。

雷真「悪いな、一夏。今日はお前が主役なのに」

一夏「別にいいよ。俺だけ何もしてないし」

雷真「そうか。えーつと、刀奈が缶コーヒー、簪はコーラ、シャル

ロットはオレンジジュース、箒は緑茶、鈴は烏龍茶、ラウラはスポドリ、セシリアが紅茶と……………」

雷真「!!」ピクツ!

これは明確な殺気!でも、これは今日感じたことがあるぞ!?

雷真「一夏、すまないが小銭を左に落としたみたいだ。拾ってくれるか?」

一夏「あ?分かった」

雷真「……………」

一夏が完全に俺の左側に移動した瞬間、飲み物を放り投げ。上着の下に付けているホルスターからカスタムが施されているガバメントを引き抜きながら親指でセーフティを解除し、殺気を感じた方に構える。

一夏「おい、雷真!」

雷真「……………そこに隠れてる奴。出てこい」

一夏「雷真?お前、何を言ってる……………」

雷真「出て来ないなら、こう呼んだ方がいいか?サイレント・ゼフィールのパイロットのエム」

一夏「え!」

エムの名前を呼ぶと奴は暗闇の中から街灯の下へと出てきた。しかし、そのエムの素顔に俺たちは驚愕した。

一夏「……………千冬……………姉……………?」

雷真「……………織斑……………先生……………?」

エム「違う。私はお前だ、織斑一夏。そして、私の名前は……………織斑マドカ、だ」

一夏「ツ……………」

雷真「織斑、マドカ……だと？」

この織斑マドカと名乗る、サイレント・ゼフィルスのパイロットは異常な程に織斑先生に似ている。いや、俺は知っている。似たような奴らを……”コズミック・イラあちら側”の世界で……。

まさか、コイツは織斑先生のクローンなのか!?

マドカ「私が私たるためにお前の命をもらおう！」

———  
パンツ!!

マドカ「ぐあ……!!」

一夏「はっ……雷真!？」

雷真「動くなよ、織斑マドカ。次は頭を狙う」

マドカ「くっ………」

雷真「撃たないでも思ったか？生憎、俺は日本であっても、今更、人に向けて銃を撃つことに何の躊躇もないんでな」

俺は織斑マドカが懐から一夏に向けて銃を構える前に銃を引き抜こうとした右腕の肩を何の躊躇もなくガバメントの引き金を引き、右肩を撃ち抜いた。また、その事に一夏はとても驚いている様だ。

雷真「それに前に言ったはずだ、サイレント・ゼフィルスのパイロット。年季が違うんだんよ、俺とお前とでは」ギロリ

一夏「雷真、お前………」

マドカ「くそっ………」

雷真「一夏、ラウラに応援を要請」

一夏「で、でも………」

雷真「早くしろ！」

一夏「は、はいっ！」  
???「その必要はない」

俺は、俺が人に向けて銃を撃ったことに戸惑う一夏にラウラへ応援要請をする様に促すと、後ろの方から応援要請をするはずの本人の声が聞こえてきた。

ラウラ「手伝おうと思つて家を出たら、銃声が聞こえたのでな。急いで駆け付けたら、これだ」

雷真「さすがは、ボーデヴィツヒ少佐。迅速な行動、お見事です」  
ラウラ「ふざけるのもそこまでだ。ターゲットに集中しろ、中尉」

雷真「申し訳ありません。さて、織斑マドカ。戦力は此方側が圧倒的に優位だが、どうする？無駄な抵抗は止めて、大人しく投降するか。それとも、武力で以て制圧されるか？」

雷真「好きな方を選ばせてやる」

マドカ「ぐっ……………」「ギリ」

ラウラ「選ばせる前に私が拘束する。こいつが何故、織斑教官と同じ顔で、二人と同じ名字を持つのか尋問する必要がある」

雷真「だ、そうだ。大人しく拘束されてくれ」

俺がガバメントを構えたままの状態で、ラウラが織斑マドカを拘束しようとするのと上空から無数の実弾が降ってきた。

雷真「上ツ！」

ラウラ「なにっ!？」

雷真「二人ともISを緊急展開！」

一夏「今度はなんだよ!？」

直ぐにISを展開し、一夏とラウラはSEと腕部で実弾を防ぎ。俺はP S装甲とアンチビームシールドで実弾を防ぎながら実弾を撃つてきた正体を探しているとフリーダムのレーダーに熱源が映り、

照合される。

雷真「AMF—101C、哨戒索敵型AWACSデイン」

雷真「M<sup>モビルスーツ</sup>S!？」

ラウラ「くそっ……やられた！」

雷真「チツ……！」

どうやら、AWACSデインの砲撃は織斑マドカを逃がすための弾幕だったようだ。それに、ご丁寧に織斑マドカの右肩から出血した血痕までもAWACSデインの銃弾により、コンクリートがボロボロで分からなくなってしまうている。

雷真「二人とも今のことは織斑先生以外誰にも話すな」

一夏「何でだよ？」

雷真「考えたくはないが、織斑マドカは……織斑先生のクローンの可能性がある」

ラウラ「なん……だと!？」

一夏「千冬姉のクローン……!？」

雷真「俺は、異世界で同じ人間から作られたクローンを二人知っている。だから、あり得ない話ではない」

一夏「……」

ラウラ「……」

雷真「だから、いいな？織斑先生以外にこの事を口外するな」

一夏「……わかった」

ラウラ「……了解」

雷真「まさか、よりによつて織斑先生のクローンとは……これからどうなることやら。先が思いやられる」

雷真「はあ……」

## 第50話

一夏の誕生日から数日。俺、一夏、ラウラの三人は、一夏の命を狙ったサイレント・ゼフィルスのパイロットである織斑マドカと名乗るファントム・タスク亡国企業の工作員について刀奈たちには話していない。

織斑先生に一夏以外の姉妹がいるかを聞いたが居ないと答えた。これにより、より一層、エムこと織斑マドカが織斑先生のクローンである可能性が高くなった。

そんなことがあって、現在。俺、一夏、シャルロットの三人は、とある港にあるコンテナの上で専用機を起動させて極秘作戦を行っている。

一夏「I S 装備の護送任務か……」

シャル「そう。各国の企業から試作装備のテストを頼まれたんだって。だけど、一夏が来ることなかったんだよ。この前、襲われたばかりなのに」

一夏「だけど、人手が多い方がいいだろう？」

シャル「手伝ってくれるのは嬉しいけど……」

雷真「二人とも、話はそこまでだ。何やら動きがあったみたいだぞ」

俺の声と共に少し離れた場所のコンテナが、いきなり爆発した。その爆発を確かめるために地上にいる護衛部隊が確認に動いて行った。

シャル「なに?!」

一夏「爆発!?俺も見に行ってくる!」

雷真「焦るな、あれは陽動だ。それに、俺たちの護衛目標とは違うコンテナだ」

一夏「……………」

雷真「それよりも敵だ」

一夏が飛び出さない様にそう説明すると港を囲っているフェンスの一部を、高速で走行する一台のトラックがなぎ倒しながら港に入ってきた。

そして、開けた場所に止まるとトラックの荷台が横から開き、荷台の中から顔がバレるのを防ぐためにフェイスガードを付けた、ラファール・リヴァイブに乗る二人のIS乗りが出てきた。

一夏「何者だ？」

雷真「シャルロット、未確認IS乗りの識別コードは？」

シャル「国籍と識別コード、共に無し。完全な、未確認だよ」

雷真「了解。行くぞ二人とも」

一夏「おう！」

シャル「うん！」

まずは一夏が陽動で二人の未確認IS乗りを攪乱。その隙に、未確認IS操縦者が持っている六一口径アサルトカノンのガラムを俺が上空200mからルプスビームライフルで撃ち抜き破壊する。

「なっ!?!」

「何処からっ!?!」

未確認IS乗りの得物を破壊すると、今度はシャルロットがラファール・テイラー二丁を構えて、投降を促すと。

シャル「大人しく捕まってくれば、ケガしなくて済むよ」

「IS乗り!?!」

「構うな、始末しろ！」

シャル「あくあ、せっかく警告したのにな」

未確認IS乗りの二人は拡張領域から量子変化された武装を取り出し。尚も戦闘の兆しを見せたので二人が乗るラファール・リヴァイブの両手にもつ武装とマニピュレーター、両膝部のロケットコンテナ、両肩部のシールドに似た装甲を俺はハイマツト・フルバーストで撃ち抜いた。

完全に武装を破壊したのを確認したらシャルロットたちの元へ降下する。

シャル「だから、言っただけでしょう?」

雷真「二人とも無事か?」

一夏「ああ。雷真のお陰で楽だったぜ」

シャル「そうだね」

雷真「そうか」

「全身装甲のIS……………」

「まさか、二人目の男性IS乗り!」

未確認IS乗りの二人は俺が現れたことにとっても驚いているようだ。

雷真「取り敢えず、その二人を拘……………ッ!!」

雷真「レーダーに熱源反応、警戒体制!」

一夏「え?」

シャル「でも、僕の方に何も反応は……………」

一夏「俺の方にも……………」

雷真「まさか……………ミラージュコロイド?ブリッツ!」

フリーダムには”コスミック・イラあちら側”で後付けされた、新開発の対ミラージュコロイド用の『ミラージュコロイドディテクター』が搭載されている。これは、完全にミラージュコロイドを看破するシステムだ。



しかし、”コズミック・イラあちら側”の技術が施されていないISには『ミラー  
ジユコロイドデテクター』は搭載されていない。

なので、まずは見えない敵の正体をフリーダムのライブラリーから  
照合してから一夏とシャルロットの二人にプライベートチャンネル  
でミラージユコロイドについて説明する。

雷真「ライブラリー照合……【GAT-SO2R NダガーN】。コ  
イツは……ブリッツの量産型か？なっ……フリーダムと同じ核エン  
ジンだと!？」

雷真「クソツたれが!」

Z A F Tの機体や連合の機体をこの世界で作っている奴らは、本当  
に戦争を始めるつもりだ。人のことは言えないが、核エンジンを使う  
なんて。

それに、多分だが。この二機は無人机だ。

雷真「二人ともよく聞けよ。フリーダムのレーダーに現れた熱源だ  
が。モビルスーツM S I Sだ」

一夏「モビルスーツ……!？」

雷真「そして、二人のレーダーに現れないのは特殊光学迷彩のミ  
ラージユコロイドの影響だ。ミラージユコロイドは攻撃を仕掛ける  
時に迷彩が剥がれる。他に厄介なのが二機の動力源だ。二機の動力  
源にはフリーダムと同じ、核エンジンが搭載されている」

一夏「なっ……核エンジン!？」

雷真「だから、二機の胴体部には攻撃を当てるな。もしも、二機が  
ここで爆発なんてしてみろ？ここら一帯は火の海だぞ」

一夏「一帯が火の海に……」

雷真「まずは、俺が先行するから援護を頼む」

シャル「雷真、今回は僕たちだけでやらせて」

雷真「は？シャルロット、お前!？」

一夏「雷真、シャルロットの言う通りだ。いつも、雷真に守っても

らうばかりじゃ男が廃るつてもんだ！」

雷真「けれど、敵は……！」

シャル「お願い！僕たちを信じて」

雷真「……………わかった」

雷真「だが、サポートはさせてもらう。いいな？」

シャル「うん、わかった。雷真はその二人をお願い」



雷真に無理を言って、雷真の戦闘介入無しでMモビルスーツS型のISと戦うと決めた僕たちは雷真のサポートの元、臨戦態勢を取る。

雷真「フリーダムのリレーダーの情報を二人のリレーダーにリンクさせるぞ」

シャル「うん！」

一夏「おう！」

リンクをオープンにすると直ぐにフリーダムから流れて来たリレーダーの情報が僕たちの専用機のリレーダーに反映された。目視では認識できないけど、リレーダーさえあれば何とか。

雷真「Nダガーに生体反応無し、無人機だ。二人とも自爆攻撃には気をつけろよ」

一夏「!?!」

シャル「!?!（そうか……それを考えてなかった!?!）」

無人機。つまりは命がない。死ぬことに恐怖を感じないし、痛みも感じない。

今更ながらに無人機という物の怖さを改めて理解させられた。

雷真「来るぞ！」

シャル「いくよ、一夏！」

一夏「おう！」

僕は一夏と共に雷真のフリーダムから逐一送られてくる姿形の見えない、Nダガーの機体情報と位置情報を確認しながら、虚空に向かって突撃する。

シャル「そこっ！」

ある程度、Nダガーとの距離が詰まると僕はそのまま位置情報が示す虚空に向けて、ラファール・テイラールから、五五口径アサルトライフル『ヴェント』に切り替えた。そして、『ヴェント』をコンテナに当たらない様に注意しながらトリガーを三回引き、ヴェントから三発の弾丸が放たれる。

放たれた三発の内、一発が偶然にもミラージュコロイドで隠れているNダガーに命中する。

すると、それによりNダガーのミラージュコロイドが剥がれる。

シャル「当たった！ でも、やっぱり。位置情報だけで敵を狙うのはなかなか難しいね。それと、あれがNダガーの正体……」

シャル「なんか、ストライクに似てる？」

深緑色のしたNダガーの機体の目視に成功するとNダガーは雷真からの情報によると右腕部の『シルトゲヴェール』と呼ばれる高エネルギーブラスターを撃ってくる。なので、僕はリヴァイブの防御パッケージである『ガーデン・カーテン』を拡張領域から高速切替で取り

出し、防御する。

けれど、IS用のエネルギーシールドではM<sup>モビルスーツ</sup>Sの高エネルギーを長い間は防げない様で、六発防いだけでガーデン・カーテンのエネルギーシールドが割れ、SEが削れる。

シャル「くっ……!」

シャル「やつぱり、雷真が持つてる対M<sup>モビルスーツ</sup>S戦闘用の対ビームシールドと違って、ガーデン・カーテンじゃあ、強度が……」

雷真「シャルロット、これを使いえ!」

ガーデン・カーテンが壊れて、愚痴を溢すと少し離れている場所にいる雷真からストライクの対ビームシールドが投げ渡される。

シャル「これは……ストライクの子?」

シャル「これがあれば行ける!」

雷真からストライクの対ビームシールドを受け取った僕は、右手に持つ、五五口径アサルトライフルのヴェントを拡張領域に収納。代わりにラファール・テイラーを取り出す。

シャル「さあ、本気でいくよ。リヴァイブ!」

対ビームシールドを装備した僕は、ラファール・テイラーを三点バーストにセットして、Nダガーの左肘を狙う。

しかし、それをNダガーは対ビームコーティングがされた右腕部のシルトゲヴェールでビームを弾く。ラファール・テイラーのビームを弾くとNダガーもお返しとばかりに高エネルギーブラスターを撃ってくる。

シャル「やつぱり、胴体以外を狙うのって難しい。雷真は、よくこんなことをいとも簡単にできたなあ」

シャル「やっぱり四年間の間に、こんな姿形が消える奴らと何度も戦闘してるからなのかな……？」

今まで、散々、雷真の射撃技術は凄いと思っていたけど。改めて、彼の射撃技術と自分の射撃技術を比べると舌を巻いてしまう。

戦闘中なのに、そんなことを考えているとNダガーがいきなり、ビームを撃つの止めて、左腰にマウントされている大小に分かれている二振りの対装甲刀を引き抜くと遠距離行動から近接行動にシフトしてきた。

シャル「そっちがその気なら、こっちだって！」

雷真には悪いけど、対ビームシールドを放り投げて、左手をフリーにするとNダガーに合わせて僕も拡張領域バーススロットからラファール・テイラーと入れ換えるように近接ブレードの『ブレッド・スライサー』二本を取り出し応戦する。

シャル「ハアッ！」

シャル「ヤッ！」

シャル「セヤアッ！」

何度かNダガーと剣を交えていると無人機ならではの癖が見えてきたので、その癖についてNダガーの対装甲刀を躲わしてからブレッド・スライサーを逆手持ちにNダガーの両腕部の肘関節を内側から開く様に切断する。

シャル「これで、チエックメイトだよ」

両腕部を肘から切断に成功すると逃げられないように背部のスラストアーにブレッド・スライサーを差し込んで破壊する。

シャル「一夏の方は……………終わったみたいだね」

もう一機のNダガーと戦っているはずの一夏が少し心配になり、一夏の方に視線を向けると、そこには本当にNダガーの胴体以外の頭、両腕、両足を雪片式型で切断されたと思われるNダガーの胴体部のみ無傷の残骸と一夏の姿があった。

シャル「お疲れ様、一夏」

一夏「おう。でも、凄く厄介な相手だったよ」

シャル「僕もそれは思う。でも、僕の方はミラージユコロイドを使わせる隙を作らせなかった分、楽だったかな」

一夏「げっ！マジか……………俺は二回も使われたけど、雷真の位置情報で何とか」

一夏と戦闘の報告をしあっていると未確認IS乗りの二人を監視していた雷真が此方にやってきた。



雷真「二人とも、無事か？」

シャル「うん。SEを削られたけど、なんとか…………」

一夏「俺の方もなんとか…………」

雷真「そうか…………」

どうやら、二人とも俺が思っていたよりも実力を付けていたようだ。けれど、安心はできない。二人は、まだ人を殺す恐怖を知らない。それに、今回は無人機だったから良かったものの。もしも、これが有人機でありオープンチャンネルで命乞いなんてされたら。多分、二人はその命乞いに耳を傾けて撃たれる。

雷真「……………」

シャル「雷真？」

一夏「どうしたんだよ？」

雷真「あ、いや……二人とも、今回は良くやってくれた」

シャル「そうかな、えへへ」

一夏「これで一つ。雷真の強さの秘密を知った訳だしな」

シャル「そうだよ！あんな、姿形が消える奴らを相手してたら強くもなるよ」

雷真「二人とも少しいいか？」

シャル「なに？」

一夏「なんだよ？」

雷真「さつき、Nダガーとの戦闘が始まる前にNダガーの動力源の話をしたよな？」

一夏「お、おう……………」

シャル「フリーダムと同じ、核エンジン……………」

雷真「今回のことは外部に絶対に漏らすな。それが刀奈や簪たち……………専用機持ちや織斑先生たちであつてもだ」

一夏「でも、こんなヤバイ物を千冬姉たちに伝えないのは……………」

雷真「だからこそだ。これは、オーブ連合首長国、第二宇宙艦隊アーケンジェル所属。黒牙雷真中尉として、独断で国家機密とさせてもらう」

シャル「雷真……………」

雷真「いいか？核エンジンってのはお前たちが知っているよりも厄介な物なんだよ。これがフリーダムやNダガーの様に核エンジンが搭載された機体が各国の軍に渡ってみろ？」

俺は三度も核による悲劇をこの目で見てきた。だからこそ、コイツらには核に関わって欲しくない。でも、そういう訳には行かないと思う。

なら、今はまだ、少しでも核にあまり関わらない様に核の危険性が

ら遠ざけるのが俺の役割だ。

雷真「アラスカ条約なんて物は意味を成さなくなる。とにかく、核エンジンをISに搭載させたら一つの都市や一つの国なんて簡単に滅ぼせるんだよ」

雷真「それが、分からないお前じゃないだろう、一夏？」

一夏「……………わかった。なら、雷真を信じる」

雷真「ああ、そうしてくれ。シャルロットもいいな？」

シャル「うん……」

雷真「わかってくれたなら、いいよ。それじゃあ、拘束した二人のIS乗りの護衛部隊に引き渡したし。学園に帰るぞ」

一夏「ああ」

シャル「うん」



## 第51話

雷真「それじゃあ、一夏。シューター・フロアから二段階瞬時加速ダブル・イグニッションをやってみろ」

一夏「おう！」

Nダガーの襲来から翌日。色々と悩んだが今は一夏を強くすることに専念することにした。

そして現在、早朝特訓にて学園祭前から始めていた。円状制御飛翔サークル・ロンドのシューター・フロアから瞬時加速イグニッション・ブーストまたは二段階瞬時加速ダブル・イグニッションを使用した。ゼロ距離荷電粒子砲を叩き込む特訓の最終確認。ターゲットは無論、俺とフリーダムだ。

一夏「いくぜ！」

雷真「ああ」

一夏は精神統一をした後、俺の周りを円状制御飛翔サークル・ロンド始めたので、いつも通りルプスビームライフルを少し甘めに撃つ。

すると、一夏はちゃんとシューター・フロアでビームを回避しながら二段階瞬時加速の機会を伺っていた。

一夏「ここだっ！」

雷真「……………」。(物にしたな)」

一夏「ウオオオオツ!!」

雷真「でも、俺に当てるにはまだ早いっ！」

背後から一夏が二段階瞬時加速ダブル・イグニッションを使い。後ろから迫ってくることを知らせる危険アラームが鳴るが、ハイパーセンサーを使って一夏の距離を計算しながら、回避行動を取る。

一夏「なにいいいい!?!」

雷真「ほら、驚いてないでガードしろ」

一夏「しまっ………！」

雷真「はい。ワン・ロスト」

一夏「ぐっ」

その回避行動は、一夏の攻撃をフリーダムの脚部スラスターを強く噴かせながら、能動性空力弾性翼を活用してバク宙返りで回避。そして、そのまま一夏の背後を取りながら、右腰のラケルタビームサーベルを引き抜き、ビームサーベルの切っ先を一夏の眼前に突きつける。

雷真「回避されたくらいで集中力を切らすなよ。俺じゃなくても墜されるぞ。サイレント・ゼフィルスのパイロットとかな」

一夏「………サイレント・ゼフィルス」

雷真「でも、ゼロ距離荷電粒子砲の特訓はクリアだな」

一夏「おっしや！」

雷真「それじゃあ、次の特訓に入るけど少しいいか？」

一夏「なんだよ？」

雷真「学園祭の亡国企業とM S I Sの襲撃に伴い、各専用機持ちのレベルアップを図るために、来月に全学年合同の専用機持ちによるタッグマッチトーナメントを行うことになった」

一夏「へえー、そうなのか」

雷真「そこで、お前には簪とペアを組んでもらう」

一夏「は？ いや、雷真が簪さんと組めばいいだろう？」

雷真「いや、俺じゃあダメなんだよ」

一夏「雷真じゃあダメ？」

雷真「一夏は簪の専用機が何処で作られていたか知ってるか？」

一夏「いや、全然」

雷真「簪の専用機を作っていたのは、一夏、お前の白式を作っていた『倉持技研』なんだよ」

雷真「この意味が、お前には分かるか？」

一夏「えつとー。つまり、雷真は俺と簪がペアになることでお互い

の専用機を作った企業が同じだから専用機の調整とかがしやすくなる？」

雷真「それだけじゃない。簪の専用機は俺たちの所為で遅れていた。本来なら、クラス対抗戦には完成していたはずだ。それを覚えて置いてくれ」

一夏「それって俺たちじゃなくて、俺の所為だろうか？なら、簪さんに謝らないと」

雷真「そうだな。それじゃあ、特訓の話に戻すぞ」

一夏「お、おう！」

雷真「今度の特訓はイグニッション・ブースト瞬時加速からの派生技であり。この間のレースで俺が使った、リボルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速の特訓だ」

一夏「リボルバー・イグニッション・ブースト……………」

雷真「それに加えて、お前にはあるモビルスーツM Sの動きを覚えてもらう」

一夏「M Sの？」

雷真「ああ。お前の白式の一撃必殺の零落白夜と併用したらラウラクラスは倒せるようになるだろう」

一夏「ラウラたちに勝てるかもしれない。よし、やるよ！俺！」

雷真「その意気だ。では、原理の説明だが、リボルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速は名前の通り。個別にイグニッション・ブースト瞬時加速を連続的に使う技だ」

雷真「白式は燃費が悪いから何度も使えないが、ここぞという時の起死回生にはなる」

一夏「なるほど」

雷真「じゃあ、お手本を見せるから良く見ておけよ？」

一夏「おうよ！」

一夏にエムにやったデステイニーの劣化版の動きを見せるためにルプスビームライフルとラミネートアンチビームシールドを後ろ腰にマウントしてからフリーダムバーススロットの拡張領域に収納してある。ソードストライカーのシユベルトゲーベルを取り出す。

一夏「それって、ストライクの剣？」

雷真「……………」

シュベルトゲベルを取り出すとフリーダムウィングスラスタを開き、ハイマツトモードにしてからシュベルトゲベルを正眼に構え、一気にメインスラスタとウィングスラスタを噴かす。そして、ある程度の速度に到達すると一回目の瞬時加速が切れる前のタイミングで瞬時加速を連続で行い、個別連続瞬時加速でステイニーの動きと似た動きをする。

一夏「す、スゲエ……………」

雷真「どうだ？もしも、これと零落白夜を併用しながらやったらどうなるかイメージはついたか？」

一夏「ああ。本当に必殺技だな。こりゃ」

雷真「次、個別連続瞬時加速を使った応用技だ」

一夏「まだ、あるのかよ……………」

雷真「取り敢えず、構えろ」

一夏「分かった」

互いにある程度、距離を開け得物を構える。

雷真「それじゃあ、一夏は正面から瞬時加速で攻めて来てくれ」

一夏「分かった」

雷真「よし、じゃあ……………GO!!」

俺と一夏はある程度距離を開ける。そして、一夏は雪片式型を構えて瞬時加速を行う。それと同じタイミングで俺もシュベルトゲベルを構えて個別連続瞬時加速を行う。

一夏「ウオオオオツ!!」

雷真「……………」

互いに距離がミドルレンジに迫ると一夏は雪片式型を振り当たる瞬間にハロの中にあつたデータにデステイニーがジャステイスの『ビームキャリーシールド』に複合されている『グラップルスティンガー』を躲したように俺もフリーダムリボルバー!の起動力と個別連続イクニツジョン・ブースト瞬時加速を使用してグルリと回転させ回避しながら白式のSEを削る。

一夏「嘘だろう、この距離で!」

雷真「これが個別連続瞬時加速とM Sモビルスーツの動きを合わせた技だ。初めてやられてどうだった？」

一夏「何かこう………軽かった、って感じかな？」

雷真「軽かった、か……」

一夏「普通は回避されると、『回避された!』って思うけど。今は、霧を切ろうとしてるといふか、なんといふか………」

雷真「そこまで感覚で掴んだか。さっきの動きは本来、ミラージユコロイドを使った動きが元なんだ」

一夏「ミラージユコロイドって、この間の姿形が見えなくなる奴のか?」

雷真「ああ。いっそ、一夏にデステイニーのデータを見せた方がいいか」

一夏「デステイニー……?」

雷真「そう、【ZGMF-X42S デステイニー】。さっき言ったモビルスーツM Sのことだ」

本来は見せるつもりはなかったのだが、Nダガーが出現したことで俺が所持しているカオスたちのことを考えるとM Sモビルスーツを製造している奴らは、十中八九、ハイパーデュートリオンエンジンをこちら側でも製造が可能なのだろう。

一夏「なんだよ………これ。残像?」

雷真「これは高機動時にミラージユコロイドを纏うんじゃないくて周

団に散布することで残像を作っているんだ。これにより、視覚的や電子的にも敵を攪乱できる」

一夏「雷真は、コイツと戦ったことはあるのか?」

雷真「あるが、負けている」

一夏「えっ!?!」

雷真「言い訳にしかないが、当日の俺の機体は量産機からワンオフ機としてオリジナルにチューンアップした機体だからな」

一夏「どんな機体なんだ?」

雷真「当日の俺の機体は『MBF-06 シルバーアストレイ』だ」

一夏に当日、C. E. 72年のユニウス条約以降に俺のワンオフ機としてカガリから渡された最新型のアストレイ。『MBF-06 シルバーアストレイ』のデータを見せた。

一夏「これが、シルバーアストレイ……白金のMモヒルスーツS」

雷真「装甲は普通のアストレイと違って、ラミネート装甲だ。他には、ストライカーパックを装備できるように背部を改造してあるんだ」

雷真「それでも、デステイニーとは機体スペックの差が大き過ぎて演習でも10回中2回勝てればいいほうだ」

一夏「雷真でも八回も負けるのかよ」

雷真「そりやそうさ。なんせ、デステイニーはフリーダムよりも高性能。それに加えてパイロットはZAFTのエース級だぜ?そんな奴に、一般兵の俺が楽勝なわけないだろう」

一夏「もしも、そんな奴らが俺たちの世界に居たら。どうなった?」

雷真「そうだな。強さで計るのであれば俺が知ってる強者たちが仮に、この世界に来ていたとしたら俺は多分、上から六番目くらいじゃないか?」

俺の頭にはキラ、アスラン、シン、ムウ、劾の顔が浮かんだ。

一夏「五人も上がいるのかよ……」

雷真「まあ、そんなもんさ。お前だって、俺がいなくても下から数えた方が早いだろう？」

一夏「くっ」

一夏「そ、そうだけど……」

雷真「そんなことよりも、特訓の話に戻すぞ。さっきも言ったが  
リボルバー・イグニッション・ブースト 個別連続瞬時加速は瞬時加速を個別に連続させる技だ。そのため、イグニッション・ブースト 瞬時加速を三回以上連続させる必要がある」

雷真「だから、当分の間の早朝特訓は白式のスラスタを個別に動かして連続的に噴かすことをメインにした特訓にする。いいな？」

一夏「おう！」



一夏の初めてのリボルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速の特訓を開始し、早朝特訓の終わりまで続けたあと、一度寮に戻り。朝食を食べて、授業を受ける。二限の休み時間になると、何故か写真部のエースであり二年生次席の黛薫子先輩がやって来た。

薫子「やつほー、織斑くん。それに黒牙くんに篠ノ之さんも」

一夏「あれ、どうしたんですか？」

薫子「いやー、ちよつと三人に頼みがあつて」

箒「頼み？ 私たちにですか？」

薫子「うん、そう。あのね、私の姉が出版社で働いてるんだけど、専用機持ちとして三人を独占インタビューさせてくれないかな？ あ、ちなみにこれが雑誌ね」

そうやって黛先輩が取り出しのは、ティーンエイジャー向けのモデル雑誌だった。

一夏「えつと、あのー、黛先輩？この雑誌って、ISと関係ないですか？」

雷真「いや、一夏。刀奈や簪、シャルロットから聞いたんだがな。普通は専用機持ちっつてのは国家代表と代表候補生なんだ。他には、企業のテストパイロットとかだな。だから、俺たちがイレギュラーって訳だ」

一夏「なるほど。でも、今の俺と雷真は日本の仮の代表候補だろう？」

雷真「そうだな。ハルバートンさんのご厚意で俺たちを日本代表候補（仮）にしてもらっているな。で、国家代表と候補生はタレントや国家公認のアイドル的なこともするんだ。現に、夏休み中に刀奈と簪はその責務で曲録りしに行ってたしな」

薫子「捕捉すると、主にやる仕事はモデルだけだね。でも、国家によつては、黒牙くんが言つてた二人みたいに歌ったり、他には、俳優業なんかもあるみたいだけど」

一夏「へえー、みんな大変だな」

箒「呑気に言っているようだが、一夏。一応、お前も代表候補なのだぞ？もしかしたら、お前にも白羽の矢が立つかもしれないぞ」

一夏「え？マジ？」

雷真「可能性としては無くもないな」

そんな話をしていると偶然、俺たちの話を聞いたのか鈴が此方にやってきた。

鈴「なによ、一夏。アンタ、モデルやったことがないわけ？」

雷真「いやいや、鈴。数ヶ月前まで一般人だった一夏に『モデルやったことがないわけ？』って言う方が可笑しいだろが」



鈴「うっ。た、確かに……………」

鈴に注意したあと、鈴に国家代表と代表候補生がどのようなモデルをしているのかを実際に見せてもらった。

一夏「へえ。なかなかいいじゃん」

鈴「ふふん。そうでしょう、そうでしょう。で、こっちのは去年の夏の……………」

鈴は、尚も一夏に自分のモデルデータを見せしていると休み時間が終わりを告げチャイムが鳴り響いた。

薫子「織斑さんに黒牙くん、今日は剣道部に貸し出しよね」

雷真「ええ。そうですけど」

薫子「じゃあ、また放課後に来るから。バイバイ！」

そう言つて黛先輩は颯爽と教室から出ていった。また、黛先輩と入れ替わる形で織斑先生がやって来た。

雷真「……………」

鈴「でねでね、こっちが……………」

雷真「鈴、後ろ！左右に回避！」

鈴「!?（ダメ、間に合わない!）」

俺の声で鈴は咄嗟に頭上で腕をクロスして防御態勢を取る。

そして……………」

————バシンッ！

鈴「……………ッ!!」

千冬「ほーう。今、咄嗟に回避するのは出来ないと判断し、防御姿

勢を取ったか。少しはやるようになったな、小娘」

鈴「あ、ありがとうございます」涙目

鈴は何とかクロスガードで織斑先生によって頭上から振り下ろされた出席簿を防ぎ。その代償に両腕を赤くさせながら織斑先生から褒め言葉をもらった。

千冬「しかし、休み時間が終了を知らせるチャイムが鳴っているのに他クラスにいるのは感心せんな。とっと自分のクラスへ戻れ」

鈴「は、はい……………」涙目

織斑先生の注意を頂いた後、鈴は自分のクラスと帰って行った。

千冬「それでは、これより近接格闘戦における、効果的な回避方法と距離の取り方の理論講習を始める」

## 第52話

刀奈「さて、皆の衆。時は来た」

簪「……」コクリ

シャル「……」コクリ

本音「ビスケット美味しい♪」モグモグ

虚「……」ズズズズ

時は放課後。場所は生徒会室。彼女たち、雷真の婚約者三名は本日の二限の休み時間に黛薫子が言っていた専用機持ち独占インタビューのことについて聖戦が行われようとしている。

刀奈「それでは、状況は報告した通りよ」

簪「雷真と大人のデート」

シャル「雷真と二人きりでディナー」

刀奈「しかし、選ばれるのは一人だけ」

簪「そのための、戦争」

シャル「それで今回は何で決着を付けるの？」

刀奈「虚、お願い」

虚「わかりました」

私の指示で虚は、自分の机の下から一つのハテナマークが描かれた箱を出した。

虚「それでは、今回の対戦の種目を決めさせていただきます」

刀奈「ええ、お願い」

虚「では」

——ガソゴソ、ガソゴソ

虚「今回の種目は……………」

刀奈「……………」

簪「……………」ドキドキ

シャル「ゴクリ……………」

虚「携帯ゲームである『Getting over it』でござ  
います」

刀奈「ゲッティング……………」

簪「オーバー……………」

シャル「イット?」

虚「ルールを簡単に説明すると、水の入った壺に嵌まってしまった  
主人公が登山用のハンマーでゴールを目指すというゲームです。難  
易度はかなり高いそうです」

虚「そして、そのゲームを一番早くクリアした人が勝者ということ  
になります。また、タイムリミットは最終下校時刻までです」

刀奈「地味そうだけど難易度が高いと言われたらクリアしたくなる  
わね」

簪「どんなゲームもバチ来い」

シャル「あまりゲームとかしたことないけど、雷真と二人きりで夜  
のダイナーができるなら」

本音「面白そうだから、私もやる〜」

ゲームをやる四人全員が自分の携帯にアプリをダウンロードした  
ら虚の声でスタートになる。

虚「それでは、スタート!」

〜30分後〜

刀奈「いやああああああ!!」  
簪「何これ……鬼畜ゲー……」  
シャル「蛇いいいい!!」  
本音「あつ、また最初からだ……」

とまあ、こんな感じで私たちは『Getting over it』  
で雷真のインタビューのパートナーを賭けた勝負に勤しむのであつ  
た。



く時は同じく、場所は剣道場く

一夏「面ーッ!」

雷真「フッ……!!」

——パシッ!パシッ!

箒「一本!雷真」

一夏「なっ……!!」

雷真「……」

現在、俺と一夏は生徒会として部活動への貸し出し期間中により、  
剣道部で剣道の模擬試合をしていた。

一夏「ありがとうございました」

雷真「ありがとうございます」

模擬試合のあと礼儀の挨拶を終えてから面の防具を取る。

一夏「はあ……まさか、剣道まで雷真に負けるなんて」

雷真「自己紹介の時には、言わなかったが。俺も更識の人間だ。だから、剣術、槍術、弓術、柔術等々は心得ているさ」

箒「流石だな。それに比べて一夏と来たら……」

一夏「面目次第ありません」

雷真「箒、一夏は仕方ないさ。何せ、一夏は元々普通の一般人。俺は、”更識”という名家で育った身だから。そこは比べ様もないさ」  
箒「いいや、それは違うぞ。雷真！中学三年間、しつかりと剣道を続けていたら、今の”返し胴”は防げていたかもしれんだぞ!」

箒「故に、鍛練が足りんだ!」

一夏「とほほ………」

俺の返し胴を受けた一夏に箒は、鍛練が足りないと叱る。しかし、二限の休み時間に黛先輩が放課後に来ると言っていたので、そのことについて話すことにした。

雷真「ところで、二人は黛先輩が言っていた、専用機持ちのインタビューを受けるのか？」

一夏「俺はどちらでも。箒は？」

箒「そんな物は受けん！見せ物などになってたまるものか。私の主義に反する」

一夏「だよな」

雷真「だ、そうですよ？黛先輩」

一夏との模擬戦の時から感じていた視線の主と思われる黛先輩が隠れている剣道場の入り口へ声をかける。

一夏「は？」

箒「へ？」

薫子「いやはや、よくわかったね……」

雷真「あんだけ熱い視線を向けながらカメラで撮られていたらそりや分かりますよ」

一夏「いやいや、俺は分からなかったぞ？」

箒「わ、私もだ……」

雷真「話を戻して、黛先輩。箒は、どうやら受けないようですがどうしますか？」

薫子「取り敢えず、男子二人の返答を聞いてもいいかな？」

一夏「俺は、どちらでもいいんですけど……」

雷真「俺の方は一夏と箒がセットみたいだったので、俺も誰かパートナーを探そうか考えていたんですけど……」

薫子「ちよ、ちよい待ち！黒牙くん、仮に織斑くんと篠ノ之さんが受けていたら。君は誰をパートナーに選んでた？」

雷真「そりや、刀奈、簪、シャルロット。婚約者三人以外に誰がいますか？いや、一人だけ居たわ」

「

薫子「ふむ……少しだけ時間を頂戴」

雷真「は、はあ……」

インタビュ어의俺のパートナーの話聞いた黛先輩は突然、自分の携帯を取り出して誰かに電話をかけた。

薫子「うん、うん、そう！だから、そういうことだから、手配しておいてよ？こっちも何とかするから」

薫子「はいはい。またね」ピッ

薫子「さてさて、お待たせ。そして、じゃん！ここに、豪華一流ホテルのディナー招待券が三枚。これが、インタビューを受けてくれた時の報酬よ」

黛先輩が出したのは、なかなか豪華なホテルのディナー招待券、三枚だった。

雷真「なんだ、あそこのホテルじゃないか」

一夏「雷真、ここのホテルを知ってるのか？」

雷真「ああ。刀奈と婚約した翌年の新年の挨拶周りの時に婚約披露をここのホテルでパーティーをしながらやったんだ」

一夏「へえ〜」

雷真「部屋もなかなかで、ディナー料理も美味かったぞ。それに、このホテルオーナーとも顔見知りだし、昔はお義父さんの名義で株主やってたしな」

薫子「しよ、小学生で株主……………」

雷真「そういえば、今度の新年の挨拶回りは面倒くさいことになりそうだな。考えただけで憂鬱だ……………」

一夏「二年間も行方不明になってたからな」

雷真「それだけじゃないさ。挨拶回りになると、他所の名家の種馬共が簪を狙ってアプローチをしてくるんだよ」

箒「なるほど。刀奈は雷真と婚約しているから平気だが。簪は、そんな相手がいらないから我こそはという感じで、更識の財力を狙う輩がいると」

雷真「そういうこと。もしも、簪に手を出したらフリーダムで種馬共の家にハイマツト・フルバーストをぶっ放そうかな」クロイエミ

一夏「いやいや、ダメだろ！」

箒「そ、そうだぞ！いくら、大切な婚約者だからといって何の悪事をしていない一般人に力を振るうなど!？」

雷真「けれど、もしもの時は……………フフフフ」ハイライトoff

一夏「そんなことをしたら、会長や簪さん、シャルロットが悲しむぞ」



雷真「……………分かった。」

箒「な、なんだ今の長い間は」

薫子「あ、あの……………話を戻していいかな?」

一夏「あ、す、すみません」

薫子「取り敢えずは黒牙くんはインタビューを受けてくれるの?」

雷真「ええ。それに、どうせ今頃、生徒会室でインタビューの話を聞いていた婚約者二名が俺とインタビューを受ける権利を求めて戦ってるはずですから」

薫子「そ、そうなんだ……。他の二人は?」

一夏「お誘いは嬉しいのですが、箒が……………」

箒「やはり、受けましょう!」

一夏「箒? お前、主義はどうした?」

箒「わ、私は柔軟な物語と先輩のために考えているのだ! 文句があるか!」

何やら照れ隠しなのか分からないが、箒は一夏の頬に竹刀をグリグリと押し込む。

一夏「まあ、お前がいいけどな」

箒「そ、そうか。ところで……………だな一夏。このホテルのディナーだが……………も、もちろん一緒に行くのだろうな!」モジモジ

一夏「おう。そりや、雷真が誉めるほどのホテルのディナー招待券がもらえるなら受けるさ」

薫子「じゃあ、三人とも受けるということでもいいかしら?」

雷真「そのようです」

薫子「分かったわ。それと、黒牙くんのパートナーの分はインタビュー当日に渡すから」

雷真「分かりました」

薫子「それじゃあ、アデュー!」

俺たち三人+俺の婚約者一人がインタビューを受けると決まると

黛先輩は、ディナー招待券を渡したあと剣道場から走り去って行った。



黛先輩による俺、一夏、箒の独占インタビューの件について受ける方向で話が済んだ翌日の早朝特訓。第3アリーナにて一年生専用機持ちが集合していた。

刀奈「それで、雷真。話って何かしら？」

雷真「今から話すことは俺と一夏の二人のタッグマッチトーナメントのパートナーについてだ」

これから話すことをそう説明すると一夏以外の皆が顔を青く染め上げた。

セシリア「ら、ららら雷真さん？もしかしてですが、雷真さんが一夏さんとタッグマッチトーナメントに出られるのですか？」

鈴「無理無理無理！一夏がいくら雷真の足を引っ張っても雷真が居るんじや足を引っ張って無いような物よ!？」

一夏「鈴、お前なあ！」

雷真「ああ、そういう手もあったか」

俺は思わず、セシリアと鈴の言葉に右手を左手の手のひらにポンツと打ってしまった。

ラウラ『そういう手もあったか』というと、雷真が嫁とタッグを組む訳でないのかな？」

雷真「その通り。で、一夏には俺が選んだパートナーとタッグマッチトーナメントに出てもらおう」

その言葉を聞いた一夏に好意がある女性陣が期待の眼差しを此方に向けてくるが、既に決まっているし。一夏に伝えている。

雷真「そのパートナーとは……………」

「……………」ゴクリ

雷真「簪だ」

簪「えっ……………私？」

「……………ええええええ!!」

鈴「ちよつと、雷真!なんで、私じゃなくて簪なのよ!」

セシリア「そうですね!何故、私ではなく、簪さんなのか至急説明を求めますわ!」

ラウラ「雷真、貴様という奴は自分の夫に人の嫁と組ませる。そんな性癖を持つているのか!?恥を知れ!」

箒「そうだぞ!夫や嫁云々はともかく、先日、簪のことで言ったことは嘘だったのか!」

雷真「はいはい。まずは、説明をちゃんとするから一度深呼吸しろ」

一夏のタッグパートナーが簪だと発表すると一夏ハーレムズが激怒したので、それを宥めてから何故、一夏と簪を組ませるのか説明する前に簪に頭を下げる。

雷真「まず、簪。すまない。一夏とお前を組ませるのは一夏にとっても簪にとっても大事なことだと判断したからだ」

簪「必要なこと?」

雷真「そうだ」

簪「分かった」

刀奈「雷真、簪ちゃんが了承したから私からとやかく言うつもりはないけどちゃんと説明して」

雷真「分かつてる。今回、一夏と簪を組ませるのは二人の専用機を  
考えてだ」

刀奈「なるほどね」

鈴「ちよつと、二人だけで納得してないで私たちにも分かるように  
説明しなさいよ！」

雷真「一夏の専用機である《白式》と簪の専用機である《打鉄式式》  
は元々同じ企業で製作されていた。そして、一夏と俺が世界初の男性  
IS操縦者として発表された」

シャル「あー、なんとなく分かったかも僕……」

ラウラ「同じく……」

鈴「どういうこと？一夏と雷真が男性IS操縦者として発表された  
ことが何の関係があるのよ？」

セシリア「雷真さん。私の憶測を述べてもよろしいですか？」

雷真「構わない」

セシリア「では、一夏さんと雷真さん、お二人が男性IS操縦者と  
して発表されたことにより、雷真さんは別として、一夏さんの《白式》  
が簪さんの《打鉄式式》よりも優先的に人材を割かれてしまった。そ  
れにより簪さんの専用機の開発が遅れた」

鈴「あつ……。そういえばクラス対抗の時、簪のクラスは……」

雷真「それも含めて、同じ企業で作られた専用機なら機体の調整の  
仕方にも似ている。だから、二人には組んでもらうことにしたんだ」

一夏と簪を組ませる理由を全員に説明すると一夏が簪の前に出て、  
頭を下げた。

一夏「簪さん。俺の所為で君の専用機が遅れてしまったことを謝り  
たい。すみませんでした」

簪「貴方の所為で私の専用機は遅れた……」

一夏「ツ……!!」

簪「前の私ならそう言ってたかも知れない」

一夏「え……?」

簪「これは個人的な話になるけど、偶然的にはいえ。貴方が男性IS操縦者として発表されて、白式に人材を割かれて、打鉄式式の完成が遅れた。色々な偶然が重なったから、あの日、私は雷真に想いを告げて、結ばれた」

簪「だから、今さら貴方を……………一夏を恨んでなんかいない。でない、私の、私たちのヒーロー雷真に嫌われちゃうから」

一夏「簪さん……………」

簪「だから、これからは友人として、タッグマッチのパートナーとしてよろしく。一夏」

一夏「ああ、よろしく頼む。簪」

どうやら、無事に二人を組ませることが出来たみたいだな。

刀奈「良い感じで終わろうとしてる所、悪いけど。雷真、貴方のタッグパートナーは？」

簪「はっ！」

シャル「そ、そうだよ！雷真は一体誰とタッグを組むのさ!？」

鈴「まあ、無難に考えて学年別トーナメントの時と同じでシャルロットじゃないの？」

セシリア「万が一ですが、私たちの誰かという可能性もなきにしもあらずですわよ。鈴さん」

箒「セシリア、現実を見るんだ。雷真が私たちの誰かと組む訳がない。組むとしたらシャルロットと刀奈のどちらかだ」

ラウラ「私も箒と同じ考えだ」

刀奈「で、そこんとこどうなのよ雷真?」

雷真「あー、まあ、色々考えた末」

「……………」

雷真「お前たちとは誰とも組まない」

「……………」

「……………」

専用機持ちとは誰とも組まないと宣言するとワンテンポ置いてから全員が驚きを露にした。

刀奈「ちよつと、待ちなさい！ 私たちとは誰とも組まない？ 色々と発言がおかしいわよ、雷真!？」

シャル「そうだよ！ 今度のイベントは専用機持ちの連携や練度を高めるためのタッグマッチなのに、何で専用機持ちの僕らと組まないのさ!？」

雷真「だって、お前らと組んじゃったら、まともな試合にならないだろう?」

シャル「それは……………そうかもしれないけど」

雷真「そういう訳だから。それにお前たちがパートナーでない俺なら勝てるかもしれないぞ?」

皆を煽る感じでそう言ってやると一同は急に俯きだし、次第に肩をワナワナと震わせ始めた。

刀奈「フッフッフ、いいわ」

簪「その挑発、乗ってあげる」

シャル「覚悟しなよ、雷真?」

箒「フリーダムだろうが何だろうが斬り刻んでやろう!」

セシリア「必ず、貴方の顔を私の力で歪ませてあげますわ!」

鈴「徹底的にボコボコにしてやろうじゃないの!」

ラウラ「貴様は、選択肢を誤った」

一夏「絶対に勝つ!」

雷真「俺に”奥の手”をさせるのを楽しみにしてるさ」

一同「「「やっつてやろうじゃないか!!」「」」」

## 第53話

今朝の早朝特訓で一夏と簪をタツグマツチで組ませることを一年専用機持ちに伝え。その後、俺が刀奈たちとは誰とも組まないと宣言し、皆を煽った、その日の昼休み。  
現在、二年の教室に向かっている。

雷真「えつとー、2年2組は……ここか」

今さらだが、二年の教室がある階に来ると二年の先輩たち、実質、一つ二つ年が下の女子たちが騒ぎ出す。

女子「ねえ、あれって副会長だよね？」

女子「そうそう。でも、なんで二年生の階に？」

女子「多分、生徒会関連で布仏さんに話があるんじゃない？」

女子「ああ、それで……」

二年二組の前に着くまでにすれ違った女子たちから俺が二年生の階にやってきた目的を話し合っている会話が耳に入った。  
そして………。

雷真「失礼します。布仏先輩、いますか？」

女子「え？」

女子「うそ？」

女子「黒牙くん!？」

やはりというべきか二年二組のクラスに入ると俺を見た先輩たちが騒ぎ出した。

それにより此方に気づいたのか先程まで友人と会話していた姉さんが俺の所へやってきた。

虚「どうしたんですか、雷真くん？」

雷真「ちよつと頼みたいことがあつて……………」

虚「頼みたいこと？」

雷真「少し話が長くなるから昼飯を食べながらでいいかな？」

虚「分かりました。友人に一言かけてきます」

雷真「ありがとう、姉さん」

その時、無意識に『姉さん』という言葉が出てしまい。姉さんのクラスが再び騒ぎだす。

虚「ちよつ……………!？」

女子たち「!?!?!ね、ねねね姉さん!?!?!」

雷真「あつ……………やべ」

女子「ちよつと、虚!今のどういうことよ!？」

女子「なんで貴方、黒牙くんから『姉さん』って呼ばれてるの!？」

女子「まさか、二人は本当は兄弟？」

女子「いやいや、でも髪の毛の色が違うし」

女子「もしや、異母兄弟？」

女子たち「!?!?!それか!?!?!」

俺が姉さんを『姉さん』と呼んだこと伝言ゲームの様に連鎖していくと次第に内容が変な方向へとクラスの中で変化していったので、これ以上、このクラスだけじゃなく変に学園内で流れるのは流石にヤバイので訂正する。

雷真「ちよつと、皆さん落ち着いてください。姉さんを『姉さん』呼びしたことについて、今ここで説明しますから」

女子「!?!?!……………!?!?!」シーン

雷真「あー、それでは、布仏先輩を『姉さん』呼びしたのは、俺と布仏先輩が幼馴染だからです」



女子「幼馴染？」

雷真「そう、幼馴染。だから、布仏先輩とは異母兄弟でも異父兄弟でもありません。それに、俺には兄弟は居ません」

女子「なんだ……………そうだったの」

女子「誰よ、異母兄弟なんて言って奴は……………」↑犯人

女子「二「お前だよっ!」」

女子「あれー?」↑犯人

虚「と、取り敢えず。私は雷真くんと話があるから行きますね?」

友人「はいはい」

友人「なんか良い情報があったらよろしく」

虚「あったら、その時は教えます」

友人「約束だからね」

何とか状況を打破出来た様なので一安心。

虚「もう、雷真くんの所為で騒ぎになったじゃないですか!」

雷真「わ、悪かったよ。無意識に口から出てたんだよ……………」

虚「前に同じことを注意したはずですが?」キツ

雷真「す、すみません」

虚「分かればよろしい」

色々と騒動があったが無事に姉さんと昼食を取りながら話ができる食堂へと来ることができた。

自販機で食券を買い。二人で座れる席に座る。メニューは俺が”日替わりの特製ラーメン”。姉さんが”幕の内定食”だ。

「いただきます」

雷真「……………」ズルズル

虚「……………」パクパク

お互いに話をする前に自分の昼飯を半分まで食べる。これは、これ

から話す内容が長いため、初っぱなから話してしまうと午後の授業を空腹の状態で受ける事になるかもしれないからだ。

虚「それで話って何かしら？」

雷真「まずは、今朝の特訓でタッグマッチトーナメントのことを話したことから話そうか」

虚「分かりました」

雷真「まず、今朝の特訓で一年生の専用機持ちに一夏は簪と組ませると話した。まあ、色々と反発を受けたが何とか納得してくれた」

虚「なるほど」ズズズズ

雷真「次に、俺が誰とタッグマッチトーナメントに出るのかという話になって。みんなには、刀奈たちは誰とも組まないと宣言した」

虚「ブフーツ!!」

雷真「ね、姉さん!」

虚「ケホッ、コホッ!」

雷真「だ、大丈夫か？」

虚「誰の所為だと思っっているんですか!」

雷真「ですよね……………」

姉さんは俺の『刀奈たちとは誰とも組まない』という言葉に飲んでいたお茶を吹き出し噎せてしまった。

虚「続きを」

雷真「分かった。そんな訳で姉さんには、タッグマッチトーナメントのパートナーを頼みたいんだ」

虚「ふむ……。それだけですか？」

雷真「それだけじゃないけど、ここでは話せない。土曜日の午後にとある場所まで一緒に来てくれれば、そこで話すよ」

虚「前者は保留として。今のは、”若様”としてですか？」

雷真「そこは、姉さんに任せるよ」

虚「分かりました。では、土曜日の午後は空けておきます」

雷真「ありがとう、姉さん」



姉さんに土曜日を空けてもらうことを了承されたあと、本日の授業は通常通り終了。そして、生徒会の仕事も簡単な物だけだったので30分で終わった。また、各部活動への貸し出しは今日は無いため放課後の特訓ができる。

そして、現在、一夏&簪vs俺で模擬戦をしている。

因みに、織斑先生、及び師匠により、ハイマツト・フルバーストは緊急時以外は迎撃のみ使用が許されている。

一夏「ウオオオオツ!!」

雷真「ハアアアツ!!」

雄叫びと合わせて、一夏が握る雪片式型のレーザー刃と俺が左手に持つラケルタビームサーベルのビーム刃がぶつかり、干渉し、バチバチとプラズマが飛び散る。

簪「一夏、下がって!」

一夏「おう!」

雷真「簪のミサイルかつ!」

簪の声で一夏は後退すると一夏を避けるかの様に背後から打鉄式式によって放たれた複数のミサイル『山嵐』が襲いかかってくる。

雷真「それなら、これでっ！」

ミサイルをフリーダムフレイズソフトの頭部に搭載されている実弾兵器のピクウスでミサイルを迎撃する。すると、ミサイルがピクウスにより爆発し、爆煙が起る。

しかし、爆煙の中からマシンガンでも撃っているのではという数の実弾が爆煙の中から飛び出し、尚も襲いかかってきた。

雷真「簪の奴、ミサイルの中身を榴散弾頭に変えてたのか!？」

雷真「チツ……………」

普通ならフリーダムにはP S 装甲があるので実弾なんか関係ないのだが、今はタツグマツチトーナメントに向けての模擬戦。

なので、ラミネートアンチビームシールドを構えながらフリーダムのスラストを噴かし回避する。

雷真「初めてにしては中々やるじゃないか」

一夏「昼休みに目一杯、フリーダムの今までの戦闘データや動きを簪と観察して話し合ったからな」

雷真「なるほどな。ならこういうのはどうだ？」

スラストを全開で噴かし、一夏との距離を無理矢理詰めながら、後ろ腰からルプスビームライフルを取り、連射する。

一夏「やばっ!!」

簪「一夏!」

雷真「ほらほら、どうした!」

ルプスビームライフルのビームを一夏が回避すると簪が一夏を守るように瞬間加速で踊り出て、前に渡したリュミエール・ガントレットでビームシールドを発生させ、ビームから一夏を守った。

一夏「サンキュー、簪」

簪「白式は燃費が悪いから防御は私に任せて」

一夏「頼む！」

雷真「……………」イラチ#

簪の一夏を守るような動きを見て少しイラツと来てしまった。分かってる。これは、模擬戦なのだから仕方がない。それに、このようなことを招いたのは自分だということは十二分に分かっている。

しかし、しかしだ！やはり、嫉妬してしまうのは惚れた弱みという奴だろうか？

雷真「ごめん、一夏。少し、憂さ晴らしするわ」

一夏「へ？」

一夏に”憂さ晴らしをする”と宣言してから現在、手に持っている武装を全て所定の位置にマウントし直し。バズスロット拡張領域からシユベルトゲーベルを取り出し、深く深呼吸してフリーダムリボルバー・イグニッション・ブーストのウイングスラスターをハイマツトモードに移行させて個別連続瞬時加速をする。

雷真「すうー、はあー」

雷真「ハアアアツ!!」

一夏「げっ、あれて!!」

簪「一夏、知ってるの？」

一夏「知ってるものにも……………来るぞ!!」

簪「!!」

リボルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速をすると簪は再び、リユミエール・ガントレットで防御態勢に入るが簪をグルリと渦巻きを描くように避けながら一夏に迫る。

簪「うそっ!？」

一夏「やっぱりかよ、此蓄生があああつ!？」

雷真「……………」ニヒリ

一夏「ぐっ……………」

雷真「セアツ!!」

一夏「ぐああああ!!」

リボルバー・イゲニッション・ブー스트  
個別連続瞬時加速による加速力を乗せた、シユベルトゲーベルの一撃を一夏は何とか雪片式型で受け止めはするが、勢いは殺し切れずにアリーナの壁に激突する。

一夏「かはっ!!」

簪「一夏!？」

雷真「人のことを心配している余裕があるのか?」

簪「!!」

今度は簪を狙うためにアリーナの壁に激突して身動きが取れない一夏を踏み台に飛翔し、簪へと突撃する。

簪「私だって、負けない!」

雷真「いくぞ!」

簪は拡張領域からビームハルバードを取り出すと両手でクルクルと回し柄を伸ばし、ビームハルバードのビーム刃を発生させ、シユベルトゲーベルに対抗する。

簪「ヤアアアツ!!」

雷真「ハアアアツ!!」

互いのビーム刃がっばぜり合いになると先程の雪片式型とレーザー刃とは桁違いのプラズマが生じる。

一夏「背後がから空きだぜ、雷真!!」

雷真「あまいな」

一夏が背後から零落白夜を発動させながら瞬<sup>イグニッション・ブースト</sup>時加速で向かってくるので簪とつばぜり合いになりながらフリーダムの背部武装のバラエーナプラズマ収束ビーム砲2門を背後に向ける。

一夏「そんなのありかよ!」

雷真「ありなんだよ!」

背後から突撃しながら叫ぶ一夏にバラエーナプラズマ収束ビーム砲を一夏に向けて放つ。すると、バラエーナプラズマ収束ビーム砲から赤白いビームが放たれる。

一夏「雪羅シールドモード!!」

バラエーナプラズマ収束ビーム砲から放たれた赤白ビームを一夏は左腕部の多機能武装雪羅の零落白夜のバリアシールドでビームを無効化する。

それにより、白式のSEがアリーナの激突と合わせて半分も減少してしまう。

一夏「ぐううつ……!!」

簪「一夏!」

雷真「だから、人のことを心配する余裕があるのかよ」

今も尚、つばぜり合いになっている簪にゼロ距離で両腰のクスイファイアスレール砲2門を構えて放つ。SEを削る。

簪「しまっ………!」

簪「きゃあああつ!!」

一夏「喰らえ!」

雷真「今度は荷電粒子砲か……………」

簪をクスイファイアスレール砲で吹き飛ばすと離れた所から一夏が雪羅の荷電粒子を連発してくる。

なので、リーチと取り回しが難しいシユベルトゲーベルより、扱い易いビームサーベルに武装を変更し、荷電粒子を切り裂く。

一夏「荷電粒子砲も切るのかよ!?!」

雷真「ビーム刃同士でつばぜり合いになるんだ。ビームより威力が低い荷電粒子砲やレーザーくらい切れるだろうが」

簪「やっぱり、雷真は強い……………」

一夏「分かっているけど、2対1なのに全く攻撃がヒットしないなんて……………」

雷真「ほら、どうした?」

一夏「やっぱり、雷真の奴、余裕だな?」

簪「うん。まだ”奥の手”を出してないし、ハイマツト・フルバーストも使っていない」

一夏「あー、あの全ての射撃武装を使う奴ね」

簪「あれをやられたら勝ち目は皆無」

一夏「そうだな。それに、雷真の奴。ストライクの剣を使った攻撃以外、全て後手に回ってから攻撃している」

簪「どうやったら……………」

一夏「雷真に一撃入れられるか……………」

雷真「……………」

今の二人はどうやって、雷真という強敵に一撃を入れるか模索している。しかし、そんな時間を彼がくれるはずもない。

雷真「来ないなら、こっちからいくぞ!」





2対1にも関わらず、模擬戦に敗北した二人と共に先程までの模擬戦の反省会を行う。

雷真「では、反省会を行なう」

「はい」

雷真「まず、一夏。事前に相手のデータを見ているのにも関わらず、射撃武装の可動域を見誤ったのがマイナス。次に、前に見せた同じ技なのに対処が出来てないところがマイナス」

一夏「うぐっ……！」

雷真「次に簪。ビームハルバードの扱いが実剣の薙刀に凝りすぎているところがマイナス。左右どちらにでもビーム刃を出せるんだ。つばぜり合いになったビーム刃をしまつて、逆の方でビーム刃を出す戦法を覚えろ。次にシユベルトゲーベルとビームハルバードがつばぜり合いになった時、何故、リュミエール・ガントレットでシユベルトゲーベルを受け止めなかった？」

雷真「あそこはシユベルトゲーベルを片手のリュミエール・ガントレットで受け止め、ビームハルバードを使えば、一撃は入れられたはずだ」

簪「あっ…………！」

雷真「そして、お互いの反省点はお互いに射撃武装を持っているのにも関わらずに近接に持ち込み過ぎだ。射撃が上手い相手を打破するには近接戦闘が確かに有効かもしれない」

雷真「けれど、2対1なら敵を中心に挟み込み射撃武装で攻撃すればいいだろう？ 複数の射撃から回避するのは慣れていないと難しい

からな」

簪「言われてみれば……」

一夏「全くやってなかった」

雷真「今後は気を付けろよ。これにて反省会終わり」

## 第54話

千冬「それでは、本日の授業はここまで。織斑、あいさつ」  
一夏「起立、礼！」

「「ありがとうございました！」」

授業終わりの挨拶を行ったあと、担任の織斑先生と副担任の山田先生は早々に一組の教室から出ていく。

それを見たクラスの女子たちは各自、机に突っ伏したり、友人と午後から出掛ける話など始める。

そして、いつもの専用機持ちはというと……………。

刀奈「それじゃあ、皆。今日もやるわよー！」

「「おお!!」」

どうやら、皆を煽った日から一年生専用機持ちは俺への対抗心を燃やしており。昼休みや放課後など、暇があれば俺の戦闘データを何度も見直しているようだ。

本音「ねえ、ライライ。かつちゃんたち、やけに張り切ってるけど何かあったの〜?」

雷真「それはな、先日、刀奈たちに俺がお前たちとは組まないと言ったんだ。加えて『お前たちとパートナーではない俺なら、一撃くらいは入れられるんじゃないか?』と煽ったんだ」

本音「そ、それは……………」

雷真「まっ、結果としては良い方向に向かっているとは現状、思うがな」

本音「ライライもほどほどにね〜」

雷真「分かってるよ」

本音との会話を終えたあと、姉さんと出かけるために携帯でシノブにメールを送ったあとに寮の自室に戻り。私服に着替えて、校門前で姉さんを待つ。



雷真「……………」

虚「お待たせしました」

雷真「いや、そんなに待ってないよ」

虚「それはよかった。それで、これから何処へ？」

雷真「目的地までは車でいくよ」

虚「バイク……………ではなく？」

雷真「迎えを呼んだんだ」

虚「迎え？」

姉さんが俺の言葉に疑問符を浮かべると一台の青いセダンがやって来た。

雷真「来たようだ」

虚「……………」

青いセダンが止まると運転席の窓が開き、運転席からシノブが顔を出す。

シノブ「若様、お迎えにありがとうございました」

雷真「悪いな、シノブ」

シノブ「いえ。ちょうど昼休憩だったので」

虚「……………シノブさん」

シノブ「久しぶりだね、虚ちゃん」

虚「そうですね」

挨拶を済ましてから、シノブの車に乗る。席は俺が助手席で姉さんが後部座席に座る。

シノブ「若様、こちらが昨日までのM1アストレイの戦闘蓄積データと量産状況の資料データです」

虚「M1アストレイ？」

雷真「分かった」

シノブから渡された小型のノートパソコンを開き、資料データを見ていく。

ふむ……………。量産状況の方は105ダガーのパーツを転用しているためか学園祭後に来た時よりも量産が倍近く進んでいるようだ。

戦闘データは…………あまり芳しくないようだ。さすがに2ヶ月しか経過していないなら仕方ない。

雷真「“天使”と“翼”は？」

シノブ「“天使”は先月末に新しいドッグに移送後、外部装甲を調整中です。“翼”は既に9割が完成。あとは、シミュレーションデータを元に実際に試してみないことには……………」

雷真「そうか」

シノブ「他にはブースターが予備を合わせて4機完成しています。若様のフリーダムにも対応できる様に調整もしてあります。最後に、勝手ながら私とアキトでハロの中にあつたデータを元に、M1アストレイの後継機と思われる機体を三機製造しました」

雷真「M1アストレイの後継機だと？」

シノブ「はい。そのデータも資料データと共に」

雷真「分かった。確認する」

再度、資料データを確認すると一番最後に【M2 アストレア】と書かれた資料データを見つけた。

雷真「これは……………!!」

C・E・76年に立案されたアストレイの後継機こと【MBF—M2 アストレア】。基本武装ストライクと同じ、機体の装甲はラミネート装甲か。ストライカーパックも使用可能。外見がアカツキに似ているのは気のせいかな？

それに基本スペックはザクと同等。データがあるとはいえ、よくも二人だけでセカンドステージの機体を三機も完成させることができたな……………。

てか、よくよく考えれば、この機体……………隊長機じゃねえか!?

雷真「シノブ、この機体はお前とアキトで二機使え。最後の機体は姉さんに」

虚「私ですか!?!」

雷真「ああ。元々、姉さんにはM1アストレイに乗ってもらってもりで今日は付き合ってもらったからな」

学園を出てから約2時間が経過すると、今回は『モーニング・グロー社』ではなく。とある港のドッグにそのまま車で入る。そして、ある程度奥に進むと車を止める。すると、床がエレベーターの様に下へ、ゆっくりと降下していく。

ゆっくりと降下していくと次第にロボットアニメの様な秘密基地が見えてくる。その中で、一番目立つのが真ん中に存在する、メタリックグレーのデカイ艦である。

虚「これは……………戦艦?」

雷真「姉さん。ここからは更識の『若』として命じる。ここで見た

物は、全て外部に公開漏洩はするな」

虚「……………御意」

雷真「ありがとう」

床のエレベーターが完全に降りると再び、車を走らせ駐車場に車を止め、俺たちは「M2アストレア」のある格納庫に向かう。

雷真「これが、M2アストレア……………」

アキト「あつ、兄さん、おかえり。雷真さん、虚ちゃん、こんにちは」

雷真「よう、アキト」

虚「こんにちは、アキトさん」

シノブ「アキト、M2アストレアの状況は？」

アキト「今さつき、三番機のメインシステムが調整し終わったところだよ」

シノブ「そうか、分かった」

雷真「シノブ、こいつの実戦データは？」

シノブ「皆無です」

雷真「なら、ちょうど良い」

虚「まさか、若様。この機体を使って、私とタッグマッチトーナメントに？」

雷真「ああ、そうだ。けれど、それだけじゃない。次のタッグマッチトーナメント、何か起こる気がする」

虚「若様？」

雷真「俺にもわからない。だが、これまでの出来事を考えると起こるかもしれない。そこで、もしもの時は姉さんには生徒を守ってほしい」

虚「ですが、私がこの、M2アストレアを専用機として所持すると色々almazうことに……………」

雷真「そこは俺に任せてくれ。色々と伝手を利用するさ。だから、頼む」

虚「わかりました」

シノブ「それでは、虚ちゃん。3番機に乗って。微調整を行うから」  
虚「はい」

姉さんがM2アストレアに乗るのとタッグマッチトーナメントに  
共に出てくれることに了承を得た俺は、早速、M2アストレアの試験  
運用のためにハルバートンさんに連絡することにした。

雷真「どうも、黒牙です。お忙しい中、すみません。少しお願いし  
たいことがあります」

雷真「はい。そのことに関係することです。自分の知人にMモバイルスーツSの  
専用機を持たせたいのですが……」

雷真「無論、セーフティは付けてあります。また、各国のI S委  
員会には、ミスターKが作成した第4世代型とでもでっち上げた資料  
を作りますよ」

雷真「色々と無理を言って申し訳ありません。他には、戦艦などを  
………いっ!？」

ハルバートンさんに他には何を作ったと言われたので「戦艦」と  
答えると電話越しに凄い剣幕で怒鳴られてしまった。

雷真「はい、わかりました。後程、ナタルさんの方へ詳細データを  
お送りします。はい、申し訳ありませんでした」

雷真「では………」

雷真「准将のマジギレこわっ!？」

虚「若様、大丈夫ですか？」

雷真「まあ、なんとか……。さすがに元上司に怒られましたかね」  
アキト「元上司?」

雷真「あー、アキトとシノブは………というより。師匠や刀奈、  
簪、シャルロット、本音、姉さん以外の更識に関わっている奴らは、俺  
の空白の二年間の真実を知らないのか」



雷真「元上司のことを簡単に説明すると、俺は軍人だったって訳よアキト「軍人って……………」」

雷真「詳しいことは一応、守秘義務があるからお前たちには教えられない。すまないな」

シノブ「いえ。若様がそう仰るのであれば仕方ありません」

雷真「ありがとう、シノブ」

ハルバートン准将に『天使』とM2アストレアのことを話し、姉さんを、IS学園代表として専用機持ちに認定してもらい。なんとか、M2アストレアの試験運用をこじつけた。

雷真「あとは師匠の方にも連絡しないと……………」

雷真「あつ、どうも師匠。雷真です」

雷真「今回は、来月のタッグマッチトーナメントに関わることでお願いがありました……………はい」

雷真「俺の部隊で開発した量産型M<sup>モビルスーツ</sup> S ISの試験運用をしたいと思いついて……………日本のIS委員会にはコネで何か……………。他の各国のIS委員会にはミスターKの名前を出せばなんとかかります」

雷真「すみません。此方としても、学園を守る手段として今回はお願ひしたいのです。学園にいる専用機持ちでM<sup>モビルスーツ</sup> Sに対抗できるのは、自分と刀奈、簪、シャルロット、一夏、箒、セシリアの七名だけですから」

雷真「仮に、他の専用機にビーム兵器を渡すと面倒なことになりますから。既に日本とフランスで面倒なことが起きてますから」

雷真「はい。そういうことなので……………では」

師匠に日本のIS委員会から学園代表の専用機持ちを出すことがあるかもと説明し、お願いの理由も説明して何とかして対応はしてくれるとの了承を得ることができた。

雷真「シノブ、M1アストレイの演習は隣の格納庫か？」

シノブ「そうです。今の時間だと、M1アストレイの仮想訓練が行われているはずですよ」

雷真「なら、部下たちを相手してやるかな」

シノブ「程々にお願ひしますよ。いきなり、若様が参戦されると皆が驚きます」

雷真「ほどほどにな」

シノブの声を受けて手を上げながら自動ドアを潜り抜け、小説に書いてあった物を元に趣味感覚で作った仮装演習場でM1アストレイに搭乗する部下たちをしごいてからシノブが運転する車で学園へと帰った。



——早く、ボクを見つけて——

——名前を呼んで——

——でないとアイツが……——

雷真「ん？今のは……？」

雷真「フリーダム、なのか……？」

自室のベッドの上で寝ていると突如、脳内に誰かの声が響き起きてしまった。

その声の主を探すが部屋には俺以外、誰もいない。

刀奈の奴は姉さんと同じ部屋だし、簪は本音と同じ部屋。シャルロットはラウラと同じ部屋。

雷真「一か八かやってみるか」

前に「コスミック・イラあちら側」でやったように待機状態のフリーダムに意識を集中して目をとじる。

けれど、やはり何も起きない。

雷真「……………」

フリーダムに何の反応もないため、先ほどの声は幻聴ではないかとも思ったが念のため頭の片隅に残して置くことにした。

雷真「寝よつ。姉さんの話によれば、明日のインタビュートのパートナーは刀奈みたいだし」

## 第55話

姉さんの専用機を調整した翌日。前から頼まれていた、俺、一夏、箒の独占インタビューの日だ。

また、一夏と箒がセットなので、俺のパートナーとして刀奈が同行。勝手に日本代表である刀奈がインタビューやモデル等をしたら面倒なことになるのだが、そこは俺と一夏、箒がいるからお咎めなしのこと。

雷真「それじゃあ、全員集まったことだし行くか」

刀奈「そうね。二人は大丈夫？」

一夏「ああ」

箒「問題ない」

一夏と箒の二人からも了承が得られたので学園の正門からモノレールの改札へと足を運ぶ。その際、もはや無意識に刀奈が抱きついてくるように手を繋ぐ。

一夏「……………」

箒「……………」

雷真「どうした？」

刀奈「二人とも？」

一夏「いや、なんでもないんだ」

箒「そうだ、何にもないんだ……………」

二人が何故か知らんがアタフタとし始めたので自分たちの周りをよく確認する。

雷真「なるほど……………刀奈」

刀奈「なに？」

刀奈に一度声をかけてから腕をほどき、手を前に差し出す。

雷真「少し肌寒から、手を繋がないか？」

刀奈「ああ………ありがとう、雷真」

今度は指を絡めて恋人繋ぎで刀奈が腕に抱きついてくる。その後は、箒のために一夏に声をかける。

雷真「一夏、お前も男なら女の子を泣かすなよ？」

刀奈「箒ちゃん、頑張っ！」

一夏「え、えーつと、箒」

箒「にや、にやんだ!？」

一夏「俺たちも手を繋がないか？」

箒「お、お前がそう言うのであれば………」

俺たちのやり取りを見て、二人はぎこちないながらも手を繋ぐことができた。これで箒も報われてくれると嬉しいのだが。

雷真「それじゃあ、改めて行くとするか」



渚子「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプ』の副編集長をやっている黛渚子よ。今日はよろしく」

雷真「始めまして、黒牙雷真です」

刀奈「ご存じだとは思いますが、日本代表の更識刀奈です」

一夏「あ、どうも。織斑一夏です」

箒「篠ノ之箒です」

受付の人に今日の話を話して案内されたのは、取材を行うための部屋で、なかはわりと広かった。

また、イメージでは、個室で行われるのかと思ったら、普通にオーブンスペースだ。

渚子「それじゃあ、さっそくだけでも。インタビューから始めましょうか。そのあとで写真撮影ね」

そう言って渚子さんはペン型のICレコーダーを懐から取り出し、スイッチをONにする。

渚子「それじゃあ、最初の質問いかしら？ 男子二人は、女子校に入学した感想は？」

一夏「いきなりそれですか……………」

雷真「来るとは思っていたが……………」

渚子「だつてえ、気になるじゃない。読者アンケートで君たちへの特集リクエスト、すつごく多いのよ？」

勝手にそんな面倒で迷惑なアンケートをするんじゃない。

一夏「えーと……………使えるトイレが少なくて困ります」

渚子「ぶっ！あはははは！ 黒牙くんは？」

雷真「一夏の答えと合わせて、風呂場があまり使えなくて困ります」

一夏「それは確かに！」

渚子「あははは！ 妹の言つてこと、本当なのね！ 『異性に興味がないハーレム・キング』と『現ハーレム・キング』って！」

一夏「ハーレム・キングって……………」

雷真「俺は現に、ハーレムを作ってしまった身だから何とも言えない……………」

渚子「いいわね。そのキングダムへの入国許可証はないの？」

一夏「貴女は弾ですか！」

雷真「入国証が欲しければ、織斑千冬教諭に挑んで勝てれば手に入りますよ」

渚子「それは難易度が高過ぎないかしら!？」

渚子「さて、それじゃあ、篠ノ之さんにはお姉さんの話を——」

渚子さんが箒に篠ノ之束のことを聞こうとすると箒はガタツと音を立てながら立ち上がる。

渚子「……………ダイナー券、いらないのかしら?」

箒「うっ!」

ダイナーチケットを餌にされた箒は犬のように渚子さんの指示に従った。

渚子「いい子ね。うふふ、素直な子って大好きよ。それで、お姉さんから専用機をもらった感想は?どこかの国家代表候補生になる気はないの?日本は嫌い?」

いきなり3つの質問を箒へ、捲し立てるように言い放った。

箒「紅椿は、感謝しています。……………今のところ、代表候補生に興味はありません。勧誘は多いですが。日本は、まあ、生まれ育った国ですから、嫌いではないです」

渚子「オーケー、オーケー。じゃあ、次にこの四人の中で一番強いのは?」

「「雷真です」」

渚子さんの質問に三人が同時に即答した。

渚子「そ、そう………黒牙くんは、そんなに強いんだ」

刀奈「国家代表である私ですら、まともに一撃を入れられませんから」

箒「それに加えて、一年専用機持ちで4対1で挑んでも雷真に一撃も当てられずに負けますから」

一夏「本当、雷真つて千冬姉か束さん並に戦闘技術とプログラミングとか色々と規格外だよな」

雷真「一夏、人を化け物みたいにいうんじゃねえ。明日の朝練、覚えて置けよ」

一夏「ひいひいひい!?!」

渚子「黒牙くんが一番強いなら、次は織斑くん?」

箒「いいえ。雷真の次は刀奈です。その次は他の一年専用機持ちです。一夏は下から四番目くらいです」

一夏より下の専用機持ちは、箒、セシリア、鈴の三人である。

渚子「そうなの? それはマズイわねー。女の子くらい守れない

と、ヒーローになれないわよ?」

一夏「別にヒーローじゃなくていいですよ………。俺は単なる一兵卒で」

渚子「黒牙くんは?」

雷真「ヒーロー云々はともかく、この両の手で守れるだけの大切な人は必ず守りたいですね」

渚子「おつ、いいわね、そのセリフ。映画でも撮りましょうよ」キラッ



たった今、この人から黛先輩のお姉さんだと分かる瞬間を垣間見た。

渚子「それじゃあ、まずは織斑隊長、戦場での心得をどうぞ」

一夏「えっ!? え、えーと……………」

一夏は一度、チラリと此方を見てから視線を箒の方へと向けた。

一夏「仲間は俺が守る!」

渚子「うん、いいわね! 次は、黒牙隊長、どうぞ」

雷真「そうですね……………。では一言だけ」

渚子「どうぞ」

雷真「その手に銃を持つ者たちに問おう…………。『力はただ力、多く望むのも愚かなれど、むやみに厭うのも愚か。守るための力が…、今必要ならば銃を取れ、心のまま、お前たちが定めた守る者たちのために…………。』」

渚子「深いわね」

かつて、ウズミ様がカガリにアカツキと共に残した遺言を渚子先輩に話した。

渚子「そういえば、刀奈ちゃん。生徒会長なんだって?」

刀奈「はい、そうです」

渚子「薫子が男子二人が新聞部に来ないって愚痴ってたわよ」

刀奈「それは来るのを待ってもらおうほかありませんね。公平を期した、くじ引きで選出してから二人を貸し出しますから」

渚子「ああ、それなら仕方がないわね。薫子は、昔からくじ運がないから。福引きを二十回やって全部ティッシュだった時は半泣きになってたわね」

一夏「いやいや……………」

雷真「二十回、全部、ティッシュユって……………」

そんなこんなで雑談混じりのインタビューは終了。次は写真撮影だ。

渚子「それじゃあ、地下のスタジオに行きましょう。更衣室があるから、そこで着替えてね。そのあとメイクをして、それから撮影よ」  
一夏「え？ 着替えるんですか？」

渚子「うん。スポンサーの服を着せないと私の首が飛ぶもの」

そういうながら、首チョンパのジェスチャーをする。

渚子「それじゃあ、行きましょう」



刀奈たちと別れて男性用の更衣室に入ると巨漢の男性が更衣室で待っていた。

???「あら、貴方たちが織斑くんを黒牙くんね？」

一夏「ど、どうも、織斑一夏です」

雷真「黒牙雷真です」

???「私は、アルフォーサー・リユーバト。アルと呼んでちょうだい」  
一夏「は、はあ……………」

雷真「……………。(絶対に〇イだっ！この人!?)」

アル「とりあえずは、このスーツに着替えてちょうだい」

一夏「わ、わかりました」

雷真「りよ、了解」

アルさんから渡されたカジュアルスーツに私服から着替えようとする、何故か知らないが尻の辺りを凝視されているような感覚に襲われ無意識に尻に力が入ってしまう。この視線がアルさんでないとを祈りたい。

着替えが終わるとアルさんとそのサポーターさんが俺たちに軽くメイクをしてもらう。

アル「すみませ〜ん、遅れました〜。織斑一夏くんと黒牙雷真くん、入りま〜す」

一夏「うーん、なんかこれ変じゃないか？」

雷真「初めて着るうちはそんな風を感じるが、そのうち慣れる。心配するな」

一夏「そういう、雷真は普通に着こなしているような？」

雷真「まあ、色々と俺も立場上、スーツとは違うが正装を着る場面があつたからな」

一夏「なるほどな」

一夏と二人でスーツの話をしていると俺たちを待ち兼ねていた渚子さんが此方にやってくる。

渚子「あら、似合ってるわね。十代の子のスーツっていうのもいいわねえ」

渚子がそう興奮した声をあげると撮影ブースで待っている、刀奈と箒が此方を向く。

箒「あ、一夏……………」

一夏「箒……………」

刀奈「雷真、スーツ姿、なかなか似合ってるじゃない」

雷真「そういう刀奈だって、水色のワンピース似合ってるじゃないか」

刀奈「ありがとう」

お互いに衣装を褒め終わり、会話がない一夏と箒の方へと視線を向けると二人とも顔を赤く染めて固まっていた。

雷真「おい、一夏。男なら、今の女性に一言ないのかよ?」

一夏「お、おう」

一夏「箒、その……………よく似合ってる。可愛いぞ」

箒「か、かわっ——!?!?!?!」

一夏が素直に箒のワンピース姿を褒めると撮影の準備が出来たのか渚子さんから声がかかる。

渚子「はーい、それじゃあ撮影を始めるわよー。時間も押ししてるから、サクサクいっちゃいましょう!」

そこからは渚子さんの指示の下、色々なポーズを俺は刀奈と、一夏は箒と、撮影することになった。

ポーズの内容は互いに見つめ合って、刀奈と箒が俺と一夏の首に手を回すポーズだったり、ソファアに座って俺と一夏が刀奈と箒の肩を抱いて、引き寄せるポーズだったり、等々。

渚子「んー、なんか物足りないわね」

一夏「そんなことを言われても……………」

雷真「仕方がない。刀奈、手伝ってくれ」

刀奈「いいわよ」

雷真「渚子さん、霧吹きはありますか？」

渚子「あるけど、何に使うの？」

雷真「まあ、渚子さんにとっては利益になることなので安心してください」

渚子「わかったわ。黒牙くん、君に任せる」

雷真「ありがとうございます」

スタッフの方から霧吹きを借りて、俺と刀奈の前髪を霧吹きで少し湿らせて、雨に濡れた髪を演出する。

そして、髪の設定が完了すると刀奈を壁際に追いやるように動いてもらい、右手で刀奈の左手首を伸ばすように掴み、左手は刀奈の顔の少し横に置く。

所謂、壁ドンです。

最後は、自分の顔を刀奈の顔に近付けて、あと少しでキスが出来てしまいそうな距離にまで近付ける。これで完了。

よく、ドラマとかである、雨に降られて壁ドンするカップルの完成だ。

渚子「いいわー！いいわよー、二人ともっ!!」

刀奈「流石に、これは恥ずかしいわね」

雷真「なら、これでどうだ？」

—————  
チュッ

刀奈「えっ………?」

雷真「少しは恥ずかしくなかったらどう？」

刀奈が「恥ずかしい」というので一時的だが、恥ずかしいという感覚を消すために刀奈の額に優しくキスを落とす。すると、少し間を置いてから俯いてプルプルと震えだす。

刀奈「……………」プルプル

刀奈「……………」バカ。／／／／／／／／

雷真「刀奈の可愛い顔が見たくなっついな」

刀奈「こんなのどこで覚えたのよ？」

雷真「お義母さんの日記」

刀奈「つてことは……………」

雷真「お義父様も同じことをお義母さんにやっつたつてことだな」

刀奈「はあー、今度は別の意味で恥ずかしくなつたわ」

雷真「アハハハハ」

刀奈「笑いことじゃないわよ」

いつの間にか二人の世界に入り込んでいると渚子さんから声がかかる。

渚子「薫子から聞いてたけど、二人はやっぱり、そういう間柄なんだ」

雷真「ええ。とある事情で刀奈を含めて、三人の婚約者がいます」

渚子「そ、そう……………。でも、美味しいシーンをありがとう」(´▽`)

、(´▽`)

雷真「どういたしました」

こうして無事に撮影は終了した。

## 第56話

撮影が終わり、更衣室で着替えていると隣に居る一夏が先ほどから着替えがまったく進んでいないので声をかける。

一夏「……………」

雷真「一夏？ おい、一夏！」

一夏「な、なんだ？」

雷真「早く着替えろよ。刀奈と箒を待たせる訳には行かないだろう」

一夏「そ、そうだな」

我に返った一夏は、慌ててスーツから私服へと着替える。着替えが済み、更衣室を出るとちょうど隣の女性用更衣室から私服姿の刀奈と箒が出て来ていた。

雷真「ちようどだったか」

刀奈「そうみたいね」

一夏「……………」チラチラ

箒「……………」チラチラ

雷真「二人とも意識し合ってるな」

刀奈「それは、雷真があんなことをするからでしょう!? 私だって、恥ずかしかったんだから……………」

雷真「悪かったよ。今度、埋め合わせするから」

刀奈「必ずよ?」

雷真「わかってる」

刀奈と少し話をして、視線を一夏たちに向けるが、今だに意識し合って固まっている二人。

雷真「あー、二人とも、夕飯はどうする？ 寮の食堂も帰る途中で閉まるし」

一夏「そ、そうだなー、なら今日は外食して帰ろうぜ？」

刀奈「たまには、いいかもね」

箒「……………」モジモジ

一夏「箒もそう思うだろう？ 箒？」

箒「えっと、そのだな……………行きたい店があるのだが……………」

一夏「箒の行きたい店か……………。俺は構わないけど、二人は？」

雷真「どうする、刀奈？」

刀奈「そうね…………。お邪魔でなければ私たちも同席していいかしら？ ダメなら別のお店に行くけれど？」

箒「いや、出来れば二人にも一緒に付いて来てほしい」

雷真「わかった」

刀奈「わかったわ」

箒「ありがとう、二人とも」

本日の夕飯は箒の行きたい店ということで、箒が案内する中、俺は携帯で織斑先生に念のため事情を説明。万が一のことがあったら、俺が責任を取るということで了承してもらった。

そして、着いたのは『針葉樹の森』。日曜日のディナータイムが雑誌に載るほどの人気のお店ということで席は全て満席。

一夏「どうする？ 二時間待ちって書いてあるし……………」

雷真「これだけ人気の店だと予約客で、二時間よりも待たされる可能性があるぞ？」

箒「ううう……………こんなはずでは……………」シユン

刀奈「大丈夫よ、箒ちゃん。こんな時は、優しい優しい、白の騎士様に頼みましょう？ ね？」



刀奈は箒を慰めつつ、『白の騎士様』と言いながら一夏に視線を向けて、圧力ある笑顔で「何とかしろ！」と言っているようだ。

一夏「俺!?!」

一夏「じゃ、じゃあ、知り合いのお店で良ければ……でも、ここからだとちよつと歩かないといけないんだけど、それでもいいか?」

箒「あ、ああ………任せる………」

一夏「会長と雷真もいいか?」

刀奈「ええ、大丈夫よ。でも、ちよつと歩く分、料理は期待していないのよね、一夏くん?」

一夏「味は俺が保証するよ」

雷真「現状、俺は三人の保護者扱いなので付いていくよ」

一夏「保護者? どういうことだ?」

雷真「流石に門限が過ぎていて、尚且つ外食するんだ。織斑先生に電話を一本入れて、実年齢的に俺が保護者として何かあれば責任を持つことになっているんだ」

刀奈「だから、さつき歩きながら電話していたのね?」

雷真「そういうこと」

箒「用意がいいなあ」

雷真「報・連・相は大事だからな」

一夏「確かに」

現状の説明をしたあと、二十分ほど歩いて、目的の店に着いた。

一夏「ここだ」

箒「う、うん?」

雷真「五反田食堂………まさか、ここって弾の店か?」

一夏「当ったり〜!」

俺と一夏とのやり取りを見た箒は、ロマンチックでオシャレな店だと期待していたのか、ガックシと肩を落とす。

何より、相手は一夏だ。ロマンチックでオシャレな店を期待する方が間違っている。

一夏「ちわーすっ！」

弾「お？一夏じゃねえか？」

雷真「よう、弾」

弾「雷真まで、どうしたんだ？」

刀奈「こんばんは、弾くん」

弾「刀奈さんまで？どういうことだ？それにそっちは……………一夏の彼女か!？」

一夏「なんで嬉しそうな顔をすんだよ、お前は」

弾「いや、別に…………で、彼女なのか!？」

箒「か、彼女っ!?!/!/!/」

一夏「違うっっの。中学の時に話しただろう？幼なじみだよ。ファースト幼なじみ。っていうか、この間の俺の誕生日のときに会ってないのかよ」

弾「馬鹿野郎、お前。虚さんからメアドを聞き出すのがどんだけ大変だったかって…………」

一夏「虚さんがどうしたって？」

弾「な、なんでもねえよ。それで、あー、なんだっけ？しののさん？」

箒「篠ノ之箒だ」

弾「ふむふむ。あ、俺は五反田弾だ。よろしく」

箒「あ、ああ」

弾「それじゃあ、好きな席へ、どうぞ。注文が決まったら呼んでくれ」

弾に案内されたテーブル席で、俺が一夏と、刀奈が箒と向かい合う

形で座り、早速メニューを見る。

雷真「ふむふむ、生姜焼き定食に麻婆豆腐定食、焼き鮭定食、青椒肉絲定食等々。中華系の定食が多い様だが……やはり、若鳥の唐揚げ南蛮漬け定食が気になる)」

一夏「雷真と会長は何を頼むんだ？」

雷真「俺はこの、若鳥の唐揚げ南蛮漬け定食だな」

刀奈「私は、鯖味噌定食にするわ」

一夏「箸は？」

箒「そうだな……ここのオススメはなんだ？」

一夏「どれも美味しいけど、あえて勧めるなら魚系かなあ。……あ、特にこのカレイの煮付けとか本場に美味しいぞ」

箒「そ、そうか。ふむふむ……」

箒はメニューを眺めながら、ふと何かを思い出したかのように一夏に顔を向けた。

箒「一夏。そ、そのだな。今、料理の練習をしているのだが、良ければ今度試食をしてもらえないだろうか……？」

一夏「へえ、そうなのか。箒も料理上手いもんな。ありがたく食べさせてもらうぜ」

箒「そ、そうか！そうか……。うん……。うん！」

一夏「さてと、俺は焼き魚フライの盛り合わせ定食にしようかな。箒は？」

箒「え!?!え、えっと、私は……」

先ほどの試食をしてもらうことに一夏から了承が得られたことに喜んでいて、自分の食べる品を決めていなかった箒は慌ててメニューを見直す。

一夏「ああ、この業火野菜炒め定食っていいものいぞ。なにせ看板

……いや、鉄板メニューだからな」

箒「そうなのか。では、それにするとしよう」

全員メニューが決まったので一夏が弾を呼ぶ。

一夏「おーい、弾。注文いいか？」

弾「ほいほい」

一夏「俺が焼き魚とフライの盛り合わせ定食、雷真が若鳥の唐揚げ南蛮漬け定食、会長が鯖味噌定食、箒が業火野菜炒め定食で」

弾「ん、了承。じゃあちよつと待っててくれ」

伝票をぱぱと書いた弾は、それを厨房へと持っていく。すると、そこで五反田食堂の店主であり、弾の祖父である厳が一夏に気づいた。

厳「ん？一夏じゃねえか！」

一夏「あ、どうも。お邪魔してます」

厳「おう。で、なんだなんだ、お前も巷でいうダブルデートっていうのか？」

一夏「違うって、厳さん。三人とも、この人は弾の祖父で名前は厳さんだ」

一夏が紹介してくれたので此方も自己紹介をすることにした。

雷真「黒牙雷真です」

刀奈「更識刀奈です」

箒「篠ノ之箒です」

厳「おう。五反田厳だ」

自己紹介が終わると厳さんは家に繋がってると思われる入り口から母屋にいるであろう蘭を叫び呼ぶ。

蔵「おーい！蘭！おーい！」

蘭『なにー？』

蔵「店に來い！ 今すぐにな！」

蘭『なんでー？』

蔵「いいから來い！」

蔵さんが蘭を呼ぶと二分ほどで母屋から蘭が出て來た。

蘭「おじいちゃん、何？ 私、宿題やってたんだけど………って、ええっ!？」

蘭「い、一夏さん!？」

一夏「よっ、蘭」

蘭「……………」

一夏を見た蘭は視線を下に向けて行き、自分の服装を確認する。次に一夏に視線を戻したあと、その視線を刀奈と箒に向けると次第に耳まで赤くして、叫びながら玄関を飛び出した。

蘭「わああああんっ！」

一夏「……………なんだあ？」

刀奈「彼女も災難ね」

雷真「恋する乙女としては、最悪のエンカウントだろうな」

一夏は、蘭の言動に首を傾げ、そんな一夏を見つめる箒が暗い表情半分と蘭を心配する表情半分という顔を俺と刀奈は見逃さなかった。また、蘭と入れ替わるように弾や蘭と同じ髪色をした女性が出てきた。

??? 「あら？あらあら？一夏くん、隣にいるのは彼女？」

一夏 「蓮さん、違いますってば」

蓮 「そうなの。よかった」

ニコツと微笑む蓮に釣られて、一夏もよくわからないまま笑みを浮かべる。

蓮の登場から10分後、お出かけ着にエプロンという、よくわからない格好の蘭が出てきた。

蘭 「い、いらっしやいませ。一夏さん、黒牙先輩、更識先輩、篠ノ之先輩」

一夏 「あれ？なんだ、蘭。着替えてきたのか？」

蘭 「え、ええ、まあ……………」

刀奈 「一夏くん、女の子には色々とあるの。だから、あまり女の子の秘密を詮索するのは紳士としていただけじゃないわよ」

雷真 「これ以上、詮索したらハイマツト・フルバーストの回避演習を早朝特訓に加えるぞ？わかったな？」ギロリ

一夏 「ヒイっ!？」

一夏 「わ、わかった」

マナーがなっていない一夏に少し睨み付けながら早朝特訓の話をする、一夏は顔を青くしながらブンブンと首を縦に振った。

蔵 「おい、蘭！料理できたから運べ」

蘭 「わ、わかってる！大声出さないでよ、おじいちゃん」

どうやら、料理が出来たらしくカウンターに置かれた料理を受け取った蘭は、プイッと蔵にそっぽをむく。

すると蔵はその行動で蘭が怒ったと理解し、弾を責めるが、怒った原因が自分だと分かっているよう、弾と二人でワアーワアーと叫んでいる。

蘭「い、一夏さん、お待たせしましたっ」

一夏「おお、ありがとう」

蘭「こっちは、黒牙先輩の若鳥の唐揚げ南蛮漬け定食です」

雷真「ありがとう」

蘭「こっちが、更識先輩の鯖味噌定食です」

刀奈「ありがとう、蘭ちゃん」

蘭「最後が篠ノ之先輩の業火野菜炒め定食です」

箒「……ありがとう」

蘭「えっと……お久しぶり、です」

箒「ああ。久しぶりだな」

蘭「……」チラチラ

蘭「黒牙先輩と更識先輩の関係は前に聞いたから分かるけど、一夏さんと篠ノ之先輩が一緒にいるってことは……もしかして、ダブルデート、なのかな……。だとしたらいやだなあ……」

そんなことを考えながら蘭は、挙動不審になっていると一夏が口を開いた。

一夏「蘭？ どうかしたか？」

蘭「は、はい!? ど、どうもしてないですよ!」

雷真「いや、その……見られてると視線が気になって食べ難いんだが……」

蘭「あつ、す、すみません! 失礼しましたっ」

俺の言葉で蘭はダツとダツシユでカウンターアタックに戻っていった。そんな蘭を不思議そうに一夏と箒だけが眺めながら俺たちはテーブルに備え付けられている割り箸入れから割り箸を取って割り、料理に手をつける。

雷真「おっ、これ美味しいな」

刀奈「こつちの鯖味噌も味が染みてて美味しいわよ」

雷真「じゃあ、交換しないか？」

刀奈「いいわねえ。私も南蛮漬け定食、少し気になってたから」

雷真「よし、交渉成立」

俺と刀奈はお互いにメインのおかずとなる唐揚げと鯖をお互いのお皿に分け、お互いに頬張り、堪能する。

そんな俺たちを一夏は、自分の事のように喜んでいる表情をしながら箸にも感想を聞く。

一夏「箸はどうだ？美味しいだろう？」

箸「確かに美味しいな。醤油の味付けが特にいい」

一夏「だよな、美味しいよなあ、それ」

箸「た、食べてみるか？」

一夏「いいのか？それじゃあ早速——」

そう言つて一夏が箸の皿に箸を伸ばそうとすると、箸がわざとらしく咳払いをする。

箸「た、食べさせてやろう……………」

一夏「え？なんだって？」

箸「た、食べさせてやると言つたんだ！」

一夏「お、おう…………。／／／／／／／／」

箸の言葉に顔を顔を赤くしながら一夏は、取り敢えず頷いた。それを見た箸は、自分の箸で肉と野菜をつまみ、左手を添えて一夏の口へと運ぶ。

箸「あ、あーん……………」



一夏「あー……………」

一夏が箸の箸につままれた料理を食べようとした時、俺は蘭から視線を感じたのでそちらを向くと、そこには絶望しきった顔で、目の端に大粒の涙を溜めていた蘭を見た。

## 第57話

ついに一夏が箸の箸につままれた業火野菜炒めを食べてしまった。そんな一夏を見た蘭は、我慢のダムが決壊したかのように大粒の涙を流していた。

蘭「……………」ポロポロ

一夏「ら、蘭!?!どうしたんだよ!?!」

蘭「へ?あれ……………」ポロポロ

どうやら、蘭は無意識で涙を流していたようだ。

蘭「あれ、あれ?こ、こんなはずじゃあ……………う、うええええ!!」

ポロポロ

一夏「おい、蘭!」

感情のダムが決壊した所為か、蘭は一夏の声にも反応せずに店の入口から走り出て行ってしまった。

♪BGM：君と僕、届かない想い♪

雷真「一夏、話がある」

一夏「で、でも蘭が……………」話があると言ってた。二度は言わせるなよ?」……………分かった」

雷真「刀奈、悪いが箸と共に蘭を探してきてくれ。見つかったら、連絡を頼む」

刀奈「分かったわ。でも、ほどほどにね?」

雷真「善処する」

刀奈「箒ちゃん、行くわよ」

箒「えっ………で、でも」

刀奈「蘭ちゃんあの行動には、箒ちゃんにも責任があるの、逃げちゃだめよ」

箒「………分かった」

刀奈は蘭を探すために箒を連れて店を出て行った。

さて、ここからは仮の保護者として俺がやらなければならないことがある。その前に………。

雷真「蔵さん、貴方が一夏に対して激怒するのも分かる。しかし、元をただせば貴方にも非があるんだ」

蔵「なに？」

雷真「これはもう、『たられば』の話になりますが、貴方が宿題をしている蘭を無理矢理、店に呼ぼうとしなければこうはならなかったはずだ」

蔵「だが、俺は蘭のために………」

雷真「そうでしょう。確かに、貴方は蘭のことを思って行動したかもしれない。しかし、それを蘭が貴方に頼みましたか？一夏が店に来た時は必ず呼んでくれと、そう言われましたか？」

蔵「………」

雷真「言われてないですよ？なら、これからは少しでも気をつけるようオススメします。今の彼女は、心がちよつとしたことで揺れ動いてしまう、年頃の一人の少女なのだから」

蔵「………分かった。以後、気を付ける」

雷真「次に一夏、お前だ」

一夏「………」

雷真「が、しかし、その前に弾に質問したい。弾、さっきの一夏と箒の言動と蘭の顔を見て、どう思った？」

弾「………正直、今の俺は一夏、お前を殴り倒したい気分だ。今まで、黙ってきたけど。お前のその人の思いに気付いていない、気付こ

うとしないところが大嫌いだ！」

一夏「……………弾」

雷真「一夏、さっきのお前の言動は蘭を傷付けたんだ。それも、女の子にはかなり深い傷になりえる物だ」

一夏「そんな……………ただ、俺は箒に料理を食べさせてもらっただけだ。雷真もたまに会長とやってるじゃないか!？」

雷真「確かに、俺もたまにやるし、やってもらう。けれど、お前とは違う。周りの奴らに俺は、刀奈、簪、シャルロットと恋人で婚約者だと知らせている」

雷真「しかし、今の一夏と箒はなんだ？ただの幼馴染、それだけの間柄だろう？兄弟でもない、恋人でもない、婚約者でもない、ましてや夫婦でもないだろう？」

一夏「そ、そうだけど…」

雷真「今でも一夏は蘭が泣いた理由が分からないか？」

一夏「ああ……………」

雷真「じゃあ、今から俺の実体験を話そう。臨海学校の時、俺が<sup>コスミック・イラ</sup>あちら側<sup>に</sup>飛ばされたのは前に話したな？」

一夏「ああ」

雷真「俺はその時、〃こちら側〃に還ってくる前に一人の女性から告白され、振って泣かせたことがある。それも盛大にだ」

一夏「……………」

雷真「そこで、俺の立場を一夏に、女性を蘭に置き換えたら、何故、蘭が泣いてしまったのか答えになるはずだ」

一夏「……………まさか、え、いや……………でも……………」

雷真「一応、答えは出たみたいだな」

一夏「しかし、雷真……………これは勘違いってことも、それに理由が……………」

弾「このバカ野郎っ！」

一夏「がっ！」

流石に弾も一夏の鈍感さにド頭にきたのか、一夏の胸ぐらをつかみ

椅子から立ち上がらせ、料理が乗ったテーブルの邪魔にならないように、他のテーブルの方へ一夏を殴り飛ばす。

弾「はあ……はあ……はあ……」

一夏「イツテテ……何すんだよ、弾っ!？」

弾「なにすんだよ、だど!？」

弾「テメエこそ、なにを勝手に蘭の想いを勘違いだと決め付けてやがんだよっ!!」

弾「蘭は泣いてたんだ。お前の所為で、蘭が泣いたんだ!なんで、その理由がテメエには分からねえんだよ!!」ポロポロ

一夏「……弾、お前……」

いつしか、弾は悔し涙を流しながら、倒れた一夏の上で馬乗りになり、胸倉を掴み上げていた。

弾「なんで、蘭が……蘭が泣かないといけねえんだよ。お転婆で、がさつで、人使い荒いけど……それでも、なんで、俺の妹がこんな辛い思いをしないとイケねえんだよ。こんなのねえよ、クソつたれが……」ポロポロ

一夏「……」

いつしか、一夏も弾の悔し涙でぐちゃぐちゃな表情を見て、蘭が泣いた理由が少しずつだが分かってきたような顔をしていた。

一夏「そうか……蘭は俺のことを……」

弾「そうだよ!あいつは、中学の時からお前のことをずっと、ずっと……」ポロポロ

一夏「悪かったな、弾」

弾「謝る相手が違いえんだよ、バカ野郎!!」

一夏「そう……だな」

雷真「どうやら、理解したようだな」

一夏「ああ……蘭が泣いた理由が分かったよ」

雷真「なら、朗報だ。刀奈が蘭を見つけたようだ」

一夏「本当か？」

雷真「ああ」

一夏「なら、迎えに行かないとな」

雷真「だな。厳さん、悪いけど料理はこのままです」

厳「雷真の坊主には俺も反省させられたからな、それくらいは気にするな」

雷真「ありがとうございます」

一夏が殴り飛ばされたことにより乱れたテーブルを直してから蘭と刀奈たちが待っているであろう近くの公園に二人で迎えに行くことにした。



く同時刻、とある公園にてく

蘭「ううっ……うっ……うっ」

店から飛び出した蘭は一人、公園のブランコで涙を流していた。

蘭「やっぱり、私なんか……一夏さんの彼女なんか……」

???「あんまり目を擦らないの。せつかくの美人な顔が台無しになるわよ？それに『私なんか』なんて、言わないの」

蘭「え？」

刀奈「はくい、蘭ちゃん」

箒「……」

蘭「更識先輩。それに……篠ノ之先輩まで……つてことは一夏さ

んと黒牙先輩も!」アワアワ

私たちがいることで雷真や一夏くんが直ぐ近くにいるのではないかと慌てる蘭ちゃんに、雷真がやろうとしていることを蘭ちゃんに説明する。

刀奈「大丈夫、二人はまだここには来ないわ」

蘭「そ、そうですが……………って、まだ?」

刀奈「そつ。私が連絡を雷真に寄越さない限りは二人が……………一夏くんが来ることはないわ」

蘭「それを聞いて、なんだが安心しました。こんな、ぐちゃぐちな顔で一夏さんの前には出られませんから。それに、私なんか……………」

刀奈「ほら、また。今、雷真が貴方のために一夏くんにお説教をしている所だから」

蘭「黒牙先輩が?」

刀奈「そう。超鈍感で、超朴念仁の一夏に蘭ちゃんが何で泣いてしまったのか。その理由を分からせるためにお説教しているの」

蘭「って、ことは……………」

刀奈「多分、そういうことね」

蘭「ひええええ!!」

刀奈「まあ、さすがに一夏くんクラスでない限り、蘭ちゃんの行動で直ぐにバレることだし。この状況に乗じて、告白しちやいなさいな」

蘭「でも……………」

刀奈「蘭ちゃん。世の中には、告白する前に想い人と永遠の別れをする人もいるの。そんな悲しい後悔を貴女はしたいの?」

蘭「……………」

刀奈「それに、私が知ってる告白の中では、告白しても永遠に会えることがない女性も中にはいるのよ」

蘭「告白したのにですか?」

刀奈「そう。お伽噺みたいな話だけど、とある異世界還りの軍人さんが異世界で、それは可愛い美少女に告白されるけど、元の世界には既に婚約者がいるの」

刀奈「だから、その軍人さんは告白した彼女を振って、婚約者がいる元の世界へと帰ることを選んだの。それが彼女と二度と会えずに、彼女を泣かせることであっても」

箒「!?（異世界還りの軍人……まさか、雷真!?）」

刀奈「でもね、私は告白した彼女は、こう思ってると思うの。決して、実らない想いだっただけけれど、伝えないで別れるより、伝えて別れた方が良かった、ってね」

刀奈「だから、蘭ちゃんも頑張りなさい。それに、仮に今振られても、振り向かせればいいのよ」

蘭「……わかりました。もう一度、頑張ってみます」

刀奈「それから、箒ちゃん。次は貴女よ。蘭ちゃんだけ、意中の男性を教えたんだから、箒ちゃんも教えないと」

箒「わ、私はべ、別に……」

刀奈「箒ちゃん、後悔は先に立たずよ」

照れ隠しをしようとした箒ちゃんに、私は真剣な眼差しで「本当に後悔しない？」と箒ちゃんの目に訴える。

箒「……分かった」

刀奈「それは、よかったわ」

箒「……蘭。私は……一夏が好きだ。この気持ちは誰にも負けないつもりだ」

蘭「やっぱり……。私も！私も一夏さんが好きです！ですから、私はこの気持ちを一夏さんに伝えます！」

箒「そうか。私もいつか、一夏に伝えられるようにならねば」

蘭「先に一夏さんをもらっても泣かないでくださいよ？先・輩」

箒「フンツ！やれるものならやってみろ」

蘭「ええ！やってやりますとも！」



箒「ぐぬぬぬぬ！」

蘭「ぬぬぬぬ！」

刀奈「(どうやら、蘭ちゃんは振っ切れたみたいね。けれど、箒ちゃんはまだ少しかかるかもしれないわねえ…)」

二人が額を擦り合わせて、唸っているのをよそに私は携帯で蘭ちゃんの居場所を雷真に連絡する。



一夏が蘭の想いに気付いて、刀奈から送られてきた位置情報と一夏のガイドを頼りに刀奈たちがいるであろう公園にたどり着いた。

雷真「おっ、いたいた。刀奈ー！」

刀奈「らーいしーん！」フリフリ

無事に合流すると、俺と刀奈、箒は手筈通りに一夏と蘭を二人きりにして五反田食堂に一足先に戻ることにした。

雷真「流石に料理は冷めちゃってるよな〜」

刀奈「そうね。流石に1時間も放って置いたらね」

箒「二人とも今回はすまなかった。私の軽率な行動の所為で」

雷真「そうだなー」

刀奈「ちよつと、雷真」

雷真「これで、少しは自分の行動に責任が伴うことが分かったろう？」

箒「ああ、本当にすまない」

雷真「分かっているなら、よし。それと、今回のことで一夏が箒やセシリア、鈴、ラウラの想いにも気付いてくれればなあー」

刀奈「それは、一夏くん次第じゃない？」

雷真「だよな」

三人で店に着いて、早速、冷めた料理に手を付けると……………。

雷真「あれ？温かい？」

刀奈「本当ね」

箒「でも、どうして？」

蓮「それは、レンジで温めたからよ」

雷真「そういうことだったんですね。どうりで……………」

料理が温かいことに驚いていると蓮がレンジで温めてくれたと教えてくれた。

雷真「うん！やっぱり、唐揚げは熱々に限るよな」

刀奈「鯖味噌も熱々の方が美味しいわね」

箒「野菜炒めもだ」

三人で一夏を放っておいて料理を楽しんでいると、店のドアが開き。外から頬に紅葉のような跡を作った一夏と目を赤くしながらもスツキリとした顔の蘭が帰ってきた。

雷真「よう、色男」

一夏「色々ありがとうございます、雷真」

雷真「まっただ」

蘭「私からもありがとうございます。黒牙先輩、更識先輩」

雷真「どういたしまして」

刀奈「私は恋する女の子の味方だから」

蘭「それじゃあ、私は宿題があるので、これで失礼します」ペコリ

ペコリと頭を下げたあと、蘭は早足で母屋の中へと消えていった。  
どうやら、一夏は蘭のことを振ったようだ。

さてさて、今日のことをどうやって織斑先生に報告したものか、考  
える必要があるそうだ。

## 第58話

雷真「以上が昨日の門限以後の出来事になります」

千冬「はあく、読ませてもらった。不出来な弟と篠ノ之の所為で迷惑をかけたな黒牙」

雷真「いえ。仮とはいえど、保護者として、恋愛の先輩として、指導したままでです。ですが、まだきつかけを与えたに過ぎないのでその点はご了承を」

千冬「分かっている」

いつもの早朝特訓のあと、寮長室にいる織斑先生に昨日の門限以後に起きたことをレポートとして提出したのである。

千冬「それから、黒牙。轡木さんから書類を預かっている」

雷真「師匠から？」

千冬「内容は知らないが、出来るだけ早くとのことだ」

雷真「出来るだけ早く？」

織斑先生からA4サイズの角形封筒を受け取り、師匠からの書類を拝見すると、そこには少しばかり面倒な書類。

内容は、MモビルスーツSのとある武装を学園の教師用ISに搭載させるための要請書類だった。

雷真「おい、師匠……アンタ、分かかってこの書類を織斑先生経由で渡したろう、絶対」ピキピキ

千冬「黒牙、内容を聞いても平気か？」

雷真「はい。絶対に織斑先生も関わるので」

千冬「私も？」

雷真「師匠から書類内容は……学園の教師用ISモビルスーツに対MSIS用の防衛策によるビーム兵器並びに対ビームシールドの配備ですよ」

千冬「なっ!？」

雷真「俺がビーム兵器を隠しているのを知っててコレを送ってくるんですから、あの人は姉さんの専用機のことを盾にしているから質が悪い」

千冬「ああ……あのM2アストレアのことか。それでどうするんだ?」

雷真「ビーム兵器は流石にこれ以上、俺の管理下から外へ出す訳には行きませんよ。刀奈たちのだけでなく、タッグマッチで姉さんの専用機で煩くなりますし」

雷真「現に、日本とフランス以外の各国が自分たちにもビーム兵器を寄越せだ、なんだかんだと喚いていますから。まあ、そうなることを見越して、脅しをかけていますがね」

千冬「脅し?」

雷真「各国のIS委員会のメインサーバーとサブサーバーにハッキングをかけて黒い情報を押さえてありますし、ボタン一つで全てサーバーとデータがおじやんになるウイルスを作成したりとかね」

千冬「え、えげつないな」

雷真「まあ、コレくらいはやらないと色々と面倒なことに巻き込まれますから」

千冬「話を戻すが、配備の件はどうする?」

雷真「そうですね……。対ビームシールドなら支給しても構いません」

千冬「ビームシールドか……。あれさえ、あれば防御に徹してお前か、お前の所の三人衆、織斑、篠ノ之、オルコットで敵は排除できるようになるからな」

雷真「そうですね。周りの被害も抑えられますから」

千冬「私からも対ビームシールドは頼みたい」

雷真「わかりました。タッグマッチ前には何とかかなると思います」

千冬「世話をかける」

雷真「大丈夫ですよ」



織斑先生経由で師匠からの対ビームシールド関連の書類を受け取ったあと、本日の授業を終えて放課後。

俺は姉さんと共に、第3アリーナに来ている。

無論、第3アリーナに来ているのは姉さんのM2アストレアの演習のため、副会長権限で第3アリーナへの入場と屋根は閉鎖してある。それと、前の騒動以来、姉さんは俺や刀奈、簪、シャルロット、本音だけがいる時、砕けた話し方をしてくれるようになった。俺としては嬉しい限りだ。元々、姉さんは堅苦しい面があったから。

雷真「姉さん、アストレアの具合はどうだ？」

虚「基本的な操作は昨日、一昨日の最適化で慣れたけど、まだストライカーは慣れないわね。特に、ランチチャーとI W S P、ガンバレルが……………」

雷真「ランチチャーはアグニが原因で、I W S Pはやはり重量か。ガンバレルは、有線式のビット兵器だからビット適性値がBの姉さんでも使えろと思っただけだ」

虚「自分が動きながらだと、どうしても一機が限界かな……………」

雷真「うくん。この際、第2世代ドラグーン・システムを組み込むことを視野に入れた方がいいかなあ」

虚「第2世代ドラグーン・システム？」

雷真「簡単に説明すると、この世界にあるビット操作システムは操縦者の空間把握能力だけで操作しているけど、コズミック・イラ“あちら側”の世界だとそれを改善するために量子インターフェース……………つまり量子演算システムを操縦者の補助として使うんだ」

雷真「だから、空間把握能力がそこまで高くなくてもビット兵器が

使えるようになるんだよ」

虚「そんな、システムが……」

雷真「まあ、そこは姉さんに任せるよ。データはカオスから引つ張ってくれば何時でもインストールできるから」

虚「では、お願い。タッグマッチの時、雷真に迷惑をかける訳にはいかないから」

雷真「分かった。あとでインストールしておくよ。それじゃあ、続きをやろうか」

虚「そうね」

雷真「カオス、起動っ！」

フリーダムを展開させてから拡張領域バースロットの中にある、ペンダント型の待機状態にしてあるカオスを取り出し、待機状態のまま空へ放り投げ、音声センサーで起動させる。

すると放り投げたカオスのペンダントが緑に輝き、メタリックグレイの力オスは放り投げた高さで浮遊しながら目の前に出現すると、直ぐにV ヴァリブルフェイズシフト P S 装甲が起動し、メタリックグレイから色鮮やかに変色する。

雷真「カオスの設定はIS用の演習にしておくから、SEが切れたら一時終了で」

虚「分かったわ」

雷真「それじゃあ、始めっ！」

姉さんとカオスたちが高度を合わせてから、演習開始の掛け声を上げると二機とも、一斉に動き出す。

虚「ハアアアッ!!」



姉さんのカオスとの演習のあと、アストレアのSEが切れたのでカオスからアストレアに第2世代ドラグーン・システムをインストールして、ガンバレルの調子を見ている。

雷真「どうだい、姉さん。第2世代ドラグーン・システムは？」

虚「そうね。やはり、インストールしてから凄く楽にガンバレルを四機とも操作できるわ」

雷真「それはよかった」

虚「アストレアのSEが回復したら、次はI W S Pをモノにしなないと」

雷真「I W S Pは重いからな」

虚「雷真はどうやって、あんな重いのを自在に扱っていたの？」

雷真「簡単だよ。重さを利用するんだ。前に進むなら前傾姿勢でスラストを噴かして、後ろなら後傾姿勢でスラストを噴かすだけ」  
虚「それはそうだけど、普通はあんなに重たいのを背負った状態でそれをやると前に倒れたり、後ろに倒れたりするわよ？」

雷真「んん、だとするとやっぱり俺ができるのは『あつち側』<sup>コスミック・イラ</sup>で使ったのが原因か」

虚「それ以外ないでしょうね？」

雷真「だよな。それじゃあ、俺も特訓やりますか」

姉さんと話を終えたあと、姉さんのアストレアのSEが回復するまでフリーダムでカオス、ガイア、アビス、セイバーの四機を同時に相手をして、『アレ』の持続時間を延ばす特訓をすることにした。

前の学園襲撃事件以来、もつと『アレ』の持続を延ばそうと色々やった結果。今では持続時間が5分にまで延びている。けれど、もしもM Sモビルスーツを作っている奴らが、ハイパーデュートリオンエンジンを搭



載した機体を送り込んできたなら5分では足りない。最低でも1時間は欲しいところだ。

雷真「ハアアアアツ!!」

まず最初に衝突したのは、セイバーだった。セイバーのヴァジュラビームサーベルとフリーダムofラケルタビームサーベルがつばぜり合いになりプラズマが生じる。

四機もビーム兵器を扱うため、武装に回していたエネルギー配分をIS戦闘基準まで落とす。落とした部分のエネルギーはスラスターの推進力とSE量に回している。なので、四機とも飛行速度はフリーダムに近くなっているのだ。

雷真「やつぱり、エネルギー配分をスラスターに回してから臨海学校の時より、速いっ!」

雷真「チツ……………!」

セイバーとつばぜり合いになっていると、やはり他の三機がビームライフルやビーム砲を撃ってくる。

それを回避するためにセイバーのヴァジュラビームサーベルにラミネートアンチビームシールドを割り込ませてつばぜり合いを弾き退けて隙を作らせ、ビームが一番多く放たれてくるアビスのビーム砲へと蹴り飛ばす。

(※以後、ラミネートシールドと省略。by作者)

雷真「うらあっ!」

セイバーを蹴り飛ばした後、回避しても当たりそうなビームをラケルタビームサーベルで相殺、またはラミネートシールドで防ぎながら高速で移動する。

雷真「やつぱり、数が多い……………けれど、カオスにドラグーンを使えないようにしているから少しだけ楽だ」

カオスたちの武装や装甲を破壊すると修理に時間と費用がかかるために、前回修理する際にフリーダムからSEに関するデータを転用してM<sup>モビルスーツ</sup>SE版のSEを完成させた。これは、アストレイやアストレアにも転用している物だ。

しかし、SEはパイロットがいるところだけ。なので、ビットやドラグーンを飛ばしているとドラグーンは本機が離れているためSEが作用しない。

そのため、カオスのドラグーンは飛ばさせないように今はシステムを設定してあるがビーム自体は使えるため、なんちゃってフルバーストされるので厄介なのは変わりないけど少しだけ楽である。

虚「す、すごい……………四機の攻撃を全て躲してる」

雷真「そろそろかな……………」

大分、五感が研ぎ澄まされたところで、SEEDを発動してから“アレ”を使うために『守る』という意識に集中する。

雷真「……………」キュパーン

雷真「よし、いくぞ！」

雷真「甘い！」

雷真「そこっ！」

それから、約3分。カオスたちの攻撃を全て躲わして反撃を確実に当てていると、ある異変が起こった。

それは、俺の反応速度と操作速度にフリーダムが付いて来れずに脚部や肩部のシールドバリアにカオスたちのビームライフルから放たれるビームが命中したのだ。

雷真「なっ……?!? (命中した!?)」

雷真「今、完全に回避したのに……。操作ミスでもしたのか?」

最初は気のせいだと思い続けていたが、流石に五発も命中するとなるとおかしいと思い特訓を中断する。

雷真「……………」

虚「雷真?」

雷真「フリーダムが俺の反応速度に付いて来れなかった? でも、今までそんなことはなかった。じゃあ、なんで?」

何故、フリーダムが俺の反応速度に付いて来れなかったのか疑問に思い思考の海に潜っていると、姉さんにヘッド装甲をノックされたのに驚いた。

雷真「うおっ!?!」

虚「やっと思考の海から浮上した。まったく、雷真は子供のころからそういうところは変わらないわね」

雷真「ご、ごめん」

虚「別に謝ることではないわ。けれど、どうしたの? カオスたちのビームが命中してから急に特訓を止めて。たしかに、雷真に攻撃が当たるのは珍しいけど……………」

雷真「なんか、フリーダムが俺の反応速度に付いて来れないみたいでさ」

虚「ん、それはもしかしたらフリーダムが次の形態に移行しようとしてるのかも」

雷真「フリーダムが?」

虚「もしかしたらよ?」

雷真「だとしたら、ストライクフリーダムに移行するの?」

虚「ストライクフリーダムって、確か……………」

雷真「ああ。俺の友人の専用機だよ。可能性としてはあり得るから取り敢えず、今日は個人特訓は止めておくよ」

フリーダム疑問が晴れないうちは個人特訓は止め。姉さんの特訓とタッグマッチに向けた連携の特訓にシフトした。



アリーナの使用限界時間まで連携の特訓をしてから、第3アリーナにある機密整備場でフリーダムとアストレアの整備を行ったあと、いつものメンバーで夕食を食べていると簪があることを口にした。

簪「そういえば、雷真」

雷真「なんだ？」

簪「夏休み前のメイカルチェックの時に言ってた、周りが遅く感じる力の名前は決めるの？」

雷真「„アレ”の名前か……………」

刀奈「確かに名前がいるかもしれないわね。ゾーンに近い奴にも“SEED”って名前があるわけだし」

シャル「ところで、SEEDってどういう物なの？」

雷真「正式名称、Superior Evolutionary Element Destined-factor。通称、SEED。日本語だと、優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子、という意味らしい」

刀奈「優れた種への……………」

簪「進化の要素であることを……………」

シャル「運命付けられた因子……………」

雷真「俺が知っている中で、これに覚醒したのは五人だけなんだ。そのうちの四人は『コーディネーター』で残りの一人は『ナチュラル』だから、『コーディネーター』だけが使える物でないんだ。あまり、SEEDの発動要因が分かってないんだ」

刀奈「なら、雷真は特別なのかしらね？」

雷真「どうなんだろうな？」

簪「なんか、話が脱線し始めてる」

シャル「ごめん。僕の所為で……………」

簪「二人とも話を戻そう」

雷真「す、すまん」

刀奈「あら、ごめんなさいね」

簪「それじゃあ、私が考えた名前は『オーバーリミット』。リミッターをオーバーするから、『オーバーリミット』なんだけど、どうかな？」

シャル「簪、僕や刀奈の案もあるんだから、それから雷真に選んでもらおうよ」

簪「ごめん。こういう必殺技のネーミングを決めるの憧れてたからテンションが……………」

シャル「それじゃあ、僕の番だけど。名前は『セカンドSEED』、雷真がSEEDを発動してないと使えないから、SEEDのその先を意味して『セカンドSEED』」

刀奈「最後は私ね。やっぱり姉妹だからかしらね。簪ちゃんと少し似てるけど『オーバーロード』なんてどうかしら？」

雷真「そうだな……………。よし、シャルロットの『セカンドSEED』にしよう。なんとなく、しっくり来たから」

こうして、俺の新しい力に名前が付いたのだった。

## 第59話 機体設定有り

タッグマッチトーナメントまであと残り3日。今日は前に師匠から要請があった、対M<sup>モビルスーツ</sup> S I Sの対ビームシールドを前回、姉さんのアストレアを受け取ったドッグへ取りに行くため、俺は午前の授業だけ公欠。

雷真「数は全て揃ってるか？」

シノブ「ええ。確か、全部で30枚ですよね？」

雷真「そうだ」

シノブ「まさか、I S学園に対ビームシールドを配備することになるとは……………」

雷真「俺だっと思ってなかったさ。もっというなら、この世界にストライクを含めてM<sup>モビルスーツ</sup> S I Sが現れることすら最初は思ってもみなかったしな。還ってきた時に全て終わったと思っていたんだがな」

シノブ「若様のためにも、原因が早く分かればいいんですが……………」

雷真「お前たちは良くやってきている。だから、あまり自分を責めるな」

シノブ「はい……………。そういえば、虚ちゃんのアストレアの具合はどうですか？」

雷真「そうだな……………。基本操作は心配はないが、ストライカーパックがちよつと……………特にランチャー、I W S Pが扱いづらいそうだ」

シノブ「やはりそうですか。ガンバレルの方は？」

雷真「それは、カオスから第2世代ドラグーン・システムを転用してあるから対処済みだ」

シノブ「カオスのシステムですか……………」

二人でアストレアの話をしていると対ビームシールドが特殊トランクに搬入し終わったようで、アキトから声がかかる。

アキト「雷真さん、兄さん。対ビームシールドの搬入終わったよ。それに、ミーティアの方も」

雷真「それじゃあ、行こうか」

シノブ「御意」

シノブとアキトは対ビームシールドのミーティアを乗せたトラックの運転席に座り、俺はビートチェイサーで後ろから護衛する。万が一に襲撃があっても、この特殊トラックは簡単には破壊されない。何故なら、トラックのコンテナにはラミネート装甲と対ビームコーティングを施してあるからだ。俺たちの技術を欲しがる国や企業、組織なんかは山ほどいる。特に軍事関連の企業は特にだ。そんな奴らから物資を守るために対応策は惜しまないようになっている。

そんな説明をしたが、襲撃も何もされずに無事にIS学園へと到着した。そして、警備員に入校証と俺の顔パスで入校して、そのまま専用エレベーターで機密区画へと向かい、俺たちを出迎えた織斑先生や教頭と合流。

シノブ「こちらにサインを……………」

教頭「わかりました」

雷真「これで、少しは対抗策ができたな。本当なら、織斑先生と山田先生にM<sup>モビルスーツ</sup>SISを渡したいところだが……………自分でも面倒になることはわかっているんだがな……………はあー」

どうしても、M<sup>モビルスーツ</sup>SISとの戦闘を考えると少しでも戦力を増強したいと考えてしまう。それに、できることなら、刀奈やシノブ、織斑先生に黙って秘密裏にハイパーデュートリオンエンジン搭載機体の抑止力として製造を計画している機体。近接特化型と万能型のハイパーデュートリオンエンジン搭載型の機体。核エンジンはNダガーから回収していた物を、デュートリオンビーム送電システムはカオスたちから転用すれば、ハイパーデュートリオンエンジンの完成だ。

最初は臨海学校から帰って来たときにフリーダムの動力源をハイ

パーデュートリオンエンジンに変えようか迷ったが可能性の域を出なかつたから考えてはいたが実行はしなかつた。また単純に怖かつたのだ。ハイパーデュートリオンエンジンを搭載したフリーダムで演習中に操作を誤り、刀奈たちを傷付けてしまわないか……………。

アキト「雷真さん、ミーティアを降ろしますからフリーダムの起動をお願いします」

雷真「わかつた」

ミーティアはまだ、フリーダムヘインストールをしていないため、この場でインストールを行う。

雷真「フリーダム、起動。アキト、頼む」

アキト「分かりました」

フリーダムをミーティアを積んだトラックの前に展開し、アキトにあとは任せる。ミーティアを積んだトラックは、コンテナ自体が整備場と化しているため、場所さえ用意できれば修理などもできる。

千冬「黒牙、この追加パッケージは確か……………クラス代表の時の……………」

雷真「ええ。あの時に見せた、フリーダムとジャスティスと合体していた。ZGMF-X用アームドモジュール、ミーティアです」

千冬「これが……………」

雷真「一応、織斑先生にはミーティアの詳細を見せておきます」

千冬「なっ……………!?!」

雷真「驚きますよね。このミーティアとフリーダムが合体すれば、擬似的ではあるけれど戦艦と同等以上の戦力になるんですから」

千冬「まさか、これをタッグマッチトーナメントで使うつもりか?!」

雷真「いえ、流石に俺もそこまで鬼畜ではありませんよ。単に念のためって奴ですよ」



千冬「……………」

アキト「雷真さん、インストール終わりました」

雷真「ご苦労様。俺はこのまま授業に向かう。二人は、ドッグに戻ってくれ。あつ、それとシノブ。これを頼む」

シノブ「これは？」

シノブに渡したのは一本のUSBメモリ。

雷真「このメモリに入っている機体を作成してくれ。ただし、エンジン部は空洞にしておいてくれ」

シノブ「若様が言うのであれば分かりました」

シノブに渡したUSBメモリには、“コスミック・イラ”に存在する最強の機体のうちの三機の設計図。その三機が使われないことを願いたい。



学園に対ビームシールドを納入してから3日が過ぎ。今日は、専用機持ちタッグマッチトーナメント開催日である。そのため、俺たち生徒会は全員、ステージ上に並んでいる。

虚「それでは、開会の挨拶を更識刀奈生徒会長からさせていただきます」

姉さんがそう言って、司会用のマイクスタンドから一本下がる。

本音「ふあー……。ねむねむ……………」

雷真「本音、もう少しだけ頑張れ」

一夏「そうだけ。てか、教頭先生が睨んでるから」

本音「ういー……………」

まったく、本音は相変わらず朝が弱い。そのため、小学校時代は俺か姉さんが背負って学校に行くことがしばしば。それに便乗して刀奈や簪もたまに背負わされたこともしばしば……………。そんなことより、また教頭先生が睨んでいらっしやる。

刀奈「どうも、皆さん。今日の専用機持ちのタッグマッチトーナメントですが、試合内容は生徒の皆さんにとつととても勉強になると思っています。しっかりと見ていてください」

此方も相変わらず圧倒的な存在感を醸し出している。

刀奈「まあ、それはそれとして！」

刀奈「今日は生徒全員に楽しんでもらうために、生徒会である企画を考えました。名付けて『優勝ペア&準優勝ペア予想応援・食券争奪戦』！」

一夏「んなつ!? それ賭けじゃないですか!」

雷真「安心しろ、一夏。既に根回しはしてある」

一夏「ら、雷真?」

そうさ、これくらいの催し物をやるくらいは許可してもらわないと。我が部隊が独自に生産している対ビームシールドを学園に提供したんだ。金目の物目当てなら、各国のIS委員会に売った方が金になるが、今回のタッグマッチトーナメントの俺のパートナーである、姉さんのアストレアと共に許可してもらったのである。

刀奈「それに賭けじゃありません。あくまで応援です。自分の食券

を使ってそのレベルを示すだけです。そして見事優勝ペアと準優勝ペアを当てたら配当されるだけです」

一夏「そ、それを賭けつて言うんです！ 雷真、お前から何か言つてくれよ……………」

雷真「一夏、刀奈がこうと決めて止めさせるのは至難の技だ。一応、手段はあるが俺はやりたくない。何故なら、絶対に刀奈を泣かす自信があるからだ」

本音「それにおりむー、全然生徒会に来ないから、私たちが多数決取つてすすめましたあ」

一夏「くっ……………。そりや確かに最近生徒会に行つてなかったけど……………」

雷真「諦めろ、一夏」

一夏「……………」ガツクシ

一夏が諦めて頭を垂れると刀奈が対戦発表をする。因みに、俺のパートナーは生徒会長の刀奈でさえ知らない。これは、師匠に頼んでやつてもらった。所謂、サプライズです。

刀奈「では、対戦表を発表します！」

そう言つて大型の空間投影ディスプレイが刀奈の後ろに現れる。

---

### 第1試合

織斑一夏&更識簪

VS

篠ノ乃箒&更識刀奈

---

### 第2試合

凰鈴音&セシリア・オルコット

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ&シャルロット・デユノア

第3試合

黒牙雷真&布仏虚

V S

フォルテ・サファイヤ&ダリル・ケイシー

と表示され、刀奈も一度振り返ると即座に此方を見た。また、本音も姉さんが俺のパートナーだと知らなかったので声を上げてしまう。

刀奈「!!」バツ

本音「お姉ちゃん!？」

雷真「……………」ニヤリ

虚「……………」ニツコリ

その後、我に返った刀奈が開会式を終わらせた。当然、問い詰められるが試合を楽しみにしていると残して姉さんと二人で専用ピットに向かうことにした。



雷真「いやー、見物だったな。あの刀奈の慌てよう」  
虚「確かに……………。それに加えて、私はお嬢様に親の仇でも見るよ

うに睨まれたけど……………」

雷真「あー、それはごめん。あとで、俺が何とかしておくから」

虚「お願いね」

雷真「分かっている。それと話が変わるけど、姉さんにコレを持っていてほしい」

虚「これは……………鍵？ それも二つ？」

雷真「それは、俺の部屋の鍵とある物を取り出すための鍵だよ。もし今後、俺に何かあつたら刀奈たちにその鍵で開けて中身を渡してくれ。頼む」

虚「そんな縁起でもないことを言われても困るけど、受け取っておくわ」

雷真「ありがとう、姉——」

ズドオオオオオンツ!!!

雷真「なんだ!?!」

突然、地震が起きたかのように大きな揺れが襲う。しかし、それで終わりではなく何度も連続的に続く振動にただ事ではないと思い、織斑先生に緊急チャンネルで通信する。

雷真「織斑先生、この揺れは一体……………」

千冬『襲撃だ』

虚「襲撃!?!」

雷真「数と識別機体は？」

千冬『数は6、識別機体はクラス代表の時の強化無人機体だ』

雷真「なら、アイツらでも対応できます。俺たちもフリーダムとアストレアで出ます!」

織斑先生にそう言いながら、フリーダムを瞬間展開してピットの外から入ってきた赤い未確認ISに向かってルプスビームライフルを何の躊躇無く胴体部へと撃ち、未確認ISは木っ端微塵に爆散させる。

千冬「頼む！」

雷真「了解！」

織斑先生との通信を切り、各専用機持ちに緊急チャンネルで通信を行う。

雷真「各専用機持ち、聞こえるか？ 黒牙雷真だ。現在戦闘中の未確認ISは見ての通り無人機だ。よって、破壊して構わない。ただし、流れ弾で避難中の生徒に被害が出ないように、アリーナ内での破壊を主にしてくれ」

『『『『了解！』』』』』

専用機持ちに作戦を伝えたあと、俺と姉さんは他の専用機持ちのバックアップに向かうため出撃する。また、姉さんは俺が通信している間にアストレアを展開していたようだ。装備は、高速機動のエールだ。

雷真「黒牙雷真、フリーダム。行きます！」

虚「布仏虚、M2アストレア。出ます！」

フリーダムとアストレアでピットを飛び出してから姉さんに「若  
」として命令を出すことにした。

雷真「姉さんはシャルロットたちの援護を！ 俺は鈴とセシリアの  
方へ向かう」

虚「御意！」

姉さんに命令を出したあと、フリーダムのスラスタを噴かして、  
鈴とセシリアの機体反応がある地点へ向かう。そして、二人をハイ  
パーセンサーで見つけると未確認ISがセシリアにビームを放つ前  
にセシリアの前に瞬時<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で踊り出て、ラミネートアンチビーム  
シールドでビームを弾く。

(※以後、ラミネートシールドと省略。 by 作者)

雷真「セシリア、大丈夫か？」

セシリア「ええ、雷真さんのお陰で何とか……………」

鈴「一体なんなの、コイツらは……………」

セシリアと鈴、二人と合流すると姉さんから通信が入る。

雷真「どうした？」

虚『此方の未確認ISは撃破。それとどうやら、この未確認ISに  
はSEを阻害する機能があるようです。その影響でシャルロットお  
嬢様の右腕に火傷が……………』

雷真「なに!？」

シャル『大丈夫。ほんの少し火傷しただけだから』

ラウラ『すまない。私が先走ったばかりに……………』

クソツ！シャルロットにストライクの対ビームシールドを回収せ  
ずにそのまま持たせておくべきだった。シャルロット自身、フランス  
製のエネルギーシールドを持つているからとたかをくくっていた

……。

雷真「分かった。ラウラは自分をあまり責め過ぎるな。シャルロットのためにも……………」

ラウラ『すまない』

雷真「シャルロットはあとで医務室で治療してもらえ」

シャル『うん、そうする』

雷真「姉さんはシャルロットたちと引き続き他の専用機持ちのバツクアツプを頼む」

虚『御意!』

姉さんと通信を切ると距離を詰めてくる未確認ISの顔面に回し蹴りを決め、ルプスビームライフルで撃ち抜き破壊する。

雷真「これで全部か……………。二年と三年の先輩はなかなか強敵だな」

ビーム兵器も持たないのに簡単に未確認ISを破壊してみせたのをフリーダムのパイパーセンサーでしっかりと捉えていた。



## 第60話

専用機持ちによるタッグマッチトーナメントに突如として、襲撃してきた赤い未完成ISを六機全てを撃破して、これで状況は終了したと思われるが、俺の胸の奥では、今はまだ嵐の来る前兆でしかないという嫌な感じが拭えないでいた。

雷真「……………」

鈴「これで終わりね。まったく、何なのよコイツら。見た目は、クラス代表の時の奴に似ているけど……………」

セシリア「もしかしくなくても、その発展型ですわね。それに、SEを阻害する機能があるだなんて……………」

雷真「……………」

鈴「雷真、どうしたのよ？ さっきから黙っちゃって……………」

雷真「いや、戦争を生き抜いた軍人としてなのか分からないが、まだ何か来る気がしてならないんだ」

鈴「止めてよね！ アンタのその勘——」

鈴が最後まで言い終わる前にレーダーに熱源反応が全部で二十四あった。しかし、その熱源反応の並び方に見覚えがあった。その並び方は一つの熱源を三つの熱源が垂直に追いかける型で飛行しているのだ。

♪BGM：妖気と微笑み♪

雷真「あの機体たちが存在するからもしかしたらと思っていたが……………あの機体まで作り上げているのかよ!？」

鈴「雷真、もしかしてこの熱源反応って……………!？」

雷真「ああ、MSだ。モビルスーツそれも、臨海学校と似た機体だ!？」

セシリア「そんな!？」

雷真「各専用機持ちに告ぐ！ 新たにM S I Sの反応を確認。今からその詳細データを転送する。いいか？ そいつはさっきのと同じ無人機だ。殺す気でやらないと自分が死ぬと思えっ！」

『『『了解!』』』』

専用機持ち全員に通信と新たに現れた未確認I Sを合体前の「Z G M F—X 5 6 S インパルス」だと断定して詳細データを転送すると即座にフリーダム<sup>①</sup>のセーフティ<sup>②</sup>と刀奈たちのビーム兵器のセーフティ<sup>③</sup>を解除して先制攻撃のハイマツト・フルバーストを放つ。

雷真「合体させる前に墜とすっ！」

しかし、ハイマツト・フルバーストを難なく躲わして合体を始め、直ぐにM Sへと合体が完了する。合体が完了すると此方に向かつてくるのはフォースインパルスとブラストインパルスが一機ずつ、他の五機は此方と同様にフォース、ソード、ブラストの装備で専用機持ちの方へ進行して行く。

雷真「クソツ、今の動きで分かった！ あのインパルスたちには<sup>④</sup>あちら側<sup>⑤</sup>のパイロットの戦闘データが入っている」

鈴「それって、雷真と同じくらい強い奴ってこと?!」

雷真「デステイニーならそう言えるが、インパルスだから分からない。けれど、インパルスはフリーダムを墜とした機体だ」

セシリア「フリーダムをですの!？」

鈴「でも、フリーダムは……………」

雷真「俺が使っているフリーダムは回収されて修理された機体だ。それより、来るぞっ！」

鈴「——ツ!!」

セシリア「——ツ!!」

雷真「散開！」

俺の掛け声で散開する。M<sup>モビルスーツ</sup>S 戦闘のやり方は、ケイシー先輩とサファイヤ先輩以外には伝えてあるので、基本的にツーマンセルで動いてくれる。そのため、鈴とセシリアは二人でブラストインパルス一機を相手する。

雷真「アスランやディアッカ、イザーク……………それにシンの戦闘データまで、どうやってアイツらの戦闘データを？」

雷真「今は考えたって仕方ない。目の前の敵に集中だ」

セシリアたちとは違う別のフォースインパルスと一対一になるとインパルスは持ち前のビームライフルを撃ってくるのでラミネートアンチビームシールドで弾きながら、此方もルプスビームライフルで応戦する。

(※以後、ラミネートシールドと省略。by作者)

雷真「シンが乗るインパルスを相手をするのは戦争以来だな……………。やっぱり、ルナマリアと比べると操作が上手いし、射撃が的確だな。しかし……………俺はキラと違って殺すことに躊躇はしない！」

ルプスビームライフルでインパルスのビームライフルが放たれるビームに寸分違わずに命中させて、相殺させ、ルプスビームライフルを量子変化で自動的に後ろ腰へマウントさせながら、左腰からラケルタビームサーベルを引き抜き、近接戦闘に持ち込む。すると、それに合わせてインパルスもフォースシルエットからヴァジュラビームサーベルを引き抜き応戦する。

雷真「そこだっ！」

ラケルタビームサーベルがインパルスの機動防盾に防がれ。逆に

ヴアジュラビームサーベルをラミネートシールドで防ぐと互いプラズマが発生し、バチバチと音を立てる。その状態を30秒ほど続けていると目の前のインパルスから声が聞こえてきた。

インパルス「アンタガ、ステラヲ、コロシタ。トメヨウト、シタノニ!!」

雷真「なっ……………これは!？」

インパルス「ダカラ、オレガ、アンタヲウツンダ。キヨウ! ココデツ!!」

雷真「ぐっ……………あああああっ!!」

まさか、インパルスから声……………それも当時インパルスに乗っていた時の“シン・アスカ”の叫びと思われる言葉に驚いていると、急にインパルスがスラスタを強く噴かせ、体当たりを仕掛けたことに反応が遅れ、そのまま校舎のガラスを破砕音と共に破り、教室の机や椅子を破壊しながら廊下の壁に叩き付けられてしまう。

鈴『雷真!』

セシリア『雷真さん!』

雷真「大丈夫だ、気にするな! 今は目の前の敵に集中しろっ!!」

しかし、フェイズシフトP S 装甲に感謝だ。今のインパルスの特攻による壁の激突はパイロットへ、かなりの衝撃を与えていても可笑しくない。

雷真「まさかの無人機からの声と、いきなりの特攻に反応が遅れたが、次はそうは行かねえぞ!」

インパルスのメインカメラを狙って、ゼロ距離でピクウスは放ち、インパルスのヘッド装甲に何発か命中すると、インパルス自ら一度距離を取った所にインパルスの胴体部に蹴りを決める。すると、インパルスが体勢を崩す。

雷真「よし！」

いくら<sup>ヴァリブルフェイズシフト</sup>V P S 装甲があるといえど、バッテリーの問題がある。けれど、フリーダムにはその心配がない。故に持久戦に持ち込めば此方が有利になるが、刀奈や簪、シャルロットたちや他の専用機持ちが心配なので速攻で決めることにした。

雷真「そこっ！」

蹴られて体勢を崩した所へ、ラケルタビームサーベルを上段から振り下ろすもインパルスが脚部のスラストを噴かしたため、ラケルタビームサーベルは空を切り、ビーム刃は地面へと叩き付けられ、フローリングが融解する。

雷真「あとで、織斑先生に謝らないと………なっ！」

雷真「ハアアアアツ!!」

雷真「セラアアアツ!!」

雷真「ダアアアアツ!!」

教室の狭い空間の中、互いにこの場では取り回しが悪いビームライフルは後ろ腰にマウントし、ビームサーベルで何度も斬り合いをする。その際、何十個もの机や椅子をビーム刃で両断したり融解させたりしてしまい、教室の中は荒れ放題である。

雷真「……………」

インパルス「……………」

インパルスの次の出方を見るために、少し距離を取り睨み合う。すると、俺の視界に斜め上から勢いよく吹き飛ばされてきたラウラの姿が入った。

雷真「ラウラ!？」

インパルス「!!」

雷真「チッ!」

ほんの僅かの瞬間、ラウラに気を取られるとその隙を見逃さずにインパルスがスラスターを噴かし、距離を詰めてくる。そんな、インパルスに舌打ちながらラケルタビームサーベルをブラインドとして投擲し、狭い教室の中でイグニッション・ブースト瞬時加速を行いながらパススロット拡張領域からラビッド・スイッチ高速切替でシユベルトゲールを取り出し、スラスターを噴かし、上段から振り下ろす。

雷真「セアアアアッ!!」

するとインパルスは、投擲したラケルタビームサーベルをヴァジユラビームサーベルで弾き、次にシユベルトゲールを機動防盾で防ごうとするがイグニッション・ブースト瞬時加速で勢いを乗せた上段斬りに機動防盾が耐えきれずに機動防盾ごとインパルスの身体を二つに両断したと思った時、インパルスが右へイグニッション・ブースト瞬時加速で緊急離脱し、損害を機動防盾と左腕だけに絞った。

雷真「クソツ、逃した!!」

左腕だけに損害を絞ったインパルスは、そのまま入ってきた窓から外へと逃げる。

雷真「逃がすかよ!!」

逃げるインパルスを追いかけるとインパルスは此方を振り返り、チェストフライヤーとレッグフライヤー、コアスプレンダーに分離し、フォースシルエツトが合体したままのチェストフライヤーを此方

に向けて突撃させてくる。

雷真「これは、あの時の………!?!」

インパルスが次にやろうとしていることが分かったので此方に向かってくるチエストフライヤーに、ラミネートシールドを構えながらピクウスで撃ち落とそうと試みるが、コアスプレNDERも<sup>コズミック・イラ</sup>でフリーダムを撃墜した時と同じように20mm機関砲を放つ。それにより、チエストフライヤーがラミネートシールドに接触する少し前で爆発し、その爆風に体勢を崩してしまう。

雷真「ぐああああ!!」

直ぐに体勢を建て直すと、いつの間にかコアスプレNDERが<sup>バスターレット</sup>拡張領域に入れていたのか分からないが予備のチエストフライヤーとブラストシルエツトを取り出し、レッグフライヤーと合体して、ブラストインパルスになっていた。

ブラストインパルスに合体すると、インパルスは主力武装のケロベロス二門を此方に向けて撃ってくる。なので此方もバラエーナプラズマ収束ビーム砲二門を撃ち、相殺させる。

雷真「ハアアアアツ!!」

すると、ビームとビームが干渉した際に衝撃波が生まれ、それにより校舎の防弾ガラスが一部、破碎音と共に碎け、または輝が入る。

雷真「罅が開かない。ここは、捨て身で行くしかないか!」

雷真「ウオオオオオオツ!!」

これ以上、ブラストインパルスと射撃戦を続けていると学園への被害が大きくなる一方なので捨て身に出ることにした。その捨て身は、

ラミネートシールドを盾にしながら突撃するだけのシンプルなものである。

その行動にブラストインパルスはケロベロスで迎撃しようとするがラミネートシールドに阻まれる。しかし、此方もケロベロスの威力で突撃する勢いが弱るが、そこは二段階ダブル・イグニッション・ブースト瞬時加速でラミネートシールドをコアスプレnderがある腹部へ押し込み、ラミネートシールド越しに右下からシュベルトゲベルを斜めに切り上げる。

すると、上手くシュベルトゲベルとコアスプレnderの部分に斬撃が入り、腹部の部分からスパークし始めたので、距離を取り、目の前のインパルスの最期を見届ける。その際、インパルスから断末魔が聞こえた。

インパルス「オレ…………ハ…………アンタ…………ヲ…………」  
雷真「…………」

その断末魔から、当時のキラと和解する前のシンは、そこまでフリーダムという機体に強烈な恨みを持っていたのかと、初めて思い知った。

そんなことを考えていると織斑先生から通信が入った。

千冬『黒牙、聞こえるか？』

雷真「はい。聞こえます」

千冬『教師陣の準備ができた。これより援護に向かわせる』

雷真「了解！此方は平気なので他の専用機持ちの援護に向かわせてください。それと、決して攻撃には当たると、伝えてください」

千冬『心得た』

織斑先生との通信を終えると斜めに切断されたラミネートシールドとシュベルトゲベルを拡張領域バスターロケットに収納して、フリーダムのスラスタを噴かして飛行高度を上げ、上空から狙える距離にいる他五機のインパルスの武装を一機ずつハイマツト・フルバーストで破壊を試み



る。しかし、高速移動しているため、距離の演算が難しい。

雷真「まずは、シャルロットとラウラから」

雷真「ターゲット………ロック。いけるか？」

雷真「シャルロット、ラウラ、聞こえるか！」

シャル『聞こえるよ』

ラウラ『此方もだ』

雷真「一瞬でいい！ インパルスの動きを止めてくれ」

『了解！』

通信を終えるとシャルロットが使用ロックを解除したと思われる、ラファール・テイラーをラウラに投げ渡し、円状制御飛翔気味にインパルスを囲みシューター・フローを仕掛ける。そして、その時が来た。

シャル『雷真！』

ラウラ『今だ！』

雷真「いつけえええツ!!」

シャルロットとラウラの円状制御飛翔気味のシューター・フローによって僅かにインパルスにできた隙を逃さずにハイマット・フルバーストで、インパルスの頭部、両肩、両足の破壊に成功する。

雷真「今だ！逃がすな！」

シャル『分かってる！』

ラウラ『分かってる！』

胴体部だけになってインパルスが拡張領域から予備のチェストフライヤーとレッグフライヤーを取り出す前にシャルロットとラウラにインパルスにラファール・テイラーで撃破させる。

しかし、撃破する少し前に離れた所からシャルロットとラウラに高

速で接近する他のインパルスが居た。また、接近するインパルスに装備されている背部の武装が、色や武装に少し違いはあるが、とある機体に似た背部武装が装備されていた。

雷真「あれは……まさか！ デステイニーシルエット!？」

雷真「シャルロット、ラウラ！ 逃げろおおお!!」

二人に向けて叫ぶが、二人に届く前にデステイニーインパルスの方が速かったため、デステイニーインパルスはチェストフライヤーをラウラに向けて射出、レッグフライヤーとコアスプレNDERになる、コアスプレNDERはチェストフライヤーに20m機関砲を連射した。すると、ラウラにチェストフライヤーが接触したと同時にチェストフライヤーが大爆発。

ラウラ『!?!』

いきなりのことにラウラも反応ができなかったのか、はたまた、デステイニーシルエットの「光の翼」が速かったのか分からないが大爆発がラウラを襲う。ラウラはそのまま地面へと落下していく。

ラウラ『ぐああああ!!』

シャル『ラウラ!』

雷真「ダメだ！ シャルロット!!」

シャル『え?』

シャルロットが落下していくラウラを助けようと動いた時には既に、もう一機のコアスプレNDERがシャルロットに突撃。そして、コアスプレNDERとシャルロットの距離がゼロになると自爆。

シャル『きゃああああ!!』

雷真「シャルロット!!」

シャルロットに突撃していたコアスプレnderが自爆したのが合図になったのか、他の専用機持ちの悲鳴もオープンチャネルで聞こえてきた。

刀奈『きやあああああ!!』

箒『うわああああ!!』

簪『きやああああ!!』

虚『きやああああ!!』

一夏『ぐああああ!!』

セシリア『きやああああ!!』

鈴『きやああああ!!』

雷真「みんな!?!」

どうやら、他の専用機持ちもインパルスの特攻自爆を受けたようでオープンチャネルで悲鳴が届く。そして、専用機持ちの悲鳴が聞こえたあと、直ぐにオープンチャネルで教師陣に専用機持ちの救援に行くよう指示をだす。

雷真「教師陣は専用機持ちの救援を最優先に動いてください。さっきの自爆で、インパルスの反応は全てロストしたとはいえ。まだ、何があるかわかりません。警戒を怠らないように」

『『『了解!』』』』

教師陣に指示を出したあとは、シャルロットとラウラの救援に向かうとすると、何かに反応するような不思議な感覚に襲われ、本能のままに高速切替で拡張領域からストライクの対ビームシールドを取り出して構えると緑のビームが対ビームシールドに弾かれた。

雷真「!!」ピキイイリリ

雷真「ビーム!? どこから?!」

辺りを警戒していると上空から降下してくる熱源反応があった。  
しかし、その反応に今までで一番驚かされた。

雷真「ZGMF—X666S……レジェンドだ?!」

## 第61話

インパルスたちの特攻自爆により、俺以外の専用機持ちがかなりの被害を受け、教師陣に救援指示を出したあと、  
“セカンドSEED”とは違う、何かに反応するかのような不思議な感覚に襲われた俺は、本能的に拡張領域バスのロットから高速切替ラビッド・スイッチでストライクの対ビームシールドを構えると上空から放たれたとおぼしき緑のビームが対ビームシールドに弾かれる。

そして、緑のビームを弾いたのと同時に上空から、ある熱源が降下して来た。その熱源は、フリーダムのデータベースに識別データがあった。しかし、その識別データは過去の大戦で撃破された機体の物だった。

雷真「ZGMF-X666S……レジェンドだ?!」

雷真「バカな!? レジェンドは過去の大戦でメサイヤと共に破壊されたはずだ!」

雷真「まさか……インパルスと同じ、この世界で作り上げたのか!?!」

一番あつて欲しくないことが目の前に存在していることに俺は驚きを隠せないのと共に即座にフリーダムのスラスタを噴かして学園から追い出すように動く。

しかし、レジェンドも俺が動いたのと同様に背部ユニットに装備されている10機のドラグーンを飛ばしてくる。

くBGM：撃沈ドミニオンく

雷真「チツ!」

レジェンド本体から射出され、四方八方から襲いかかってくるドラグーンのビーム網を掻い潜るようにレジェンドへと接近しながらルプスビームライフルでレジェンドを狙い撃つ。

また、そこで気付いたことがあった。このレジェンドの武器には、一つだけレジェンドの物ではない物があつた。それは、レジェンドが左腕に持っていたシールドだ。そのシールドには見覚えがあつた。

雷真「あれは……確か、プロヴィデンスの複合兵装防盾。でも何故、レジェンドがプロヴィデンスの装備を……?」

???「流石だな。この武装がレジェンドの物でないと一目で気付くとは」

雷真「!!」

俺の声に答えるかのようにレジェンドが応答し、複合兵装防盾を見せびらかしてくる。他にも、このレジェンドは無人機ではなく。有人機であり。そして、なによりレジェンドのパイロットの声には、聞き覚えがある。

雷真「その声は……そんなバカな。だって、お前はあの時……ジエネシスに……」

???「撃たれて死んだはず……そう言いたいのかね?フハハハハッ!!」

???「そんな、あり得るはずのないことを君は既に目にしているではないか、クロキバ・ライシンくん」

雷真「!!」

雷真「まさか……お前も!」

???「ご名答。しかし、私は彼らよりも前の過去に飛ばされたがな。約5年も前の、この世界にっ!!」

雷真「5年前だと?」

確かに、奴の言葉が本当で、5年も前に飛ばされているのであれば、今日までの月日でM<sup>モビルスーツ</sup>Sを製造できるだろう。しかし、それではセカンドステージのM<sup>モビルスーツ</sup>Sについて説明がつかない。

???「君は今、それが本当だとしてもセカンドステージのザフト製M<sup>モビルスーツ</sup>Sについて説明がつかないと思っっているだろう」

雷真「!?!」

???「答えは簡単だよ、ライシンくん。過去の大戦、メサイヤ攻防戦にて、戦死認定されたパイロットがこの世界では生きているのだよ。私や彼らのようにね」

雷真「嘘……………だろう?」

???「そうだな……………名前を上げるとしたら、彼の名前を上げるとしよう。君もよく知っているはずだよ」

???「ブルーコスモスの名手。ムルタ・アズラエル。彼も生きているのだよ。この世界に!」

雷真「奴までこの世界に生きているだ?!」

???「彼もM<sup>モビルスーツ</sup>Sを製造している。それがどういう意味か、君には容易に想像がつかだろうか? この世界で『<sup>コスミック・イェラ</sup>あちら側』の巻き直しだよ」

雷真「そんな……………そんなことさせるかよっ!!」

ドラグーンのビーム網を回避しているとレジェンドとの距離が開くがレジェンドに向けて、ルプスビームライフルとバラエーナプラズマ収束ビーム砲二門を撃つ。けれどレジェンドが持つ、複合兵装防盾に備え付けられていたビームシールドに阻まれる。

雷真「プロヴィデンスの時と違って、ビームシールドも付いてるのかよ!?!」

???「どうした? その機体……………フリーダムに、乗っていないながらこの程度かね?」

雷真「クソッ!」

やはり、動力源が核だけのフリーダムと違い、核とデュートリオンシステムとのハイブリッドであるハイパーデュートリオンエンジンを搭載しているレジエンドの方が高性能のため、押され始める。

??? 「君も彼と同じ、スーパーコーディネイターだろうにっ!!」

雷真 「俺がスパイコーディネイター………?」

??? 「そうだ。君は彼と………キラ・ヤマトとひどく似ているのだよ。だから、君も憎くて仕方がない!」

雷真 「そんなの、単なる八つ当たりじゃねえか!?!」

??? 「そうだとも。私は君たちのような出来るといっただけで存在のために作られ、そして、捨てられた」

??? 「ならば、この憎悪をその根源たるスーパーコーディネイターとして誕生した君や彼にぶつけて何が悪い!」

雷真 「そんなことのために、そんなことのためだけにお前はあの時、戦意を失った人たちと共に救命船に乗っていた彼女を………フレイを殺したのか!?!」

??? 「そうさ。私は、スーパーコーディネイターという存在が憎い。だから、私はスーパーコーディネイターであるキラ・ヤマトくんから「絶望」という名のプレゼントをしたのだよ」

雷真 「ラウル・クルウウゼツ!!」

あの時、キラは苦しんで、泣いていたんだ。『僕が彼女を救えていれば』と『僕は彼女に何も返せてないのに』と………キラや、ミリアリア義姉さん、サイにあんな辛い思いをさせたラウル・クルーゼに対して怒りと殺意だけが俺の頭を支配した。

それと同時にルプスビームライフルと対ビームシールドを拡張領域に収納して、代わりにミーティアを出し高速切替でドッキングし、エリナケウス対艦ミサイルをクルーゼに放つ。

雷真 「お前は………お前だけは!!」

雷真 「絶対にゆるさねええええ!!」



クルーゼ「ハッ！」

しかし、クルーゼは嘲笑うかのようにレジェンドのドラグーンでエリナケウス対艦ミサイルをことごとく迎撃していく。



《side 刀奈》

雷真『ラウル・クルウウウゼ!!!』

雷真『お前は…………お前だけは!!』

雷真『絶対にゆるさねええええ!!』

クルーゼ『ハッ!』

刀奈「雷真…………貴方…………」

私は、生まれて初めて彼が…………雷真が声を上げながら激昂する姿を見た。今、雷真が戦っている相手に怒りを覚えるのは私にも理解できる。

できることならば、私も彼と共に奴を倒したい気持ちが溢れてくる。けれど、先ほどの戦闘でインパルスの自爆により専用機持ちの全てがかなりやられてしまっている。無論、私の霧纏ミステリアス・レイディの淑女も例外なくやられているため、あの戦闘に介入できるほどの動きはできない。仮にできたとしても、あのレベルの戦闘に介入して生きていられるかと問われれば、答えは否である。

簪「お姉ちゃん!」

刀奈「……簪ちゃん」

簪「あの機体……それにさっきの雷真が叫んだ名前って……」  
刀奈「ええ、間違いないわ。それに全てオープンチャンネルで聞こえていたでしょう？」

簪「……うん。でも、あんなに怒ってる雷真は初めて見るよ」

刀奈「それは私も同じよ」

ラウル・クルーゼ。クラス代表の時の襲撃事件後に機密区画で雷真が経験した異世界での四年間の話に出てきたザフトの隊長。彼は、スーパーコディネイター、キラ・ヤマトという存在を作るための資金を稼ぐためにクローンとして産み出された。

そんな彼がキラさんに憎悪を抱くのは仕方ないのかもしれない。けれど、雷真がスーパーコディネイター？ なら、雷真も作られた存在？

私は、今さらになって幼馴染で婚約者である雷真の過去を知らないのだと理解した。雷真とは物心が付く前から同じ家に住んでいた。当時、私と簪ちゃん、両親は名字が“更識”なのに、なぜ彼だけ“黒牙”なのかお父さんに聞いたことがある。

その時のお父さんは、深い悲しみを瞳に映しながら「彼のご両親は彼を捨てて何処かに行ってしまった」と聞かされた。その言葉が本当かどうか私には分からない。けれど、深く聞く必要ができた。雷真の出生について。

雷真『ぐっ！』

刀奈「雷真！」

簪「雷真！」

レジェンドのビット兵器によるビーム網を掻い潜るも流石に数が多いため雷真が乗るフリーダムの追加パッケージと思われるユニットが被弾し始める。

一夏「会長！簪！」

刀奈「一夏くん。それにみんなも」

セシリア「何です、あの機体は………？」

シャル「それに雷真があそこまで怒るなんて………」

刀奈「あの機体はZGMF-X666Sレジェンド。雷真が経験した二度の大戦で消滅したはずの最強の機体の一体。それに加えて、そのパイロットは同じく二度の大戦で死んだはずの人間よ」

箒「死んだはずの人間と消滅した最強の機体が何故、雷真と今戦っているのだ!?!」

簪「非現実的ではあるけど、可能性としては………」

ラウラ「偶然的に、死ぬ間際に雷真のように何かの形でこちら側の世界に飛ばされてきた。そういうことか、簪」

簪「うん」

鈴「それにしても、何なのアイツとアイツが乗ってる機体は!?!」

イブニッションブースト  
瞬時 加速を使つてないのにハイパーセンサーが捉えるので精一杯の機体なんて、無茶苦茶よ!?!」

シャル「それだけじゃないよ。雷真のあの精密な射撃をいとも容易く回避したり防いだりしてる。それに、雷真に攻撃を当てるなんて………」

ラウラ「機体だけでなく、パイロットも強い………!」

刀奈「雷真………お願い。無茶だけはしないで」

私は、モビルスーツMSという存在に出会ってから何度目か分からない無力感を感じながら、最愛の人の無事を祈ることしかできなかつた。



《side 雷真》

フリーダムとミーティアをドッキングさせ、戦力増強しながらレジェンドに挑むがやはり、性能の差なのか思うように攻撃が当たらず、代わりに右側のウェポンアームをレジェンドの高エネルギービームライフルに狙撃されてしまう。

雷真「ぐっ！」

雷真「このっ……………!!」

周囲を飛び回るドラグーンをビームソードで風ぎ払うもクルーゼの操作が上手いのかビームソードが空を切る。

雷真「クソッ！」

クルーゼ「ぬるい！ぬるすぎる！あの時、プロヴィデンスの攻撃を凌ぎ切った少年がこの程度とは!!」

雷真「五月蠅い！」

あの時は、奇跡的にM1アストレイでプロヴィデンスのドラグーンを凌ぎ切ることが出来たが今はどうだ？フリーダム本体にはまだ当たってはいないがミーティアには当てられている。

雷真「ぐううっ!!」

雷真「クソッ！性能的にやっぱりレジェンドが上か！でも、ここでアイツを止めないときつと、コスミック・イラ“あちら側”と同じようにこの世界を壊そうとするはず!!」

雷真「(ならば、ここで息の根を止めてでも止めないと!!)」

クルーゼ「こんな状況で考え事をするなど、随分と余裕だな！」

雷真「しまっ……………!!」

戦闘中とはいえ、クルーゼについて考えている一瞬の隙にドラグーンによってクルーゼの間合いに誘導されてしまい、レジエンドの複合兵装防盾の大型ビームサーベルに、最後のウエポンアームを半ばから切り裂かれてしまい、直ぐにウエポンアームを手放してその場から離脱する。

雷真「クルーゼ！ お前の目的は俺だけなのか!?!」

クルーゼ「君だけではない。この世界は『あちら側』コスミック、イラと同様に腐敗している。篠ノ乃束が製作した『インフィニット・ストラトス』によってなっ!!」

雷真「なに!?!」

クルーゼ「君たちは知らないだろうが、世界では常日頃から非人道的なことが行われているのだよ」

クルーゼはそう言いながら、高エネルギービームと複合兵装防盾に内臓されている二門のビーム砲を撃ってくる。それを回避しながら、ミーティア本体に備え付けられているエネルギー収束火線砲二門とバラエーナプラズマ収束ビーム砲二門、クスイフィアスレール砲二門をフルバーストする。

雷真「どういうことだ!?!」

クルーゼ「本当に、知らないのかね？ この世界は、当たり前のように女尊男卑が蔓延している。それによって私たち男の扱いはどうだ?」

雷真「……………」

クルーゼ「道具のように扱われ、差別され。その果てには、己が欲求のために殺される」

雷真「……………」

クルーゼ「理解できるかね？ 生まれてくる我が子が『男』だと分かかった途端にその子供を殺す輩がいる。そして、何よりそんな輩が増えたのは『インフィニット・ストラトス』の存在が明らかになってか

らだ!!」

クルーゼ「これを非人道的と言わずして何と言うツ!!」

雷真「くっ……………」

クルーゼは怒鳴りながらも射撃精度は落とさないうため、ミーティアのエネルギー収束火炎砲二門がドラグーンのビームによって破壊されてしまった。

クルーゼ「そんな輩が存在するから我々はこの世界を壊す!! 私のよくな『出来る』というだけで作られた命の火が短いクローンや非人道的によって産み出され、殺されていく子供たちをこれ以上増やさないためにツ!!」

雷真「ぐああああ!!」

クローン「その手始めに、このIS学園を破壊する!!」

理解してしまった。クルーゼの考えも、ある種一つの正義なのだろう。確かに、篠ノ乃東が作った『インフィニット・ストラトス』によって世界に一変した。それによる男性への被害はかなりの物である。

それでも、俺はこの学園で培った思い出を壊されたくない。だから……………!!

雷真「それでも、守りたい場所が俺にはある!!」 キュパーン

雷真「ウオオオオツ!!」

両腰からラケルタビームサーベルを二本とも引き抜き、二刀流でレジエンドのビームを弾きながら、バラエーナプラスマ収束ビーム砲二門とクスイフィアスレーン砲二門、それにミーティアに残っているエリナケウス対艦ミサイルを撃ちまくる。

けれど、それをいとも容易くクルーゼが駆るレジエンドは回避または迎撃していき、そして、レジエンドの瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速による急加速に反

応が出来ずミーティアの右側エンジン部を大型ビームサーベルで深々と切り裂かれてしまう。

エンジン部がやられてしまったので爆発に巻き込まれる前にミーティアをパージして、拡張領域パススロットからルプスビームライフルとストライクの対ビームシールドを取り出し、レジエンドに突撃する。

## 第62話 機体設定有り

クルーゼ「ふんっ！」

雷真「ハアアアッ!!」

レジェンドの高エネルギービームライフルでミーティアが撃たれ、爆発に巻き込まれる前にパージしてルプスビームライフルでレジェンドに突撃するが、ドラグーンを回避しながらだと思おうように攻められない。

雷真「チイツ……………!!」

クルーゼが操るドラグーンをよく観察しながら回避をする。すると、少しずつだがドラグーンの行動パターンが読めてきた。

雷真「そこっ！」

クルーゼ「!!」

ドラグーンの行動パターンを先読みして、ルプスビームライフルを放ち、ドラグーンに命中させる。

クルーゼ「ならばっ！」

雷真「ぐっ!?!」

ドラグーンにルプスビームライフルが命中したことにより、クルーゼが操るドラグーンの行動パターンが変わった。それを掻い潜り、対ビームシールドでビームを弾き、レジェンドに突撃すると見せかけて急速反転し、逆さまの状態でハイマツト・フルバーストを放ち五機のドラグーンを同時に破壊する。

雷真「残り四機！」



クルーゼ「ほー？ ならば、これはどうかな！」

クルーゼは、どうやら五機のドラグーンが破壊されたことに歓喜したのか残り五機のうち三機のドラグーンでビームを此方に撃つてくる。

雷真「この数なら！」

クルーゼ「甘い！」

雷真「ビームスパイク!？」

ビームを放ってくるドラグーン三機を簡単に躲わしていると、誘導されたように残りの二機のドラグーンによるビームスパイクが襲いかかってくる。

雷真「当たれ！」

クルーゼ「フツ……………」

ビームスパイクを形成した二機のドラグーンにむかってバラエーナプラズマ収束ビーム砲を放つもビーム砲が当たる前にクルーゼがドラグーンを操作して回避される。

雷真「おかしい。何故、ドラグーンだけでクルーゼ自体は攻めて来ない？ ドラグーンがやられても、驚きはするが動揺ではなく。関心したような声を漏らしていた」

雷真「(何故……………?)」

クルーゼの言動に疑問を持ちながらも、クルーゼが操るドラグーンから放たれるビームを回避、もしくは対ビームシールドで弾き、ルプスビームライフルで奴が駆るレジェンドを攻める。けれど、奴も元とはいえザフトの隊長。そう易々と墜ちてはくれない。

やがて、残り二つのドラグーンの破壊に成功すると、奴が笑い出し

た。

クルーゼ「クックククク！」

クルーゼ「アーハツハツハツハツハ！」

雷真「何がおかしい！」

クルーゼ「扉が開こうとしている。ようやく、新たな扉がな！」

雷真「扉だと？」

クルーゼ「さあ、開こう。この世界を、終わらせるための始まりの扉を」

クルーゼが高らかに話を終わると、レジエンドが今までに見たことがない。色々な負を凝縮したような禍々しい赤と黒の閃光を放ち始める。

その閃光を見た途端、本能的に閃光が危険なものだと判断しフリーダムの全射撃武装でハイマツト・フルバーストを放つが赤黒い閃光に阻まれてしまう。

雷真「なっ……………!?!」

やがて、赤黒い閃光が止むとそこにはレジエンドと違う機体。かつてのクルーゼの専用機、プロヴィデンスに酷似した機体が存在していた。

く BGM：終末の暗示く

雷真「あれは、プロヴィデンス……………?」

クルーゼ「アーツハハハハ!!」

クルーゼ「これが、私の新たな機体か。やはり、私にはレジエンド

よりもプロヴィデンスが相応しいということなのだな」

クルーゼ「では、その性能。篤と見せてもらおうとしよう、デイザスタープロヴィデンス!!」

雷真「チッ!」

クルーゼの新たな機体。デイザスタープロヴィデンスの10機を越えるドラグーンがデイザスタープロヴィデンスから射出され、襲い掛かってくる。

このドラグーンはプロヴィデンスやレジェンドのとは違い、デイザスタープロヴィデンスのドラグーンにはビーム砲の数が全て9門も搭載されているようで、加えて、明らかにレジェンドの時よりもドラグーンの飛行速度と操作速度が速い。

ドラグーンのビーム砲を全力で回避するが数が多いため、次第に回避だけでは間に合わなくなり対ビームシールドで防ぐ。しかし、ビーム威力も向上しているようでファーストステージ<sup>モビルスーツ</sup>M<sub>S</sub>である、ストライクの対ビームコーティングされていると対ビームシールドといえど、ビームによる熱に排熱が追い付かずに次第に融解し始める。

雷真「クソツ、シールドが!?!」

クルーゼ「フツハハハハ!」

雷真「こうなったら、一か八かだ!」

あまり得策ではないがこんな数のドラグーンを操りながら自機が回避するのは至難の業だ。ならば、ここままドラグーンと共にクルーゼに突撃すれば、ドラグーンのビーム砲が奴に命中する可能性も出てくる。

雷真「行くぞ!」

雷真「ハアアアアッ!!」

クルーゼ「なるほど、そういう考えか。しかし、甘いな」

ドラグーンを背後に追尾させながらクルーゼに二段階ダブル・イグニッション・ブースト瞬時加速で突撃するが、奴にたどり着く前にクルーゼが目の前から消えた。

雷真「なに!？」

クルーゼ「こちらだよ」

雷真「上!？」

クルーゼ「隙だらけだな、ライシンくん」

雷真「ぐああああ!!」

クルーゼ「サービスだ!」

雷真「ぐあっ!？」

クルーゼが消えたことによりクルーゼを探していると、いつの間にか頭上を取られており、奴の位置が分かると同時に奴は、高エネルギービームライフルでフリーダムフリーダムの左翼スラスターを撃ち抜いた。それによる爆発で刀奈たちがいないアリーナの観客席へと落下するのに合わせて背中を蹴られ、更に速度を上げて落下した。

雷真「これが、奴の新しい機体の……………性能か……………」

クルーゼ「これが、デイズタープロヴィデンスの性能か!おや?

これは新たな能力なのかな? ならば、ちょうどいい。君に試すでしょう、ライシンくん」

雷真「く、くそ……………!」

ハイパーセンサーで背後にいるクルーゼの動きを見ながらフリーダムのダメージ状況を確認し、まだ動けるようなので動こうとすると、突如、奴の機体に先程とは少し違う、禍々しい黒いオーラがデイズタープロヴィデンスの両腕に纏わり付く。

雷真「な、なんだ……………あれは!」

クルーゼ「さあ、私からプレゼントだ。受け取りたまえッ!」

雷真「そんなのは要らない!くらえッ!」

クルーゼが仕掛けてくる前に高速切替<sup>ラビッド・スイッチ</sup>で拡張領域<sup>パススロット</sup>にあるシュベルトゲーベルと対ビームシールドを交換し、奴が仕掛けてくるのと同じ時にスラスターを噴かして振り向き、シュベルトゲーベルを投擲する。

すると、クルーゼが放った禍々しいオーラとシュベルトゲーベルが衝突し、やがて……………。

雷真「なっ……………石化した!?!」

クルーゼ「驚いたかね?これがディザスタープロヴィデンスの単一仕様能力である。ディザスター・ギアスだよ」

ディザスタープロヴィデンスから放たれた禍々しいオーラと衝突したシュベルトゲーベルがオーラに侵食されるように石化していき、その後、粉微塵となり消滅した。

雷真「あれは、ヤバイ! もしも、あれがSEを無視して機体の装甲や武装だけでなく、人体までも石化することが出来るのであれば……………非常に危険な単一仕様能力だ」

クルーゼ「休んでいる暇はないぞ」

雷真「こんちくしょうがああああ!!」

クルーゼの機体の単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>を分析していると浮遊しているドラグーンのうち、5機のドラグーンがビームスパイク展開しながら襲い掛かってくる。

それをフリーダムのスラスターを噴かし回避。それと同時に先程、収納した対ビームシールドを拡張領域<sup>パススロット</sup>から取り出し、構える。

クルーゼ「まだまだディザスタープロヴィデンスの力は、こんな物ではない!」

雷真「今度は、偏向射撃だ!?!」

今までのプロヴィデンスやレジエンドのドラグーンによる攻めでは、フレキシブル偏向射撃がなかったので無意識にクルーゼはフレキシブル偏向射撃が出来ない物と思っていたが、甘かった。奴は、腐ってもフラガー佐の父親のクローン。ならば、フラガー佐ができて奴に出来ない道理はない。

また、進化したディザスタープロヴィデンスによって、計28機のドラグーンによるフレキシブル偏向射撃にフリーダムフレキシブルの右側のヘッド装甲や左側のフロントアーマー、右足首が破壊され窮地に立たされる。

雷真「がつ……!!」

クルーゼ「さあ、苦しめーそして、苦痛の果てに消えるがいいツ!!」  
雷真「こんな所で……死んでたまるかああ!!」

フレキシブル偏向射撃を行いながら攻めてくるドラグーンを回避しながら、意識を集中させ“セカンドSEED”を発動させ、ルプスビームライフルでドラグーンを狙う。

クルーゼ「ほう？ 反応速度が増したか。よもや、まだそんな力が残っているとは……。やはり、君はあつてはならない存在だ」

雷真「こつ……のおおおツ!!」

ルプスビームライフルで、ドラグーンを狙うも数が多すぎるためルプスビームライフルがドラグーンのフリーダムの右腕部のマニピュレーターを狙撃、爆発する。それにより、俺の右腕が爆発に巻き込まれ激痛が走る。

雷真「ぐああああ!!」

クルーゼ「フツハハハハ！」

雷真「……こんな火傷くらい……拳が握れんなら……問題ねえ！」

激痛が走る右腕でフリーダムの左腰からラケルタビームサーベルを引き抜き、ドラグーンのビーム砲を弾く。

クルーゼ「……………」

クルーゼ「そろそろ、私にも時間が無くなるのでね。ここら辺で、引導を渡してあげよう」

雷真「まだまだーッ！」

クルーゼ「終わりだよ、ライシンくん」

刺し違えてでも、クルーゼを殺すために個別連続瞬時加速リボルポ：イグニッション・ブーストを行いなからドラグーンのビーム砲を縫うように回避し、ラケルタビームサーベルによる牙突を放つも、またもや目の前から消えたようにクルーゼに後退回避されてしまう。

雷真「躲わされた……………!?!」

クルーゼ「去らば、ライシンくん」

個別連続瞬時加速リボルポ：イグニッション・ブーストと牙突の合わせ技を回避されたことに動揺している、フリーダムの警告アラームが四方八方から鳴り響き、即座に回避行動に移る。

雷真「うおおおおっ!!」



一夏「爆発が……………」  
箒「止んだ……………」

第6アリーナの方で、絶えず鳴り響いていた爆発が突如、止んだ。それだけではない。風や海の音も止んだ。

その現象に私は、身体に言い表し辛い、嫌な感覚に襲われ身体を抱き締めると、どうやら私だけではなく。簪ちゃんやシャルロットちゃんも身体を抱き締めていた。

鈴「簪？大丈夫？」

ラウラ「シャルロットも大丈夫か？」

簪「う、うん……………」ソワソワ

シャル「だ、大丈夫……………」ソワソワ

刀奈「雷真……………」ソワソワ

この嫌な感覚の正体を考えているとセシリアちゃんが声をあげる。

セシリア「あれは……………」

鈴「うそ……………」

ラウラ「バカな……………」

一夏「何で……………」

箒「まさか……………」

刀奈「……………雷真？」

簪「そんな……………」

シャル「嫌だよ……………」

私たちが目にしたのは、ISが展開されておらず、生身でクルーゼという男に頭を鷲掴みされて、だらりとした両手足、至る箇所が火傷や出血。完全に満身創痍の状況で譫言を口に行っている雷真の姿だった。



雷真「俺、が……………守る、んだ……………みんなを……………」

クルーゼ「ほう。まだしゃべる力が残っているのか、やはりキミも厄介な存……………いや、ただの謔言だったようだ」

全員で、あの雷真がボロボロにされたことに唾然としているとクルーゼは、此方にゆつくりと移動し。そして、空中で雷真の頭を離し、学園から興味がなくなつたと言わんばかりに悠々と去っていった。

しかし、雷真を離れた高さは、地上から30mはある。そんな高さからISも展開してない、生身の身体で地面に落下したら。今の雷真では確実に死ぬ。

刀奈「雷真!!」

直ぐに、ボロボロの霧纏ミステリアス・レイディの淑女を緊急展開して、雷真が地面に激突する前に抱き止める。

刀奈「雷真!雷真!　ねえ、雷真!お願い、返事をして!」ポロポ

ロ

雷真「……………」グツタリ

簪「お姉ちゃん、雷真!」

シャル「刀奈、雷真!」

刀奈「二人とも、雷真が!　雷真があ……………!」ポロポロ

千冬『更識!　泣くのはあとだ!直ぐにここから離脱し、医療施設に黒牙を運べ!』

雷真が満身創痍までやられたことに取り乱していると、オープンチャンネルで織斑先生から雷真を医療施設に運ぶよう指示がかかる。それを聞いた、私たち三人は現状で出せる最高速度で学園内にある医療施設へと急いだ。

## 第63話

ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………

シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………

雷真「……………」

刀奈「……………雷真」

学園が襲撃を受けてから5日が経過した。クルーゼとの戦闘でロボロにやられてしまった雷真を急ぎ、医療施設に運び、医師に託すと緊急手術が行われた。医師が言うにはかなり危険な状況だったらしく、生きているのが奇跡だと言っていた。なんでも、内臓が高熱でズタズタにされていて出血量も多く、骨も骨折や輝が入っていたり、特に右腕の火傷が酷いようで本当に満身創痍な状況だったようだ。

それでも、医師の力と治療用ナノマシンの投与で何とか命の危機から脱したとか。今は医務室のベッドで心電図計と人工呼吸器に繋がっていて意識が戻らない。また、フリーダムのだメージ状況だが、D判定が下り、今は、学園ではなく、虚が呼んだシノブたちがインパルスの残骸と共に受け取り修理することのこと。

他には学園の被害状況。アリーナが3つ半壊、校舎は教室が一つと教室側の防弾ガラスを総取っ替えで、学園は3日間休校となった。

ガラガラガラ!

簪「お姉ちゃん、交代だよ」

刀奈「ええ……………」

鈴「刀奈、雷真が心配なのは分かる。けれど、アンタも休まないと、何かあった時に今の雷真を守れないわよ?」

刀奈「……………分かったわ」

鈴「セシリア、刀奈をお願い」

セシリア「分かっていますわ」

雷真が命の危機から脱したあと、医務室で私、簪ちゃん、シャルロットちゃんが1日交代で雷真の容態を見ている。私たちのISも酷くやられてしまっているため、自分で直せる所は自分で修理し、ダメなら本国に修理を依頼して急ピッチで、専用機の修理を行っている。

私たちができるのは、自分の機体を修理するか、あるいは雷真のフリーダムに残っていたクルーゼの新たな機体、ディザスタープロヴィデンスの対策を練るくらいしかやることがない。

セシリア「刀奈さん、その……………」

刀奈「大丈夫よ。ありがとう、セシリアちゃん」

セシリア「……………」

セシリアちゃんが寮のエントランスまで送ってくれたことにお礼を述べてから、私は雷真の部屋に入り。身体をベッドへと放り投げる。それによって、ギシツギシリツとベッドのスプリングが軋む音が耳に届くのと雷真の香りが鼻を通る。

刀奈「……………」

刀奈「雷真が負けた」

今でも、雷真がボロボロに負けたのが信じられない自分が何処かにいる。雷真は、異世界での四年間の生活で、この世界で世界最強ともいえるほどのIS操作技術を習得し、加えて雷真の機体である「ZGMF-X10A フリーダム」という核エンジンを動力源にした最強の機体。この二つが揃えば敵う相手などいない、雷真がいれば学園は安全だと、そう思っていた。

しかし、現実はそのような理想を簡単に壊した。なら、私が今できるこ

とは？

刀奈「私が、今できること……………」  
刀奈「……………」

そんなことを考えながら、あの日、雷真がやられた日の夜に虚から受け取った、首に下げている雷真からの水色のお守りを強く握る。



《sideシャルロット》

シャル「……………」ボー

ラウラ「シャルロット、手が止まっているが大丈夫か？」

シャル「え？あ、あー、うん大丈夫だよ、ラウラ」

僕は、いつの間にかボーとしていたようでお昼のサンドイッチを慌てて口にする。けれど、あまり美味しくない。こうなったのは、雷真がクルーゼにやられてからだ。

ラウラ「……………」

ラウラ「雷真が心配なのは分かる。しかし、今は簪が奴の容態を見ている。我々ができることは、早く自分の専用機の修理を済ませ、次の襲撃に備えることだ」

シャル「……………」

ラウラ「雷真のためにも、今はやることをすべきだ」

シャル「……………うん」

僕にできること、なんだろう。やれるとしたら、ラウラが言ったようにリヴァイヴの修理。他には敵の戦闘データを……これだ！  
そうと決めると、僕はサンドイッチをよく噛みながら、胃に入れていく。食べ終わると、お皿とトレーを返却口に返してから職員室にいる山田先生の所へ向かいながら虚さんから受け取った雷真からの黄色いお守りのブレスレットを撫でる。



《side簪》

簪「鈴、さっきはありがとう」

鈴「いいわよ、別に。私も、一夏がこうなったら、同じようにしてたはずだから」

簪「それでもだよ。お姉ちゃん、雷真がやられて凄く取り乱したもん。私やシャルロットも取り乱したけど、お姉ちゃんのは私たちの比じゃなかった」

鈴「そうね。あれは……」

雷真がやられた日に、雷真が緊急手術をすると聞いたお姉ちゃんは、臨海学校の時のような顔に変わった。私たちも酷い顔だったと思う。

無事に手術が終わるとお姉ちゃんは、雷真の側に居るといって織斑先生の話も聞こうとしなかった。

簪「早く、起きてよ雷真。お姉ちゃんがずっと泣いてるよ。私やシャルロットも返事がない会話は辛いよ……………」

私は、涙声になりながら虚から受け取った雷真からの白いお守りの首飾りを握り締める。

鈴「…………簪」



《sideシノブ》

シノブ「インパルスの解析はあとだ！今は、若様のフリーダムを最優先に修理しろ！」

「「御意！」」

アキト「兄さん、俺はミーティアの修理に専念するよ」

シノブ「分かった。私の方は、フリーダムのメインコンピューターから戦闘データを抽出する」

虚ちゃんの連絡で若様が倒れたと聞いた時は、肝を冷やした。直ぐに、アストレイ隊とアキト共にIS学園に向かい到着すると、そこには激しい戦闘のあとが広がっていた。

そんな光景を見たあと、虚ちゃんに先導してもらいながら学園の医療施設に向かうと泣きじやくる刀奈お嬢様と、それを宥める簪お嬢様とシャルロットお嬢様の姿があった。

簪お嬢様とシャルロットお嬢様のお二人に話を聞くと、学園への襲

撃犯と若様が戦闘を行い、それにより重症を負ったとのこと。

「シノブ」……………若様」

その後は、我々にできることをするために、今回の襲撃に現れた【ZGMF-X56S インパルス】というMモビルスーツSISとミーティアの残骸を回収。また、勝手ながら若様のフリーダムも修理のため拝借した。

拝借した当初、フリーダムを機密ドッグで展開させて、修理に取り掛かろうと思っていた以上に酷い有り様だった。まず、ヘッド装甲の左側半分がなく、右腕部もマニピュレーターから肘までがない。他には肩部のアーモ어도両肩側とも破損、腹部と数ヶ所に渡って穴が空いている。腰部はフロントアーモ어도両側とも破損、脚部は、右側は足首から先がなく、左側は脛から先がない程に破損している。

武装に関しては、バラエーナプラズマ収束ビーム砲は、ビーム砲を収納できるウイングスラスターごとやられていた。クスイファイアスレール砲は、半ばから完全に破壊されていて、ラケルタビームサーベルも共に破壊されていた。他には、ルプスビームライフルの残骸は見つけたがラミネートアンチビームシールドの残骸は見当たらなかった。

また、幸いにもフリーダムの動力源である、核エンジンには破損など見当たらなかった。もしかしくとも、若様が周りに被害が出ないように核シャッターを下ろして、核運動を止めたのだろう。

そして、フリーダムをドッグにて修理を始めて3日。修復状況は46%までは何とかなかった。

シノブ「思いの他、進んでいないな……………」

「隊長、フリーダムの両腕部と両脚部の修理が完了しました」

シノブ「そうか。では、ウイングスラスターの修理に当たってくれ」  
「御意！」

部下たちに修理を任せ、私はデータの抽出が終わると各国政府への今回の騒動の隠蔽工作を行うことにした。それと、念のためにフリーダムが直らなかつた時のために若様の予備機体の整備などもすることにした。

シノブ「若様……あなた様がここで果てるようなお方ではないことを、私は信じております」



《side 雷真》

??? 「……………なさい！起きなさい！」

雷真「……………」

??? 「起きなさい、ライシン！」

雷真「ん……………」

??? 「起きろって言ってるのよ！」ドスツ！

雷真「ぐほっ!？」

雷真「あ、あばら骨……………」ピクピク

??? 「いつまでも起きないからよ」

雷真「えーっと、ここは……………」

??? 「ここは、謂わばアンタとフリーダムの世界よ」

雷真「え?。」

俺は、さつきから声をかけて受け答えをしてきている声の主の方に顔を向けると信じられない人物がいた。



雷真「ふ、フレイ!!」

フレイ「まったく……今度は、アンタを守るはめになるとはね」

雷真「なんで、フレイが目の前に!? それに、俺はクルーゼに……」

フレイ「だから、言ったでしょ。私とフリーダムで、アンタを守ったのよ!」

雷真「フレイとフリーダムが……?」

フレイ「そうよ。私の魂は、ヤキンドウエでクルーゼに殺されたから、ずっとフリーダムと共にあったの。それで、キラがインパルスに墜された時で最後だと思っていいたら」

雷真「今度は、俺だったって訳か……」

フレイ「本当、アンタとキラはよく似てるわよね」

雷真「どうだろうな……俺はキラほど強くない」

フレイ「なら、強くなりなさい。これから」

雷真「……」

フレイ「そのためにも、今はアンタを待ってる人の所へ戻りなさい」

雷真「待ってる人?」

フレイ「そう。あの子たちが待ってる。だから、行きなさい。私がアンタを守ってあげられるのは、一度切りでこれが最後」

雷真「……フレイ!キラが、君にごめんって……何度も泣いていた」

フレイ「とづくに許してるのに、キラもバカね」

フレイ「話は終わり? それなら、早く戻りなさい。あの子たちを守るのはアンタだけ。そして、アンタを守ってくれるのも、あの子たちだけよ」

雷真「ありがとう、フレイ」

フレイ「どういたしまして」

フレイのその最後の言葉を聞くと俺の意識はフワリとした感覚に襲われ意識が真っ白になっていった。

そして、次に意識が浮上すると身体に鈍い痛みと何かの機械が動いている音が聞こえてきた。

ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………ピツ……………

シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………シユコー……………

雷真「ん、ん……………こ…こは？」

簪「へえ……………？らい……………しん？」

鈴「私、先生呼んでくる！」ガラガラ

雷真「かん……………ざし？」

簪「よかった……………よかったよ……………」ポロポロ

雷真「……………」

簪「目が覚めてよかったよ、本当に……………」ポロポロ

どうやら、俺はクルーゼにやられたあと、医療施設に運ばれてベッドの上に寝かせられていたらしい。そして、目が覚めた俺の手を見舞いに来ていた簪が両手で握りながら涙を流しているようだ。

雷真「かん……………ざし、みんな……………な……………は？」

簪「みんな、無事だよ！雷真が守ってくれたお陰で！」ポロポロ

雷真「そう……………か。わる……………い……………もう……………少し……………寝る」

簪「うん」ポロポロ

状況を把握すると、酷い睡魔に襲われそのまま身を任せることにした。

その後、再び目が覚めると涙目の刀奈とシャルロットに抱きつかれ、激痛に襲われたり、精密検査を受けると医師から化物呼ばわりされるわけで、色々とおつたが、2日後からは松葉杖を使いながら日常生活を行えるとのことだ。

## 第64話

ピピピッ!ピピピッ!　ピピピッ!

雷真「ん……………?　朝か」

雷真「よっこいしよ……………痛てて」

フレイの思念体と出会い、医務室から退院した翌日。目覚ましの音で目を覚まし、身体をベッドから起こすとその拍子でまだ身体に痛みが走る。

現状の俺の容態はまだ、あばら骨の右が二本、左が四本、輝が入ったまま。右腕に関しては塗り薬を塗ったあとにガーゼと包帯でグルグル巻きにされて、左腕はナノマシンのお陰で完治。足の方は、左足にギプスをつけているため歩行は松葉杖や車椅子。右足は左腕同様にナノマシンで完治している。

雷真「まだ、身体が悲鳴をあげるな……………」

簪「ん?　雷真!?!」

雷真「おう。簪、おはよう」

ベッドから起き上がると、朝一のシャワーを浴びて、寝間着から制服に着替え終わってシャワールームから出てきた簪がいた。何故、簪がいるかは俺の身体が現状、一人で動くのに色々と苦勞するからである。

簪「起き上がるなら呼んでよ!　まだ、怪我は治ってないんだから!?!」

雷真「いや、お前シャワー浴びてたし……………」

簪「それでもだよ!」

雷真「すみません」

簪「分かればいいよ。包帯、新しくする?」

雷真「頼めるか?」

簪「待ってて」

そう言つて簪は、シャワールームで洗い桶にお湯を溜める。続いてタオルを持ってきて、巻いている包帯を外し、お湯に浸けたタオルで身体を拭き、塗り薬を塗って包帯を新しく巻いてもらった。

雷真「ありがとう、簪」

簪「どういたしまして」

雷真「今度は、着替えをしたい。部屋を出てくれるか?」

簪「うん」

簪に部屋を出てもらい、その間に、俺はシノブへと携帯で電話をする。

雷真「もしもし、シノブ。俺だ」

シノブ『おはようございます。若様』

雷真「フリーダムの方はどうだ?」

シノブ『現在、急ピッチで修理作業を行っています。現状では、53%修理が完了。早くて数日。遅くとも、来月までには修理を完了させます』

雷真「すまないな」

シノブ『いえ。これが私どもの仕事ですから。なにより、主君が丸腰なのは見逃せませんから』

雷真「あと、『天使』と『翼』の状況は?」

シノブ『両方とも完了しています。あとは、乗組員の操作演習を頻繁に行い、実戦を行うだけです』

シノブ『ですが、本当に大丈夫なのですか? 若様が行ってらした異世界のデータとはいえ、この世界の機材で単独大気圏突破が可能な戦艦など……』

雷真「心配はいらない。ハロの中にあつたデータの艦には何度も乗っているし、大気圏突入も体験した」

シノブ『……………若様がそこまで仰るのであれ私は』

雷真「昔からすまない」

シノブ『いえ、あの日、敵の罠に嵌まった私を助けていただいたお陰で、私は今日もこうして生きていられるのです。それに、私は若様に忠誠を誓った身ですから』

雷真「お前が、俺の部下でよかったよ」

シノブ『勿体なきお言葉』

雷真「それでは、そろそろ人が来るから切る」

シノブ『御意』

シノブとの通話を切つたあと、少し手間取りながらも何とか寝間着から制服に着替えることができた。着替えが終わると松葉杖で身体を支えながら部屋を出て、食堂へと向かう。

雷真「簪、お持たせ」

簪「ううん。ちゃんと着替えできたんだね」

雷真「何とかな」

簪「もしも、出来なかつたら一夏を呼んでくるつもりでいたから」

雷真「あー、確かに。一夏に手伝ってもらえば、楽に着替えができるな」

簪「でしよう?」

雷真「そうだ。今日のカリキュラムは知ってるか?」

簪「確か、今日は身体測定があつたはず」

雷真「……………身体測定?」

簪「うん。でも、雷真はそんな状態だから後日になるだろうけど」

雷真「だよな……………」

二人で本日のカリキュラムの話をしてしていると、あつという間に食堂に着いた。因みに、食堂に行く間の道中で俺の身体を見た生徒たちが

皆一様に驚きの顔を隠せないでいた。

簪「雷真、何食べる？」

雷真「そうだな……ビーフカレーで頼む」

簪「ビーフカレーね。私は何にしよう……」

簪が朝食のメニューに悩んでいると、先に来ていた刀奈、シャルロット。それと姉さんに、珍しく早起きな本音が来た。

刀奈「おはよう。雷真、簪ちゃん」

シャル「おはよう。雷真、簪」

虚「おはようございます。雷真、簪お嬢様」

本音「おはく。ライライ、かんちゃん」ポワポワく

雷真「おう、おはよう。皆」

簪「おはよう」

刀奈「それで、雷真。身体の方は大丈夫？ 車椅子持ってくる？」

雷真「大丈夫だ。安静にしながら一週間の間、夜にナノマシンを投与してれば完治するんだから、心配するな」

刀奈「そうだけど……」

シャル「雷真、流石にあの時の雷真を見てしまうと心配になるのは仕方がないよ。それに、雷真が死ぬかもしれない恐怖に襲われたのは、これで二回目だし」

雷真「そ、それは……」

シャル「まつ、雷真が生きていたから僕たちは一安心したけどね」

雷真「すまなかつたな」

改めて、五人に心配をかけたことに謝罪の言葉を述べてから簪が食堂のおばあちゃんから俺のビーフカレーと自分の天ぷらそばを持ってやってきた。

簪「お待たせ」

雷真「ありがとう、簪」

簪「ううん。雷真には何度も助けられてるから、これくらい平気」  
簪が合流して六人で座れる席を探していると一夏たちの姿が目に入った。また、どうやら一夏たちは俺たちのために席を取ってくれたようだ。

一夏「おい、雷真！」

雷真「おー！」

一夏たちとも合流して、一夏ハーレムズの隣の席へ腰を下ろす。そうすると意外と立っているだけでも体力が削られていることを実感するが出来るだけ刀奈たちに心配をかけたくないので顔には出さない。



朝食を食べ終わり、身体測定の間になったのだが何故か身体測定係に俺と一夏が選ばれているのだ。まあ、誰の仕業かは予想できるし理解もできる。

そんなわけで、俺は諦めを悟りながら測定室の椅子に一夏と座って待っていると山田先生がやって来た。

真耶「すみません。織斑くん、黒牙くん。もう直ぐ、皆さん来ますからね。はい、これメジャーです」

笑顔でメジャーを俺たちにメジャーを渡す山田先生に一夏が尋ねる。

一夏「山田先生、これは一体どういうことですか？」

真耶「どうって、身体測定ですけれど？ 無人機襲来及びラウール・クルーゼ襲撃事件を受けてISスーツの強化を図るために、より厳密な測定が……」

一夏「それは分かっています！ 問題はそこではなくて、なんで測定係が俺たちなんですか!？」

真耶「私もどうかと思っただんですが……生徒会の決定事項ということだったのだから」

一夏「なっ!？」

雷真「やっぱり……」

一夏「何を考えているんだ、この学園は!？」

雷真「仕方ない。山田先生、より厳密な測定を取るために提案があるのですか、いいですか？」

真耶「なんででしょう?」

雷真「事前に簪から身体測定があると聞いて、もしかして男である俺たちが測定係になるのではと思ひ、年頃の女子が俺たちに素肌を晒すわけにはいかないとあるものを持参しました」

真耶「あるもの?」

雷真「俺が趣味がてらに作成した物で、簡易身体測定スキャナーと言ったところでしょう。ほれ、一夏」

一夏「おお! サンキュー、雷真」

雷真「この、小型リモコンから照射される光を受けるとCTスキャンをしたような精密なデータがこっちの端末に転送されます。なので、メジャーは必要ありません。データは、山田先生がしっかり管理してくださいね?」

真耶「それなら、他の子も安心ですね」

よし。山田先生から了承を得られた。これで勝てる。てか、今さらだが刀奈とシャルロットは俺が他の女子の身体測定をしてもいいのだろうか? または、自分たちが一夏に測られて何とも思わないのだ



ろうか？

あつ！今思えばアイツらの出席番号って……とそんなことを考えていると測定的时间になったようで続々とクラス的女子たちが入ってくる。

相川「あー、織斑くんは黒牙くんだ！」

谷本「ええ!? 本当に織斑くんと黒牙くんが測定するの？」

本音「やつほー、おりむくにライライ。かつちゃんの秘策炸裂だね」

雷真「本音よ。そんなことを先読みできない俺だと思うか？」

本音「ううん、全然。ライライならもう対処法を見つけてるでしょ」

雷真「ああ。もちろんだ」

真耶「はーい、皆さん、お静かに。これからする測定はISSーツのための厳密な測定ですから、体に余計なものは着けないくださいねー」

真耶「あつ、でも体操服は着用しておいてくださいね。黒牙くんが皆さんのために画期的な物を用意してくれましたから」

山田の説明で女子たちの視線が一斉に俺の方に集まるが普通に説明すると共に一夏に実演させる。

雷真「じゃあ、まずは出席番号一番の相川が体操服になって一夏の前に立ってくれ」

相川「はーい」

相川「できたよう！」

雷真「よし。次に一夏の前で立って、目を瞑ってくれ」

相川「はーい」

雷真「一夏、さつき渡したりモコンのボタンを押して黄緑の光で相川の頭から足までスキャンしてくれ」

一夏「お、おう」

一夏は言われた通り、リモコンのボタンを押して黄緑の光で相川の頭から足までスキャンする。

雷真「山田先生、そっちの端末に相川の測定データは来てますか？」

真耶「はい、来てますよ！相川清香さん、バスト……………」

相川「真耶ちゃん先生、そんなことを此処で言わないでツ！」

真耶「すみません。私としたことが……………」

雷真「ま、まあ取り敢えず。これで女子たちが素肌を晒さずに測定ができるわけだ」

それからは淡々とリモコンの光を照射して測定を行っていく。

一夏「ふうー、無事に終わった……………。一時はどうなるかと思ったよ」

雷真「お疲れ、一夏」

一夏「おう」



測定と午前の授業が終わり昼休み。

セシリア「シヨックですわ。ウエストが5mmも増えているだなんて……………」

鈴「私も体重増えてたのよね……………。胸囲は変わらないのにッ」

箒「体の緩みは心の緩み！稽古時間を増やさねば！」

ラウラ「私は身長が少し伸びた。それ以外は変わらない」

刀奈「私も少し体重が増えたけど、そこまで気にしないわね」  
簪「私も」

シャル「僕は少し気になるかも……………」

セシリア「何故、お二方は体重が増えたのにも関わらずお気になさらないのですか？」

刀奈「それは雷真が10代の女性は体重が増えるは自然の摂理だからと教えてもらったからよ」

簪「私も」

シャル「僕もその内容を聞いたけど、少し気を付けておこうかな……………お菓子とか食べてるし」ボソツ

鈴「自然の摂理？」

刀奈「そう。まだ、10代の私たちの体重がある程度増えるのは子孫を残すための身体を作るため。つまり、子供を産みやすくするための身体にしようとしているのよ」

箒「なるほど！」

刀奈「だから、気にし過ぎるのも良くないということ。それに、私たちは太ってしまったのなら雷真にダイエットを手伝ってもらえばいいのよ」

ラウラ「例えば、どのようなものなのだ？」

刀奈「そりゃあ、「バキューン！」とか、「バキューン！」とか……………」

あとは「バキューン！バキューン！」なんかもいいかも」

雷真「ブハッ！」鼻血ブー

一夏「雷真!？」

一夏「誰かティツシュ！ 雷真が鼻血出したぞ!!」

刀奈「まあ、私たちは近い未来そういうことするから今更よね」

簪「／／／／／／／／」プシュ

シャル「／／／／／／／／」プシュ

箒「は、破廉恥だぞ！刀奈！／／／／／／／／」

セシリア「そ、そうですね！／／／／／／／／」

鈴「刀奈、アンタ！ 雷真が居るからって言っていることと悪いところがあるでしょうが!／／／／／／／／」

ラウラ「何をそんなに慌てているのだ？ それより「バキューン！」

とはなんだ？」

刀奈「それはねえ……ゴニヨゴニヨ」

ラウラ「!!」

ラウラ「あ、あわわわ……きゆうう」プシユ

刀奈「あら、可愛い」フッフ

## 第65話

刀奈の「バキューン」発言事件と俺の身体の怪我が完治して数日が経過したある日。一学年合同のIS演習の授業により一学年全生徒が整列している。また、いつものように織斑先生が腕組みをして立っている。

千冬「一年専用機持ち、全員前に出ろ！」

「はい！」「はい！」

授業開始早々、俺たち専用機持ち全員が織斑先生に呼び出されて前が出る。

千冬「先日の襲撃事件で、お前たちのISは深刻なダメージを受けている。自己修復のため、当分の間はISの使用を禁止する」

「はい！」「はい！」

流石にそのあたりは理解している。それに織斑先生はセイバーを、婚約者三人にはあの機体たちを秘密で渡している。だから、今の所は心配ないと思う。

千冬「さて、そこでだが……山田先生」

真耶「はい！ 皆さん、此方に注目してくださいーい」

そうやって山田先生が織斑先生の後ろにあるコンテナに注目を集め、「ご覧あれ！」とばかりに手を開いて見せた。

「なんだろう、あれ？」

「もしかして、新しいIS!？」

「えー？ それならコンテナじゃなくてISハンガーでしょう？」

「なにかななかなかな？ お菓子？ お菓子かなあ！」

おい。絶対に最後のは本音だろう。

千冬「静かにせんか！　ったく、お前たちは口を閉じてはいられないのか。山田先生、開けてください」

真耶「はい！　それでは、オープン・セサミ！」

雷真「開けゴマね……………」苦笑

山田先生、流石に「開けゴマ」を英語で言っても理解に苦しみますよ。ほら、現に俺と刀奈、簪、本音以外は皆、キョトンとしてしまっている。

どんまい、山田先生。

真耶「うう、世代差って残酷ですね……………」

僅かに涙ぐみながらも山田先生はコンテナの開閉スイッチをリモコンで操作し、内部駆動が唸る、ウイイイインというモーター音を立てながらコンテナが開いていく。

一夏「こ、これは……………」

雷真「Extend Operation Seeker？」

千冬「ほう。黒牙、よく知っているな」

雷真「まあ、家庭の事情で情報くらいは……………」

千冬「なるほどな。先ほど、黒牙が言つてたようにコイツの正式名称はエクテンド・オペレーション・シーカー。略してEOSだ」

千冬「コイツは国連が開発中の外骨格攻性機動装甲であり、主な使用目的は災害時の救援活動から平和維持活動など、様々な運用を想定している」

箒「あの、織斑先生。これをどうしろと……………？」

ここまで来て見せびらかすだけは流石にないだろう。十中八九、開

発に必要な稼働データの採取だろう。

千冬「乗れ」

「「え!」「」

雷真「やっぱり」

千冬「二度は言わんぞ。これらの実稼働データを提出するようにと学園上層部に通達があった。お前たちの専用機はどうせ今は使えないのだから、レポートに協力しろ」

「「は、はあ……………」」

なんとなく返事をしてしまう七人。その間に俺たちの後ろに移動した山田先生が、他の一般生徒たちにパンパンと手を叩いて指示を出す。

真耶「はい。皆さんはグループを作って訓練機の模擬戦を始めますよ。格納庫から運んで来て下さいね」

山田先生が指示を出すのがEOSの性能を見たかった生徒が多いためかブーイングが上がるが、そこは天下の織斑先生の一睨みで即座に鎮圧される。

雷真「さて、やりますか」

刀奈「そうね」

簪「二人がやるなら私も」

シャル「ちよつと！僕を置いてかないでよ!」

雷真「ん？ この重さは……………もしかして」

俺、刀奈、簪、シャルロットは織斑先生の出席簿が脳天に飛来してくる前にEOSの実稼働データを収集するために動き出すが、あとの四人は動き出しが遅かったようで脳天に出席簿を受けていた。

千冬「早くしろ、バカども。黒牙とその三人衆は既に動いている。時間は限られているんだぞ。それとも何か？ お前たちはいきなりコイツを乗りこなせるのか？」

セシリア「あの一、織斑先生。既に雷真さんが……………」

千冬「なに？」

雷真「よっ！はっ！ セリヤアツ！」

千冬「……………」

雷真「んー、こんなものかな？」

千冬「黒牙、なぜ貴様はそこまでEOSを動かせる？ 初めてではないのか？」

雷真「初めてですけど、このEOSのバックパックの重さが何処と無く、ストライクのI W S Pに似てるんですよ。だから、重心移動さえ感覚で掴めてしまえばっ！」

雷真「ほいほいほいほい、ほいっ……………この通りです」パッ

織斑先生に分かり易いように、EOSを装着したままバク転を連続で行い、体操選手のように両手を伸ばして止まる。

千冬「そ、そうか……………」

千冬「それでは、10分間の間にコイツに慣れてもらう。その後、全員で模擬戦をしてもらう。いいな？」

「二「はい！」」

それから10分間。それぞれ、自由にEOSに慣れるために行動する。

一夏「くっ、この……………」

箒「こ、これは……………」

セシリア「お、重い……………ですわ……………」

鈴「うへえ、うそでしょ……………」

シャル「う、動かしづらい……………」



刀奈「流石の私も、ちよつとつらいかも……………」

簪「やっぱり、雷真は規格外……………」

「同意！」

雷真「……………解せぬ」

刀奈たちがEOSの操作に四苦八苦しているとラウラは、EOSを感覚を確かめるように準備体操や走り込み、シャドースパージングをして感覚を確かめていた。

千冬「それでは、EOSによる模擬戦を開始する。なお、防御能力は装甲のみのため、基本的に生身は攻撃するな。射撃武器はペイント弾だが、当たるとそれなりに痛いぞ！」

千冬「では、はじめ！」

織斑先生の空気に響くようなパンツと鳴る手の叩いた音で皆一斉に動く。しかし、何故、全員此方を向く？

鈴「まずは、共闘して一番面倒な雷真から始末するわよ！」

セシリア「その方が現実的ですね！」

ラウラ「IS戦闘では歯が立たなかったが、生身なら！」

一夏「雷真はそんなに甘くないと思うぞ」

箒「私も同感だ」

刀奈「箒ちゃんに同意」

簪「無駄な抵抗」

シャル「でも、一発は当ててみたいよね」

刀奈「てなわけで、雷真。覚悟ッ！」

雷真「ふざけんな！こちとりや、病み上がりから一月も経ってないんだぞ!？」

そんなこんなで、俺vs専用機持ち八人によるEOSの模擬戦闘が繰り広げられた訳だが。途中でSEEDを使ったのを大人気ないと

か、卑怯だとか言わないでほしい。

千冬「そこまでだ」

雷真「ふう〜」

専用持ち， s 「……」チーン

千冬「流石、黒牙だな。一対多の戦いに慣れてるな」

雷真「ええ、まあ。しかし、まさか、SEEDを使うはめになるとは思ってもいませんでしたよ」

千冬「病み上がりなのだから仕方がないだろう」

雷真「それでも、個人的には大人気がなかったかと……」

千冬「それだけ、こいつらも成長しているということだ」

雷真「そうですね」

織斑先生の言葉を聞きながら、俺は左肘にかすったように付着した細かいペイント弾の跡を見たながら、先生が言うとおりの皆、成長しているのだと実感する。



《sideシノブ》

シノブ「クソッ！」ダンッ！

アキト「兄さん……」

シノブ「何故だ！何故、フリーダム出力が75%から上がらない!?」

私は、あの襲撃事件から若様より預かっているフリーダムの修理を完遂させ、フリーダムの出力調整を行っているが、ハロのデータに

あつたISとなつたフリーダム最大の出力に、修理したフリーダムの出力が到達しないことに苛立ち、机を叩いてしまう。

シノブ「装甲や武装などは修理を完遂している。エンジンも異常がなかった。なのに何故だ！何故、出力だけが……」

フリーダムの出力が最大値に到達しないことに何がいけないのか考えていると、インパルスの解析や使えそうな武装の修理などを行っている班の班長から声がかかる。

班長「隊長、インパルスの解析ならびに使える武装の修理などが完了しました」

シノブ「そうか。なら、使えそうな武装は4号機に搭載しろ。フリーダムがこんな状態では最悪、若様に4号機にお乗りになつてもらうことになる」

班長「よ、4号にですか？」

シノブ「ああ。もしも、完全に修理が完了してないフリーダムで出撃し、またあのクルーゼという男と戦闘になつたら、今度こそ、若様の命はない」

班長「……」

シノブ「本来であれば、若様から命じられている例の三機のうち、一機でも若様に渡せればと私は思っている。しかし、例の三機はどれもまだ完成してない」

仮に完成したとしても、若様の命令でエンジン部は空洞だ。だが、若様が倒れられた時に虚ちゃんから若様より私とアキト宛にとあるアタツシケースを二つ渡された。もしも、その中身が三機のうち、二機のエンジン部だとしたら……可能性としては、小型の“核”だ。

意識が戻り、日常生活に戻られている若様から命令がないということとは、それを組み込むかは私の判断に任せたといい事だ。

シノブ「その場凌ぎだと思ってくれて構わん！ 若様にお渡しできる機体を用意してくれ」

班長「御意！」

シノブ「アキト、ミーティアの方はどうだ？」

アキト「今は、二号機、三号機の最終調整中だよ。流石に、一号機があそこまで破壊されていたら作り直した方が早かったからね。それに、新しい武装も付け加えてある」

シノブ「そうか。その詳細は若様に渡す、報告書に纏めて置けよ？」  
アキト「分かってるよ。それじゃ、俺は例の三機の所へ行ってくるよ」

シノブ「ああ」

例の三機を製造している格納庫に向かっていくアキトを見送ったあと、ハンガーデッキに佇んでいるフリーダムに触れて見ることにした。

シノブ「なあ、フリーダムよ。何が足りないんだ？」

シノブ「私は、お前に若様を守ってもらいたい。お前に若様と飛んでもらいたい。お前に若様と戦ってもらいたい」

シノブ「どうしたら、お前の傷は癒えるんだ？ 応えてくれ、フリーダム」

目を瞑り、フリーダムに問いかけるがハンガーデッキに佇んでいるメタリックグレーのフリーダムは何も応えることはなかった。

——別にボクは直ってない訳じゃない——

——彼が気付いてないだけ——

——彼がボクの本当の名前を呼んでくれれば——

——ボクは、何処までも“自由”に空を飛べる——

——だから……——

——直してくれて、ありがとう——

シノブ「ん？気のせいか？」

## 第66話

初めて、EOSに乗り、模擬戦を行ってから二週間間の間のIS実技の授業は殆どがEOSの稼働データ収集だった。

そして、休日である今日。俺と一夏はそれぞれ、専用機の開発元なる研究所に向かうことにしている。俺の場合はドッグだが……。加えて、今日は機密ドッグにとある人たちを招くことになっているで、更識の息がかかっている喫茶店の個室で、俺はその人を待っている。

雷真「お久しぶりです。ハルバートン准将、バジルール中尉」

デュエイン「黒牙中尉、准将は止めてくれ。もう、私は軍人ではないのだ」

ナタル「私もだ。普通に名前と呼んでくれて、構わない」

雷真「分かりました」

挨拶を済まし、椅子に座る。

雷真「お二人とも飲み物は何にしますか？」

デュエイン「私は、ホットコーヒーを」

ナタル「私は、ホットレモンティーを」

二人の飲み物を注文し、飲み物に口を付けたあと今日の本題を話す。

雷真「今日はご足労いただき、改めて、ありがとうございます」

デュエイン「前置きはいい。今日は以前の電話で言っていた」天使

“とMSSISを見せてくれるのだろうか？”

雷真「はい。加えて、こちらの報告書をご覧ください。お二人には、驚

かれる内容が書かれています」

デュエイン「拝見しよう」

ハルバートンさんとナタルさんに四枚のA4サイズのクルーゼ襲撃事件のことを纏めた報告書を渡した。

デュエイン「拝見した。しかし、まさかブルーコスモスの名手、ムルタ・アズラエルまでもがこの世界で生きているとは……………」

ナタル「デュエイン委員長、私が生きているのです。可能性としては、有り得たことです」

デュエイン「それでもだ。クルーゼのことも驚いたがアズラエルのことも驚いた。黒牙中尉が言っていたように、この世界でも『コスミック・イラあちら側』と同じように戦争が起きてしまってもおかしくはなくなってしまう」

ハルバートンさんは、コーヒーを入れながら目を瞑った。すると、ナタルさんがハルバートンさんにある意見を口にした。

ナタル「でしたら、各国のIS委員会に応援要請をすれば！」

デュエイン「誰がそんな戯言を信じる？ 奴らは、自国さえ危険に晒されなければ動かん腰抜けだぞ？ 加えて、我々と奴らとでは五年間というアドバンテージがある」

デュエイン「その間に、奴らはMモビルスーツSを大量に製造しているはずだ。いくら、各国に応援を要請し、黒牙中尉たちの力があるとはいえ。数で攻められてしまえば勝ち目などないぞ？」

デュエイン「ましてや、クルーゼの配下にはコーディネイターがいるはずだ。この世界には、本当の戦争を体験したことがない者も多い。我々の方が、この世界は異質だということを忘れたか？」

ナタル「いえ……………」

ハルバートンさんの言葉に、ナタルさんは唇を噛んでしまう。空気

を少し変えるために、このあとの話をする。

雷真「飲み物を飲み終えたら、機密ドッグをご案内します」

デュエイン「頼む」

ナタル「……………」

その後は、シノブを呼んで機密ドッグへ。隠しエレベーターに乗りながら「天使」のドッグを二人に見せるとナタルさんがあの艦の名前を口にする。

ナタル「アークエンジェル？」

デュエイン「のようだが、少し違うな」

クルーゼとの一件や俺の入院なんか重なり、以前、ナタルさんに渡すはずだった「天使」の詳細は渡せていなかったため、二人は初めて「天使」を見て、アークエンジェルの名前を口にしていった。

雷真「ええ。外見は、アークエンジェルに酷似していますが、あの艦の正式名称はアークエンジェル級三番艦「メルカバー」です」

デュエイン「メルカバー……………なるほど、アークエンジェルやドミニオンよりも上階級の天使か」

雷真「それだけではなく。メルカバーは、座天使。天の車という説もあるんですよ」

ナタル「なるほど。天の車か……………」

雷真「次は、アストレイ部隊です」

ナタル「部隊の人数は？」

雷真「総勢62人です」

ナタル「一個中隊くらいか」

デュエイン「一個中隊の全員がM S I Sモビルスーツを動かして尚且つ戦艦を合わせたら、この世界では一国を簡単に滅ぼせる戦力だな」



とハルバートンさんは、部隊人数で想像した戦力を口から溢していた。その後、車を降りて、ハルバートンさんとナタルさんをアキトがメルカバーの船内を案内。俺とシノブはフリーダム在所へと別れ、格納庫へ。

雷真「シノブ、フリーダムの状況は？」

シノブ「それが、以前若様からの連絡をいただいた2日後から出力が一向に83%から上昇しないのです。申し訳ありません」

雷真「気にするな。あんなボロボロにやられてしまったフリーダムを良くここまで直してくれた。それだけでもありがたい」

俺の目の前で佇んでいるフリーダムは、外見は完全に修理が完了している姿だった。

雷真「インパルスの方は？」

シノブ「解析は完了しています。武装も例の三機のうちの一機に転用できるか検証しています」

雷真「そうか」

シノブの説明を聞いて、俺はフリーダムへと近付いて、ボディに触れ、目を瞑り対話を試みる。けれど、何の反応もない。

雷真「ダメか……。シノブ、姉さんのアストレアはどうなってる？」

シノブ「それでしたら、予備パーツで修理を終えています。加えて、新しいストライカーパックも届けてあります」

雷真「なら、俺がいない間でもあまり心配はいらないな」

現在のIS学園でまともに戦えるのは、織斑先生を筆頭に刀奈、簪、シャルロット、姉さんの五人だけだ。

もしも、この俺がいない間にクルーゼかアズラエルの息がかかった

者たちが学園に攻め込んで来たら迎え撃つにも戦力が足りない。アストレイ隊を出せば守れるだろうが、そうになると色々面倒な案件が出てくる。

シノブ「若様、フリーダムとまでは行きませんが若様の予備機体を用意してあります」

雷真「予備機体？」

シノブ「M2アストレアの四号機です」

雷真「四号機……………」



《sideシャルロット》

鈴「はー。なんか、かつたるいわねえ」

そうぼやきながら鈴は、ストローに溜めた飲み物の水滴をシワシワになったストローの袋の上に落として、子供がよくやるイモムシの遊びをしていた。

シャル「フフ。一夏がないからでしょ？」

僕が鈴にグッターとしている理由を言うと、途端に顔を赤くしながら慌てて否定する。

鈴「な、なあっ!?!/!/!/」

鈴「ち、違うわよ! ふん! あんな奴、居なくたって別に平気よ!」

シャル「はいはい。(鈴も素直じゃないなあ)」

そんな照れ隠しをしてしまうほど一夏のことを好きな鈴を微笑ましく眺めながら、僕は手元にあるミルクキーティーを飲む。

鈴「しっかし、この間のクルーゼの襲撃事件で虚さん以外は全部修理か……。パーソナルロックモードで暫くの間はISが使えないつてのは、ヤバいわよねえ……………」

シャル「一夏は白式の開発元まで、雷真の場合はシノブさんの研究所に行っちゃったからね」

鈴「……………つたく、早く帰ってきなさいよ」

鈴は空を見上げそう呟いてから、ハツとした表情になると僕のこと気付くと慌てて照れ隠しをする。

シャル「フフフ」ニコニコ

鈴「な、なによ！別に寂しくなんかないわよ！」

シャル「うんうん。心配なんだよね？」

鈴「ち、違つ——」

鈴が続けて声を荒げようとするやと食堂が突然停電した。それも食堂だけでなく、廊下や電子掲示板までもだ。すると、今度は窓の防護シャッターまで降りて、体内時間で約3秒経過すると鈴が口を開いた。

鈴「ねえ、シャルロツト」

シャル「うん。緊急用の電源にも切り替わらないし、非常灯も点かない。おかしいよ」

突如して起きた異変に僕たちは背中合わせで警戒しながらISをローエネルギーモードで起動して、視界にウィンドウを呼び出し即座に

暗視、ソナー、温度、動体、音響視覚と言った全てのセンサーやレーダーなどを起動させる。

リーダーなどの起動を完了させると緊急のプライベートチャンネルで織斑先生からの通信が入る。

千冬『専用機持ちは全員、地下特別区間へ集合。マップは転送する』

そう言い終わると同時に専用機にマップデータが転送されてきたので、それにしたがって速やかに集合ポイントへと急ぐ。集合ポイントに着くと即座に織斑先生からIS学園の異変について説明された。

千冬「では、状況を説明する」

千冬「現在、IS学園の全てのシステムがダウン。つまり、ハッキングを受けているものと断定する」

真耶「今のところ、生徒に被害は出ていません。が、何としても学園のコントロールは取り戻さねばなりません」

織斑先生と山田先生からIS学園の状況説明が終わるとラウラが挙手をする。相変わらず、雷真といい、ラウラといい、現役軍人は有事の際に行動が機敏だ。

ラウラ「IS学園は独立したシステムで動いていると聞いていますが、それをハッキングされることなどあり得るのでしょうか？」

刀奈「あり得るわよ」

ラウラの質問に刀奈が即答した。

刀奈「可能性としては、あって欲しくはないけど。クルーゼの息がかかった者によるハッキング。彼らは、遺伝子操作をされた人間。通称、"ゴージェイネイター"」

刀奈「そんな彼らが、たかたが学園のシステムをハッキングするこ  
となんて何の障害とも感じられないわ。簡単に言えば、雷真と同等の  
頭脳を持っていると考えていいわ」

刀奈のその言葉に、僕たちは戦慄する。確かに、雷真と同等の頭脳  
が持っているのであれば学園のシステムをハッキングするなど造作  
もない。

しかし、刀奈の仮説を織斑先生が否定する。

千冬「その可能性はないだろう。もしもそうなら、こんなまどろっ  
こしいことはせずに学園を戦地に行っているはずだからな」

シャル「確かに、クルーゼの学園への目的は雷真の抹殺と学園の破  
壊」

虚「若様の方はシノブさんたち、黒牙の部隊が居ますから大丈夫な  
はずです」

ラウラ「なら、一体誰が？」

千冬「そんなことが分かっているのなら苦労はせん。犯人や目的も  
不明だ」

ラウラの質問が終わると他に挙手する者は出なかった。その後は、  
山田先生から作戦内容が伝えられた。

真耶「それでは、これから篠ノ之さん、オルコットさん、凰さん、デユ  
ノアさん、ボーデヴィツヒさんの五名にはアクセスルームへ移動して  
もらい、そこでISコア・ネットワーク経由で電腦ダイブをしていた  
できます」

山田先生の作戦内容に、僕たちは戸惑ってしまう。

セシリア「で、電腦ダイブ……………」

鈴「それって……………もしかして……………」

ラウラ「IS 操縦者保護神経バイパスから電腦世界へと、仮想可視化しての侵入………というやつか」

シャル「理論上、可能なのは知ってるけど………」

未だに、電腦世界にダイブすることに対して戸惑っていると織斑先生の手を鳴らして渴を入れる。

千冬「各自、スタンバイ！ 作戦を開始する」

「「了解！」「」」

千冬「更識簪と布仏虚の二人はダイブのバックアップを」

簪「はい」

虚「わかりました」

織斑先生の声で、僕たち電腦ダイブ組は直ぐにIS スーツに着替えて、ダイブするための機械に横たわる。MRI のように機械の中へと臍の辺りまで運ばれてるとスピーカーから簪の声が聞こえてくる。

簪『それでは、仮想現実の世界に接続します』

簪『皆さんはシステム中枢の再起動に向かってください。始めます』

簪の声が終わると目の前に5秒のカウントダウンが表示され、カウントダウンがゼロになるとIS を展開させるような感覚で僕たちの意識を電腦世界へとダイブさせた。



《side 簪》

シャルロットたちが電脳世界へとダイブした後、フリーのお姉ちゃんに織斑先生から指示が飛ぶ。

千冬「さて、お前には別の任務を与える」

刀奈「なんなりと」

千冬「間もなく、何らかの勢力が学園にやってくるだろう」

刀奈「排除………ですね？」

千冬「そうだ。今のあいづらは戦えない。悪いが頼らせてもらうぞ」

刀奈「はい」

簪「お姉ちゃん！」

刀奈「なに？簪ちゃん」

簪「無茶はしないでね」

刀奈「大丈夫よ」

そう返事をしてオペレーションルームからお姉ちゃんが出ていくと織斑先生と山田先生が重い口を開く。

千冬「私たちは何をしているんだ……。守るべき生徒たちに戦わせて、私たちは……。」「

簪「織斑先生……。」「

こんな時、雷真が居てくれたらと、ふと思ってしまう。

千冬「さあ、ぼんやりしている暇はないぞ、真耶。我々には我々の仕事がある」

真耶「はい！」

そうして、二人はオペレーションルームから出ていき、ある準備に

取りかかった。



## 第67話

《side 刀奈》

オペレーションルームから出た私は、IS学園のシステムをダウンさせた勢力とは違う勢力を排除するために単独で行動している。

刀奈「さて、と。私たち以外の全校生徒は大体の避難が終わったようだし、それならまあ、大丈夫ね」

いつもであれば、ここで扇子をパツと開くところだが、雷真がいない今、もしも、攻め込んでいるのがクルーゼ勢力のコーディネーターであれば……。死を覚悟しなくてはならない。

刀奈「遺伝子操作がされていない、ナチュラルの私がどこまで対抗できるかしら」

少し不安になり、首にかけている雷真からもらったお守りを握り締める。そのあと、覚悟を決める。

刀奈「よし！」

刀奈「アクア・ナノマシン、散布開始！」

ミステリアス・レイディ  
霧纏の淑女のアクア・ナノマシンの散布が完了するとピーツ、ピーツと音を立てながら空間ウィンドウが開き侵入者が来たことを知らせる。

刀奈「来たわね」

『侵入者アリ』と表示されたウィンドウを消し、学園のシステムから独立しているカメラに会長権限でアクセスして侵入者を観察する。す

ると、侵入者たちのある装備に目がついた。

刀奈「あれは、確か周囲の風景を撮影して表面投射する最新型の光学迷彩。歩兵ということは、クルーゼの勢力とは違うということね」

私は、侵入者がクルーゼの勢力でないことに安堵する。クルーゼとの戦いで雷真が入院している間やそのあとも簪ちゃんに頼んで雷真からもらったM<sup>モビルスーツ</sup>Sの一覧情報を細かく閲覧した。

その中でも一番やつかいな類である、“ミラージユ・コロイド”という完全ステルス装置を搭載したM<sup>モビルスーツ</sup>Sではなく、ただの歩兵ということが私を安堵させたのだ。

もしも、これがM<sup>モビルスーツ</sup>Sが相手なら今の霧纏<sup>ミステリアス・レイディ</sup>の淑女では到底かなわない。これはミラージユ・コロイドがあろうがなからうが関係ないことだ。

刀奈「クルーゼの勢力でなければ、私でも対処可能ね」

侵入者が遠くまで真っ直ぐに続く廊下を警戒しながら進んで行くのを後ろから歩いて接近する。すると、一番後方にいる一人が私に気づいた。それにより、他の三人も続いて此方に気付く。

刀奈「随分と短時間で突入して来たわね。常時、監視しているってことかしら？」

悠々としやべっていると、侵入者たちは少し焦ったように手に持っているアサルトライフルを連射してくるが、そんなのは私には届かない。何故なら、アクア・ナノマシンで防ぐからだ。

侵入者「!？」

刀奈「ふふん。なんちゃってAICよ」

刀奈「ぼちつとな」パチンツ

フィンガースナップをすると散布していたアクア・ナノマシンが廊下で大爆発を起こし、侵入者を巻き込みながら侵入者たちの光学迷彩を焼く。

刀奈「ミステリアス・レイデイの技が一つ。『清クリア・バツシヨンき激情』のお味はいかが？」



〽時を同じくして〽

《Side千冬》

更識簪と布仏虚に篠ノ之たちを任せた私と真耶は、更識刀奈が対処している侵入者とは別のルートから侵入してくる侵入者を排除するためにIS運搬用の特別エレベーターに乗っている。

真耶「先輩、本当に黒牙くんから受け取った“セイバー”を使うんですか？やはり、ここは私が……………」

千冬「いや、これは試運転も兼ねている。何れにせよ、セイバーは使うことになる。クルーゼという男が、ここを狙っている以上はな」  
千冬「何より、アイツが私に国家機密を託したことを思っていた以上に、私は喜んでいようだ。アイツから信頼されているとな」

真耶「先輩……………」

千冬「もしも、私が侵入者を逃したら対処を頼む。真耶」

真耶「わかりました。先輩！」

真耶から返答が聞こえると、私はスーツのポケットに入れていた赤い飛行機の型のペンダントを取り出してセイバーを起動させる。

すると、完全な全身装甲は初めてではあるが、ISと何ら変わらぬ操作ができると理解する。理解がし終わるとセイバーのヴァリアブルフェイスソフト  
V P S 装甲をオンにしてメタリックグレーから鮮やかな赤へと装甲を変色させる。

千冬「まさか、私がM<sup>モビルスーツ</sup>Sに乗る時が来るとはな……。そういえば、出現する時に黒牙は自分の名前と機体の名前を言っていたな。ならば、私もそれに合わせるか」

千冬「織斑千冬、セイバー、出るぞ！」

自分の名前とセイバーの名前を言ったあとにセイバーのスラスタターを噴かして、此方に向かっていようであろう対象に接近する。

千冬「やはり、暮桜と比べても速いな。黒牙曰く、このセイバーはあの時の四機の中でも飛行速度は最速だと言っていたな」

以前、黒牙からセイバーの情報を提供してもらいながら聞いた時に言っていたことを思い出すとあつという間にハイパーセンサーが対象を確認する。

千冬「対象の機体はフアング・クエイクか。イーリスの奴とは、所々違うようだな」

対象のISについて分析が終わると、そのままの勢いで対象のフアング・クエイクを蹴り飛ばす。すると、いきなりのことに対象は数m吹き飛ばされた。

侵入者「未確認のISだ?!」

千冬「アメリカの特殊部隊というのは随分と暇なんだな。こんな極東の島国の学園にわざわざやってくるとは」

侵入者「その声は、織斑千冬!」

千冬「目的は無人機の未登録コアだけじゃないだろう？だが、残念だな。ここには『白式』と『自由』は無い。既に別の場所にある」

侵入者「ならば、その機体をいたただけだ！」

千冬「やれるものなら、やってみろ」

アメリカ軍の特殊部隊の『アンネイムド』の侵入者がセイバーを奪おうと、対IS用のコンバットナイフで攻めてくるが私は、セイバーの両肩に収納されているうちの左肩からヴァジュラビームサーベルを引き抜き、高速でフアング・クエイクの両手のマニピュレータを切り落とす。

侵入者「ビーム兵器だと?!」

千冬「初めて使ったが雪片と違って、コイツは軽すぎる。ん?」

ヴァジュラビームサーベルのあまりの切れ味に手応えが軽すぎると感じていると、突然、目の前に武装情報のウィンドウが展開された。

千冬「ガーベラストレート・光刃<sup>こうじん</sup>」

千冬「ほう、コイツは黒牙のストライクのシユベルトゲーベルに似た武装か。これなら、私でも使えそうだな」

私は、ヴァジュラビームサーベルを左肩に収納してから拡張領域<sup>パストロット</sup>からガーベラストレート・光刃<sup>こうじん</sup>を呼び出し、右手で柄を持ち、左肩で鞘を持ち、ゆつくりとガーベラストレート・光刃<sup>こうじん</sup>を引き抜く。

千冬「さて、試し斬りの相手になってもらうぞ」

千冬「ハッ！」

侵入者「!?!」

刹那。『アンネイムド』の隊長が乗っているフアング・クエイクの両肩の上にある武装をSEごと容易く切り裂いて両断した。

千冬「なかなか良い物だな」

侵入者「……………」

千冬「さて、これで私も全力で相手ができるな。行くぞ、アメリカ特殊部隊隊長。愛国心とやらを見せてみるッ！」



《Side 刀奈》

侵入者たちと対峙しているとリーダーに「ZGMF-X23S セイバー」の反応が表示されたことに驚く。

刀奈「セイバー!?!」

刀奈「何故、あの機体が……………もしかして、織斑先生?」

セイバーに乗っているのが織斑先生だと仮定し、私は両手だけ霧纏ミステリアス・レイディの淑女を部分展開させる。続いて拡張領域パススロットから先日、修理が管理したばかりのテンペストビームソードⅡとラミネートバックラーを取り出し、構える。

侵入者「それは!?!」

侵入者「資料にあったビーム兵器?!」

刀奈「安心なさい。貴方たちにはビームは使わないわ。これは、大切な人からもらった大切な武器なのだから」

刀奈「さて、行くわよ」

侵入者たちが近接と射撃で攻めてくるが雷真との訓練で今まで以上に侵入者たちの動きが把握できる。というよりも、遅く見える。けれど、油断はしない。

刀奈「常に敵を疑え、疑いを解く時は殺した時」

以前、雷真から聞いた言葉を復唱しながらラミネートバックラーにアクアナノマシンを併用させて構え、侵入者たちによる射撃を防ぎながら、近接で攻めてくる輩をビーム刃を出していない物理刀のテンペストビームソードⅡで、殺しはしないが確実に肋骨の二、三本は折るつもりで叩きつける。

流石に切り付けてしまうといくらビーム刃を出していないといえど殺せてしまう。テンペストビームソードⅡの切れ味は霧纏ミステリアス・レイディの淑女にある武器よりも上のため、気を付ける。

刀奈「ハッ！」

侵入者「ぐぼわっ!!」

刀奈「まず、一人目」

侵入者「このっ！」

刀奈「ふふん。ちょうどいいわ。貴方たち三人は、この子の新しい能力を試させてもらおうわ」

刀奈「喰らいなさい！」

私は、テンペストビームソードⅡをラミネートバックラーに収納して、拡張領域パススロットから「ZGMF-X2000 グファイグナイトッド」の『MAM757 スレイヤーウィップ』を取り出して、侵入者たちに打ち付ける。

刀奈「どう？スレイヤーウィップのお味は？痺れて動けないでしょう？」

グファイグナイトッドのスレイヤーウィップは超振動波による攻撃以外にも電撃による攻撃が存在するため、殺傷能力はテンペストビー

ムソードIIよりは低い。低いと言ってもセーフティをかけてこそだ。セーフティをかけていなければ、電子機器がショートするほどの電撃があるため、生身の人間が受けたら感電で即死してしまう。

刀奈「さてさて、貴方たちは一体何処の組織の者なのしらね？調べさせてもらうわよ」

再び、スレイヤーウィップを侵入者たちに打ち付け、意識を刈り取った後、拘束して侵入者たちの正体を探る。その際、霧纏ミステリアス、レイディの淑女のエネルギーが勿体ないので待機状態に戻す。

刀奈「国籍はアメリカで違くないわね。でも、システムダウンから突入までの時間差。何故、同時ではなかったのかしら……………」

刀奈「!!」

刀奈「ハッキングは別の勢力!？」

侵入者とハッキングをした者が別々の勢力だと気付いた瞬間。私の耳に乾いた発砲音と何かを弾く音が届くのと同時に、いつも間にか色々なシステムメニューが視界に入っていた。

刀奈「これは……………」

???『無事か、刀奈?』

刀奈「えっ?ら、雷真?」

雷真『この音声メッセージが再生されているってことは何かしらの理由で、刀奈の身に危険が迫ったということだろう』

刀奈「あっ!さっきの発砲音!？」

雷真の声ができる音声メッセージで発砲がした方に視線を向けると、そこには何かしらの方法で拘束から抜け出し、此方にハンドガンを向けながら突然展開されたアビスに驚き固まっている侵入者の姿があった。



雷真『だから、お守りとしてアビスを姉さんに刀奈へ渡すよう頼んで置いたんだ』

刀奈「アビスって……まさか！今、私はアビスの中にいるってこと!？」

雷真『あとは、お前に任せるぞ』

刀奈「ちよっ！」

その言葉を最後に音声メッセージが終了した。

刀奈「はぁ………まったく。さて、もしも、このお守りがなかったら嫁入り前の乙女の肌に穴が開くところだったのだけれど」

刀奈「その責任は、しっかりと取ってもらわよ」

侵入者「ヒ、ヒィィィ!？」

刀奈「歯、食いしばれ！」

アビスの腕で発砲した侵入者の顔面を思い切り殴り、意識を刈り取り、今度はしっかりと持ち物を確認してから再び拘束する。

すると、アビスのリーダーにフリーダムと白式の熱源が感知され、数分もしないうちに少し後ろの廊下の壁が爆発して、そこからフリーダムに乗った雷真と白式に乗った一夏くんがやって来た。

雷真「刀奈、無事か!？」

刀奈「ええ。お陰様で」

雷真「はぁ………」

刀奈「でも、アビスがあるんだからそこまで心配する必要はなかったんじゃないかしら？」

雷真「それでも、心配なものは心配なんだよ」

一夏「あー、二人とも？イチャイチャする前に、この状況をどうにかするのが先じゃないのか？」

雷真「あつ、わりい………」

刀奈「あら、ごめんなさい」

一夏「で、会長。皆はどこに？」

刀奈「そうよ、皆が危ないの！一緒に付いてきて!!」

雷真「わかった」

一夏「案内をお願いします」

私はアビスに乗ったまま、雷真と一夏くんをオペレーションルームへと先導する。

## 第68話

《side 雷真》

雷真「……………」ソワソワ

アストレア四号機を見たあと、フリーダムのもとに戻り、珈琲を飲みながらフリーダムを見ていると戦士としての勘が何かが起こるといふ前兆を知らせてくる。

シノブ「若様？どうかありませんか？」

雷真「いや……………俺の中の勘が、何かが起こると知らせているんだ。その何かが分からないんだ」

シノブ「若様の勘は、昔から当たりますからね。四号機の調整を急がせます」

雷真「頼む」

何だ？何が起こるんだ？もしかして、刀奈たちに何かあったのか？いや、刀奈たちにはあの四機を渡してある。だから、心配はいらないと思うが……………。

そんな考えが頭の中でグルグル回っていると一人の部下が慌てた様子で此方にやって来た。

部下「わ、若様！」

雷真「どうした？」

部下「あ、IS学園が襲撃を受けています!？」

雷真「なにつ!？」

部下「それだけではなく【ZGMF-X23S セイバー】の起動も確認されました!」

部下のその言葉を聞いた途端に脳内に、大切な“花”である三人が

俺の名を呼ぶ声が聞こえた。また、その声はとても弱々しくて、すぐのような声音だった。

雷真「シノブ！フリーダムで出るッ！」

シノブ「ですが、若様！フリーダムは出力が!?!」

雷真「スペックで劣るなら技量で何とかするだけだ！」

急いでフリーダムに乗り込み、空間ウィンドウとホロウキーボードを出現させ、今まで以上に高速でシステムを調整する。

シノブ「若様が出られる！緊急用ハッチを開け！」

部下達「[[「御意！」]]」

シノブの指示で、この場にいる部下たちは慌てて緊急用ハッチを開くためにシステムを弄る。

部下「ハッチ、開きます！」

シノブ「よし。若様！」

雷真「ああ！」

機密ドックの格納庫は万が一のために何処からでも出撃できるように海の外へと繋がる通路がある。そして、その通路へと突入するためのハッチが開くと、一気にフリーダムのスラスタをセーフティ無しで全開で噴かす。

雷真「黒牙雷真、フリーダム！行きます！」

セーフティを解除した状態のフリーダムは、やはりシノブの言うとおりクルーゼと戦闘していた時よりも飛行速度が格段に落ちていた。それでも、並みのISよりかは速いが、今はそんな些細なことは気にしては居られないと意識を切り替える。

直線状に I S 学園まで飛行しているとレーダーに白式の反応が表示された。どうやら、一夏も何かしらを感じ取ったのか研究所を抜け出してきたようだ。

なので、プライベートチャンネルで一夏にコンタクトを取ることにした。

雷真「こちら、I S 学園所属のフリーダムだ。白式、聞こえるか？  
一夏！」

一夏「こちら、白式。聞こえてるぜ、雷真」  
雷真「お前も何かを感じたのか？」

一夏「ああ。誰かは分からないけど、頭の中で誰かが俺の名前を呼ぶ声が聞こえたんだ。雷真は？」

雷真「それも同じだ。加えて、織斑先生に渡していた、『ZGMF—X23S セイバー』が起動するの確認した」

一夏「ってことは、千冬姉が戦っているということか!？」  
雷真「だから、そう言っただろうが」

I S 学園まで残り数キロの距離に到達するとフリーダムから学園内部の状況を確認するために監視カメラに接続するが、やはりハッキングされているためか、学園管理システムに映るカメラの映像は砂嵐状況だった。

加えて、織斑先生に渡しているセイバーとは別に刀奈に渡してたアビスがフリーダムのレーダーに表示された。これにより、アビスのとおある保護システムが作動したということがわかった。

それは、強制的に ヴァリアブルフェイスソフト V P S 装甲を起動させながら操縦者を保護するというものだ。このシステムが作動したということは刀奈の身体に危害が及びそうになったということである。保護システムの作動条件は、操縦者の身体に殺傷能力がある何かが操縦者の 20cm 未満までの距離に近付いたら作動する様に設定してある。

本来なら専用 I S があるため、このシステムが作動したのは何らかの理由で I S の操縦者保護システムの作動が遅れたためか、アビスの

保護システムが作動したようだ。

雷真「刀奈が危ない!? 一夏、俺は先に突入する！」

一夏「ちよっ、雷真!？」

フリーダムリーダーに表示されているアビスの反応を頼りに、刀奈が居るであろう施設の少し離れた地点にフリーダムのバラエーナ収束ビーム砲を放ち、壁を破壊して内部に突入する。

雷真「刀奈、無事か!？」

刀奈「ええ。お陰様で」

雷真「はあ……………」

アビスに乗って、無事な刀奈を見て安堵の息を吐く。

刀奈「でも、アビスがあるんだからそこまで心配する必要はなかったんじゃないかしら？」

雷真「それでも、心配なものは心配なんだよ」

一夏「あー、二人とも？イチャイチャする前に、この状況をどうにかするのが先じゃないのか？」

遅れて突入してきた一夏の声で現状を思い出す。

雷真「あつ、わりい……………」

刀奈「あら、ごめんなさい」

一夏「ところで、会長。皆はどこに？」

刀奈「そうよ、皆が危ないの！一緒に付いてきて!!」

雷真「わかった」

一夏「案内をお願いします」

刀奈が先導したオペレーションルームとやらの到着すると、そこに

は簪と姉さんが焦ったようにキーボードをタイプしていた。

刀奈「簪ちゃん!」

簪「お姉ちゃん!? それに、雷真に一夏も!」

雷真「簪、状況は?」

簪「現在、このIS学園は何者かの攻撃によって無力化。コントロールを奪還するために電腦世界にダイブした皆も同じく何かしらの攻撃で無力化」

雷真「救出方法は?」

簪「皆と同じようにISコア・ネットワークで電腦世界にダイブする他は……」

雷真「なら、俺と一夏でダイブする」

もうこれ以上、刀奈や簪、姉さんまでも電腦世界にダイブして無力化されても困る。なら、俺たちでダイブした方がいい。何より、俺の勘がそう叫んでいる。

雷真「行くぞ、一夏!」

一夏「何がなんだが分からないが、わかった!」

俺たちはフリーダムと白式を待機状態に戻し、シャルロットたちが眠っている部屋と入り、ベッドのような物に身体を預ける。

すると、目の前にカウントダウンが現れ、カウントダウンがゼロになるとフリーダムを展開する感覚に似た感覚とフワツとした感覚と共に電腦世界へとダイブした。

雷真「ここが電腦世界……」

一夏「目の前にある扉は……5つ」

雷真「シャルロットたちが突入した扉と見て間違いないな」

電腦世界にダイブして、意識が覚醒するとそこには5つの白い扉だけが存在し、それ以外はただの広い空間だった。

雷真「簪、扉の中に突入する際に注意事項とあるか？」

念のため、こういう電腦世界でヒロインが囚われていると偽物の自分や架空のモンスターなんかは障害物となり襲いかかってくるケースを俺は小説で読んだことがある。

簪『注意事項としては、雷真と一夏の偽物がシャルロットたちの世界にいるみたい。だから、同じ人物が二人もいたらシャルロットたちの脳に負担がかかる』

雷真「わかった。なら、変装するのが一番か。簪、オーブ製のパイロットスーツとヘルメットを二人分用意してくれ」

簪『わかった』

簪が返事をしたあと、15秒ほどでオーブ製のパイロットスーツとヘルメットが目の前に出現したので、着替えるのだが、一夏は初めてパイロットスーツを着るので少し手間取っていた。

一夏「き、着にくい……………」

雷真「これは、慣れるしかないな」

手伝いながら何とかパイロットスーツを着ることが出来た一夏を確認したあと、再び、簪にあるものを出してもらったことにした。

雷真「簪、俺にガバメントと弾を、一夏には刀を用意してくれ」

簪『わかった』

またもや15秒ほど待つと目の前に横長のテーブルが現れ、その上



に俺用のガバメントと一夏用の刀が乗せられていた。

ガバメントを手にとると一発だけマガジンに装填してからスライドを引く。そのあとに一度マガジンを取り出し、マガジンに七発、弾を入れてから再び、ガバメントに装填する。

雷真「よし。一夏、準備は出来たか？」

一夏「……………」

雷真「一夏？」

一夏「いや、前に千冬姉に渡された時の刀よりもコイツは軽く感じるんだ」

雷真「そうか」

雷真「だがな、一夏。これだけは忘れるな。身近に有るもので、人は簡単に殺せることを。そして、人を殺すということは、殺される覚悟を持つということを」

一夏「……………」

雷真「簪、シャルロットのいる場所に繋がる扉を教えてください」

簪「右から四番目の扉だよ」

雷真「了解」

ヘルメットを被つてから四番目の扉を開けて、中へと突入した。扉の中へ突入すると、そこは何処かの豪邸の庭園の中に、俺は立っていた。

それを認識すると、即座に手入れをされている植木に身を隠す。隠したら、まずは辺りを観察して防犯カメラやタレット、何かが無いかを警戒する。

雷真「取り敢えずは、レーザーセンサーや熱センサーの様なものはないな」

警戒はそのままに庭園から屋敷までを最短ルートで移動し、屋敷の外壁に身体を寄せる。

雷真「庭園から屋敷のルートに防犯システムが存在しない。何故だ？」

雷真「考えても仕方がない。まずは、シャルロットを探さない」とあまりにも防犯対策が手薄なのに疑問を抱きながら、硝子越しではあるが部屋の中を確認して、シャルロットを探す。すると、五番目の部屋を確認するとそこにはシャルロットの生着替えを眺める「俺」が居た。

確かに外見は俺だ。だが、しかし、それは偽物の俺なのである。偽物の俺がシャルロットを辱しめている。それも生着替えをさせているのだ。それを理解した途端、言い表しようもない黒い感情が俺の頭を染めた。その感情に身体を預け、ガバメントを偽物の俺へ、何の躊躇もなく顔面に連射する。

雷真「死ね、糞野郎が。俺の女に手を出すな」

ガバメントから放たれた弾丸は一直線に偽物の俺の脳天へと突き刺さり、偽物の俺は断末魔を上げながら粒子となって消滅した。それを確認したら、シャルロットがいる部屋へと突入する。

雷真「シャルロット、無事か？」

シャル「だ、誰!？」

雷真「おいおい、またかよ……。これで、どうだ？」

臨海学校の時と同じように、警戒心を向けられるシャルロットにオーブ製のヘルメットを脱ぎ、顔を見せると「えっ？」みたいな顔をされた。まあ、仕方がないだろう。

シャル「え、えええっ!? だ、だって今、雷真はそこで……」

雷真「そいつは偽物だ。お前は、ハッキングした奴の手口に嵌まつ



雷真「簪、シャルロットに服を」

簪『わかった。それから、鈴のパンツを見たことに関して、あとでお姉ちゃんと一緒にお仕置き』

雷真「……………はい」

男として役得だとは思えた反面、お仕置きが確定した。けれど、何とかシャルロットと鈴を救出することに成功した。あとは、セシリア、ラウラ、箒だけ。

だが、さっきのシャルロットの空間を考えるに偽物に反映させる人物は、彼女たちが好意を向ける男性ではないのだろうか？そうなるかと、俺はもうお役御免になるのだが……………。

## 第69話

無事に、シャルロットと鈴を俺たちの偽物から救出することに成功して、シャルロットと鈴のかなり恥ずかしい光景を目にしたあと、俺はお役御免なのでシャルロットと鈴と共に現実世界へ戻るため、簪に声をかける。

雷真「簪、俺とシャルロット、それから鈴を現実世界に戻してくれ」

簪にそう言うで一夏が慌てる。

一夏「ちよつ、雷真！手伝ってくれないのかよ!?!」

雷真「いや、だってな……………。シャルロットやさつきの鈴を見るに、どうやら扉の先の世界は箒たちの中で“大切な人”じゃないと救えないみたいだし」

雷真「なあ、鈴?」

鈴「ちよつ！　なんで、私に振るのよ!?!」

雷真「だって、鈴なら箒たちと同盟を結んでいる物だと…………」

鈴「そんなものは結んでないわよ!」

雷真「まあ、何にせよ。箒たちを救えるのは俺じゃない。一夏だけだ。これが、刀奈や簪なら別だがな」

鈍感である一夏には、分からないだろうが、あの扉の先は、シャルロットたちが望む、俺たちだけの世界。ならば、残りの箒、セシリア、ラウラの三人の世界には、必ずと言っていいほど偽物の一夏が存在する。

ならば、その世界から箒たちを救えるのは本物の一夏だけとなる。

一夏「なんか分からないけど、わかった」

雷真「なら、行ってこい」

一夏との話が終わり、今度こそ現実世界へと戻ろうとすると突如、そいつは現れた。その、そいつとは「G A T E X 3 0 3 イー吉斯」だった。

雷真「イー吉斯!？」

雷真「来い、フリーダム!」

イージスは、M モビルアーマー A 形態で此方に向かってくる。また、イージスの狙いはどうやら俺の様なので、シャルロットと鈴に被害が行かないように二人を左右に突き飛ばし、フリーダムを展開しようとするがフリーダムは展開されなかった。

雷真「なっ!? (フリーダムが展開されない!?)」

シャルロットと鈴の二人を突き飛ばすとシャルロットは俺に突き飛ばされながら、フリーダムが展開されていないことに気付いたのか、俺の名前を叫びながら手を伸ばすが届くことはない。

雷真「ぐっ!？」

シャル「雷真!」

イージスにまんまと組付かれたあと、シャルロットたちからどんな距離を離される。何とか抜け出そうと試みるが電脳世界とはいえ生身では、M モビルスーツ S のイー吉斯にはかなわない。

雷真「こいつ、どこから!？」

雷真「こつつの……!クソツ、駄目かつ!」

脱出が駄目だと悟り、イージスの行き先を探ろうと首を回すと、イージスの先にはスカイブルー色の扉があり、イージスがそのまま近

付くと独りで扉が開き、中へと連れて行かれた。

扉を潜るとそこは、大きな湖と一面の花畑だった。イージスは、俺を捕まえたまま花畑と湖の中間に到達すると、俺を少し高い場所から解放し、何処かへ去ってしまった。加えて、少し高い場所で解放されたことにより、尻餅を着くこととなった。

雷真「いでっ！」

雷真「いつ痛！イージスの野郎……あとで絶対に破壊してやる」

尻餅を着いた尻を擦りながら、イージスを破壊することを決意して辺りを見渡す。

雷真「てか、ここ何処だよ。辺り一面、花畑と湖……。ガバメントも一夏に投げつけちゃったし。それに、フリーダムも展開不能」

雷真「イージスの他にもM<sup>モビルスーツ</sup>Sが居たら、現状厄介だな」

警戒はしつつも、この世界から出るための手掛かりを探すためにまずは、湖へと向かって歩く。

雷真「……………。(何も出てこない…………?)」

何も出てこないまま、湖へと到達し、湖の中を覗くとそこには見覚えのあるM<sup>モビルスーツ</sup>Sが沈んでいた。

雷真「ストライクフリーダム?! なんで!?!」

何故かは知らないが、湖の中にM<sup>モビルスーツ</sup>Sサイズの「ZGMF-X20A ストライクフリーダム」が沈んでいることに俺は驚きを隠せないでいた。

すると、サクツサクツと、草花の上をゆつくりと歩く足音が背後から聞こえて来たので慌てて警戒心を最大まで上げながら湖へと背を

向けながら構える。

??? 「やれやれ、彼女は手荒な方法で君を此処に連れてきたようだ。申し訳ない。彼女に、悪気がある訳ではないんだ」

雷真 「なっ………なんで！なんで、貴方がこの世界にいる!？」

雷真 「ギルバート・デユランダール！」

草花を踏む音の主は、コスミック・イラ「あちら側」の世界でメサイヤと共に死んだとされているはずの、元プラント最高評議会議長であるギルバート・デユランダールが目の前にいることが信じられないでいる。

ギルバート 「初めましてというべきなのだろう。黒牙雷真くん。いや、この世界のキラ・ヤマトくん」

雷真 「なに？」

雷真 「俺が、この世界のキラとは、どういう意味だ！」

ギルバート 「そのままの意味だよ。この世界で、唯一のスーパーコーディネイターなのだから。薄々気付いたはずだ、君自身も」

雷真 「………」

ギルバート 「他者よりも早く学習し、他者よりも早くモノにし、他者よりも早く強くなる。そんな君は、コスミック・イラ私達の世界に迷い込んで、自分がかもしかしたら、コーディネイターなのでは？ と考えたはずだ」

確かに、デユランダール議長の言っていることは考えて、感じたことがある。幼馴染の刀奈や簪、本音、姉さんを見ても俺は学業、運動、武術なんかも難なく習得して、自分のモノにしてきた。けれど、努力はしてきた。

雷真 「仮に俺が、コーディネイターだとしても。何故、スーパーコーディネイターなんだ？」

ギルバート 「君は、自分がどういう存在なのかを忘れてるようだね」



雷真「それは、どういう意味だ？」

ギルバート「君は、この世界の、ましてや、私達コズミック・イラの世界の住人ではないのだよ。君は所謂、転生者という存在だ」

雷真「転生、者？」

ギルバート「そう。君は転生者。私もタリアとレイと共にあの世とこの場所に行つて、神に聞かされたことだが驚いたよ」

ギルバート「他にも臨海学校の時、ガイア、アビス、カオス、セイバーたちビーム攻撃を受けても火傷程度で済んでいたのは奇跡だとかの次元で解決できる話ではないのだよ」

雷真「言われてみれば……………」

これまた、確かに。あの時は、本当に死を覚悟した。でも、俺は奇跡的に生きていた。なら、転生者という存在の俺は、なんのためにここにいるんだ？

雷真「なら、今の貴方はどういう存在で、何の目的があつて俺が転生者と打ち明けたんだ？」

ギルバート「まずは、存在から説明しよう。今の私は、君を転生させた神の部下だ。次に、君が転生者だということを打ち明けた理由」

ギルバート「それは、ラウ・ル・クルーゼたちを止めるか、あるいは殺してもらいたいからだ。どうやら邪神の一人が、何の気まぐれかラウたち、死ぬはずだった者たちをこちら側の世界に移動させた」

ギルバート「それにより少しずつだが、この世界のバランスが崩れ始めている。それを君に止めてもらいたい」

雷真「色々あつて頭が混乱しているが、そんなこと、俺に出来るのか？」

デユランダル議長が言っていることは、ぶっちゃけた話、クルーゼたちを倒して、この世界を救って来いという話らしい。そんなの、俺に出来るのか？

この間の戦闘で、クルーゼの新しい機体に手も足も出なかったのに

.....

ギルバート「その心配は無用だ。君には、彼女から新たな剣を手にして、共に戦ってもらうからね」

雷真「さつきから、その彼女とは一体誰なんだ？」

ギルバート「彼女は、君の相棒だよ。名前はソラくん。またの名を

■■■■・■■■■

雷真「ぐっ！」

デュランダル議長が「ソラ」という女性の名前のあとに別の名前を口にするが、俺にはノイズ音にしか聞こえず頭を押さえてしまう。

ギルバート「その様子だと、まだ彼女の本当の新しい名前は聞こえていないようだ」

???「まったくだよ。早くボクの新しい名前を呼んで欲しいんだけどね」

ギルバート「おや、来たのかね？ソラくん」

突如、頭上から聞こえて来た声に、視線を頭上に向けるとそこには、背中からどこまでも包み込む大空の色をした翼を広げ、舞い降りてくる中学生くらいの、水色の髪に、水色のワンピースを来た少女がいた。

ソラ「存外、彼らもやるみたいだね。そんなに時間もかからないうちに彼らは、ここにやってくるはずだよ。それに早くしないと彼女達が危険だからね。それと——」

ソラ「やつと会えたね。雷真」ダキッ

雷真「おっと」

ソラと少女は、花畑に降りるとデュランダル議長と少し話したあと、いきなり俺に抱き付いてきた。その瞬間、彼女がフリーダムであることが理解した。

雷真「えっ？フリーダム？」

ソラ「ムッ！それは、前の名前であって、今のボクの名前じゃないよ！それに、この姿のボクのことは『ソラ』って呼んでよ」

雷真「わ、わかった」

ソラ「じゃあ、雷真。そろそろ、時間がないから行くよ」

雷真「ちよっ、何処へ！」

彼女は、俺の手を引っ張り、時間がないと言いながら湖の中へとズンズン進んで行く。そのまま、湖の中へとが入るが冷たさや息苦しさをまったく感じない。しかし、声は出せないようになってる。

雷真「(どうなってるんだ、この湖?)」

ソラ「……………」

そして、湖の中に沈んでいたストライクフリーダムの前までたどり着くと、彼女はストライクフリーダムの識別番号がかかっている所で止まり、指で示す。

彼女の目から識別番号を読み、とでもいうような視線を向けられたので彼女の手を離して、進む。そして、識別番号の所にある苔を取り除いて、識別番号を読んでみる。

雷真「(ZGMF-X40AIS アヴァロン・フリーダム。これって、もしかして……………!?)」

目の前にあるストライクフリーダムは、ストライクフリーダムと識別番号が違うことに気付いて彼女の、ソラの方に視線をやると「やっ」と名前を呼んでくれたね」とでもいうような優しい微笑みを俺へ向けていた。

微笑みを向けられたあと、ソラが現れた時と同じように彼女の背中

からスカイブルーの翼が広がる。水中であるにも関わらず、そのまま俺を連れて水中から大空へと一気に飛翔した。

雷真「ソラ、あれが新しいお前の姿なのか？」

ソラ「そうだよ。ボクは、ずっと待つてた。君が、ボクの新しい名前を呼んでくれることを」

雷真「そうか。なら、これからよろしく頼む。アヴァロン・フリーダム」

ソラ「うん！でも、この姿のボクを呼ぶ時は“ソラ”って呼ぶことを忘れないでよ？」

雷真「わかってる」

ソラ「なら、いいけど。おっと、どうやら彼らは試練を超えてきたようだね」

雷真「彼ら？試練？」

ソラの要領を得ない話を疑問に思っていると、後ろから俺の呼ぶ声が聞こえてきた。そちらに振り返るとそこには、専用機を展開している一夏と一夏ハーレムズがいた。

一夏「雷真！」

雷真「ん？ お前ら……」

一夏「雷真、無事か？それで、その子は誰？」

雷真「お、おう。こいつは、フリーダムだ。で、どうしたんだよ、そんなに慌てて」

一夏「フリーダム!? と、取り敢えず、無事なら早く現実世界へ戻ろう。会長たちがMSISと戦つてるみたいなんだ！」

雷真「なに!?!」

一夏から刀奈たちがMSISと戦つていてという話を聞くと、今度は焦っている山田先生の声が聞こえてきた。

真耶『皆さん、聞こえますか？皆さん！』

雷真「聞こえてますよ、山田先生！」

真耶『その声は、黒牙くん!? 良かった、ようやく黒牙くんと通信が繋がって……』

雷真「刀奈たちがM S I Sと戦っているってどういうことなんですか？」

真耶『それが、黒牙くんがイージスに捕まって、直ぐにザフト製の無人と思われるM S I Sが学園に多数襲来。今は、織斑先生、刀奈さん、簪さん、デユノアさん、布仏さんが応戦しています』

雷真「ソラやデユランダル議長と話していたら、現実世界だとそんなことが起きていたのかよ。刀奈、簪、シャルロット、姉さん……」

ソラ「雷真」

雷真「ソラ？」

ソラ「行こう。彼女達を、大切な花を守るために」

ソラの決意がこもった眼差しを見て、迷いはなくなった。何故なら、俺には相棒であるソラが共に戦ってくれる。

雷真「ああ！」

## 第70話

《side「夏」》

偽物の俺が鈴のパンツを脱がすのを阻止して、偽物を倒したあと、扉がある場所に戻って鈴にパンツを穿かせるよう言われた。なので、仕方なしに穿かせようとすると雷真とシャルロットに見られて、一悶着あつたものの、鈴は自分でパンツを穿いてくれた。

そして、雷真たちが現実世界に戻ろうとした時、雷真が鈴とシャルロットを左右に突き飛ばし、突如として現れた未確認の赤いISが雷真を捕らえて、連れ去ってしまう。

雷真「イージス!？」

雷真「来い、フリーダム！」

雷真「なっ!？」

雷真がフリーダムを展開しようとするが何故か展開されなかった。

雷真「ぐっ!？」

シャル「雷真！」

鈴「Mモビルスーツ S I S!？」

一夏「クソツ、待ちやがれ！」

走って雷真を追おうとするが、あつという間に雷真の姿が遠ざかってしまった。すると、シャルロットの叫びかあるいは雷真の反応が遠ざかっていることに現実世界にいる簪が気付いたのか、簪の声が聞こえてきた。

簪『皆、何があつたの!? 雷真の反応が皆から急速で離れてるけど!』

一夏「雷真が赤いMモビルスーツ S I Sに連れてかれた！」

簪『えっ!?!』

簪『そいつの名前か姿形は分かる?』

簪のその問いにシャルロットが答える。

シャル「イージス……。雷真は捕まる前にそう言った」

簪『イージス!?!』

刀奈『G A T—X 3 0 3 イージス。そいつが、雷真を拐った  
モビルスーツ  
M S I S の名前よ』

鈴「G A T って……。雷真のストライクと同じ、識別番号じゃない  
!?!」

一夏「なんで、そのイージスが雷真を……。…」

刀奈『それは分からないわ。それに、雷真の反応も途絶えてる。こ  
れじゃあ、探しようがないわ』

シャル「雷真……。…」

一夏「……。…」グッ

会長から雷真の反応が途絶えたと聞いて、シャルロットはその場に  
へたり込み、俯いてしまう。こんな時、どんな言葉をかけていいか、俺  
には分からなかった。

そんな状況が暫く続くと今度は現実世界にいる簪たちの悲鳴と何  
が爆発する轟音が俺たちに聞こえてきた。

『『『きやああああ!?!』』』

『『『!?!』』』

一夏「会長、簪?! どうしたんだよ!?!」

俺が会長と簪にそう問うと二人ではなく、山田先生が俺の問いに答  
えてくれた。

真耶『モビルスーツMSISの襲撃です!』

「モビルスーツMSIS!?!」

一夏「なら、この襲撃の全ての元凶は……………」

鈴「ラウ・ル・クルーゼ!?!」

俺と鈴は電腦世界と現実世界に現れたモビルスーツMSISで、今回の事件の主謀者が雷真を倒した、ラウ・ル・クルーゼと推測した。もしも、元凶が奴であるのであれば全てが合致する。

IS学園のコントロールをハッキングして、箒たちを電腦世界に閉じ込めて、イージスで雷真を現実世界に戻れなくして、現実世界でモビルスーツMSISによる襲撃。

一夏「どこまで、雷真を殺したいんだ。あの野郎……………」

あの時、クルーゼは雷真のことが憎いと言っていた。ならば、今回の襲撃は雷真を苦しめ、殺すことにあると分かった途端に怒りが腹の奥底から湧いてきた。

すると、千冬姉の指示が飛んで来る。

千冬『織斑は、そのまま他の者の救出を最優先。嵐はその場で待機。山田先生が黒牙の現在位置を何とかして探知する。デュノアは、現実世界に帰還し我々と共にモビルスーツMSISを迎え撃つ。以上だ』

一夏「なっ!ちよっ、千冬姉!おい、千冬姉!」

千冬姉の名前を何度も呼ぶが返答はない。

シャル「いいよ、一夏。僕は、僕たちは大丈夫だから」

一夏「でも!」

シャル「雷真は生きてる」

一夏「!!」

シャル「雷真は生きてるから大丈夫。僕たちは助けに行けないけ



ど、一夏。雷真をお願い」

一夏「シャルロット……………分かった！俺たちが必ず、雷真を助けだす！」

シャル「頼んだよ。織斑先生、僕を現実世界に戻してください」

千冬『すまない、デュノア』

刀奈『一夏くん、雷真をお願い』

簪『一夏、雷真を頼んだよ』

千冬姉の声が聞こえるとシャルロットの身体が量子変化の様に現実世界へと戻って行き、そのあとに会長と簪からのお願いの声を聞いた。

一夏「……………」

鈴「一夏」

一夏「分かっている。速攻で、偽物を倒してくる」

俺は、シャルロットだけじゃない。会長や簪だって、雷真を救いにきたかったはずだ。でも、三人は俺たちに託してくれたんだ。

その思いを胸に、いつもよりも冷静な思考と雷真の特訓のお陰かあつという間に簪、セシリア、ラウラを救い出すことが出来た。

一夏「山田先生、全員救出しました」

真耶『此方も黒牙くんの座標を探知できました』

簪『どういう状況なのだ、一夏』

一夏「今、現実世界のI S学園は無人のM S I Sモビルスーツに襲来されてる」「「なっ!?!」」

一夏「それだけじゃない。雷真も、この世界のM S I Sモビルスーツに囚われている」

セシリア「雷真さんがM S I Sモビルスーツに!?!」

ラウラ「それで、どうやって雷真を助けだすのだ?」

一夏「俺たちで、この世界のM S I Sモビルスーツを倒して雷真を助けだす！  
それ以外に方法はない！」

一夏「それに千冬姉、会長、簪、シャルロット、布仏先輩は五人で  
現実世界のM S I Sモビルスーツと戦ってるんだ。俺たちに出来るのは雷真を  
早く助けだすことだ」

俺が皆にそう言うのと、鈴が専用機を展開して口を開く。

鈴「ほら、ちんたらしないで早く行くわよ。山田先生、雷真の座  
標を送ってください」

真耶『分かりました。皆さん、十分注意してください。相手は、  
M S I Sモビルスーツですから！』  
「「了解！」」

山田先生の声を合図に俺たちも専用機を展開して、雷真がいると思  
われる座標ポイントに急ぐ。そして、座標ポイントにたどり着くとそ  
こにはスカイブルー色の扉があった。

鈴「これって、私たちと同じ……………」  
セシリア「ですが、色が違いますわ」  
一夏「行くぞ！」

扉を開き、中へと突入するとそこは……………簪たちのような部屋や風  
呂場、ダイニング、道場とは全く異なる、大空よりも上にある宇宙だっ  
た。

一夏「なつ、宇宙!？」  
鈴「どうして、あいつの部屋は宇宙に繋がっているのよ!？」  
セシリア「もしや、これは雷真さんの記憶から……………」  
ラウラ「だとすると、雷真は宇宙で二度の戦争を……………」  
簪「雷真、お前は……………」

それぞれ、スカイブルーの扉に突入して、突入した先が宇宙だったことに驚きながら、このエリアが雷真の記憶から再現されたものではないかと推測を立てていた。

そんな推測の感想を言い合っているとハイパーセンサーに熱源探知され、山田先生から送られてきたデータによって照合された。

一夏「G A T—X 1 0 5 ストライク」

鈴「G A T—X 1 0 2 デュエル」

セシリア「G A T—X 1 0 3 バスター」

ラウラ「G A T—X 2 0 7 ブリッツ」

箒「G A T—X 3 0 3 イー吉斯」

照合されたのは、イー吉斯だけではなく。雷真のストライクと同じ汎用機である、デュエル、バスター、ブリッツまでもが俺たちの前に現れた。

一夏「なんで、イー吉斯だけじゃなくてストライクや他のG A Tシリーズまで……………」

他のG A Tシリーズが現れたことに驚きを隠せないでいるといきなり、ストライクたちはビームライフルを撃ってきた。それにいち早く気付いた、ラウラの指示で散開する。

ラウラ「散開！」

ラウラの指示で散開すると、ストライクたちは事前に決めていたかのように一機ずつ、一対一の形で動き出す。その形は、俺にストライク、箒にイー吉斯、セシリアにバスター、鈴にデュエル、ラウラにブリッツという形で動かれた。

それらと対峙すると、ストライクたちは俺たちをバラバラにしよう

と動き、皆と合流しようとするのとビームライフルやイーゲルシユテルンで牽制されて、うまく合流できないでいる。

一夏「クソツ、こんな時間がない時にツツ！」

とにかく早く、雷真を助けて千冬姉たちに加勢しないと！という思いが頭の中でグルグルと回っていると、ストライクから雷真とは違う、若い男性の声が聞こえてきた。

???「それじゃあ、そろそろ試練を始めようか」

一夏「試練？」

???「君たちが、彼の……雷真の背中を預けられるかどうかを試す試練だよ」

声の主が雷真でないとするれば、雷真と同じストライクのパイロットかよりも前のパイロット。だとすると、山田先生からのデータを参照しながら目の前にいるストライクのパイロットを導きだす。

一夏「まさか、あんたは……キラ・ヤマト！」

キラ「……」



### 《side 刀奈》

新たにM<sup>モビルスーツ</sup> S I Sが学園に襲撃を始めて、織斑先生がシャルロットちゃんを電脳世界から現実世界に帰還させて、私たちと共にM<sup>モビルスーツ</sup> S I Sに応戦させると指示を出して、シャルロットちゃんが現実世界に戻ったあと。私たちは、織斑先生の後ろを追いかけていた。

千冬「すまない、デユノア。現状で、最善策はこの五人でM Sモビルスーツを抑える他はないんだ」

シャル「分かっています。ですが、僕たちの専用機はまだ……」

千冬「安心しろ。黒牙から受け取っているお守りはM S I Sモビルスーツだ。

更識刀奈のお守りがアビスだったからな。だから、お前たち二人のM S I Sモビルスーツはカオスカガイア。どちらかだ」

シャル「えっ?」

簪「えっ?」

虚「えっ?」

私を除いた三人は織斑先生の説明に戸惑いを隠せない。簪ちゃんと虚は私に視線を向けるが、それを私は舌をチロリと出して誤魔化す。

織斑先生の話が終わり。三人からジトーとした視線を受けながら歩いていると、私も知らない区画に到着した。

千冬「ここは黒牙がセイバーたちの整備に使っていた区画だ。我々は、ここから出撃するぞ」

刀奈「もしかして、夏休みの……」

簪「なるほど。だから、あの時は部屋にいなかったんだ」

シャル「このことも含めて、雷真とはお話をしないとね」

千冬「時間がない。即座に機体を展開しろ!」

「了解!」

千冬「セイバー!」

刀奈「アビス!」

虚「アストレア!」

私たちが機体を展開し終わると、簪ちゃんとシャルロットちゃんは雷真のお守りに触れて意識を集中していた。それから5秒ほどで、どの機体なのか理解したようだ。

簪「来て、カオス」

シャル「お願い、ガイア」

二人が機体を展開し終わると織斑先生の指示が飛んでくる。

千冬「各自、機体を展開したな。これよりIS学園防衛戦を開始する。作戦内容は、学園の防衛を最優先に、敵機の排除。それと、お前たちに一つだけ聞いておく」

刀奈「なんですか？」

千冬「……………人を殺す覚悟はあるか？」

織斑先生からその言葉を来た瞬間、驚きはしたが私は直ぐに臨海学校の時や先日のクルーゼ襲撃の時を思い出し、意図的に殺気を放つ。すると、織斑先生は私を見て、ニヤリと笑った。

千冬「更識刀奈は覚悟があるようだ。他三名は、まだのようだ。ならば、言っておく。敵が無人機だらけだとしても中には有人機が出てくる可能性がある」

千冬「その際は、敵の武装、スラスタ、マニピュレータを狙え。そうすれば、人を殺さずに済む」

「……………分かりました」

千冬「それでは、修理用カタパルトから出撃する。真耶！」  
真耶『了解です！』

山田先生の声が聞こえると修理用カタパルトの上がスライド式で開き、そこから外へ出られるようになっていようだ。

そして、織斑先生はカタパルトに足を固定せずに立つと雷真と同じように言葉を放った。

千冬「織斑千冬。セイバー、出るぞ！」

織斑先生がそう言い放つと織斑先生は膝を曲げ、勢いを乗せて一気に飛翔した。

簪「今のつて……………」

シャル「雷真の……………」

刀奈「私たちも行くわよ。更識刀奈。アビス、行くわよ！」

今度は、私が言い放つと虚が続いて言い放ち、飛翔する。

虚「布仏虚。M2アストレア、行きます！」

簪「なら、私も！更識簪。カオス、行きます！」

シャル「ぼ、僕も！シャルロット・デユノア。ガイア、出ます！」

それぞれ、雷真と似た台詞を言い放ち機密区画から外へと飛翔する。そのあと、MSISモビルスーツと対峙する前に簪ちゃんに敵機の識別をしてもらう。

刀奈「簪ちゃん、敵機の識別は分かるかしら？」

簪「ちよつと待ってね……………なにこれ？こんな数、どうやって!？」

千冬「どうした、更識簪」

簪「敵機の数に優に60を超えています！」

「「なっ!？」」

刀奈「学園際の時の105ダガーよりも多いなんて!？」

千冬「クルーゼめ、黒牙を封じたのはこのためかッ！」

私たちは最初、敵機の数に5や10そこらと考えていたが予想よりも桁外れの数に襲いかかっていた。オペレーションルームでの最初の襲撃で回線が断線したのならレーダーは使えるが、数までは識別出来なかった。

千冬「それで、敵機の種類は？」

簪「【ZGMF-1017 ジン】、【ZGMF-600 ゲイツ】、  
【ZGMF-515 シグー】、【AMF-101 デイン】、【UMF-  
4A グーン】、【UTA/TE-6P ジオグーン】、【UMF/SS  
O-3 アツシュ】の七種です」

刀奈「ジオグーンとアツシュ以外は全て、ファーストステージの  
モビルスーツ  
MS」

千冬「更識刀奈は水中用MSモビルスーツのグーンとジオグーン、アツシュの  
三種を任せる。そのサポートに布仏虚。他二名は私と共に来い」

千冬「では各機、作戦開始！」

「「了解！」」



## 第71話

一夏「雷真を救うために、その試練って奴をクリアすればいいなら……俺はあんたを倒す！行くぞ！」

キラ「……………」

雷真を助けるためにスカイブルーの扉へと突入した俺たちは、雷真の記憶から再現されていると思われる宇宙で、それぞれ一機ずつGATシリーズと戦闘している。

その中でも最強のパイロットであり、雷真と同じ、ストライクのパイロットと俺は対峙している。しかし、雷真以上の腕に俺は悪戦苦闘していた。

キラ「そんな感情任せの攻撃が当たると思う？」

一夏「チツ！」

ストライクの戦い方は、雷真から嫌っていうほど見せられたんだ。こっちにだって、チャンスはある！だから、そのチャンスを見逃さないように今は集中力を切らすな。

一夏「うおおおっ!!」

キラ「雷真から言われなかった？ 大振りが過ぎるってさ！」

一夏「ぐわあっ！」

物理刀形態の雪片式型でストライクへ斬りかかるが雷真以上の操作で雪片式型を簡単に躲かわされ、そのまま、顔面に回し蹴りを喰らわされ、脳が揺れる。

キラ「ねえ、織斑一夏くん。君は、雷真から何を教わったの？ ストライクの装甲の特性を知りながら、物理刀で攻めてくるなんて愚の骨頂だ」

キラ「そんな君が、本当に雷真を救えるとも思っているの？いいや。誰かを守れるとも思ってるの？」

確かに、今の攻め方は間違っている。ストライクの装甲は、俺たちのISは別物で、P S フェイズシフト 装甲による物理的な攻撃は電力が続く限りは無効化できる。加えて、ストライクは、他のGATシリーズとは違って、換装システムによるバックパックから電力を補給できる、特性もある。

それに、キラ・ヤマトは雷真よりも強い。なら、俺が出きるのはいっただけ。今までも、やって来た。一撃必殺技の一太刀を浴びせること。それだけ。

一夏「分かってる。けれど、俺にはセシリアやシャルロットみたいな射撃の腕はない。まして、あんたや雷真みたいに機体操作が上手い訳でもない」

一夏「それでも、仲間のためなら俺は何度だって立ち上がってやる根性なら負けねえ！」

一夏「はあああああっ!!」

キラ「結果的に、精神論か……」

雪片式型は物理刀のまままで最低限、余計なエネルギーを消費しないように雪羅もここぞという場面以外は撃たずに雪片式型でストライクを攻め立てる。

けれど、キラはエールストライカーのビームライフルとイーゲルシュテルンのみの攻撃で、できるだけ俺を懐に入れないように攻めてくる。

一夏「クソツ！攻め切れないツ!」

キラ「そんな威勢や感情だけじゃ何も救えやしないよ。僕と雷真は、これだけの力を持っていても守れなかったモノの方が多いんだ」  
一夏「えっ？」

キラ「もしかしたら、僕たちが否定した人たちのやり方の方が救えた人の数は多かったかもしれない。そう考える時がある。けれど、その人たちを否定したからこそ、僕たちは今があるんだ」

一夏「雷真たちの今……………」

キラ「変わらない世界は嫌だからね。君は、どうだい。織斑一夏くん」

一夏「……………」

キラ「明日を切り開くには、時には友人を殺すことにもなる。そんな、人を殺す覚悟が君にはあるかい？ 少なくとも、雷真にはあるよ」

一夏「人を……………殺す……………覚悟……………」

ガキの頃、それもまだ千冬姉が学生の頃。俺は、千冬姉から真剣を渡されたことがある。その時の真剣は、凄く重くて、持っているだけでも足がガクガクと震えるほどだった。

その時、千冬姉は真剣の重さは命の重さだと言った。その重さが人の命を奪う重さだと。そんな重さを雷真は四年間も経験した。でも、あの時、雷真は俺に言ってくれたんだ。

一夏「俺には、そんな覚悟はないし、力も足りない！ それに、雷真は言っていたんだ、大切な者のためにとッ！」

一夏「だから、俺も！ 大切な人たちを守るために戦う！」

キラ「なら、それを証明してごらん！」

一夏「ぐうっ！」

今のでキラは本気になったようで、先ほどまでが遊びだったと思うほどの射撃精度と機体操作で俺を攻め立ててくる。流石に、このままではヤバいので温存して置きたかったがイグニッション・ブースト瞬時加速と零落白夜を駆使してキラを攻める。

キラ「イグニッション・ブースト瞬時加速……………なら、僕も使わせてもらおうよ」

一夏「負けるもんか！」

キラは、俺に合わせてなのかバスのスロット拡張領域から大艦刀を取り出し、  
瞬時加速で切り結んでくる。

一夏「うおおおおおっ!!」

キラ「はあああああっ!!」

何度か切り結ぶ中で、次第にキラの動きが少しずつだが、見えるようになってきた。なので、一か八かではあるが零落白夜を囿に雷真が見せてくれたデステイニーの動きで懐に攻め込み、雪羅をデステイニーのパルマファイオキーナという武装のようにゼロ距離で放つことを試してみることにした。

そのためには、リボルバー・イグニッション・ブースト個別瞬時加速でキラの攻撃を避けて、懐に入る必要がある。タイミングを誤れば、そのまま俺はストライクの大艦刀のビーム刃に両断されるだろう。

もしも両断されたら電腦世界といえど、現実世界の身体に何の影響もないとは考え難い。なので、本当に一瞬の判断が勝負となる。

一夏「すうー、はあー」

リボルバー・イグニッション・ブースト個別瞬時加速の成功率はまだ30%ほどだ。失敗すれば、現実世界なら即死。電腦世界でも、現実世界の身体に何かしら起こる。

一夏「白式——俺に、力を貸してくれ」

今一度、集中力を高めながら、相棒である白式に語りかける。その時、脳内に臨海学校の時に夢で見た少女の声が少しだけ聞こえた。

——いいよ。少しだけ、力を貸しあげる——

一夏「!! (聞こえた! なら、この声は白式か!)」  
一夏「ありがとう、白式」

白式にお礼を言いながら、背部のウイングスラスタを大きく展開し、雪片式型を正眼で構える。

一夏「……………」

キラ「……………」

お互いに相手の出方を探りながら円状制御飛翔サーキュル・ロンドを行い、少し離れた場所にいるであろう箒たちと他のGATシリーズの戦闘で起きる爆発音で、一際大きな爆発音が鳴り響いたのを合図に、俺とキラは互いに同じタイミングで突撃する。

一夏「うおおおっ!!」

キラ「はあああああっ!!」

見据えるはキラが持っている大艦刀。そいつが届く少し前で雪片式型を片手で持ち、個別瞬時リボルバー! イグニッション・ブースト加速で攻撃を回避しながらゼロ距離で雪羅を放つ!

一夏「ここだあああっ!!」

キラ「これはデステイニーの!?!」

あの時、個別瞬時リボルバー! イグニッション・ブースト加速で雷真が俺に見せてくれたように大艦刀が当たる少し前でグルリと回転しながら回避して、そのままゼロ距離で雪羅を連射してストライクのボディーに攻撃を当てることができた。

キラ「ふふっ」

一夏「これで……………どうだ」

ストライクのボディーに攻撃を入れられたことに安堵しながら、雪羅を当てるほんの一瞬だけキラの笑い声が聞こえた気がした。そのことに警戒心はそのままにしながらストライクの爆煙が止むのを待つ。

そして、爆発が止むとそこにはストライクの残骸やキラの死体も見つからなかった。雷真の記憶から再現された者といえど、俺はキラという人間を殺したということを確認し、手が震えた。

一夏「これが、人を殺す感触。雷真は、この震えを四年間も経験してきたのかよ……………」

雷真が言っていたことを俺自身が電腦世界で、擬似的な身体とはいえど、感じたことに少しずつだけ恐怖と、呆気なく人を殺すこと出来てしまうということに、いずれ人はそれに慣れてしまうということにも恐怖を感じた。

そんな恐怖を感じながら改めて、己が覚悟は大切な人を守ることにあると確信すると、白式のハイパーセンサーに少し離れてはいるが筈たちの反応が此方に向かっていていることを確認できた。

筈「一夏、無事か!？」

一夏「ああ……………」

鈴「一夏、どうしたのよ？」

一夏「いや、俺、電腦の世界の、作り物だとしても人を殺したんだなって……………それに、この言い表しようもない感触を雷真は四年間もずっと感じて来たんだなって、さ……………」

セシリア「それは……………」

一夏「前に、雷真に聞いたんだよ」

ラウラ「どういう質問かは予想がつくが。どういう質問をしたんだ？」

一夏「どうやれば、俺も雷真のように強くなるれのかを聞いたんだ」

よ」

箒「それで、雷真は何と？」

一夏「雷真は、それしか選択できなかったから身についた力だつて………言つてた」

俺の言葉に四人は黙つてしまう。すると、姿は見えないが倒したはずのキラの声が聞こえてきた。

キラ「どうやら、全員試練を乗り越えることが出来たみたいだね」

一夏「キラ・ヤマト!？」

「「えっ!?!」」

キラの声が聞こえてた瞬間に再び、警戒心を最大にする。

キラ「僕はもう、君たちと戦うつもりはないよ。今の僕の役割は、君たちの道案内役の印みたいなものだから」

一夏「道案内?」

道案内という言葉に聞くと、何処からか緑色の翼を生やした機械仕掛けの鳥が飛んできた。

一夏「鳥?」

キラ「その子はトリイ。トリイが君たちを雷真がいる所へ、案内してくれるよ」

一夏「本当か!？」

キラ「うん。その子に着いていけば、雷真に会えるから。トリイ、雷真の所へお願い」

トリイ「トリイー!」

トリイという機械仕掛けの鳥が飛翔すると、俺たちもそれに続いて追いかける。すると、この宇宙空間に入った時の扉と同じ色の扉の前

でトリイがホバリングする。

一夏「ここが雷真がいる。本当の扉か」

会長たちのこともあるので躊躇なく、扉を開けて中にはいる。なかに入るとそこは一面花畑だった。

一夏「今度は……………」

セシリア「一面、花畑ですわね……………」

今度の空間は、誰の記憶から再現されたのか分からないまま、トリイの後を追い続けると少し離れたところに湖が見えてきた。

湖との距離が30mほどになるとハイパーセンサーで湖から飛び出て来る、水色の髪をした少女と雷真の姿を確認することができた。

一夏「あれは……………雷真!？」

箒「なに?」

セシリア「どこですか?」

一夏「目の前の湖の上だ!てか、雷真という少女から翼が生えているのは幻覚か?」

ラウラ「幻覚ではなからう。ここは、電脳世界なのだからな」

鈴「何はともあれ、雷真を見つけたんだなら連れて帰るわよ!」

一夏「そうだな」

鈴の言うとおり、今は雷真を連れて帰るのが先決なので雷真と水色の少女に近付く。

一夏「雷真!」

雷真「ん? お前ら……………」

一夏「雷真、無事か?それで、その子は誰?」



どうやら、雷真は無事のようだ。なので、ついでに雷真が掴まっている少女について質問すると驚きの返答が返って来た。

雷真「お、おう。こいつは、フリーダムだ。で、どうしたんだよ、そんなに慌て」

一夏「フリーダム!? と、取り敢えず、無事なら早く現実世界へ戻ろう。会長たちがM S I Sと戦ってるみたいなんだ!」

雷真「なに!?!」

雷真は、会長たちがM S I Sと戦っていると知ると焦った表情を出す。

真耶『皆さん、聞こえますか? 皆さん!』

雷真「聞こえてますよ、山田先生!」

真耶『その声は、黒牙くん!? 良かった、ようやく黒牙くんと通信が繋がって……』

雷真「刀奈たちがM S I Sと戦っているってどういうことなんですか?」

現実世界から山田先生の声が聞こえ、会長たちがM S I Sと戦っている経緯を雷真は山田先生に聞いた。

真耶『それが、黒牙くんがイージスに捕まって、直ぐにザフト製の無人と思われるM S I Sが学園に多数襲来。今は、織斑先生、刀奈さん、簪さん、デュノアさん、布仏さんが応戦しています』

雷真「ソラやデュランダル議長と話していたら、現実世界だとそんなことが起きていたのかよ。刀奈、簪、シャルロット、姉さん……」

ソラ「雷真」

雷真「ソラ?」

ソラ「行こう。彼女達を、大切な花を守るために」

雷真「ああ!」

真耶 『では、皆さんを現実世界に帰還させます！』

山田先生のその言葉で、俺たちは現実世界に帰還した。

## 第72話 機体設定有り

《Side 簪》

簪「シャルロット、後ろ！」

私はシャルロットの背後に迫るゲイツをカオスのビームライフルで撃破する。

シャル「ありがとう、簪！」

簪「うん」

千冬「二人とも、気を抜くな」

「はい！」

クルーゼの仕業と思われるザフト製のMSモビルスーツISとの戦闘が始まって既に20分が経過した。その間にかなりの数のMSモビルスーツISを破壊しているけど、一向に減る兆しが見えない。逆に増えているように感じる。

シャル「クルーゼはどうやって、これだけの数を……」

簪「わからない。でも、クルーゼには何かしらの支援があると思う。でないとこれだけ数は用意できない」

二人でクルーゼの後ろにいる未確認の勢力について考えてながらゲイツたちのビームライフルを対ビームシールドで弾いてから、ビームライフルで応戦する。

千冬『全員に通達。もう間もなくで教員部隊の準備が整う。それまで、押し込まれるな！』

簪「了解！」

シャル「了解！」

刀奈『了解！』

虚『了解！』

千冬『あまり射撃は得意ではないんだが。これだけ数がいれば、当たるッ！』

織斑先生が通信でそう呟きながら、セイバーのアムフォルタスプラズマ収束ビーム砲を横に薙ぎ払い、ゲイツたちの群を一部一掃する。そのあとは、そのまま他のゲイツやシグーたちに刀で斬りかかる。

シャル「す、凄い……………」

簪「なんていうか、豪快……………」

シャル「僕たちも頑張らないと」

簪「うん」

織斑先生に続くようにゲイツたちを破壊していく。その際、カオスの機動ポッドを使用するとセシリアのように2機共に動かしながらも自分も動けることに驚く。

簪「ビット適切がCの私でも、2機とも動かしながら自分も動ける……………これがカオスの性能……………」

カオスの性能に驚いていると、シャルロットのガイアが空を駆けている姿が見えた。それも普通のM<sup>モビルスーツ</sup>S形態ではなく、M<sup>モビルアーマー</sup>A形態と呼ばれる形態に変形して、左右にあるビームブレードでゲイツたちをすれ違い様に撃破していた。

簪「あれって、M<sup>モビルアーマー</sup>A形態？でも、そんな形態になってパイロットは大丈夫なのかな？」

念のためにシャルロットにM<sup>モビルアーマー</sup>A形態の感想を聞いてみることに

した。

簪「シャルロット、ガイアのM A形態モビルアーマーになって、身体は大丈夫？」  
シャル「大丈夫だよ。ただ、四足歩行してる感じだけど……機動性  
なら、こつちが上かな」

簪「なるほど。なら、私も！」

カオスの武装にはM A形態モビルアーマーでないと使えないものがある。それは、お姉ちゃんが現在乗っているアビスの武装を高速戦闘使用に改修した武装である、カリドウス改複相ビーム砲。この武装はカオスの武装の中で一番の破壊力を誇る武装だ。

そして、カオスをM A形態モビルアーマーにすると少し体制がキツイけどカリドウス改複相ビーム砲を撃つ時と高速回避する時だけ使用すれば負担はそこまでではないと思う。

簪「M A形態の方が速い……雷真はこれを臨海学校の時に、一人でも三機も相手をしていたなんて……」

今更だが、性能に差がある機体で雷真は臨海学校の時に私たちを生かすためにどれだけ過酷な戦闘をしていたのか想像ができた。

簪「凄いな雷真は……だからこそ！ カオスを託された私は雷真たちが来てくれるまで学園を守るッ!!」

改めて、学園を守る決意を固めてカオスのカリドウス改複相ビーム砲を高速で飛行しながらガイアたちに放ち、駄目押しに機動ポッドのファイヤーフライ誘導ミサイルを発射する。

簪「流石にこの体勢が辛くなってきた……」

周りのゲイツ、シグーたちを撃破してからM A形態からM S形モビルスーツ

態に変形して体勢を楽にする。

簪「こつちは今のところ何とかなってるけど、お姉ちゃんと虚さんは大丈夫かな……………」

学園から少し離れた海域で水中型のM モビルスーツ S I Sと戦闘している二人が気になってしまう。



《Side 刀奈》

刀奈「まったく、何機いるのよ!？」

織斑先生の指示通りに虚と二人でI S学園に強襲を仕掛けてきた、ザフト製の水中型M モビルスーツ S I Sである【UMF-4A グーン】、【UTA/T E-6P ジオグーン】、【UMF/SSO-3 アツシュ】の三種を撃破し続けている。

刀奈「虚、背後のグリーン二機とアツシュ三機を狙って」  
虚『御意!』

空にいる虚はアストレアのガンバレルストライカーの有線式ガンバレルを射出して、ガンバレルのレールガンとガンバレルストライカーのメイン武装であるガトリング機関砲で私の背後にいるグリーンたちを撃ち抜いていく。

刀奈「ナイス、虚！」

レーダーから背後にいたグリーンたちが消失したのを確認したら  
M<sup>モビルアーマー</sup>A形態へ変形し、アビスのビーム刃無しのビームランスでグリーン  
たちをすれ違い様に装甲を切り裂いて撃破していく。

刀奈「それにしても、いくら倒しても数が減らない！もしかして、母  
船でもいるのかしら？」

刀奈「虚。近くに敵の母船か何がいると思う？」

虚『分かりません。もしも、母船がいるのなら破壊すべきかと私  
は思いますけど……』

刀奈「そうよね。でも、現状を考えると少し難しいわね」

二人で敵の母船があるなら破壊することに賛成するが、目の前の敵  
を放っておいて母船を破壊している間にIS学園に突入されては元  
も子もないのだ。

刀奈「水中でビームさえ使えれば………」

水中では、ビームが全て使えないためアビスの物理兵器で何とかす  
るしかない。そのため、虚もビーム兵器は使わず。ビーム兵器が装備  
されていない物理兵器だけのガンバレルストライカーでサポートを  
してくれている。

そんな愚痴を溢していると再び、グリーンたちが私の背後を追って  
くる。

刀奈「執拗い輩は女にモテないわよ！」

追ってくるグリーンたちにアビスの両肩シールドに装備されている  
連装砲を放ち破壊する。破壊できずに牽制となった残りは、その隙に  
M<sup>モビルアーマー</sup>A形態からM<sup>モビルスーツ</sup>S形態に変形してビームランスで切り裂く。

それをまた、何度か繰り返していると織斑先生からオープンチャンネルで通信が入る。

千冬『全員に通達。もう間もなくで教員部隊の準備が整う。それまで、押し込まれるな!』

簪『了解!』

シャル『了解!』

刀奈「了解!」

虚「了解!」

織斑から他の先生方が増援に来るという通信が入ったのでもう少し耐えていれば私と虚で敵の母船を潰せに行けるため頑張る。

刀奈「虚、聞こえたわよね?」

虚『はい。刀奈お嬢様』

刀奈「先生方の準備が整うまで抑えるわよ!」

虚『御意!』

それから15分の間、ひたすらグリーン、ジオグリーン、アツシユたちを撃破していくと再び、織斑先生からのオープンチャンネル通信が入る。

千冬『全員に通達。教員部隊の準備が整った。これより掃討迎撃に入る。加えて、教員部隊に通達。常にスリーマンセルで行動し、敵のビーム攻撃は対ビームシールドで防ぐように!』

千冬『海辺班は対IS用の水中ロケットランチャーで水中の敵を撃破せよ。以上!』

教員『『『了解!』』』』

先生方の準備が整うと私たちの方にも援軍が来たので私と虚のやることは基本的に敵の座標を先生方に教えて、先生方の撃ち洩らした



敵を破壊するという先ほどより楽な戦闘へとシフトした。



《Side 雷真》

雷真「んっ、んん………現実に戻ってきたのか」  
ラウラ「そのようだな」

電腦世界から無事に戻ってきたが、ゆつくりは出来ない。現在も刀奈、簪、シャルロット、姉さん、織斑先生の五人はMモビルスーツS I Sと戦闘をしているのだから、急いで援軍として向かなければ。

雷真「あれ？フリーダムが形状が変わってる」

首にかけていた待機状態のフリーダムの形状が青い羽に白いラインが入ったものからエメラルドグリーンエメラルドグリーンの宝石を左右から包み込むように4対2枚の青い翼が生えた首飾りへと変化していた。  
加えて、光の当て方によっては翼の縁が青からエメラルドグリーンに変化する特殊な細工が施されているようだ。

雷真「もしかして、新しいソラの名前に気付いたからか？」

待機状態のフリーダムが変化したことを口に出すと新しい待機状態のフリーダムの宝石が点滅してソラの声が聞こえてきた。

ソラ『そうだよ。雷真』

雷真「そ、ソラ!？」

「……えっ!?!」

ソラの声が聞こえたことに驚いていると無事に電腦世界から戻って来れた一夏たちが此方に注目する。

雷真「なんでソラの声が?」

ソラ『そりゃあ、ボクは雷真のパートナーだからね。意志疎通が出来ないと何かと不便でしょう?』

雷真「まあ、そうだけど……なんか、摩訶不思議過ぎて頭が混乱してるんだが……」

ソラ『別に深く考えると必要はないよ。今はやるべきことがあるでしょ?』

雷真「そうだな」

取り敢えず、刀奈たちの援軍に行くために身体の調子を確認してからベッドのようなものから起きて、山田先生の下へ向かう。

雷真「山田先生!」

真耶「皆さん!よかった。無事に戻れたんですね」

雷真「ええ。それより状況は?」

真耶「現在、織斑先生、刀奈さん、簪さん、デユノアさん、布仏さんを主力に教員部隊と共にM<sup>モビルスーツ</sup>SISの掃討迎撃を行っています。ですが、何分数が多くて精神的に疲労が蓄積されています」

雷真「大体の数と種類は?」

真耶「約70ほど……種類はZGMF-1017 ジン、【ZGMF-600 ゲイツ】、【ZGMF-515 シグー】、【AMF-101 デイン】、【UMF-4A グーン】、【UTA/TE-6P ジオグーン】、【UMF/SSO-3 アッシュ】の七種です」

雷真「ジオグーンとアッシュ以外は全てファーストステージ……」

学園祭の105ダガーよりも数が多い。それに水中戦用のMSモビルスーツ ISまで出して来るとはクルーゼの奴、どうやってそれだけの数を製造できる資材と人材を手に入れているんだ。

いくら「あちら側」コスミック・イラからコーディネイターがいるとはいえ。少数であれだけの数は製造は不可能。可能性としては………女尊男卑によつて失業した技術研究職の男性たちや傭兵、テロリスト等々。

戦力となるものは何でも受け入れる形で、いずれは捨て駒にする気なのだろう。他に考えられるのは………全世界でゲームのテストと称した無自覚のテロ協力。

IS学園のハッキングが出きるんだ。無人機のパイロットを世界中にいるネットゲームプレイヤーにでもやらせているのだろう。彼らからしたら、新作ゲームのテストプレイだと思っっているためテロ行為をしている自覚はないのだろう。

雷真「山田先生。今から外部のネットワークに接続して新作ネットゲームのテストプレイヤーをしている人達を探してください」

真耶「何故、そんなことを？」

雷真「仮定ではありませんが。襲撃している無人機MSモビルスーツ ISのパイロットはネットゲームをプレイしている人達の可能性があります」

「「「なっ!?!」」」

ラウラ「バカな………と言いたいが」

セシリア「コーディネイター。遺伝子を操作されている強化人間ならありえますわね」

そりゃあ皆、驚くよな。こんなことを考えたとしても実際にやる輩など殆ど存在しないのだから。

雷真「それに、これが本当に起きているのであればネットゲームプレイヤーのログから敵の拠点を逆探知できるかもしれません」

真耶「分かりました。黒牙くんを信じて探してみます」

雷真「お願いします」

山田先生にはネットワークからクルーゼの拠点を逆探知を頼んでいる間に俺たちは援軍として出る。

♪BGM：新たな力と正義♪

雷真「援軍に出る前に作戦を伝える。一夏とセシリアはツーマンセル。箒と鈴、ラウラはスリーマンセルで動いてくれ。基本的にはレーザー兵器を装備できる、セシリアと箒が敵の撃破に当たってくれ」

雷真「他はセシリアと箒のバックアップ。鈴、お前にはフリーダム  
のラミネートアンチビームシールドを渡す」

鈴「でも、私達の専用機は……………」

ソラ『大丈夫。ボクに考えがあるよ』

雷真「ということなので安心してくれ。それでは、これより織斑先生たちの援軍に向かう！」

「「了解！」」

真耶「出撃場所は黒牙くんの機密区画からです」

雷真「わかりました」

俺が先導しながら一夏たちを機密区画へと案内する。

雷真「そのカタパルトから外へ出られる。各自、専用機を展開！」

「「了解！」」

雷真「来い！アヴァロン・フリーダム!!」

第三形態移行した【ZGMF-X40A IS アヴァロン・フリーダム】を展開すると前のフリーダムとは違う。新たな新武装の概要が脳内に流れ込んでくる。

雷真「これが、アヴァロン・フリーダム」

一夏「新しいフリーダム!？」

鈴「綺麗……………」

セシリア「そして、凜々しいですわね」

箒「翼の数が増えているな」

ラウラ「それだけではない。全体的に武装も新調されている」

皆、アヴァロン・フリーダムの姿を初めて見て、各々の感想を口にしていた。それとは別に俺はこのアヴァロン・フリーダムとソラさえ、共に戦ってくれば今度こそクルーゼに遅れは取ることはないと確信を感じていた。

その確信を感じながらアヴァロン・フリーダムのマニピュレータを動かして動きの感覚を掴みながら、フリーダムが進化したのに偶然、バースロット拡張領域に残っていたラミネートアンチビームシールドを鈴に渡す。

雷真「ほれ、鈴」

鈴「ええ。借りるわ」

ソラ『雷真、ボクの単一仕様能力ワンオフ・アビリティを使って』

雷真「わかった。アヴァロン・フォース、発動!」

アヴァロン・フリーダムの単一仕様能力ワンオフ・アビリティである『アヴァロン・フォース』を発動するとアヴァロン・フリーダムの身体が薄いエメラルドグリーンに発光する。

ソラ『そのまま、彼らの専用機に触れてみて』

雷真「ああ!」

ソラに言われるままに一夏たちの専用機に触れると一夏たちは驚いたように声を上げる。

鈴「何よ、これ!」

箒「これは紅椿と同じ……………」

ラウラ「いや、違う！」

セシリア「機体の破損している部分が修復して行ってますわ!？」

一夏「これが、新しいフリーダムワンオフ・アビリティの単一仕様能力……」

雷真「それじゃあ、行くぞ！」

一夏「おう！」

箒「うむ！」

セシリア「はい！」

鈴「ええ！」

ラウラ「ああ！」

アヴァロン・フリーダムの単一仕様能力ワンオフ・アビリティで皆の専用機を修復し終わったあとは、カタパルトに移動して出撃しようとする。アヴァロン・フリーダムのコアであるソラが管制官のようなことをする。

ソラ『ZGMF-X40A IS アヴァロン・フリーダム。発進、  
どうぞ！』

雷真「!!」

雷真「黒牙雷真。フリーダム、行きます！」

## 第73話

（BGM：Vestige version）

ソラ『ZGMF-X40A IS アヴァロン・フリーダム』。発進、どうぞ！』

雷真「黒牙雷真！フリーダム、行きます！」

機密区画のカタパルトから真上に飛翔して地下区画の外へと出る。その際、アヴァロン・フリーダムのヴァリアブルフェイズシフトVPS装甲が色鮮やかに変色する。また飛行速度が“ストライクフリーダム”の飛行速度を上回っていることに驚く。

（※以後、アヴァロン・フリーダムをフリーダムと省略します。by作者）

雷真「速い！ストライクフリーダムよりも速いなんて……」

ソラ『驚いているのはいいけど。まず、ボクたちは何をやるの？』

雷真「まずは、IS学園の制空権を確保だ。そのためにも、速攻で雑魚を片付ける。頼むぞ、ソラ！」

ソラ『任せて！ボクたちの“自由の翼”について来れる奴なんてここにはいないよ!!』

ソラがそういうとフリーダムのスラストター翼が「カシユカシユッ！」という音を鳴らしながらスライドする。すると、スライドした部分からエメラルドグリーンの光で形成させた翼が放たれ、急加速をする。

雷真「ぐっ、速すぎる……けど！制御出来ない訳じゃない！」

ソラ『フッフ』

フリーダムの新システム『自由の翼』により、既存しているISやモビルスーツMSとは比較にならない加速で飛行しながらIS学園を強襲しているMS ISたちを新武装である高エネルギービームライフルⅡ二丁で的確に破壊していく。

約30秒の間に13機の撃破に成功したら、織斑先生にオープンチャンネルで通信を飛ばす。

(※以後、高エネルギービームライフルⅡをビームライフルⅡと省略します。by作者)

雷真「こちら、黒牙雷真。織斑先生、聞こえますか？」

千冬「聞こえているぞ、寝坊助め。遅いぞ」

雷真「すみません。その代わり、速攻で制空権を確保しますので教員部隊に伝達を。それに一夏たちも直ぐに来ます」

千冬『既に聞こえているさ。これは、オープンチャンネルだからな』  
雷真「そうですね！」

織斑先生との通信を終えたあとも『自由の翼』を発動したままでIS学園周辺のジンやゲイツ、シグーたちを破壊していく。ある程度、破壊して制空権が確保できたところで念のために『ミラージュコロイドデテクター』で隠れている敵がいなかったかを確認するが『ミラージュコロイド』を使用している機体の反応はなかった。

けれど、尚もIS学園に攻めているMS ISが一番密集している方角から、ある程度は敵の母船がいるポイントはフリーダムのレーダーで絞りこめた。

なので、織斑先生にオープンチャンネルで敵母船がいることを伝えてから沈めにいく。

雷真「織斑先生！ある程度、敵母艦のポイントをレーダーで確認。なので、破壊してきます」





……』

一夏『せ、セシリア?!』

ラウラ『無理もなからう。クルーゼに続いて、雷真までもビット兵器を二桁で操作するのだからな』

鈴『プライドがズタズタね』

箒『雷真、お前はどれだけ……』

IS学園の制空権内にいたMモビルスーツISを全て破壊したら、ドラグーンを全てスラスターに戻してからレーダーに表示されている敵母艦を沈めに加速する。

その際、ソラに謝罪の言葉を述べることにした。

雷真「悪いな、ソラ。本来なら、フリーダムである。お前に人殺しなんてさせたたくないけど、今の俺にソラ以外に頼れる【剣】はないから……。」

ソラ『ううん。気にしないで。ボクは、君の——雷真の【剣】になると決めた時からボクは雷真と共にある。だから、【花】を守るために雷真が望む選択なら、それはボクの選択でもある』

ソラ『だから、躊躇わないで。彼らも、銃を持つ覚悟の意味くらい、理解してきてるはずだ!』

雷真「ありがとう」

ソラに感謝を述べてから敵母艦の姿がハイパーセンサーで目視できるところになった。

雷真「やはり、コイツか……ボズゴロフ級潜水母艦」

ソラ『雷真、あれだけの数を投入していながら敵母艦が5隻だけなのは可笑しい。いくら、MモビルスーツSをISとして縮小しても乗り切らないよ』

雷真「なら、空母には逃げたのか?」

ソラ『それか、刀奈と虚が偶然撃沈させたか、だね』

雷真「考えても仕方ない。目の前の潜水母艦を掃討する」  
ソラ『うん!』

敵潜水母艦の上を取ると、水中でも使用できる両肩部の物理武装である、フラッシュエッジⅢビームブーメランを引き抜き、ビーム刃を出さずに小型物理刀として扱いながら水中へと潜水する。

(※以後、フラッシュエッジⅢビームブーメランをフラッシュエッジⅢと省略します。by作者)

雷真「刀奈や簪、シャルロット。皆の学園を攻めたことを後悔しながら、海の藻屑と化せ!!」

ソラ『君たちは怒らせてはいけない人間を怒らせたんだ。これは、転生者である神の使いからの天罰だ……』

最後に敵潜水母艦に伝わるようにザフトの通信回線で捕虜にする気はないと伝わる言葉を述べながら、フラッシュエッジⅢで装甲を切断する。

その際に、敵潜水母艦から助けを求める、絶望の叫びがオープンチャンネルで通信が入るが全て、通信を拒否して残りの4隻も海の藻屑に化させる。

雷真「たかたが半年の間。人を殺さないでいるだけで、人を殺したというこの感触が酷く懐かしく感じる」

ソラ『……………戻ろう。雷真』

雷真「ああ」

敵潜水母艦の最期の爆発して海の藻屑となったのを眺め、敵を殺したという感触を久しぶりに感じながら、ソラに促されるままにIS学園へと帰投することにした。

IS学園に戻るとIS学園中の建物が以前のクルーゼ襲撃事件よりも酷い有り様になっているを目の当たりにした。特に、校舎が使い

物にならないほど破壊されたの見て、腹のそこからクルーゼの奴が憎くて仕方なくなった。

雷真「クルーゼエエ……………！」

粗方、IS学園の被害状況を見てから取り敢えず、第3アリーナへと降りることにした。すると、海側から刀奈、簪、シャルロットたち、専用機持ちの皆が俺の所に集まってきた。

♪BGM：君と僕、届かぬ想い♪

専用機持ち全員が集まると刀奈、簪、シャルロットがアビスたちを解除して俺の前に歩み出る。

雷真「……………」

刀奈「雷真も、新しいフリーダムを解除して」

簪「私たちが無事なのを確認して」

シャル「じゃないと、いつまでも落ち着かないでしょ？」

確かに、刀奈たちのことが心配で、刀奈たちに殺意を込めた銃を向けた奴らが憎くくて仕方がなかった。

しかし、刀奈たちに言われて自分で解除するよりも先に、ソラの奴が自発的に待機状態へと戻ってしまった。フリーダムを解除された俺は、直ぐに刀奈たち、三人に優しく抱き締められた。

刀奈「お疲れ様、雷真」ギョツ

簪「私たちのために辛い思いをさせて、ごめんなさい」ギョツ

シャル「お陰で、僕たちは全員無事だよ」ギョツ

刀奈「だから……………」

「「お疲れ様。そして、ありがとう！」」

雷真「!!」

刀奈たちのその言葉によって、今まで溜まっていたのか分からないけど、胸の奥に仕舞っていた何かが崩れ、涙が溢れだして、口が勝手に動いてしまう。

雷真「俺…………おれ！守れなかった、守れなかったんだ！それも二度もだ！クルーゼに負けた時に、今度こそ守ると誓ったんだ!!」ポロ

雷真「なのに…………この有り様だ。刀奈や簪、シャルロット、姉さん。それに一夏たちにまで戦わせて。お前たちは、コスミック・イラ「あの世界」とは全く関係ないのにつ！」ポロポロ

雷真「なのに…………」ポロポロ

今更だが、皆を巻き込む気はなかった。なのに、巻き込むしかなかったってしまった。一夏たちは、殆どが民間人だ。ラウラだって、軍人と云えど人を殺したことがないはずだ。

一夏「なあ、雷真。前に俺、聞いたよな？ どうやったら、雷真の様に強くなれるか、ってさ」

雷真「…………」

一夏「その時の意味を俺は今日、理解したよ。それにあの電腦世界でのさ、キラ・ヤマトと出会ったよ」

雷真「!？」

箒「私は、アスラン・ザラだった」

セシリア「私は、ディアツカ・エルスマンでしたわ」

鈴「私は、イザーク・ジュールだったわ」

ラウラ「私は、ニコル・アマルフィだった」

何故、一夏たちがキラたちと!? そういえば、ソラの奴らが試練とか言っていたが、このことなのか？ これについては、あとでソラに問い詰めることにしよう。

一夏「それで、キラに言われたんだ……………」

『もしかしたら、僕たちが否定した人たちのやり方の方が救えた人の数は多かったかもしれない。そう考える時がある。けれど、その人たちを否定したからこそ、僕たちは今があるんだ』

『明日を切り開くには、時には友人を殺すことにもなる。そんな、人を殺す覚悟が君にはあるかい？少なくとも、雷真にはあるよ』

……………つて。そう言われても、俺には雷真やキラのように人を殺す覚悟はやっぱり持てなかった」

雷真「……………」

一夏「でも、改めて覚悟したことはある。前と同じで、大切なもの全てを守る覚悟だ。だからさ、雷真も一人で抱え込むなよ」

雷真「ツ!!」

一夏「辛ければ、俺たちが助けてやる。悲しければ、俺たちが慰めてやる。安らぎが欲しければ、俺たちや特に会長、簪、シャルロット、虚さんがいるじゃないか」

一夏「だから、これからは俺たちを頼ってくれ。そりゃ、俺たちは雷真の戦友であるキラたちと比べたら頼りないかもしれない。でもさ、俺たちは友達だろう?」

雷真「一夏……………」

一夏の言葉に驚いていると、次は鈴たちが続く。

鈴「そうね。あんた、私たちの命の恩人なんだから」

セシリア「そうですね。臨海学校の時に、もしもし、雷真さんが居なければ死んでいたかもしれないませんもの」

ラウラ「私も同意見だ。貴様が居なければ、私もここにはいない」  
箒「私も、雷真が居てくれたお陰で、過ちに気付くこともできた」

シャル「僕も、雷真が居たからこそここに居られる。僕の居場所は雷真の居るところだからね」

刀奈「私たちもそうね」

簪「うん。子供の頃に、雷真が助けてくれなかったら今頃、ここにはいないと思う」

雷真「お前らまで……………」

全員の顔を見ると、そこには色々な覚悟を決めた瞳があつた。ずっと、<sup>コスミック・イラ</sup>あの世界<sup>モビルスーツ</sup>から帰ってきて、MSが出て来て、それは俺が原因だと思つたから無茶をさせない程度には任せて、あとは全て俺一人で片付けるつもりでいた。

でも、頼つていいんだ。一夏たちを、皆を、キラたちの様に頼つていいんだ。そのことがわかつただけで胸の辺りの何かが軽くなつた気がした。

雷真「ありがとう、皆」

一夏「おう」

箒「うむ」

セシリア「感謝するのはこちらですのに」

鈴「まったくね」

ラウラ「フツ」

シャル「でも、これで良いんじゃない？」

刀奈「そうね」

簪「皆で助け合い」

虚「私も微力ながらお力添えいたします」

千冬「教師として、生徒たちだけに任せてる訳にはいかないな」

## 第74話

IS学園を奇襲して来たM<sup>モビルスーツ</sup>SISを掃討したあと、一夏たちのお陰で心の奥が軽くなった。なったのはいいが、IS学園の施設は地下の機密区画以外はボロボロである。特に校舎棟は損害が酷く、修繕するためには、また休校になるのは明白だ。

そのこともあって、俺たちが少し休んでいる間に織斑先生は他の手の空いている教員たちと連携して瓦礫の撤去などを行っていた。それを見た、俺はもう躊躇することを少し止めることにした。

雷真「織斑先生」

千冬「どうした、黒牙」

雷真「人が足りないなら、俺の部隊を呼びますよ？」

千冬「そうか。なら、悪いが頼む。流星に教員だけでは時間がかかりそうでな」

雷真「分かりました。では、港を借りていいですか？」

千冬「港をか？ 構わんが、何故港なのだ？」

雷真「俺の部隊はそれなりに人数がいるのと。もしも、また再び、クルーゼの手の者が此処に攻めてくるか分からないのでアストレイ隊も呼ぼうと思ったので」

千冬「なるほど。ならば、責任はしっかり持てよ。黒牙中尉」

雷真「ハッ！」 敬礼

取り敢えず、織斑先生から許可を得たのでメルカバアのドッグにいまするシノブに緊急用メールで指示を出してから俺も瓦礫の撤去を手伝う。

加えて、もしも、まだハルバートンさんとナタルさんも付いて来てくれるのであれば。今回を機にM<sup>モビルスーツ</sup>SISのことやクルーゼのことをIS委員会に発表するつもりでもいる。

雷真「刀奈、簪、シャルロット。ちよつと来てくれ」



刀奈「なにかしら？」

雷真「悪いんだけど、専用機を展開してくれるか？」

簪「専用機を？」

シャル「ガイアたちじゃなくて？」

雷真「新しいフリーダムには、ワンオフ・アビリティ単一仕様能力が追加されてな。そいつは、壊れたISを修復することが出来る能力なんだよ」

シャル「えっ！」

簪「それって……………」

刀奈「紅椿の絢爛舞踏のよりも強力じゃない!？」

やっぱり、三人ともそう思うよな。俺でさえ、ワンオフ・アビリティアヴァロン・フリーダムワンオフ・アビリティの単一仕様能力の『アヴァロン・フォース』は紅椿の単一仕様能力である『絢爛舞踏』の上位互換だと思っている。

雷真「まあ、そんな訳で機体を修復するから展開してくれ」

刀奈「わかったわ」

雷真「ソラ、頼む」

ソラ『オーケー。任せて!』

刀奈「え？」

簪「え？」

シャル「え？」

刀奈たち三人が専用機を展開したら、ソラに頼んでフリーダムとして展開してもらい、アヴァロン・フォースを使うため、ソラに頼むと、ソラの返答に三人と驚いた表情をした。

アヴァロン・フォースを発動しながら、三人の専用機に触れて修復が終わると三人からソラのことについて質問された。

刀奈「ねえ、雷真。今の声は……………」

簪「もしかして、だけど……………」

シャル「フリー…………ダム？」

雷真「ああ。フリーダムのコア人格である、ソラだ」

ソラ『ZGMF-X40AIS アヴァロン・フリーダムこと、ソラだよ。よろしくね。あつ、名前が何でソラなのかは、兵器として生まれたボクだけど。空を飛ぶのは大好きだから、ソラって名前にしたんだ』

雷真「なるほど。そうだったのか……」ナットク

刀奈「これって、めちやくちや凄い発見よね？」

簪「うん。間違いなく、世界レベルで」

シャル「教科書に載っていた通り、ISには自我があるんだね」

雷真「ソラは元MS<sup>モビルスーツ</sup>だけどな」

シャルロットにツッコミを入れ、刀奈たちの専用機が完全に修復が完了したあと、アビスたちのことについて話をする。

雷真「三人とも、アビスたちは完全に扱えるようになったのか？」

刀奈「私は、地上戦がまだね。今回は水中戦しか出来なかったから」

簪「私は、MA<sup>モビルアーマー</sup>形態とビームサーベルと機動兵装ポットかな」

シャル「僕は、大体扱えるようになったよ」

雷真「フム……そうか」

どうやら、一番適合しているのはシャルロットの様だ。刀奈は、アビスの最も秀でている水中戦闘をものにはしたが地上はまだのようだ。簪はMS<sup>モビルスーツ</sup>形態なら問題無いがMA<sup>モビルアーマー</sup>形態やカオスの機動兵装ポットやビームサーベルをより扱えるようになりたいようだ。

雷真「分かっていると思うが、お前たち三人のMSIS<sup>モビルスーツ</sup>は、国家機密に値するほどの機体だ。扱いには気を付けるんだぞ」

刀奈「え？回収しないの？」

雷真「回収してどうする？ 今回の様に何かしらの理由で専用機ISが使えなくなった時のために、お前たちに渡してあるのに」

簪「じゃ、じゃあこれからも……」

シャル「ガイアたちを使っているの？」

雷真「だから、そう言っただろうが。それに、お前たちをもっと頼ることにしたからな」

そう言い残して、俺は教員陣の瓦礫撤去の手伝いをすることにした。瓦礫の撤去を続けていると、フリーダムにプライベートチャンネルが届く。その回線コードはメルカバーの物だった。

ハルバートン『こちら、アークエンジェル級三番艦、メルカバー。黒牙中尉、聞こえているか？』

雷真「こちら、黒牙。聞こえています、准将」

驚いた。まさか、ハルバートンさんがプライベートチャンネルで通信してくるとは……。驚き過ぎて、ハルバートンさんのことを「准将」と無意識に呼んでしまった。

ハルバートン『もう、私は准将ではないと言ったはずだぞ。それよ、メルカバーはどこに停泊すれば良いかね？』

雷真「それでしたら、自分が誘導します」

ハルバートン『了解した。誘導ビーコンを頼む』

雷真「了解！」

メルカバーが来たことを織斑先生に伝えようとするがセイバーの起動反応が確認出来ないの、山田先生を探して港を借ると伝えてからメルカバーに誘導ビーコンを送信する。

雷真「こちら、ZGMF-X40A IS アヴァロン・フリーダム。誘導ビーコンを送信。誘導ビーコンに従って移動してください」  
ハルバートン『こちら、メルカバー。誘導ビーコンを受信した。誘導ビーコンに従って停泊する』

港に降りて、メルカバーを待っていると水中からメルカバーが浮上してきた。完全に浮上が完了して停泊が完了するとメルカバーの右側にある、一番ハッチのリニアカタパルトに向かって飛翔しながら、メルカバーに通信を飛ばす。

雷真「こちら、フリーダム。メルカバー、一番ハッチからの着艦を許可されたし」

ハルバートン『こちら、ハルバートン。メルカバーへの着艦を許可する』

雷真「了解」

メルカバーの乗員は殆どが俺の部下だが、軍人としてのやり取りは知らないため、こうやって部下たちに実演して学習させる。これが出るのは、偶々、メルカバーに乗っていた、ハルバートンさんのお陰である。

そして、一番ハッチのリニアカタパルトからメルカバーの艦内へ入ると、俺の部下の開発班と戦闘班が集結していた。

雷真「皆、急ぎで来てもらって悪いな。20分後、アストレイ隊による救助演習という名の瓦礫撤去を行う。質問がある奴は挙手」

部下「はい！」

雷真「〇〇、なんだ？」

部下「えーっと、その、せつかくのIS学園なので……その出会いとかは？」

雷真「はあく。救助演習をしっかりとこなすのであれば、俺から学園の教員方に交渉して見る。ただし、痴漢などの犯罪行為はするなよ」

部下「は、はい！」

雷真「では、20分後に演習を開始する。その間に、開発班はアストレイ隊の整備を頼む。俺は、ブリッジに向かう。以上だ」

「「「御意！」」」

開発班と戦闘班に指示を出してからフリーダムを待機状態して、勝手知ったるなので道に迷わずにブリッジに続く、エレベーターに向かう。

雷真「黒牙雷真、入ります」

エレベーターに乗ってブリッジに到着すると連合の敬礼をしてから、エレベーターからブリッジへと入る。

ハルバートン「どうだね、中尉。ブリッジを見るのも久方ぶりだろう？」

雷真「いえ。ほんの、二ヶ月ほど前に コスミック・イラ あちら側でアークエンジェルのブリッジに入ってますから、そこまで久しぶりではありませんよ」

艦長席から首だけ振り向いて、アークエンジェル級のブリッジが懐かしいか聞いて来たので、思っていることを返した。

ハルバートン「そうか。私は、懐かしくて仕方ない。君も、そうだろう。バジルールくん」

ナタル「そう……ですね。懐かしいといえ、懐かしいですね」

どうやら、ハルバートンさんだけではなく。艦長席の斜め下後ろのCICにある副艦長席にナタルさんも一緒にメルカバーに乗って来たようだ。

雷真「すみませんが、お二人に今後の話があるのでブリーフィングルームに来てもらえますか？」

ハルバートン「構わんよ」

ナタル「分かった」

雷真「それからシノブ。アキトを連れて、お前もブリーフィング

ルームに集まってくれ」

シノブ「御意！」

ハルバートンさんの隣にいた、シノブにアキトを連れてくるよう頼んでから、俺はハルバートンさんとナタルさんと共に、先にブリーフィングルームへと移動する。

ブリーフィングルームに到着するとシノブとアキトが集まるまでにハルバートンさんとナタルさんにバルトフェルトブレンドコーヒーを出して、近場の椅子に座り込む。

雷真「はあ……………」

ハルバートン「随分と肩に力が入っていたようだな」

雷真「ええ。先程、ザフト製潜水母艦を五隻撃沈させましたから。その時に、敵母艦の船員から命乞いの叫びを聞きました」

雷真「たかだか半年の間に人を殺さないだけで、こんなにも精神的に来るなんて思っていませんでした。コスミック・イラ「あちら側」に居たときはこんなに来ることはなかったのに……………甘くなったものです」

コスミック・イラ「あちら側」からこちら側に戻ってくる前は、敵と認めれば即座にコックピットやブリッジを狙って殺していた。なのに、こっちに戻ってきてから人を殺すということがなかった。

それに、演習でもSEがあるから簡単には死なないし、俺の方が技術的に上だからと思っただけ武装やスラストターなどを狙って行ってきた。この先、この甘さは毒と化す。それが自分だけならいい。いずれ、これは、仲間をも殺す毒と化す。ならば、甘さを失くす必要がある。

切り換えろ。もう、これは俺たちとクルーゼたちの戦争だ。撃たなければ、死ぬ。刀奈たちを守るために、敵を撃て。

雷真「ふうー」

ハルバートン「ほう、意識を切り換えたか」

雷真「はい」

意識を半年前のオーブ軍の軍人をしていた頃に戻すことに成功すると淹れたコーヒーを飲みながらシノブとアキトを待つ。

二人がブリーフィングルームに入ってきて、全員に新しいコーヒーを入れてから今後のことを話し合うことにした。

雷真「それでは、全員が集まったので今後のことについて話し合いたいと思います。クルーゼの勢力は、本格的にIS学園を攻めてきています」

雷真「なので、今回の件と前回の件を日本IS委員会を通して、全世界に危険勧告をお願いします。そうすれば、奴らも迂闊には動けなくなるはずですよ」

ハルバートン「確かに……世界的に危険勧告をすれば、奴も動き難くなるな」

ナタル「その場合、黒牙やその部下たちのMS ISはどうなる？  
もしも、奴らの仲間などと根の葉もない噂が流れたりしたら……」

雷真「その時は、クルーゼ勢力が使っているMS ISを<sup>モビルスーツ</sup>一つ眼型IS」と呼称して公表してもらえれば噂の件は無くなると思います」

ナタル「わかった」

これで、クルーゼの勢力に牽制ができる。あとは、IS学園の瓦礫撤去と修繕だ。

雷真「次に、シノブとアキトにはIS学園の外壁を修繕する際にラミネート装甲と対ビームコーティングを施して欲しい」

雷真「また、クルーゼの勢力に攻められた校舎を修繕工事のために休校にするのは、他の生徒に迷惑がかかる。流星にそれだけは避けた  
い」

シノブ「分かりました」

アキト「手配しておきます」

雷真「それから、今回の戦闘に関わった者をメルカバーに乗船させる。一夏たちにもクルーゼのことを説明するべきだと考えている」

ハルバートン「そうだな。本来なら彼らには無関係な争いに我々は巻き込んでしまった。無論、黒牙中尉、君もだ」

雷真「自分は……己の決断で銃を持ち、銃を撃ちましたから」  
ナタル「……………」

ブリーフィングルームでの話合いが終わると俺は、時間通りにアストレイ隊の格納庫に移動する。移動したら、フリーダムを展開してカタパルトからの出撃を実践して見せる。

アストレイ隊の彼らは、まだカタパルトからの出現演習を行っていない。行ったことといえば、大気圏内外の仮想戦闘訓練くらいなものだ。

雷真「これより、IS学園の救助演習という名の瓦礫撤去作業を行う。また、今回はカタパルトからの出現演習も加える」

雷真「マニユアルなどで見たことは有るだろうが、実際には初めてだ。だから、俺が実演を見せる。しっかりと確認しろ」

「「「御意！」」」

部下たちから返事が返ってきたので、ブリッジにいるシノブに管制官をしてくれるように通信を入れる。入れたカタパルトにフリーダムの足をセットする。

シノブ『APUオンライン。カタパルト接続。各パワーフロウ正常。進路クリア。アヴァロン・フリーダム。発進、どうぞ！』

雷真「黒牙雷真。フリーダム、行きますー！」



## 第75話

ザフトのM S I Sたちによる襲撃を受けてから早くも3日が経過した。その間にアストレイ隊の皆がI S学園の教師陣と連携を取り、学園の瓦礫撤去を行った。

そして、現在、俺、刀奈、簪、シャルロット、本音、姉さんでボロボロの生徒会室から重要書類をサルベージしようと頑張っている。しかし、生徒会室も余波でかなり荒れている。

雷真「刀奈、これでどうだ？」

刀奈「ええ。そのままです。少し居てくれるかしら」

雷真「了解」

アヴァロン・フリーダムを両腕部だけ部分展開して、倒れた柵を持ち上げ、その下にある書類やファイルを刀奈が回収する。

刀奈「もう良いわよ」

雷真「わかった」

刀奈から柵の下にあった書類やファイルを集め終わった合図が来たので柵をゆつくりと襲撃を受ける前の位置に戻す。

雷真「しっかし、クルーゼの奴。I S学園とはいえ、校舎にまで対要塞攻略用の兵器を使ってくるなんて……………」

刀奈「そうね。昨日、雷真からそれを聞かされたときは驚いたわ。でも、雷真が教師陣に対ビームシールドを提供してくれたお陰でこのくらいで済んだじゃない」

雷真「まあ、そうなんだが……………」

刀奈「欲を言えば、ソラの単一仕様能力がI SやM S I Sだけじゃなくて建物にも使えたら良かったのにね」

雷真「そんなことを言ったら、建造物の修理を生業にしている御者に

失礼だぞ」

刀奈が無い物ねだりを口から溢しているとシャルロットから、それはとても良い笑顔なのに額に青筋を立てながら注意の声が掛かる。デジャブを感じるなあ。

シャル「二人とも、イチャコラしてないで働いて。でないとミーティングの時間に遅れるよ」ピキピキ

雷真「は、はい……」

刀奈「ご、ごめんなさい……」

シャルロットに注意されてからはキビキビと書類をかき集める。かき集め終わったら、生徒会室の家具を粗方ではあるが廊下に出してから生徒会室の中に飛散しているガラスの破片を掃除していく。

今更だが、昨日、一昨日と雨が降らなくて良かったと思う。雨が降っていたら書類は全滅していただろうから……。ガラスの破片の掃除が終わったら、家具を戻して、集めた書類の整理と確認。爆発などの衝撃で何枚か飛ばされて抜けていないかを確認する。

雷真「こっちは……大丈夫だな」

刀奈「私の方はバックアップがあるから何とかなるわね」

本音「うわ〜ん！ 先々月の予算議案の書類が燃えて無くちやつてる!?!」

雷真「マジか……」

簪「こっちの方は、来月に控えてた体育祭の予算書が黒焦げ……」

シャル「本音の方はどうしようもないもして、簪の方はまだ良かったよ……」

虚「そうですね。幸いと言って良いのか分かりませんが、先日の襲撃で体育祭を出来る状況ではありませんから」

シャルロットや姉さんの言う通りで、先日の襲撃の所為で学校行事

の一つである体育祭は出来る状況ではない。もつといえは、学業を普通に行えるのかすら不安だ。

正直、今のIS学園の校舎棟を見てみると一から建て直した方が安全ではないのかと考えてしまう。まあ、そのことも踏まえてこの後、メルカバーで行われるミーティングで色々と決めるのだ。

雷真「そろそろ、ミーティングの時間に迫っているし。書類の回収作業はここまでにしよう」

「二はーい二二」

俺の号令で各自、手を止めて、回収した書類を入れた段ボール箱を抱えながら慎重に外へと出る。外に出たら、奇跡的に無事であった寮に向かい。俺の部屋へ、一時的に回収した書類を置いておく。

雷真「悪いが俺はちよつと着替えるから全員、他のメンバーに声をかけて、エントランスで待っていてくれ」

刀奈「なるほど。あの服に着替えるのね」

シャル「あの服?」

簪「シャルロットは見るのは初めてだから驚くと思うよ」

シャル「ちよつと気になるかも」

本音「まあ、あとでライライが来れば好きだけ見れるよ」

虚「そうですね」

俺の着替える服装が気になっているシャルロットの背を本音が押しながら、皆は他のメンバーを呼びに向かった。俺もとつと、制服から軍服に着替えて、皆が待っているエントランスに向かう。

すると、刀奈、簪、本音、姉さん、織斑先生、山田先生以外は俺の姿を見て、驚いた表情を見せる。

一夏「ら、雷真!?!」

簪「その服装は……………」

セシリア「本当に雷真さん、あなた……………」

鈴「本当に軍人だったんだ……………」

シャル「それが刀奈たちが言ってた服なんだね」

ラウラ「うむ。様になっているな」

皆、己の感想を口に出す。

雷真「まあ、訳あって階級は中尉止まりだけどな」

ラウラ「訳？」

雷真「俺は元々、こつち側に還ってくる気満々だったからあまり役職に付けないでくれて軍の上層部に頼み込んで置いたんだよ」

鈴「なら、その訳がなかったら。アンタの階級は何処まで上がったのよ？」

雷真「んー、そうだな。今までの業績から考えると、ラウラと同じ少佐か中佐辺りまでには成ってたんじゃないか？」

ラウラ「私と同じか中佐だと？」

雷真「あつち側」は敵のMSか戦艦を落とした数で階級が昇進するからな。無茶な戦い方をすれば直ぐになれるさ」

そう。あちらにいた時に、地球軍のマニユアルを見た時に敵

のMSならびに戦艦を落とした数によって階級が昇進すると書いて

あった。少尉になるのならば、MAのパイロットに必要があった

が、当時はフラガー左のメビウス・ゼロ以外にMAはなく。加えて、

俺とキラしかストライクを乗れなかった。だから、俺とキラは少尉扱いをラミアス艦長から受けた。

雷真「さて、面倒くさい話はこのあともあるんだ。行くぞ」

皆を先導してメルカバーへと向かう。メルカバーに入る際に見張りの部下に俺、刀奈、簪、シャルロット、本音、姉さんの顔を見せるとハルバートンさんやシノブから聞いていたのか直ぐに中に入れて

くれた。

メルカバーの中へ入ると、皆、戦艦の中が物珍しいようであちらこちらに視線を向けていた。そして、ある程度の中に入り、上と向かう取っ手付きのベルトコンベアについて説明する。

雷真「見て分かると思うが、目の前にあるベルトコンベアに、ゆっくりと一人ずつ上がってきてくれ。階は三階だ」

雷真「まずは、お手本を見せるから」

皆に実演を見せるために随時、下から上と上がってくるベルトコンベアの取っ手を自分のタイミング掴み、下にある取っ手に足をかける。

雷真「こんな感じで、上がってきてくれ。それと、次は一夏な」

一夏「なんで、俺なんだ？」

雷真「制服の構造を考えろ。天然スケベ」

そう言い残して、一人ベルトコンベアで三階に上がると下から一夏ハーレムズの一夏を罵倒する叫びが聞こえてきた。最終的には織斑先生の拳骨が落ちた音が聞こえてきた。

一夏「り、理不尽だろ……………」

一悶着あって、下から上がって来た一夏は頭を痛そうに擦っていた。まあ、女というのは理不尽が多いモノだ。覚えておいて損はない。一夏の次に上がってくる刀奈たちにベルトコンベアから降りる際に手を貸してやると、またもや一夏ハーレムズが一夏に愚痴を溢す。

セシリア「一夏さんも雷真さんを見習って欲しいですわ」

鈴「本当、乙女心が分かってないわね」

ラウラ「それでも、私の嫁か」  
箒「まったくだ」

そんな箒たちを何時ものごとく、シャルロットたち宥める。しかし、本音の一言で台無しになってしまふ。

シャル「ま、まあ、これから一夏も雷真を見習っていけばいいんじゃないかな？」

刀奈「そうね。今後に期待ということだ」

本音「でも、ライライは小学校に上がる時にはもうかつちゃんとかんちゃんをエスコートしてたよね？ ライライ、いつおぼえたの？」

雷真「小学校に上がる時だな。家の仕事を手伝うために武術を習い始めた辺りからお義母さんから教わった。更識の人間である前に男である以上、女性には紳士であれと」

虚「流星は、小母様ですね」

鈴「だってよ、一夏。男である以上、女性には紳士であれってさ」

一夏「うぐっ!?!」

懐かしい話をしつつ、ブリーフィングルームに到着すると中にはハルバートンさん、ナタルさん、シノブ、アキトがコーヒを飲みながら話していた。

雷真「遅くなつて、すみません」

ハルバートン「いや、まだ時間ではないから心配はいらんよ」

雷真「分かりました。皆、好きな席に座ってくれ」

そう伝えると皆、それぞれ好きな席に座るとシノブが皆へコーヒー、紅茶、緑茶などを聞いてドリンクサーバーでインサートカップに飲み物を入れ運んで来る。

雷真「それでは、今後のIS学園ならびにクルーゼ勢力について話

合いをしたいと思います。まずは、先日、ハルバートンさんたちIS委員会日本支部側と我々で予定している策について見てもらいます」

皆が座っているテーブルから全員が話合いの内容を確認できるように、シノブたちが新たに導入した空間ウィンドウが一人ずつ表示される。

雷真「まずは、知っているとは思いますが二人の紹介をしようと思う。ハルバートンさん、ナタルさん、お願いします」

ハルバートン「フム。元地球連合軍、第8艦隊所属のデュエイン・ハルバートン。階級は准将だ」

ナタル「同じく、元地球連合軍、アークエンジェル級2番艦ドミニオン艦長、ナタル・バジルールだ。階級は少佐」

二人の自己紹介が終わると二人が何者なのかを俺が皆に説明する。

雷真「二人は、クルーゼたち同じ世界の住人だ。何故、この世界にいるのかは原理は不明だが俺と同じだと思う。それから、二人は俺が一時的所属して軍の上官でもある」

雷真「クルーゼたちと戦いなら、二人の協力を必要だと思っている」

そう話と全員が深く頷いてくれた。なので、次に進むことにした。

雷真「次の話に進む。目の前の空間ウィンドウを見てくれ。空間ウィンドウに表示されている通りIS委員会日本支部から世界へ、IS学園襲撃ならびにクルーゼ勢力の情報を流してもらいます」

千冬「IS学園側としても、奴らにこれ以上好きにさせる訳には行かない。亡国企業の動きも分からんしな」

雷真「そうです。ですので、当分の間はメルカバーをIS学園で停泊させて、アストレイ隊を学園の修繕工事に尽力させようと考えています」

雷真「それから、これはここにいるメンバーだけで他言無用でお願いします。修繕工事を行う際に、学園の外壁には対ビームコーティングとラミネート装甲を採用しようと思います」

千冬「いいのか!?　こちらとしては、黒牙たちの技術でより強固な守りを学園側に施してもらい、生徒たちの安全が以前よりも保証出来るのなら是非、頼みたいが」

確かに織斑先生の言うとおり、本来ならこんなことは俺としてもしない。しかし、今回と前回の襲撃は俺の所為でもある。ならば、今後少しでも他の生徒たちに被害が行かないように努力するのは当然だ。

雷真「構いません。今後、クルーゼたちが攻めて来ないと限りませんし。また、自分たちが学校行事で学園から離れている隙を狙ってくる場合も考えられますから」

真耶「そうですね。ラウ・ル・クルーゼの目的が黒牙くんの殺害ならびにIS学園の破壊ですから」

千冬「では、この件は私から轡木さんに話を通しておく。予算案も出上来がり次第、黒牙に渡そう」

雷真「分かりました」

これで今後のIS学園の守りは少しくらいは硬くなったろう。音をいえば、学園敷地内に陽電子ビームシールド発生機を何台か設置した方が安全なのだろうが……流石にそれをこの世界で何台も作るのには費用や時間、リスクが伴う。

雷真「他になければ、ミーティングは終了になります」

ハルバートン「黒牙中尉、私から一つあるのだが」

雷真「なんででしょう?」

ハルバートン「君の新しい機体。『ZGMF-X40AIS アヴァロン・フリーダム』こと、ソラクンについてだ。私たちはIS委



員会の人間として彼女の性能と生態を調べる義務があるのだよ」

ハルバートンさんの言うとおり、ソラの性能や生態はISに関わる人間ならば喉から手が出るほど欲しいだろう。あの、篠ノ之束でさえ。

しかし、生態に関しては展開しても理解は出来なかった。けれど、性能の方は正直言つて、俺が知っている最強のMSモビルスーツたちの武装や特性を詰め込んだ感がある。考え方によっては、クルーゼの新機体であるデイズター・プロヴィデンスを倒すにはこれくらい無いと倒せないとソラが判断したとも考えられる。

雷真「正直、生態に関しては持ち主である自分でも分かりせん。性能の方は、クルーゼのデイズター・プロヴィデンス以外の既存するISモビルスーツならびにMSISを凌駕しています」  
「「!?」」

俺のその言葉に、皆が戦慄する。

ハルバートン「では明日、アヴァロン・フリーダムの性能テストをしよう」

雷真「分かりました。ソラも頼む」

ソラ『任せて!』

ソラの声に専用機持ち以外の皆が、またもや驚いたのは言うまでもないだろう。

## 第76話

ハルバートン「それでは、中尉。性能テストを行ってくれ」

雷真「分かりました。ソラ、頼む」

ソラ『オーケー!』

ソラが返答するといつもの如く慣れた感覚でアヴァロン・フリーダムが展開されたら、ゆつくりとメルカバー内の格納庫を歩行して、リニアカタパルトまで移動する。

シノブ『CPUオンライン。カタパルト、接続。各パワーフロウ正常。進路クリア、[ZGMF-X40AIS アヴァロン・フリーダム]。発進、どうぞ!』

雷真「黒牙雷真! フリーダム、行きます!」

リニアカタパルトによってメルカバーから射出されるとルーティンワークのようにバレルロールを行い、ヴァリアブル・フェイズソフト V P S 装甲を起動させてフリーダムの装甲が鮮やかに変色した後、空中でホバリングしてメルカバーからの指示を待つ。

ナタル『こちら、ナタル・バジール。今回の性能テストの指示は私が出す。質問はあるか?』

雷真「大丈夫です」

ナタル『なら、四段階に別けて最高速度まで飛行速度を測定しろ』  
雷真「了解」

ナタルさんからフリーダムの飛行速度を測定する指示が飛んできたので、飛行速度の測定を行う。

ソラ『雷真、ボクの速さを測るのはいいけど、四段階にどうやって分けるの?』

雷真「それなら、考えがある。ストライクやフリーダム、ストライクフリーダムのスペックデータはあるよな？」

ソラ『うん、あるよ』

雷真「そのストライクたちのスペックデータを元にアヴァロン・フリーダムの飛行速度を四段階に分けようと思ってるんだが、出来るか？」

ソラ『ちよつと待ってね……………うん！出来るよ！』

雷真「了解。それじゃあ、早速、エールストライクの最高速度だ」

過去の戦争で使われたM<sup>モビルスーツ</sup>Sたちのスペックデータを元にフリーダムの飛行速度を四段階に分けて、最後は『自由の翼』を発動して、フリーダムの最高速度を出す。最高速度を出した状態での旋回をする際、身体の骨や筋肉がギチギチと悲鳴を上げたを感じて少し速度を落とした。

飛行速度のテストが終わると次は、ビーム兵器の性能テストが始まった。標的は、ラミネート装甲板に対ビームコーティングとフライトユニットを取り付けたビーム兵器用のターゲットドローン。元々、これはアストレイ隊の演習用にアキトが開発したものである。

雷真「ソラ、まずはセーフティをかけた状態でビームライフルを使いたい。頼めるか？」

ソラ『あー、それなんだけど。多分、セーフティをかけた状態でもあのドローンは壊れちゃうかも』

雷真「え？」

ソラ『取り敢えず撃ってみなよ』

雷真「わかった」

ソラに促されるままに高エネルギービームライフルⅡをドローンに撃つと、対ビームコーティングが施されているのにも関わらずドローンが爆散してしまった。

雷真「……………」

ソラ『やっぱりこうなったね』

雷真「いやいや、おかしいだろう!？」

ビームライフルⅡの威力に驚きながら、次にビームCIMSのテストを行ったが結果は、破壊とまでは行かないが演出用ドローンがバチバチと火花を散らしながら中破してしまった。

雷真「ビームCIMSでもこれか……………」

ソラ『基本的に僕のビーム兵器は君が望んだ、奴らを倒すためにかなり強力なってるよ。それらをどう扱うかは、雷真……………君次第だよ』

雷真「……………分かってる」

その後もフリーダムの新しいビーム兵器の性能テストをやっていたのだが、インパルスのテストイニシリエットに装備されていたウルフスベイン長射程ビーム砲塔の発展型だと推測できるウルフスベインⅡ長射程ビーム砲塔はバカげた威力を誇っていた。

ウルフスベインⅡは背部に装備されているのでバラキエーナ収束ビーム砲よりも強力なものであることは分かっていたのだが、まさかビーム砲の余波で演出用ドローンが大破するとは思わなかった。

雷真「さ、流石にこれは授業では使えないなあ……………」

ソラ『だから、言ったでしょう』

性能テストを終えて、メルカバーに帰投してフリーダムの性能テストの結果を報告書としてまとめてから織斑先生の所へ向かっていると、その途中で歩く天災ならぬ、海走る天災に遭遇してしまったことに俺は自分の運の悪さを呪ったのは言うまでもない。

束「ハロハロー、らつくーん!」

雷真「なんで、あの人は海の上を普通に走れるんだよ……。物理法則を無視し過ぎだろう」

もはや、目の前で走るウサギは人類を超越したナニカではないだろうか？

束「とくうちやくく！」

雷真「……………」

うん。何も言うまい。

束「やあやあ、改めて久しぶりだね。らつくん！」

雷真「そうだな。それじゃあ、さようなら」

束「ワアワアちよつと待った！今日はおふぎけに着たわけじゃないんだよ。このデカブツについて、らつくんに聞きに来たんだよ」

雷真「デカブツ？」

篠ノ之束の口から出た「デカブツ」という単語に何故か戦士としての感が聞かなければならないと俺を動かした。

束「このデカブツったらいきなり束さんのお家が無茶苦茶にしたんだよ！ だから、報復として解体してやろうと思ったらしいっくんの白式みたいなエネルギーシールドを出されて逃げられちゃったんだよ……………」

雷真「取り敢えず、そのデカブツとやらの映像か何かないのか？」

束「あるよん！ほい、御開帳！」パチン

篠ノ之束がフィンガースナップを鳴らすと空間ウィンドウから現れ、空間ウィンドウに撮されたのは隠しカメラから撮影されているのか第三者の目線からの映像が流れた。

そして、その映像に映っていたデカブツとやらの正体を見た途端、

俺の顔は酷く歪んだと思う。

雷真「こいつは……【Y M A G—X 7 F　ゲルズゲー】。それもモビルアーミー M A サイズが四機に I S サイズが八機だと!」

東「やつぱり、らつくくんは知ってるんだね。コイツらは何者？　答えようによつては、らつくくんも潰すよ」

雷真「この世界では敵かどうかは知らないが、コイツらがいた世界では俺と俺が所属していた軍はコイツらとは敵対していた。けれど、戦争のあとには休戦協定を結んでいる」

やはり、クルーゼ同様に「あちら側」で死んだと思われた地球連合軍のパイロットや技術者が「こちら側」に飛ばされてきたことが原因でゲルズゲーが M A サイズと I S サイズで存在しているのだから。

けれど、現状一番厄介なのはうちの諜報班ですらゲルズゲーを含めて M A を確認出来なかったということだ。それにゲルズゲーたちがいるということは陽電子リフレクターを応用した防御兵器がコイツらの基地に備え付けられているのであれば、破壊できるのは俺しかない。

東「ふくん。らつくくんの言葉が本当なら君もコイツらを壊してくれるのかな？」

雷真「さあな。コイツらが俺の大切な【花】たちに銃を向けるのであれば、容赦はしない。それだけだ」

東「うん。それだけ聞ければ東さんは満足かな。そくれくよくり、らつくくんの I S を見せてよ!」

雷真「なら、ソラに聞けばいい。決めるのはソラだ」

そうやって、制服の下に仕舞っていた待機状態のソラを出してやるとソラは即答で篠ノ之束を拒絶した。

ソラ『いやだね。ボクは雷真の【剣】だ。雷真が許した人以外はさわられたくない』

束「オー！これは天災束さんでもびっくりだよー！ まさか、待機状態でありながら言語を喋れるＩＳが存在しているだなんてー！！ねえねえ、らつくん。その子、一度解体して隅々まで分析していい？」

雷真「ダメに決まってるだろう！ 仮にやろうものならば、ソラは勝手に起動できるから即戦闘だぞ。それにソラが戦えなくなったらゲルズゲーも破壊できないぞ」

束「んー、それは束さんのにも困るから止める。それじゃあ、知りたいことかもしれないから束さんは帰るねえ。あつ、ちーちゃんたちによるしく言っておいてね。バーハハーイ！」

そう言い残して天災ウサギは、また海上の上と走って何処かへ言っってしまった。その後、念のために織斑先生に天災ウサギが来たことを報告するとめちやくちや頭を抱えていた。お疲れ様です。

職員室にアヴァロン・フリーダム of 報告書を提出したあと、寮の自室に戻り、ベッドに身体を投げる。

雷真「くはあく、疲れたあ……」

ソラ『お疲れ様』

雷真「ソラもな。てか、授業でソラを使えないことに関してマジでどうしよう……」

ソラ『確かに、ボクを使うちやうとアリーナとか大変なことになりそうだよ。前のボクでさえ、雷真がセーフティをかけてエネルギーを推進力に極力振り分けてあれだったからねえ』

雷真「最悪、アストレアを使うことを視野に入れなとかなあ……」

ソラ『えー、ボク以外の子を使うの？』

雷真「使うかどうかは織斑先生次第になるな。悪いが少し眠る。何かあったら起こしてくれ」

ソラ『りよーかい』

ソラの返事を来てから身体力を抜き、自然と睡魔に身を任せる。



《sideシャルロット》

シャル「んく、んく」

ラウラ「どうしたのだ、シャルロット。先ほどからガイアの詳細データを見ながら唸っているようだが？」

シャル「ラウラはさ、僕は何色が似合うと思う？」

ラウラ「何を悩んでると思えば、シャルロットに似合う色とはいえばオレンジカラーだろうに。何故、そんなことを？」

シャル「雷真からもらったガイアの色は黒なんだ。それで、配色を変更しようと思ってガイアのマニュアルを見てたらちよつと僕の手にはあまる設定なんだよ」

ラウラに言われるまで、ずっとガイアのマニュアルを見ながら雷真ヴァリフル・フェイスソフトに頼らず、自分の力でV P S 装甲の配色を変えようと頑張っていたのだが、電圧やら何やらの設定が必要で、正直オーバーテクノロジー過ぎてよくわからないのが結論である。

ラウラ「なら、ガイアたちを改修した雷真に頼ればいいではないか。何を迷っているんだ？」

シャル「一応、僕の機体だから自分で出来ることはやろうと思ったんだけどなあ……」

ラウラ「健気なのだなシャルロットは……。ならば、布仏先輩に相談してみてはどうだ？ あの人であれば、メルカバの整備班の連絡先くらいは知っているであろう」



シャル「そっか！　ちよつと行ってくるね」

ラウラに促されるままに、僕は布仏先輩を訪ねに彼女の部屋に向かい、ノックする。

虚「はい」

シャル「デユノアです。すみません、いきなり」

虚「大丈夫よ。それで私に何か用かしら？」

シャル「ガイアについて相談があります」

虚「その事なら中でお聞きします。どうぞ、入ってください」

シャル「お邪魔します」

虚さんに招き入れられるままに、彼女の部屋に入ると幸いにもルームメイトの先輩は不在だった。だから、虚さんも僕を招き入れたのだろう。

虚「好きなどころに座ってください。お茶を用意しますので」

シャル「あ、ありがとうございます」

備え付けの椅子に座ろうとしたところで、虚さんの机と思われる場所の上に飾られていた写真が目に入り、目を奪われた。

その写真には、何と幼い頃と思われる雷真たちと刀奈に良く似た着物を着た綺麗な女性が映っていたのだ。

シャル「これは……子供の頃の雷真と刀奈たちですか？」

虚「ええ。お嬢様たちのお母様が映っているのもうかれこれ8年くらい前になると思います。とても強くて、凛々しくて、美しい方でした」

シャル「……そうなんですか。なら、大人になった刀奈はこんな感じになるんですか？」

虚「さあ？　それはその時になってみないと分かりません。です

が、心の強さでは既に簪お嬢様が奥様に近いですね」

シャル「確かに、臨海学校の時に簪が刀奈の心を奮い立たせていたので虚さんが言っていることは分かるかも……」

臨海学校の時、雷真とストライクがロストした時は僕も生きた心地がしなかった。でも、僕たちよりも刀奈の方がほうが酷かった。

虚「お待たせしました、お茶の準備が出来ました」

シャル「ありがとうございます」

## 自由と白式77

《Side 雷真》

千冬「結論から言う。アヴァロン・フリーダムに搭載されているビーム兵器の使用を学園では完全禁止だ。日本のIS委員会以外の連中はフリーダムの解体も提案してきた」

雷真「まあ、そうですね。自分でもM<sup>モビルスーツ</sup>SISが緊急事態以外では使わないようにするつもりでしたから」

千冬「それだけではない。前のフリーダムに対抗するに当たって篠ノ乃の紅椿でさえスペック上ギリギリだと言うのに、今度は既存のISを軽く凌駕するスペックを持つ進化したフリーダムに対抗出来ないことに恐れているのだ」

雷真「あー、なるほど」

外国のIS委員は俺とソラが自分たちの国に攻めて来ないか怖がっているようだ。そりゃそうか、ビーム兵器開発に対しビーム兵器、マルチロツクオン・システムを作り上げた俺だものね。加えて、メルカバの戦力と合わせれば世界征服が出来てしまう。

雷真「ですが、それだと実技の授業はどうしますか?」

千冬「なに、連中はビーム兵器の使用を禁止してきたのだ。実体系器を禁止してはいまいよ」

雷真「それって、ビーム兵器以外なら使っていいってことですよ。ねえ。教師的にいいんですか?」

千冬「そんなもの知るか。決めたのは連中だ。私ではない」  
雷真「織斑先生がそういうならそうしますが、万が一にフリーダムの使用も禁止されたら俺専用に使われているシルバーストリアを使いますので言ってくださいね」

千冬「名前からするに基本スペックは、二年の布仏虚のM2アストリアと同じか?」

雷真「はい。基本的にはカラーリングが違うだけなので、差程大差はないですが、そこから色々といじったりするのでフリーダムよりは大人しいスペックになりますね」

千冬「了解した」

織斑先生から方が一、フリーダムが使えないの場合に備えてのシルバーアストレアの使用許可を得られたので仮設の職員室を出てから空を仰ぎながら息を吐くとあることに気付く。

雷真「あつ……飛行機雲だ。ハハハ……こうやって空を見上げるなんて何カ月ぶりだろう」

見上げた空は、透き通るように青くて、飛行機雲以外の雲は見当たらない。綺麗な空だった。

雷真「予定変更だな」

織斑先生にフリーダムの報告書を渡したらアストレイ隊の瓦礫撤去作業の手伝いをしようと思っていたが、最近色々なことがあってゆつくりと休む時間もなかったので皆には申し訳ないが何処かで寝転んで久々に空の観察をすることにした。

雷真「芝生の上で寝るのは気持ちいいなあ……」

視界一杯に何処までも広がる青空を見ると身体のがんがんと少しずつ変になっていき、目の前に広がる大空に落ちて行っているような感覚に襲われ始める。

大空を眺めていると心地良い潮風に優しく撫でられているうちに瞼が重たくなってきたので、ソラもいるからと思いい目を閉じる。その時、僅かに芝生の上を誰が踏みしめる音が聞こえた気がするが今の俺には、その音に反応するだけの余裕もなく夢心地へと旅立った。



《sideシャルロット》

シノブ「いやー、シャルロットお嬢様の方からお越しいただいて有難い限りです」

シャル「いえ、僕もガイアのことです。シノブさんをお願いしたいことがありますから」

昨日、ラウラと虚さんに相談してメルカバーの整備班であり、雷真の側近であるシノブさんの下でガイアのカラーリングの変更してもらうためにメルカバーの格納庫を訪れている。

シャル「今日、ここに来たのはガイアのカラーリングについてで………」

シノブ「ガイアのカラーリングというヴァリアブルフェイスソフトとV P S 装甲についてですね」

シャル「そうなんです。雷真からもらったデータにレッドオレンジカラーのガイアのデータがあったので、僕のガイアも配色を変更しようと思ったのですが自分だけの力じゃあどうにも分からないことがあつて………」

シノブ「分かりました。装甲のカラーリングはこちらでやりますので、カラーリングの色彩について詳しい教えてください」  
シャル「分かりました」

シノブさんの指導の下、ガイアに搭載されているV P S 装甲の電圧や機能について色々勉強しながら僕の要望する配色へと

ヴァリアブルフェイスソフト

V P S 装甲を調節してもらうことになった。

シャル「……じゃあ、白兵戦に特化させた配色は織斑先生のセイバーと同じ、赤色になるんですね」

シノブ「ええ。若様の資料にはそう記載されていますからね。また逆に強度と引き換えにバッテリーを長持ちさせる色は黒になるんですね」

シャル「へえ……なら、オレンジはどうなるんだろう」

シノブ「オレンジは赤と黄色を混ぜているので、理論的に中の上と言ったところではないでしょうか」

シャル「中の上か……バランスが取れていて良いかもしれないな。あつ、あとはビームライフルとシールドの配色もお願いできますか？」

シノブ「大丈夫ですよ。ガイアのビームライフルとシールドを配色を変えている間はインパルスのビームライフルとシールドを使ってください。いつなん時、奴らが攻めてくるか分かりませんからね」

シャル「ありがとうございます！」

ガイアの配色を説明して、調節してもらっている間は手持ち無沙汰になってしまったので直ぐ側に置いてある椅子に座って待ちながら、滅多に観察出来ないであろう宇宙戦艦を観察することにした。

格納庫内は、整備場になっているようで機体の補給をするために廊下から雷真が使っているパイロットスーツとは色が違うが同じデザインのスーツを聞いた男性が出たり入ったり、僕の知らないM<sup>モビルスーツ</sup> S I Sを展開したりしていて驚きを感じる。

シャル「雷真や一夏を見てるからそこまでじゃないだろうと何処かで思っていたけど、実際に目にしてみると驚くなあ……」

シノブ「やはり、若様も織斑くん以外にI Sを使うのは驚きますか？」

シャル「ええ、まあ……」

シノブ「それは仕方ありませんよ。I Sは女性にしか使えないという常識が、若様や織斑くんが現れるまでは年単位で定着していたので

すから。しかし、今はもうそうではありません。若様が異世界から持ってきた資料と撃墜、回収してきたセイバーたちによって何十年と掛かるはずの研究期間が図りしれないほど短縮されたことによつて実現したのです」

シノブ「ですが、それによる危険性も生まれ初めています。我々の中にはそういった輩は居ませんが、クルーゼや学園祭の時に現れたモビルスーツ  
M S I S がどこから何処へ渡るか分かりません。最悪の場合、モビルスーツ  
M S I S を使ったテロや女尊男卑に対してのレジスタンス。考え得る最悪を挙げたら切りがありませんね」

シノブさんの説明を聞いて、僕の頭に一番強く浮かんだのは、I S と M S I S を利用した『大三次世界大戦』。そんなことになれば、雷真や刀奈たち、各国の代表や代表候補生も祖国に徴兵される可能性が大いにある。

シャル「なら、フランス代表候補生の僕はどうなる？ いずれ僕は雷真たちに殺意のある銃を向けなくちゃいけないの？ 逆に僕は雷真たちから殺意のある銃を向けられることになるの？」

大切な友人たちと切磋琢磨するためにルールが設けられた中で、戦闘ではなく、本当に敵を殺すためにだけ放たれる銃を向けたり、向けられたりすることを考えると物凄い恐怖に襲われる。

昨日まで笑顔を交わしていた相手が数分、数時間後は親の敵を睨むかのごとく。鋭く、冷たい殺意が銃口から自分に放たれるのなんて絶対に受けたくない。

シノブ「そうならないためにも、我々がクルーゼたちの情報をかき集めています。若様が経験なされた戦争を起こさないためにも、今は我々がやれることを精一杯やるだけです」

シャル「そうですね。僕も、僕がやれることをします！」

## 自由と白式78

### 《side 簪》

簪「えへへ。乗せちゃった♪ いつもはお姉ちゃんの特権だったけど、今はいいよね」

休校中の課題レポートに行き詰まってしまったので、気分転換に学園内を散歩していると校舎と寮の丁度中間部にある人口芝生の上で、雷真が腕を枕にしながらやすやすと眠っていたので彼の隣に腰を降ろした。

そんな彼の寝顔を見ていたら、出来心で雷真の頭を自分の膝の上に乗せてしまったのだ。今までは、お姉ちゃんの前でさえ弱味を見せない雷真が、この頃は私たち、三人には弱味を見せてくれることに嬉しく感じている。

簪「少し、髪が伸びたかな？」

潮風に揺られて動く雷真の前髪が、眉毛の辺りまで伸びていることに気付き、そつと前髪を横に流してあげる。

それからしばらく彼の顔を見ながら頭を優しい撫でていると、ふと今の状況はアニメの主人公とヒロインがイチャイチャつくワンシーンなどではと気が付く。

簪「あ、アニメだと、ヒロインはこういう時、寝ている主人公にき、キスとかするん、だよねえ……………」  
／／／／／

自分で口にしておいて何だけど、いざ言葉にしてみると、凄い勢いで顔が熱くなるのが分かる。夏休みバスタオル姿を見られて置きな



がら、キス程度で恥ずかしいと言われると恥ずかしいものは恥ずかしいのである。

それでも――

簪「／＼／＼／＼」チュツ！

簪「えへへ……しちやった。／＼／＼／＼」

――恋する乙女は自分の欲求を抑えられない質なのである。それからしばらく、雷真の頬つぺたを伸ばしたりして遊んでいると遊び過ぎたのか彼が起きてしまった。

雷真「あれ………簪？」

簪「お、おはよう………雷真。／＼／＼／＼」ドキドキ

雷真「おはよう。ところで、何で俺は簪に膝枕をされてるんだ？」

簪「その………私がしたかったからやったんだけど………迷惑だった？」

雷真「いいや。簪の膝枕のお陰で懐かしい夢を見たよ」

簪「懐かしい夢？」

雷真「まだ、お義母さんが生きてた頃の夢だよ」

簪「ああ………そういうことね」

私たちのお母さんは、私たちが小学校を卒業すると同時に重い病気にかかり、そのまま亡くなってしまった。そんな不運を追うように、その中学二年生の時に突如として雷真が行方不明になってしまった。母親を失い、家族だと思っていた幼馴染みも行方不明になるといふ不運が重なってお姉ちゃんは精神的に参ってしまった。当時、恋人ではなかった分、私は何とか精神が持ちこたえていたため、お姉ちゃんを奮い立たせることが出来たのだろう。

簪「雷真は、なんでこんなところで昼寝なんてしてたの？」

雷真「いやな、この学園に入ってからまたMモビルスーツ S I Sと戦うことに

なって、ゆつくりする時間があまりなくな……。だから、久しぶりに芝生の上で寝転がって視界一杯に青空を眺めてたら、そのまま……………」

簪「そうだよね……………本当は、雷真も戦いたくなんかないもんね」

雷真「けれど、この学園でモビルスーツMSやモビルアーマーMAの戦争をよく知っているのは俺だけ……………。正直、簪たちを巻き込まないためにいつそのことシノブやアキトたちに学園の防衛を任せて、一人でクルーゼを探しに行こうなんてことも考えたよ」

簪「ツ!!」

雷真のその言葉に、半年前にも感じた大切な者の損質感と絶望が私に襲いかかってきて、無意識に膝に乗せている雷真の頭を抱き抱える。

まるで、おもちゃを取り上げらそうになって、それを守る子供のように……………」

簪「ダメ! それだけは絶対にダメ!!」

雷真「簪?」

簪「絶対に一人なんかで行かせたりなんかしない! どうしても行くんだったら、私やお姉ちゃん、シャルロットも一緒にやないとダメだからね! 一人で何もかもを背負い込まなくていいんだよ……………」

雷真「分かってる。ちゃんと、簪や刀奈、シャルロット、姉さん、一夏たちを頼るよ。大切な仲間たちだからな」

簪「絶対だからね?」

雷真「ああ」

私の問いに優しい笑顔で、答えてくれる雷真の眼差しを見て、一人安心する。



《side 雷真》

中庭で昼寝していて、いつの間に簪に膝枕をされて、久しぶりにゆっくりとした過ごし日の夜。自室にて、諜報部隊から渡されたのである書類とにらめっこしている。

雷真「はあ………。IS学園の修繕状況視察も見せかけたメルカバ―及びアストレイ、それからアビスたちの情報収集ね。くだらないな」

諜報部隊からの資料内容を見てみるとクルーゼ襲撃事件でボロボロになったIS学園の状況をIS委員会の視察団体に来ると書いてあったが、その実、報告書に記載されていなかったメルカバ―とアストレイ、アビス、ガイア、カオスの情報を得ようと大義名分を掲げながらIS学園へ侵入する気なのである。

そんな小学生でも分かるやり方にアホらしいと思わずには入れない。IS委員会のトップ連中は、国際規約でIS学園は――

『学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』

――という物があるに何を考えているのか理解不能だ。そんなくだらん事よりも重大な案件が俺の目の前には存在している。

ソラ『ねえ、本当にその子に乗るのー？ ボクという相棒がいるのにー？』

雷真「仕方ないだろう。ISとして登録されているソラに搭載され

ているビーム兵器の全使用禁止されて、他に使えるのは実弾のCIWSやビーム刃無しビームブーメラン、クスイファイアスしかないんだからさ」

ソラ『それでもさー!』

目の前のパソコンに写し出されているシルバーアストレアスペックデータを胸元で待機状態のソラが見て、ごねているのだ。

雷真「わかったよ。乗る機体はソラだけど、使うビーム兵器はシルバーアストレアのビーム兵器を使うからな。これ以上は無理だ」

ソラ『やったー!これでまた空を飛べるー、飛べるー、と・べ・るー!!』

雷真「明日、また織斑先生に報告書にして提出しないとか………はあ」

待機状態のソラから放たれるご機嫌な声を聞きながら溜め息を吐いて、実技授業で使うであろうシルバーアストレアの武装を織斑先生宛ての報告書に記して行く。

それから諜報部隊からの報告もそれとなく、書いて置くことにした。そうすれば視察団が来た時にメルカバーとアストレイ隊が一時、IS学園から放れていてもおかしくない理由になる。

しかし、それでも視察団の奴らも何としてもメルカバーとアストレイ隊、それから刀奈たちのアビスたちの情報も得ようとしてくるだろう。無論、それはソラことフリーダムにも言えたことではある。

雷真「ビームライフルはフリーダムと同じように二丁持ちでやりたけれど、フリーダムのビーム兵器禁止だからビームシールドも駄目だよなあ………」

新しいフリーダムの強みの一つとして、ビームライフルが両手で使いながら両腕から生成させるビームシールドでしっかり防御できる

という点だ。そのため、今までよりも攻撃の手数が増えるので一々物理盾を構える必要がなくなったのだ。

これは、第二形態へと移行した一夏の白式にも言える強みである。それをフリーダムは実技授業で使うことが出来ない。フリーダムのビームシールドは、盾ありながら近接武器としても使えるほど威力があるため使用禁止なるはずだ。

雷真「下手にIS委員会の奴らに禁止されている武器の使用許可を得ようとする、その見返りにメルカバーやアストレイの製造方法や性能の情報やらを寄越せと言われかねない」

フリーダムのビーム兵器を全て禁止するほど、俺がフリーダムで攻めてくることを恐れているのだから自分たちに被害がいかない方法で、何とか俺から情報を得ようとしてくるはずだ。

幸い、日本のIS委員会のトップにはハルバートンさんがいるので日本代表候補生（仮）をしている限りは、あの人々が色々と配慮してくれるはずだ。

雷真「よし、これで武装の報告書は完了。あとは、刀奈たちに視察団の情報を教えて置かないとな」

アビスたちを使用する際は、織斑先生の許可があれば使っていていいと伝えある。そこへ偶然に偶然が重なって視察団がいる中でアビスたちを使ってしまいかも知れないので、そうならないためにも刀奈たちにも視察団の情報は連絡して置く。

そんな訳で、夕食を摂り終えたあとに刀奈、簪、シャルロットの三人を俺の部屋を招き入れた。

シャル「それで、僕たちに伝えて置きたいことってなに？」

雷真「まず、一応これは国家機密の情報に当たるが確認してくれ。少なからず、お前たちにも関係してくる」

そう説明しながら、諜報部隊が掴んでくれた視察兼情報収集を仕掛けてくる視察団の情報が書かれた報告書を見せた。

すると、三人とも直ぐに食い入るように報告書を読み進め始める。そして、読み終わると全員が真剣な目に変わっていた。

刀奈「この情報は本当なの？」

雷真「間違いない。その報告書は、俺の部下たちからだ」

簪「それじゃあ、カオスたちの使用は控えた方がいいね。私とお姉ちゃんは、ハルバートン委員長が何とかしてくれるけどフランス代表候補生のシャルロットはそうはいかないと思う」

シャル「そうだね。ぶっちゃけちやうと、本国からは雷真と仲を深めて置くようにって指示が来てるしね」

雷真「国からの命令を教えるとか、本当にぶっちゃけたな……」

わざとらしく言っていると、シャルロットは可愛らしく小さく舌を出して、にっこり笑顔を作る。

刀奈「アビス、ガイア、カオスの方は分かったけど、メルカバーとアストレイ隊の皆はどうするの？」

雷真「視察団が来ている間は、IS学園から一時離脱させるつもりだ。そうすると、校舎の修繕工事にも影響が大きく出るがそこは何とかカバーして行くつもりだ」

刀奈「はあ、普通の視察だけなら良いけど情報収集だなんて面倒なことをしないで欲しいわ」

雷真「まったくだ。その所為で、修繕工事を任せている部下に工程を変更してもらわないと行けなくなる。元現場監督してた者だが、これは怒るだろうなあ……」

視察団の所為で苦勞する部下に、後日なにかでお詫びすることを頭の中に留めながら話を続ける。

簪「そういえば、フリーダムについて織斑先生に呼ばれてたけど、何があつたの？」

雷真「いずれは分かることだから話すけど、実技の授業でフリーダムに搭載されている既存のビーム兵器の全使用禁止をIS委員会から織斑先生伝で言い渡された」

シャル「なにそれ!? あの時の襲撃を乗り越えられたのは、雷真とソラのお陰なのに……フリーダムのビーム兵器を全て禁止だなんて」

雷真「襲撃を受けた際の映像を見て、更にフリーダムの性能テストの報告書を読んでしまえば普通はこうなる。最も、日本以外のIS委員会の偉いさん方の本音は、俺がフリーダムで攻めてくるのを恐れているみたいだな」

刀奈「確かにそうね。今のフリーダムは、クルーゼの機体以外で太刀打ちできるISは存在しない」

雷真「そういうことだ。前に刀奈には言ったが、今のフリーダムが一機であれば国の一つや二つは簡単に落とせるだろうな」

シャル「笑えない話だね……」

簪「うん」

刀奈「笑えないわ」

こうして、面倒な視察団とフリーダムのビーム兵器禁止の報告会は終了した。